昭和九年四月十五日印刷
昭和九年四月二十日發行

不許複製

國譯一切經 律部二十四

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(二)一一一六番
　　(三)〇四〇番

製本所 兩角製本所

索　　引

（數字は頁數を表はす）

—ア—

—イ—

—ウ—

—エ—

—オ—

—カ—

—律部二十四索引終—

く、「大王、當に知るべし、我が所說とは常に衆生に敎ふらく、自ら殺生を行じ他をして殺害せしめ、自ら斫り他をして斫ら（しめ）、自ら炙り他をして炙ら（しめ）、自ら偷盜を行じ他をして偷盜せしめ、自ら婬欲を行じ他をして婬欲を（行ぜ）しめ、自ら妄語を作し他をして妄語せしめ、自ら飲酒を行じ他をして飲酒せしめ、自ら劫盜を行じ他をして劫盜せしめ、家を破り國を破し、逢へる所の衆生の地行、空中も悉く皆殺害し、若しは無量無邊の衆生を殺し、若しは能く恆河の此岸にて無邊の衆生を殺して無邊の惡を作し、恆河の彼岸にて無量無邊の衆生を供養して無量無邊の功德を作さんに、此二衆の行は並に因なく果なく、得なく失なく、增なく減なきなり」と。世尊、我れ正義を問へるに他は是の如きの種種の妄說を作し、我れ東問を作すに他は乃し西答せり。我は此を聞き已るに亦歡喜せず亦隨喜せざりければ、便ち捨て去りぬ。復餘處の[二六]阿市多鷄捨甘拔羅の所に往いて、我れ前の如くに正問せるに、彼は亦前の如くに邪答して此の如きの說を作さく、「都べて七物あり、是七種の物・體は是れ自然にして亦他作に非ず、是れ化生に非ず、化有に從はず、聚にあらず、散に非ず、常に是れ自然なり。何等をか七と爲す、地・水・火・風・苦・樂・命なり。是の七種の物は人の能く造るなく、亦相妨げず、善に於て惡及び苦・樂・不苦不樂に於て、此の七事は作と不作とに俱に記驗なく、亦報もなく、死者あることなく、亦殺者もなく、萬四千種の樂、更に六萬三業・二業・一業・半業等の惡あり。……[二七]若し能く具に是の如きの種種の諸惡を造らんには、卽ち生死苦難を解脫するを得るなり」と。

根本說一切有部毘奈耶破僧事（終）

【二六】阿市多雞捨甘拔羅子の說。

【二七】律部十九、註（一三の十四）の本文を略せり。

【二八】此處に藏律には尼犍陀愼若低子の說、脚俱陀迦多演那子の說を出し、以上六師に阿闍世は問へるも滿足し得ざりしを述べ、眞實に沙門果なるものありやと問ひ、世尊は例證を以て沙門果あることを說きのべたまふに、王は如法の父王を殺せる罪を悔い、其悔過を世尊受けたまふに、胸中一すぢの喜び出で來り、卽ち世尊を晝食に請じ、世尊受納したまふに喜びつゝ歸り行く相を說き、こゝに無根の信を得たるを記せり。かくて西藏律には次に破僧事第十卷並に第十一卷註（一二）の本文までを述べて「破僧事完結せり」とせり。實に西藏律破僧事の整然たる組織を見るべく、此によりて漢譯破僧事の轉倒して序序なきを知りこゝに西藏律組織の大要を了知して、本破僧事の卷の位置を轉ぜんに、初めて疑義なく讀誦し得るのである。

刹拏等に問ひ訖れり。彼諸師は答へて曰へり、『「我經中に於ては是の如きの法を說くなり、「善惡の業もなく、善惡の報もなく、施と祀となく、施と祀との業もなく、父母なく、父母の恩なく、此世他世あることなく、修道して聖果を得る者あることなく、聖人あることなく、羅漢果の者なく、四大散し已るに依止する所もなし。若し人ありて今世後世に業因業果は眞實にありと言はんには皆是れ妄言なり、智慧の所說と愚人の所談と二俱に皆空なり」と』。時に未生怨王は復佛に白して言さく、『世尊、我は六師に種種の實義を問へるに、彼は皆妄答せること、人の菴沒羅を問はんに便ち梨果を將つて之を報答し、若し梨を問はん時は便ち菴沒羅を將つて答へんが如くにして、邪見の六師哺刹拏等は正問せんに邪答せり。是外道等は是の如きの種種の邪說・種種の邪答を作せりと雖、皆我意に入らず亦隨喜せざりければ捨離して去りぬ。更に諸餘の六師外道なる[二四]末羯利俱賖離子等に問うらく、「於今世に在りて一切衆生は種種の業を作し、種種の行・種種の技藝を作し、父母に侍養し三寶に供養し悲田に供給せんに、是の如き等の衆生類中に於て、此業類に依因して道及び聖果を得るありや」。彼卽ち答へて曰はく、「我經中に於ては是の如きの說を作すなり、因なく、果なく、善なく、惡なく、煩惱あることなく、斷者あることなく、涅槃あることなく、得者あることなく、三世の中の所有因果は皆悉く空無なり。一切は皆是れ自然にして、智者は自然に智にして愚者は自然に愚なり、修者あることなく、亦得者あることなく、亦自利もなく亦利他もなし。一切衆生は因の生ずるなく因の滅するなし」と。是の如きの師等は皆是の如きの妄說を作して善說に非ず理說に非ず、我れ東問を作すに他は在し西答せり、我れ是の如きの種種の邪說を聞くと雖、我意に入らず亦隨喜せず亦領受せざりければ辭捨して退りぬ。更に復彼の[二五]散逝移の所に詣り亦是の如きの種種の問疑を作さく、「……前の如くにして衆生は種種の行業・種種の技藝もて生死の業を行ぜり。此業中に於て頗し衆生ありて是の如きの業に因みて能く煩惱を盡し聖果を證せりや不や」と。彼卽ち答へて曰は

【二四】末羯利俱賖離子の說。

【二五】散逝移毘刺知子の說。

威德を具して聖弟子あり、慈悲普く覆ひて世の導師と爲り最上の福田なるが我園中に在りて安居事を爲さんとしたまへり、宜しく親しく供養すべし、是れ王が業なり」。時に未生怨王は斯說を聞き已るに、卽ち威嚴を整へて大香象に乘じ、幷に五百宮人と將に五百象に乘じ、各明炬を持して諸眷屬と與に菴沒羅園に詣らんとせるに、王は中路に於て心驚き毛竪ちて便ち異念を作さく、「此は是れ侍縛迦が將た邊賊と相知りて來りて我を誘引し、我命を害せんとするには非ざるや不や」。卽ち侍縛迦に問うて曰はく、「汝、佛世尊は幾多の人と與に園中に在りて住したまへる」。報じて曰はく、「千二百五十苾芻と與なりたまへり」。王又問うて曰はく、「若し汝に異心あるに非ざらんには、旣にして許多の人衆あるに吾何ぞ謦咳の聲を聞かざる」。侍縛迦答へて曰はく、「彼佛世尊は三業寂靜にして心常に定に在り、弟子も亦爾り、是義を以ての故に喧雜の聲なきなり」。王は此語を聞いて心便ち決定して更に疑難なかりき。便ち佛所に至り象馬より下り已るに、佛世尊が諸大衆と與に諸根寂定にして湛然として海の如くなるを見て、遂に便ち五體を地に投じて佛足を頂禮し、合掌して佛に白して言さく、「世尊は大慈にして三業寂靜なり、唯願はくは善く誘導して我兒に訓へ、佛の似く常に喧亂なからしめたまはんことを」。爾の時如來は慈を以て善心に王を慰喩して曰はく、「善い哉、大王、宜しく時に座に就くべし、諸有疑難は其所問を恣にせよ」。旣にして坐定り已るに佛に白して言さく、「世尊、世間の中に於て種種の業行あり、花鬘を結ぶ者あり、竹作する者あり、或は屠膾するあり、或は販賣を作し、象馬を調伏し、或は言話し、或は弓射を爲し、或は乞求を作し、戰鬪勇力もて王に事へ、剃頭し、染(衣)し、浣(衣)し、縫衣するあり、是の如きの類は各自業を以て資財を求覓し、情に隨せて福を修し五欲の樂に著せり。世尊、頗し是の如きの衆生の類にして、現世中に於て沙門果を得るありや不や」。時に佛は却りて正に問うて曰はく、「大王、是の如きの義に於て曾て餘人に問へりや不や」。王、佛に白して言さく、『世尊、是の如きの義に於て我れ以に曾て外道[三]哺

【三】 哺刺拏迦攝波子の說。律部十九、註(一三の八)の本文參照。以下の六師の說は長阿含經中の沙門果經、及びD.(I,52) Sāmañña-phala-S. の說とは相前後せり。

「此れ彼車主の　而し能く我を殺せるには非じ
我れ染心を起して　他を觀ざるに由りて便ち失命せるならくのみ」と。

佛、苾芻に告げたまはく、「汝等、當に知るべし、彼車主とは豈に異人ならんや、今の舍利子是れなり、時の彼婦とは今の目乾連是れなり、其賊主とは今の提婆達多是れなりしなり。彼過去の車主及び婦は倶に賊の便を得たるが如く、今も舍利子及び目乾連は善く能く彼提婆達多の便を得たること亦復是の如くなりき」。爾の時、世尊は王舍城の〔三〕王子侍縛迦菴沒羅園に在しき。時に未生怨王は曾て五月十五日の夜將に安居せんとせる時に於て、明月天に澄み光景じて花麗なりければ、諸の臣佐・后妃・婇女と與に高樓上に在りしに諸人に告げて曰はく、「今既にして夜月清閑にして圓明愛すべし、我及び卿等は何の所作をか欲せる、宜しく各懷を述べて其事を啓請すべし」。時に婇女あり聲に應じて報へて曰さく、「大王、人生の行樂虛しく度るべからず、今此良宵に可しく以て遊戲して情を恣にして五欲の樂を受くべし、是れ王が事なり」。復一女ありて言さく、「大王、我れ今意に此の王舍城の一切を道俗をして共に歡會を爲して同じく欲樂を受けしめんと欲す、是れ王が事なり」。時に王の太子鄔陀夷は白して言さく、「大王、今此の明夜に大王は親しく四兵を領して不臣國を罰し、邊荒を靜謐し戰勝して旋歸せんこと是れ王が事なり」。復大臣あり是れ外道徒黨なりしが白して言さく、「大王、此明月の夜は觸目清閑にして十五日將に安居せんとする時に當れり、可しく尊者晡刺拏等の六大明師は人の遵承する所にして物の爲に首と稱へられ、各五百人の無衣の徒侶ありて常に共に隨逐せるに於て、現に王舍城に在りて將に安居せんと欲し、物の利を消すに堪へたれば、我等宜しく應に彼足下に就りて奉事供養すべし、此は是れ王事なり」。復王子侍縛迦あり衆中に於て坐せるに、王は之に告げて曰はく、「汝、侍縛迦、何の故にか默然して一も說く所なきぞ」。侍縛迦白して言さく、「大王、此芳辰に屬して朗月澄淨に人皆共に愛し、將に安居せんとする時なり。然り佛世尊は大

【三】王子侍縛迦菴沒羅園 (Jīvaka kumārabhṛtasya amba-vana) 王子侍縛迦は王子によりて養はしめられしより字して王子といへるなり。律部八、註(五の一二四)參照。菴沒羅園は耆婆(侍縛迦)が獻ぜる王舍城附近の精舍なり。

て弓劍業藝の我と相似たらんに、方に之に嫁與せん」。後に於て久しからざるに二男子あり來りて技藝を習へるに、一は五種の技藝を學成し、一は唯一を學成して餘の四は得ざりき。其人遂に便ち女を將つて業成の者に嫁與せるに、藝成ぜざりし者は心に便ち忿恨して捨離して去り、便ち刧道賊邊に就りて共に伴侶と爲り、以て用刀を倂きて要路處に於て彼女夫を待ち相屠害せんと欲せり。後に於て久しからざるに其人は眷屬と(與に)車に乘じて將に過ぎんとせしに、路に商人多衆の〔二〕將度せるに逢ひければ、之るに問うて曰はく、「汝等諸人、何の故にか過ぎざる」。答へて言はく、「賊ありて路に常れり」。其人報じて言はく、「我等は但過ぎん、勞はしく畏懼することなかれ」。諸人告げて曰はく、「汝若し畏れざらんには、請ふ先に在りて過ぎよ、我等諸人は後に隨うて往かん」。既にして此語を聞くや車を馳せて便ち去りしに、諸の賊徒等は樹に上りて遙に彼が車の來れる望み見て賊主に報じて曰はく、「今、車來れるあり」。其賊は逆へて一人に使せしむらく、「汝今宜しく廻るべし、須らく來り過ぐべからじ、我は此處に於ては大有健兒なれば」。其人報じて云はく、「汝、極健なりと雖我も亦甚だ健なり」。時に賊主は五人を差して來りて與に戰はしめしに、咸く皆死を致せり。又三七人を差し來りしに、亦都べて殺し盡せり。後の時總來して衆戰へるに、並に倶に害せられて唯舊同學一人のみ存するを得たれば最後に二人して交戰せり。然り女夫は箭を放つに皆賊人のために刀を以て揮ひ斷たれければ害すること能はず、且らくにして五百箭皆悉く放ち盡して唯一箭を殘すのみなりければ遷延して住せるに、其婦問うて曰はく、「何ぞ以て射ざる」。彼便ち報じて曰はく、「今我と君と二人の命は倂せて此箭に在り、然る所以は我れ此箭を留めんに防護する所あり、今若し放ち訖らんに他來りて我を害し幷に君も亦死なん」。婦人此を見るや卽ち便ち起ちて舞ひ、運轉するの間彼賊は樂觀して遂に禁禦するを忘れければ、其夫は之を伺ひて卽ち便ち箭を放てるに、箭に應りて便ち死にき。命終の時に臨みて而し頌を說いて曰はく、

【二】將度。度は制する義あれば將ゐ制すること、便ち將護に相當す、用心するなり。藏文には「その時商人は盜賊の恐怖の爲に(彼女夫等よりも)前に來りて集會せりければ、彼曰はく、賢者等よ、何故に空しく集り居るなる」とあり。

ありて而し佛に問ふらく、「[一九]提婆達多は何の縁を以ての故に、舍利弗等は其徒衆を領せるに、應に瞋るべきに瞋らずして、自の隨儻に於て辜なきに輒ちに便ち漫打せる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『但に今身に枉げて事業を作せるのみには非じ、亦曾て過去にも別人が婦を銜ひたるに、枉げて他人を殺せり。乃往過去に夫婦二象ありて山澤に居住せり。母象は婬泆にして外象と通じ、既にして銜誘せられて他に隨うて去らんと欲せるに、其夫の覺りて事に乖競あらんを恐れて、其夫象と與に河に入りて澡浴し、夫象に語げて曰はく、「誰か能く水に沒して久住じて出でざる」。夫唱ふらく、「我れ能くす」。便ち共に水に沒せるに、彼二は其未だ出でざるを伺ひて遂に私に相奔走せり。其夫象は水に入ること多時にして、乃し一度出でて看たるに、其二象は見えざりければ復入りて水に沒し、是の如く再三して便ち困乏するに至りければ、已むを(得)ずして遂に便ち水を出でしに、婦を尋ねて見ざりければ、其水中に於て處處に討ね捕へんとし、此に因りて枉げて無量の衆生を踏みて死に至らしめぬ。爾の時空中の諸天は而し頌を說いて曰はく、

「象身は復大なりと雖　智慧甚だ微淺なり
　好婦の他に將られては　枉げて諸の含識を殺せり」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「時の夫象とは今の提婆達多是れなり、今も亦是の如し別人が業を作して別人が厄を受けたるなり」。時に諸苾芻は咸く皆疑ありて佛に問ひまつるらく、「[二〇]世尊は是れ一切智なり、舍利子及び目乾連は云何が是の如く善巧方便を作して此の五百苾芻を勸化導誘し、邪を捨て正に歸せしめて佛所に來至せる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『其の舍利子及び目連等は但に今時に誑して彼より脫するを得せしめたるのみには非じ、過去世に於ても亦曾て誑誘せり。乃往過去世の時、一丈夫あり常に山に在りて居し、善く弓射の諸技藝を能くせり。後に一女を生み長養して漸く大なりしに、其人心に念ずらく、「今我が此女は應に輒ちに嫁がしむべからず、若し男子あり

【一九】提婆達多漫ニ打自黨ニ前生因緣譚。

【二〇】舍利弗目連誑ニ誘五百苾芻ニ前生因緣譚。

等は親しく左右と爲り、餘小の野犴は遠避して住せるを見たりければ、心に懊惱を生じ、便ち方便を設けて野犴中より一野犴を差して王母を喚ばしめしに、其母問うて曰はく、「我兒所に於て何の伴屬ありや」。野犴答へて曰はく、「内に師子虎象ありて我は外院に居せり」。母曰はく、「汝去いて定んで我子を殺せ」。并に頌を說いて曰はく、

「我れ山谷中に在りて歡戲し　隨時に清冷の水を飲むを得たり
子若し野犴の鳴を作さゞらんには　象上に居して身安樂なるを得ん」。

使者還り來りて同類に報じて曰はく、「彼は是れ野犴にして是れ王種に非じ。我れ山中に於て親しく其母に見えぬ」。諸伴報じて曰はく、「我れ可しく試看すべし」。即ち便ち彼に就りしに、野犴の法爾として若し一にして鳴かん時餘、鳴かざらんには身毛墮落するなり。餘即ち鳴叫せるに、其の王野犴は是念曰を作さく、「我れ若し鳴かざらんに毛は便ち地に落ちん、若し象を下りて聲を作さんに必ず他に殺されん、我れ今寧ろ可しく象上にて聲を作すべし」。即ち便ち鳴叫せるに、其象は即ち此は是れ野犴なりと知り、即ち鼻を以て牽き下し雙脚もて蹋み殺せり。空中の天は見て伽他を說いて曰はく、

「内に在るを翻じて外に居し　合に外なるべきに乃し中に居せんに
斯れ皆爲すべからじ　野犴の象に乘ぜるが如くなり」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等當に知るべし、往時の、内なるを翻じて外に爲し、外なるに中に居して自ら其身を滅せる野犴王とは提婆達多是れなりしなり。彼が過去の顚倒業に由りての故に、今も亦是の如く和合僧を破し、内なるに翻じて外に爲し、外なるに乃し中に居せるなり」。時に提婆達多は既にして舍利弗等を趁ひて本處に迴還するを得ざりければ、大忿怒を生じて便ち孤迦利迦等の隨黨徒衆を打ちて彼に告げて言はく、「良に汝等に由りて我徒衆を失せり」。時に諸苾芻に疑

ざりき。時に世に辟支佛あり、大慈悲あり少欲知足にして上勝の福田なるが、世間に遊行して漸く仙所に詣りぬ。大仙は辟支佛の端嚴殊勝なるを見て、心に歡喜を生じて供養恭敬し、而し願言を發せるらく、「此の佛に供養せる功德を以て、願はくは我れ當來に大智慧神通の力を得んことを。客仙は一切智を成ぜりと雖、願はくは我れ能く彼の和合僧衆を破せんことを」。古今を結會せんに往時の客仙とは我身是れなり、五百仙人中大仙主ありとは提婆達多の身是れなりしなり。此因緣の爲に黑業には黑業の報あり、白業には白業の報あり、非黑非白の業には非黑非白の業報あり。諸苾芻、當に知るべし。宜しく一切不善の業を捨てゝ善業を修集すべし、應に當に修學すべし』。時に諸苾芻には復疑ありしが故に而し佛に白して言さく、「世尊、彼の提婆達多は何の故にか內を外に作し、外を內に作せるなる」。世尊告げて曰はく、『是の提婆達多は是れ今身に內を外に作し、外を內に作せるのみには非じ、過去にも亦復是の如きの惡を作せること、諸苾芻諦に聽け、我れ說かん。往昔に一野干あり、其〔一八〕性饕餮にして聚落に遊行して處處に食を求め、日に染家に至りしに覺えず藍色盆中に墮ちたりければ、染主見て拽き出して地に擲げぬ。時に野犴は遂に灰土に宛轉し、既にして身體汚惡不淨なるを見たりければ、便ち即ち河に入りて沐浴して去りしに、身毛光澤せること藍色の似如くなりき。時に衆野犴は其毛色の尋常に異れるを見て甚だ恠を生じ、衆共に問うて言はく、「汝は是れ何人なりや」。彼即ち答へて曰はく、「我は是れ帝釋天王の使なり、我を冊して禽獸中の王と作せ」。時に野犴は是の思惟を作さく、「身は是れ野犴なるも色は本類に非じ」。時に衆野犴は共に師子に報じ知らしめしに、師子は便ち大師子王に告げければ、師子王は遂に即ち使を遣して虛實を檢せしめぬ。其使到り已りて彼の藍色の野犴の大白象に乘じ諸の禽獸等は普く皆圍繞して獸王に事ふるが如くせるを見ぬ。其使は見已りて王所に還り來り……廣說せること前の如し……大師子王は是語を聞き已るに、便ち軍衆と與に彼衆所に往けるに、野犴王は大白象に乘じて衆獸圍繞し、大蟲及び豹の大力獸

〔一七〕 提婆達多內作二於外一、外作二於內一前生因緣讃。藏文には「一外を內になし、內を外になして衆を擅に有せることを觀察したまはんことを」とあり。

〔一八〕 饕餮。財を貪り食を貪るなり。

有は生を縁じ、生は老死憂悲苦惱を緣ず、若し無明滅せんに則ち行滅し、行滅せんに則ち識滅し、識滅せんに則ち名色滅し、名色滅せんに則ち六入滅し、六入滅せんに則ち觸滅し、觸滅せんに則ち受滅し、受滅せんに則ち愛滅し、愛滅せんに則ち取滅し、取滅せんに則ち有滅し、有滅せんに則ち生滅し、生滅せんに則ち老死滅し、老死滅せんに則ち憂悲苦惱滅すと說けり。[一五]汝等苾芻、常に思ふて自利と利他と自利利他の法とを修學せよ。若し法にして不善・無利・無樂ならんには究竟して不善なり、及び四輩所得の飲食衣服臥具湯藥にして、自身に不善の事にして作すべからざらんには作すこと莫れ、但自身及び他に利益ある者を觀じて常に須らく修學すべし」。時に諸苾芻等は此法を聞き已るに、心に歡喜を生じて疑網皆除こり內外淸淨なりき。異の苾芻等あり、心に疑惑を生じて而し世尊に問ひまつるらく、[一六]「何の因業ありてか今和合僧を破られたまへる」。佛、諸苾芻の爲に過去の業を說きたまはく、「我れ自ら聚集して業を作りぬれば今自らに之を受け、是れ他受に非ざるなり。苾芻當に知るべし、有情にして業を作らんに、還りて有情は受くるなり、無情の受くるには非ざるなり」。而ち頌を說いて曰はく、

「假令百劫を經んとも　　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　　果報は還りて自らに受けん」。

爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、『乃往過去に淸淨山林に一大仙あり、五百小仙を以て眷屬となし俱に共に修道せり。時に客仙あり來りて其所を過りしに、主人は與に如法に供給看侍せざりければ、客仙は心に懊惱を生じて恨み、便ち和合仙衆を破らんとて彼の諸小仙を誘引して言はく、「我れ善く種種の道術及び五神通を解しぬれば我れ當に敎示すべし、汝當に我に隨ふべし」。後の時大仙は此事を知り已りて彼客仙に勸むるらく、「我衆を破ること莫れ、是れ仙法に非ざれば」とて、巧に善言を說いて歡喜を生ぜしめたるに、是の如きの滅諍の語を得たりと雖由ほ勸めて方便を設くるを息め

【一五】本文には汝等苾芻常思修學自利利他自利利他之法若法不善無利無樂究竟不善及於他四輩所得飮食衣服臥具湯藥自身不善之事不應作者莫作但觀自身及他有利益者常須修學……とあり。

【一六】世尊被ㇾ破ニ和合衆一前生因緣譚。

に可しく速に神通を現じて迴心して佛に向はしむべし」。是時大目揵連は卽ち便ち身虛空に騰り、行住坐臥の四威儀を具して火光三昧に入り、種種光明の靑黃赤白なるを放ちて或は身上に水を出して身下に火を出し、或は身上に火を出して身下に水を出し、東西南北に具に四種神通を見じ、神通を現じ已るに空よりして下りて却りて本處に坐せり。是時大衆は大目乾連の此神通を具せるを見て心に悲惱を懷けるらく、「[一三]我れ若し佛に侍したらんに亦應に具に神通道德を得べかりしに」。舍利子、大衆に告げて曰はく、「諸苾芻、汝等若し佛世尊所に於て[一四]赤心あらんには可しく我に隨うて去るべし」。既にして語を聞き已るに卽ち舍利子の後に隨うて往いて佛所に詣れり。僧衆去りし後、孤迦利迦苾芻は卽ち提婆達多を喚び起して舍利子を趁はしめぬ。時に舍利子念ずらく、「提婆達多が我が徒衆を見ざるが故に必ず當に懊惱し吐血して死ぬべきを恐れ、遂に便ち漸次に緩緩として遊行して、提婆達多をして我等を見るを得せしめん」。時に提婆達多は睡より起き已り眼を拭ひて而し趁へるに、舍利子は神通力を以て路に當りて大深坑を作りければ、提婆達多・孤迦利迦・褰荼達驃等の五人は、覺えず坑に墮ち迷亂して出づる處を知らざりき。復自ら思惟すらく、「我今既に徒衆を失せり、尋覓するを知ることなければ且らく本處に歸らん」。時に舍利子・目揵連及び諸の僧衆は漸くに佛所に詣り、迦蘭鐸迦竹林園邊に到りて世尊に見えんと欲せるに、極大羞慚して目を擧ぐる能はずして各自ら思惟すらく、「我等云何が是の如きの非法無慚愧の事を作せる」。漸くに佛前に詣りて立てるに、時に世尊は大慈もて憐愍し輭聲に慰問したまふらく、「汝等苾芻、極大疲勞して我所に來至せり。今者人身得難くして已に得、佛法聞き難くして已に聞き、六根具し難きに已に具し、善惡の事は已に具さに之を知れり。我れ已に如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛・世尊を成就し、我常に寂靜・涅槃・究竟菩提を演說し、無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六入を緣じ、六入は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、

【一三】此一句、藏文に缺く。藏文には「其時具壽大目連によりて諸苾芻は後悔を生ぜり。其時舍利弗は諸苾芻に天授を捨つべき法を說いて曰はく……」とあり。
【一四】赤心。藏文に「具壽等よ、世尊に歡喜せんには起ち止りて去るべし」とあり。

を見て心を斂めて定に入れるに、提婆達多が和合僧を破せるを觀見せりければ便ち相謂ひて曰はく、「我等宜しく往いて諸の諍論を滅し、求めて和合せしむべし」。三月已に滿ち三衣已に具はりければ、卽ち世尊所に往かんとて漸漸に遊行して王舍城竹林園中に詣り、三衣を安置し洗足し已りて世尊所に往かんとせるに、羅怙羅の門外に在りて立てるに見え舍利子に謂ひて曰はく、「鄔波馱耶、知れりや不や、提婆達多は已に破僧し訖れり」。舍利子曰はく、「我已に知り訖れり、故に此が爲に來れるなり、汝憂愁する勿れ、我當に和合すべければ」。便ち衆中に入りて世尊に見え、稽首頂禮して却きて一面に坐し、而し佛に白して言さく、『我れ聞けり、「惡人提婆達多は已に僧衆を破せり」と。我れ和合せんと欲するも、未審、世尊慈許を垂れたまふや不やを』。爾の時世尊卽ち便ち歎じて曰はく、「善い哉、善い哉、若し能く是の如く僧を和合せんには、福を得ること無量なり」。時に舍利子幷に大目連は此事を白し已るに世尊を辭し奉り、南山に往いて提婆達多の所に詣れり。時に提婆達多は佛の威儀を作して衆の爲に法を說き、孤迦里迦は右邊に在りて坐し、褰荼達驃は左邊に居在せり。時に提婆達多は遙に大德舍利子・目揵連の來れるを見て便ち是念を作さく、「我れ已に一切智を成ぜる人なれば、而し此大德は我衆中に入らんとするなり」。卽ち左右の侍從をして起たしめ、卽ち舍利子、目揵連をして左右に坐せしめぬ。時に孤迦梨迦、褰荼達驃は旣にして强ひて坐處を移されければ、心に瞋恨を生じて善く自ら思惟すらく、「我等大過失ありて僧衆を破するを助けぬ、若し起たさらんと欲せんに恐らくは瞋打せられん」。便ち卽ち處を移し大目揵連幷に舍利子をして左右に居在して坐せしめぬ。(時に)提婆達多は舍利子に告げて曰はく、「我れ今背痛む、汝大衆の爲に妙法を演說せよ」。爾の時舍利弗は默然して請を受けゝれば、提婆達多は此語を說き已るに、便ち僧伽胝を疊みて頭を支へ右脇にして臥せり。時に舍利子は神通力を以て仰眠せしめて覺知せしめずして諸大衆に告ぐらく、「汝等が大師は眠れること孩兒の如し」。時に舍利子は目連に告げて曰はく、「汝、大衆の爲

悉く井中に墮ち　　月を救はんとて溺れ死にき」と』。

佛、諸苾芻等に告げたまはく、「往昔の獼猴王とは卽ち提婆達多是れなり、昔時に自の愚癡に由りての故に愚癡を以て而し眷屬と爲せるに、今時も亦愚癡の眷屬を爲せるなり」。

爾の時世尊は王舍城竹林園中に在せしに、時世飢儉にして乞食得難かりき。佛、諸苾芻に告げたまはく、「我れ三月靜住せんと欲すれば一人も輒ち來りて我に見ゆるを得ざれ、[九]取食者と及び[一〇]長淨日とを除く」。大德も亦應に共に明制を立てぬ。時に舍利弗・摩訶目乾連は南山内に在りて三月安居せりき。時に提婆達多も亦夏中三月に於て飮食及以雜事を供給せり」。三月を滿たし已るに提婆達多は諸大衆の爲に廣く妙法を說けるらく、『苾芻當に知るべし、沙門喬答摩は常に法を說く時讚歎すらく、[一一]「山に在りて寂靜ならんに諸の煩惱を離れて解脫せんこと最疾最速なり、一には乞食、二には糞掃衣、三には三衣、四には露坐せん(者)、是の如きの四人は諸の塵垢を去りて解脫を證得せん」と。若し人ありて是の如きの四種修道を樂はず解脫を樂はざらんには、卽ち今に籌を受けて衆外に出離すべし』。此語を說き已るに、時に大衆五百苾芻は人各に籌を受け、提婆達多に隨ひて衆外に出離し、行いて門首に至れり。羅怙羅は見て五百苾芻に語げて曰はく、「云何が如來を捨て惡黨に隨逐して而し去らんとするなる」。諸苾芻は羅怙羅に告げて曰はく、「我三月安居に於て飢餓せるに、提婆達多の供給を蒙りて食を取り、幷に雜物を將つてして之を供養せり。若し祇濟せざりしならんには、我等は死に盡したらん」。提婆達多が分れて僧を破せる時、大地震動し、流星晃曜し、四方に火然え、一切諸天は鼓を擊ち震響して高聲に唱へて言はく、「今より已後は涅槃の道息みて道果を得る者あることなく、漏盡者あることなく、[一二]蘇呾羅・毘奈耶・阿毘達磨を讀誦するあることなく、心亦阿蘭若處に著せず、亦聲聞、辟支佛道を修する者もなく、亦阿耨多羅三藐三菩提を修する者も無く、人天活亂し三千大千世界に法輪轉ぜず、衆生は人に隨ひて法に隨はざらん」。舍利子・摩訶目揵連は此の奇恠

【九】取食者。律部二十、註(二八の一二)參照。

【一〇】長淨日。布薩日なり、律部十九、註(八の二七)參照。

【一一】提婆の四種修道拒否。破僧伽成就。

【一二】蘇呾羅・毘奈耶・阿毘達磨經と律と論なり。

此に由りて諸の牛類は　　險を度りて身肥飽せり」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等異念を生ずること勿れ、其の最勝牛王の正教を出せる者とは卽ち我身是れなり、時の彼牛王の惡教令を出し彼羣牛をして苦難に遭はしめたる者とは提婆達多是れなりしなり。昔時に能く我教を受くるありし者は皆安穩なるを得て能く危苦の諸險難處を越え、諸の能く提婆達多の言教を受くるありし者は皆是の如きの苦難に遭へし。但に往昔のみに非じ現今も能く我が正見に隨ひて其教誨を受くるありしは皆安穩に生死煩惱の大海を越度するを得、若し提婆達多の邪見惡行に隨順せるは恒に是の如きの諸の大苦難に遭へるなり」。時に諸苾芻は咸く皆疑あり、惟佛のみ能く斷じたまへば緣を以て佛に白さく、「[八]惟願はくは世尊、是の提婆達多の自身愚癡にして眷屬亦愚なるを觀じたまはんことを」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「提婆達多は但に今世に愚癡なりしのみには非じ、往時にも亦然りしこと汝等諦に聽け、我れ汝の爲に說かん。乃往古昔に一閑靜林野の處あり、羣獼猴ありて遊住せり。此時に於て諸獼猴は遊行して漸々に一井に至りしに、乃し井底を觀じて彼の月影を見ぬ。旣にして月を見已りて猴王處に詣り、白して言さく、「大王、應に知るべし、其月は見井中に墮ちたるを。我等今應に速に往いて拔出し、舊に依り安置すべし」。是の諸猿猴は咸く讃じて言はく、「善いかな」。便ち相議りて曰はく、「云何が方便してか能く月を拔くべき」。其中或は云はく、「餘の計を須ゐじ、我等肱を連ねて索と爲し、而し之を拔き出さん」。時に一獼猴は井樹の上よりして枝を攀ぢて住し、其餘の一一は次第に手を以て相接ぎければ、獼猴旣にして多く樹枝低下して折れんとせり。時に彼最下の水に近かりし者は、水を攪して月を覓めしに水渾へるに由りての故に月便ち現はれず、樹枝便ち折れければ、一時に水に墮ちて溺れて死にき。時に諸天あり而し頌を說いて曰はく、

「此の諸の癡獼猴は　　彼の愚導師の爲に

【八】提婆愚癡眷屬愚癡前生因緣譚。

を、世尊の言教に隨へる者は安穩に生死を度るを得、提婆達多の言教に順へる者は大苦難に遭へることとを」と。佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等、當に知るべし、但に今世に我言教に隨順せる者は生死を度るを得たるのみには非じ、往昔にも亦復是の如くなりしこと、汝等苾芻諦に聽け、諦に聽け、我れ汝の爲に說かん。乃往昔時に二導師あり各五百車乘ありて磧中を過りしに、或は水草を得、或は水草を得ずして乃し數日を經たるに、諸の商人は諸の牛犢を將ゐて其水草に就り、時に諸商人は水に入りて澡浴し、諸の牛犢に飲ましめ、既にして水を飲み已るに便ち息うて住せり。後に一方所の其草青茂し多く涌泉あるを見ぬ。時に諸の商人は諸の牛犢を將ゐて其水草に就り、時に諸商人は水に入りて澡浴し、諸の牛犢に飲ましめ、既にして水を飲み已るに便ち息うて住せり。其五百犛牛の中に一牛王あり、諸牛に告げて曰はく、「此方の地所は青草鬱茂して好浴泉あれば、我等は恣意に飲食して住せん。若し商人ありて駕を我に備へんに、便ち須らく地に臥して復使を受けざるべし」。第二の牛王は犛牛に告げて曰はく、「汝等應に知るべし、其の商人等は大氣力ありて、能く調へ難きの物を調伏すれば、宜しく舊に依りて人等に隨順して車乘を搬運すべし、後に損あるを恐るれば」、其の大牛王は是語を聞き已りて卽ち第二牛王に瞋るらく、「汝の所言は前に依ひて他の驅使を受けんとなり、是事非法なり、豈に人類の自背を見るを能くするあらんや」。復犛牛に告げて曰はく、「汝等は我が言教を取らんには須らく相去るべからず」。時に商人は其牛に駕せんと欲せるに、彼の諸牛等は商人の捉へんと欲するを見て、便ち卽ち瞋怒して地に爬ひて劚裂せり。商人は見已りて各棒を執りて打ちて皮穿ち血を流し、卽ち車に駕せしめしに、餘牛は車を牽いて而し去りければ皆打たれざりき。爾の時空中の諸天は卽ち頌を說いて曰はく、

「今、惡牛王を觀ずるに　妄語して惡行を行じ
諸牛は此に緣りて苦み　飢渴して身流血せり。
復善牛王を觀ずるに　淳和にして正敎を出し

「我れ昔少時には氣力强盛にして力を以て鼠を捉へて食せるも、我れ今年既に朽邁して氣力微薄なれば捉獲すること能はず、何の方便を設けてか而し鼠を捉獲せん」。是念を作し已りて遍く其地を觀ぜるに、乃し一鼠王の五百鼠と與に而し眷屬と爲りて此方所に住せるを見たりければ、卽ち鼠穴に就り詐りて坐禪を作せり。時に諸の羣鼠は穴を出でゝ遊行して、乃し老猫の安然として坐禪するを見たりければ、其鼠は問うて曰はく、「阿舅、今作せる所は何ぞや」。老猫答へて曰はく、「我れ昔少年にして氣力盛壯なりしには無量罪を作りぬれば、今福を修して其の舊罪を除かんと欲せるなり」。時に羣鼠等は是語を聞き已るに皆善心を發せるらく、「今此の老猫は善法を修行せり」。卽ち鼠等と與に老猫を右繞し、三匝を行じて便ち穴に入りしに、其老猫は其の最末後の者を取へては而し食ひぬ。多時を經ずして其鼠漸く少かりければ、鼠王は既にして此を見已りて便ち是念を作さく、「我鼠等は漸漸に數少くして其老猫は氣力肥盛せり、是事必ず緣由あらん」。其鼠王は卽ち便ち觀察せるに、乃し老猫の、其糞中に於て鼠の毛骨あるを見て、心に卽ち老猫の我鼠等を食へるを知りて(念ずらく)、「我れ今鼠を捉るの時を深觀せん」。是念を作し已りて便ち卽ち窟よりして老猫を看りしに、乃し老猫は最末後の鼠を捉りて食へるを見ぬ。鼠王は見已りて避遠して立ち、遂て頌を說いて曰はく、

「老猫の身漸く肥えて　羣鼠積りて漸く少し
苗實根葉を食はんに　糞、應に毛骨なるべからじ。
汝今修禪せんとも善なりとは謂はじ　利の爲に詐りて修善人と作れるのみ
[六]願はくは汝無病安穩に住し　我が今の羣鼠は汝食ひ盡さんことを」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「異念を生ずる勿れ、時の彼れ火燄の老猫とは提婆達多是れにして、非法の罪を作しつゝも諸の人衆に於て修善を示現せるなり」。是の諸苾芻は咸く咸く皆疑あり、唯佛世尊のみ能く疑惑を斷じたまへば、(緣を以て佛に白さく)、[七]「大德世尊、思審に觀察したまはんこと

【六】本文には願汝無病安穩住、我今群鼠汝食盡とあり。藏文には「諸の鼠を滅ぜしむることによりて、火生よ、汝は吉祥なるべし」とあり。
【七】隨ニ世尊言敎一者得レ度ニ生死一前生因緣譚。

此頌を說き已るに諸獼猴等は卽ち便ち捨て去りぬ。其第二の獼猴王も亦五百眷屬と與に人間に遊行して漸く此村に至れり。是の諸獼猴も亦其村に入りして果實繁茂せりければ、便ち獼猴王に告げて曰はく、「我等路を涉りて疲勞しぬれば、其果を食して安穩に而し去らんと欲す」。獼猴王曰はく、「善い哉」。爾の時五百獼猴は卽ち其果を食せり。時に諸獼猴等にして其果を食せる(者)は皆悉く死を致せり。汝等苾芻異念を作すこと勿れ、其果を食せざりしに獼猴王とは我身是れなり、其第二の獼猴王とは提婆達多是れなりしなり。我意に隨順せる者は平安に達するを得て苦難を遠離し、提婆達多の意に隨へる者は悉く苦難に遭へり。今時も諸の有情等にして我語に隨順せるは生死の中に於て而し解脫を得、提婆達多の言敎を受けたるは悉く苦難に遭へるなり』。爾の時提婆達多は石を以て世尊を擊たんとせり。時に諸の婆羅門居士等は悉く瞋恚を懷いて咸言はく、「我等は卽ち提婆達多を殺さん」。其中、人あり是れ提婆達多の朋友なりし者は卽ち提婆達多に報ぜり。提婆達多聞き已るに卽ち閑林樹下に於て安禪して住せり。時に諸の婆羅門居士等は提婆達多の樹下に在りて安禪して住せるを見て各相謂ひて曰はく、「汝等應に知るべし、此の提婆達多には大威德あり、我等云何がしてか而し之を殺すを得ん、云何が今我は斯の惡事を發さんとせる。宜しく速に各去るべし」。時に諸苾芻は提婆達多が是の如き威儀に住したれば諸の婆羅門居士等は暫し瞋怒せりと雖而し殺害せざりしと聞いて、是の諸苾芻は咸く皆疑あり、唯佛世尊のみ能く疑惑を斷じたまへば、緣を以て佛に白さく、[四]「大德世尊、今可しく提婆達多にして非法罪を作しつゝ、諸の人衆に於て善法を修するを示せるを觀察したまふべし」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『其の提婆達多は但に今世に斯非法を作しつゝ而し正法を現ぜるのみには非じ。老鼠を誑惑して以て其命を害せること、汝等諦に聽け、我れ汝の爲に說かん。乃往昔時に異の方所ありて一鼠王あり、五百鼠と與に眷屬たりき。一猫子あり名けて[五]火餤と曰ひ、其猫少年の時は所有鼠等は悉く皆殺害せるに、後年老邁しては便ち是念を作さく、

【四】提婆誑惑現ㇾ修ニ善法ー前生因緣譚。

【五】火餤猫。byi-la me-skyes(チイラ メエ ナエ)、「火を生ずる猫」の義。

言さく、「此象燒かれたらんには須らく猿猴の脂を用ひて身に塗るべし、方に差ゆるを得べけん」。時に大王は諸羣臣に敕すらく、「汝等、速に須らく訪ねて猴脂を覓むべし」。臣等は命に依りて卽ち獵師を喚ぶらく、「汝等、速に猴を覓めて將ゐ來るべし」。獵師、命に依ひて諸方に往いて猴を捕捉し、彼難信の猴王并に五百の羣猴は倶に繫縛せられて王所に將ゐ來れり。其醫人は久しきより怨恨を結べるが爲に、彼猿猴等を將つて活きながらに熱鑊の中に擲著せり。爾の時諸天は卽ち空中に於て而し頌を說いて曰はく、

「寃に近く住すべからじ　城及び村野中にて
　婢は羊の麥を食はんとせるを瞋り　猴等は銷鎔せられぬ」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等、異念を作すこと勿れ、爾時の夢を見たる猴王とは卽ち我身是れなり、其難信の猴王とは提婆達多是れなりしなり。所餘の獮猴にして我語を取れる者は斯の火怖を免れ、提婆達多の語を取れる者は悉く劇苦に遭へり。今時も我語を取れる者は並に生死の大怖に於て而し解脫するを得、提婆達多の言敎を受けたる者は悉く苦難に遭へるなり」。復次に、「[二]我意に隨順せる所有者は皆平安なるを得て苦難を遠離し、提婆達多の意に隨へる者は悉く苦難に遭へること、汝等苾芻、諦に聽け。乃往昔時に異の方所あり、二獮猴王ありて各五百の眷屬ありき。其中の一獮猴王は五百眷屬と與に人間に遊行して一聚落に至れり。此聚落に於て[三]一金波伽樹あり、其樹の果實茂盛せり。時に諸の羣猴は此果樹を見て猴王に白して曰さく、「此樹、果子繁茂して、枝將に折れんと欲せり、我等遠くより來りて疲乏しぬれば、其果を取りて食はん」。爾の時猴王は斯樹を見已りて遂に頌を說いて曰はく、

「此樹は聚落に近きに　童子、果を食はず
　汝等應に知るべし　此果、食ふに堪へざるを」。

【二】隨二佛意一者得レ離レ苦前生因緣譚の二。

【三】金波伽樹。çin kim-pa-ka(kimpāka樹)、葫蘆(へうたん)科植物なり。

卷の第二十

(提婆の僧伽破壞)(承前)

佛、諸苾芻等に告げたまはく、「如過往昔に若し我教に依れる者は皆大苦難を離るゝを得、若し提婆達多に依れる者は皆苦難の中に在りしこと、汝等諦に聽け。乃往古昔に曠野中に於て近くに一村あり、其村の樹花果滋茂せり。隨近に二羣猴あり、一部の五百に各一猴王ありき。其中の一王は、夢に五百猿猴のために此二王は熱鑊の中に擲げられたるを見、此夢中に於て大驚愕を生じ身毛皆竪てるに便ち卽ち夢覺めければ、羣猴を喚ばしめて卽ち此夢を說いて告げて言はく、「我れ今見る所の夢は是れ好ならじ。我等須らく此居、所住の處を棄てゝ餘處に移往すべし」。羣猴白して言さく、「大王の所說の如く當に須らく走げ離るべし」。菩薩は是れ大威德にして、若し夢を見んには必ず當に眞實なるべきなり」。其王は卽ち第二王を喚びて告げて言はく、「我れ今是の如きの夢を見たり、須らく別處に往いて住すべし」。王は難信の(性)なりければ告げて言はく、「凡そ夢に見たる所は卽ちに此に依りて信じうべけんや、汝若し往かんと欲せんには意の去らんとする所に隨へ、我は今此境界に於て寬なるを得れば我れ終に去かじ」。彼王は其の難信なるを知りて自管の五百羣猴を領して卽ち餘處に移れり。後の時彼の村中に於て一賤婢ありて麥を炒れるに、一羊ありて來りて此婢邊に至り此麥を食はんと欲しければ、其婢卽ち火燒木を以て羊を打ちしに、火は身上に著し燒き急られ已りて走りて王家の象坊に入れり。坊內多く芻草ありしに、其羊は身の火を抖擻して便ち草上に落ち、草木に燃著せりければ衆象は燒かれぬ。其の當象人は王に告げしに、時に王は卽ち醫人を喚びて告げて言はく、「衆象は燒かれぬ、爾、何かの醫療を急作せよ」。時に彼醫人は便ち是念を作さく、「往日、羣猴のために我が田農を損暴せられぬ、我れ今便を得たれば當に須らく寃に酬ゆべし」。大王に白して

【一】隨二佛意一者得レ離レ苦前生因緣譚の一(承前)。

「大德世尊、宜しく觀察したまふべし、提婆達多が自ら臰穢たるに利養の爲の故に其身を損害せるを」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『提婆達多は但に今世に貪穢にして惡利養を以ての故に而し其身を害せるのみには非じ、汝等諦に聽け。乃往古昔に一山中に於て大花池あり、時に大象ありて池邊に住在せり。復池の一邊に野犴の住せるあり、身多く穢臰なりき。是時其象は池よりして水を飲みて出でしに、其野犴は池邊に往いて水を飲まんと欲して野犴は象に告げて曰はく、「仁可しく路を避くべし、若し爾らざらんには可しく共に闘敵すべし」。象は是念を作さく、「此の愍むべきの物は臰穢なること無上なり、若しは足を以て蹴み、或は鼻或は牙もて彼を害せんに皆悉く穢惡たれば、我れ今還穢惡の物を已つてして方に可しく彼を害すべし」。而ち頌を說いて曰はく、

「亦汝を蹋むに足らず　復鼻及び牙を(以て)せじ
我れ穢物用ひて殺し　當に穢を以て穢を殺すべし」。

時に象は復是念を作さく、「我れ一邊に向うて行かんに、彼れ應に必ず我に隨ふべけん」。後に卽ち一邊に向うて速に去りしに、其野犴は便ち是念を作さく、「我れ口辭を以てせるに彼は懼れて退走せり」。卽ち後に隨ひて象を趁へるに、其象の近づけるを見て卽ち極努を以てして糞を放ちて其野犴を打ちしに便ち卽ち命終せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「異念を作すこと勿れ、爾時の彼野犴とは卽ち提婆達多是れなり、當に穢物を以て損害せるに、今時も亦穢惡の利養の故に損害せるなり」。時に苾芻は心に皆疑惑し、唯佛のみ能く斷じたまへば、來りて佛に白して言さく、[二九]「若し能く佛の教に依へる者は皆生死の苦難を度り、若し提婆達多の教に依へる者は苦中に墮在せること、(其の義云何)」。

【二九】依二佛意一者得レ離レ苦前生因緣譚の一。

爾の時鹿王は頌を以て報じて曰はく、

「我れ今何の計をか作さん　能く此索を斷つなく
弶索極めて堅牢にして　脚を縛りて骨に徹せしむるに」。

爾の時鹿母は心に虛怯を懷きつゝ卽ち獵師に就りて而し伽他を說いて曰はく、

「汝是れ大獵師　宜しく弓箭を放ち却け
刀を將りて先に我を殺し　然して後に鹿王を殺すべし」。

爾の時獵師は是語を聞き已るに、心に大に驚愕して而し鹿母に問ふらく、「此鹿は是れ汝と何等の眷屬なる」。鹿母報じて曰はく、「是れ我が夫主なり」。獵師は是語を聞き已るに便ち伽他を說いて而し彼に報じて曰はく、

「我れ今汝を害せじ　亦鹿王をも殘さじ
汝をして重く相愛して　夫妻還合ふことを得せしめん」。

爾の時鹿母は伽他を說いて曰はく、

「我れ夫と與に同じく歡樂し　夫主を愛重して還相見ゆるが如く
願はくは汝も諸の眷屬等と與に　恒常に愛重して同じく歡樂せんことを」。

爾の時獵師は是語を聞き已るに心大に驚怪し、「希有なり」と歎言して便ち鹿王を解けるに、母鹿と與に同じく去れり』爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝が意に云何。其の鹿王とは豈に異人ならんや、卽ち我身是れなり、其の母鹿とは阿難陀是れなり、四百九十九鹿とは是れ四百九十九苾芻是れなりしなり。其の四百九十九苾芻は我を棄てゝ去りしも、唯阿難陀のみは捨てずして住せるなり」。

〔二八〕時に諸苾芻は咸く皆疑あり、唯世尊のみありて能く疑惑を斷じたまへば、（佛に白して言さく）、

【二八】提婆達多爲二利養一損レ身前生因緣譚。

「皆須らく親友と作すべし　　羸弱と及び强者とにも
我れ一野犴を見たり　　并より師子を救へるを」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「時の師子とは我身是れなり、其の一野犴とは阿難陀是れなり、昔の四百九十九野犴とは卽ち此の四百九十九苾芻是れなりしなり。其の四百九十九苾芻は我を棄捨せるに、唯阿難陀のみは捨てずして仕せるなり」。佛、諸苾芻等に告げたまはく、『[二六]諦に聽け、乃往昔時に一菩薩の不定趣に在るありき。時に一方所にて五百鹿の與に王たりしに、一獵師あり群鹿を害せんと欲して、河側邊に於て弶柵網索を著きて計校し捕獵せんとせり。時に諸鹿等は心に畏懼するなくして遊行して彼に至りしに、然く其鹿王は前に於て行きければ遂に繫縛せられぬ。旣にして縛せられたるを見て諸鹿は並に皆走げ散ぜるに、一母鹿あり王邊に住して而し棄捨せざりき。時に鹿王は其索を斷たんと欲せるも而し斷つこと能はざりしに、母鹿は其鹿王の索を斷つ能はざるを見て便ち伽他を說いて曰はく、

「大威德の鹿王、　　宜しく速に慇懃に解くべし
弶柵を安置せる者なる　　獵師は今來らんと欲せり」。

爾の時鹿王は便ち[二七]伽他を以て頌を以て答へて曰はく、

「我れ今何の計をか作さん　　能く此索を斷つなく
弶索極めて堅牢にして　　脚を縛りて骨に徹せしむるに」。

爾の時獵師は手に弓箭を執り身に袈裟を著して此鹿所に到らんとせりければ、母鹿は獵師の鹿王を害せんと欲せるを見て、時に鹿母は卽ち鹿王に就りて而し頌を說いて曰はく、

「大威德の鹿王　　宜しく速に慇懃に解くべし
弶柵を安置せる者なる　　獵師は今來らんと欲せり」。

【二六】阿難不レ離レ佛前生因緣譚の四。

【二七】伽他を以て頌を以てとは梵漢並びあげたるのみ、伽他頌を以てとせる所あるも同じ。

鬪敵すること莫れ、若し位を得たらん時は、多く汝等に財寶を與へて阿吒に勝ること萬倍せん」。其の五百群臣は皆悉く意を廻して外境王と共に情同じて密契せり。時に王は復四事兵甲を以て更に來りて鬪戰せんとし。阿吒も亦四種兵士を以て共に鬪敵を爲せるに、其の五百大臣は外境王と情を同じくして戰はざりければ、彼の南天より來れる者は阿吒王と共に心に大に苦惱せり。彼人卽ち頌を說いて曰はく、

「一切の友は捨離せり　多時に好く看侍せるに
唯、杖瓶の人ありて　大王が所を離れじ」。

彼の勇健の人は彼の五百大臣を殺せり』。爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、「異念を作すこと勿れ、時の阿吒王とは卽ち我身是れなり、彼の千人に敵せる勇健の者とは卽ち阿難陀是れなり、其の五百群臣とは卽ち此時の五百苾芻是れなりしなり。其の五百苾芻は皆悉く走げ散じて我より離れたるも、唯阿難陀のみは我を捨離せざりしなり」。復、諸苾芻等に告げたまはく、[三五]「汝等諦に聽け、阿難陀が我を捨離せざりし事を。如過往昔に一菩薩の不定聚に住せるあり、一方所の山中に在りて獸王師子身を受けしに、時に五百の野犴あり每に常に後に隨ひて求めて殘食を拾ひ、同じく山中に住せり。師子にして蟲獸を殺し得んに上味の血肉を食ひ已りて捨て去り、餘に殘れるあるは野干取りて食して多時に彼に在りき後の時中に於て彼の師子王は夜に蟲獸を覓めしに、夜闇なりければ覺えず枯井に墮在せり。其の五百野干中一野犴あり、師子の井に墮ちたるを見て井邊を離れずして方便を思念すらく、「何の計校をか作さんに、師子を救拔して井中より出づるを得せしむべき」と。自餘の野犴は五百群鹿を見て後に隨ひて行けるも、其の彼一野犴のみは井に傍うて東西に遊行して一土堆を見、脚を以て土を推して井中に置れ、土漸く井に滿てる師子は出づるを得たりき。爾の時諸天は虛空中に於て卽ち頌を說いて曰はく、

【三五】阿難不レ離レ佛前生因緣譚の三。

「我れ緊縛せざるに彼自ら隨ひ來れるなり」、王、怔愕を生じて採捕人に語ぐらく、「後に隨ひ來れるは、的知するに是れ夫婦にして相愛して離れざるなり。汝、此の鵝王を觧放せよ、彼に從うて同じく去らん、人の損害することあらしむる莫れ」。其の採捕人は大王に白して言さく、「此の鵝王を損害せしむるあらんを恐るれば、群臣に勅して諸百姓に告げたまはんことを、「別に人の鵝王を損害する勿れ」と』。時に王は卽ち群臣を喚びて(告ぐらく)『卿、今可しく波羅痆斯の城隍の處に於て、皷を擊ち宣令して是の如きの語を作せ、「國中の所有一切人衆は、今より已去、但是れ衆鳥なるには應に傷損すべからず」と』。臣卽ち勅の如くに普く告げて知らしめぬ。汝等苾芻、異念を作すこと勿れ、往時の滿面王とは卽ち我身是れなり、彼の隨鵝とは卽ち阿難陀是れなり、其次の五百群鵝とは卽ち是れ今時の五百苾芻是れなりしなり。彼に於て鵝たりし時皆悉く走げ散ぜるに、唯、阿難陀ありて相捨離せざりき。今時も亦復是の如くに、衆皆走げ散ぜるに是の阿難陀のみは我を捨離せざりしたり』。爾の時世尊は復諸苾芻等に告げたまはく、[二二]『重ねて汝が爲に阿難陀が我を捨離せず、五百苾芻が走散せるの事を說かん、汝等諦に聽け。如過往昔に波羅痆斯に於て王あり、[二三]阿吒と名け、正しく其位に住せるに其國の人民熾盛にして豐熟安樂に、五百の臣佐ありて彼が威德たりければ、近境の諸王は皆來りて朝拜せり。時に一人の南天より來れるあり、名けて[二四]杖瓶と曰ひ、然く此一人は當に千人に敵れるが臣佐所に到れり。大臣卽ち將ゐて王に見えしめ、大王に白して言さく、「王が威德を聞いて(來れり)、此一人鬪はんに已に千人に敵れば王當に攝受すべし」。時に王は卽ち受用の財物を賜へり。後の時中に於て比境に王あり、軍馬漸く多く强盛にして勇健なりければ、卽ち象馬車步の四種兵士を辦へ、來りて阿吒に逼りて共に鬪戰を爲せり。其の阿吒王も亦四事の兵馬を以て出でゝ共に鬪戰せるに、其の外境王は陣を打ち破られければ、散走して去りて各本所に歸り、還來りて聚集して密に一人を遣はして五百群臣に諸らしむるらく、「我れ更に鬪戰せんも汝我と共に

【二二】 阿難陀不レ離レ佛前生因緣譚の二。
【二三】 阿吒。gad-rgyung-can(ガ ヂャン チャン)、「大笑を持つ」義。
【二四】 杖瓶。bum-gyi-dbyug-gu-can(ブム ギイ チュク グ ウ チャン)、「壺の杖を持つ」義。

て彼池中に入り、心に怖畏するなくして遊戯歡樂せり。其の滿面は五百の鵝衆と共に虛空中に在り、時に一鵝あり滿面に報じて言はく、「我等可しく下りて此池中に入るべきや不や」。答へて言はく、「我れ且らく無熱池中に往いて王位を紹ぎ已り、然して後可しく來りて此に於て遊戯すべし」。當に卽ち速疾に無熱池中に往きて卽ち王位を紹ぎ、還來して波羅痆斯池中に至りて遊戯せり。時に池邊の諸人は鵝の端正無畏に遊戯せるを見て皆怪愕を生ずらく、「人の樂ひ見んとする所、鵝中の王たり、何處より來りて此池中に至れる、身體の莊嚴は其池の諸鳥の比する者あることなく、人皆之を愛し、無畏にして住し池に在りて遊戯せり」と。時に波羅痆斯の衆人聞き已りて倶に來り、皆池邊に往いて觀望し看視して住せり。其國の臣佐は大王に白して言さく、「知らず、何の方よりしてなるかを、妙色の鵝王あり無量百千の諸鵝圍繞せると共に彼池中に在り、身色端正にして自餘の諸鳥に勝れ、〔三〕人愛して足せず、無畏にして住せり。時に王は諸大臣に告げて言はく、「若し當に此の如からんには捕獵師を喚び來れ」。大臣、勅に依ひ卽ちに喚びて集め來りしに、王言はく、「聞くならく、我が池中に勝妙の鵝王ありて至り、人の樂見する所、知らず、何の方よりして來れるかを。汝等可しく方便を作して四面に圍繞し、繫縛して將來せよ、彼が身體肢節を損せしむるなくして將來して我に見えしめよ」。其捕獵人は命に依ひて卽ち去り、巧に方便を作し緩緩として繫縛し已れり。時に鵝王は解脫するを得ざるを的知して諸の群鵝に告ぐらく、「汝等速に無熱池中に往け」。五百群鵝は皆悉く走散せるに、唯一鵝あり涕淚して住せり。時に採捕人は彼の一鵝の、繫縛せられざるに鵝王邊に在りて啼泣して住せるを見て、心に怪愕を生じて告げて言はく、「我れ王勅を懼れて汝が身を繫縛せるなれば、汝啼哭すること莫れ、我れ汝を殺さざれば」。卽ち此鵝王を將へて波羅痆斯王邊に往けるに、傍邊の一鵝は縛せられざりしと雖、心に相愛念して亦後に隨ひて去れり。將に王邊に到るに王は獵人に告ぐらく、「繫らざる鵝は何に因りてか而し來れる」。其の採捕人は大王に白して言さく、

【三】人愛不足とあり、愛し切れざる意、卽ち大に愛樂する意なり。

と名け十號具足せるが、波羅痆斯仙人墮處施鹿林中に住したまひき。是時此象は彼法中に於て出家せるに、持戒すること堅固なること能はず、復貴重せず、虧缺する所ありしも、常に四事を以て衆僧に供給して善根を成就せりければ、所生の處には食飲充足し、我に見えては正法もて心に歡喜を生ぜるに、便ち卽ち命終して四天王宮に生ずるを得たりき。復、迦攝波佛の時に在りて出家して四諦の緣起蘊處等の法を讀誦せるが爲に、彼三業に善根を修集せるに由り、今天に生ずるを得、復我に遇ふを得て眞諦を證獲せるなり。是の如く苾芻、若し白業を修せんに……餘に廣く說けるが如し……」。爾の時諸苾芻等は心に疑惑を生じ、佛能く疑を斷じたまへば、佛に白して言さく、[16]「世尊、彼の護財醉象當に來りて佛を害せんとせる時、云何が諸の聲聞衆は皆悉く遠く走げ、唯阿難陀一人のみは如來を離れまつらざりし」。佛言はく、「汝等諦に聽け、但に今時のみには非じ、過往昔に於て[17]阿那婆達多河邊に一鵝王あり、名けて[18]提頭賴吒と曰ひ、二子ありて一は[19]滿と名け二は[20]滿面と名け、滿は大兒にして滿面は小兒なりき。其の、滿と名けたるは性行極剛獰惡にして常に欺を行じて打ち、種々に自餘の諸鵝を惱亂せり。時に諸鵝等は毎に來りて鵝王に諮白すらく、「汝が子は咕きつゝ我を啄き打てり」。鵝王は便ち是念を作さく、「彼れ旣にして麁惡獰性なり、若し太子位に安立せんに、我れ死に已れる後は必ず諸鵝を損殺せん、我れ今須らく方便を作すべし」。卽ち二子の滿及び滿面を喚びて告げて言はく、「汝等可しく能く往いて諸池の、鵝あるの處に詣りて撿行すべし、若し先に來れる者に我れ卽ち王位を與へん」。時に鵝王子は意に競ひて各五百鵝衆と將に諸方に往き、東西に遊行して遍く池水を觀ぜり。諸鵝は漸く行いて波羅痆斯に至りしに、彼時中に於て一國王あり名けて梵德と曰ひ、正しく王位に住せるに其國の人民熾盛にして安隱豐熟せり。城を去ること遠からざるに妙花池あり、淸流最勝にして諸の雜色の蓮花ありて其上を覆へり。其池の四邊に亦千花菓樹あり、亦雜類の諸鳥ありて翔集せり。時に鵝王の子の滿と名けたるは、五百鵝衆と共に下り來り

【一六】阿難不ㇾ離ㇾ佛前生因緣譚の一。

【一七】阿那婆達多河。後に無熱池とせる故に Anavatapta 池なり。

【一八】提頭賴吒。yul-ḥkhor-skyoṅ（ユル・コール・チョン）、「國土を守る」義、Dhṛtarāṣṭra なり。

【一九】滿子。gaṅ-ba「滿つる」義。

【二〇】滿面子。bžin-rgyas（シン・ヂエ）、「擴大せる顏」の義。

我れ大師を禮して瓔珞を垂れ　　佛足を頂禮して心に歡喜し
右繞三匝して還歸せんと欲し　　身を騰げて卽ち天宮上に往かん」。

爾の時彼天は商人の利を得たるが如く、農夫の豐熟を得たるが如く、壯士の敵と鬪ひて勝を得たるが如く、病人の差ゆるを得たるが如くにして、所將の諸天の下りて供養し已るに、還與に相隨ひて天上に歸れり。時に林中に諸苾芻あり、初夜に於て念誦し經行せるに、大光明の遍く林野を照せるを見て心に怯愕を生じ、佛所に來詣して而し佛に白して言さく、「世尊、昨、夜分に於て是れ何の因緣にてか釋梵諸天は世尊所に下れるなる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「此れ釋梵諸天の我所に來れるには非じ。復次に諸苾芻、汝曾て護財大象を見たりや不や。此の如きの獰惡もて奔逸して來りて我を殺さんと欲せるを」。時に苾芻等は倶に佛に白して言さく、「我等悉く見たり」。佛言はく、「我れ已に誨示せるに、彼れ我所に於て正信心を生じ歡喜を起せるが故に、便ち卽ち命終して四天王宮に生まるゝを得、共夜に我所に來詣せりければ、彼が爲に法を說けるに見諦を證するを得て本宮に却き歸れるなり」。諸苾芻等は心に疑惑を生じ、唯佛のみ能く斷ちたまへば、佛に白して言さく、(一五)「世尊、彼の護財象は何の罪業を作してか傍生趣に墮し、復何の業を作してか四天王宮に生ずるを得、及び諦を見るを得たるなる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の護財象は先に集めたる業報にて今自らに擔負せること、暴流の水の如くに必ず當に之を受くべかりしなり。此の護財は自ら作して自らに受け、他人の受くるには非ざるなり」。復諸苾芻に告げたまはく、『所作の業は地水火風の、彼が爲に之を受くるなく、亦蘊處界善非善事に(受くるにも)非じ。而ち頌を說いて曰はん、

「假令、百劫を經んとも　　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　　果報は還自らに受けん」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「過去世の時、賢劫中人壽二萬歲に於て佛出世したまふあり、迦攝波

【一五】護財象前生因緣譚。

其象は佛出城したまへるを見て面前に世尊を見まつらざりければ、其象は脚を以て鼻を踏み、氣息通ぜざら(しめ)て悶絶して死に、當に四天王衆天に生じぬ。天法として當に天に生ぜるには、三種の念ありて起るなり、「何處より滅し、何處に生在し、是れ何の業報にてなりや」と。當に自身を觀ずらく、「象中より死に已るに、此の清淨四天大王中に生在し、前生に佛所に於て歡喜心を發せるが爲なり。我れ今此に在りて歡樂して如來所に往かざらんには甚だ道理に非じ。我れ先に須らく諸天の圍繞せると共に此來所に詣るべきなり」。其象、天に生ずるや身に百寶の莊嚴ありて清淨の身は内外に明徹せりければ、其夜に卽ち衣裓に衆の妙花を盛りて如來所竹林園中に往けるに、其光遍く照らして晝日に勝れり。時に衆の寶花を以て佛身の上に散じ、卽ち前に於て坐して佛の說法を聽かんとせり。世尊は觀察したまひて、樂ひ聽かんとする所に隨うて而し應じて法を說きたまひしに、其天は聞き已るに慧金剛の杵を以て二十種我見の煩惱の山を摧破して卽ち預流果を證せり。[四]既にして果を證し已るに心大に喜悅して佛に白して言さく、「世尊、父・母の能く此事を作すなく、王の能く作すなく、天の能く作すなく、親にてもなく、友にてもなく、亦過去の魂靈にてもなく、沙門婆羅門(の能く此事を作せる)にてもなし。諸の血海を枯らし、唯佛のみ能く我が苦惱海を斷じ、煩惱の山を超え、惡趣の門を閉ぢて人天勝妙の處に安置したまへり」。卽ち頌を說いて曰はく、

「佛に因りて惡趣の門を閉塞し　三塗の中多く損害して
今蒙けて人天の路を開闢し　復、微妙涅槃の城を證せり
佛に因りて衆の惡業を斷除し　患翳の目も清淨を得
能く寂滅聖賢の道を證し　有流衆苦の處を超過せり
一切人天の所應供にてましまし　能く生老病死の苦を除きたまふ
百千生にも逢遇せざるに　果報にも今時佛に見ゆるを得たり

【四】既證果已心大喜悅白佛言世尊無父無母能作此事、無王能作、無天能作、無親無友亦、無過去魂靈、無沙門婆羅門枯諸血海、唯佛能斷我苦惱海、超煩惱山閉惡趣門、安置人天勝妙之處……とあり。過去魂靈なる譯語の如きは義淨譯にあらざるべし。

き。其象は醉醒めて羸弱して佛所に來詣せるに、世尊は即ち百寶莊嚴の輞輪相無畏の手を以て其象頭を摩し、無畏施を行して即ち頌を說いて曰はく、

「象身處を樂ふこと莫れ　象趣は是れ惡趣なり
當に他を損害すること莫れ　即ち賢聖の道を得ん
汝、前身の業の爲に　故生じて惡趣に在り
諸の有情を損害して　是を將つて歡樂と爲せり
此より死に已りての後は　當に何處に生在し
復何邊に住在せんとするぞ　賢首、汝善く聽け
諸行は是れ無常なり　諸法は是れ無我なり
寂靜は是れ涅槃なり　我に於て心に信を生ぜよ」。

爾の時世尊は即ち長者家に往いて座を敷いて坐したまへるに、其の護財象は佛後に隨ひて行き、佛が長者家に在せしには其象は門外に立てるに、佛を見ざるが爲の故に即ち門屋を推し倒さんと欲せしければ、佛は神力を以て其宅舍を變じて化して水精と爲し、內外相照して遙に佛に見えしめたまへり。世尊は食し竟るに、施頌を說き已りて座よりして去りたまひしに、其象は佛後に隨ひて行りぬ。其國の大臣は……具に上に說けるが如くに大王に啓白せるに、王は此事を聞くや轉じて提婆達多に告ぐらく、〔三〕「汝大に我を損せり、其象去り已らんには、隣境の國王にして聞かんには必ず怨敵を起さん、汝大不たりき」。是時提婆達多は訶責せられ已るに嘿然して住せり。王は諸臣に勅して言はく、「若し佛出でたまはん後は、當に即ち城門を關閉すべし、象をして城外に出さしむること莫く、佛後に隨ひ去らしむること勿れ」。大臣は勅に依ひて守城門人に報じ、及び調象人に語ぐらく、「繫提して象を取へ、佛後に隨ひ去かしむること莫れ」。命に依ひて即ち象を捉へんと欲せるに、

【三】汝大損我其象去已隣境國王聞者必起怨敵汝大不とあり。大不は大非の義なり。

已るに、(許)を得て卽ち去り調象人に語げて曰はく、「我れ已に王に白せり、汝可しく明日象を將ゐ出すべし」。時に調象人は鈴を持して撃ち城中の人に聲告すらく、「明日、護財象を放たん、汝等自ら當に防護すべし」。時に彼長者は此事を聞き已りて心に愁惱を生じて自ら嘆ずらく、「我は是れ薄福の人なり、今世尊及び苾芻衆に家に過りて供を設けんことを請ぜるに、此事起るありて惡象を放ち出さんには、若偽が齋を設けん」。復是念を作さく、「我れ今須らく飲食を造り、熟し已るに將ちて佛所に往くべし」。其夜に卽ち飲食を辦じ、明旦に世尊所に向ひて佛に白して言さく、『王舍城中に鈴を撃ちて人に告げぬ、「護財惡象を放たんと欲すれば各自ら防護せよ」と。今者世尊は城に入り來りたまふこと莫らんことを、所造の飲食は將つて此に就らんと欲すれば』。佛、長者に告げたまはく、「汝可しく作辦すべし、我れ今護財惡象を怕れざれば、我は聲聞衆と共に同じく來いて王舍城に入らん」。長者聞き已るに歡喜して卽ち去り、家に至りて食を辦へ座を鋪設し已りて遙に世尊を望ぎぬ。爾の時如來は卽ち衣鉢を持して苾芻衆と共に王舍城に入りたまひしに、時の人卽ち護財象を放ちぬ。時に象は佛并に諸の徒衆を見て卽ち瞋怒を生じ、速に走りて如來の邊に往けるに、其の提婆達多は未生怨王と共に高樓の頭に上りて遙に惡象の沙門喬答摩を踏まんと欲せるを望み、提婆達多は甚だ大に喜悅せり。卽ち頌を說いて曰はく、

「我れ十力者を見るに
象力のために踏まれん
聲聞釋種子は
今日應に消盡すべけん」。

爾の時世尊は右手を以て五師子を化作したまひしに、時に象は師子を見已るや、當時忙怕して大便を失し、奔走して去りぬ。世尊は又大火を放ちて諸方熾熱せしめ、唯佛住所の足下のみ涼冷ならしめたまひき。其の護財惡象は東西に遊走しては唯熱火に逢へるに、世尊の住處にては清淨涼冷なりき。當に惡象を見て諸の聲聞等は皆悉く迸散して遠く走げしに、唯阿難陀一人は佛邊を離れざり

るのみ』。時に彼の婆羅門は乃し怨惡を生じて瞋恚し、此より卽ち怨害の心を生ぜり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「爾の時の後に來りて求乞して女を得たる婆羅門とは卽ち是れ我身是れなり、其の先に來れる婆羅門にして星宿の穩便なるを看たる者とは卽ち是れ提婆達多是なりしなり」。

時に佛世尊は王舍城竹林園中に在しき。時に未生怨王に一大象あり、名けて〔三〕護財と曰ひ、極大獰惡にして性躁しく、常に醉ひては日每に人を損じければ、諸人皆怖れて敢へて門を出でざりき。時に王舍城人は悉く來りて王に白さく、『其の護財象は極大獰惡にして、日每に屋を出でゝ坊市に往き、四道街衢にて衆人を損害すれば、王當に看象の人に處分したまはんことを、「日每に屋を出でしむる莫れ、須らく日を隔てゝ出すべし、若し之を出さん時は預じめ鐘皷を打ちて人をして藏避せしめよ」と』。王告げて言はく、「好し」。卽ち大臣に勅して看象人を喚び來らしめ、使人、命に依りて喚び來るに告げて言はく、『王舍城中の諸人衆は來りて我に白せり、「護財大象は獰惡にして諸人を損害せり」と。汝當に日を隔てゝ出し、若し之を出さん時は預じめ鐘皷を撃ちて象の出づるを告聲すべし』。時に調象人等は大王を再拜し已るに、勅に依ひて卽ち去りぬ。其の王舍城中に一長者あり、大に財物ありて多く受用ありしが、心を發して佛及び苾芻僧を請ぜり。時に提婆達多は長者が明日佛并に衆を請じて齋を設けんとすと聞き、卽ち百千の珍寶を持して調象人に與へて告げて言はく、「長者あり明日喬答摩沙門并に聲聞徒衆を請ぜんとす、汝可しく護財惡象を將ゐて面に當りて之を放ち喬答摩沙門を踐踏せしむべし」。答へて言はく、『聖者、命に依はんこと是の如し。又須らく王をして之を知らしむべし、「我等命に依はん」と』。時に提婆達多は卽ち未生怨王所に詣りて白して言さく、「汝、我を立てゝ佛と爲すこと能はざるも、爲に汝、父を殺して今王位を得たり、我れ今佛を殺却して自ら一切智に立たんとす、大王、可しく護財象をして出さしめよ」。時に未生怨王は提婆達多に告げて言はく、「汝聞かざらんや、諸佛世尊は未だ調はざる者を能く調伏せしめたまふを」。說き

〔三〕護財。「猛惡の象、護財」の義、Dhanapāla なり。

れば、既にして財物を分たんには當に須らく倆が弟を殺却すべし」。其夫聞き已るに、凡夫の人は財物を貪るが爲に造罪せざるなければ、卽ち方計を作して其弟に報じて曰はく、「今者可しく共に往いて山中に入り花果を採取すべし」。山中に至るに兄は大石を取りて弟が頭を打ち碎き、因りて卽ち命終せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「兄とは卽ち是れ提婆達多なり、弟とは卽ち是れ我身なりしなり。彼時中に於ても乃し怨惡を生ぜしなり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、[一]『我れ更に提婆達多が我と共に怨惡を作せる緣起を說かん。往昔に於て曠野中に一大村あり、一居士あり同族姓家より婚して一女を娶りて歡樂遊戲を作し、後の時一子を懷姙し月滿ち已るに後に便ち一女を生めり。形貌端嚴にして人の愛樂する所なりければ、居士曰はく、「人あり先に來りて我より乞はんには、我れ當に女を與ふべし」。時に一婆羅門ありて來り乞はんとて口に、「病なきや」と云ひければ、居士告げて言はく、「我に一女あり、奉賞して汝に與へん」。時に婆羅門曰はく、「我れ時候日星を占ふに是れ穩便に非ざれば我れ今受けじ、後時に日星穩便なるを待ちて我れ當に來りて取るべし」。此語を說き已るに便ち卽ち退き去れり。別に一時あり、復婆羅門あり求乞せんが爲の故に還彼家に至りて口に「病なきや、我が與に物を乞へんことを」。答へて言はく、「我に一女あり、奉賞して汝に與へん」。報じて言はく、「先に一婆羅門ありて來り乞へる時、何ぞ女を與へざりし」。居士答へて言はく、『彼れ星宿(穩)便ならざりし爲に口に云へり、「星宿穩便ならんに便ち來りて此女を取らん」と』。時に婆羅門言はく、「我れ此女を受けん」。問うて曰はく、「何が星宿の相宜しきを看ずして卽ちに受くるなる」。時に婆羅門は便ち頌を爲りて卽ち此女を受け、女を受得し已るに卽ち便ち歸還せり。先に來り乞へる者、別に人ありて來りて女を乞ひ去れりと聞き、卽ち彼の婆羅門の所に來詣して告げて言はく、「此女は先に受得せるに、何に因りてか我女を將りて歸り來れる」。答へて曰はく、「汝は星の是れ穩便に非ざるを瞻たるが爲に此女を取らざりしも、我は星宿の穩便を看ざれば遂に此女を取れ

【一】世尊與二提婆一有二怨惡一前生因緣譚の五。

佛、諸苾芻等に告げたまはく、「汝が意に於て云何。其の白膠王の子の初王と曰へるは卽ち是が提婆達多なり、彼時中に於ける漁師の兒とは我身是れなりしたり。彼王の時よりして此の怨讎を起せるなり」。[八]世尊は復諸苾芻に告げたまはく、『汝等諦に聽け、昔時に曠野に一大村あり、其中に二巧兒ありて[九]別寶人と作り、其人各一鋪に坐して市易して相侵すを得ざりき。別の時に一識寶貧人あり、寶器を將して其所に來至して止息し、三五日の間、此の寶器を持てり。彼の一鋪人は其寶を買はんと欲せるも酬價極下なりき。時に彼貧人は賣與するを肯んぜず、更に將りて彼の別寶人邊に向ひしに酬價平和せりければ、卽ち歡喜を生じて報じて言はく、「汝可しく買取すべし」。鋪主答へて言はく、「我に爾許の錢財の買ふべきなし」。答へて曰はく、「日の所得に隨うて多少を我に與へよ」。其人聞き已りて卽ち便ち受取せるに、酬價少かりし者卽ち來りて共に爭うて云はく、「我れ先に此人の寶器を見たるに、汝今何に因りてか我が市易を奪へる」』。此より已去、遂に怨讎を至せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の酬價少かりし者とは卽ち是れ提婆達多なり、彼時中に於て酬價多かりし者とは卽ち是れ我身なりしなり。……乃至、今時も是の如くに結怨して惡意息まざりしなり」。復、[一〇]諸苾芻に告げたまはく、『往昔の日、曠野村中に一長者の居住せるあり、同族姓家より女を娶りて婚を爲し共に歡樂を爲せるに其妻娠あり、月滿ち已りて後便ち一子を生めるに母卽ち命終せり。長者便ち是念を作さく、「我れ更に妻を娶りて共に歡樂を爲さん」とて、妻を娶りて久しからざるに一子を誕生して母亦命終せり、長者便ち是念を作さく、「我れ亦妻を娶りて久しからずして還死にぬ、我れ長子の爲に索めて一女を娶らん」。當に卽ち女を娶りて遊戲して多く子孫を生ぜるに、其妻、夫に問ふらく、「……已にして次童子は是れ何人ぞや」。夫主答へて曰はく、「此は是れ我弟なり」。其妻復夫に問うて曰はく、「後に於て我が錢物を分ち已つるなりや不や」。夫曰はく、「世俗の事、皆合兄弟に分あるべきなり」。妻、夫に報じて曰はく、「若し當に是の如からんには、汝今兒子極めて多け

【八】世尊與二提婆一有二怨惡一前生因緣譚の三。
【九】別寶人。寶を識別する人。
【一〇】世尊與二提婆一有二怨惡一前生因緣譚の四。

て共に擒捉して食噉せるに、彼人便ち走脫するを得たりき。復是念を作さく、「我に親舅あり、見仙人所に在りて出家せり、我れ今可しく彼に往くべきなり」。其の仙所住の處は花菓園林滋茂し熾盛して、種々の鳥ありて和雅の音を出せり。時に漁師の兒は展轉尋問して乃し仙所に到れり。時に大王の使も諸處に尋訪して亦其中に到り、彼に於て漁師の兒を捉へ獲んとせりければ、便ち身を谷下に投ぜるに、空中に於て頭髻を捉へ得、髮は人手に入れるも身は谷底に墮ちぬ。時に王の使者は是思惟を作さく、「其人決んで死にたらん、其髮を執へ得たれば」。持して王所に向ひ大王に白さく、「今我れ已に漁師の兒を誅害し訖りぬ」。王大に歡喜して其使に賞賜せり。時に仙人所を護れる天は來りて仙に告げて言はく、「汝が外甥なる兒は今苦惱逼迫せるに何ぞ觀察せざる」。仙人報じて曰はく、「我れ若し擁護せざらんに、必ず定んで命終せん」。彼仙は能く男をして女と作し、女をして男と成すの、是の如きの明呪を持しければ、其仙は卽ち呪法を以て外甥を攝受して卽ち云はく、「汝、怖懼すること勿れ」。時に外甥は既にして仙人の攝受を得て便ち身を化して美女と爲り、相貌殊好にして特に常輪に異れり。卽ち波羅痆斯に往き王の園苑に於て而し住せるに、其守苑人は既にして美女を見て心に希有を生じ、速に王所に詣り大王に白して言さく、「今美貌にして成就せる少女ありて見に苑内に在り」。王は語を聞き已りて報じて曰はく、「宜しく速に將ゐ來るべし」。便ち卽ち大威儀の僕從を以てして迎へて王宮に入れぬ。時に王は彼の美女に於て深く愛著を生じ、愛著を生じ已るに、王の暫し離るゝを見て便ち女身を變じて丈夫と作り、卽ち王冠を戴きて[七]安地大臣を命びて曰はく、「我を冊して王と爲せ」。時に臣佐は大儀を以て著して冊立して王と爲せり。爾の時諸天は伽他を說いて曰はく、

「頭にして斷たざらんには害せりと爲さじ　復起ちて能く是の如きの業を作せばなり
隨宜に彼を損ぜんとも害せりとは名けじ　白膠王子を害せる者の如くなり」と』。

【七】安地大臣。藏文は前卷の註(三六)の宰牛大臣と原語を同じくせり。

師は既にして聞いて皆王所に來詣せり。時に王告げて言はく、「汝等、彼の龍宮に往いて龍を呪して將來せよ」。聞き已るに悉く去りぬ。別に曠野に於て一藥叉ありて[四]賓伽羅と名け、常に魚肉を以て食と爲せり。此藥叉が住處の樹木すら猶ほ枯れぬれば、況んや復人の存命するを見んをや。[五]龍王は諸呪師に呪せられ已るに、逼迫せられて彼を救はんとして得ざりければ、卽ち身力を以て漁師の兒を將ゐ、及び諸の呪師等は裹みて一服と爲し、將つて藥叉が住處なる曠野中に往いて安著せり。龍王は諸の呪師に告げて曰はく、「汝等が所作は是れ好事に非じ、彼の漁師の兒は藥叉のために害せられぬ、我等も亦之に損せられん」。呪師問うて曰はく、「何の方計をか作せる」。龍王答へて言はく、「汝等は無益の事もて我を惱亂し、我れ逼迫せられければ、漁師の兒を將ゐて曠野の中に置き、彼藥叉をして害する所たらしめぬ、汝等も亦益する所なけん」。時に諸の呪師は漸行して本國に歸るを得、大王に白して言さく、「我等は龍王を惱亂して逼迫して極めて困しめければ、遂に漁師の兒を深曠野中の賓伽羅藥叉に送りて食はれしめぬ」。時に王語げて言はく、「汝等大に好し、更に亦尋聽せよ。或は時れ未だ死なざらん」。時に漁師の兒は曠野に在りて東行し西行せるに、彼の賓伽羅藥叉は一方所に在りて諸の惡狗と共に一處に聚集せり。漁師の兒は遙に此狗を見て便ち是念を作さく、「我れ今決定して卽ち死なん」。其狗遙に彼人を見て復一狗に命じて往趁して捉取せしめければ、其人見已りて遠く走りて樹に上りしに狗は樹下に在りき。藥叉は後に隨ひて卽ち到りしに、藥叉告げて言はく、「彼れ聞かざるべけんや、賓伽羅人形藥叉は曠野の所に在り、若し人ありて此に來往せんには皆當に損害せんを。汝今時到れり、下り來れ」。其人答へて曰はく、「我れ盡命を以て此に在らん」。時に藥叉は[六]悉柰に住し衣服を纏結し身を繫りて住せり。時人計を作して走げんと欲し、卽ち樹下に往いて一方に向ひて走げゝれば、藥叉は狗と與に同じく走り趁へり。其人事急なりければ卽ち身衣を脫して藥叉の身上に擲げしに、遍く其體を覆ひければ群狗は是れ其人なりと謂ひ、衆し

【四】賓伽羅。gnod-sbyin-ser-skya(ノウ チン セル チエ)、「黃色所藥叉」の義、梵音Piṅgala なり。

【五】龍王被諸呪師呪已逼迫救彼不得卽以身力將漁師兒及諸呪師等裹爲一服將往藥叉住所曠野之中安著……とあり。

【六】悉柰。明本には忞柰とせり。本文に時藥叉住於悉柰纏結衣服繫身而住時人欲作計走卽往樹下向一方走……とあり。悉柰の梵名明からず、sindi 樹の音譯に非ざるか。藏文には「藥叉は兒を引きさらんとて止まり住し、雜草をむしりとり、その上に衣服を投げかけぬ」とありて明了ならず。

るに即ち起ちて走げぬ。近くに一人あり林中に於て花菓を採取せるが、遙に此人の死人中より忽ち起ちて走れるを見たりければ、採菓の人は後に隨ひて即ち趁ひ、遠からずして便ち止まりしに、王使は後に隨ひて即ち到りて採菓人に問ふらく、「汝、一人の是の如きの形容せるを見たりや不や」。其人答へて曰はく、「纔に見たり、此路よりして去れるを」。即ち速に趁ひ捉へんとせるに、其漁師の兒は忙怕として一浣衣人家に入りぬ。其家にては衣裳を以て重ね裹みて驢上に駄し、人處を遠離して河邊に解放せるに、其漁師の兒は起立して四方を觀察し、無人の處を遠望して便ち即ち速に走げぬ。路に逢へる一人は、其の、路を疾走せる兒を見て王の訪者に赴き、王使尋いで復村中に到りて其所を括訪せるに、見者は報じて曰はく、「此よりして走り過ぎぬ」。時人使のために趁ひ急かれて復一の皮を治して靴を作る家に投じ、而し彼家人に一々具に言へるらく、「王のために逼迫せられて今、我を殺さんと欲せり……等、廣く上に說けるが如し……」。復彼家人に告げて言はく、「願はくは慈愍の故に、我が爲に一量の鞋の、鞋跟は前に向ひ鞋頭は後に向へるを作らんことを。若し跡を尋ねん者あらんも、人の我が去處を知るなければ」。靴師答へて言はく、「我れ先に未だ曾て此の如きの鞋を作りしことあらじ」とて、即ち頌を說いて曰はく、

「曾て種々の靴形狀を見たり　　彼が尺樣に隨ひて便ち爲に作れるに
未だ此の如くして造れる靴鞋あらざりき　　跟をして前に向はし鼻は後に居せるを」。

時に彼の靴師は言に依ひて即ち作しければ、鞋を著して走り出でしに、村牆既にして高くして踰え過ぎんに處なかりければ、即ち水竇中よりして出でぬ。時に王使は其脚跡を尋ねて乃し靴師の家處に入れるを見ぬ。其の漁師の子は情に怖懼を懷き、身を投じて水に入りしに、龍王は見已りて將ゐて宮中に入りぬ。爾の時大王は展轉して「漁師の子は身を投じて水に入りて龍宮内に在り」と說くを聞き、王は諸臣に勅せらく、「我が國内に於ける所有持呪の人は悉く喚びて將來せよ」。時に諸呪

卷の第十九

（提婆の僧伽破壞）（承前）

［一］『是時太子は旣にして位に登り已りて諸群臣に告げて曰はく、「汝等は達摩を殺却せよ」。時に宰牛大臣は大王に白して言さく、「觀察を作さず、事なきに何の故にか卽ち達摩を殺さんとするなる。身現に懷姙せり、未だ審かならず、男を生むなるか或は是れ女を生むなるかを。若し男を生みたらん時こそ、方に可しく殺却すべけれ」。時に王、大臣に答へて言はく、「是の如きも亦得ん、汝當に自ら看るべし」。時に達摩は月滿ち已りて後卽ち一男を生めるに、其の同日時に一採魚師の婦ありて乃し一女を生みければ、漁師に錢物を與へて男を將つて女に換へ、其大臣は卽ちに王に白して言さく、「達摩は一女を生めり」。王曰はく、「大に好し、我れ解脫するを得たり」。後の時漁師は其子を養育して漸漸に長大し、學に入りて書を讀ましめしに、乃し綴文を能くして巧に辭章を作しければ、時に乃ち立てゝ［二］巧作文章と名けぬ。大臣、私に來りて達摩に告げて言はく、「汝が子今大に辭章を巧作せり」。達摩は復大臣に白して言さく、「今、形貌を見んことを欲願す、方便して將來せんことを」。大臣答へて言さく、「何ぞ更に見るを須ゐん、須らく之を看るべからず」。時に大臣は彼の其子を愛戀せるを見て、爲に方便を作して子をして手に一魚を持ち、賣魚人の形を作して、卽ち母所に往かしめしに、其母遙に見たりき。（時に）相師占うて曰はく、「此の持魚人は必ず當に我王を殺して自ら王位に住すべけん」。其語遞に相告言して轉々として乃し王所に至りければ、王は此語を聞いて諸群臣に告ぐらく、「乃し可しく速に卽ち漁師の子を捉取すべし、逃逸せしむること莫れ」。［三］其語、轉々として漁師の子聞き已るに、卽ち東走して避けて乃し一老婆家に入りぬ。其老婆は見已るに深處に藏隱し、大黃を以て身に塗りて色は死人形の如くし、人舉きて深摩舍那所に將ゐ往いて林所に安著せ

［一］世尊與₂提婆₁有₂怨₁前生因緣譚の二（承前）。

［二］巧作文章。[illegible]-mkhan（ニヌン ンガク クローン）、「詩に精通せるもの」ゝ義。

［三］本文に其語轉聞漁師子聞已、卽東走而避乃入一老婆家其老婆見已將藏深處以大黃塗身色如死人形人輿將往深摩舍那之所、安著林處卽起而走とあり。傍線せる十六字は明本に缺く。

月滿ち已りて後便ち一子を生めるに、形貌端嚴にして人の樂見する所なりき。親族聚會して子の爲に諸臣を召びて議り論ぶるらく、「彼は日の初出時に其孩子を生めるが爲に、故に號して[三六]初と名けん」。八乳母に付して孩子を侍養し……廣く前に說けるが如し。是の如くして將養するに諸の乳・酪・生酥・醍醐等を用ひければ、其子は蓮華の水に在るが如くに速疾に長大し、後に學に入らしめて其に文字・曆數・算計・種種の技藝・工巧の法・乘象の事・弓弩箭射等の法・王法の事を敎へしに皆悉く明解せり。後の時老王は立てゝ太子と爲せり。老王には先に一[三七]上宮王妃あり名けて達摩と曰へり。復一大臣ありて名けて[三八]宰牛と曰ひ、老王は甚だ大に性愛して其臣に倚付せり。時に王は上宮と共に遊戲して後の時に懷妊せるに、相師之を占ふらく、「必ず一子を生まん、當に定んで王を殺して自ら王位を取るべし」。後の時王患ひしに、諸の根・苗葉花果の種種藥草を用ひて、醫療せるも病を除す能はざりければ、大王は便ち是念を作さく、「今須らく太子を建立して王位に安住せしむべきも我れ若し死なん後、太子は必ず我が上宮を殺さん」。復是念を作さく、「我れ何の計校をか作すべき」。卽ち大臣を喚びて平章し、多く受用の資具財物を與へ便ち達摩を寄ねて臣邊に分付し、其をして覆護せしめて告げて言はく、「汝は是れ我が親近の大臣なり、其の達摩夫人は是れ我が親近の夫人なり。我れ今自ら身決定して死なんを知りぬれば、若し死に已りて後太子正に位に住せん時、汝應に慈念して須らく擁護して達摩夫人を殺却せしむる莫れ」。臣、王に白して言さく、「我れ作して是の如くせん、必ず達摩夫人を殺さしめじ」。王卽ち頌を說いて言はく、

「積聚せるは皆消散し　　崇高なるは必ず墮落し
合會せるは終に別離し　　命あるは咸く死に歸せん」。

此頌を說き已るに卽ち便ち命終せり。諸の牖華寶塔を作りて王を殯すること已にして了るに、便ち太子を建立して大王と爲せり」。

【三六】初王。ñi-maḥi mu-khyed(ニイ マ、イ ム チエ)、「太陽の環(圈)」の義。

【三七】上宮王妃。藏文に「後宮人の最勝なるは法を具する(chos-ldan)と名けられぬ」とせり。

【三八】宰牛。Phyugs-hdug(チユーク ドウク)、「飼はれ留まる」義。

とは提婆達多是れなりしなり。此時中に於ても非是に而し說き、無羞に而し說けるなり」。爾の時諸苾芻は心に疑惑を生じ……「唯願はくは廣く因緣を說きたまはんことを、[三二]世尊が提婆達多と共に宿世以來何に因りてか惡あるかを」。爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、『汝等諦に聽け、乃往昔時に此海邊に近く[三三]一共命鳥あり、一身兩頭なりしが一鳥を法と名け、一を非法と名けぬ。其の非法鳥は當時眠睡して法鳥は眠覺めしに、流水の上に一甘果あり流に逐ひて來りければ、觜を以て之を取り是念を作さく、「彼れ既にして睡眠せるも、我れ今睡を喚び覺まして共に食はんと欲すとやせん、復自らのみにて食ふとやせん」。復是念を作さく、「同一身たれば我れ若し食し已らんに彼も亦飽くを得ん」。卽ち便ち之を食へり。後の時非法は睡覺め已りしに、法(鳥)に異あるを見、復香氣を聞きて恠みて問うて曰はく、「是れ何の香氣なる」。答へて曰はく、「我れ甘果を食ひたればなり」。復問うらく、「菓今何にか在る」。報じて言はく、「非法、汝は睡眠せるが爲に此れ已に食ひ訖れり」。答へて曰はく、「汝が所作の如くんば是れ好に非じ、我自ら時を知らん」。後の時法鳥眠睡せる次、非法は一毒果の水上を流るゝを見たりければ、觜を引べて往いて取りて之を食へるに、二倶に迷悶し心狂ひて昏亂せり。爾の時非法は卽ち誓言を設くらく、「當來所生の處、生生世世に汝と共に相害して常に共に怨とならんことを」。時に法(鳥)答へて曰はく、「願はくは我れ生生世世に常に汝と共に善友たらんことを」と』。爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、『汝が意に云何。時の法鳥とは卽ち我身是れなり、非法(鳥)とは卽ち提婆達多是れなり。彼時中に於て始めて怨結を生じ、我れ常に利益の心を行ぜるも、天授は常に損害の意を懷けるなり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、[三四]『乃往過去に婆羅痆斯に於て王あり、名けて[三五]白膠香と曰ひ、其國を統化せるに其國豐熟して人民熾盛に皆安樂を得たりき。彼國界に近く一王女あり、共に婚娶を爲して娛樂遊戲し此に住して歡樂せり。後の時懷妊して乃し一女を生み、其女漸漸長大せるに乃し復娠あり、

【三二】世尊與₂提婆₁有₂怨惡₁前生因緣譚の一。

【三三】共命鳥。律部二十三、註(一五の一一)參照。

【三四】世尊與₂提婆₁有₂怨惡₁前生因緣譚の二。

【三五】白膠香王。rgyal-po sm-rtsi-ldan (ギャル ポサフ イ ダン)、「烏糖を持つ王」義、律部二十三、註(一一の三三)參照。

聲鳴は最勝妙なり　　汝の來りて食を取るに任さん」。
時に烏は樹を下り彼野犴と共に同じく死人を食へるに、彼仙人は見已りて還頌を作して曰はく、
「多時に汝等を見るに　　共に無羞者なるべし
樹中にては最上音なるに　　食する所は人中の賤ならんとは」。
老烏は此語を聞き已るに復頌を以て答へて曰はく、
「獅子・孔雀の飡は　　共に最上の者を食へり
禿人此に來らんも　　儞が何物の事にか關らん」。
爾の時仙人は瞋り已りて還頌を以て答へて曰はく、
「老烏は鳥中の卑　　野犴は獸中の賤
梗麻は樹に堪えず　　黃門は人中の下
地中の[三〇]三角醜し　　此の羞を識らざるを看よ」。
時に老烏は大瞋心を起して卽ち仙人の祭火壇中に往き、四邊を觀望して損すべき處なかりければ、糞を以て其壇中を汚し、水瓶を撥ひ破りて便ち卽ち走り去りぬ。時に彼仙人は歸り來りしに、唯祭火壇中に糞穢不淨にして水瓶は撥ひて打破られたるを見たりければ、仙人觀察して乃し是れ烏の糞穢し及び水瓶を打ち破れるを知り、卽ち頌を說いて曰はく、
「彼の如きは獰惡の物　　無羞多瞋の者なり
我が祭火壇を壞し　　復水瓶を打ち碎けり
是類は非是の類なり　　一切共に言ふ莫れ
[三一]應に言ふべきにも共に說く少かれ　　無言は最安樂なり」と』。
爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、「汝が意に云何、爾の時の仙人とは卽ち我身是れなり、老烏

【三〇】本文に地中三角醜、看此不識羞とあり。藏文には「地の賤の三角なり」とあり。老烏と野犴と黃門の醜相をいへるものなるべし。

【三一】本文には應言少共說とあり。

は」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「[二四]孤洳里迦は往昔の時亦復卽ち無羞恥の事を說けり、汝等諦に聽け。[二五]如し往昔の時王舍城に於て王あり、先に勅條を立てゝ王に事ふる人をして兩摩舍那の、一は丈夫を著れ、一は婦人を著るゝ(屍林)に、丈夫の屍林には女婦を著き、女婦の屍林には丈夫を著かしめぬ。爾の時、後に一[二六]黃門の死にたるあり、將ゐて深摩舍那に往けるに、其丈夫屍林の守人は著るゝを放さしめず、其婦女屍林も亦著るゝを聽さゞりければ二俱に處なかりき。王舍城に於て遠からざるに一林所あり、花樹林果茂盛して愛すべく、諸の雜鳥ありて和雅の音を出せり。一仙人あり其中に居止し、根果を食と爲し淸泉水を飮み樹皮衣を被たり。彼方所に近き耕地の處に[二七]梗麻樹あり、其人は此死屍を將りて梗麻樹の下に置けり。時に野犴あり死屍の臭を聞き、氣を尋ねて來りて卽ち死人を食へるに、一老烏あり梗麻樹上に在りて藏隱して住せるが便ち自ら思惟すらく、「我れ今好く野犴を讃ぜんに、彼れ應に我に少多の飡食を與ふべけん」。老烏は頌を以て讃じて曰はく、

「汝が胸は獅子の如く　　腰は復牛王は似たり
我れ獸中の王を禮せん　　我に食飡を與へんには」。

爾の時野犴は遍く觀察し已りて頌を以て答へて曰はく、

[二八]「誰ぞ叢上樹に居せるは　　後生中の最勝よ
身色は諸處を照らして　　寶作せる一團の如し」。

老烏は又頌を以て讃じて曰はく、

[二九]「我れ多く用具あるも　　故に汝に見えんが爲に來れり
我れ今獸王を禮す　　殘食あらんに我に與へよ」。

野犴は還頌を以て答へて曰はく、

「汝が項は孔雀の如し　　烏鳥甚だ愛すべし

【二四】　孤洳里迦無羞耻前生因緣譚。

【二五】　兩摩舍那。如往昔之時於王舍城有王先立勅條令事王人置兩摩舍那一著丈夫一著婦人丈夫屍林著女婦、女婦屍林著丈夫……とあり。兩摩舍那とは兩深摩舍那、卽ち二つの墓地なり。深摩舍那は śmaśā-na の音譯なり。

【二六】　黃門。非男非女なり、律部八、註(一の一八四)參照。

【二七】　梗麻樹。gin e-raṇ-ḍa (eraṇḍaの木)、卽ち伊蘭樹なり。

【二八】　叢上樹。藏文に「鳥の最勝鳥よ、樹の最も先尖に棲れるは誰なりや」とあり。本文に後生中最勝とあるは、藏文にあるに「鳥生中の最勝鳥よ」との義なり。

【二九】　本文に「我多有用具、故爲見汝來……」とあり。藏文に我多有用具に相應する語なし。卽ち「大幸運に會はんが爲に汝がもとに我は來れり、獸王なる汝に敬禮す、食する所の殘食を慈悲もて與へんことを」とあり。

て會を設けて名を立んとし、之に[二〇]喜樂と字けぬ。長成し已るに或は時に經行し或は時に坐臥して、常に善事を思ひ常に善業を行じければ、時に彼村人は彼喜樂を見て號して[二一]法愛と名けぬ。謂めて善を求めんが故に、時時に往いて仙人所に詣り承事供養せりければ、衆人は彼が仙人の勤修して諫行せるを愛樂せるを見て、復其名を號して以て[二二]練行と爲せり。後の時に當りて彼長者子は身に毒瘡を患ひ、種種の藥及び諸の呪法を以て療治せるも差えざりければ、然く其父母は子を將ゐて共に往いて仙人所に詣り、白して言さく、「仙人の侍者は今瘡を患ひて極困せり、當に願はくは療治したまはんことを」。時に彼仙人は卽ち[二三]實語を作して發願すらく、「今此長者子は親に於て怨に於て、皆平等を生じて異心あることなし、若し是れ實言ならんに毒當に除愈すべけんことを」。此願を發し已るに毒瘡は當時卽ちに除愈するを得たり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝が意に云何、爾の時の長者子とは卽ち我身是れなり、時の仙人とは卽ち十力大迦葉の身是れなりしなり。彼時中に於て眞實願を發せるが爲の故に、病除愈するを得たりしに、今時も亦復是の如くなりき」。時に提婆達多は意に悔過を生ずらく、「我れ喬答摩沙門に於て石を以て擊打せるも、損害する能はず事に於て益なかりければ、衆人皆知りて虛しく惡名を獲たり」。其の提婆達多は卽ち樹下に於て結跏趺坐して諦に自ら思惟せるに、時に諸苾芻は提婆達多を見已りて各共に籌量思惟して議り論ぶるらく、「提婆達多は如來所に於て是の如きの瞋恨ありて、石を以て如來を擊打したればなり」。時に孤迦里迦苾芻は、是れ提婆達多の朋友たりしが諸苾芻に告ぐらく、「汝具壽等は諦思する能はずして非語もて卽ち語らんとは。汝等見ずや、提婆達多は今彼樹に在りて四禪に住せるを。是大人は惡事を作せるならじ」。時に苾芻等は心に疑惑を生じ、唯佛世尊のみ能く疑惑を斷じたまへば、諸苾芻は佛に白して言さく、「……上の所說の如し……」。時に提婆達多の朋友苾芻孤迦里迦等は佛に白せるを見已りて諸苾芻を訶せるらく、「汝等は自ら羞恥なくして、卽ち我が提婆達多を說いて惡事を作せりと云はんと

【二〇】喜樂。藏文に缺く。

【二一】法愛。chos-hdod（チエードウ）、「法欲」の義。

【二二】練行。dkah-thub-ldan（カトウーブダン）、「苦行を持つ」義。

【二三】實語(satyakriyā)。嚴かなる誓言なり。

光を放ちたまひしに、其光遍く三千に滿ち……廣く上に說けるが如し。佛、阿難陀に告げて言はく、「汝、彼女人の、乳を將ちて我に供養せるを見たりや不や」。阿難陀、佛に白して言さく、「世尊、我れ見たり」。佛は復阿難陀に告げたまはく、「此人は歡喜心を以て乳を捨施し來りて我に供養せり、此無量の善根を以て、當來の世には辟支佛果を證するを得ん」。時に佛世尊は乳を瀝ぎて瘡に塗りたまひしも、血流れて息まざりければ、諸方の苾芻及び梵志等は佛の、瘡を患ひたまへるを聞いて皆佛所に來り、或は塗香・抹香もて瘡上に安けるありて種種に醫療せるに、竟に差ゆる能はざりき。爾の時具壽十力迦攝波は眞實語を以て大誓願を發せるらく、「若し佛世尊にして一切衆生に於て普く子想を作し、實にして虛しからざらんには血をして止息せしめ、瘡、平復するを得んことを」。是願を作し已るに血便ち止息し瘡卽ち除差せり。時に諸の苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦及び王舍城の一切の道俗は、皆大に歡喜して踊躍すること無量なりしも、唯、提婆達多と未生怨王幷に拘迦里迦惡苾芻等は心に歡喜せずして口には云はく、「病差ゆるを得たらんには誠に善哉たり、此れ能く諸善根ありしに因りての故に」。時に諸苾芻は皆疑惑を生じ、唯佛世尊のみ能く之を斷除したまへば、諸苾芻は佛に白して言さく、[一九]「世尊、何の因緣ありてか十力迦攝は誓願を發し已るに、血流るゝこと止息し瘡除差するを得たる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『但に今日此因緣ありしのみには非じ、過去世の時にも亦此事ありき。汝應に諦に聽くべし、乃往過去に我れ毒瘡を被りしに、彼れ實語を發し已りて除差するを得たりしを。乃往昔時に一山野に於て一大村あり、村を去ること遠からざるに大叢林あり、多く根果に饒にして異類の諸鳥は此に在りて棲遊し、和雅の音を出して甚だ愛樂すべかりき。一仙人ありて其中に止住し、但根果を食し清流水を飲み、樹皮衣を披て專ら神呪を持せり。此村內に於て一長者の在るあり、宗族より一女人を娶り以て夫妻と爲して共に歡樂を爲せるに、後に於て久しからざるに妻便ち娠あり、歲月滿ち已りて一子を誕生せりければ、三七日を滿し

【一九】十力迦攝發レ誓癒ニ世尊瘡ー前生因緣譚。

頭栴檀香を捨施せりければ、未來世に於ては當に辟支佛果を證して名けて栴檀と曰ふべけん。我處に於て大歡喜を生ぜるに因り、當に是報を得べきなり」。爾の時世尊は此檀香を得て足に塗りたまひしも血猶ほ止まざりければ、侍縛迦は復佛に白して言さく、「童女人の乳汁を用ひて瘡上に塗點したまはんことを」。時に諸苾芻は心に怪しみて童女の乳汁を識らざりければ、時に具壽阿難陀は侍縛迦に問うて言はく、「何者が是れ童女の乳汁と名くるなる」。答へて曰はく、「若し婦人の初めて姙胎して子を生ぜる者是を童女の乳汁と名く」。爾の時四衆は諸處に往詣して童女の乳汁を求覓せるに、王舍城中に在りて提婆達多及び諸の近友を除き、餘外の四衆處に於て皆此乳を求めければ、其の提婆達多及び諸の惡友は唱へて言はく、「[一八]汝等、乳汁を與ふる勿れ、當に魘魅幻化の法を作さんと欲するなれば」とて、自ら與ふる心なくして一切人を障破せり。爾の時是の王舍城中に唯一婦人あり、身自ら瘦小なりしに、初生の孩子の身も亦瘦小なりければ、其母の乳汁は子が食にも猶ほ足するを得ざりき、況んや故更に他人に與へんをや。時に彼婦人は佛世尊が童女の乳汁を須ゐたまへりと聞いて便ち是念を作さく、「我れ若し用乳を以て如來に供養せんに、我れ自ら瘦弱して多く禍起るあらん、一には子は當に必ず死ぬべく、二には提婆達多は王と與に親近にして及び宿舊の朋友あれば、乳を與げたるを聞いて必ず當に我を殺すべけん」。復是念を作さく、「若し我身死に幷に我子亡ぜんとも、天人の應供養者にして足指の疼痛を念患したまへるが爲に、我れ當に乳を持し將げて如來に供養しまつるべし」。時に彼婦人は乳を出して銅器中に置れ、持して將つて如來所に往き、頭面に禮足し胡跪して佛に奉ぜんとて白して言さく、「世尊、我れ女乳を將ち來れり、佛は童女の乳を須めたまへるを聞きぬれば、我れ今將ち來れり、願はくは佛、此乳を受取したまはんことを」。佛、阿難に告げたまはく、「此女人は心に正信を懷きぬれば、汝當に此乳を受取すべし」。時に阿難陀は命に依ひて受得せるに、婦人は頭面に佛を禮し退き還りて而し去りぬ。爾の時世尊は微笑して五色の

【一八】本文には汝等勿與乳汁、當欲作魘魅幻化之法、自無與心障破一切人とあり。藏文には此に相當する語なく「童女の乳を求めんとて人衆の間に求めしに、人々は機會ある每にそれを避けぬ。時に王舍城中に唯一人の婦あり……」とあり。

世尊は痛を忍びたまへり。爾の時醫王侍縛迦は毎日三時に佛所に來詣せるに、其の王舍城人及び諸國の商人貧富貴賤にして信心正見あるものは、皆醫王と與に同じく佛所に往けり。時に諸衆人は醫王に白して言さく、「何の醫方をか作さんとするなる」。醫王答へて言はく、「我れ此方を辨せるも其藥得難きなり」。時に阿難陀は醫王に問うて曰はく、「是れ何の藥草なれば求め得べきこと難きや」。答へて言はく、「此方は牛頭栴檀香を用ふるも、我れ先に已に諸處に於て求覓して得ざりき。縱令商人にして有てる者も、未生怨王の惡性なるを怕れて出賣することを敢へてせざるなり。王にして若し須ゐんに方に始めて將ち出して王に獻ずるなれば、王若し香を須うるの日に無からんには、王の與に必ず定んで殺さるべけん。何を以ての故に。曾て栴檀香を賣り來りて已に其香を有せるを知れるが爲の故なり」。呢に賣香商人は其衆中に在りて侍縛迦の所說を聞けり、「世尊の治病の爲の故に栴檀香を須うるなり」と。便ち是念を作さく、「未生怨王は提婆達多と共に親愛して世尊に於て相嫉せり、若し我れ世尊に牛頭栴檀香を與げたりと聞かん時は定んで當に我を損すべけん」。復是念を作さく、「世尊は是れ諸の人天の應供なれば、我れ此が爲に縱其身命を損せられんとも、亦須らく如來に牛頭栴檀香を奉上しまつるべし」。卽ち往いて香を取り、來りて佛に供養せんとて胡跪して白して言さく、「世尊、我れ栴檀香を得來れり、世尊慈愍して須らく當に受取したまふべし」。佛、其壽阿難陀に告げて言はく、「此の大仁邊より爲に栴檀香を受取せよ」。命に依ひて受得せるに、商人は大歡喜を生じ、頭面に佛を禮して退いて還り去りぬ。爾の時世尊は微笑したまへるに[一七]五色の光ありて青黃赤白を現じて皆口より出で……乃至、其光眉間より入りぬ……廣く上に說けるが如し。時に阿難陀は偈を以て佛を讃ずらく、「……廣說せること前の如し……」。佛、阿難陀に告げたまはく、「汝、彼商人の、心に歡喜を生じて牛頭栴檀香を以て我に供養せるを見たりや不や」。阿難陀は佛に白して言さく、「我れ見たり」。佛、阿難陀に告げたまはく、「彼商人の如きは無量善根を以て敬信して牛

【一七】五色の光。藏文には「青黃赤白の光を發したまひて」とありて五色の語なし。若し五色とせんには、紅色又は雜色を加ふるなり。

言はく、『但に今日我が爲に命を喪へるのみには非じ、過去生に於ても亦我が爲の故に自ら身命を喪へるなり、汝應に善く聽くべし。乃往古昔に波羅痆斯國に王あり名けて梵授と曰ひ、正法もて國を理めて諸の枉濫なく、時世清淨にして人に災害なく、五穀豐盈して萬姓安樂なりき。爾の時に當りて城を去ること遠らざるに別の聚落あり、諸の園林・勝妙の花果多く、雜類諸鳥は和鳴して愛すべかりき。時に仙人ありて此林內に住し、粒を絕ちて苦行して唯根果を食し、樹皮衣を被て以て寒暑を禦ぎぬ。卽ち此處に於て一獵師あり、每に弓矢を持し諸の禽獸を殺して自ら存養せり。而し此獵師は時の林間に於て仙人所に往けるに、仙は歲寒に往來疲乏せるを見て心に愍念を生じ、乃し根果を將りて之に與へて食せしめしに、遂に恩義を結びて共に父子と爲りぬ。是時獵師は仙人に敬事して之を稱ぶに父と爲し、仙亦憐愍して之を愛すること子の如くせりき。後に異時に於て其の梵授王は淸晨に縱觀せんとて鹿園中に入りしに、時に野鹿あり驚怖悲鳴して急ぎ仙人に投ぜり。時に王は卽ち便ち此鹿を射殺し、既にして見に命終せりければ、仙は乃ち憤を發して彼王に報じて曰はく、「汝の惡性たるや深く道理に非けり、彼鹿は我に投ぜるに輙ち屠害を事とせんとは」。時に王は聞き已りて極めて瞋恚を生じ、諸臣に告げて曰はく、「若し世人ありて灌頂刹帝王に於て麁惡語を加へんには、合に何の罪にか科すべき」。羣臣王に白さく、「非法の惡人は合に死罪に當つべきなり」。王曰はく、「然り此仙人は我を輕毀せり」。其時羣臣は仙人を害さんと欲しければ、獵師は近づき見て便ち是念を作さく、「我れ見に命存せるには、豈に彼をして敢へて大仙人を害さしめんや」。是時獵師は卽ち共に戰を決きければ仙人は避走せり。時に王は爾の時大威勢ありければ、其時獵師は便ち王のために殺害せられぬ』。佛言はく、「諸苾芻、汝が意に云何、時の仙人とは我身是なり、時の獵師とは卽ち前身に藥叉たりし天神是なりしなり。當に爾の時に於て已に我が爲の故に身命を喪失せり、今還我が爲に遂に便ち死を致し、石は我足を打ちて流血すること是の如くに絕ふさるなり」。

故に、地獄・傍生・餓鬼趣中より拔濟して出さしめ、人天勝妙の處に安置したまへり。當に生死を盡して而し涅槃を得べく、骨山を超越して血海を乾竭し、無始積集の薩迦耶見は、智金剛の杵を以て而し之を摧碎して預流果を得たり。我れ今佛法僧寶に歸依し五學處を受け、今日より始めて乃し命終に至るまで、更に殺生せじ…乃至、飲酒せじ。唯願はくは世尊證知したまはんことを、我は是れ鄔波索迦なり」と。卽ち佛前に於て而し頌を說いて曰はく、

「世尊の威力は彌弘廣なり　　堅牢惡趣の門を閉塞して
妙善生天の路を開示したまへり　　我れ今無爲の果を獲得し
親しく諸佛の大慈悲を承け　　衆塵皆除りて天眼を得たり」。

是時前身に藥叉たりし天神は、商人の利を得たるが如く、耕夫の實を收めたるが如く、戰者の勝を得たるが如く、病の除こるを得たるが如くにして、舊威儀に依りて佛を禮して去りぬ。時に諸苾芻は始め初夜より後夜分に至るまで各自ら禪念せるに、忽に佛前に光明遍く照らせるを見て皆疑惑を生じ、佛に詣りて請じて白さく、「何の因緣ありてか梵釋諸天四天大王衆は此に來りて奉覲せる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「此れ梵天にも非ず、亦帝釋四天王衆の此に來りて我に謁せるにも非ず。提婆達多が鷲峰山に於て、一抛車を作りて石を飛ばして我を打ちしにより、執金剛神は金剛の杵を以て空中に打碎けるに、時に金毘羅藥叉は接承せんとして得ずして遂に自身を打ちしに、善心を發せるに因りて命終の後廣勝の三十三天に生ずるを得たり。此に緣りての故に來りて我に稽首し、我れ爲に法を說きしに、眞諦を見るを得て天に歸還し已りしなり。是故に苾芻、若し黑業を作さんには黑果を得、純白業を作さんには純白果を得、若し雜業を作さんには必ず雜果を受くれば、宜しく黑雜業を捨てゝ唯白業を集むべし、當に是の如くに學すべし」。時に諸苾芻は皆疑惑を生じければ而し佛に白して言さく、「[一六]金毘羅藥叉は佛を護りまつらんが爲の故に自ら身命を喪へるなりや」。佛

【一六】金毘羅藥叉捨レ身護レ佛前生因緣譚。

内に入らんとしたまへり。時に提婆達多は五百人と與に機を發して石を飛ばし直ちに如來を擊ちぬ。時に執金剛神は金剛の杵を以て虛空中に於て石を打ちて碎かしめしに、其石の一片は佛身に墮ちんと欲せり。時に金毘羅藥叉は石を接けんとして著せず、遂に自身を打ち、斯より迸り落ちて世尊の足を損せり。爾の時世尊は卽ち頌を說いて曰はく、

「虛空中に在るに非ず　海に非ず山穴に非ず
地の方所として　能く業報を免るゝことあることなし」。

時に金毘羅藥叉は石のために身を擊たれて自ら必ず死ぬべきを知りて便ち善念を發せるに、命終の後三十三天に生ぜり。諸天の常法として生天を得已るに三種の念を起すなり、一には「今何處にありや」、二には「何に因りて生ずるを得たるなる」、三には復「何の業に因りて而し此に生ずるを得たるなる」と。既にして審に觀じ已るに是れ天處なりと知り、復前世に身藥叉たり佛世尊に於て淸淨意を發したれば、廣勝の三十三天に生ずるを得たるを知れり。復是念を作さく、「我れ天に生ずるを得ては宿を經て玆の妙樂を受け然して後佛に見ゆべからず、宜しく時に速に往いて世尊を敬禮しまつるべし」。是念を作し已るに、卽ち身手に於て遍く瓔珞の殊特妙好なるを嚴り、并に四種の曼陀羅等[一五]の微妙の蓮華を持し、其天の首髮は柔輭香潔にして右旋して紺靑に、身相端嚴にして比喩すべからず、威儀庠序として鷲峰山に下りしに、天の威力を以て光明赫奕として遍く山野を照らしつゝ佛所に詣り已るに、散華供養して退きて一面に坐せり、法を聞かんが爲の故に。爾の時世尊は彼根性・意樂・隨眠を知しめして、爲に如是四眞諦法を說いて其をして開悟せしめたまひしに、彼は法を聞き已るに智金剛の杵を以て二十有身見の山を摧壞して預流果を證せり。既にして見諦し已りて三たび白して言さく、「大德、佛世尊に由りて我をして解脫の果を證得せしめたまへり、此れ父母・人王・天衆・沙門・婆羅門・親友・眷屬の能く作せる所には非じ。我れ世尊善知識に遇ひまつれるが

【一五】四種曼陀羅等。藏文には「諸天の妙華 utpala, padma, kumuda, puṇḍarīka, mandārava を運びて……」とせり。曼陀羅華は悅意華、白團華等と譯す。四種の蓮華と曼陀羅華等なり。

脫の果を證得せしめたまへり、此れ父母・人王・天衆・沙門・婆羅門・親友・眷屬の能く作せる所に非じ。我れ世尊善知識に遇ひまつれるが故に、地獄・傍生・餓鬼趣中より拔濟して出さしめ人天勝妙の處に安置したまへり。當に生死を盡して涅槃を得べく、骨山を超越して血海を乾竭し、無始積集の二十薩迦耶見は金剛の智杵を以てして之を摧碎して預流果を得たり。我れ今佛法僧寶に歸依して五學處を受けん、今日より始めて乃し命終に至るまで殺生せじ……乃至、飲酒せじ。唯願はくは世尊、許知したまはんことを、我は是れ鄔波索迦なり」と。是時工師は情に佛を害せりと謂ひ、便ち明珠を持して私に自ら逃走せり。時に提婆達多は數數遙望して、佛世尊の頭は以に地に落ちたりと謂ひしに、佛安然として了に損害なかりしを見、五百人は佛所にて聽法せるを覩たりければ、遂に瞋恨を起して餘路よりして山に登れるに、乃し工師の珠を持して私に走ぐるを見たりき。此に因りて自ら更に五百人を將ゐて拋車を發せんと欲せり。佛、此念を作したまはく、「是は我が宿業の積集し成熟せる業報の來至せるなり、[一二]欲水の暴流は能く止息するなければ、退りて自ら作して自ら受くるなり、若し他が受くるならんには是處あることなけん」。佛は業を知しめし已りて五百人に告げて曰はく、「諸仁、當に知るべし、提婆達多は甚だ惡意にして、汝等が身を將ゐんと欲して鷲峰山に登り(來れり)。此は是れ我業なれば決定して須らく受くべきなれば、可しく共に前進すべし」。時に諸天等は便ち下方を觀ぜるに、時に[一三]執金剛藥叉は便ち是念を作さく、「此の提婆達多は旣に惡逆を興して如來を害せんと欲せり」。是念を作し已るに卽ち[一四]金毘羅藥叉宮に往いて藥叉に報じて曰はく、「提婆達多は鷲峰山頂に於て大拋車を造り、大拋石を飛ばして佛身を害せんと欲せり。世尊は旣にして汝が宮に在して安住したまへば、提婆達多が正に石を發するの時、我れ當に金剛の杵を以て虛空中に於て而し之を摧碎すべければ、汝應に相助くべし、碎石ありて佛身に迸著するを恐るれば、汝應に覆護すべし」。金毘羅曰はく、「善い哉、是の如し」。爾の時世尊は座よりして起ち、將に深山巖穴の

【一二】欲水暴流。藏文には「業の聚を得て緣成熟し、來至せんこと近きにあり、決定して發せる所の業は聚會し他が受くる理なしと思惟したまひて……」とあり。欲水の暴流とは卽ち業の積聚成熟せる義なり。

【一三】執金剛藥叉(Vajirapāṇi yakkha)。執杖神王、執杖藥叉、執金剛菩薩とも稱す、卽ち門側の金剛力士なり。

【一四】金毘羅藥叉宮。前註(八)深遠藥叉宮なり。

べし。然り我れ今沙門喬答摩を殺さんと欲す、王宜しく我と共に諸の方計を設くべし、我れ今知らず、何の物を以て打ち、先に何處を打ちて而し命終せしむべきかを」。時に工巧あり[10]抛車を造るを能くせるが、南天竺國より城中に來至せり。提婆達多は聞き已りて巧工を命びて告げて曰はく、「汝、能く五百人所牽の抛車を造るや不や」。答へて言はく、「我れ今善く此抛車を造るを解せり」。時に提婆達多は便ち卽ち咽珠の價直千金なるを持して巧工に與へて此車を造らしめ、復一千人を與ひて以て驅使と爲し、巧工に報じて曰はく、「佛は鷲峰山に在せり、汝今應に可しく其山上に於て佛坐に近き處に、五百人抛車を安き、復餘處に於て二百五十人抛車を安かしむべし」。又復餘處に更に二百五十人抛車を安かしめて諸人に告げて曰はく、「汝等應に知るべし、沙門喬答摩遊行し來去せんに、卽ち抛車を以て打ちて命を斷ぜしめよ」。時に彼人等は提婆達多の敎を受け已るに、卽ち鷲峰山上に詣り五百人抛車を造り畢れり。時に五百人は共に相議りて曰はく、「此の大抛車を造れるは世尊を害せんと欲してなるか」。悉く是言を作さく、「汝等、應に知るべし、寧ろ各命を捨せんとも、人天の共に恭敬する所の大聖世尊の身を害せざれ」。是語を作し已るに卽ち抛車を捨て、便ち山頂より僻路を求覓して下れり、提婆達多の見んを恐れたればなり。爾の時世尊は諸人の所念を知しめし、便ち階道を化(作)したまへるに、衆人見已りて各相議りて曰はく、「此峻高の山には先に階道なかりき。汝等應に當に知るべし、此は是れ世尊の威德なるを」。時に諸人は佛如來に於て大淸信を發し、便ち階道よりして下りて世尊所に至れり。爾の時世尊は彼諸人を調伏せんと欲したまへるが爲の故に、鷲峰山に經行したまひしに、既にして佛所に至るに雙足を頂禮して退きて一面に坐せり、法を聽かんと欲しての故に。爾の時世尊は彼の根性・意樂・隨眠を知しめして、爲に[11]如是四諦を說いて其をして開悟せしめ、彼既にして聞き已るに智金剛の杵を以て卽ち能く二十種薩迦耶見の山を摧破して預流果を證せり。既にして見諦し已るに佛に白して言さく、「大德、佛世尊に由りて我をして僻

【一〇】 抛車。sgyoga(ヂョク)、「石を打ち放つ仕掛ある機械車」なり。

【一一】 如是四諦。藏文には「四聖諦を別々に分別する此の如きの法を說きたまへり」とあり。

「我れ王を建立したれば今王位を得たり、須らく我を立てゝ佛と爲すべし」。王言はく、「如來の脚下に妙輪相あり、若爲が建立して號して佛と爲すを得べき」。提婆達多は復王に白して言さく、「我れ能く足下に輪相を作さん」。時に提婆達多は卽ち巧工を召びて問うて言はく、「汝、頗し我が雙足下に於て輪相を作すを能くするや不や」。其人答へて曰はく、「聖者、若し能く痛を受くるを欲せんには、我れ當に爲に作すべし」。提婆達多言はく、「我れ能く痛を忍ばん」。時に匠は念言すらく、「其人は大氣力あれば若し印を拓さん時、脚跟もて我を踏まんに必ず茲に因りて死を致さん」。便ち卽ち提婆達多に語げて言はく、「可しく房中に向うて脚を出すべし、我れ卽ち上に印せん」。匠に答へて言はく、「好し」。時に匠は卽ち輪形の鐵を燒きて火色の如くし其足下に印せるに、其時大辛苦を受けぬ。時に苾芻あり來りて孤迦里迦に問うて言はく、「其の提婆達多は今見に何に在りや」。答へて曰はく、「今一處に在りて脚輪相を作せり」。時に彼苾芻は彼房所に往き提婆達多を看んとて彼に至りしに、提婆達多が脚輪相を作さんが爲に脚を燒いて大辛苦を受け痛聲叫喚せるを見ぬ。時に彼苾芻は心に疑恠を生じて如來所に往き、唯佛のみ能く疑惑を斷じたまへば、白して言さく、「世尊、我れ提婆達多が脚輪相を作さんが爲に大辛苦を受けて疼痛せるを見たり」。佛、苾芻に告げたまはく、『[六]往昔の時も亦脚の爲に苦を受けたれば、習性として仍し在るなり。如往昔時に雪山の中に一大象ある山を下りて水を飮まんとせるに、一野犴ありて象後に隨ひ行き、象の脚跡を見て[七]自ら量度を作さく、「我れ此より沒せんに當に天上に生ずべけん」。茲に因りて跳擲せるに、忽に枯木のために其身を查められたるを以て遂に便ち死に至れり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝が意に於て云何、時の彼野犴とは卽ち提婆達多是なり。當に爾の時に於て脚跡を度量して[八]觀意を作すを忘れ、今時も還脚輪のために大苦痛を受けしなり」。時に佛世尊は王舍城に在して耆闍崛山[九]深遠藥叉宮中に住したまひき。時に提婆達多は未生怨王に白さく、「我れ今汝を立てゝ王と爲せり、汝可しく我を立て佛と爲す

【六】提婆達多作二脚輪相一前生因緣譚。

【七】藏文に「象の足跡を見て自の足跡を量り、彼野犴は思惟すらく……」とあり。

【八】藏文に「その時に亦彼は足跡の分相應を（量らざりし）によりて苦惱せしなり。

【九】深遠藥叉宮。gnod-sbyin kum-bi-ra-hi gnas（ノウチン クンビラ、イ ネエ）、「Kumbira 藥叉の住所」なる義、卽ち金毘羅藥叉住所なり。

や」。阿難陀、佛に白して言さく、「我れ見たり」。佛復阿難陀に告げて言はく、「此の妓兒は辟支佛果を得て[四]雅和音と名けん」。爾の時提婆達多は未生怨王に語ぐらく、「我れ以に汝をして今王位を得せしめぬ、今須らく建立して我をして佛と作らしむべし」。時に王は提婆達多に語げて言はく、「佛身には金色あるも汝が身には金色なし、若爲が建立して佛と作らしめん」。復王に白して言さく、「我身を金色と作さんこと斯れ亦得べけん」。其の提婆達多は即ち金匠を喚びて報じて言はく、「我身上に於て金色と作さしめよ」。金匠答へて曰はく、「聖者、若し能く痛を忍ばんには即ち作し得べけん」。答へて曰はく、「我れ能く痛を忍ばん」。金匠即ち熱油を以て身に塗り、諸の辛苦を受けて金薄を著きて身に塗りぬ。別に苾芻ありて孤迦里迦苾芻に問うて曰はく、「提婆達多今者何に在りや」。答へて曰はく、「身を金色に染めんが爲に在らざるなり」。時に彼苾芻は聞き已りて即ち彼に往いて提婆達多を看たるに、諸の辛苦を受け叫喚して身上を金色と爲せるを見たりければ、苾芻即ち來りて佛に白して言さく、「其の提婆達多は身をして金色と作さんと欲せるが爲に大辛苦を受けたり」。佛、苾芻に告げて言はく、[五]『時の提婆達多は是れ今時にのみ身を金色と爲さんとて辛苦せるのみには非じ、往昔時に於ても金帽の爲に辛苦して死ぬるに至れり。往昔の時に婆羅痆斯城に於て一婦人あり、夫主遠行して在らざりしに、一烏鳥あり彼婦人の前に來りて和美語聲せりければ、其婦人言はく、「如し汝美聲せり、我婿平安に早く到らんには汝に金帽を與へん」。久しからざる中間に夫婿到來して平安に家に至りしに、其烏は復彼婦人の前に於て還美聲を作しければ、時に彼婦人は即ち金帽を擲げて烏に與へ、得已るに即ち東に去りぬ。西に別に鵄鳥あり、彼金帽の爲に彼烏頭を打ちければ地に落ちて死にき』。佛、言はく、「爾の時の烏鳥とは、今の提婆達多是れなり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「意に於て云何、此の提婆達多は往昔時に於て金帽の爲の故に、是の如きの習性の仍し在るありて、彼金薄の爲に身に其辛苦を受けしなり」。又提婆達多は未生怨王に白して言さく、

【四】雅和音佛。rṅa-sgra（ンガヂャ）、「ともなりの響」の義。

【五】提婆達多作二身金色一前生因緣譚。

るを得たるなりや」と。佛は一人を化して地獄中に於て告げて言はく、「汝等は亦生を餘處に托せるにあらず、異人ありて光明を放てるが爲に苦止息するを得たるなり」。諸の罪人は彼化人を見て心に歡喜を生じ、罪消滅するを得て皆人天の處所に生ずるを得、四諦の聖法を受聽するに堪へたり。其光の上れるは四天王・三十三天に至り阿迦尼吒天に至り、光中に無常・苦・無我・空の法頌を說き、其光は普く三千大千世界に照らして還りて佛後に隨へり。若し世尊が……乃し無上菩提事に至るなり……往昔事を說かんと欲したまはん時は其光後より入るべく、若し當來事を說きたまはんには光前より入り、若し地獄事を說きたまはんには其光足下より入り、畜生事を說かんと欲したまはんには光脚跟後より入り、若し餓鬼事を說きたまはんには光脚指中より入り、若し人間生事を說きたまはんには光脚脛の中より入り、若し轉輪王を說きたまはんには光左手中より滅し、若し大轉輪王を說きたまはんには光右手中に來至して滅し、若し天上事を說きたまはんには光臍中より滅し、若し聲聞緣覺事を說きたまはんには光臂中より滅し、若し辟支佛の法を說きたまはんには其光眉間より入り、若し無上正眞等正覺を授記するの法を說きたまはんには其光頂より入るなり……廣く前に說けるが如し。時に此光明は佛所に到りて佛を遶ること三匝して眉間よりして入れり。爾の時阿難陀は合掌して佛を讚じ……伽他を說ける等廣く說けること前の如し……伽他を以て佛を讚ずらく、

「千妙の種種色もて　口より一道出づるに
遍く十方を照して　亦日の初出の如し
[三]無我にして而し偈を說き　聞かん者は憍慢を除き
皆作佛の因緣たり　緣なきには光を放ちたまはじ
諸怨等を降伏したまふらん」。

佛、阿難陀に告げたまはく、「汝、彼妓兒の我に於て歡喜して鼓を打ちて樂を作せるを見たりや不

【三】本文には無我而說偈、聞者除憍慢、皆作佛因緣、無緣不放光、降伏諸怨等とあり。律部十九、一五五頁の偈と對照する時譯文甚だ劣れるを觀取し得ん。

撲して口づから云はく、「大聖、願はくは暫し下し來りたまはんことを。我れ今染欲垢中に墮在せり、願はくは慈もて我を拔きたまはんことを」。佛更に下り來りしに、其人禮足して口に願言を發せるらく、「聖者の邊に於て而し惡意を發せるも、願はくは業報なからんことを。又願はくは供養功德の善根もて當來世に於ては咸廣大の財富を得て自在に、亦常に諸佛如來に供養して心に厭離なからんことを」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝が意に於て云何、爾の時の陶家人とは今の影勝王是なり。爾の時に當り辟支佛に向うて心に惡意を懷き口に麁語を出せるの業成熟せるが故に、今刀もて脚を刺され房中に閉在し飢渴して餓死せるなり。悔心を生じ願力を發せるに由りての故に、彼業成熟して王宮に生ずるを得て富貴多財に、〔二〕世尊所に於て二十種身見の山峰を破し、慧を以て穴を穿ちて預流果を證得せり」。佛、復諸苾芻等に告げたまはく、「黑業を行ぜんものは黑果報を得、白業を行ぜんものは當に白業の果を成熟すべく、黑白の雜業を行ぜんには當に黑白雜業の報を得べし。汝等苾芻、當に黑業及び黑白の雜業を捨てゝ、專ら白業の行を修すべし。應に是の如くに學すべし」。時に諸の臣佐は來りて大王に白さく、「其老王は身今已に亡せぬ」。此語を聞き已るに地に悶落し、時に水を以て面に灑ぎて還蘇醒するを得たりければ、卽ち室に入りて父の爲に孝服を持てるに、人の諫めて離愁を得せしむべきはなかりき。時に臣佐は共に議るらく、「云何が方便せんに王は愁なきを得べき」。當時南天竺國より妓樂人ありて來りければ、將ゐて王所に至り諸の妓樂を作さしめしに、王は心に樂しむなくして默然して對へず善言を與へざりければ、妓兒は總去して遊行して世尊所に至り、告げて言さく、「善い哉、丈夫」とて、歡喜を生じて卽ち鼓を打ちて樂を作せり。爾の時世尊は自ら卽ち光を放ち微笑して種種の光を出したまひ、又火星の如くに其光は或は上り或は下り、其光の下れるは無間地獄に至り、光到る所の處にては冷苦せる者は卽ち煖に、熱せる者は清涼を得、諸の苦を受けたるものは並に止息を得たりければ、皆思念を作さく、「我れ生を餘處に托す

〔二〕於世尊所破二十種身見山峯以慧穿穴證得預流果とあり。慧を以て穴を穿つとは、金剛の智杵を以て摧破する義なり。

卷の十八

二(提婆の僧伽破壞)(承前)

佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等、諦に聽け、乃往昔時に佛の出世なくして空しきには、辟支佛ありて時時に貧乏を憐念せんとて、自ら資するには臥具飮食に於て少きぬ。時に世に唯辟支佛のみありき。此時に辟支佛は遊行して往いて婆羅痆斯城に至り、一陶家の輪舍所に居至せりき。亦自餘の商人等在りて同じて共に止息せり。中に一人あり夜に房中に在りて、遂に大便を失して不淨もて地を汚せりければ、夜に總べて卽ち去りぬ。其の聲聞緣覺にして若し觀察せざらんには、預じめ其事を知らざるなり。辟支佛は夜に止宿して明日平旦に乞食せんと擬せるに、主人は房に入りて乃し房中に糞汚不淨なるを見たり、然く而し異生愚癡の類は善惡を識らざれば、便ち惡念を發して辟支に報じて曰はく、「汝出家人、脚刺れざらんに何に因りてか房外に出でゝ大便せず、此房內に在りて而し不淨を放てる」。時に主人は鎖を以て門口を鎖して云はく、「汝今可しく此房に於て餓死すべし」。爾の時辟支佛は是思惟を作さく、「恐らくは此主人は後に苦報を受けん、我れ若し門を開いて自ら出でんに又恐らく瞋恨せん」。默然居住して中食時に至りしに、主人は瞋息みて辟支を命びて曰さく、「可しく來りて食を喫ふべし」。告げて曰はく、「我が時已に過ぎぬれば更に食はじ」。「若し是の如くならんには、今夜更に宿して明旦齋を食せよ」。辟支佛は慈愍を以て而し攝受せんがための故に便ち卽ち爲に住まりければ、明旦に至り淨妙の食を造りて辟支に供養せり。是時辟支は此主人を利益せんと欲せるが爲の故に、現身に變化して而し爲に法を說き、或は神通を現じて或は身上より火を出し、或は身下より水を出して種種に變現せり。其時主人は此神變を見て心切に悔過せること、猶し迅風の其大樹を吹かんに根を連ねて倶に拔き摧折して倒すが如く、此も亦是の如くにして而し自らの摧

【一】影勝大王前生因緣譚(承前)

ば、王の此語を聞くや奔競して走り看たるに、其の老王は遠く走聲の極めて衆きを聞いて獄に在りて驚懼して是の思惟を作さく、「必ず當に我を喚びて種々に苦刑するなるべし」とて、長嘆し喘息し、て地に迷悶し、便ち卽ち命を捨てゝ北方天王宮に於て天膝の上に在りて忽然として化生せりき。時に薜室羅末拏天は問うて曰はく、「汝は是れ誰なりや」。曰はく、「我名は[二八]勝仙なり」。「何の故にか名けて勝仙と曰へる」。[二九]「天の飲食ありて常に面前に在り、念に隨うて而し食すれば、是故に長より號して名けて勝仙と曰へり」。時に諸苾芻は心に疑惑を生じ、唯佛のみ能く斷じたまへば、倶に佛に白して言さく、「云何が[三〇]影勝大王は何等の業を造りたればにや、果報成熟して大富貴あり、豐財にして受用し、王宮に於て生まれ、復佛に見ゆるを得て聖諦理を知り、後に脚を刺されて禁閉せられ、身に飢渇の苦困を受けて茲に因りて餓死せるなる」。佛、諸苾芻等に告げたまはく、『若し黑業を作さんに黑異熟を感じ、若し白業を作さんに白異熟を感じ、若し雜業を作さんに雜異熟を感ずるなり。是故に苾芻、自ら其業を作さんに還りて自らに之を受くるなり。頌ありて曰へるが如し、

「假令百劫を經んとも　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　果報は還りて自らに受けん」。

是故に苾芻、應に當に雜業及び黑業を捨離すべく、汝等應に純白の淨業を修すべし。汝、諸苾芻、是の如くに應に學すべし』と。

【二八】勝仙。rgyal-po khyu-mchog(ヂャル ポ チュウ チョク)、「(人中の)雄王」の義。
【二九】本文に是故長號名曰勝仙とあり。藏文には「我は(人中の)雄王なりと云はれしにより、その名は雄王、雄王なりと稱せられて名稱ありき」とあり。
【三〇】影勝大王前生因緣譚。

せ、[22]「佛は大王に告げたまへり、善知識として應所作の如きは我れ已に作せり、我れ今汝を救いて三惡趣を離れ、汝をして常に天人中に在りて生死を過えたる處を得せしめん」と』。佛の所說を聞いて卽ちに三摩地に入り、耆闍崛山より沒して王舍城なる王の禁閉所に於て、王の面前に在りて白して言さく『「大王、佛は大王に告げたまへり、「願はくは病惱なからんことを」と』。時に王は尊者大目揵連を禮敬せり。時に大目連は王に白して曰さく、[23]『佛は大王に告げたまへり、「善知識としての我れ王處に於ける所作の如きは已に辦じぬれば、地獄・傍生・餓鬼を離れて人天を建立せしめん……具に前に說けるが如し……」と。……業因緣に由りてなり、是故に大王、當に知るべし、業因に依りて此に在りて禁閉せられ、脚は刺し破られ、又食を得ずして其身を苦害せるなり』。王、大目連に問うて曰はく、「何處に好食飲ありや」。時に目連答へて曰はく、「四天王處に於て好食飲あり」と、具に王に報じ已るに、卽ち便ち身を化して而し去りて耆闍崛山に往けり。時に未生怨王の子は[24]指瘡病を患ひければ、將ゐて王所に詣りしに、王は懷中に抱きて手を以て[25]摩抄し、口を以て之を[26]嗍せり。其時王子は啼泣して止めざりしも、王旣にして其癰瘡を喫ひ穴破れて膿血口中に在りければ、膿を地に唾せるに、太子は膿の地に在るを見て更に啼いて絕えざりき。時に大夫人韋提希は此事を見已りて吁嗟して嘆息せり。時に未生怨王は母の噓嗟して嘆息せるを見て問うて言はく、「何の故にか噓嘆せる」。答へて曰はく、「曾祖已來未だ此の患瘆あらざりしに、汝も亦曾て此患ありければ、王が、父は汝が瘡上を嗍ひ、膿血ありしに便ち卽ち飲み却けて地に唾せざりき、[27]膿時を見るを畏れてなりき。恐らくは膿時を見んには。汝更に啼泣すべければ、此に緣りて王が父は汝が膿血を喫せるなり」。問うて曰さく、「實に是の如くに我を憐愛せることありしや」。母曰はく、「是の如くに汝を憐愛せるならくのみ」。爾の時未生怨王は瞋恚心止みて憐愛心を起し、諸の臣佐に語ぐらく、「如し人ありて老王の活けるを言はんには國の半位を分たん」と。人は老王に於て皆憐愛を生ぜりけれ

【二二】佛告大王、如善知識應所作者我已作、我今救汝離三惡趣、令汝常得在天人中過於生死處……とあり。藏文に「善知識(善友)」によりてなさるゝことは汝に既になし終れり……」とあり。

【二三】佛告大王、如善知識我於王處所作已辦令離地獄傍生餓鬼建立人天具如前說、由業因緣是故大王當知依於業因、此在於禁閉脚被刺破又不得食苦害其身とあり。由業因緣以下は目連の說法と見るべし。

【二四】優陀夷跋陀(udāyi-bhadda kumāra)なり。十誦律三十六卷(張五・三四右末)參照。

【二五】摩抄。さすりもむなり。

【二六】嗍。吸ふなり。

【二七】藏文には「動亂せしめざる爲に膿を飲み了れり」とあり。

王は守當門人に問うて曰はく、「老王は今者若爲が存在せる」。其守門人は具に述ぶらく、「韋提希夫人は酥を以て麨に和して身に塗り、脚釧の孔中に水を盛りて王に奉りぬれば、王は今此を以て存活せり」。時に未生怨王は守當人に勅せるらく、「今より以後は更に夫人をして入りて老王に見えしむること勿れ」。爾の時世尊は耆闍崛山に在りて經行したまひしに、王の牕牖に當りければ、王は遂に遙に佛影を見、此に因りて佛に見えて心に歡喜を生じ、此の善根の爲に命存活せり。時に未生怨王は更に守當宮人に問ふらく、「我れ已に餉食せしむるを斷ぜるに、老王は今若爲が存活せる」。門人答へて言はく、「王は牕牖中より遙に世尊を見たてまつり、世尊は慈愍して攝受したまへるが爲に、此の福力に因りて王は存活するを得たり」。王は牕牖を閉塞せしめ、其足下を刺して立つを得ざらしめぬ。時に守當人は卽ち王勅に依ひ、窻牖を閉塞し、其足下を刺せるに、是時老王は身疼痛を患ひ苦惱急なりければ、以て哽咽啼泣して流涙止まざりき。卽ち自ら思惟すらく、「今、苦惱に在り、世尊何が愍念して我を觀察したまはざる。如來世尊は知見したまはざるなきに」。諸佛の常法として大慈悲ありて衆生を攝受し、決定して擁護して卽ち正觀に住したまひ、若ち能く[三]三事を調伏し四暴流を超え、四神足に安んじ五支具足して五道を超過し、七覺分に住し八支道を示し、善功方便して九定に隨入し十種力を具し、名稱遍く十方界に滿ち、千轉自在輪王に倍勝したまひ、晝夜三時に佛眼を以て諸の衆生を觀じたまひ、故に隨轉の智慧もて「誰か減じ誰か增し、誰か逼迫し誰か逼迫せられ、誰か惡趣に下り誰か惡趣に向ひ、誰か向趣を一にし誰か重擔を負へる、我れ今何の方便を以てして能く此を救離し、惡趣中より人天の趣に置き幷に解脫を得せ(しむ)べき」と(觀じたまひ)、未だ善根を修せざる者には善根を修習せしめ、已に善根を修して未だ成熟せざる者には成就を得せしめ、已に成就せる者には解脫を得せしめたまふなり。爾の時世尊は大目揵連に告げて曰はく、『汝、影勝王の所に往いて可しく我語を傳ふべし、「願はくは王、無病ならんことを」。是の如きの言を作

【三】三事。律部十九、註(九の八)の本文の前後に照合して、身口意三葉なるを推し得る。そこには三明を顯發し善く三學を修し善く三業を調べ……とあればなり。藏文にも「調伏の三の棄捨に精通する」とあり、卽ち三事調伏の棄捨に精通する義なり。四暴流四神足等も同處參照。

んには、我が宮人を除きて自餘の庫藏は汝が所用に任さん」。然り其の太子は性懐暴惡なりければ、庫藏を得たりと雖も由ほ厭足せず、更に復國内人民を惱亂して止息するを肯んぜざりき。時に諸人衆は還王處に詣り、事を具して王に白せるに、王は語を聞き已りて太子に告げて曰はく、「我れ今汝に人民庫藏を與へたるに、何に因りてか更に復百姓を惱亂して止むるを肯んぜざる」。太子、是語を聞き已るに便ち大に瞋怒して諸の臣佐に告げて曰はく、「汝等應に知るべし、若し人ありて刹帝利灌頂王を訶責せんには、何の罪ありて責罰すべきや」。臣等答へて曰さく、「極刑あるべきなり」。[一九]「今訶罵せるは是れ我父なり。云何が損害せん。今且らく後宮に付して囚閉せしめん」。時に臣佐は便ち卽ち囚閉せり。大王閉されしに、宮人臣佐・城中の人衆は王の囚へられしを聞き已りて並に悉く憂惱し、皆大王を念ぜるらく、「往昔の恩愛なりし王は囚閉せられ、太子卽位しては暴惡麁刺にして兇猛猵烈なれば、臣佐の敢へて其王を諫むるあることなきなり」。是の影勝王は既にして囚閉せられて心に自ら念言すらく、「是れ我が宿業の因緣にて且に得たり」。日時に隨ひて國の大夫人韋提希は常に以て餉食せるに、時に未生怨王は守門人に問ふらく、「老王は今者若爲が存濟せる」。時に守門人便ち王に白して言さく、「王母は毎に自ら食を送り、將つて老王に與へぬれば」。未生怨王は是語を聞き已るに守門人に語げて曰はく、「汝當に更に飮食及び水漿等を入るゝを放さしむること勿れ」。諸宮人に告ぐらく、「亦食を送ること勿れ、若し送る者あらんに罪極刑に當らん」。時に諸人等は敎の嚴にして重なるを見て、更に人の敢へて食を送りて老王所に至るなかりき。是に於て多日に更に人の、王處に到るを得るあることなかりき。時に王夫人韋提希は王を念じて恩愛に自ら忍ぶこと能はず、[二〇]酥蜜を以て麨に和して身に塗り。而し脚釧を以てして孔中に水を盛り、將りて以て王に上りければ、命且らく日を延べぬ。時に守當人は卽ち猜疑すること暫らくにして知覺し已れりと雖・王恩を念ぜるが爲に其の未生怨が未だ問はざるの間は亦報知せざりき。後に異時に於て未生怨

【一九】頻毘娑羅王の幽閉。

【二〇】本文に以酥蜜和麨塗身而以脚釧孔中盛水將以上王命且延日とあり。藏文にも「粉末(大麥)の漿(syrup)を塗り、足釧に水を盛りて……」とあり。觀無量壽經の說相と相似せるを見るべきなり。十誦律三十六卷(藏五・三四右)參照。

は得已るに卽ち提婆達多の所に詣りて報じて曰はく、「聖者、王舍一城を除ける已外は並に是れ我れ得たり」。提婆達多答へて曰はく、「功を用ひたれば今是の如きの果報を得たり、汝可しく更に功力を用ふべし」。爾の時太子は卽ち使を遣はして苦役を命じ、摩揭陀國城邑人民を損害せり。時に諸人民は旣にして逼迫して苦しめられ已るに、時に諸人衆は影勝王に奏して曰はく、「今、太子のために摩揭陀國の人民城邑を損害せられぬ、願はくは王、制約して使ふを許す勿らんことを」。王、是語を聞くや卽ち太子を命び、太子至り已るに父王は告げて言はく、「汝復何の故にか摩揭陀國の城邑人民を損害せる」。太子答へて言はく、「我が諸兵士は其衆甚だ多くして存濟すること能はざればなり」。王言はく、「若し是の如くならんには、我れ今惟一庫の財物を留めたる已外及び王舍城とは、並に汝が受用するに任さん」。太子得已るに卽ち提婆達多所に往いて(言はく)、「我れ今更に王舍城を得、唯一庫の財物を除ける已外は並に得たり」。提婆達多答へて言はく、「此は是れ功を用ひたれば果報成熟せること是の如きなり」。復言はく、「凡ぞ是れ國王は庫藏を用ふるを以て力と爲す、若し庫藏を有せんには卽ち是れ國王たれば、庫藏の爲の故に須らく功力を用ふべきなり」。時に彼太子は更に遣はして王舍城人を損害せしめしに、時に王舍城人民衆等幷に瞻波國及び摩揭陀國諸人衆等は各恐懼を懷きて、密に王に奏し知らしめて上事を具陳せるらく、「彼太子は損害せること苦急なり、大王は此來百姓を養育せること由し赤子の如かりしに、今太子のために損害せられぬれば、我等人民は多く諸國に逃散せるあり、我も今還是の如くせんと欲するなり」。其の影勝王は情甚だ敬信にして有情を慈愍し正法を住持せりければ、是語を聞き已るに卽ちに太子を命び、太子至り已るに王は以て言を示して太子が意に順じ、手を以て太子が頂を摩して告げて言はく、「我れ今所有城邑人民は並に汝に付囑せるに、汝今何に因りてか百姓を惱亂せる、汝今正に應に須らく養育すべきに」。太子答へて言さく、「我に庫藏なきが爲に此の如くせる所以なり」。大王報じて言はく、「若し是の如から

信を附して鼠に報じて知らしめんとて是の如きの言を作さく、『其鼠狼は是の如きの言を作せり、「如し鼠にして食なくして空しく來らんには必ず定んで汝を食はん」と』。其鼠苦に食飲を求めたるも得ざりければ、是思惟を作さく、「我れ今、食既にして得ずして空しく去らんに、必ず定んで我を食はん」。其鼠は復信を附して鼬に與へんとて頌を以て報じて曰はく、

「若し人儉少せんに悲心なく　　飢火逼迫して遂に急を生ず
　汝大に恩ありて此語を報ぜり　　我れ今復更に來り親しむなけん」と』。

佛、諸苾芻等に告げたまはく、「其鼠とは豈に異人ならんや我身是れなり、其鼠狼とは提婆達多是なりしなり。往昔の時亦無恩義なりしに、今も亦恩德を知らざりしなり」。[一八]時に未生怨王は父前に於て劍を擲げしに、王便ち問うて言はく、「愛子、汝は何の意に因りてか劍を我前に擲げたる」。王に答へて曰さく、「我に瞋恚あればなり、父に受用ありて我に受用なければ」。王、是語を聞いて便ち子に告げて曰はく、「若し是の如からんには、其の瞻波城は汝が受用に與さん」。子は城用を得て歡喜踴躍し、便ち提婆達多の處に往いて是の如きの言を作さく、「尊者、我れ今瞻波城を得たり、情を恣にして受用せん」。時に提婆達多は太子に報じて曰はく、「汝今功を用ひて果報力を現ぜり、交受用するを得ん」。太子答へて曰はく、「我れ今見れぬ」。復言はく、「汝可しく更に大功を用ふべし、必ず增勝するを得ん」。時に太子は遣はして瞻波城に往かしめ、徵稅重役して百姓を逼迫せりければ、爲に逼切せられて各散じて諸方に投じ、或は王舍城に投じ或は諸國に投ぜるあり、或は其中に使を發して王に奏して言へるありき、「太子逼迫せりければ、瞻波城人は散じて外國に走れり。唯願はくは大王、其の非法を制したまはんことを」。爾の時父王は卽ち太子を命びて告げて言はく、「汝今何の故にか百姓を逼迫せる」。太子答へて言さく、「兵士の存濟すること能はざるが爲なり」。父王言はく、「若し是の如からんには王舍城を除ける已外の摩揭陀國の諸人民等は子の受用に任さん」。太子

【一八】未生怨太子の逆害（承前）

は時に患苦して毒其身に遍かりければ、廣く醫師を召びて（言はく）、「誰か能く我を治するをうるなる」。時に諸の醫師の能く治するをうる者なかりければ、王旣にして遍く告げしに、獵師聞き已りて遂に執當する所の人を遣はして（言さしむらく）、『汝當に我が爲に王に白すべし、「我れ能く治し得ん」と』。其の執使者は事を具して王に白すに、王言はく、「卽ち解放して將來せしめよ」。旣にして王所に至るに、獵師は爲に治せんとて手下せるに卽ち差えければ、便ち卽ち釋放し、王は甚だ歡喜して重ねて與に賞賜せり』。佛、諸苾芻等に告げたまはく、「汝が意に云何、豈に是れ異人ならんや、時の獵師とは我身是れなり、彼の黑頭蟲の恩義を識らざりし者とは提婆達多是なりしなり。往昔の時無恩無義にして恩德を知らざりしに、今も亦恩義を知らず亦恩德を知らざりしなり」。復次に佛、諸苾芻等に告げたまはく、[一四]『是の如く提婆達多は恩義を知らず亦恩德を知へざりしこと、汝等諦に聽け、我れ汝が爲に說かん。乃往昔時に非時に七日大雨して止まざるありければ、其の鼠狼は投じて穴內に入りしに、鼠も亦其穴中に入れり。後に毒蛇あり、覓めて雨處を避けんとて亦其穴に入れり。然く而し鼠狼は其鼠を害せんと欲せるに、時に毒蛇は鼠狼に報じて曰はく、「汝及び我等は大苦厄に遭へるなれば、汝等は相損害せんとの心を生ずる勿れ、各自ら安住せよ」。其の毒蛇等は各名號を立てゝ、毒蛇は[一五]愛君と名け、鼠狼は[一六]有喜と名け、鼠は[一七]恒河受と名け、其の愛君及び有喜等は恒河受に告げて言はく、「汝は是れ勤健なれば、當に我が爲に餘處に向ひ飮食を求覓して將來すべし」。其鼠は性行質直にして心意賢善なりければ、彼蛇及び鼠狼の爲に勤求して食を覓めしに、未だ廻り來らざる間に鼠狼は蛇に報じて言曰すらく、「彼れ若し食を求めて得ずして空しく來らんには、我れ卽ち伊を食はん」。其蛇は是語を聞き已るに遂に是念を作さく、「此の鼠狼は今此の苦難に遭ひぬれば、由みて擬して彼鼠を害さんと欲せり。我れ今恐る、彼れ食を求めて得ずして空しく來らんに、決定して食はれんを。我れ今預じめ須らく彼鼠に報じ知らしむべし」。是念を作し已るに卽ち便ち

【一四】提婆達多無恩無報前生因緣譚の十二。
【一五】愛君。bgah-sde（ガ デエ）、「喜軍」の義。
【一六】有喜。dgah-bo（ガ ボ）、「歡喜」の義。
【一七】恒河受。gaṅ-gā-byin（ガン ガ チン）、「恒河を受ける」義。

き。時に諸宮人は王の睡れるを見已るに、心に畏懼なかりければ、或は經行せるあり、或は立てる者あり、或は坐せる者あり、或は眠れる者あり、或は遠く去れるあり、或は衣を脫し汗を曬せるありき。或は瓔珞を解脫して其傍邊に在き便ち卽ち眠睡せるありしに、井に墮ちたる鵄鳥は其瓔珞を啣みて遂に將りて遠く去り、彼の能く救へる獵師に與へ、以て恩德に報ぜんとて瓔珞を奉上せり。時に梵授王は眠覺め、諸眷屬臣佐と與に速に歸りて城に入れり。時に瓔珞を失へる宮人は遍く其處を觀ぜるも瓔珞を見ざりければ、王に詣りて白して言さく、「大王、苑園中に在りて而し瓔珞を失へり」。時に王は便ち諸大臣に告げて曰はく、「諸の苑園に在りて已に瓔珞を失せり、汝等須らく爲に訪覓すべし、是れ誰が盜み將れるかを」。時に諸の臣佐は旣にして王命を奉じて卽ち便ち訪覓せるに、時に黑頭の蟲は時々に彼獵師の處に往いて、而し方便を覓めて其瓔珞を覰ひ、見已りて便ち是れ王の瓔珞の今此に在るなるを知り、其の黑頭蟲は便ち恩義を棄て、遂に王所に詣りて白して言さく、「大王、失へる所の瓔珞は我れ今具に獵師處に在るを知れり」。王、是語を聞いて便ち卽ち瞋怒し、卽ち使者をして往いて獵師を捉へしめしに、時に王使人は獵師所に至りて告げて言はく、「汝、苑園中に於て王宮人の瓔珞を盜めるなりや」。其獵師恐懼して答へて云はく、「我等實に王の瓔珞を盜めるにはあらじ」とて、具に使者に向ひて所得の來由を陳說し、其瓔珞を還せり。使者は得已るに將に王所に詣り、其獵師は當の處にて卽ちに囚縛せられぬ。時に其鼠は見已りて急ぎ往いて蛇に報じ、蛇に向ひて白言すらく、「其の黑頭蟲は罪惡の人なり、恩德を識らず、遂に我が善知識をして王の使者のために見に今囚縛せられしめぬ」。蛇は語を聞き已りて答へて言はく、『汝、獵師に報ぜよ、「我れ今日備が爲に王宮中に向ひて王身を螫さんに汝當に呪持すべく、我れ卽ち毒を收めんに王當に歡喜すべく、決定して汝を放たん、亦卽ち汝が與に賞賜せん」。其鼠は此語を得已りて卽ち具に獵師に報ぜるに、獵師云はく、「善い哉、當に是の如くに作すべし」。其蛇卽ち王身を螫せるに、王

り、「他國の狗來りて王の爲に頌を說けり」。王曰はく、「卿等審に推せよ、實に是れ宮中の二狗の食せるなりとやせん、餘狗の喫せるなりとやせんを」。諸臣集議せるらく、「王は今推せしめぬ、云何が詳審すべき」。中に於て言へるあり、「何ぞ多論を假らん、但、頭髮を取りて狗の口中に安け、若し皮を食はんには自ら當に吐き出すべし」。旣にして髮を安き已るに、王宮の二狗は便ち吐いて皮を食ひければ、事を以て王に白すに、王曰はく、「宜しく二狗を治すべく、餘狗は爲なけん」と。汝等苾芻、意に於て云何。昔の二狗とは豈に異人ならんや、今の提婆達多と阿闍世王と是れなり。彼れ往昔の過失にて他をして苦を受けしたるに由り、今も亦此の如くにして彼等造罪して佛僧は過を招けるなり。[三]汝等復聽け、提婆達多の無恩報の事を。乃往古昔に波羅痆斯城に於て、王は梵授と名け人民を治化せり。時に一人あり山に入りて木を採りしに、路に獅子に遭ひければ便ち卽ち逃竄して井中に墮落せり。獅子奔趁して其井を見ざりければ、遂に其上に墮ちぬ。而し毒虵あり鼠鶏を逐ひ鼠を撥はんと欲して、此三は一時に倶に井内に墮ちぬ。各害心を起して相噉食せんと欲せるに、獅子曰はく、「今此の井中にては我れ勢力あれば能く汝等を食はんも、然く而し共に厄難の處に在れば、宜しく惡心を息むべく、相損害すること莫れ、因緣にて會遇へるなれば」。屬いて獵師あり、鹿を逐ひて此に至り下に向ひて井を看たるに、其井中の人遂に大聲を發して唱言すらく、「丈夫、願はく救濟せられんことを」。是時獵師は先に獅子を拔いて井中より出ださしめしに、獅子卽ち便ち獵師の足を禮して白して言さく、「我れ今汝の深恩を知れり、必ず當に報謝すべけん。其の井中に在る黑頭蟲は、恩義を識らざれば必ず之を救ふこと莫れ」。獅子卽ち去りしに、後に於て獵師は所有井中の人・虵・蟲・鳥等を次等に悉く皆救出せり。後の時獅子は一鹿を捉へ得たるに、獵師は因みて行いて遇其所に至りければ、獅子は來り見えて卽ち便ち鹿を次て獵師に授與し、跪拜して去りぬ。後に一時に於て其の梵授王及び諸の宮人は出城遊戲せんとて苑園中に至り、恣意に歡娛して遂に便ち睡著せり

【三】提婆達多無恩無報前生因緣譚の十一。第十六卷の註(三二)の終に續くべきものなり。

出家を與へ、擯罰して他方に致すことを作さずして自所に安住せしめたるが爲なり」。或は議說するあり、「佛亦過なし、彼の苾芻僧伽は僧敎に依りて住持せざりしが爲の故に」と。斯の如くに衆議せるに、父王聞き已りて心に惡を起さずして云はく、『我が先世の業に由りての故ならくのみ。復說いて云へるあり、「是れ佛及び僧の過なり」と。我れ此說に由りて情に憂惱を懷けり』。時に諸苾芻は各疑心を生じて世尊に請じて曰さく、「何の故にか彼人過を造りて此をして殃を受けしめたる」[二三]。佛、諸苾芻に告げたまはく、『但に今日、前の如きの事ありしのみには非じ。乃往過去に曾て亦此に遭へり、汝等諦に聽け、我れ今爲に說かん。乃往古昔に波羅痆斯城王ありて梵授と名け、人民安隱にして富樂豐饒せり。時に彼城中に其二狗の一は黑、一は白なるありしが、鞍轡皮繩を食へり。異後時に於て王は出でゝ戰はんと欲して其臣に告げて曰はく、「卿、速に嚴仗せよ」。臣卽ち觀見せるに狗のために咬み破られて所用に堪へざりければ、便ち王に啓して知らしめしに、王聞いて瞋を生じて諸狗を殺さしめぬ。城中の諸狗は既にして殺害に遭ひ、因りて卽ち逃竄して國を出で去らんとせり。時に他國の一狗あり外よりして來り、其の諸狗の怖れて而し逃竄するを見て問うて言はく、「何の意にてか是の如き」。城中の諸狗は事を以て具に答へしに、報じて曰はく、「何の故にか大王に白さゞる」。「誰か敢へて王に啓さん」、外狗報じて曰はく、「仁等安住せよ、我れ此夜に於て進み詣りて王に白さん」。便ち王所に至り、「行步端儀にして伽他を說いて曰はく、

「大王が宮中に二狗あり　一は白一は黑にして色力を備へたり
應に當に彼を誅すべく我を滅せざれ　すべきを誅せざるは是れ理に非じ」。

是時王は此頌を聞いて諸臣に告げて曰はく、「卿等宜しく應に覓めて伽他を說く者を取へて將來して我に見えしむべし」。諸臣訪察すらく、「誰ぞ夜中に於て王の爲に頌を說けるは」。而し白言せるあ

【二三】彼人造レ過此人受レ殃　前生因緣譚。彼人とは提婆と阿闍世、此人とは佛及び僧なり。

養すとやせん、人各食を作して供養すとやせん」。其中に或は云へるあり、「衆共に食を作して供養せんに、其生業、田農等の事を廢せん」。時に衆共に議るらく、「人各次に依りて一日作食して供養せん」。卽ち力の辦ずる所に隨ひて、食を作して供養せり。其中に一童子あり、家貧なりければ母と共に商量すらく、「我家は貧乏なり、次に依りて食を辦へんに、云何がしてか辦ずるを得べき」。時に母答へて言はく、「愛子、可しく最後に於てして與に供養すべし、未だ日至らざる來、力に隨せて收辦せんに卽ち以て充足せん」と。既にして日至り已るに、鋪くに熊皮を以てし、如來、上を踏みて行いて坐處に至りたまひしに、五百味の飲食を造りて如來を供養し、五輪を地に著けて大誓願を發せるらく、「願はくは所生の處に常に豪姓の富貴家に生ずるを得んことを。亦願はくは我足、地を踏まずして、猶し如來の足下の如くに毛あり四指にして金色に、行かんには願はくは佛の如くにして、當に當來世に佛ありて出でまさん時誓うて當に供養すべけんことを」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「爾の時の貧童子とは卽ち寶德長者の子是れなりしなり。彼れ毘鉢尸如來に於て發せる所の誓願は業果成熟して大富貴を感じ、足下に毛ありて黃金色を作し、九十一劫より以來、曾て足を以て一たびも地を踏まず、當に生まれし日に二十俱胝の金錢あり、其の日々に隨ひて地より踊出し、卽ち佛の教中に於て出家修學して阿羅漢果を得たりしなり」。佛、苾芻に告げたまはく、「若し黑業を作さんには當に黑報を得べく、若し白業を作さんには還白報を得、諸の雜業には還復此の如し。汝等苾芻、雜・黑業の如きは汝應に作すべからず、當に白業を作すべきなり」。

〔一〕未生怨の如きは彼の惡友提婆達多の爲の故に、父王頻毘娑羅所に於て大惡逆を起し、稍を擲げて手指に打著せりければ、擧國の人民共に爲に恥笑し談論すらく、「此の如きの惡者と友と爲らんとは。未生怨王は胎中に在りし時何ぞ殺却せざりし」。或は時に人ありて談論すらく、「此れ是の阿闍世王の過に非じ、彼の惡友提婆達多の過に由りてなり」。或は說いて言ふあり、「佛、提婆達多に

【一】未生怨太子の惡逆。第十六卷の註(三七)の本文を繼承す。

心意定なるを得んには
　　　而し生滅の法を見ん」。

是頌を說き已るに、[八]時に諸苾芻は咸く皆疑あり、世尊は能く一切の疑惑を斷じたまひぬれば、便ち卽ち白問すらく、「世尊、[九]具壽苾芻は何等の業を種えてか業力に由りての故に富貴家に生じ、而し足下に於て金色の毛ありて日每に常に五百種の味を食ひ、九十一劫より已來足地を踏まず、纔かに生誕し已るに二十倶胝の金錢を得、後に世尊の敎中に於て出家修學し、諸の煩惱を斷じて阿羅漢果を證せるなる」。爾の時世尊は諸苾芻に告げて曰はく、「彼の具壽の積集せる善業は果報成熟せること、喩へば暴流の若くにして決定して自らに受くるなり。汝等苾芻、應に知るべし、自ら作して自ら受くるなるを」。……廣く說けること餘の如し。卽ち頌を說いて曰はく、

「假令百劫を經へんとも
　　　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時
　　　果報は還りて自らに受けん」。

佛、諸苾芻に告げたまはく、『乃往昔時に九十一劫に佛あり世に出でたまひ、毘鉢尸應正等覺と號せるが世に出現し、十號具足したまへり。彼佛は六十二千苾芻の前後に圍繞せるありて、人間に遊行して漸く王城の名けて[一〇]親意と曰へるに至りたまへり。爾の時城中に諸の居士子あり、毘鉢尸應正等覺は六十二千苾芻の前後に圍繞せると與に人間に遊行して此に來至したまへりと聞き、彼既にして聞き已りて皆共に往いて佛所に詣り、佛足を頂禮して退いて一面に坐せり。爾の時世尊は諸童子の爲に善く法要を說いて示敎利喜し嘿然して住したまへり。爾の時衆童子等は座よりして起ち、合掌恭敬して佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、我に四事を以て三月安居に佛及び衆僧に供養しまつるを許したまはんことを」。爾の時世尊は嘿然して許ひたまへり。時に諸童子は、佛の許ひたまへるを知り已り、雙足を頂禮して佛を辭して去りぬ。彼の童子等に既にして城に到り已るに、議堂中に於て共に相議りて曰はく、「我等云何がして世尊に供養しまへるべき。若し共に一食を作して供

【八】以下は中阿含に記さず。
【九】具壽(倶胝)苾芻前生因緣譚。
【一〇】親意城。律部二十三、註(一六の四二)親意城の原語と同じ。

するを得、已にして果を證得せんに、卽ち諸色を見て心に攀緣せず、亦惑亂せず、其心正定にして情に顚倒なく、善思し修習して心に增減なく、惑亂の事あらんも爲に正念を失すること能はず、耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知り心に諸法を知らんも、色等の諸法は惑亂すること能はず、正念を失せず、安定して散せず、情に顚倒なく、善く解脫し善く修習して生滅の法を見るなり。復次に喩へば城邑聚落の遠からざるに大石山あり、缺漏あることなく亦孔隙なくして全べて一石たらんに、或は大風ありて東よりして起らんも其山は動ぜず搖れず亦西に傾かず、西南北風にも亦復是の如くに動ぜず搖れざるが如し。過去の色等は大暴風の眼前に來れるが如くなり。眼等……心識も顚倒あることなきこと亦復是の如くにして、動ぜず搖れず、其心安定して散亂あることなく、若ち解脫を得、善を修習し已り、生滅法を見るなり、復次に耳鼻舌身意に能く聲香味觸等を知り、此の六種は身心を惑亂せんも、彼れ能く果を得て正念を失せず、內の情心等は正念を失せず散亂顚倒することあることなく、善く解脫を得、善を修集し已り、生滅の法を見るなり」。具壽苾芻は是語を說き已るに、便ち伽陀を以て而し頌を說いて曰さく、

「[七]出家して解脫せんには　心に病惱憂なく
彼れ寂靜の地に住し　樂ひて愛貪欲を盡さん
解脫に趣きて盡くさんには　心及りて念を失せず
意生の法を了知して　而し心に解脫を得ん
心に若し解脫を得んに　寂靜にして諦を見て住し
所作旣にして作し了り　而し更に作するに應ぜじ
彼の大石山の如し　暴風も動ずること能はじ
色聲も亦復然り　損害を爲すこと能はじ

增減、有惑亂之事不能爲失正念……とあり。傍線せる所は中阿含の文及び藏文よりも文多くして善く附合せず。

【七】中阿含の偈は左の如し。樂在無欲、心存遠離、寤於無諍、受盡欣悅、亦樂受盡、心不移動、得知如眞、從是心解、得心解已、比丘息根、作已不觀、無所求作、猶如石山、風不能動、色聲香味、身觸亦然、愛不愛法、不能動心。

漏盡くるを得んに、所作已に辦じて後有を受けず、諸の重擔を棄てゝ自の己利を得、諸の有結を盡くして善く解脫し、心に自在を得て而し[五]六種に於て勝解脫を得ん。所謂、一には凡俗を出離するの勝解脫を得、二には利の諸の勝解脫、三には寂靜の勝解脫、四には貪欲盡の勝解脫、五には盡の諸の最勝解脫、六には正念を失せざるの勝解脫となり」。白して言さく、『「大德、若し復人あり、少信心を發して而し解脫を求めんに是見を作すこと勿らん、「貪瞋癡に於て而し解脫を得て生死を出離せり」と。大德、若し復人あり、少尸羅を發して生死を出離せんとて、而し解脫を求めて病惱憂なからんに是見を作すこと勿らん、「貪瞋癡を盡くすを得て病憂惱なく而し解脫を得たり」と。大德、若し復人あり、名利を求めんが爲に、稱譽の爲の故に寂靜行を行じて而し解脫を求めんに是見を作すこと勿らん、「貪瞋癡を盡くすを得て愛・取を離れ、正念を失せずして解脫を得たり」と。大德、若し苾芻あり、阿羅漢を得て諸漏已に盡き、所作已に辦じて諸の重擔を棄て、己利を獲得して永く諸有を斷じ、心に善く解脫し慧もて善く解脫せんに、是れ彼の阿羅漢にして此六種の勝解脫を得るなり。大德、若し苾芻あり、心に學處を得、若しは無上涅槃の善道を求めて色に著せざらんに、時に彼の學處は是れ淨尸羅にして、學處を成就して諸根を調伏して後に漏盡を得、無漏心に於て而し解脫を得、智解脫を得、現前法に於て以て自ら覺知して而し圓滿を證し、我生は已に盡き梵行已に立し所作已に辦じて後有を受けじ（と知らん）。時に彼の[六]羅漢は無學の尸羅もて諸根の無學を成就せん。大德、喩へば童子の幼小には心惰けて睡を樂み、盛少するに至りては尸羅諸根咸悉く成就し、後時に年老いて諸根以に枯れて尸羅成就せんが如し。大德、苾芻も亦復是の如し。若し苾芻あり、而し學處に住して心に自在を得ん。彼れ無上涅槃の善道を求めて色に著せず、尸羅に住して諸根調伏せん。後の時諸の有漏を盡し、無漏心に於て無漏の慧を得、解脫の命を得て現前法に於て已に自ら覺知して而し圓滿を得、我生は已に盡き梵行已に立し後有を受けずと（覺知し）、無學の尸羅は而し成就

【五】 六種勝解脫。本文には所謂一者出離凡俗得勝解脫、二者利諸勝解脫、三者寂靜勝解脫、四者貪欲盡勝解脫、五者盡諸最勝解脫、六者不失正念勝解脫……とあり。中阿含卷二十九沙門二十億耳經（大正2, 612 b 16）には六處を樂しむとして、無欲と遠離と無諍と愛盡と受盡と心不移動とを樂しむとせり。利の勝解脫とは利養等なる故に無欲に相當す。盡の諸の最勝解脫とは受盡に相當し、西藏律に對照せんに取（ad ina）盡の義なり。藏律の六種とは、(1)出離に於ける勝解、(2)普通生活に非ざる勝解、(3)閑寂に於ける勝解、(4)貪欲盡の勝解、(5)取盡に於ける勝解、(6)不忘念に於ける勝解となり。

【六】 本文に時彼羅漢無學尸羅成就諸根無學、大德喩如童子幼小心惰樂睡、至于盛少尸羅諸根咸悉成就、後時年老諸根以枯尸羅成就、大德、苾芻亦復如是若有苾芻而住學處得心自在彼求無上涅槃善道不著於色住於尸羅諸根調伏後時盡諸有漏於無漏心得無漏慧得解脫命、於現前法已自覺知而得圓滿我生已盡梵行已立不受後有無學尸羅而得成就已證得果、即見諸色心不變緣亦不惑亂其心正定情無顛倒善思修習心無

子は佛說を聞き已るに便ち是念を作さく、「世尊は今者我心の所念を知しめせり」とて、即時に驚愕し恐懼憂惱して身毛竪立し、佛に白して言さく、「是の如し、世尊」。佛復長者子に告げたまはく、「我れ今汝に問はん、我意に隨ひて答へよ。汝昔に家に在りしには常に何の業をか作せる」。答へて曰さく、「善く彈琴を解せり」。又問ひたまはく、「若し絃を調べん時、其絃調急ならんに、其聲和雅にして心を悅ばしめ、好聲にして用ふるに堪ふるや不や」。答へて言さく、「不なり、世尊」。問うて曰はく、「琴絃若し緩ならんに、其聲和雅にして心を悅ばしめ、能く好聲を發して用ふるに堪ふるや不や」。答へて言さく、「不なり、世尊」。「若し琴絃緩ならず急ならずして調弦平正ならんに、其聲好なりや不や」。答へて言さく、「是の如し、世尊」。佛、長者子に告げたまはく、「若し復人あり、極めて精進を行ぜんには心に掉擧を生じ、若し慢緩多からんには心に嬾惰を生ぜん、是故に汝應に處中の行を修すべし。若し是の如からんには、汝今久しからざるに諸の有漏を斷じて心に解脱を得、慧解脱を得て見法證果し、我生は已に盡き梵行已に立し所作已に辦じて後有を受けじと（知らん）」。爾の時長者子は佛の所說を聞いて、歡喜信受し諦心に思惟して佛を禮して去りぬ。時に長者子は佛世尊が爲に琴喩の方便を說いて誨へたまへるを聞き已るに、獨閑靜に處して不放逸を修し、專ら正念を修せり。（佛言へり）「善男子、汝が所標の心に出家を希求し、鬚髮を剃除して僧伽胝衣を被、正信もて出家して無上果を學し、梵行已にして立して最後に諸法を獲得し、以て自ら成就して果を證し我生は已に盡き梵行已に立し所作已に辦じて後有を受けずと覺知せんに、應に知るべし果を證せるを」と。時に彼の具壽は便ち自ら阿羅漢を證得して善く解脱を獲、已にして果を得已るに【四】正受解脱して喜樂一心なりければ、而し是念を作さく、「我れ今正に是なり、應に佛所に詣りて供養恭敬しまつるべし」。是念を作し已るに、即ち晡時に於て宴坐より起ちて往いて佛所に詣り、雙足を頂禮して退いて一面に坐せり。爾の時具壽は而し佛に白して言さく、「凡そ苾芻ありて阿羅漢果を得て諸

【四】正受解脱。藏文には「阿羅漢を獲て解脱の喜樂を意に享受して後、彼はかく思惟すらく……」とあり。

せんことを求願せり。佛言はく、「然さじ。長者子、父母聽さゞらんには出家受戒するを得ざるなり」。爾の時頻毘娑羅王は佛に白して言さく、「我は是れ國主なり、彼の長者が庫藏資產に於ては事皆我に由れり。王既にして聽許すれば、唯願はくは如來、其をして出家せしめたまはんことを」。佛は「善來、苾芻」と言へるに、即時に出家して僧伽胝衣を被て手に瓶鉢を持し、威儀庠序として百歲苾芻の如くなりき。是時六衆苾芻は共に其の長者子を恥笑せるらく、「汝は牛酥の如くにして何の堪ふる所かある、今者勤勞して梵行を修行せんとも何の益する所かある」。時に六衆苾芻は、見に而し調弄して共に是語を作さく、「此人の形貌は生酥團の如くなれば、佛の正教に於て勇猛に勤修せんとも當に何が成就すべき」。彼れ是語を聞くや即ち尊者阿難陀の所に往きて白して言さく、「尊者、云何が苾芻決定して修行せんに、早に成就するを得て意に正定を得るなる」。答へて言はく、「佛所說の如くんば、三摩地を受けて勤苦し經行せんに、速に正定を得ん」。時に彼れ聞き已るに即ち屍林に往き、三摩地を作して經行し、專ら覺品を念じて善法を思惟せるも竟に證することを能はざりき。又一念を起せるらく、「我れ今勤行精進せること諸の聲聞に過ぎたるも證果を得ず、我れ今自ら家宅眷屬ありて財物現存すれば、俗に歸し自ら須らく施を行じて諸の功德を造すべし」。爾の時、世尊は其思念を知しめして一苾芻に告げて曰はく、『汝可しく往いて彼屍林所に詣り長者子に報じて曰ふべし、「汝可しく此に來るべし」と』。時に彼苾芻は佛命を受け已りて便ち林中に往き、報じて曰はく、「世尊は汝を命びたまへり」。彼既にして聞き已るに共に世尊に往き、佛足を頂禮して却いて一面に住せるに、佛、彼の長者子に告げたまはく、『汝、應に空閑林中に在りて獨住宴坐して、是の如きの非理の尋思を作すべからず。汝昔に是念を作せり、「所有聲聞は勤めて苦行を修せるに、我は皆彼に過ぎぬるも由ほ漏心を斷じて解脫するを得ざらんとは。我が親屬は大資具ありて受用豐足せり、宜しく應に家に還りて諸の欲樂を受け、廣く布施を行じて諸の功德を造すべきなり」と』。時に長者

【二】藏文には「具壽二十億胝牛量よ、經行をなして定(samādhi)に長く住するなり」と世尊は說きたまへりとあり。

【三】覺品。七覺支なり、律部八、註(四の一六一)根力覺道の下參照。

卷の第十七

（提婆の僧伽破壞）（承前）

【一】時に頻毘娑羅王は長者子の、舡に乘じて來れりと聞き、弶伽河より渠を穿ちて直に王舍大城に至らしめ、五里の內に油麻子を滿し、船、城所に至るに勅して掃灑して諸の瓦石を去らしめ、香水もて地に灑ぎ諸の名花を散じ、喩ふるに天宮の如くして好供養を作し、長者子を迎へて王舍城に入らしめぬ。其子は王を見て頭面に禮足し、便ち寶珠を以て王の足上に置へ、退きて一面に住して結跏趺坐せり。時に王は彼が足下の黃金毛を見已りて、心に驚愕を生じて歎じて言はく、「大功德ある福力の人、汝曾て佛に見えしや不や」。答へて言さく、「未だ見えじ」。王言はく、「汝可しく相隨ひて佛世尊に見ゆべし」。王に問ふらく、「佛は何の物に騎れるなる」。王言はく、「出家の人は乘騎を用ひじ」。長者子答へて言はく、「我も亦步み去かん」。時に諸人衆は皆以て衣を脫して地に覆ひ、長者子の與に上を踏ましめしに、問うて言はく、「彼の佛世尊は衣を踏み行くなりや不や」。答へて言はく、「踏まじ」。卽ち衣を去らしめ、其の長者子は足を以て地を踏みしに、諸天は衣を脫して地に覆ひければ、問うて言はく、「我れ衣を著かしめざりしに、何に因りてか地上に衣あるなる」。傍人答へて言はく、「此は是れ天衣にして我等が衣には非じ」。亦去り却けしめしに、天は衣を去り訖れり。時に長者子の足地を踏みて著せるに、是時大地は六種に震動せり。爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、「此の長者子は九十一劫より已來、皆以て衣を覆ひて踏み行いて、曾て露足もて地を踏まざりしに、今長者子は重法の爲の故に足を以て地を踏みければ、此に因りて地動ぜるなり」。爾の時長者子は佛所に來詣し、佛足を禮し已りて却きて一面に坐せるに、爾の時世尊は其根性に隨ひて而し爲に法を說きたまひければ、旣にして法を聞き已るに座よりして起ち、佛足を頂禮して出家して戒行を受持

【一】二十億耳の出家修行。

せて宰相に報ずらく、『「王頻りに書を附して勅して「王來らんとす」と云ひ、復「子來らん」と言ひ、復「弥伽を擁塞して却流せしめよ」。此書を讀み已るに又報を得て云はく、「王及び王子は倶に亦來らず、王は寶徳の子に見ゆるを得んと欲すれば、汝等速に當に是要[四二]を遣はし來らしむべし」と』。時に瞻波人は密に一人を遣はして王舍城に往いて虚實を聽察せしめしに、其人乃し一ら書事の依くなるを知れり。時に城邑の諸人は同じく長者の宅に往いて寶徳に諮りて言はく、「大王は汝が男に見えんと欲するなり。其國の臣相は實語して虚しからず、我れ密に人をして往いて聽察せしめしに、一に書事の如くにして、長者の子に見えんことを須めしなり」。寶徳答へて言はく、「若し我等をして弥伽河を塞ぎ金を以て之を擁へしめんとも、我男は終に亦發遣すること能はじ」。衆人重ねて言はく、「長者は是れ大富貴なれば、亦金を以て弥伽を擁塞するを知へんも、我等貧人は計として得べきなければ、要らず須らく我等を慈愍したまふべし」。長者答へて言はく、「若し城内に於て家より一子を出して我子に隨は(しめ)んには我當に放ち去るべし」。時に人衆は皆長者の所言に依ひければ、長者は卽ち男所に往きて竊に子に語げて言はく、『城邑の人衆同じく來りて我に啓さく、「影勝大王は汝に見ゆるを得んと欲す」と』。子、父に白して言さく、「我れ當に卽ちに往くべし」。父言はく、「必ず應に汝が脚足の下に金色毛あるが爲に相見ゆるを得んと欲せるなれば、汝、脚を擧げて以て大王に視す勿れ、一寶珠を將りて彼王所に往き、王足の上に置へて王を禮拜し已り、卽ち跏趺して坐せんに黄金色の毛は自然に而し現はれん」。時に寶徳は心に自ら思惟すらく、「我れ今子を發遣して去らしむるに、當に象に乘じて去らしむべしとやせん、復馬に乘じ車に乘ぜしむべしとやせん、船に乘ぜしむべしとやせん」。更に自ら思惟すらく、「船に乘ずるの安穩なるには及かじ」。卽ち船を造らしめ、船中には更に種種の園林を造り、諸好鳥ありて種種の音を出し諸の婇女と及に身を莊嚴し已りて王舍城に往か(しめ)ぬ。

【四二】要。誓約なり。

百金錢を用ひて食を造りぬれば、目連苾芻は彼に往きて乞ひ來りしなり、其の長者子には是福力あればなり」。彼王は聞き已るに心に歡喜を生じて使をして喚ばしめんと欲せるに、佛は王の意を知りて卽ち王に語げて言はく、「汝、彼を輕んじて使をして往いて喚ばしむる莫れ」。又告げたまはく、「大王、汝頗し能く我鉢中の殘食を受けて食しうべきや不や」。大王白して言さく、「我は是れ[四一]積貴摩頂授記の王種なれば、人の殘食を喫ふべからざるも、佛は是れ我が法王なれば食せしめたまはんには卽ち喫はん」。佛、王に問うて言はく、「汝曾て生まれてより來、此の如きの食を得て意に隨ひて喫へりや不や」。答へて言さく、「世尊、我れ王宮に生まれ、王宮に長養し、身見に王たるも、未だ曾て此る好美の飲食を食はざりき」。佛、言はく、「大王、當に知るべし、彼の長者子は是れ大福德の人なれば、常に此の如きの上味の飲食を喫へるなり」。爾の時頻毘娑羅王は佛を頂禮し已りて退きて宮に歸還し、卽ち群臣に勅すらく、「當に四事もて兵馬を具辦せよ、贍波城に往くべければ」。群臣、王に問うらく、「何に因りてか彼に向はんとするなる」。王、言はく、「我れ往いて寶德の子に見えんと欲するなり」。臣等答へて言さく、「王の國境に在りつゝも何に因りてか往看せんとするなる、使をして喚び取めしめよ」。王言はく、「其人は是れ大福德なれば、往いて喚ぶべからじ」。臣等は王に答ふらく、「我方便を作して王喚を用ひずして其人をして自ら來らしめん」。王言はく、「爾る可し、卿等が意に任さん」。臣卽ち書を作り人をして往いて送りて城を掃灑せしむらく、「大王は來らんと欲せり」。其の長者子は聞き已りて歡喜せるに、大臣又報ずらく、「王子も亦來らんとす」。時に長者子は其王子の性行兇麁なるを聞きければ、費損あらんことを恐れぬ。諸大臣等は更に書を作りて報ずらく、「王及び王子は二倶に來らじ、汝等須らく計議を作して、弶伽を擁塞して水をして却流せしめ、今一滴をも河に順うて過さしむることなかれ」。長者聞き已りて心に極めて憂懼すらく、「當に知るべし、王は我等を科罰せんと欲して此書を作し來れるなり」。其の贍波城の諸人は聚集して共に一書を作して馳

【四一】積貴摩頂授記の王種。剎利にして灌頂授記せる王なりとの意。積貴は剎帝利姓をいへるものならん。

誰か其身を現ぜしめたる　速に答へよ是れ何人なる
當に是れ日なりとやせん　是れ〔四〇〕多聞天なりとやせん
當に是れ月下れりとやせん　復帝釋身なりとやせん」。

爾の時大目犍連は審に彼長者子の意を觀知して、卽ち言を說いて曰はく、

「是れ千光日ならず　我は多聞天に非ず
亦帝釋身にも非じ　我は是れ牟尼の子にして
甚だ極めて威光に足せり　粥を乞はんが爲に此に來り佛身に供養しまつらんとす」。

長者子、問うて曰はく、「何如が佛なりや」。大目犍連は頌を以て答へて曰はく、

「芥子は須彌に比すべからず　螢火小虫は日に比せず
牛跡の水は海に比せず　諸の外道の如きは佛に比せじ」。

是時長者子は是の所說を聞いて問うらく、「今來れる意は何の事をか須めんと欲せるなる」。答ふらく、「如來が爲に粥を乞はんとて來れり」。問うて曰はく、「如來は是れ何の族姓なる」。目連答へて曰はく、「沙門喬答摩あり、是れ族釋子にして鬚髮を剃除し身に法服を被、心行正眞にして出家修道して無上正等菩提を證得せり、此は是れ佛なり」。其長者子は先に未だ佛(名)を聞かざりしに、當に佛名を聞いて心に大に歡喜し、身毛皆竪ちて所有五百金錢もて食飲を造得し、一時に受けて鉢中に奉置せり。爾の時目連は卽ち定に入り、瞻波城より沒して王舍城に出で、竹林中に至りて將つて世尊に奉れり。頻毘娑羅は更に粥を將し來りて佛所に至らんと欲せるに、食の香氣普遍せるを聞いて意へらく、「將諸天及び天帝釋の來りて佛に供養せるなりや、我が作れる所の粥は並に用るに堪へじ」。世尊に白して言さく、「天帝釋及び諸天の來れるありて佛に供養せるなりや、此竹林の中極めて香を理むること好なるは」。佛、言はく、「王の國界內に大城あり、名けて瞻波と曰ひ、長者子あり日に五

【四〇】多聞天。藏文には nor-sbyin（ノル チン）、「施財」の義とせり。卽ち dhanada にして毘沙門の異名なり。

生めり」。時に王報じて言はく、「我れ瞻波城并に七頭の端正にして寶もて莊れる好象を以て並に汝が男に與へん」。寶德長者旣にして王に啓し已るに卽ち本城に還り、三七日を經て眷屬來會して（曰はく）、「旣に是れ女星月に生まれたれば、應に與に號して[三六]女星と曰ふべし」。八孃母に付し、二人は乳を與へ、二人は常に抱き、二人は衣を洗ひ、二人は戲を共にし、種種に飮食して用て養飼を爲せりければ、漸漸に長大して蓮の水に在るが如くなりき。其の男是の如くして年旣に長大しては卽ち學に入らしめしに、曆數・別寶の技は能く皆悉く明達せりければ、諸人は女を將ゐて競ひ至りて婚を求めぬ。其父、男の與に三種の房室園林を修め……謂はく、春夏冬の三時なり……用ふるに隨せて三種の宮人を立てぬ、所謂、上中下なり。其人每に上宮に在りて遊戲快樂し、日に五百兩の黃金を用ひて食を作り男の與に食せしめぬ。[三七]爾の時提婆達多は阿闍世王を惡諫すらく、[三八]「汝が父は頭白く黃に變ぜるに女戲に厭かず種種に食飮せり、倘今長大せるに倘に位を與へざれば得るの日未だ期せず」。阿闍世王問うて言はく、「今若爲がせんと欲すべき」。提婆達多答へて曰はく、[三九]「須らく過人事を存ふべし、凡そ求むる所の事は種として作らざるなけん」。當に如來は酥を服したまへるが爲に父王は粥を持して竹林に往いて如來所に至らんと欲せるに、阿闍世王は中道に在りて以て稍を擲げ、頻毘娑羅王を刺さんとして粥鐺を打破せりければ其王は却き歸れり。爾の時世尊は他心智を以て皆悉く預じめ知りたまひければ目連に告げて曰はく、「其の提婆達多は阿闍世に勸めて地獄に墮さしめぬ、我れ頻毘娑羅よりして粥を索めて食せんと欲せるに鐺を打ち破られぬ。汝當に我が爲に瞻波城に往き、寶德長者の男が邊に向ひて粥を乞うて將ち來れ」。爾の時大目犍連は端坐して定に入り、王舍城より沒して瞻波城に現ぜり。其長者の男は每に日神に事へければ、平旦に事へし時其の目犍連は日裏より下りしに、其長者子は大目連を見て心に極めて驚怖し、而し頌を說いて曰はく、

「今見たり、日神の身の　日よりして吾が前に下れるを

【三六】 女星。gro-bshin skye bye-bu ñi-gu（チョ シン チエ チエバ ニイ ヂュ）、「牛（星）生倶胝二十」の義。梵音を śroṇa-koṭi-viṃśa（二十億耳）とす。

【三七】 阿闍世王の逆害。

【三八】 本文に汝父頭白變黃…」とあり。藏文には skra-skya-bo（チヤ チヤ ボ）とし、「頭髮の靑白くして而も黃色」を生ずるに至れりとあり。

【三九】 本文に須存過人事、凡所求事無種不作とあり。

即ち淸淨身を得て
王の、孫子を救へるが如く
眷屬は共に歡喜し
皆彼の王孫に由りてなり
是れ人の福田なり
此に因りて財寶を得たり」と』。

今世及び後世に
婆羅門は寶を受け
是の如くして安穩を得たること
云に我は是れ最上なり
合に供養を受くるを得べく

佛、言はく、『苾芻、汝等當に知るべし、此は是れ何の事なるかを。爾の時の子を捨てたる王とは我身是れなり、時の[三二]婆羅門とは提婆達多是れなりしなり。此の婆羅門は無恩義を作せるも、汝等苾芻、當に此の如くすること勿れ、少供養を得んにも須らく重心を作すべし、況んや復多施なるをや。汝等苾芻、當に是の如くに學すべし』。

[三三]爾の時世尊は王舍城竹林園中に在しき。時に瞻波城に長者あり名けて[三四]寶德と曰ひ、多く財寶に饒にして受用豐足せり。妻を娶りて未だ久からざるに便ち卽ち娠ありければ、其夫遂に與に盛陳して供侍せりき……廣說せること餘の如し。後の時長者は王舍城に往けるに、月滿ちての後[三五]女星月に於て更に一男を誕めり。形貌端嚴にして人の見んを希ふ所、其足下に於て毛あり長さ四指にして黃金色に同じかりき。卽ち使人をして疾く王舍城に詣りて長者に報ぜしめて曰はく、「一男を生めり」。長者問うて曰はく、「何の語をか說ける」。使人曰はく、「長者、男を生めり」。是の如く問へるに皆「長者、男を生めり」と云へり。時に使人曰はく、「何ぞ多問を須うるなる、更に言答せじ」。長者云はく、「汝今何ぞ百度して而し此語を說かざる、我れ今還百過に口に滿つる黃金を與へんとせるに、汝は三度說きぬれば三口の金を與へんのみ」。使をして卻廻して守庫人に報ぜしむらく、「二十俱胝の財寶を與へて、男の與に日每に食せしめよ」。長者は卽ち王所に向うて大王に白して言さく、「我れ一男を

【三二】婆羅門。藏文に dam-dan-lan = jūjaka と音寫せり。赤沼氏固有名詞辭典(p. 251)に Jūjaka とし、Vessantara より兩兒を乞へる婆羅門とせり。(Jātaka, 6)。
【三三】二十億耳の誕生・出家
【三四】寶德。Gru-ldan (チュウ ジイン)、「形影」の義、pot la, potalaka に相當すれば、寶德は其音譯にあらざるか。
【三五】女星月。rgyu-skar gro-bzhin (チュ カル チョ シン)、「牛星」の義、śravaṇa nakṣa-tra なり。

ざらしめければ、惶惶として次を失して本城に還り到り、市中に賣らんと欲せり。大臣見已りて便ち國主に報ずらく、「人ありて王の孫子二人の大を[二八]悅意と名け小を[二九]黑兒と名けたるを將ゐ、慈もて心に憫むなくして市中に唱賣せり」。王は語を聞き已るに情に甚だ悲怆し、便ち使をして往かしめて彼人を遂ひ來かしむらく「兒子をして怨家の手に入らしむる勿れ」。宮人聞き已りて悲懷憂惱し、[三〇]合城愁歎せり。使者は速に王所に將きければ、王は孫子を見て命びて前に近かしめしに、子の身に弊破せる衣服を著し飢瘦羸弱して垢膩塵穢せるを見て心即ち迷悶し、遂に師子座上より身を縱ちて地に投じ悶絶すること久しくして蘇れり。城内の諸人・大臣・輔相・宮中の婇女も、一時に號哭して聲、城郭に震ひて座よりして地に斃れ、諸臣百官并に內宮人も一時に號哭して悲切已むことなかりき。良久しくして乃し甦り諸臣に告げて曰はく、「我兒は彼の山林に在りて檀施を行じて業猶ほ休まざると雖、今使を遣して往いて速に迎へ還らしめよ」。爾の時帝釋天王は復菩薩の所に至り、事既にして了し已るに便ち菩薩を辭して而し退りぬ。久しからざるの後父王亡沒せりければ、諸臣は共に議るらく、「大王は今既に化を捨てぬれば、我等諸人は應に太子を迎ふべし」。是語を說き已るに即ち太子を迎へて冊して立てゝ王と爲せり。既にして王位に昇りしに、大施會を作して內外の諸有悋惜する所なく、廣く一切沙門婆羅門及び諸の貧窮乞求、遠道より來れる者、并に王が眷屬親友人等に施し、普く皆一切に霑洽して種種功德を施與せり。即ち頌を說いて曰はく、

[三一]「菩提を求めんが爲の故に　歡喜心もて
刹利・婆羅門・　薜舍・達維等
旃荼及び惡類　持戒淸淨人に
金銀寶瓔珞　驅使奴僕者
男女妻子等を施與し　俱に捨施の心を以てせるに

【二八】悅意。dga-ba-can（チャベチャン）、「妙意」の義。
【二九】黑兒。nag-po（ナクポ）、「黑色」の義。
【三〇】合城。城内こぞりての意。
【三一】藏文の偈には、「菩提を求めて、刹帝利・婆羅門・吠舍と首陀(羅)・旃陀羅と居家に於ても亦、無畏に施を與へ、金と銀と大象と、馬と珍寶の耳嚴と、奴僕とを、戒を具する者に施し、無貪の心を以て、兒と女兒とをよく施せるによりて、此世と後世とに於て、人は清淨を獲るなり」とありて漢譯とは一致せず。

半頌を說き已るに、是時菩薩は卽ち一手を以て曼低離を執へ、一手を以て澡罐を執持して婆羅門に向ひ、而し頌を說いて曰はく、

「此人淸淨にして雜染なし　言詞辯了にして巧に祇承せん
今我れ玆の所重の妻を以て　仁に奉施し將らん、願はくは守護せんことを」。

時に菩薩は旣にして妻を施し已りて是の如き願を發せるらく、「此施福を以て願はくは早く成佛せんことを」。此語を說ける時、爾の時大地は六種に震動せり。時に婆羅門は遂に夫人を領し斯を去ること遠からざりしに、時に曼低離は心に悲感を懷きて而し是語を說けり、「我れ今已に所敬の夫及び鍾愛せる所の極好の兒女に別れぬ。不審なり、宿因に何の罪業かありし」とて、此曠野に於て[二五]栖遑として哀號せること、彼母牛の犢子を失せるが如くなりき。時に天帝釋は此相を見已りて還本形に復し、曼低離に向うて而し頌を說いて曰はく、

「妙女、我は婆羅門に非じ　亦是れ人にも非じ是れ帝釋にして
能く修羅大天王を壞するなり　今我れ深心に汝を憐念す」。

「汝何の願をか須むるなる、我れ皆之を與へん」。此語を聞き已るに心に歡喜を生じ、便ち卽ち重心に恭敬禮拜し、而し頌を說いて曰はく、

[二六]「千眼天主、我子を救ひ　賤身を離れて解脫を得
[二七]父耶に値見して常に歡樂ならしめんことを　帝釋天主、我願は是なり」。

此語を說き已るに、爾の時帝釋天主は彼妙女と與に廻還して菩薩所に至り、右手を以て曼低離の手を執り菩薩に語げて曰はく、「我れ此女を將つて聖者に寄與す、常に以て供養して仁者に看侍せしめん。來り求る者あらんにも更に須らく與ふべからず、此は是れ受寄なれば。若し他に轉與せんには世人に嫌恥せん」。時に天帝釋は卽ち兒を將れる婆羅門處に往き、彼をして荒迷して措く所を知ら

【二五】栖遑。おちつかざる貌。

【二六】千眼天主。帝釋の異名なり（前註）。

【二七】本文に値見父耶常歡樂とあり。父耶は父爺に同じ、親父なり。

爾の時天帝釋は菩薩と曼低離夫人と倶に決定して希有難行の行を興せるを知りて、三十三天と共に相圍繞して虛空よりして下り、光明照耀して菩薩所居の山林菴所に至り、空中に在りて頌伽他を以て菩薩に告げて曰はく、「〔二四〕……此下に頌あり……」。爾の時帝釋は是頌を作し已るに、菩薩の心をして堅固勇健ならしめんとて而し思惟を作さく、「今菩薩には唯曼低離夫人のみありて以て侍者たり、若し從ひ乞ふあらんには決定して捨施すれば、便ち卽ち人の菩薩に事ふべきなけん。我れ今應に從ひ乞うて曼低夫人を取むべし」。還且らく權寄して菩薩の處に在り已るに忽然として現れざりき。時に天帝釋は後に於て久しからざるに、化して婆羅門身と作し、菩薩の所に至りて而し頌を說いて曰さく、

「此婦の容儀極めて姝好なり　唯獨り心を專にして一夫に事へぬ
斯の如きの尊貴の好夫人　幸に願はくは之を施して我に承事せしめんことを」。

時に曼低離夫人は是語を聞き已りて心に憂惱を生じ彼乞人を瞋りて是の如きの言を作して曰はく

「汝は是れ無羞貪愛の者　世間に滿てる中の極惡人なり
若し是れ法を知り尊儀を識らんに　豈に夫よりして强ひて我を乞ふべけんや」。

是時菩薩は心に悲感を懷きて夫人を廻顧せるに、夫人は偈を以て告げて曰はく、

「我れ今心に愁ひず　亦身苦を憂ひざるも
唯憂ふ、君獨り住せんに　如何がしてか存濟すべき」。

爾の時菩薩は頌を以て夫人に答へて曰はく、

「我れ此處に在らんとも憂ふるを須ゐざれ　我れ堅固を求めて道を壞せじ
汝但悲歎して斯に隨ひ去れ　我れ野獸の如くに林に死なんとも」。

時に菩薩は此頌を說き已るに、心に極歡喜して重ねて頌を說いて曰はく、

「我れ今此に出だせるは末後の施なり　夫人去らんとも後に我に憂なけん」。

【二四】 藥事(二三二頁一五行)に「世人愚癡にして狂迷自亂せり」とあるのみなるも、藏文には「此の如く世間は愚癡惡慧を以て結びつく智慧を持ち、誰にでも享樂を貪る心の羂索を投げ打つに、中にも亦偏き主たる汝は專ら貪なく歡喜を生じて子を與へぬ、故に眞に身分に安穩寂靜無垢無困を獲ん」とあり。

て涙し長吁嘆息せるを聞いて、須臾の間に便ち是念を作さく、「我れ是の如き等の恠を見んこと、決定して彼草菴に於て不善事あらん」。而し頌を說いて曰はく、

「我れ今雙目矚ひ　諸鳥共に哀鳴し
我が心をして哀切ならしむること　子と定んで生離したらんか
是の如く大地は動き　身心並に皆戰き
遍身に今安からじ　定んで知んぬ、離別の事あることを」。

爾の時曼低離は是頌を說き已るに、千種有損の事を思惟して便ち草菴に到り、進みて菴に入り已り遍く諸處を觀ぜるも二子を見ざりければ、心に憂惱を生じて便ち是念を作さく、「我が二童は小鹿と與に而し遊戲をなせるあらざるか、復聚土に於て城を僞りて戲を作せるならんか」。即ち往いて尋求し、既にして尋ねて見ざりければ復是念を作さく、「我を見ざるに由りて菴に入りて睡れるか」。是思惟を作して心に恐懼を懷き、子を求め見んと欲して採れる所の花果は便ち一邊に棄てゝ雙目盈涙して夫足を頂禮し白問して曰さく、「我が二幼童は今何の所にか在る」。爾の時菩薩は頌を以て報じて曰はく、

[三二]「超越せる求乞者　婆羅門は此に詣りぬれば
我れ彼二童を施せり　汝可しく隨喜すべし」。

爾の時曼低離は是語を聞き已るに、猶し鹿母の毒箭に傷けられたるが如く悶絕して地に擗れぬ。復水に居せる魚の地に在りて婉轉せるが如く、譬へば鶉鳥の子を失して哀切せるが如く、牛母の犢を失して悲鳴せるが如くなりき。時に曼低離は是の如きの傷歎の頌を作して曰はく、

[三三]「我が二子の面は花の如く　手足柔輭にして蓮葉の如くなりしに
時を同じくして俱に斯苦を受けんとは　我に別れ孤去して獨如何がせる」。

【三二】「超越せる求乞者」に相當する文は藏文になし。藏文には「我が所に一婆羅門の、望みを以て來りしにより其二兒を彼に與へぬ、それらを隨喜せんは適當なり」とあり。即ち超越せるとは求乞者の形容、出世間の義なるべし。

【三三】我之二子面如花、手足柔輭如蓮華、同時俱受於斯苦、別我孤去獨如何。藏文は蘂本と同じく、此處に多偈あり。

我れ曾て先に諸の愆過ありき　願はくは母、哀憐して容恕せられんことを
我れ幼小にして愚癡なるに由りての故に　教言を遵奉し敬親せざりき
今時慈恩に報ずるを得ず　此の如きの愆願はくは容恕せられんことを」。

爾の時、子等は既にして頌を說き已るに、父足を頂禮して右繞三匝し、雙目盈涙して父を辭して去りぬ。時に[三]菩薩は彼童男の言詞悲切なるを念じ、心に憂苦を懷きて菩提心を發して便ち草菴に入りぬ。是彼の二子纔に草菴を離るゝに、此の三千世界は六種に震動し、無量百千の諸天は虛空に在りて此の如きの言曰を作さく、「嗚呼、奇事なり」と。異口同音に而し頌を說いて曰はく、

「希奇なり、所施の大威德　菩薩是の如くに心に決定し
身生の愛子二童兒を　捨し盡くして己身が心に悔いざらんとは」。

爾の時童子の母、曼低離は既にして果實を採り、獲已りて草菴處に來らんと欲せるに、是の大地六種に震動せるを見て心に便ち驚愕し、速に急ぎ菴に向へり。時に一天子あり、化して母師子となり路を攔りて住せるらく、「菩薩は一切衆生を度脫せんと欲して今二子を捨てたるを見んに、恐らくは此の曼低離は檀波羅蜜に於て心に留難を生ぜん」。曼低離は既にして師子の、路を攔れるを見て頌伽他を以つて母師子に報じて曰はく、

「師子、汝は是れ獸王の妻なるに　何に因りてか我が此道路を攔れる
我れ今汝と共に悉く夫に事ふれば　宜しく速に遠離して緣に隨ひて去るべし
汝は是れ獸王師子の妻　我は是れ人主帝王の妃
仁と共に義は姊妹たるべし　當に須らく路を開いて我が去るを容すべし」。

爾の時天の化せる師子は是語を聞き已るに道を避けて去りぬ。時に曼低離は路に在りて種種の惡恠を見たりき、所謂、虛空に在りて悲哭するの聲を聞き、復山林に居在せる諸の有情類の皆啼泣し

【三】藏文には「其時菩薩は童子の言を念じて非常に慈愛にみち、彼等を念じて心に悲痛しつゝも意に菩提の誓願を發して、苦行林の葉房の中に入りたまへり」とあり。

而し願言を發して伽他を說いて曰はく、

「我れ今此子を捨せん　願はくは大果利を獲て
斯の殊勝の福を以て　苦海の衆生を度せんことを」。

爾の時菩薩は纔に女男を施せるに、而し此大地は六種に震動せりければ、山側に居せる所の諸有仙人は地の震動せるを見て並に皆驚愕し、互に相謂ひて曰はく、「誰の福力を以てして、復何の因緣にてか、而し此大地は忽然として震動せる。今可しく審觀すべし、誰の威力にして而し比瑞ありしかを」。仙衆中に於て一仙人あり、年最尊邁にして善く占相を閑ひ復天文を解せるが、便ち伽他を以て諸仙に告げて曰はく、

「此は是れ菩薩の山林を樂ひ　果を飡ひ水を飲みて身命に資せるに
可愛の童兒今已に捨しぬれば　是故に大地に斯徵ありしなり」。

時に二童子は父情に捨せるを知りて悲號啼泣し、父足を頂禮し合掌して白して言さく、「願はくは父、哀愍して我を捨することなからんことを。我れ今父なからんに何の依にか趣かん」。爾の時菩薩は是語を聞き已るに、心に悒悵を懷きて滿目涙流し、便ち伽他を以て愛童に告げて曰はく、

「子等、汝應に知るべし　我れ愛愍せざるには非じ
衆生の苦を濟はんが爲に　是故に兒が身を捨せり
斯の殊勝の福を以て　苦海の衆生を度し
迷津を出づるを得て　同じく菩提の果を獲せしめんとなり」。

爾の時二童子は父語を聞き已るに、父決定して將つて捨施せんとするなるを知り、悲號泣涙し頂禮合掌して哽咽して言ひ、頌伽他を以つて父に白して曰さく、

「父、今決定して我を施せり　我れ今言を遺して我が孃に囑せん

「我れ今二童を棄てゝ　夫妻して林藪に住せんに
女人の性、悲戀すれば　云何が存へ住するを得ん
後人、我を說くこと莫れ　悲なくて自兒を棄て
己身を捨つる能はずして　而し男を以て將げ施せりと」。

爾の時婆羅門は菩薩に告げて言はく、「刹利童子、應に是の如くなるべからじ。汝は王種に於て而し生長することを得、此界の大地は皆共に知聞し、名は十方に稱ふらく、「一切に隨順して諸の含識に於て大慈悲を生じ、種種に惠施して恭敬供養せること猶し香象の如く、諸の沙門・婆羅門・師長・貧士及び孤寡の類にも皆能く攝受して而し供養を興し、所求の願に隨ひて咸く本心に稱は(しめ)、見ん者は招携して空く過さしむることなく、逢へる所の惠施の福は唐捐せじ。我れ既にして遠くより來り、艱辛備に盡くして求乞する所あり、幸に希望を遂げ(しめ)んことを。心馬調へ難くして定住するに由なく、須臾にして翻覆せんこと常と爲すべからじ、恐らくは本心を退けて惠施する能はざらんには、我をして辛苦せんとも望を失して而し歸らしめん。仁、今應に可しく我本願を滿たして發遣して去らしむべし」。卽ち便ち頌を以て菩薩を讚じて曰はく、

「名は聞えて十方に遍し　能く一切に施せりと
幸に願はくは哀愍を垂れて　我が希望を遂ぐるを得んことを」。

爾の時菩薩は是語を聞き已るに愛子に離るゝが爲に心に憂戚を生じ、便ち自ら念言すらく、「我れ今若し二童子を捨てゝ此の婆羅門に與へんには、我及び曼低は愛子に離るゝが故に大悲苦を生ぜん。若し捨てざらんには我が梵行に於て便ち大に虧違せん。又婆羅門は其本望を失し空語にして而し去らん。我れ今定んで愛子に離別するの憂悲大苦を受けん、此の地處に於て我をして燋然たらしめんとも、終に是れ本誓願に違して我が梵行に虧くること能はじ」。心便ち決定して其男を捨せんと欲し、

爾の時菩薩は是頌を說き已るに心に歡喜を生じ、復頌を說いて曰はく

「我れ今此の慳貪の垢を除き　寶輅もて婆羅門に施與せん
古昔の大仙は皆共に行して　並に無漏菩提處を獲たまひぬれば」。

爾の時菩薩は此願を發し已るに心に歡喜を生じ、此寶輅を持して婆羅門に施與せり。時に菩薩は自ら共男を而し肩上に負ひ、又妃は女を將りて還肩上に安き、路を進んで行り積漸して山林に至り、旣にして林に至り已るに心に少欲を生じ、便ち飛行を修めて依止して住せり。後に異時に於て一婆羅門あり、林間に來り詣りて菩薩所に至り、竊に男女を求めぬ。時に屬[一〇]曼低は果を採りて在らざりき。時に婆羅門は手を擧げ讚歎して菩薩に告げて言はく、「刹帝利童子、願はくは尊勝なるを得んことを」。便ち伽他を以て菩薩に告げて曰はく、

「我れ今侍者なければ　妻と與に諸處に求めぬ
汝が此の二子　願はくは將つて我に惠施せんことを」。

爾の時菩薩は是語を聞き已るに、「愛子を離すとやせん」とて、便ち暫し思惟せり。時に婆羅門は復菩薩に告げて曰はく、「刹利童子、我れ曾て聞けり、汝能く一切に施せりと。今我れ乞求せるに、何が思忖するを須ゐん」。便ち卽ち頌を以て菩薩に告げて言はく、

「汝今名稱は諸方に遍し　能く慈悲を以て一切に施せりと
能く惠施せりとの昔の所聞の如くに　仁、今應に可しく順修して行ずべし」。

爾の時菩薩は是語を聞き已るに、便ち伽他を以て婆羅門に告げて曰はく、

「我れ今定んで身命をも捨てうべし　本願に異心を生ぜざれば
假令、子を以て他人に施さんとも　此に於て終に退轉あることなけん」。

復婆羅門に告げて曰はく、

【一〇】曼低。後に曼低離とあれば mātṛ（母）なるが如きも、又、母なる曼低離とも曼低離夫人ともある故に恐らくは母の名なるべし。藏文には rgya-ŋ-sbyin-ma（チャク チンマ）、「權を與へる女」、「鎖を與へる女」の義なり。

て問うて言はく、「今此の大衆は何に因りてか悲泣するなる」。答へて曰はく、「汝豈に聞かさらんや」とて便ち頌を以て報ずらく、

「城中に太子あり　　自ら象寶を將つて施せるに
王責めて遠く驅擯せり　　是に由りて衆悲啼するならくのみ」。

爾の時太子既にして城を出で已るに諸の侍從に告ぐらく、「汝等迴還せよ、汝今應に知るべし、一切の恩愛は會へるは當に別離すべく、眷屬聚集せんも法として長久せざること、彼行路の同じく樹陰に息はんも、會合すること片時にして要ず當に分散すべけんが如し」。即ち頌を說いて曰はく、

「一切世間人は　　會合せんに必ず離別せん」。

爾の時菩薩は是語を說き已り、行くこと三十里ばかりにして一婆羅門を見たるに、菩薩に來至して告げて言はく、「刹帝利童子、我れ汝が名稱の遠く聞えたるを聞いて[一九]三十驛より故に來れり、四馬車を求めんが爲に。願はくは我に四馬車を施與せんことを」。時に太子の妃は既にして婆羅門の來り乞へるを見て心に輕慢を生じ、麁惡の言詞を已つて婆羅門に告ぐるに即ち頌を說いて曰はく、

「希奇なり、甚だ惡性もて　　告言せる婆羅門よ
林樹間に在りて　　來りて四馬車を乞はんとは」。

爾の時菩薩は其妃に告げて曰はく、「汝、婆羅門に於て惡言を出すこと勿れ」。便ち頌を說いて曰はく、

「若し求乞の人なくんば　　我が施、誰か當に受くべき
菩提に趣かんが爲の故には　　盡く施して慳心を去らん
六度殊勝の福　　是を菩薩の行と名く
菩提を證して　　圓に一切智を修せんがために」。

【一九】三十驛。三十由旬なり。

ん、我れ終に須臾の間暫らくも相捨離すること能はじ、若し乖離せんには我命存せざれば」便ち伽他を說いて菩薩に告げて曰さく、

「虛空に月なからんに光彩なく　大地に苗なからんに實生ぜじ
蓮華池中に水流れんには枯れん　婦人、夫なからんにも亦是の如し」。

菩薩告げて曰はく、「世間の常法として必ず離別あり。汝王宮に於て生長しぬれば好飲食衣服臥具に足し、斯養を以ての故に身肉柔輭なり。[一七]若し山林の間にては草を以て地に敷き草に於て臥し、果を以て食と爲し、花果を採るの時は荊棘を步遊し、常に戒行を持ちては自身にも亦衆人を見んにも心常に堅固に、來らん者には供養するなり」。(妃言はく)、「我も亦決定して意に隨せて捨施し、施さん時に當りて憂惱を生ずること勿らん」。菩薩は復妃に告げて曰はく、「汝應に可しく自ら當に善く籌量すべし」。妃答へて言さく、「我れ聖子が意に隨はん」。菩薩復告げて曰はく、[一八]「若し是の如くならんには、心常に念を發誓願言に寄ねよ」。既にして誓を立て已るに、菩薩は父王の所に詣り頂禮して白して言さく、「願はくは父、過を恕したまはんことを。所施の大象もて他國怨讐の婆羅門に與へたるが故に、是過失に由りて我れ山林に往かんとす。願はくは王が庫藏常に豐にして竭きざらんことを」。王は語を聞き已るに、子と離別せんとして心に悽愴を懷き、憂悲苦惱して便ち子に告げて曰はく、「汝可しく此に住すべし、山林に向ふこと勿れ、意に隨せて布施せよ」。菩薩は伽他を頌して父王に答へて曰さく、

「大地の諸の山林をも　乍ちに廻轉せしめうべけん
我れ乞求者に於ては　施心終に移らじ」。

爾の時菩薩は是頌を說き已るに、父を辭して去りぬ。時に太子の妃及び男女は、諸の侍從の數千人ありしと幷に皆大に泣涙して共に此城を出でぬ。時に一人ありて是の大衆の泣涙哀號せるを聞い

[一七] 若山林間以草敷地於草而臥、以菓爲食、採花菓時步遊荊棘、常持戒行、自身亦見衆人心常堅固來者供養我亦決定隨意捨施、當施之時勿生憂惱、菩薩告妃曰……とあり。

[一八] 本文に若如是者心常寄念發誓願言、既立誓已……とあり藏文にも「若し此の如くならんには、その誓願を汝は(常に)念ずべし」とあり。

と猶し帝釋の[一五]翳羅跋拏の如く、行歩庠序として人の樂見する所なりき……に乘じて諸の眷屬幷に諸の僕從と與に咸共に圍繞せること、譬へば滿月の星漢に耀けるが如く、又復屬三春の際、雜花叢發し泉池淸澈にして衆鳥和鳴せるが以くなりき。菩薩は時に芳園に往いて暫し遊戲を爲さんと欲したまへり。時に他國の怨敵あり、婆羅門に告げて菩薩より大白象を乞はしめぬ。時に婆羅門は卽ち菩薩に從うて手を擧げて而し乞ひ、幷に頌を說いて曰はく、

「諸有人天衆は　[一六]咸く好施の名を聞けり
所乘の大白象は　宜しく我に與ふべし、將ゐ去らん」。

爾の時菩薩は是語を聞き已るに、卽ち疾く疾く象を下り、歡喜心を生じて便ち其象を指し、婆羅門に告げて曰はく、

「我れ今白象を捨て、　喜んで婆羅門に施さん
願はくは三有の流を出で、　速に菩提の岸に趣かんことを」。

時に諸臣あり父王に奏して曰さく、「自在太子は今增長大象を以て他國怨讐の婆羅門に施與せり」。王は是語を聞いて大瞋怒を生じ、便ち使者に敕して自在太子を喚ばしめ、既にして至るに王便ち告げて言はく、「汝今應に我國内に住まるべからず」。太子は是語を聞き已るに便ち自ら念言すらく、「父今我を捨てぬるも、我は今無上菩提を求め一切を利益せんが爲に、智慧の鎧を被て此大象を捨てしなり」。復念言を作さく、「我れ今若し家に在らんには必ず是れ情に隨せて捨施すること能はじ、宜しく應に山林に往いて戒行を堅持すべし。是故に今可しく其家緣を捨て、獨り林藪に居すべく、往りて乞ふ者あらんには誓うて違逆せじ」。是時菩薩は是念を作し已るに便ち本宮に還りて具に妃に告げ知らしめしに、妃既にして聞き已りて夫に離るゝを恐るゝが故に、心に悲苦を懷きつゝ卽ち便ち合掌して菩薩に白して言さく、「聖子、若し是の如くならんには我も亦隨ひ去りて山林中に往か

【一五】翳羅跋拏（airāvaṇaha-ṇi）、守地子、[illegible]地の義、帝釋の乘象なり。

【一六】本文には咸同好施名……とあり。今同の字を聞の字に改む。

は一子を誕めるに、形儀端正にして殊妙觀るべく、顏色光晃として眞金鋌の如く、頭に傘蓋ありて手臂纖長に、額廣く平正に雙肩相連り、鼻高く且つ直くして諸根具足せりければ、親族は字を立てて[一]自在と名けぬ。當びて八乳母を付し、[二]年漸く長大して學に入らしめしに、算計謀策印文祕字は該練せざるなく、工巧技藝は悉く皆通達せり……所謂、象馬車ふ歩の乘馭に善巧に、工射干戈は備に悉さゞるはなかりき。其の自在童子は敬信賢良にして情懷仁讓に、自利利人は是れ其の本行なりき。常に悲愍ありて普く黎元を愛し、慳貪を捨て去りて惠施を修行し、所有財貨は一として慳心なかりければ、擧國知聞して悉く皆傾慕し、四方の遠近百踰膳那の所有孤貧は盡く來りて臻湊せるに、皆乏くるなからしめければ咸く歡心を起せり。菩薩曾て一時に於て車に乘じて出遊して芳園內に趣けり。其車は皆金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・[三]天帝青寶を以てして共に嚴飾をなし、皆微妙の栴檀を以てして轅軛と爲し、其車上に於て皆師子虎豹の皮を以てして莊嚴を爲し、諸の寶珮を點じて見る者愛樂し、駕するに駟馬を以てして其疾きこと風の如くにして園所に趣きぬ。時に聰明智慧の大婆羅門あり、來りて童子に告げて曰はく、

「應に知るべし、世間人は　　皆汝の施を行ずるを聞けるを
寶車は愛重なりと雖　　應に婆羅門に施すべし」。

爾の時菩薩は是語を聞き已りて卽ち疾く車を下り、歡喜心を生じて便ち其車を指し、婆羅門に告げて曰はく、

「我れ今寶車を捨て　　喜んで婆羅門に施さん
願はくは我れ三有を捨てゝ　　無上菩提に趣かんことを」。

時に婆羅門は既にして車馬を得、之に乘じて而し去りぬ。菩薩は又一時に於て大白象……名けて[四]王增長と曰ひ、色白きこと珂雪及び白銀の花の如く、七支圓滿して衆相具足し、皆善安住せるこ

【一】自在（Viśvantara）。
【二】本文に年漸長大令遣入學、等計策印文秘字無不該練、工巧技藝悉皆通達、所謂象馬車步乘馭善巧工射干戈無不備悉……とあり。藏文は藥事の記（律部二十三、二二二頁の十二行）に同じ。等計謀策、印文秘字等は律部十九、註（九の四〇）、（一一の一八）帝釋聲明部の下參照。
【三】天帝青寶。Indra-nīla、卽ち青玉（鴉鶻青）なり。
【四】王增長。「王權を擴張すると稱せらるゝ象」の義。

と問へるには、報じて言はく、「此は是れ我夫なり、復是の如きの形容せりと雖更に他意なきなり」。然く而し國法として、若し女人ありて夫に事ふること貞謹ならんには、人多く敬重して皆供養を爲しければ、此女の到る處には多く飲食に饒なりき。是の如く遊歷して漸く王都に至りしに、諸人聞き已りて皆悉く嗟歎し、或は心に喜樂を生じて外に出で丶遙に觀ずるありき。城中の諸人は[八]斯事を見已るに、其方便なるを謂げて共に譏嫌を起せるらく、「王は女人に多く過患ありと說けるも、豈に此の貞謹の婦人の、手足なき夫を肩上に擔負し、門を巡りて告乞し以て相濟給せるを見ざらんや」。時に守門人は上の如きの事を見て具に王に奏し知らしめしに、王は是語を聞いて敕して喚び入らしめ、女人は內に入りしに王旣にして見え已りて卽ち便ち微笑し、而し頌を說いて曰はく、

「䏶肉を食ひて飢を充し　　我血を飲みて渴を濟へるは
肩に肉摶を負ふて行れり　　何處にか貞謹あらん
惡計もて石栢を求め　　我の崖より落ちて亡せんことを冀へるは
肩に肉團を負ふて行れり　　何處にか貞謹あらん」。

時に此女人は王の斯頌を聞いて、情に羞恥を懷き卽ち便ち低頭せり。諸臣は頌を聞くも其緣を知らざりければ、白して言さく、「大王、所說の頌は是れ何の義利なる」。王は諸臣の爲に次第して廣說せるに、城中の人民は此女人を嫌ひ　共に唱びて惡と爲し擯して國を出ださしめぬ』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「意に於て云何、乃往昔時の小枝とは豈に異人ならんや。我れ今卽ち是れなり、其女人とは今の提婆達多是れなりしなり。但に今時に恩報あることなかりしのみには非じ、過去の世にも亦復如然りき」。[九]『汝等苾芻、復當に諦に聽くべし、提婆達多の無恩無報なりしことを。乃往古昔に一王都あり王を[一〇]自在友と名け、人民熾盛にして安隱豐樂に、正法もて治化して信重賢良に、自利利他して常に大悲を懷き、恒に妙法を求めて諸の黎庶に於て深く戀慕ありき。後に異時に於て妃

【八】本文には見斯事已謂共方便共起譏嫌……とあり。

【九】提婆達多無恩無報前生因緣譚の十。

【一〇】自在友(Viśvamitra)。律部二十三、註(一四の四六)參照。

を紹ぐべかりしに由りて、崖より落ちたるも死なずして水に隨うて漂流して王都の所に至れり。屬、彼國主は子無くして命終せりければ、臣佐國民は共に籌議を爲せるらく、「王既にして子なくして今已に命終せり、我等誰をか立てゝ其位を紹斷せしむべき」。諸の相師を喚んで一人の王と爲すに堪へたる者を覓めしめぬ。時に諸の相師は四方に求覓せり。頌ありて曰へるが如し、

「假令百劫を經へんとも　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　果報還りて自らに受けん」。

是の時小枝は其業の熟して合に王位を受くべかりしに由りて、水よりして出でゝ坐して崖邊に在りき。然り菩薩の威德にて所住の處は光彩異常たるなり。時に諸の相師は遊(行)に因みて彼に至りしに、此大人に王の瑞相ありて國主と爲すに堪へたるを見て咸く皆歡喜し、往いて諸臣に告げて曰はく、「我等は大人にして王の瑞相を具し國主と爲すに堪へたを求め得たり」。諸臣聞き已るに卽ち國人に令して城隍を嚴飾せしめ、其大禮を備へて吉日を選擇し共に冊して王と爲せり。然れども未だ國后あらざりければ、諸臣は諸國の貴族に告令すらく、「若し端正の好女あらんに各嚴飾せしめて將つて王都に赴け、王が意に稱はんには之を納れて后と爲さん」。王は女人に緣りて大苦惱に遭ひければ、深く厭離を生じて心に顧眄するなかりき。諸臣啓して言さく、「大王、當に知るべし、國后にして若し無からんには王が繼嗣を斷たん、諸方の美女は咸く茲に集まりぬれば、冊して后及び諸婇女と爲さんと欲す」。王亦許はずして女人の過患を說けり。福德の有情所在の處には、華果飮食悉く皆甘美にして多く氣力あるなり。爾の時菩薩崖より落ち已れる後は、其山中には華果根莖は並に悉く生せず、設ひ生ずるものありとも苦澁にして味なかりき。彼の二惡人は諸の根果に氣力なきに由りての故に、漸漸に羸弱して存濟する能はざりき。時に彼惡女は卽ち便ち手足なき人を荷負して山よりして出で、諸の聚落に入りて巡行して告乞せり。若し他が見て「此は是れ何の人なりや」

勿れ」とて、根果を將りて食せしめ、便ち妻に語げて曰はく、「可しく慈念を生じて此人を看養すべし」。既にして恩養を蒙り瘡苦漸く差えたるに、其婦は彼に於て情に愛著を生じ、頻頻彼に就りて共に言談を作せり、菩薩の稟性として欲染を行ずること少ければ、時に聚會せりと雖婬情を解することなかりき。然り此山中の所有根果は、菩薩の威力に由りて悉く皆精妙なりければ、婦人は食し已るに彌邪心を益し、其人の所に至りて非法を行ぜんことを求めぬ。彼便ち許はずして答へて曰はく、「我れ幾ど命斷ぜるに幸にして見濟を蒙れり、共に惡事を爲さんには便ち是れ恩に棄かん、汝の夫にして若し知らんには定んで身首を分たん」。婦數求め及りければ、煩惱に逼られて遂に共に交通せるに、深く愛著を生じて暫くも離るゝを欲せず、其の本夫に於て心に戀樂なかりき。彼れ去らしむると雖亦隨はざりければ、便ち是念を作さく、「今此の女人は我に於て耽著せり。私に他婦に通ぜんに乃し是れ大怨たれば我れ定んで苦に遭はん」。即ち共に籌議して其婦に告げて曰はく、「夫若し我が非法を行ぜるを知らんには、必らず當に命を斷つべきこと此れ疑ふべからず」。女人は說くを聞いて之を以て然りと爲して(言はく)、「常に餘計を設くべし」。女人は邪智にして學ばざるに知るなり。即ち衣を以て頭に纒ひ、石に枕して而し臥せり。小枝は果を採りて還りて其傍に至りしに、異狀あるを見て問うて言はく、「賢首、何の所苦かある」。答へて言はく、「聖子、頭甚だ苦痛せり」。小枝報じて曰はく、「何の所作をか欲するなる」。女密に計を懷きて此惡心を生じ、其夫に告げて曰はく、「我れ先に頭痛せるに醫は 石栢[七]を與へて頭に塗りしに卽ち差えぬ」。小枝報じて曰はく、「何處にあるを得るなる、我れ往いて求覓せん」。女曰はく、「彼の崖下山澗の邊に於て斯藥あるを見たり、既に其れ懸絕なれば索を尋ねて下り我は上に在りて持たん」。彼は是れ大人にして爲性質直なりければ邪僞を懷かずして報じて言はく、「爾る可し」。索を以て腰に繫きて懸崖よりして下り其藥を採らんと欲せしに、妻は遂に索を放ちければ崖より落ちて水に墮ちぬ。彼有情は長命の報ありて合に王位

【七】石栢。rdo-dreg(ドレク)、「石の汚物」の義なるも云何なるものなるか明かならず、堅くして溶解するもの、松脂の類ならんか。

卷の第十六

(提婆の僧伽破壞)(承前)

佛、言はく、[一]「復聽け、提婆達多には往昔の時恩報あることなかりしを。乃往古昔に一王都あり人民熾盛にして安隱豐樂なりき。王に四子あり一には[二]大枝と名け、二には[三]副枝と名け、三には[四]隨枝と名け、四には[五]小枝と名け、其四王子は年漸く長大しては皆隣國の王女を娶りて之を以て妻と爲せるに、共に父所に於て逆害心を興せり。父覺知し已りて擯けて國を出だきしめしに、各妻と將に去り、行いて曠野に至りて路糧皆盡きければ共に惡制を立てぬ、「可しく一妻を殺し肉を取りて食に充て用て身命を濟はんには長途を出るを得べけん」。時に小枝は此の如きの念を作さく、「寧ろ自ら死なんとも他命を斷ぜざるべし、更に餘計なければ宜しく已が妻と將に密に他國に走るべし」。是念を作し已りて妻と將に逃走せるに、飢渴に逼られて妻は便ち困乏して前進する能はざりければ、其夫に告げて曰はく、「聖子、我命將に終らんとす、路を涉るに由なけん」。小枝、念を作さく、「我れ[六]羅刹に於て惡伴たらんとも彼が軀命を存せん、此に於て而し終らんにに深く傷惜すべし」。即ち髀肉を割きて食を與へ、又臂を刺して血を飲ましめしに、妻は肉血を食ひつゝ漸漸に徐行して一山谷に至り、根果を採拾して以て身命を濟へり。其山間に於て大河水あり、時に一人あり怨賊に遭へるに因りて其手足を截られ河中に擲著せられたるが苦惱の聲を作して流に隨ひて去れり。小枝は出でたるに因みて苦叫の聲を聞きければ、悲愍の心を生じて聲を尋ねて往いて覓めしに、遂に一人の水に隨ひて流れ下るを見ぬ。即ち河中に入り背負して出ださしめて河岸上に置けるに、手足を見るに俱に無かりければ情に痛切を懷きて問うて言はく、「善男子、爾何の事に因りてか斯の苦楚に遭へる」。其人具に事を以て答へしに、小枝報じて曰はく、「汝今苦しと雖憂怖を生ずること

【一】提婆達多無恩無報前生因緣譚の九。
【二】大枝。Yal-ga (ヤルガ)、「枝」の義。
【三】副枝。long-ma (チュクマ)、「小枝」の義。
【四】隨枝。「隨ひ集まれる小枝」の義。
【五】小枝。sa-ga (サ ガ)、「硬結」の義、葉のつけねの枝をいへるか。
【六】羅刹に於て惡伴となるとは、羅刹と戰ひ羅刹に食はるゝことより免れしむる意。

得ん」。女卽ち懇誠に實信の語を發せるらく、「仁、今實に我心の如念にして、善行王子及び仁が處に於て、情に樂欲を生じて異心なきことを證せんには、願はくは仁が一目平復して故の如くならんことを」。而し此少女が實語を發せるの時、盲人の一目は便ち卽ち開明せりければ、告げて曰はく、「賢女、我は是れ善行なり、弟惡行のために而し我處に於て無利事を爲されたればなり」。女曰はく、「何を以てか知るを得るなる、仁は是れ善行なることを」。卽ち實語を發して此の如きの言を作さく、「我れ惡行のために我眼を刺されし時、我心は彼に於て而し少恨もなかりき。斯言若し實ならんには、我が一目平復して故の如くならんことを」。實語を說ける時雙眼明照せりければ、是時王女は卽ち善行と將に父王の處に詣り白して言さく、「此は是れ我夫主なり」。乃し信ぜざりければ、女は便ち王に向うて具に前事を說けるに、王は甚だ奇怪なりとし、卽ち大禮もて共に婚媾を成ぜしめ已り、多く兵馬を嚴りて其の善行をして還して本城に到らしめ、彼惡行を驅りて善行を冊立し父位を紹繼せしめぬ。汝等苾芻、汝が意に於て云何。善行王子とは豈に異人ならんや、卽ち我身是れなり、其の惡行とは今の提婆達多是れたりしなり。但に今時に報恩あることなかりしのみには非じ、往昔の時も亦復是の如くなりき」。

【三七】如念。藏文には「眞實と實語とにより、太子善行と汝とに樂欲を生じて……」とあり。

らくは諸王子は心に瞋恨を懐かん、是故に我れ今汝と共に平章するなり、汝が心に若爲ぞや」。女、王に白して曰さく、「唯願はくは父王、國内の人に勅じて城邑を嚴淨にし諸國人を集めしめんことを、女自ら簡選せん」。父王は女の所請を允し、遂に境内及び諸外國に勅すらく、「我に一女あり、今出でゝ嫁がんと欲し、諸國人を集めて自ら[二六]駙馬を簡ばんとす」。遂に卽ち城隍を嚴飾せること歡喜園の如くし、卽ち鼓を撃ちて宣告せしむらく、「城中に現在せる所有人衆及び四遠より來れる者よ、王女は夫を求めんとて情に隨せて選擇せんとす、君等力に隨うて莊飾して皆來りて集會せよ」。明、清旦に至り嚴飾せる王女は諸の婇女の相隨へると與に出でしに、歡喜園中の吉祥天女の妙花林に處るが如くなりき。遂に城中百千萬數大衆の中に於て、次第に巡行して自ら夫主を求めしに、其時善行は立ちて一邊に在りて琴を彈じて住せるに……有情の業力にて因緣會合せんには共に相遭遇するなり……彼の琴聲を聞いて心に戀慕を生じ、卽ち花鬘を以て遂に其上に擲げ、告げて言はく、「此人こそ是れ我が天主なれ」と。時に諸の大衆は各憂惱を生じて共に嫌言を出せるらく、「今此の衆内には多くの豪族・諸方の貴勝王子・大臣の年華愛すべく、及び此城内に美妙の男子あるに、如何が此を棄てゝ而し盲人を取りて以て夫主と爲せる」。時に王の近臣は此事を見已りて心に憂惱を懐き、便ち入りて王に白さく、「王、女情に隨せて夫主を求め得たり」。王問ふらく、「如何なりし」。答へて言さく、「眼瞎なり」。王聞きて愁惱し、女を喚び來らしめて問ふらく、「少女、何の意にてか今此の城中には多く賢人貴勝宰輔大臣及び四遠より來れる男子ありて一に非ざるに、何に因りてか愛ますして而し盲人を取れる」。女、父に答へて云さく、「我れ此を愛すればなり」。王曰はく、「若し爾らば宜しく應に彼に就るべし、何の故にか斯に住せん」。女卽ち彼に詣りて告げて曰はく、「仁は是れ我夫なり」。答へて曰はく、「汝は非理に此思惟を作せりとやせん、餘の男子と共に而し交りたればなりとやせん」。女曰はく、「仁者、我に此心なく、是の如きの事を作さんや」。問うて曰はく、「如何がしてか知るを

【二六】駙馬。天子の女婿なり。

して海より出で已るに、疲極して而し睡りければ、惡行は兄を守りしに、遂に其兄の腰下の寶珠を見て卽ち是念を作さく、「兄は好珠を得たるに我は所獲を失せり、我れ今應に兄の目を刺して瞎ならしめ、珠を持して獨り還るべし」。是念を作し已るに先に寶を盜取し、便ち棘針を以て兄の目を刺して瞎ならしめ、之を棄てゝ去りぬ。善行は眼なかりければ歸路を知らざりしに、後に牧牛人は見已りて問うて云はく、「何よりしてか而し來れる」。是時盲人は具に上の如くに說けるに、牧牛人は知りて卽ち慈心を起し、將ゐて家中に歸れり。善行は本性として極めて彈琴を善くせりければ、彼家內に在りて時に彈琴をなせるに、牧牛人の妻は心に愛念を生じ、卽ち染欲を起して盲人に語げて云はく、「我と共に私を行ぜよ」。盲人聞き已るに兩手もて耳を掩ひて白して云はく、「此語を出すこと勿れ、我は聞くを欲せじ、汝は是れ我妹なるに何ぞ此言を出すなる」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『世間の常法として一切有情は心に欲色を貪り、若し相隨はざらんに各瞋恚を生ずるなり。時に彼婦人は意に遂はざるを見て卽ち嗔恨を生じ、心に謗染を起して其夫に告げて云はく、「彼の無目の人は我を婬穢せんと欲せり、如何ぞ家內に此惡人を養ふなる」と』。佛、復諸苾芻に告げたまはく、『世間の常法として、一切有情は所愛の妻に於て、人に侵汚せられんには心に瞋惱を生じ、一切の怨に比するに此怨重しと爲す。此の因緣に由りて其の牧牛人は妻語を聞き已るに、無目人に於て重瞋恨を起し、復是念を作さく、「此人重罪なり、今目なきを見るに卽ち是れ報を受けたるなれば殺害するを須ゐじ、但驅りて出さしめん」。此念を作し已りて卽ち便ち驅出せるに、其の無目人は琴を抱へて而し去り、城邑を巡歷して乞求して活命せり。後の時、父王旣にして崩ぜるの後、其の弟惡行は卽ち王位を紹ぎぬ。無目の人は漸次に乞求して妻の國城に至れり。其妻年長じければ諸國王子は皆從ひて競ひ索めしに、女の父王は其女に告げて曰はく、「先に汝を嫁さんとせる時、善行王子は海に入りしに船沒して死にき。今、王子等ありて競ひ來りて汝を索む、如し汝を嫁せざらんには、恐

し、許ふらく、「共に婚を爲さん」。是時善行は前んで父王に白さく、「父王の庫藏を費損するを欲せざれば、我れ今海に入りて自ら珍寶を求め、得已るに妻を娶らん」。王卽ち聽許せるに、善行は許さるゝや歡喜して裝束し糧を辨へて去らんとせり。惡行は見已りて卽ち是念を作さく、「今此の我兄は自他の國人皆悉く愛敬すれば、海に入りて寶を採り忽にして若し來るを得んには、父王大臣一切國人は倍敬重を生じ、我父は必ず當に策して國主と爲すべく、我に國分なけん。我れ今宜しく一方便を設けて、彼に隨ひて海に入り伺求して之を殺すべし。我身迴るを得んには、樂はんとも樂はざらんとも、父は必ず我を策して以て太子と爲さん」。此念を作し已るに亦父所に詣り父王に白して曰さく、「我れ兄に隨うて海に入り寶を求めんと欲す」。王は聞いて之を許せるに、惡行は歡喜して亦裝束を作せり。是時善行は其城内に於て鼓を擊ち鈴を搖りて遍く衆人に告ぐらく、「我れ海に入らんと欲す、去るを能くする者あらんに應に糧食を辨へ裝束して隨行すべし。我れ商主と爲り水陸の阻難は我れ皆能く護り、我れ皆能く護りて怖畏なからしめん、亦稅を輸さじ」。是語を作し已るに、五百人あり太子の所に至りて太子に白して言さく、「我等請ふ、太子に隨はんことを」。時に吉勝日を取りて卽ち便ち同じく去り……廣く說けること前の如し……乃至、海に入りて卽ち弟に告げて曰はく、「此船にして海中忽にして難破に逢はんには、汝應に我を捉ふべし、恐怖するを須ゐざれ」。惡行報じて云はく、「兄の所敎の如くせん」。船は好風に遇ひて遂に寶所に至りしに、是時船師は太子及び衆人に告げて曰はく、「汝等昔に珍寶の渚ありと聞けるは、今此の處是れなり、種種の寶あれば其が採取に隨さん」。衆人聞き已りて歡喜踊躍し、卽ち便ち舡を下りて種種の寶を取れること、猶し麻麥の其船中に滿つるが如くなりき。善行太子は如意珠を取りて其腰下に繫ぎ、船を廻らして還り、此岸に至らんとして摩竭魚に逢ひて其船を打破せり。是時惡行は卽ち其兄を捉へ、船人の珍寶は皆悉く漂失せるに、唯惡行のみありて、兄の威力を以て此岸に至るを得たり。善行は力を用ひて旣に

長く依止せしめ、眠りても亦汝を守護せるに汝はそを守らざりき」。
(10)「有命を殺し害せる者に諸の法說を說きぬ、惡慧よ、身は破壞して諸の地獄に墮すべけん」。

【一八】提婆達多無恩無報前生因緣譚の七。

【一九】寂靜。yul źi-ba（ユルシベ）、「寂靜國」の義。

【二〇】淸淨諸天。淨居諸天なり。

【二一】提婆達多無恩無報前生因緣譚の八。

【二二】赤白。藏文によるに金色の義なり。

【二三】善行。dge-byed（ゲチエ）、「德を爲す」義。

【二四】惡行。sdig-byed（ヂイチエ）、「惡を爲す」義。

【二五】長大するに至りて、（太子善行は慈悲の念厚く、一切有情を慈しみ、布施を希ひ、布施を喜び滿足して沙門婆羅門貧窮乞人に施をなせり。彼父曰はく、「恒に施をなすべからず、暫らく待て、庫藏は何時も補ひ得ざれば」と）。以上の文を漢譯には省略せるなり。

て此號を聞いて皆悉く悕念し、彼城に來至して彼病人に問うて曰はく、「實に國王は六月中を經て血を出して汝に供養せりや不や」。彼の病惡人は卽ち無恩無報を作して諸人に告げて曰はく、「此の國王は我に於て何をか益せる、身悪血ありて應に棄却すべかりしを、或は以て人に施せるに此に何の悕かあらん」。然り、彼惡人は此語を出し已るに、卽ち地中より火出でゝ此人の家を燒いて一切皆蠱くし、彼の病人は却りて瘦病を得たりき』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の國王とは今の我身是れなり、彼時の病人にして無恩無報なりしは今の提婆達多是れなりしなり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『此の提婆達多には復無恩無報の行ありき、汝等諦に聽け。往昔過去に婆羅痆斯城に一國王あり……廣く前に說けるが如し……乃至、王妃は一王子を生めるに、顏貌端嚴にして其色[二二]赤白に、頭面圓滿せること猶し傘蓋の如く、手臂は垂れ下れること猶し象鼻の如く、兩眉は相連り、額廣く鼻直く、一切肢節は悉く皆圓足し、彼が生まれし時は諸の吉祥事は悉く皆現前せり。生まれ已るに二十一日を經て一切眷屬は、皆來りて集會して諸の喜樂を作せり。是時諸臣は相共に白して言さく、「王子生まれし時百千の吉祥は皆悉く現前せり、此に因りて名を立てゝ號して[二三]善行と爲さん」。……廣く說けること上の如し……乃至、漸く長ぜるに、時に彼善行は性として大慈悲なりければ、諸の有情に於て憐愍心を生じ、常に布施を樂みて沙門婆羅門及び諸の貧窮・遠行人等に濟給せり。爾の時父王は善行に語げて言はく、「今より已後は應に是の如くに恒に布施を行ずべからず、我國の庫藏は供足すべからざれば」。是時王妃は又一子を生めるに、彼子生まれし時百千の災厄・不吉祥の事は皆悉く現前せり……乃至、號を立て名けて[二五]悪行と爲せり。彼れ長大するに至りて……』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「世間の常法として、布施を行ぜんには衆人喜愛して名稱普く聞ゆるなり。異の國王あり其善行の好んで惠施を行ぜるを聞き、遂に女を嫁して善行が妻と爲さんと欲し、多く珍寶車乘僮僕と與に書を作りて使を遣はし、婆羅痆斯國に詣りて其王に報じ知らしめぬ。王は聞いて歡喜

dmyal-ba-rnams-su skye-bar-hgyur //

(1)「嗚呼悲しき哉、世間にかゝる非法は堪へられじ、親昵せる人々の友を殺すに至らんとは」。

(2)「友を殺さん所、何處に亦安隱所は非じ、坐にも行にも住にも彷徨にも（安隱は）非じ」。

(3)「その罪を心に悲れみて偈を以て曰はん、此故に惡慧の有情は應に蜜糖を燃すが如くに燃えん」。

(4)「爲すに堪へ得ざるを爲し、それを以て汝は彼岸の世界に苦惱を受けて悲痛を蒙らん」。

(5)「汝、有害の者は更に有害となり、錯亂し叫喚して極めて堪ふるを得ず、悲しき哉悲しき哉と叫びをあげて大惡苦惱を得ん」。

(6)「不安隱の業を持ち、その暴惡に於てそは如何なる事をも爲し遂げん、親昵せる人々にして友を殺さんをも」。

(7)「法を破り不忍ならんも心に罪ありと知らん、熊は汝を愛せるに拘らず、虎は汝に何を爲せるかを念ずべし」。

(8)「惡慧よ、彼は云何にして友に酬ひんかを知らじ、殺さんとして殺すを得て敵意を持たんものは敵意を見ん」。

(9)「虎の大恐懼起りし時汝を

かせん」。却きて自ら觀察すらく、「我れ一たび生れてより來瞋處あることなかりしか」と。是念を作し已るに其乳母を命びて便ち卽ち問うて曰はく、「我れ幼少の時に瞋りしことあらざりしや不や」。乳母答へて言さく、「生れまし丶より王を抱けるに、我尙ほ瞋なかりき、何に況んや王身をや」。未だ將つて定なりと爲さゞりければ、更に親母に問ふらく、「兒生まれてより來、瞋ありしを見たまへりや不や」。母便ち報じて曰はく、「旣にして王を懷み已るに我に尙ほ瞋なかりき、況んや王自身をや」。王旣にして聞き已るに歡喜踊躍して是の如きの念を作さく、「今藥を得たらんか」。諸醫人に告ぐらく、「我が身上に於て五處に針を下し、刺して其血を取るべし」。諸醫は王に白せく、「病人は卑下にして王は是れ貴勝なり、我今王の身上に於て而し輙ち針を下すことを敢へてせじ」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「一切の菩薩は善く世間種種の事業を解せり。爾の時國王は慈悲心を起して、卽ち自ら針を五處に下して血を出し器をして皆滿さしめ、便ち醫人に付して卽ち粥を作り病人に與へて食せしめぬ。是時國人は王の慈悲もて善く黎庶を養ひたまへるを見て、王子・臣人・后妃・婇女・一切國人は悉く皆啼泣し、共に相謂ひて曰はく、「王は、人を愍みて身命を惜まずして棄捨しぬれば、我等は今や依怙なけん」。王旣にして聞き已りて諸人に報じて曰はく、「汝、懊惱する勿れ、此は惡事に非ざれば」。爾の時大王は其六月に於て日日に血を出して其病人に供へぬ。是時國王は漸く羸瘦を加へて身體に力なかりしに、[二〇]淸淨諸天は王が事を見已りて是の如きの念を作さく、「此は是れ賢劫の菩薩身なれば、若し衰亡せしめんには是れ好事に非じ、我等は天の威力を以て方便して毛孔の中に皆甘露を入れん」。念じ已りて卽ち威力を與ふらく、「王は當に活くるをうべく、病人は差ゆるを得ん」。諸天は加威せるに王は平復するを得、病人も又差えぬ。王は便ち更に病人に五大好村を與へしに、時に彼病人は寂靜城中にて、其城內の王臣宰貴と與に身同類となりければ、八方に傳へ號ふらく、「六月を經て病人に血食を與へて乃し差ゆるを得、及以更に五大好村を賞せり」。八方旣にし

na //
tshog-par mi-hbyuṅ mi-rnams-la //
grogs-po gsod-par-byed-pa yod //
(7) chos hjig-byed-pa mi-bzad pahi //
sems-ni sdig-pa yin-par-çes //
kyod-kyis dom la sdug-pa duṅ //
stag la gaṅ byes dran-par gyis //
(8) blo-ṅan koṅ kyis ji lta bur //
grogs la bya-ba mi-çes-te //
gsod-par-byed-pas gsod hthob la //
ça-kou-can gyis kon rnams mthoṅ //
(9) stag-gi hjigs chen byuṅ-ba na //
kyod-ni yan riṅ bston byas çiṅ //
ñal-ba na yan kyod bsruṅs na //
kyod kyis de-ni ma bsruṅs-so //
(10) grog hkhu kha-na-ma-tho cher //
chos smras-pa-rnams rjod-byed-do //
blo-ṅan las ni shig gyur nas //

頌なる、復何の義かある」。是の時仙人は次第して解釋し、便ち頌を說いて曰へり、[一七]「……」と』、爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、「汝等當に知るべし、往昔の熊とは今の我身是れなり、時の採樵人にして恩を知らざりし者とは今の提婆達多是れなりしなり。昔恩を知らざりしに、今も亦是の如くなりき。汝等當に知るべし」。爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、[一八]『此提婆達多には復無恩無報の行ありき、汝等諦に聽け。昔に一城あり名けて[一九]寂靜と曰ひ、其中に王ありて亦寂靜と名け、國土豐饒して人民安樂に、諸の賊盜なく相征伐せざりき。王は性慈悲にして諸の衆生を愍みて等しきこと一子の如くし、心に惠施を好んで常に法を聽かんことを樂ひ、慳貪あることなくして、沙門婆羅門等及び諸の貧病に供養して心に厭足なかりき。王に常法ありて每日清旦には先に父母に恭え、後に病人を看り、然して國務を治めぬ。時に貧人の重病にして極困せるあり、醫人にして瞻ん者は藥を與ふるを肯んぜずして皆云はく、「定んで死なん」。病人既にして聞いて心に苦惱を懷き、悲泣し遊行して寂靜城に至れり。時に王は春時に諸の群臣后妃眷屬と與に、園觀に遊ばんと欲して行いて城門に詣れり。時に彼病人は杖に拄へて悲泣して王前に跪拜し、其王に白して曰さく、「唯願はくは大王、我が是の如きの病苦を救ひて命をして全きを得せしめたまはんことを」。王既にして見已りて大慈悲を起し、駕を廻らし宮に還りて大臣に命じて曰はく、「我が國內の所有醫人を召べ」。臣は王命を奉じて遂に即ち一切の醫人を召集し、便ち將ゐて王に見えしめぬ。王は病人を喚びて躬自ら親しく看りて（言はく）、「汝等醫人、必ず須らく治差すべし」。諸醫は見已りて大王に白して曰さく、「此人の病を觀ずるに藥極めて得ること難し」。王便ち問うて曰はく、「何の故にか得ること難き」。醫は王に答へて言さく、「要らず一たび生れてより來瞋を解せざる人を須め、而し其血を取りて粥を煮て之を治せんに、方に除差すべけん、如若得ざらんには其病除かじ」。王既にして聞き已りて便ち是念を作さく、「我れ既にして一人の命を救ふこと能はざらんには、此の王位及び身命を用ひてなに

yod //
(2)grogs gsod gnas-skabs gaṅ-du yaṅ //
bde-baṅ-ḥgyur-ba ma-yin-te //
stan lam yin lam-du min//
ḥdug min ḥchag-pa na yaṅ min //
(3)de lhuṅ sñiṅ ni rje-rje-skad //
ḥdi la tshig-tu smras-pa gaṅ //
des-ni sems-can blo-ṅan-po //
ji-ltar khan da ḥbar bshiṅ sreg //
(4)çin-du mi-bzaṅ las hyas-pa //
des kyod ḥjig-rten pha-rol-tu //
sdug-bsṅal reg-paḥi tshor-ba ni //
sim-pa-ma-yin mijoṅ-bar-ḥgyur //
(5)tha-çal-bas kyaṅ tha-çal kyod //
du ḥbod çin-tu mi-bzad par //
kyi-huṅ kyi-huṅ ces sgr-ogs paḥi //
sdug-bsṅal ṅen-pa-chen-po-ḥthob //
(6)mi dgeḥi las can gtum de-la //
de-yis ci-shig byas gyur-

せざらんや。時に熊は大蟲に報じて曰はく、「此人我に投じぬれば終に信に違せじ」。蟲は此語を聞けるも飢乏の爲の故に亦去るを肯んぜざりき。熊は樵人に報ずらく、「我れ今汝を抱へて疲乏しぬれば暫睡せん、少時汝自ら警覺して幷に我を守護せよ」。頭を樵人に枕して便ち思念を起せるらく、「我れ暫らく睡息せんに、當に樵人が爲に十頌法を說くべけん」。此念を作し已りて熊は即ち便ち睡れるに、蟲は熊の睡れるを見て樵人に報じて曰はく、「汝能く幾時にか樹上に而し住するなる、應に可しく熊を樹下に擲ぐべし、我れ食せんに即ち去れば、汝を害するを免れて當に家に還るを得べけん」。時に採樵人は此語を聞き已りて即ち惡念を起せるらく、「此蟲は好語せり、我れ此處に於て能く幾時をか住せん」。此念を作し已りて便ち即ち熊を樹下に擲げて推し落せるに、覺め已りて未だ地に至らざる間に即ち十字を說き、說き已りて地に至りしに、蟲既にして熊を得て遂に便ち食噉し飽足して便ち去れり。樵人は熊が[二六]十字祕密の法を說けるを聞いて便ち即ち思念すらく、「熊に好法ありて應に說いて我に視すべかりしに、遂に貪求を起して即ち煩惱を生ぜるとは」。法を失せるが爲の故に心迷ひて狂走し、十字を說いて曰へり、「……」。時に樵人の親屬は既にして癲狂せるを見て彼を將ゐて家に歸りしに、更に餘語するなくして唯十字のみを說けり。其の親屬等は既にして癲狂せるを見て、即ち醫人及び善呪者を覓めて種種醫方もて療せるも差す能はざりき。時に婆羅痆斯城に遠からざるに林ありて菓多く衆鳥皆集りて美妙の音を出せり。時に彼林中に一仙人の五神通を具せるあり、狂人の親屬は將ゐて仙人に視し、胡跪禮拜して便ち即ち白して言さく、「我が此眷屬は癲狂心亂して餘語を說かず、唯十字を宣ぶるも我等解せず、如何がしてか治差すべき」。仙人報じて曰はく、「此人惡を造りて都べて恩を知らず、大菩薩を殺さんとて樹下に擲げしに、未だ地に至らざる間に十字を說きて以て十頌を攝め、此十字を說き已るに地に墮ちて而し死にて虎のために食はれしに、時に採樵人は便ち即ち癲狂せるなり」。時に諸の眷屬及び仙の門人は皆仙に白して言さく、「云何が十

【二六】　十字祕密法。十字を說いて十頌を攝めたるもの。kyə | min | tshig | dsa | kyi | ci | əə | thun | bden | gro |（チエ、ミン、ツイーク、デエ、チイ、チ、セ、ンガン、テン、ロ）、「嗚呼、非ず、語、の、惡、依止、有命」。それを以て十字祕密の法とし、十頌中の一字を集めたるものなり。これを十頌は後に示せり。

【二七】　十頌法文。藏文に出せる所次の如し。

(1)kye-ma kyi hud hjig-rten hdir //
cho-ma-yin-pa mi-bzad-de//
tshige-par mi-dbyuh mi-rnams l. //
groga-lo gsod-par-bye-pa

て國王に報じて曰はく、

「大王、今當に知るべし　此れ實の熊身に非じ
是れ勝上の菩薩にして　當に無上果を獲べく
三世の供養に應ずれば　大王、須らく塔を起すべし」。

時に王は聞き已るに諸大臣に勅して種種の香本を取めしめ、往いて熊窟所に詣り其身を焚燒して塔を起し、種種華香を安置し繒旛蓋を懸けて灑掃し供養せるに、國王大臣及び諸人等は共に制を立つるらく、「每一年中、同じく集りて供養せん」。共に制を立て已りて塔を禮して去りぬ。一切人民にして若し來りて彼塔を禮し及び供養するものあらんに皆天に生るゝを得たりき』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「往昔の熊とは今の我身是れなり、昔の採樵惡人とは今の提婆達多是れなりしなり。昔時に早に已に無恩無報なりしに、今時も亦復無恩無愧なりき、汝等、當に知るべし」。爾の時世尊は復諸苾芻に告げたまはく、『此の提婆達多には復無恩無報の行ありき、汝等諦に聽け。往昔婆羅痆斯城に一貧人あり常に柴樵を取りて賣りて以て活命せり。其人、後に一時に於て繩斧を執持して山林に詣り、一樹邊に至りて其樵を採らんと欲せるに、遂に[一五]大蟲に逢ひければ驚怕して却き走げて一大樹に上りしに、樹上に熊ありしを覺らざりければ、見已りて復怕れて敢へて更に上らざりき。熊は驚怕せるを見て漸下して報じて言はく、「汝、怕るゝを須ゐざれ、但我に依投せよ」。樵人聞き已りしも亦敢へて近づかざりしに、熊は見て悲愍して自ら來りて執へ抱き、其樹上に於て安隱處を選び熊は抱きて坐せり。是時樹下の大蟲は其熊に報じて曰はく、「此は是れ無恩の衆生なり、後に汝を殃害するなるに何ぞ守護を須うるぞ、當に可しく樹下に擲ぐべし、我れ須らく之を食ふべければ、若し食ふを得ざらんには、我れ終に去らじ」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『世間の法として、歸投する者あらんには尚ほ自ら守護するなり、何に況んや菩薩にして來りて歸投するあらんに而し守護

【一四】提婆達多無恩無報前生因緣譚の六。

【一五】大蟲。虎なり。

ければ、婦兒眷屬は悉く皆憂惱して言へり、「風雨に漂はされたりとやせん、及び虎狼に食はれたりとせん、將た汝死にたりとやせん」と。已にして度大雨して禽獸多く死にたるに、汝今云何がしてか活くるを得たる」。時に採薪人は熊に收養せられたるを說けり……廣く上に說けるが如し。獵師問うて曰はく、「彼熊は今何の山、何の窟に在りや、願はくは汝我に視さんことを」。時に採柴人は獵師に報じて曰はく、「我れ今縱死なんとも亦却りて山林に入ること能はじ」。獵師は智ありて多く巧言を以て種種に勸化すらく、「我れ若し殺し得んに汝に多分を與へて我は一分のみを取らん」。其人卽ち貪心を起して遂に便ち却き迴り、彼の熊處を視さんとて行いて窟邊に至り遙に熊を指し視せり。是時獵師は其窟門に於て多く柴薪を積み、火を以て之を熏ぜるに、時に熊は烟火に逼まられて困苦して死なんとせりければ、卽ち頌を說いて曰はく、

「我れ此山中に住しては　一人をも害せず
果及び樹根を食して　常に慈悲の念を起しぬれば
我れ今命盡きんと欲して　當に復何の計をか作さん
自ら過去の業を念ずるに　善惡今に報を得ん」。

時に熊は此頌を說き已りて卽ち便ち命終せり。時に彼獵師は熊の死に已れるを知り、卽ち窟中に入り熊を取へて皮を剝ぎ、分ちて三分と作し彼の樵人に語ぐらく、「汝は肉の二分を取れ、我は一分を取らん」。時に採樵人は手を以て肉を取りしに、肉を取る時に當りて兩手俱に落ちければ、獵師見已りて唱言すらく、「奇なる哉、奇なる哉」獵師は己が肉をも亦將ち行らずして便ち城に却り入り、希奇の事を以て王に聞奏し、說いて國人に向へるに、王旣にして聞き已りて親しく自ら往看し、熊皮を收取して寺中に往詣し、鍾を打ちて衆を集め、遂めて熊皮を將つて僧衆の前に安き、王は僧を禮し已りて諸の僧衆の爲に上の如きの事を說けるに、寺中の上座にして阿羅漢果を證せるが頌を以

「物、海中に墮ちんに失し　夢に得ては寤時に失し
惡人に承事せんに失し　無恩人を救濟せんに
此更に大失と爲す　我れ汝より何をか索めん」。

鳥は頌を說き已るに卽ち便ち飛び去れり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「往時の啄木鳥王とは卽ち我身是れなり，彼の無恩師子王とは今の提婆達多是れなりしなり。先に恩を知へず亦報を知へざりしに、今も亦是の如くなりき。汝等、當に知るべし」。世尊は復諸苾芻に告げて曰はく、[一三]『提婆達多には復無恩無報の行ありき、汝等諦に聽け。往昔婆羅痆斯城に一貧人あり、常に柴樵を取りて賣りて以て活命せり。其人復一時に於て繩斧を執持して往いて林邊に趣き、將に柴を伐らんと欲して卽ち非時の大暴風の七日息まざるに逢ひければ、風雨を避けんが爲に漸次に經歷し、遂に山邊に至りて一石窟を見たりき。卽ち中に入らんと欲して將に窟門に至りしに、熊の內に在るを見たりければ驚怖して却き走げぬ。熊は驚き走ぐるを見て便ち彼を呼びて云はく、「善男子、來れ、汝，我を怖るゝ勿れ」。其人復彼熊の呼ぶを聞けりと雖、猶ほ恐怖を懷き躊躇して立ちて前まず却かざりしに熊は彼の住まれるを見て卽ち抱へて窟に入り、驚怖せしめずして諸の美果と食するに堪へたる樹根とを與へぬ。養ふこと七日を經て第八日に至るに、熊は自ら外に出でゝ其風雨を看ひしに、風雨の歇みたるを見て卽ち美果を與へて發遣して去らしめければ、其人長跪合掌して白して言さく、「我れ供養を蒙けて身命活くるを得たり、我れ今より後何を以てして恩に報ふべき」。熊卽ち報じて曰はく、「汝、但外人に向うて我が此に在りて住するなるを導說するなからんには卽ち報恩と爲す」。其人卽ち便ち熊を遶りて行道し、一匝を經已るに其熊に報じて曰はく、「我れ終に敢へて餘人に報じ知らしめじ」。此語を說き已るに便ち卽ち而し去りぬ。其人行いて婆羅痆斯城門に至りしに、一獵師の遊獵を行ぜんと欲するに見え、先に共に相識りければ獵師問うて曰はく、『汝、多日に家中に還らざり

【一三】提婆達多無恩無報前生因緣譚の五。

ければ羸劣飢痩せり。彼鳥遊戲して師子王を見、卽ち便ち問うて曰はく、「阿舅、何の故にか羸痩せること此の如き」。師子答へて曰はく、「我れ痛苦するあればなり」。時に鳥問うて言はく、「何の故にか痛苦せる」。其の師子王は……廣く上に說けるが如し。鳥は復報じて曰はく、「我れ爲に苦を治せん、汝は是れ諸獸中の王なれば、能く恩を報ぜんとて毎日の中常に我に食を與ふるや不や」。師子王報じて曰はく、「汝が所須に依ひて常に能く供給せん」。鳥便ち思念すらく、「我れ方計を作して其骨を除却し、去り却ける後を待ちて然く始めて知らしめん、師子の睡れるを待つて方に可しく骨を除くべし」。既にして念を作し已るに、暫し樹に遊びて其食を求覓せり。時に師子王は涼風の吹くに遇ひて遂に便ち美睡せりければ、鳥は睡れるを見已りて木を以て口に著れて審細に更に看ひ、遂に口中に入りて骨を銜みて出だし、樹上に在りて師子王の睡眠より覺むるを待ち、後に骨を將つて之に示さんとせり。時に師子王は須臾にして睡寤めたるに、遂に喉中の骨去れるを覺えて痛なかりければ、躊躇して嚬呻せるに、鳥見て歡喜し樹より飛び下りて骨を以て之に示し師子に報じて云はく、「阿舅、苦痛は皆此骨に由りてなりき」。師子歡慶して彼鳥に報じて云はく、「外甥、我れ久しく苦痛せるに今除差するを得たり、我れ一生に供養し承事せんと欲す、唯願はくは外甥、日日に此に來らんことを」。鳥は此語を聞きて歡喜して去りぬ。後に師子王は正しく鹿を食せるの時、其の啄木鳥は鷹に逐はれて驚怖し、飢急りて飛びて師子に投じ、鷹に逐はれ飢急れるの怖事を說いて(言はく)、「願はくは舅、我に一餐の食を賜はんことを」。時に師子王は頌を以て答へて曰はく、

「我れ當に殺害を行ずべし　惡性にして亦惡行たり
我が牙齒は鋒利なり　我口に入りては出づるを得んや
應に當に自ら忻慶すべし　今復更に何をか求めん」。

鳥此語を聞いて亦頌を以て答ふらく、

て坑を出づるを得んことを知り、遂に癡人を負ひて漸漸にして而し出でしに、此に由りて疲極して身體乏困せり。當に彼時に於ては一切禽獸は悉く人語を辨せりければ、時に獼猴王は花癡人に問ふらく、「汝、何の事に因りてか深坑に落在せる」。時に花癡は……廣く上に說けるが如し。是時菩薩は便ち是念を作さく、「此の採果人にして其果を得ざらんには必ず當に罪を受くべけん、我れ今應に與に菴沒羅果を取るべし」。菩薩は困れたりしと雖、遂に高巖に昇り其果を摘み取りて擲げて癡人に與へしに、彼人得已りて便ち自ら食足し餘殘の果子は〔一〇〕衣裓に之を盛りぬ。獼猴は樹を下りて花癡人に報じて言はく、「我れ今疲乏せり、少時睡らんと欲す、汝可しく警覺して我を守護すべし」。花癡(人)答へて言はく、「好し、我れ警覺せん」。獼猴便ち睡れるに、時に花癡人は而し是念を作さく、「我が路糧盡きぬれば若し果子を食せんに何を以てか王に奉ずべき、應に獼猴を殺して曝らして乾脯と作し、將つて路糧に充てんには方に達するを得べけん」。時に彼惡人は恩を知へざりしが故に遂に惡念を起し、大石を擎げ取りて獼猴の頭を打ち骨髓俱に破れて遂に命終を致せり。爾の時空中に一天神あり、此事を見已りて卽ち頌を說いて曰はく、

「承事し恭敬せること　猶し善友の如かりしに
是の如きの人ありて　恩報を知らざらんとは」と』。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等、當に知るべし、往昔の獼猴王とは卽ち我身是れなり、其の花癡惡人とは今の提婆達多是なりしなり。但に過去に恩を報ずるを知へざりしのみには非じ、今も亦是の如くなりき、苾芻當に知るべし」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『〔一一〕提婆達多には復無恩無報の行ありき。汝等、諦に聽け。往昔の時、一山林の種種花果あるありき。時に一鳥あり、名けて〔一二〕啄木と曰へり。其林の一邊に師子王ありて尋常に鹿を殺して食へるが、後に一鹿を殺して遂に便ち食噉せるに、骨、咽中に横はりて出だすを得る能はず、痛苦すること多時にして、食を得ること能はざり

【一〇】衣裓。形函の如くにして一足あり、花を盛りて擎げて供養する具、一說に長方形の切にて肩にかけ、手を拭ひ物を盛るとせり。

【一一】提婆達多無恩無報前生因緣譚の四。

【一二】啄木。bya-ciṅ-rta-mo shes-bya-ba(木を啄くと云はるゝ鳥」の義。

と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「爾時の鹿王とは今の我身是れなり、時の無恩溺人とは今の提婆達多是れなりしなり。過去に無恩なりしに、今も亦是の如くなりき」。佛、[八]諸苾芻に告げたまはく、『提婆達多には復無恩無報の行ありしこと、汝等、諦に聽け。往昔に婆羅痆斯の邊界聚落に、中に於て一の花鬘を作るの人あり、其聚落の傍に一河水ありて、花鬘を作るの人は每に常に水を渡りて花を取らんとて來去せり。後に一時に於て河水を渡らんと欲せるに、此の河中に於て非時に一菴沒羅果を得たりければ、持して王城に詣りて守門者に與へしに、守門者は得て通事(人)に轉餉し、通事人は得て便ち王に奉進せり。王は其果を得て復王妃に與へしに、妃は其果を得て卽ち便ち之を食せるに以にして果香美なりければ復王に從ひて索めぬ。王は復彼の通事人に問らく、「何處にて果を得たる」。通事人答ふらく、「我れ守門人邊より之を得たり」。王卽ち守門人を喚ばしめて問ふらく、「果は汝何よりして得たる」。守門人云はく、「我れ花鬘人邊よりして而し此果を得たり」。王は復花鬘を作る人を喚ばしめて問うて言はく、「何處にて果を得たる」。花鬘人答ふらく、「河中よりして得たり」。王は花鬘を作る人に語ぐらく、「汝、河所に往いて更に此果を覓めよ」。其の花鬘人は既にして敕を得已るに、自ら糧食を齎して復河所に往き、水を尋ねて覓めて行いて一山に至りしに、高崖上に於て遙に果樹を見たりき。其巖嶮絕にして一切の獼猴も皆上る能はず、何に況んや人に於てをや。其の鬘を作る人は多日に尋覓せるも上る處あることなく糧食復盡きければ、其人心に念ずらく、「我れ王敎を得て其果を覓めしめたるに、今既にして獲ず、如何がしてか歸るを得ん」。是念を作し已るに、身命を顧みずして嶮崖に手攀して漸漸に而し上りしに、未だ果所に到らざるに遂に便ち墜落し、下に深㵎ありて其中に墮在せり。時に菩薩の、獼猴王と作れるありて山谷に遊行せるが、花鬘人の深坑に墮在して諸の飢苦を受けたるを見ぬ。菩薩は發心より諸の含識を救はんとて善巧方便するなり。[九]時に獼猴王は遂に其計を設けて、一大石の輕重、人の如きを取り、卽ち便ち背負し調習運轉し

【八】提婆達多無恩無報前生因緣譚の三。

【九】本文に時獼猴王遂設其計取一大石輕重如人、卽便背負調習運轉知得出坑遂負鬘人漸漸而出由此疲極身體乏困……とあり。藏文には「其處に行き得ざるも、諸の石を以て巧に取扱はんに出し得んと思惟し、それを知りて、其時㵎穴より漸次に出でゝ引上げぬ」とあり。

「牆を穿ちて物を盜まん者　　此を名けて賊と爲すのみならじ
恩あるに而し報いざらんに　　是を名けて大賊と爲す」。

王は此語を聞いて卽ち彼人に問ふらく、「此頌は何の義なる、我れ今解せず」。時に彼の溺人は卽ち便ち王が爲に具に前事を說けるに、王は是を聞き已りて恩を知へざる溺人の爲に頌を說いて報じて曰はく、

「無恩の溺人よ　　何の故にか汝が身は
地に陷入らざる　　何の故にか汝の舌は
破れて百分せざる　　何の故にか金剛は
刀杖を執持して　　汝を殺害せざる
一切鬼神は　　何ぞ汝を打たざる
汝極めて恩に背けるに　　何の故にか報少きぞ」。

王は彼鹿は是れ[九]大菩薩にして大威德あるを知りて諸臣に告げて言はく、「應に鹿王の與に大供養を設くべし。卿等は速に廻りて道路を掃灑し、繒旛蓋を懸け、衆の名香を燒け、我は鹿王と俱に城に來り入らん」。諸臣は敕を聞くや具に王敎に依へり。是時國王は金色の鹿をして前に在りて行かしめ、國王大臣は鹿王の後に隨ひて婆羅痆斯城に入り、宮門の前に於て師子座の種種に莊嚴せるを置けて鹿王に坐を請じ、王及び月光夫人・後宮婇女・王子・人民は圍繞して而し坐せり。是時鹿王は方に妙法を說けるに、王及び夫人・一切の大衆は旣にして法を聞き已るに、卽ち鹿王を請じて爲に五戒を受け、一切有情を菩提に歸せんことを願ぜり。王は是を見已りて心に大に歡喜し、鹿王に向うて言さく、「王が所遊處の山林曠野は悉く鹿王に施しまつらん、我れ今より後は永く殺生を斷じ、亦國人をし遊獵するを得ざらしむれば、願はくは諸の有情は諸の住處に於て心に怖畏なからんことを」

して作さゞるなし。[七]時に彼の溺人は心に五欲を貪り、卽ち往時に怨のために執縛せられたるを思ひつゝも復是念を作さく、「我れ今恩に背きて彼に怨を(以て)報いんと欲す、未來に前の如きの苦事あらんを懼れざれば、應に共に怨を(以て)報ゆべし」。是念を作し已るに、王宮の門の種種に莊嚴を見ざるに詣り、王の正法に依ひて守門者をして大王に白し知らしめぬ。王旣にして聞き已りて卽ち喚びて入らしめしに、其人、王に報ずらく、「山林中の諸の花果を具せるに於て一鹿王あり、身皮金色にして千鹿圍遶し、至極端正なりき。我れ其處を知りぬれば王をして見るを得せしめん」。王は語を聞き已りて心に大に歡喜し、諸の羣臣を召して其兵衆を將ゐしに、外國の朝者と王の嚴駕せるを見て亦皆隨從し、其人は引き前みて鹿王所に往けるに、兵を布いて圍繞せり。時に彼鹿王が親友の烏は恒に高樹に在りしに、遙に兵衆の來りて漸く林中に近づけるを見たりければ、烏は卽ち樹に下りて鹿王に報じて言はく、「前に溺れたるの人は是れ背恩の者なり、王は須らく救ふべからざりしに、我言を用ひざりければ」。鹿王問うて言はく、「何の所以ありてなりや」。烏、鹿王に答ふらく、「前の溺人は諸の兵衆を將ゐて來りて鹿王を獵らんとすればなり」。時に彼の千鹿は兵衆の聲を聞いて驚怖し走げ散ぜるに、是時鹿王は卽ち是念を作さく、「我れ今若し走げんに彼の諸兵衆は尋いで我を覓め亦千鹿を殺さん、我れ寧ろ守死して彼の千鹿を活かさんには」。是念を作し已るに、爾の時鹿王は國王所に詣りしに、往時の溺人は遙に鹿王を見て卽ち兩手を擧げて王に指示して言はく、「金色の鹿王とは彼に來れる者是なり」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『衆生若し極惡業を造らんには、來生を待たずして今卽ち見に受くるなり。溺れたるの人は恩を知へずして惡業を造りしに由りての故に、手づから鹿を指し訖るに手卽ち地に墮ちぬ。王は是事を見て恠みて而ち問うて言はく、「何ぞ忽にして是の如くに兩手は墮落せる」。時に彼の溺人は苦痛悲泣して卽ち便ち王に向うて頌を以て答へて曰さく、

【七】本文に時彼溺人心貪五欲卽思往時被怨執縛復作是念我今背恩欲報彼怨不懼未來如前苦事應報其怨作是念已詣王宮門見種種莊嚴依王正法使守門者白大王知………

恐らくは彼れ我皮を取むれば」。
但我を見たりと說くこと莫れ

我れ今汝に於て更に一事を求めん、汝、我願に隨ひて我を見たりと言ふことなからんに、即ち是れ恩に報ぜるなり。何を以ての故に。我が身端嚴にして色相具足しぬれば、恐らくは彼人知りて我を殺して皮を取めん、是故に我の此に在るを見たりと說くこと莫れ」。彼人答へて言はく、「敬しんで王願に從ひ、我れ定んで說かじ」。即ち起ちて合掌し、右繞三匝して禮を作して去りぬ。爾の時月光夫人は五欲の樂を受けて疲極して睡りしに、後夜の中に於て夢に鹿王の身皮金色にして微妙端嚴に、師子座に坐して諸の國王及び諸の人衆の爲に甚深の法を說けるを見たりければ、夢中に思惟せるらく、「我れ此夢を作せり、定んで是れ眞實なり」。歡喜して而し寤めければ、即ち王に向うて夢に見たる所を說けるに、王既にして聞き已りて其の所夢を信ぜるもの心に驚怖を生ぜるらく、「何ぞ鹿の師子座に處して衆の爲に法を說くことあるを得ん」。時に月光夫人は王の爲に[六]悅意の語を陳說せるに、王大いに歡喜せりければ、即ち便ち懃懇に王に請ふらく、「爲に金色の鹿を覓めんことを」。王は羣臣に敕して國內の獵師をして總召して集めしめ、諸臣は命を奉じて諸の獵師を召して將に王所に詣れり。王、獵師に問ふらく、「我れ聞けり、國內に金色の鹿ありと。汝等見たりや不や、若し見たるあらんには羂繩を以て繋りて傷損せしむるなく、將來して我に見えしめよ」。時に諸の獵師は大王に白して言さく、「我獵せること多年なるも此鹿を見ず亦曾て聞かざりき。大王、既にして鹿何處に在りと聞けりや、請ふ、王の爲に捉へん」。王、諸臣に敕して鼓を擊ちて宣令せしむらく、「見たることありし者を訪ねて、來りて我に報じ知らしめよ、我れ即ち當に五百の聚落を賞せん」。諸臣は敎を受けて鼓を擊ち、衆を集めて王の賞募を宣せり。時に彼の溺人は王の重募を聞いて即ち便ち念を作さく、「我れ今貧困なり、王の重賞を貪求せんと欲すとやせん、當に恩に報じて其鹿を說かざるとやせん」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『世間の常法として、一切有情は五欲に繫られ惡と

【六】悅意語。藏文に「それより月光夫人は歡喜と稱讚とはれやかなる語言を持てる一切の行爲によりて王を須臾の間に歡喜せしめて……」とあり。

に夫人あり號して[五]月光と爲し、但作せる所の夢は皆眞實ありき。彼の國內に於て一菩薩の而し鹿王と作れるあり、其形金色にして殊勝端正に、人見ん所の者は厭足あることなかりければ、自ら端正なるを知りて心に常に怖畏し、恒に獵師を怕れて常に其身を藏せり。時の諸の禽獸は互に相倂語せりければ、時に一烏ありて鹿王の所に詣り、心に愛念を生じて是の如きの語を作さく、「阿舅、云何が驚怖しつゝ草を食ふなる」。金色鹿王は便ち卽ち報じて曰はく、「我れ端正たれば一切の獵師にして若し我を見んには恐らくは相殺害せん、此が爲に草を食ふにも心に常に驚怖するなり」。烏尋いで報じて曰はく、「我れ夜中に於て亦鵂鶹を怕るれば、我等と舅とは今より已去は更相に守護せん。若し白日に於ては我は高樹に處して好惡を監察し、事あらんには正に報ぜん。若し夜中に至らんには王、當に觀視して事あらんには我に報ずべし」。彼國中に一大河の林側に在るありき。時に二人の先に怨讎あるありしが忽然として相逢へるに、一人は力勝れければ遂に怨人を縛りて河中に擲げぬ。其水流急にして彼人漂溺せるに便ち是言を作さく、「誰し能く我を救ひ得んには我れ與に奴と作らん」。時に彼鹿王は五百の眷屬と與に河に至りて水を飮めるに、此聲を聞き已りて慈悲心を起し、便ち水中に入りて溺人を救はんと欲せり。是時老烏は王所に來り詣りて便ち卽ち告げて言はく、「此の黑頭蟲は都べて恩義なければ救拔を須うる勿れ、若し難を離れ得んに必ず鹿王を害せん」。時に彼鹿王は慈悲の爲の故に烏言を取らず、溺人の所に往いて背負して出で、既にして岸上に到り口を以て繩を解き蘇息し已るを待ちて便ち卽ち報じて言はく、「子、須らく當に知るべし、此は是れ歸路なり、汝當に好く去るべし」。時に彼溺人は胡跪合掌して鹿王に報じて言はく、「我れ王邊に於て更に此命を得たり、願はくは常に供侍して奴と爲り、以て王が恩に報ぜんことを」。時に彼鹿王は卽ち頌を說いて曰はく、

「汝、奴と爲るを用ひず　　亦承事するを須ゐじ

【五】月光。zla-hod-ma（ダーオウマ）、「月光」の義。

卷の第十五

(提婆の僧伽破壞)(承前)

佛、諸苾芻に告げたまはく、『[一]提婆達多は今時に無恩無報たるのみには非じ、昔より已來亦無恩無報たりしこと、汝等善く聽け、我れ當に爲に說くべし。頌に攝して曰はく、「……」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「乃往古昔に此の婆羅痆斯城に一大村あり、村を去ること遠からざるに一大林の花果茂盛し流泉浴池あるあり、一仙人ありて[二]憍戶迦と名け、彼林中に在りて每に墮落せる果を食し衣は樹皮を服して、心大いに慈悲なりければ種種の禽獸は皆咸く衣附せり。一母象あり彼林中に在りしが、當に產せるの時に師子吼を聞いて心大いに驚怖して大小便を失し、子を棄てゝ走げて林中より出でぬ。時に仙は果を採りたりしに小象子を見て其母を失へるを知り、仙、慈心を起して彼象子を愍み、尋いで其母を覓めしも求め得ること能はざりければ、遂に象子を收りて自の住處に至り、而し之を鞠養せること子の如くして異るなかりき。既にして漸く長大せるに便ち仙處の花果樹木を壞しければ、仙、既にして見已りて遂に卽ち瞋責せるに、象は仙の瞋れるを知りて更に林を損せざりき。象は又漸く大にして心極めて猛盛なりければ後に復林を損せるに、仙は又訶責せるも象は怖懼するなく、仙は苦瞋を加へしに象は害心を起して仙人を踐まんと欲し、仙走りて室に入りしに象は鼻牙を以て仙の半屋を損ひ、便ち卽ち自ら走りぬ。時に樹林の神は卽ち頌を說いて曰はく、「……」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「往昔の仙人とは今の我身是れなり、往昔の象とは今の提婆達多是れなりしなり。往昔に無恩なりしに、今も亦是の如くに善報することあることなかりしなり。汝等當に知るべし」』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『[三]提婆達多に復無恩無報の行ありしこと、汝等諦に聽け。往昔に此の波羅痆斯に時に國王あり、[四]大帝釋軍と名け、國土豐饒にして人皆快樂せり。王

【一】提婆達多無恩無報前生因緣譚の一。

【二】憍戶迦。藏文には「憍戶迦と同種族の仙人」とあり。

【三】提婆達多無恩無報前生因緣譚の二。

【四】大帝釋軍。dbaṅ-phyug-c en-pohi-sde (ワン チュク チェーン ポ、イ デェ)、「大自在の軍」なる義。

痛苦劇は皆悉く除滅せん」。是語を作したまひ已るに、時に提婆達多は衆苦頓に除こり、死より蘇るを得たりき。卽ち其手を觀じて方に佛臂なるを知り、而し是念を作さく、「此は是れ沙門喬答摩の臂なり」。提婆達多は無量劫より來惡毒を懷けるに由りての故に、承くるに佛威を以てしこ劇苦を脫るゝを得たるを知れりと雖、便ち是語を作さく、「其の悉達多は善く能く是の如きの醫療を學得し、以にして此法に因りて能く自ら人を濟へり」。是に四面に而し大聲を出せるらく、「如來世尊は誠實の語を以て提婆達多の劇苦痛惱を救ひたまへり」と。提婆達多衆及び諸人は此聲を聞ける時、慶喜せざるたく皆共に稱讃すらく、「世尊の神力は不可思議にして甚だ奇特たり」。時に諸苾芻は提婆達多處に詣りて告げて曰はく、「佛若し救ひたまはざりせば、當に死ぬべかりしこと疑なかりき」。提婆達多曰はく、「佛は善術を知れり、方に衆人皆已に隨はんことを欲せるが故に而し斯法を作せるのみ」。諸苾芻曰はく、「提婆達多、此語を出すこと勿れ、宜しく速に默然すべし、當に自心に觀ずべし、豈に佛の救ひたまへるに非ざらんや」。提婆達多曰はく、「何ぞ彼れ能く我を救ふに關らん、腹內の酥消しぬれば痛苦自ら除これるならくのみ」。時に諸苾芻は既にして此語を聞いて恩報するなきを知り、世尊所に詣りて而し佛に白して言さく、「唯願はくは如來、提婆達多を視聽したまはんことを、世尊彼に於て大慈悲あるに、彼は今無恩無報なるなり」と。

見て啓拜せるに、母問ふらく、「汝、父邊に於て何等の物をか得たりし」。答へて曰はく、「更に物を得ず、唯、此書を與へしのみ」。母曰はく、「汝が父欺蔑して徒に辛苦を獲たるのみ」。子言はく、「我父は甚だ智慧たれば實に欺蔑せじ」。卽ち其頌を讀みて句義を思惟して之を解釋し、旣にして了知し已りて卽ち餅處に詣りて方に掘りて之を取り、將つて家中に至りて大富貴を成ぜり』。佛言はく、「苾芻、過去の父とは卽ち我身是れなり、彼の其子とは今の侍縛迦是れなりしなり。我れ方便を以てして之に敎訓せるに、便ち我意を知れり、今も亦是の如くなりき」。爾の時侍縛迦は而し是念を作さく、「如來の大金剛の體は微少の酥膏にては何ぞ以て足すとせん、應に[三]二斤を用ふべきなり」。是念を作し已るに卽ち二斤の熟酥膏を量り取りて佛鉢中に置へぬ。世尊は食し已りて而し少許を殘して諸苾芻に與へたまひしに、苾芻は禮して世尊に謝せり。時に提婆達多は此事を見已りて而し是念を作さく、「我も應に酥を食すべし」とて、而し侍縛迦に問うて言はく、「沙門喬答摩は酥、幾多を食せりや」。侍縛迦答へて曰はく、「正しく二斤ありき」。告げて言はく、「我も亦二斤を食せんと欲す」。侍縛迦曰はく、「如來世尊は大金剛體なれば所食の酥量は能く消化せしめんも、汝が及ぶ所には非じ」。提婆達多曰はく、「我も今亦是れ大金剛體なり、何ぞ消すること能はざらん」。卽ち二斤を取りて便ち之を食せり。明淸旦に至るに、佛の食したまへる酥は皆悉く消化せりければ、侍縛迦は粥を持して來りて世尊に奉じ、如來は卽ち食したまへり。提婆達多は酥猶ほ腹に在りしに亦其粥を食せりければ、腹卽ち大に痛み旋轉叫喚して晝夜に安からざりき。阿難陀は自の親族に於て心を顧戀ありければ、其の痛を受くるを聞いて情に悲愍を生じ、世尊所に詣りて佛に白して言さく、「提婆達多は多く酥を食し未だ消せざるに、粥を喫せるが爲に腹痛みて安からざるなり」。爾の時如來は卽ち百福莊嚴の功德千輻輪臂無畏相の手を舒べ、山壁を通徹して提婆達多の頂を按へて諸苾芻に告げて曰はく、「我れ提婆達多及び羅怙羅に於て、心に平等を生じて更に異あることなければ、提婆達多の諸

【三】二斤。sraṅ sum-cu-rtsa-gnis（三十と二の laṅ）、一波羅は四兩、32×4＝128量なり。

與に名けて[一八]善德と曰へり。其長者は是の如きの念を作さく、「我に今子あれば、諸の財寶を將りて可しく往いて興生すべし」。更に思念を作さく、「我れ若し興生せんに、後に於て多く財物を留めんには、恐らくは我妻の我が財を用ひ却らんを畏る」。此念を作し已るに、便ち少しく財を留め自餘の貴寶は金餅中に於てして之に滿盛し、復眞珠を以て餅項を玟珞し其餅口を蓋ひ、將つて[一九]寒林の[二〇]馬耳樹下に至り坑を掘りて之を埋め、別に資財を取りて卽ち往いて興易し、他國所に至り倍加して利を得たりき。便ち更に妻を娶り……乃至、又多子を誕めり。其前妻の子は漸く長大せるが而し母に問うて言はく、「我父何に在りや」。母曰はく、「承聞するに汝が父は今某城に在り、多く財寶に饒にして甚だ安寧を得たりと。汝可しく彼に往くべし、父若し汝を見んには應に相濟及すべけん」。子は此語を聞くや便ち父處に詣りしに、市内に入るや父子相見えぬ。父は子が面を見て卽ち便ち之を識り、喚びて言はく、「汝、何よりして來り、何所に至らんと欲せるなる」。其子具に上事を陳べしに、父は己が子なるを知りて將に住處に歸らんとして告げて言はく、「汝實に他に向うて「是れ我子たり」と言ふこと莫れ、住處に至らんに心に怜愛を生ずれば」とて、衣服を洗浣し重く情念を加へければ、自餘の妻息は而し之に問うて言はく、「此は是れ何人ぞや」。父言はく、「此は是れ我友の子なり」。其の餘子等は父が怜を加ふるを見て而し是念を作さく、「此れ必ず是子は我等が財を侵さん」。父便ち念を作さく、「我れ今宜しく彼に財本を與へて所住に還らしむべし、若し此の如くせさらんには自餘の子等は定んで妬心ありて而し之を傷害せん」。父復念を作さく、「若し彼に財を與へんに、其物の爲の故に此に在る親戚は恐らくは之を殺害せん、卽ち書頌を作りて而し其子に與へん」。書頌を作し已るに子に與へて遣りて還らしめぬ。諸親は道に在りて卽ち捉へて問うて言はく、「汝が父は何等の物をか與へたる」。答へて曰はく、「唯、一書を與へしのみ」。諸人等曰はく、「必ず方便を以てして彼をして歸還せしむるならくのみ」。とて、意に隨せて之を放ちければ、便ち本國に達し母を

【一八】善德。rig-dhn-ljthun（リウ　ダン　トーン）、「正（善）を集める」義。

【一九】寒林。屍林なり。

【二〇】馬耳樹。gta rin-rna（シン　タ　ナア）、「馬の耳の樹」なる義、梵音 aśvakarṇa にして娑羅樹なり。

るに、即ち王舍城に入りて上の如きの語を說いて(言はく)、「若し後に提婆達多にして更に不善惡業を作さんとも、更に佛邊に來りて恥ぢて其過を說くこと勿らん」。[一三]爾の時世尊は慈悲の爲の故に其の身患を現じたまひしに、時に[一四]醫王活命は佛の爲に酥藥を合煎せり……藥を[一五]那羅若藥と名く。佛、醫王に問ひたまはく、「此藥は不可思議なりや」。醫王は世尊に答へて曰さく、「實に不可思議なり」。佛は復醫王に告げたまはく、「極不可思議なりや」。答へて曰さく、「實に極不可思議なり」。世尊は復醫王に問ひたまはく、「汝、知りうべきや不や」。答へて曰さく、「我れ知れり、世尊」。佛復醫王に告げたまはく、「汝實に知れりや不や」。答へて曰さく、「我れ實には知らじ」。佛德醫王に告げたまはく、「何者が是れ不可思議なる」。答へて曰さく、「牛、水草を食ひて能く甘露を出し、此酥と合煎して此の妙那羅若藥を成ぜり」。佛復醫王に問ひたまはく、「何者が極不可思議なる」。答へて曰さく、「佛、世に出でゝ能く妙法を說き、能く僧衆をして教に依ひて行ぜしめたまはんこと、此は是れ極不可思議なり」。佛復醫王に問ひたまはく、「何者が是れ汝の知りうべきなる」。答へて曰さく、「一切は皆死に歸して佛を除けるの外は脫るゝを得る者あることなきを」。佛復醫王に問ひたまはく、「何者が汝の實に知らざるは」。答へて曰さく、「我れ人の滅するを知るも去處を知らず」。爾の時諸苾芻は此語を聞き已るに心に疑惑を生じ、遞に相問うて曰はく、「此の侍縛迦は善く佛意を解せりや」。爾の時諸苾芻は即ち世尊に問ふらく、「此の侍縛迦を看るに善く佛意を知れるなりや」。佛即ち諸苾芻に告げたまはく、「此の侍縛迦は是れ今世に善く佛意を知れるのみには非じ、亦前世の中にも善く佛意を知れり。汝等諦に聽け」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『往昔一村落中に一長者あり名けて[一六]善有と曰ひ、其家極富なりき。後に一妻を娶り妊みて十月に至り乃し一女を生みければ、二十一日に至り諸の眷屬を集めて名字を立てんことを乞ひ、其の眷屬等は即ち此孩女の與に名けて[一七]善行と曰へり。乃し復一子を生ずるに至りければ、諸の眷屬を集めて名字を立てんことを乞ひ、其の眷屬等は

【一三】侍縛迦善知二佛意一前生因緣譚。

【一四】醫王活命。活命は Jīvaka (耆婆) の譯、律部八、註(五の一二四)耆婆童子參照。

【一五】那羅若藥。藏文には lnga-mdah (チャ ダー)、「鐵箭なる藥」の義、Nārāca に相當するも明かならず。僧祇律第五卷、五分律第二十卷に轉輪聖王が應に服すべき藥を世尊に奉上せる記あり。此轉輪王の藥と今の那羅若藥とは相通ずるものあるに非ざるか。

【一六】善有。藏文には名を出さず、唯「富みて寶を受用する居士」とあるのみ。

【一七】善行。rgyan-bu-can (ドウブ チャヤン)、「頸飾を持するもの」の義。

留めて所住の處を看らしめ、餘の者は餘樹に往いて更に重ねて菓を求めぬ。仙衆去りて後五百の賊ありて林中に來至し、彼樹邊に到りて菓の豐盛せるを見て遞に相議して曰はく、「我等は何の方便を作してか此樹菓を食ふべき」。尊者告げて曰はく、「汝等は斧を取り此樹を截割して菓をして地に落さしめんに、汝等は以て食足しうべけん」。樹神は尊者の此語を聞いて心に悲怖を生じて其樹を悋惜せり。時に樹神は其身を搖動せるに菓は悉く地に落ちければ、其時賊衆は俱に共に菓を食へり。菓を食ふこと既にして已るに時に仙卽ち至り、樹摧けて菓悉く落ち盡せるを見て、仙衆は卽ち彼の林を守れる仙人に問ふらく、「今此樹菓は是れ誰が食ひ盡せるなる」。彼の守れる仙人卽ち上事を以て具に諸仙に答へしに、爾の時諸の仙人は卽ち樹神を責むるらく、「是れ汝無智にして善を憎み惡を愛すれば、善人に果を與へずして惡人に果を與へぬ」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「昔の無智の樹神とは今の阿闍世王是なり、賊中の尊者とは今の提婆達多是れなりしなり。此の阿闍世王は先時に無智にして惡人に菓を施して好人に供養せざりしに、今も無智にして提婆達多に物を與へて淸淨苾芻に供養せさりしなり」。

爾の時世尊は摩揭陀より往いて王舍城羯蘭鐸迦竹林園中に至りたまひ、大苾芻の同住して前後に圍遶せると與なりき。爾の時提婆達多は王舍城に在りしが、人間に於て常に非法不善を行ぜり。是時城內の衆人は皆往いて佛に白さく、「是時提婆達多は諸の惡不善を作せり」。世尊は旣にして此語を聞いて阿難陀に告げて曰はく、『汝、一苾芻と將に隨へ行いて王舍城に入り、街衢曲曲の人間にて若しは婆羅門及び長者居士を見んに是の如きの語を說け、「提婆達多及び同伴にして若し非法罪惡を作さんとも、人〻は須らく佛法僧を謗るべからず。何を以ての故に、此人は佛の法行を行ずる人に非れば」と。若し人ありて「提婆達多は神通威德あり」と說かには汝は彼に報ぜよ、「提婆達多は先に神通ありしも、今悉く退失して一の神驗もなきなり」と』。爾の時阿難陀は佛の教を受け已

趁ひ却けて摩納婆を安置し、亦聚落をも廻(與)し訖れり。其の旃茶羅は國王に報じて曰はく、「此の摩納婆は是れ我が弟子なり、呪法、我に過ぎ勝るべけんや」。時に國王は摩納婆に問ふらく、「汝が今の呪法は是れ旃茶羅が教へたるなるべきや不や」。時に摩納婆は大王に答へて曰さく、「我れ自ら苦行せること一年、日夜に絶たずして此法を求得せり、旃茶羅は虚しく我に與ふべけんや」。時に摩納婆は親教に無恩なりしが故に、當に卽ちに其呪驗を失し、後の所作の法は皆悉く成ぜざりき』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の摩納婆は神呪を學得せるに、無恩を爲せるが故に呪力退散せりとは、今の提婆達多の身是にして、(今)也無恩を爲せるが故に神通退散せるなり。諸苾芻、當に知るべし、法を學ばん所の親教に無恩なるべからず。今より已後、[一〇]無恩ならんには越法罪を獲ん」。

爾の時世尊は王舍城より伽耶山に詣りたまひしに、時に提婆達多は五百苾芻と共に人間に行けるに、阿闍世王は提婆達多を愛樂せりければ、卽ち五百車の粟を與して提婆達多に奉上し、路糧と作さしめんとて中路に至りしに諸苾芻に逢へり。苾芻は將車人に問うて曰はく、「此は是れ誰が車なる」。車人報じて曰はく、「此は是れ阿闍世王が提婆達多に奉與せんとてなり」。苾芻は此語を聞き已るに、卽ち佛所に至りて而し其を說いて言はく、「時の阿闍世王は無智なり、五百車の粟を將つて提婆達多に與へて以て供養を爲せるに、世尊に與しまつらざらんとは」。世尊は諸苾芻に告げたまはく、『其の阿闍世王は是れ今世に無智にして亦無智人に供養せるのみには非じ、往昔先世にも亦乃し是の如くなりしこと、汝等諦に聽け。乃往古昔に東天竺に一村あり、村を去ること遠からざるに一林あり、其林は種々に花果茂盛して流泉浴池あり、五百仙ありて彼林中に住し、常に自落せる菓を食し、及び樹根を取りて以て飲食を爲し、亦樹皮を取りて以て衣服と爲せり。爾の時一[一二]阿摩菓樹あり、枝葉地に垂れて極めて將に豐熟せり。彼五百仙人は樹邊に至り、樹に隨ひて菓を乞へるに、其樹神が心に菓を食悋せるが故に地に落さしめざりき。是時仙人は菓の落ちざるを見て、復一仙を

【一〇】無恩禁。

【一一】阿闍世王無智前生因緣譚。

【一二】阿摩菓樹。amba の略、菴沒羅菓なり。

むるを得たり。爾の時親教は牀上に轉動して當に卽ち牀桄忽に折れしに、牀桄折るゝの聲を聞いて摩納婆は自ら起きて是の如きの念を作さく、「親教の牀桄摧折して臥するに安隱ならざれば、我れ牀下に於て脊もて牀桄に替へて地に墮さしめざらん」。此念を作し已るに、卽ち牀下に於て桄に替りて著けて地に墮さしめざりき。醉人の常法として、身力ある盛者は二更に醒悟すべかりしも、其親教は飮酒すること多くして[八]初夜に至るも醒めず、嘔變して摩納が身上に遍かりき。摩納婆は自ら身上の變吐狼藉せるを見て卽ち是念を作さく、「我れ若し變の爲に言を出さんには、親教聞き已りて睡を得ること能はざらん」。此念を作し已るに、桄下に言はずして默然して住せり。卽ち半夜に至り親教醒覺して、摩納婆が牀下に於て身上に嘔變して極めて以て狼藉せるを見て親教卽ち問ふらく、「牀下は是れ誰なりや」。弟子答へて曰さく、「我は摩納婆なり」。親教問うて曰はく、「云何がしてか牀下に在るなる」。弟子卽ち上の如く總說せるに、親教は此語を聞き已るに大歡喜を生じて摩納婆子を喚ぶらく、「我れ汝が處に於て甚だ大に歡喜せり、起ちて牀下を離れ洗浴し淸淨にして來れ汝に法を賜へん」。時に摩納婆は卽ち衣裳を洗ひて平旦に來至せるに、親教見え已りて卽ち呪法を賜へぬ。時に弟子は法に依ひて呪を學得し已るに、其弟子は急心の爲の故に卽ち是念を作さく、「我れ此呪を得たり、宜しく城中に於て其呪法を作して自ら神通を試むべし」。念じ已るに卽ち虛空に騰り、香山に往いて非時の花果を取り、波羅痆斯に來至して國內大臣に獻奉せるに、大臣は得已りて卽ち國王に獻じければ、王、大臣に問うて曰はく、「卿、何處にてか此の非時の好花を得たる」。大臣報じて曰さく、「南天竺國の摩納婆は將來して臣に與へければ、臣卽ち大王に奉獻せるなり。彼の摩納婆は極めて呪法に明かにして族姓も亦大たり、[九]唯願はくは大王、此の呪師摩納婆を留めんことを。此の旃茶羅を用ひて作せん、勿に此の旃茶羅は是れ淨行ならざれば、願はくは卽ちに趁ひ却けて、所有豪落は摩納婆に廻與せんことを」。既にして語を作し已るに爾の時國王は臣が所請に依ひ、旃茶羅を

【八】本文には至於初夜不醒嘔變變於摩納身上、摩納婆自見身上變吐狼藉卽作是念我若爲變出言……とあり。變變の二字、明本には偏の一字とし、後の變吐及び變出は偏吐、偏出とせるも今改めず。但、變變を變偏と改めたり。變はみだれる義なり。

【九】本文に唯願大王留此呪師摩納婆用此旃茶羅作勿此旃茶羅是不淨行願卽趁却……とあり。傍線せる所難解なり、明本には勿を幻となせり。

禮して世尊に白して曰さく、「〔五〕提婆達多は十力迦攝に於て無恩なりしが故に、所有神通は皆悉く退散せるなりや」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「其の提婆達多は是れ今時に無恩にして此が爲に神通を失却せるのみには非じ、亦是れ往昔にも無恩の語もて神通を失却し所學の法は皆悉く退散せりき。汝等諦に聽け」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『此の波羅痆斯城に昔國王あり名けて梵授と曰へり。時に彼城中に一〔六〕旃荼羅あり、善く〔七〕健陀羅呪禁の法を明らめ、彼呪力を承けて虚空に飛騰し、香山中に詣りて非時の奇妙の花果を採得し、持して城内に還りて國王に奉獻せるに、王は見て恭敬し心に歡喜を生じ、即ち聚落を以てして旃荼羅を賞せり。爾の時南天竺に一摩納婆あり、呪を學ばんが爲の故に波羅痆斯城に往いて諸人衆に問ふらく、「誰か呪法を善くせる」。諸人は問はれて摩納婆に報ぜるらく、「今此の國内に旃荼羅あり、善く治呪を能くせり」。摩納聞き已りて便ち旃荼羅處に合掌して白して言さく、「我れ今此に來れるは親敎に奉侍せんとなり」。旃荼羅問うて曰はく、「何の事を求めんが爲にとて而し供養せんと云へる」。答へて曰はく、「呪を學ばんが爲の故に」。旃荼羅即ち頌を說いて曰はく、

「明呪は人に惠まず　呪を以て換へんに方に與へ
或は時に承事するを得　或は復珍財を獲ん
若し是の如くせざらんには　縱死なんとも傳授せじ」。

時に摩納婆は親敎に報じて曰はく、「我に珍物なければ唯空しく承事供養せんに、幾時にてか此呪を得べき」。旃荼羅曰はく、「十二年の中我に承事供養せんには、由みて得不を知らん」。摩納婆は呪を學ばんが爲の故に一心に承事供養して漸く一年に至りしに、爾の時旃荼羅は親會の爲の故に、身飮酒して醉ひ夜に家中に至れり。弟子摩納婆は見て即ち是念を作さく、「今親敎は身醉ひぬれば、我れ今夜に於て可しく重加して親近侍衞すべし」。即ち與に牀席を敷設し、親敎を臥著して安隱ならし

【五】提婆神通退散前生因縁譚。

【六】旃荼羅（Caṇḍāla）。四姓の外、屠殺を業とする下姓なり。

【七】健陀羅咒禁。藏文には「明呪(vidyā)と密咒(mantra)とに精通せり」とあるのみ、健陀羅に相應する語なし。

律の如く佛所教の如くに諫誨せん時捨てんには善し、若し捨てさらんには白し了れるの時麁罪を得、初番を作し了れる時亦麤罪を得、若し第三番羯磨結了せん時而し捨てさらんには僧伽伐尸娑を得るなり。爾の時世尊は卽ち本座に於て諸の聲聞弟子の爲に、[四]破僧隨伴學處を制せんと欲して諸苾芻に告げて曰はく、「汝、諸苾芻、且らく起つべからず、僧伽は少しく事業あるあれば」。世尊は知りて故に問ひたまはく、「……廣く說けること前の如し……」。世尊卽ち便ち孤迦里迦等の四人に問うて曰はく、「汝等は實に提婆達多が和合僧伽を破せんと欲して破僧伽の方便を作し、勸めて諍事を作して堅執して住せるを知りつゝ、汝は共に伴と爲り邪に順じ正に違して、諸苾芻に告げて、「大德、彼苾芻の所有論說の若しは好若しは惡を共ふこと(莫れ)……乃至、出家人の所應作には非じ」……廣く說けること前の如し。

爾の時具壽十力迦攝波は提婆達多に神通道法を敎へければ、當時諸苾芻は十力迦攝波に告げて曰はく、「何の故にか上座は惡人提婆達多に神通道法を敎へたる」。十力迦攝答へて曰はく、「具壽、我れ當に此れ惡行の人なるを知らざりしなり、我れ若し此人の惡行なるを知りたらんには、神字をも敎へず、何ぞ通の道法を論べ敎へん」。爾の時衆多苾芻は提婆達多に告げて曰はく、「汝、利益供養を得たるは、悉く是れ上座十力迦攝の德によりて汝が是の如きを得たるなれば、應に往いて十力迦攝を供養すべきなり」。其の大衆は此の語方便を作して、提婆達多を以て十力迦攝に往か(しめ)、提婆達多に敎へて此惡心を捨てゝ行善せしむるを得せしめんとて、此事を說かんが爲の故なりしなり。時に提婆達多は諸苾芻に告ぐらく、「彼の十力迦攝は我に何の力をか與へたる。我れ自ら日夜に常に求めて精進苦行しぬれば、第一禪定力を得たるなり、是れ我れ自ら求めて十力迦攝が事に關らじ」。時に提婆達多は此の無恩の語を作しければ、所有神通は皆悉く退散せり。時に諸苾芻は提婆達多が無恩の故に神通退散せるを知れり。爾の時諸苾芻は疑ありければ、世尊の所に詣り佛足を頂

【四】破僧隨伴學處。僧殘法第十一隨順破僧違諫學處なり。律部十九、註(一五の八)の本文を抄出せるなり。

伽は應に許すべし、僧伽は今提婆達多の與に白四羯磨を作して其事を曉諫せんとするを。汝、提婆達多、和合僧伽を破せんと欲して鬪諍事を作して執受して住すること莫れ。提婆達多、應に和合僧伽と與に歡喜して諍ふなく、心を同じくし說を一にして水乳の合せるが如くし、大師の敎法をして光顯するを得せしめ、安樂にして住すべし。汝、提婆達多、應に破僧伽事を捨すべし。白すること是の如し』と。次で羯磨を作すべし、『大德僧伽聽きたまへ、此の提婆達多は和合僧伽を破せんと欲して鬪諍事を作し執受して住せり。諸苾芻は已に別諫を作せるも、別諫せるの時其事を堅執して肯へて棄捨せずして云はく、「此事眞實にして餘は皆虛妄なり」と。僧伽は今提婆達多の與に白四羯磨を作して其事を曉諫せんと欲す。「汝、提婆達多、和合僧伽を破せんと欲して鬪諍事を作して執受して住すること莫れ。提婆達多、應に和合僧伽と與に歡喜して諍ふなく、心を同じくし說を一にせんこと水乳の合せるが如くし、大師の敎法をして光顯するを得せしめ安樂にして住すべし。汝、提婆達多、應に破僧伽事を捨すべし」。若し諸具壽にして提婆達多の與に白四羯磨を作して、「汝、提婆達多、和合僧伽を破せんと欲して鬪諍事を作し執受して住すること莫れ、汝、提婆達多、應に和合僧伽と與に歡喜して諍ふことなく、心を同じくし說を一にせんこと水乳の合せんが如くし、大師の敎法をして光顯するを得せしめ安樂にして住すべし。汝、提婆達多、應に是の如きの破僧伽事を捨すべし」と、其事を曉諫するを忍許せんには默然したまへ、若し(忍)許せざらんには說きたまへ。此は是れ初羯磨なり』と。第二第三にも亦是の如くに說き、「僧伽は今已に白四羯磨を作して提婆達多を諫め竟んぬ。僧伽は已に聽許したまへり、其默然せるに由りての故に。我れ今是の如くに持つ」と』。時に諸苾芻は既にして佛の敎を奉じ已りて……[三]乃至……「汝は沙門に非ず、隨順に非ず、不淸淨なり、出家人の所應作には非じ」。……若し苾芻、方便を興して僧伽を破せんと欲せんに皆惡作罪を得ん、若し別諫時に事として捨てざらんには皆麁罪を得ん、若し白四羯磨を作して法の如く

【三】乃至。大正藏(24, 171 b7——172 b6)に相當し、國譯律部十九、二七二の二行以下、二七五の七行までの文と同じき故に今乃至して省略せり。

故に破僧伽事を作さんと欲するなり」。此因を見たるが故に諸苾芻は往いて佛所に詣り、提婆達多の、和合僧及以法輪を破せんと欲せるを說かんとて、此因緣を以て具に世尊に白さく、「天授は意ありて僧・輪を破せんと欲せり」と。爾の時世尊は諸苾芻等に告げて曰はく、「汝等宜しく應に天授を別諫すべし、若し更に是の如きを作す流類あらんには、應に可しく諫めて曰ふべし、「天授、汝、和合僧伽を破し、鬪諍事を作して執受して住すること莫れ。天授、應に和合僧伽と與に歡喜して諍ふなく、心を同じくし說を一にせんこと水乳の合せるが如くし、大師の教法をして光顯するを得せしめ、安樂にして而し住すべし。天授、汝等今應に破僧伽事を作すを捨すべし」と。時に諸苾芻は佛の教を奉じ已るに、尋いで即ち提婆達多を別諫せんとて告げて言はく、「天授、汝、和合僧伽を破し、鬪諍事を作して非法にして而し住すること莫れ。天授、應に和合僧伽と與に歡喜して諍ふなく、心を同じくし說を一にせんこと水乳の合せるが如くし、大師の教法をして光顯するを得せしめ、安樂にして住すべし。天授、汝今應に破僧伽事を作すを捨すべし」。時に諸苾芻別諫せるの時、提婆達多は其事を堅執して心に棄捨するなくして云はく、「此事眞實にして餘は皆虛妄なり」。時に諸苾芻は具に此緣を以て而し世尊に白さく、『大德、我れ已に提婆達多を別諫せり。我等僞に別諫を作せるの時、提婆達多は堅執し捨てずして(云はく)、「此事眞實にして餘は皆虛妄なり」と』。爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等應に提婆達多の與に白四羯磨を作し、衆に對ひて之を諫むべし。若し更に餘の是の如きの流類あらんには、應に是の如くに諫むべし。當に坐具を敷き次で揵椎を鳴らし、應に先に白言すべく、復僧伽を總集し、集め已るに一苾芻をして白羯磨を作さしめよ。應に是の如くに作すべし、『大德僧伽聽きたまへ、此の提婆達多は和合僧伽を破せんと欲して、鬪諍事を作して非法にして住せり。時に諸苾芻は已に別諫を作せるに、別諫せるの時其事を堅執して肯へて棄捨せずして云はく、「此れ眞實にして餘は皆虛妄なり」と。若し僧伽にして時至りて聽さんには僧

起さず亦怖畏せず、善惡自ら現れんに、應に以て可住すべきが如し。我も亦是の如くにして、我法を受學せんには常に汝を瞋責せんも、好者は可しく自ら習眞すべく、惡者は自ら退散するに任すなり。我が所說の法は清淨なるが故に、應に怖畏すべからず、汝等當に知るべし」。此言を說き已るに卽ち坐よりして起ち、自の　微訶羅中に入りたまへり。

爾の時天授苾芻は四苾芻……一は孤迦利迦と名け、二は騫荼達驃と名け、三は羯吒謨洛迦と名け、四には三沒達羅達多と名く……に語げて言はく、『汝等可しく來りて我と同伴すべし、彼の喬答摩沙門は見に今世に在り、我等五人は同意して大衆を破し及び法輪を破せんに、我等が滅後、名は後世に稱へて我は、「具壽提婆達多等は昔沙門喬答摩の在世に、多く神通威力ありて提婆達多等の五人は衆僧と法輪とを破するを得たり」と、是の如きの名出づるを得て我名は傳へて四方に流れん』。彼の孤迦利迦は提婆達多に報じて曰はく、「我等は佛世尊弟子衆の和合住せるを破すること能はじ、及び彼法輪も亦破すること能はじ。何を以ての故に、天授よ、叉世尊聲聞弟子は多く神通威力あり、及び天眼ありて遠く我心を知りぬれば、若し我等にして事を平章せんに他は悉く具に知らん。此者が爲の故に我等は其の和合僧を破すること能はじ」。天授は孤迦利迦等に報じて言はく、『我に一の好方便あり、我等は諸の老宿苾芻邊に往いて供養を啓請せん、「汝等が所須の一切の物は、我等供給して闕少せしめざらん」と。更に年少苾芻邊に往いて供給して(言はん、「鉢なからんには鉢を施し、衣服なからんには衣服を與へ、所須の者は我卽ち具給し、及び法を求めんには法を賜ひ、及び教を求めんには我之を敎へて悉く成就せしめん」と』。孤迦利迦等、天授に報じて曰はく、「此の方便ならんには亦事を成ずるを得ん」。爾の時提婆達多は和合僧衆を破せんが爲の故に、卽ち往て諸の老宿苾芻に詣りて事意を說き陳べしに、老宿等苾芻は卽ち提婆達多が和合僧伽を破せんと欲して是の如きの方便を作せるを知りければ、老宿等は知り已るに遞に相告げて曰はく、「提婆達多は方便して

【三】微訶羅。Vihāra の音寫、住院なり。

と(言はん)。彼に弟子ありて久しく一處に居せるが、師の常に虛妄說法しつゝ自ら將に實と爲せるを見て(言はん)、「我等弟子は外人に向ひて說かんに、必ず將に輕賤して禮せざらん。我等是の如きの教師を得んに、若爲が同活せん。此の教師が妄に與に說法せるの罪は師自ら知るを得れば、然く我弟子が事には關せじ。……教師は常に我等弟子を念じて、衣服・飮食・湯藥・臥具を供給しぬれば」。其の弟子等は供給に貪著して教師を覆護せんに、教師も亦常に念ぜん、「我れ虛妄說法せりと雖、弟子は可しく我を覆護せしめうべけん」と。……此れ世間中の第五教師なり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「我れ戒を受持して清淨なれば、我れ自ら將に實に戒清淨なりと自ら知り、亦穢なきが故に亦諸弟子に教へて清淨戒を奉行せしむるが故に、弟子の戒の爲に常に覆護せんを用ひず、我に此を憂ふるの怖もなし。我れ清淨の物を用ひて以て將に活に充つれば、我れ將に是れ實に淨なる物なりと(知るが)故に、諸弟子の常に覆護せんを用ひず、我に此を憂ふるの怖もなし。諸苾芻、我が智見は實の相なれば、亦將に是れ實なりと(自ら知り)、我に此を憂ふるの怖なければ、弟子をして智見の爲の故に我を覆護せしむべからず」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「我が授記せる所は一ら將に是れ實にして、我が念實なるが故に此を憂ふるの怖もなければ、諸弟子をして授記の爲の故に我を覆護せしむべからず」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「我が說法は如實にして、亦將に是れ如實なりと(知るが)故に此を憂ふるの怖もなければ、弟子をして法の爲の故に我を覆護せしむべからず」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「當に知るべし、世間の五種の妄教師は、自ら過失あるが故に弟子をして覆護せしめんも、我は應に是の如くなるべからず、應に憂怖すべからず、亦應に汝弟子等に於て勢力もて可住すべからじ。常に汝等苾芻を責めんにも、若し苾芻ありて我が瞋責を受けんには可しく我法に近住せしむべく、若し我が瞋責を受くる能はざらんには自ら退散せしめん。譬へば瓦師の、未だ燋かざる器を以にして將に火に入れ、好者は自ら眞牢を現じ惡者は自然に破裂せんに、瓦師は惜心を

諸種の不淨は罪可しく自らに知るべければ、然く我諸弟子が事には闕せじ。又此の教師は常に我等を念じて時々に衣服・飮食・湯藥・臥具を供給しぬればᅟ」。時に諸弟子は供給に貪著して教師を覆護せんに、教師は常に思念せん、「此の弟子は便ち我を覆はん」と。……此は是れ世間中の第二教師なり。復次に第三教師とは、又世間中に是の如きの教師あり、智見不淨なるに教師は自ら將に智淨にして過なしと(言はん)。彼に弟子あり久しく一處に居せるが、乃し教師の智見不淨なるに教師自らは將に智淨にして過なしとせるを見て(共に相謂ひて言はく)、「我等今外人に向ひて教師を說き陳べ、外は將に輕賤して禮なからんに、我等は是の如きの教師を得て若爲が活くるに堪ふべき。此の教師が作せる智見不淨は罪可しく自ら知るべければ、然く我諸弟子が事には闕せじ。又此の教師は常に我等を念じて時々に飮食・衣服・湯藥・臥具を供給しぬればᅟ」。時に諸弟子は供給に貪著して教師を覆護せんに、教師は常に思念せん「此の弟子は可しく我を覆護せしめらべけん」と。……此れ世間中の第三教師なり。復次に第四教師とは、又世間中に是の如きの教師あり。妄に人の與に種々の記を授けつゝ自らは將に妄ならじとし、我が與ふる授記は皆悉く眞實なりと(言はん)。彼に弟子あり久しく一處に居せるが、師の妄に諸人の與に種々に記を授けつゝ自らは將に不妄なりとし、我が與ふる授記は悉く皆眞實なりとせるを見て、弟子等云はく「我れ外人に向ひて教師を陳說せんに、必ず將に輕賤して禮なけん。我等是の如きの教師を得んに、若爲が同活せん。此の教師の妄に授記を與ふるの罪は師可しく自ら知るべければ、然く我弟子が事には闕せじ。此の教師が念は我等悉く覆護せしめん、此の教師は時々に常に我等弟子を念じて衣服・飮食・湯藥・臥具を供給しぬればᅟ」。時に弟子等は供給に貪著して教師を覆護せんに、教師は自ら念ぜん「我れ妄に授記を與へたるも、弟子は可しく我を覆護せしめらべけん」と。……常に此念を憶せんに、此れ世間中の第四教師なり。復次に第五教師とは、又世間中に是の如きの教師あり、常に虛妄說法しつゝ自らは將に是れ實なり

卷の第十四

(提婆の僧伽破壞)(承前)

爾の時提婆達多は遂に懊聲を出だし、點頭すること三迴して便ち起ちて去れり。是時阿難陀は佛の左右に在りて搖扇して立てり。爾の時世尊は阿難陀に告げて曰はく、「汝今可しく此の竹林園內に於ける諸苾芻を喚びて此食堂に集むべし」。是時阿難陀は命を奉じ、巡喚して食堂に總集せり。是時阿難陀は往いて佛所に詣り、雙足を頂禮して佛に白して言さく、「衆今已に集まれり」。爾の時世尊は即ち食堂に往き座を敷いて坐して諸苾芻に告げたまはく、「『此世間中に五種の教師あり。何者をか五と爲すなる。第一には教師ありて自ら戒を具せざるに已に戒を具せりと稱せん。彼に弟子あり久しく共に一處に(居)せるが、即ち我師は戒を具すること能はじと知りて共に相謂ひて曰はく、「我れ若し餘人に向ひて告げ、外既にして聞き已りて我が教師は即ち輕賤せられんに、我等は後に於て云何が師に見えて共住し承事せん。教師は自ら好惡を知るなれば、我等は應に可しく覆護すべく、人に向ひて說くこと勿れ。何を以ての故に、我が此の教師は時々に我に衣服・飮食・湯藥・臥具を供へぬれば」。是時弟子は此の供給を貪りて教師を覆護し、人に向ひて說いて破戒せるを知らしめざらんに、時に彼教師は(是の如きの念を作さん)、「應に須らく弟子は我を覆護すべし」と。……上に說けるが如し……此れ世間中の第一教師なり。復次に第二教師とは、世間に一教師あり、不淨の物を用ひて以て將けて命に充て、自らは將に清淨の活にして亦罪失に非じと(言はん)。彼に弟子あり久しく一處に居せるが、後に乃し我が教師は不淨物を用ひて以て將けて充活すれば、自らは將つて清淨とせるも亦當に罪あるべきを知るを得て(共に相謂ひて言はく、「我弟子等にして若し教師が此事を說き、外將に此等の緣を輕賤せんに、我諸弟子は若爲が活くるを(う)べき。此の教師が作せる

【一】五種教師。律部十九、註(一五の一)の本文にも出せり。

き、本處に至り已りて如法に而し坐せり。爾の時提婆達多は世尊の所に詣り、雙足を頂禮して却いて一面に住し、而し佛に白して言さく、「世尊、今旣に年老いて力弱りぬれば、四衆の爲に法を說きたまはんに勞苦せん。世尊、我に徒衆を與へたまふに如かじ。我れ自ら敎示して爲に法を說かん。世尊は當に可しく安寂して坐したまひ、善法を修習して安樂に住したまふべし」。世尊報じて曰はく、「我が舍利弗・大目犍連の如き、弟子中の尊にして聰明智慧に梵行神通ありて羅漢果を證せるにも、我れ今尙ほ自ら苾芻僧伽を以てして見に付囑せざるに、豈に況んや汝無智癡人にして唾を食へる者をや」。是時、提婆達多は此語を聞き已るに是の如きの念を作さく、「世尊は今者舍利子・目連等を讃歎して、我を憎嫌し罵りて無智にして唾を食へる者と云はんとは」。時に提婆達多は世尊處に於て、遂に[五一]七種の逆心を起せり。

【五一】七種逆心。藏文には、「時に提婆達多は世尊に對ひて(1)忿と、(2)瞋と、(3)慢と、(4)隱覆と、(5)區分と、(6)不忍と、(7)不信とを示現せり」とあり。中に於て區分はその原語 bgroṅs (チョン)にして除外する義を含むべし。

神通を失ひ、是の提婆達多は亦自ら知らざるを見たりき。爾の時大目犍連は[49]揭倻國膠魚山恐怖鹿林中に在りければ、彼の迦俱羅梵天子は彼の天より沒して申臂を屈するが如き頃に目連の處に往き雙足を頂禮して却いて一面に住し、是の如きの語を作さく、『大德目連、今可しく知りたまふべし、提婆達多は利養の爲の故に遂に貪心を起し、更に復希求して顚倒心を起し、別に憶念を生ぜり。「世尊は今既に年老いて力弱りぬれば、今四衆が爲に法を說かんとも疲倦し勞苦せん。世尊は我に四衆を與ふるに如かず、我れ自ら敎示して亦爲に法を說かん。世尊は當に可しく宴寂して坐し、善法を證習して常に安樂に住すべきなり』と。是時提婆達多は此念を起せるに、卽ち神通を失し、自らは我れ神通を失せりと覺知せざりき。大德大目犍連、慈悲心を起して佛所に往詣し、提婆達多の上の如きの緣起……乃至、其神通を失しつゝ自ら覺知せざるを說きたまはんことを』。爾の時大目犍連は梵天子より默然して語を受けしに、爾の時迦俱羅天子は目連の受け已れるを知りて心に歡喜を生じ、目連の雙足を頂禮して忽然として現ぜざりき。爾の時大目犍連は梵天の去れるを見て便ち卽ち如是定に入り、膠魚山より沒して卽ち王舍城迦蘭鐸迦竹園中に踊現し、世尊の所に詣り雙足を頂禮して却いて一面に住せり。爾の時大目犍連は所受の迦俱羅天子の言語を皆悉く諮白せるに、是時世尊は目連に告げて曰はく、「汝先に提婆達多の上事の如きを知れりとやせん、復汝に報じて始めて知れりとやせん」。時に目犍連白して言さく、「世尊、我先に舊より知れり」。爾の時世尊は目犍連と共に是語を說きたまへる時、提婆達多は[50]四苾芻と共に、一は孤迦利迦と名け、二は褰荼達驃と名け、三は羯吒謨洛迦底沙と名け、四は三沒羅達多にして、共に此四人は同じく佛所に詣れり。世尊は遙に提婆達多等の來れるを見たまひて目連に告げて曰はく、「且らく止めよ、語ること莫れ、彼の無智の提婆達多等は來れり。此の無智人は今我が前に對ひて上の如きの事を定んで當に自ら說くべく、亦自ら讃歎せん」。爾の時大目犍連は佛の雙足を禮して如是定に入り、竹林より沒して膠魚山に往

【四九】揭倻國膠魚山恐怖鹿林。律部十九、註(一四の三五)參照。

【五〇】四苾芻は提婆の伴黨なり、第九卷の註參照。

時に太子は五百の大鐺に諸の飲食を作せるを遣立して、提婆達多に送至して以て供養を爲せり。時に提婆達多は收取して自ら食し及び五百苾芻は圍遶して共に食せり。時に苾芻は王舍城に於て晨朝乞食して是の如きの語を聞けり、「此の提婆達多は太子の種種の利供養を得て、日日二時に(參えて)恒日絶えず、及び五百の車輅賫車もて承事供養し、及に五百鐺もて諸の飲食を作して而し供養を爲し、及び將りて自ら食し五百苾芻は圍遶して食せり」と。諸苾芻は此事を聞き已りて次第に乞食して本處に還り至り、法に依りて食し訖るに衣鉢を收め、足を洗ひ已りて佛所に往き、佛足を頂禮して次第にして坐し、而ち佛に白して言さく、「大德、我等晨朝に王舍城に入りて乞食せしに、提婆達多は阿闍世太子の所よりして多く利養を得……廣く說けること上の如し……乃至、五百苾芻は圍遶し坐して共に食せりと聞けり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「時に提婆達多は此の利益供養を受くるは、猶し此れ自ら害ひ及以害を兼ふるなり。何を以ての故に。諸苾芻、譬へば芭蕉にして菓を出ださんに便ち卽ち枯死せんが如き、猶し此れ自ら害するなり。提婆達多が此の利養を受くるも亦復是の如し。譬へば竹葦にして若し花菓を出ださんに便ち卽ち枯死せんが如く、騾にして懷姙せんに子を有つて便ち死なんが如し。諸苾芻、提婆達多が此の利益を受くるも亦復是の如し。諸苾芻、提婆達多にして若し利養を受け得んに、彼の無智なる提婆達多は日夜に長く惡名苦惱無利を受けて是の如きの報を得ん。汝等苾芻、應に是の如く知るべし」。爾の時提婆達多は廣く利養を得たりければ、遂ち貪心を起し、更に又希求して顚倒心を起し、別に憶念を生ずらく、「世尊は今旣に年老いて力弱りぬれば、今四衆が爲に法を說かんとも勞苦せん。世尊は我に自の衆を與ふるに如かず、我れ自ら敎示して而ち爲に法を說かん。世尊は當に可しく宴寂して坐し、善法を修習して常に安樂に住すべきなり」。是時提婆達多は此念を起し已るに卽ち神通を失し、自らは我れ神通を失せりと覺知せざりき。爾の時[四七]迦俱羅苾芻は[四八]四無畏を習ひて貪念心を除き、死にて梵天に生ぜしに、卽ち提婆達多は遂に

【四七】迦俱羅苾芻。律部十九、註(一四の三三)參照。
【四八】四無畏。律部十九、註(一四の三四)本文に四梵住とせり。梵天に生ぜる故に四梵住ならざるべからず。

し、初禪に依止して神通を獲得せり。卽ち神力を以て一身變じて多身と作し、多身合して一身と爲り、或は現じ或は隱れ、智見力を以ての故に能く是の如くに現じ、復山石墻壁に於て通過して礙なきこと虛空に於けるが如く、大地に出沒すること猶し水中の如く、虛空中に在りて結跏趺坐すること猶し地に在るが如く、或は虛空に騰ること猶し飛鳥の如く、或は地に在りて手にて日月を捫でぬ。提婆達多は神通を得已るに是の如きの念を作さく、「我れ是の如きの神通を得、諸の變相神通を作すことも亦得たれば、贍部林中に詣りて香美の果を取り、滿鉢し充足して四衆に供養し自らも亦飽足せん……廣く說けること前の如し……乃至、三十三天に（詣りて）天厨食を取り、亦四衆に供養し自らも亦充足せん」。復更に思念すらく、「此の摩揭陀國の中、誰人か最勝なる、我れ當に歸伏すべし、彼人に因りての故に一切人をして皆我を恭敬せしめん」。復更に思念すらく、「此國の太子阿闍世は父王亡ばん後は太子王たれば、我れ應に降伏すべし。我れ若し阿闍世太子を降し得んには、一切人をして皆我を恭敬せしむるを（得ん）」。此念を作し已るに往いて阿闍世の所に詣り、卽ち神相を現じて化して白象と爲り、卽ち大門に入りて小門より出で、或は小門に入りて大門より出で已るに自ら其身を現じ、更に大門に入りて變じて駿馬と爲り、小門より出で已るに自ら其身を現じ、小門に入らんと欲して卽ち牛王と爲り、大門より出で已るに卽ち眞身を現じて如法に鉢を持して阿闍世の所に詣り、卽ちに其身を變じて猶し小兒の身衣金瓔の如くし、太子の膝上に坐して乍ち起ち乍ち坐して流轉徘徊せり。太子は是れ提婆達多の神通の相なりと知りて、或は抃ち或は抱き或は拍き或は鳴らして便ち口中に唾せるに、提婆達多は供養利益の貪心を以ての故に卽ち其唾を咽みぬ。時に阿闍世は顚倒心を起して是の如きの念を作さく、「此の提婆達多は佛の神通に勝れり」と。時に提婆達多は自ら眞身を現ぜり。是時太子は心に恭敬を生じて便ち卽ち頂禮し、及び諸の供養の五百寶車と將に提婆達多を送り出せり。時に阿闍世は本處に還り至り、每日兩迴に提婆達多に參え、及承事供養せり。

を作さく、「世尊は我に神通法道を敎ふるを肯んじたまざるなり」。是念を作し已るに座よりして起ち、往いて具壽阿若憍陳如の所に詣り、到り已りて阿若憍陳如に問うて曰はく、「上座、唯願はくは慈悲もて我に聖道を敎へ神通を得せしめんことを」。爾の時阿若憍陳如は佛の、提婆達多が罪逆心を起せるを知しめせるを觀じ、觀じ已りて提婆達多に告げて曰はく、「汝應に〔四二〕增色心中に勤習すべし、卽ち神通を得及び餘法を得ん」。提婆達多は此語を聞き已るに是の如きの念を作さく、「此上座と亦我に神通道法を敎ふるを肯んぜざるなり」。卽ち往いて馬勝・賢子・〔四三〕禪氣・大名・圓滿・無垢・牛王・〔四四〕眼妙臂の(所に)詣り……乃至、五百上座の邊に去き、到りて已りて問うて曰はく、「上座、慈悲もて我に聖道を敎へ神通を得せしめんことを」。爾の時妙臂等の五百苾芻は咸く佛の意に提婆達多が罪逆心を起せるを知しめせるを觀じ、觀じ已りて提婆達多に告げて曰はく、「汝應に增色心中に勤習すべし、卽ち神通を得及び餘法を得ん……乃至、受・想・行・識を(說きて)……汝應に增意心中に勤習すべし、卽ち神通及び諸の餘法を得ん」。時に提婆達多は此語を聞き已りて是の如きの念を作さく、『〔四五〕此の五百上座等も亦我に聖道神通を敎ふるを肯んぜざるなり、欲むらくは此の五百上座は先に世尊と共に「我に聖道を敎ふるを許さず」と平章せるに似たり。何を以ての故に。今佛等五百上座に見えたるも、聖道神通を敎ふるを肯んぜざれば』と。復念ずらく、「是の如からんには何ぞ能く我に聖道神通を敎ふるあらん。當時十力迦攝波は王舍城〔四六〕先尼迦窟中に在れば、我れ彼處に詣らん。彼の上座は直心無諂にして、及は我が弟阿難陀の親敎なれば、彼の十力上座こそは能く我に聖道神通を敎へん」。提婆達多は念じ已るに卽ち往いて十力迦攝の所に詣り、雙足を頂禮して一邊に於て立ち、是の如きの語を作さく、「上座十力迦攝、慈悲もて我に聖道神通を敎へんことを」。爾の時十力迦葉は佛意及び五百上座聖衆の意を觀ぜず、亦提婆達多の如きの逆心を發生せるを知らず、觀ぜざりしを以ての故に卽ち提婆達多に聖道神通を敎へぬ。是時提婆達多は初夜後夜に於て善業を修習して住

【四二】 增色心。gzugs-la (ズクラ)、「色」なり、卽ち「色中に於て法の如く意作すべし」とあり。

【四三】 禪氣。前註(二四)の長氣苾芻に同じ。

【四四】 眼妙臂。妙臂なり、眼の字誤入なるべし。

【四五】 本文に此五百上座等亦不肯敎我聖道神通、欲似此五百上座、先共世尊平章不許敎我聖道、何以故、今見佛等五百上座不肯敎聖道神通とあり。欲似此五百上座以下は難譯なり。藏文には「此等の具壽と世尊とは云何にも前より商議せしならん、此故に誰か我に神變を敎へんやと思惟して…」とあり。

【四六】 先尼迦窟。律部十九、註(一四の三二)參照。

婆達多のみ未だ聖果を得ざりき。爾の時國土飢荒し人民食なく乞求得ること難かりければ、衆中の神通ある苾芻は卽ち虛空に騰りて贍部林中に下りて香美の贍部菓を取り、滿鉢し充足して本處に還り至り、四衆に供養して自らも亦飽足せり。或は[38]蜜羅林に往き、[39]迦比陀林に下り、或は甘露園に下り、或は呵犁勒林に下りて香美の菓を取り、滿鉢し充足して本處に還り至り、四衆に供養して自らも亦充足せり。或は苾芻ありて神通自在なるは、卽ち虛空に騰りて北俱盧洲に往き、自然粳米の香美の者を取り、滿鉢し充足して本處に還り至り、四衆に供養して自らも亦飽足せり。或は苾芻ありて神通自在なるは、虛空に遊行して往いて餘國に至り、種種美妙の飲食を乞ひ……乃至、滿鉢して……廣く說けること前の如し……。或は苾芻有りて神通力を以て四天王所に往き、或は三十三天中に往きて、天廚精妙の飲食を取り、滿鉢し充足して……乃至、廣く說けること前の如し……。爾の時提婆達多は諸苾芻に此の如き神通ありて諸の菓食を取れるを見て是の如きの念を作さく、「此の國土飢荒し人民食なく……等、廣く說けること前の如し……乃至　三十三天に至りて天廚の飲食を取りて四衆を充足し自らも亦飽足せり。我れ若し神通あらんには卽ち虛空に騰り、贍部林中に下りて香美の贍部果を取り、滿鉢し充足して我も亦四衆に供養し自らも亦飽足せんに。……廣く說けるは前の如し……乃至、三十三天に(往いて)天廚の飲食を取りて四衆を充足し自らも亦飽足せんに。誰し我に力を與ふるありて[40]聖道を見るを得せ(しめ)んに、彼の敎力に依りて我れ神通を得んに」と。是念を作し已るに坐よりして起ち、佛所に往詣し佛足を頂禮して而し一面に立ち、提婆達多は世尊に白して曰さく、「唯願はくは慈悲もて我に聖道を敎へ神通を得せしめたまはんことを」。爾の時世尊は提婆達多が罪逆心を起せるを知しめし已りて提婆達多に告げたまはく、「汝應に[41]增戒を受けたる中にて勤心に修習せんには卽ち神通を得ん……乃至、增心・增智をも應に受けたる心中にて當に勤めて修習せんには卽ち神通を得及び餘法を得ん」。時に提婆達多は此語を聞き已るに是きの念

【三八】蜜羅林。藏文に na-bil-pahi tshal(ナ ビル パ・イ ツァール)、「nabilpa の林」の義。
【三九】迦比陀林。ka-bi-da-thahi tshal (カ ビ ダ タ、イ ツァール)、「kapittha の林」の義。
【四〇】聖道。藏文に「誰か我に神變の道を敎示するに適當なるありや」とあり。この聖道とは神變の道なり。
【四一】增戒。lhag-pahi tshul-krims(ハク パ・イ ツウーチム)、「すぐれたる、より以上の戒」なる義、adhi śīla なり。次の增心、增智は增上意・增上慧なり。律部八、註(二の四六——四八)參照。

し、聞法領記して大總持を獲んことを」。爾の時[三四]辟支迦は其弟に謂ひて曰はく、「却後七日にして汝當に報終すべければ、常に此心を守りて忘失せしむること莫れ」。七日既にして滿じて未だ果證を得ず、將に告謝せんとするに垂んとして重ねて誓を發して言はく、「……前の所願の如し……」と』。爾の時佛、諸苾芻に告げて曰はく、『時の辟支の弟とは今の阿難陀是れなり。過去世に辟支迦に供養して當に發願して「未來世の中、佛の與に弟と作り、親承供養して多聞總持ならんことを」と言へるに緣りて、今時我が[三五]毘季聰明第一にして水を缾に注がんが若しと爲せる所以なり』。時に諸苾芻は咸く皆疑あり、卽ち佛に白して言さく、『其の阿難陀は過去に何の善業を行じてか、今世尊のために大衆中に於て「聰明比なく總持强記して領受して遺すなし」と歎美稱揚せられたる』。佛、諸苾芻に告げたまはく、[三六]「阿難陀は往者自ら善業を修め……廣く說けること前の如し……」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「往昔の時賢劫の中に於て時に有情の壽二萬歲にして佛世尊あり、迦攝波と號して世に出現したまひ、婆羅痆斯城仙人墮處施鹿林中に在せり。佛に一弟子あり、多聞にして忘れず聰明第一なりき。彼に弟子ありて出家してより來常に梵行を修せるも、乃し命終に至るまで聖果を獲ざりければ、臨終の時一心に發願すらく、『所作の善根もて願はくは當來の世に、釋迦如來の與に親侍の弟子と爲らんこと今の如くにして異ること無く、「弟子の中に於て聰明第一たり」と、願はくは釋迦如來、我に授記を與へたまはんこと彼の如くにして異なからんことを』と。汝、諸苾芻、彼の弟子とは今の阿難陀是れなり、先世の善心發願力を以ての故に、今我が弟子中に於て聰明第一たりしなり。諸苾芻、若し黑白雜染業を作さんには各其報を獲るなれば、汝等應に雜染・黑業を捨てゝ常に白業を修すべし』と。

（提婆の僧伽破壞）

[三七]佛 王舍城竹林迦蘭鐸迦園中に在し、五百の苾芻ありて世尊を圍遶し、皆是れ阿羅漢にして唯提

【三四】辟支迦。pratyeka の音寫、獨覺なり。次の辟支はその音略なり。

【三五】毘季聰明第一。智慧聰明第一、或は聞持聰明第一の義なるべきも、毘季の原語明かならず。藏文には「多聞と聞持と聞持して聽きて集むる侍者となれり」とあるも、毘季に相應する語なし。

【三六】阿難陀總持强記前生因緣譚。

【三七】提婆、神通を獲んことを望む。

太子に　げて曰はく、「汝が兄日曜は今已に出家せり、我れ終歿せん後は須らく繼嗣あるべければ今汝に放さじ」。時に彼の獨覺は王が其弟を放さゞるを聞き、卽ち王の所に詣り伽他を說いて曰はく、

「日曜、智を放し　我に隨って出家せしめよ
出家は最勝事なり　諸佛讚歎したまへば」。

父王は白して言さく、「大仙、當に知るべし、汝已に出家せり、我が國法として須らく紹繼あるべければ、唯日智ありて國位を知らしめんのみ。家に在りて福を修せんに其事足れり、何ぞ出家を用ふるを得ん」。時に彼の獨覺は復伽他を說いて曰はく、

[三一]「王先に別思せるも　此事復別なり
却後七日にして　日智命終すれば」。

王、獨覺に問ふらく、「日智太子は却後七日にして必らず活きざるなりや」。答へて言はく、「是の如し」。王言さく、「若し是の如くならんには放して出家せしめん」。太子は出家し已るに[三二]淨心を發して獨覺に供養せり。彼の獨覺は風を患ひて手に飯鉢を執るにも掉動して安からざりければ、其太子は見て遂に金釧を將りて以て其鉢を承けしに鉢遂に動ぜざりき。太子は觀じ已りて歡喜し、是の如きの願を發すらく、「我れ今聽法せんにも亦復是の如くにして、法我が心に入らんに更に傾動せざらんことを」。[三三]往時に獨覺未だ果證を得ざりしには、弟日智が爲に常に圓滿微妙の勝法を說けるも、今證果を得ては更に法を說かざりければ、日智は見已りて獨覺に白して言さく、「汝未だ出家せざりしには恒に常に法を說けるに、何の因にてか果を獲ては遂に卽ち默然せる」。獨覺報じて曰はく、「我れ實に法を說かじ」。日智問うて曰さく、「誰か合に法を說くべき」。獨覺報じて云はく、「汝應に知るべし、應正等覺出世したまはん時常に種種圓滿の妙法を說くべきを」。太子、此を聞きて是の如きの願を發すらく、「願はくは此善根を以て未來世に佛の與に弟と作り、又出家するを得ては親承供養

【三一】藏文には「日曜よ、法は少し、かくの如く持することは七日なるのみ、他の意味のために思惟せり、彼は涅槃せん」とあり。

【三二】藏文には「彼は我が壽命少きを知りて極信を以て供奉せり」とあり。

【三三】こゝに獨覺未だ果證を得ずとは出家前のことなり、藏文には「彼は前に文字と語とを(適當に)調和して法を說けるを以て彼は白さく、「汝、先に家に在りしには文字と語とを調和して法を說きたまひしに、今や獨覺を現證しては云何の故にか法を說きたまはざる」と」とあり。

【三〇】日智と爲せり。其王の太子は毎に常に思念して心に出家を樂へり。毎に父王の或は非法を行じ或は國法に依れるを見 太子は是事を見已りて遂に即ち念言すらく、「我れ今後に於て王の國位を受けて是の如きの法を行ぜんには、即ち地獄に墮して出づるの時あることなけん」。是念を作し已るに往いて王所に詣り、跪拜し禮し畢りて父王に白して言さく、「我れ今出家せんを願ひ欲めり、願はくは王、慈を垂れ我を放して去らしめたまはんことを」。時に彼の父王は其子に告げて曰はく、「諸の仙人外道ありて火に事へ天に事へ苦行し持戒して、此の如きの業を作さんこと、唯來世に國王の家に生まれ身、王子と爲りて諸の快樂を受けんことを求めんのみ、汝今此身に見に果報を受けたるに、如何が樂を捨てゝ苦事を行ぜんことを願へる」。爾の時太子は復王に白して言さく、「我に出家を聽したまはんことを」。王は其意に世樂を求めざるを知りて遂に出家を許せり。時に彼の太子は王の放を得已るに、即ち山中の仙人住處に入りて出家修道せりければ、父王は即ち其弟日智を冊して太子の位を紹がしめぬ。時に日曜太子は既にして山中に至り繫念思惟して獨覺果を證せり。後の時中に於て身疾患に染りしも、周旋消散せりければ婆羅痆斯城に還り至れり。諸人は見已りて而ち王に白して言さく、「日曜太子は入山修道し獨覺果を證して今城内に來れり」。王既にして聞き已りて即ち日曜を迎へ、其足を禮し已りて白して言さく、「大仙、汝は衣食を須め我は福德を求めん。今請ふ大仙、我が園林に住したまはんことを、時に隨うて所須の物を安置して我れ當に供給すべけん」。時に彼の獨覺は默然して請を受けしに、王は請を受けたまへるを見て即ち日智太子に勅して獨覺に侍養し所須を供給せしめぬ。時に獨覺仙は即ち定中に於て、日智太子が却後七日にして當に其命を捨つべきを觀見して太子に告げて曰はく、「弟、今何の故にか出家を求めざる。」弟言さく、「我れ出家せんを願へり」。獨覺告げて曰はく、「父王に白し知らしめよ」。日智太子は父王の所に往き白して言さく、「我れ出家を願へり、願はくは王、聽許したまはんことを」。王は此言を聞いて遂に忿怒を生じ、

【三〇】日智。Hod-zer-ldan（オゼルダン）、「光線を持する」義。

を受け、五百生の中常に人間に於て勝果報を受け、一切の國王及び婆羅門・諸の宰貴等は親しく自ら供養し、今最後身に勝軍王は親しく傘蓋を執り、萬乘の主は爲に屈して承事するを感ぜるなり。……前に廣く說けるが如し……」。

爾の時世尊は室羅伐城より婆羅(痆斯)城に往き、漸漸に遊行して城外に至り一村に到りて住したまへり。其村は名けて婆羅門村[二三]と曰ひ、大聲聞衆は世尊を圍遶して遠からずして住せり。所謂、上坐阿若憍陳那・具壽馬勝・具壽賢子・長氣苾芻[二四]・大名苾芻・耶舍苾芻・圓滿苾芻・無垢苾芻・牛王苾芻・妙臂苾芻・具壽舍利弗・具壽大目犍連・具壽大迦葉波・具壽俱絺羅・具壽劫賓那・阿尼樓陀・難地迦・金卑羅・住婆羅村住[二五]・妙枕苾芻[二六]及び阿難陀等の無量の苾芻大聲聞衆は日の午後に於て佛所に來詣し、佛足を頂禮して次第にして坐せり。爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、「吾れ今年邁いて勢漸く微に諸の四衆の爲に法を說かんも力なきなり」と。

佛、波羅痆斯城の婆羅門村の中間に在しき。是時舍利子・大目犍連は阿難陀に佛の與に侍者と作らんことを勸請せるに、阿難陀は一ら尊者の敎に依ひければ、佛は卽ち阿難陀を讚歎したまへり。[二七]是時、苾芻衆は咸く皆疑を生じ卽ち佛に白して言さく、「阿難陀は何の福業を修してか、今佛の爲に叔伯堂弟と作り、復侍者と作り、聰明智慧にして佛語を聽聞しては更に忘失するなきぞや」。佛、苾芻に告げたまく、「汝等、當に知るべし、阿難陀は自ら是業を作し……廣く說けること前の如し……」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『往昔過去の時、波羅痆斯城に王ありて名けて日曜[二八]と曰ひ、其國中に於て王と作りては禮を制し、其人人をして豐樂安寧にして諸の衰難なからしめぬ。國王は後に於て妃一子を生みければ、三七日の中諸の臣佐を喚びて朝集せしめ會設けて子が爲に名を立てんとせしに、臣佐は王に白さく、「王が名は日曜なれば、子は合に名を立てゝ大日曜[二九]と號すべし」。其子漸く長じぬれば、策して太子と爲せり。後に於て王妃は更に一子を生めるに、群臣は名を立てて號して

【二三】波羅門村。bra-la-can-gyi bram-ze'i groṅ-khyer(婆羅門村)の義。

【二四】長氣苾芻。rlubs-pa(ランペ)、「蒸氣」の義、五比丘の一人、婆濕波(Vāṣpa)なり。

【二五】住婆羅村住。a-la-na'i gnas-paḥi gnas-rtan g-nga-ja(サラナネエ パ、イネエ タン チヤタ ペ)、「婆羅に住する上座持名稱」とあるも明了ならず。

【二六】妙枕苾芻。yid-ḥon-nig-can-ma-gna sa-paḥi gnas-rtan Kluḥ-po(ユルナユ ミクチヤン ナネエ パ、イネエ タン ンガン ポ)、「水の目を持つ處(卽ち水盤)に住する上座圓滿」とあり。律部二十三、註(三の三一)盆枕圓滿長老の下參照。

【二七】阿難陀作二侍者一前生因緣譚。

【二八】日曜。hol-zer(オゼル)、「光線」の義。

【二九】大日曜。ho l-zer-can(オゼル チヤン)、「光線を有する」義。

長者とは今の勝軍王是れにして、無量百千世に於て天上に生じて諸の快樂を受け、天報を受け已りて復人間に生じては王と作りて斯の勝事を感ぜるなり。是故に汝等若し僧に食を供養せすと欲せんには、[三〇]應に勤めて施與して地に落さしむること勿れ」。時に勝軍王は佛世尊が往昔の事を記說したまへるを聞きて心に歡喜を生じ、佛法僧に於て大信心を起し、獨り一處に坐して是の思念を作さく、「我れ前生に辟支佛に供養せるに由りての故に是の如きの報を獲たり、我れ應に廣く佛法僧等に(供養を)設けんには必ず來世に於て大利益を受くべけん」。是念を作し已りしに占事人は奏して曰さく、[三一]「明日阿難陀は應に纒頭の賞位及び灌頂位を得べし」。王は此言を聞いて默然して語らざりき。具壽阿難陀は其夜中に於て額上に忽然として一惡瘡を生じて一宿を經已りしに、王は遂に之を聞きて卽ち便ち念を生ずらく、「有德の人に供養せんに福を獲んこと無量なれば、我れ親しく供事せん」。此念を作し已りて卽ち天下に勅して所有名醫を咸く朝所に集めしめて(言はく)、「阿難陀に病あり、卿等往きて治せよ」。諸醫は詔を奉けて阿難陀の所に適けるに、便ち自ら選擇して一好手を得、遂に卽ち針を下して刺して惡血を去り、王は自ら千輻輪の傘を執持して阿難陀の上を蓋ひ、血を刺し了り已るに更に好藥を傅け、王は自ら帛を以て阿難陀の首に纒へるに當の日に瘡差えければ、王は遂に禮拜して阿難陀に辭し去れり。衆僧は此事を見已りて咸く疑惑を生じ、便ち佛に白して言さく、[三二]「大德世尊、阿難陀は過去に何の福業を作してか、今國王親しく自ら承事せるを感ぜる」。佛言はく、「此の阿難陀は昔福事を種ゑ……廣く說けること前の如し……」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『往昔波羅痆斯城に一醫師ありき。時に辟支佛あり病みて醫師の所に往けるに、彼醫は卽ち便ち心を盡して恭敬して辟支佛に白して言さく、「尊者所須の衣食一切の醫藥は、我れ總供して之を奉ぜんに必ず病差ゆるに至らん」。言の如く奉事せるに、乃し病除ゆるに至れり』。佛言はく、「諸苾芻、爾の時の醫師とは今の阿難陀是なり。昔に病める辟支佛を供養せるに由りての故に、無量世の中天に生じて福

【三〇】遺落食禁。

【三一】藏文には「明日、聖者阿難陀は頂髮を以て結びつけられんと記說せり」とあり。

【三二】阿難陀生ニ惡瘡一王親承事前生因緣訣。

の業を種ゑてか善く占相算數を能くするなる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「昔に福業を種ゑ……廣く說けること前の如し……」。乃至、伽他を說いて曰はく、

「假令百劫を經んとも　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　果報は還りて自らに受けん」。

佛、諸苾芻に告げたまはく、「往昔の世の時、波羅痆斯城中に一婆羅門あり、取りて一妻を得て一子を生得せり。生まれて二十一日に至りければ、諸親族を會して諸の飲食を設け、因みて此兒が爲に名を立てんとて號して[一六]大白と曰へり。年漸く長大しては人間に遊行して[一七]六萬頌算數の法を學びて善く明了するを得、復他人に算數の法を敎へければ、此因に由りての故に五百生世に明了し、亦他人に敎へ、今最後身にも此の通達を得たるなり」。[一八]時に具壽阿難陀は復一時に於て波斯匿王の宮中に往きしに、勝軍は來るを見て歡喜し頂禮して一面に在りて坐し、尊者に白して曰さく、「我れ生まれてより已來、自然の業感にて常に[一九]一銀婆羅香秔米飯と二頭の熟雉と一枚の苷蔗とありて、毎に食時を以て空よりして下りて銀盤中に入れり、唯一頭の雉のみは常に地上に落ちて盤中に落ちさるなり」。時に具壽歡喜は既にして斯言を聞きて甚だ希有を生じ、僧坊に還至して以て諸人に告げぬ。時に諸苾芻は咸く此緣を以て往いて世尊に白すに、佛は諸苾芻に告げたまはく、「往昔に此の波羅痆斯城に一長者あり、諸珍寶多く及び田莊多かりしが、其莊上より新秔米を送り及び死雉幷に苷蔗等を送れり。世間の常法として、若し佛、世に出でたまはざらんには、當に辟支佛ありて敎化を現じたまふなり。時に一辟支佛あり、門を巡りて乞食し長者の家に至りて其門内に入りたまひしに、長者は彼の威儀の端正にして言辭柔軟なるを見て心に歡喜を生じ、便ち新秔米飯及び炙雉二頭幷に苷蔗一枚を將ちて以て獨覺に施せり。時に彼の獨覺は鉢を以て之を受けたまひしに、苷蔗と飯及以一雉とは鉢中に入るを得たるも一雉は地に落せり。此の業因に由りて斯の果を受けしなり。時に彼の

【一六】大白。藏文には「種族と相應する名をつけぬ」とありて名字を記さず。

【一七】六萬頌算數法。藏文には「相の數法六萬」とせり。

【一八】波斯匿王感二得自然飯食一前生因緣譚。

【一九】一銀婆羅香秔米飯。gser-gyi phor-par hbras-sa luhi-shan dan bu-ram-çin-gi sdoṅ-bu-gñis dan sreg-pa gñis……(木鉢に自然粳米の粥と甘蔗の莖と二羽の沙鷄(ṭittiri)とが落ち來り、其沙鷄中の一つは木鉢の中に落ち、一つは地上に落つるなり」とあり。一銀婆羅香は明かならず、木鉢の義にあらざるべし。或は婆羅香をsaraka(碗)の音寫と見て銀碗なりとせば、次の文に銀盤の語あるに相應すべし。

具壽歡喜に常法あり、若し如來の[12]眞身と與に相隨行せんには其心に則ち常に恭敬し　若し如來の[13]化身と與に行かんには其心に則ち恭敬を少けり。時に一長者あり、如來及び諸苾芻は其家中に請じて諸の供養を設けぬ。爾の時世尊は時至りて衣を著け鉢を持し、諸苾芻の前後に圍遶せると與に長者の供に赴き、飯食し訖りて本處に還來したまへるに、苾芻は阿難陀に問うて曰はく、「汝、今日に於て如來に隨うて供に赴けるは、眞佛に隨へりとやせん、化佛に隨へりとやせん」。阿難陀報じて曰はく、「我れ今日に於て佛世尊と與に相隨ひて彼に往けるには化身には非ざりしなり」。諸苾芻は曰はく、「何を以てか之を知れる」。阿難陀曰はく、「我れ若し眞佛と與に行けるならんには、心に自ら恭敬して内に慚愧を懷かんも、若し化佛と與に行かんには則ち此の如くならじ」。諸苾芻は遞に相報じて曰はく、「此の阿難陀は甚だ希有たり、能く眞身・化身の差別諸相の貴賤等の類を知らんとは」。是に於て遠近咸く阿難陀の善く諸相を別つを知れり。爾の時世尊は王舍城より室羅筏城に往き、誓多林中に至りて住したまひき。具壽阿難陀は衣を著け鉢を持して室羅筏城に入りて乞食せるに、時に一婆羅門あり中路に於て阿難陀に逢ひしに、是念を作さく、「我れ先に此の沙門喬答摩の弟子は善く占相を能くすと聞けり、今應に之を試みん、解せりとやせん、解せざるとやせんを」。便ち阿難陀に問うて曰はく「今此の路傍の[14]勝葉波林は凡そ幾葉ありや」。阿難陀報じて曰はく、「如許の百、如許の千、如許の萬、如許の拘胝あり」と。報じ已りて便ち去りしに、時に彼婆羅門は即ち林中に於て一把の葉を取り之を數へて七百七十七葉あるを知り、之を林外に棄てゝ默然して住せり。時に阿難陀は乞食し已りて復還歸來するに舊路に由りければ、彼の婆羅門は問うて曰はく、「聖者、今此林中には凡そ幾葉ありや」。報じて曰はく、「前には如許の百千萬拘胝ありしも、今は七百七十七葉を缺けり」。時に婆羅門は此報を聞き已るに歎ずらく、「甚だ希有なり、善く算數を解せり」と。時に諸苾芻は聞き已りて疑を生じ、佛に白して言さく、「[15]世尊、此の具壽阿難陀は先に何

【一二】眞身。bcom-ldan-ḥdas (チョンダンデエ)、「佛」の義、Bhagavān なり。三身說中の一に配すべきものにあらず、寧ろ三身具足の佛、化身に對する佛と見るべきなり。

【一三】化身。sprul-pa(チエルパ)、「化身」の義、nirmāṇa-kāya なり。隨類應同の化身なり。

【一四】勝葉波林。ḡin-ca-ḥa (śiṃśapā)、堅實の大樹なり。

【一五】阿難陀能ニ占相算數一前生因緣譚。

尊は師子座に坐したまひて諸大衆の爲に廣く法要を說きたまひしに、具壽阿難陀は亦此會に在りて聽法せりければ侍縛迦は是念云を作さく、「我れ阿難陀の瘡を治せんには今正に是れ時なり。何を以ての故に、聽法の心至りては割截すとも痛を知らざるが故なり」。是念を作し已るに便ち妙藥を取りて其瘡上に傅け、瘡旣にして熟し已るに刀を以て之を割きて其膿血を出し、復妙膏を以て上に傅けしに、因りて卽ち除き差えぬ。然り、此法を作せる時阿難陀は聽法を以ての故に了然して覺らざりき。佛、法を說き已りたまひしに、侍縛迦は世尊に白して曰さく、「我れ聽法の坐中に於て阿難陀の瘡を治し割截し針決せるに、阿難陀は聽法を以ての故に皆覺知せざりき」。具壽阿難陀は報じて曰さく、「我れ佛法を聽かんが爲の故には、假令我が身を割截して碎くこと油麻の如くせんとも都べて痛を覺えざるなり」。是時能治の醫王は、斯事を見已りて希有心を生ぜり。時に諸苾芻は咸く皆疑ありければ世尊に請じて曰さく、「〔一〇〕大德、尊者歡喜は曾て何の業を作してか、遂に背上に於て毒瘡を生ぜるなる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『歡喜が先業、汝今應に聽くべし……廣く說けること前の如し……乃至、伽他を說いて曰はく、

「假令百劫を經んとも　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　果報還りて自らに受けん」。

乃往古昔に一邊國に於て〔一一〕雞羅吒と名くる王ありて治化せり。當の時佛なく唯獨覺ありて世間に出現せり。時に獨覺聖者あり、乞食の爲の故に此の城中に至りて國王の宅に詣りしに、王は見て瞋を生じ便ち彈丸を以て其脊背を打てり。時に彼の尊者は自の貢高を降し、彼が非器なるを知りて之を捨てゝ去りぬ。諸苾芻、昔時の王とは卽ち歡喜是れなり。瞋心を以てしこ彈を以て辟支佛を打てるに由りての故に、五百生の中常に背上に於て惡瘡の報を受け、今末後の身にも餘報として是の如くなり。苾芻、若し黑・白・雜業を作さんには當に其報を受くべし……廣く說けること前の如し……』。

〔一〇〕阿難生レ癰前生因緣譚。

〔一一〕雞羅吒。藏文にKi-raと音寫せり。

に甘露王宮に入り、如法に而し坐したまへり。其王は佛、宮内に到來したまへりと聞くや、卽ち阿難陀童子と將に一房中に藏隱せるに、佛は是を知しめし已りて卽ち神力を作して彼の房門をして自然に開闢せしめたまひしに、其阿難陀は先に佛所に至りて世尊の足を禮し、卽ち便ち拂を把り佛の背後に在りて侍立して佛を扇げり。其の甘露王は後より來りて世尊の足を禮し已り却きて一面に坐せるに、佛卽ち王の爲に種種微妙の法を說き已り、卽ち坐よりして去りたまへり。其の阿難陀童子は先業の因緣の故に、還佛に隨ひて去らんとせり。其王及び夫人婇女眷屬は阿難陀童子を攝み留めんとせるも、留めんとして住むるを得ること能はざりき。(佛)、卽ち王及び夫人等に告げたまはく、「此の阿難童子は是れ最後身にして汝等亦留むること能はざれば、宜しく應に去るを聽すべし」。王卽ち佛に啓さく、「若し當に此の如くなるべからんには、世尊、且らく家に歸るを放したまはんことを。我れ當に如法に發遣すべければ」。佛言はく、「是の如し、汝に聽さん」。時に甘露王は卽ち諸の內外一切の親族に使し、及び沙門婆羅門等を請じて食供養を設け、乃し貧窮下賤の乞人に至るまで皆錢財衣服を施せり。阿難陀童子は其會中よりして諸親族に別れ、身に瓔珞を著して七寶莊嚴の象に乘じ、多く侍衞の前後に圍遶せると將に尼拘律陀林中に往かんとし、(乃し)劫比羅城門に至りしに、所乘の象は池中に諸の妙蓮花あるを見て、其象は卽ち池邊に往き鼻を以て卷いて蓮華を取れり。其の占相師は此事を占相して甘露王に白して曰さく、「阿難陀童子今出でゝ遊學せんに、一たび耳に聞かんには心に忘れざらん」。時に阿難陀は尼拘林に到り、象よりして下りて佛所に步み詣り、頂禮恭敬して一面に在りて坐せり。佛、十力迦葉に告げたまはく、「汝應に此の大歡喜童子の與に如法に之を度すべし」。十力迦葉は旣にして佛命を奉じ、卽ち便ち之を度して爲に具戒を受けぬ。爾の時世尊は劫比羅城より王舍城竹林園中に往きたまへり。時に阿難陀は背上に一小瘡を生ぜるに、佛は侍縛迦をして之を治せしめたまひければ、卽ち佛の敎に依りて阿難陀の爲に治せんとせり。是時世

【八】十力迦葉(Daśabala Kāśyapa)。
【九】大歡喜童子。大歡喜は阿難陀(Ānanda)の譯。

爲の故に今斯果を獲たるなり。是故に苾芻、黑業には黑業の報、白業には白業の報、雜業には雜業の報あり、應に二業を捨てゝ白業を繼修すべし……乃至、廣く說けること前の如し……」。

[六]爾の時世尊は菩提樹下に在して三十六俱胝の魔軍を降伏し無上正遍知覺を證得したまへり。時に魔は卽ち劫比羅城に往き虛空中よりして淨飯王及び諸宮人・群臣百姓に告げて曰はく、「沙門喬答摩は今夜已に死にき」。時に淨飯王は之を聞きて心に懊惱を懷き悶絕して地に擗れ、及び諸宮人・群臣百姓も亦皆是の如く悲泣懊惱せり。時に淨居天は下方を觀察せるに、乃し斯事を見て卽ち空中より下り迦比羅城の國王人衆に告げて曰はく、「喬答摩は死なじ、今菩提樹下に在りて無上正遍知道を證得したまへり」。時に淨飯王及び宮人國臣は忽ち此言を聞きて踊躍歡喜せり。此の時に當りて甘露飯王は一子を誕生せるに、諸の衆人の歡喜せる日に生まれたるを以ての故に、因みて此兒に號して名けて阿難陀と曰へり。既にして此兒生まるゝに八乳母を置きて共に之を養育せり。時に甘露王は諸の相師を召して此兒を占はしめしに、相師報じて曰はく、「今汝が此兒は當に釋迦牟尼佛の與に親しく侍者と爲るべけん」。時に甘露王は既にして此言を聞きて便ち是念を作さく、「今我が此子には宜しく守護を加ふべし、應に釋迦牟尼佛をして見えしむべからず」。後の時佛、劫比羅城に來至したまへるに、其王は卽ち此子と將に廣嚴城中に藏避し、佛の去りたまへるを待ち已りて還將に歸來せり。世尊の常法として、一切衆生に於て心に見さるなく知らざることあることなければ……此事[七]娑語戒中、十八頭魚に及べる中に於て說けると並に同じ……乃至、世尊は是の如きの念を作したまはく、「此の阿難陀童子は最後身に逮びぬれば、合に我が法中に於て而し出家するを得て親侍者と爲り、我が所說の法は皆能く領受して更に遺失なく、我れ涅槃せん後に羅漢果を成ずべければ、阿難陀を度せんが爲の故に須らく劫比羅城の甘露王宮に入るべく、彼の王宮の城人をして我が來れるを知らさらしめん」。世尊は此念を作したまひ、已るに卽ち神通を作して苾芻僧伽の圍遶せると幷

【六】阿難陀の誕生及び出家。

【七】律部十九、一五三頁八行以下、一五四頁三行までの記なり。

我を殺さんと欲すれば、今宜しく我れ出家して諸の仙道を學するを放すべし」。剃頭人念ずらく、我れ若し此兒を苦留して出家を許さゞらんには、必ず他に殺されん、我れ今放して出家せしむるに如かじ」。父既にして念じ已りて其兒に告げて曰はく、「我れ今汝に出家するを放さん、汝仙法を得んには將に歸りて我に教へよ」。子は便ち白して曰さく、「善い哉、命を奉ぜん」。爾の時其子は卽ち山林の仙人住處に往き、諸仙人を尋ねたりしも了に相見えざりければ、卽ち自ら端坐して繋念思惟せるに便ち辟支佛果を證せり。既にして果を證し已るに卽ち便ち念云すらく、『我れ先に義父と共に言誓して曰へり、「若し善法を得たらんには歸り來りて相敎へん」と』。是念を作し已るに卽ち父所に往き、到り已りて空に騰りて諸の神變を作せるに、其父は見已りて心に甚だ歡喜し合掌して發願すらく、「我をして世世に常に國王の與に剃頭人と作さしめたまはんことを」。時に剃頭人は後に於て五辟支佛に値ひしに、皆斯願を發せるらく、「我をして世々に諸の國王が爲に剃頭人と作さしめたまはんことを」と。復四生[四]に於て佛世尊に値へるにも、亦斯願を發せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の剃頭人とは今の鄔波離是れなり、先世時に斯願を發せるに由りての故に、今國王が爲に剃頭人と作りしなり」と。復次に諸苾芻は復是疑を作さく、[五]「鄔波離は何の福業を作してか阿羅漢を證して持律第一なる」。佛言はく、『其の鄔波離には復因緣あり、汝等善く聽け、我れ今爲に說かん。乃往過去賢劫中に於て人壽二萬歲たりしとき、佛世尊あり世に出現して號して迦攝波と曰ひ、如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛・世尊の（十號を具足したまひき）。時に佛に一弟子あり、是れ阿羅漢にして持律は最たりき。時に鄔波離は彼が弟子と爲り、終身に梵行せるも果利を獲ざりければ、臨終の時而し誓願を發せるらく、「我が持する所の戒と福業の善根とにて、願はくは我れ當來に釋迦牟尼如來世に出現したまふ時に、彼の世尊の與に持律の弟子と作らんこと、我が鄔波駄耶の如くにして異なからんことを」。其弟子とは卽ち鄔波離是れなり、先に發願せる

【四】四生。藏文には「更に復四等正覺に値へるにも…」とあり。

【五】鄔波離持律第一前生因緣譚。

「我れ今諸の財物多きも而し子息なければ、一旦終沒せんに委付すべきなし、必ず國王のために盡く取りて將ち去られん」。時に彼の長者は剃頭人の愁憂して樂まざるを見て即ち便ち問うて曰はく、「汝今云何が愁憂せること此の如くなる」。時に剃頭人は即ち上の如く答へしに、長者告げて曰はく、「我に二子あり、今小者を將つて汝が與に子と僞さん」。是議を作し已るに便ち小兒を取りて以て其子と僞せり。後の時長者は病に遇ひて命終せるに、長者の太子は諸童兒と共に相嬉戲し、因みて或は鬪罵せんに諸童子の言はく、「汝は族姓に非じ、何を以ての故に、汝が弟は見に剃頭家の子と僞りたれば」。爾の時此兒は既に斯言を被りて愁悴して樂まず、便ち私に念云すらく、「若し我が小弟をして剃頭家に與へて子と僞さゞりならんには、我れ今云何ぞ他に毀辱せられんや、我れ今應に當に收へて弟を奪取せん」。是念を作し已るに、即ち弟を奪ひて歸れり。時に剃頭人は心に懊惱を懷き、便ち其家に剃頭種類を集めて彼衆に告げて曰はく、「我れ彼兒を養ひて多年歲を經たりしに今奪ひて將ち去りぬ。我が諸眷屬は今より以後、此家の與に剃頭人と作ること勿れ」。時に彼の兄弟は剃頭を得ざりければ、髮毛爪甲皆悉く長醜せり。國王忽ち見て即ち便ち問うて曰はく、「(三)汝今云何が髮毛爪甲を作し許して長醜せる」。時に彼の兄弟は國王に答へて言さく、「王、剃頭人は諸種類に制して我家に於て剃頭を爲す勿らしめたればなり」。王重ねて問うて曰はく、「彼れ何の故ありてなりや」。時に彼の兄弟は具に前事を說けるに、國王聞き已りて即ち便ち告げて言はく、「父の他に與へたる兒は合に更に奪ふべからず」。既にして王敎を奉じて即ち便ち弟を將りて彼が與に兒と僞せり。後に兒は議りて曰はく、「弟は彼の剃頭の與に子と僞りしに由りて、恒に我等をして他に毀辱せられしむるなり。我れ今應に當に我が弟を殺し去るべし、必ず斯語を免るれば」。時に人の聞くありて剃頭家に往き其弟に告げて曰はく、「汝が兄等は議れり、種族を辱しむるを恐れて、當に汝を殺さんと欲すれば、宜しく善く防護すべし」。弟は是語を聞き已りて剃頭人に告げて曰はく、「兒今來りて

【三】本文に汝今云何髮毛爪甲作許長醜とあり。

卷の第十三

（鄔波離・阿難陀前生因緣譚）

佛、劫比羅城尼瞿陀園中に在して常に五百の釋子及び鄔波離を度したまひし時、諸苾芻は咸く皆疑ありければ緣を以て佛に白さく、「此の鄔波離は昔何の業を作してか王の剃士と爲れる」。爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、『往昔國王に一剃頭人ありしに、辟支佛あり來りて門前に立ち、彼人に語げて曰はく、「善男子、我が與に剃頭せんに當に善果を獲べけん」。彼の剃頭人に一外甥ありければ、其甥は告げて曰はく、「我は王使たれば汝可しく後に於て當に此人の爲に、如法に而し剃りて國王と一種の如くにすべし」。時に彼の外甥は舅の是言を聞いて卽ち自ら思惟すらく、「此人の與に如法に剃頭せしめんこと、必ず應に多く功德を得るなるべけん」。是念を作し已るに、卽ち便ち諦念して辟支佛の爲に如法に剃頭せり。時に辟支佛は復思念したまはく、「彼人、我が與に如法に剃頭せりければ、我れ當に護助して必ず此人をして多く利益を獲せしめん」。時に辟支佛は是念を作し已るに卽ち虛空に騰りて種種の神變を變現したまひしに、彼人は見已りて甚だ希有を生じて合掌禮敬し、五體を地に投じて便ち發願して云はく、「我れ今旣に此人の與に剃頭せること國王と相似せるが如くせり、願はくは我が來生には世世の中に於て、常に諸の國王の與に剃頭して我が舅と異るなきが如きを得んことを」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼時の外甥とは今の鄔波離是なり、先世に於て辟支佛の與に剃頭して發願せるに由りての故に、今王の與に剃頭人と爲りしなり」。[二]爾の時佛、諸苾芻に告げたまはく、『此の鄔波離は先世の時に於て復餘願ありき。我れ今之を說かん、汝等諦に聽け。往昔村中に一長者あり、一妻を取りを得て二男を生めり。彼時の國王に一剃頭人あり、此長者と共に親友たりき。彼の剃頭人は甚だ財寶ありしも男女あることなかりければ、常に私に念云すらく、

【一】鄔波離爲ニ王剃士一前生因緣譚。

【二】鄔波離發ニ餘願一前生因緣譚。

き。獼猴は復佛意を知りて其蜜鉢を持し、淸流の傍に至り水を取りて蜜に灑ぎ、還來して供養せるに佛は卽ち便ち受けたまへり。時に彼の獼猴は旣にして佛の、其蜜を受けたまへるを見て心に歡喜を生じて合掌頂禮し、踊躍跳躑して前後を顧みざりければ因りて井中に落ちて遂に卽ち命過せるに當に卽ち生を那地迦村の淸淨婆羅門家夫人の胎中に託せり。旣にして訖胎し已るに、福業に緣りての故に那地迦村の界內に天は蜜雨を降せり。時に諸人等は占相者に問ふらく、「此は是れ何の事たりや」。占者報じて曰はく、「婆羅門婦の胎中に兒ありて業力感に緣りての故なり」。十月滿つるに至りて子を生むの日に復蜜雨を降せり。眷屬並に集りて三七日の中食供養を設けしに、眷屬は當に問ふらく、「所生の孩子は爲に何の字をか立つべき」。家人答へて云はく、「其子懷める時當に蜜雨を降し、生まれし時も亦爾りければ、父姓は婆悉瑟吒なれば、玆に因みて爲に末度婆悉瑟吒と名け、此を最勝蜜と名けん」と。兒漸く長大せるに宿業力に因りて便ち信心を生じ、卽ち佛所に往きしに、佛爲に法を說きたまひ、發心出家しては便ち如法に度したまへり。旣にして出家し已るに日日に自然に三鉢蜜を感じ、一鉢は佛に供へ、一鉢は僧伽に供養し、一鉢は親友と共に食せり。時に諸大衆は咸く並に疑を生じて倶に往いて佛に白さく、「何の因緣を以て此の最勝蜜苾芻は日日に是の如く斯の蜜應あるなりや」。佛言はく、「此の最勝蜜苾芻は自ら福業を作しぬれば、是故に日日に斯の蜜報を感ぜるなり……廣く說けること上の如し……」。佛、苾芻に告げたまはく、「汝等昔に一獼猴ありて娑羅樹より下り來り、一鉢の蜜を以て我に供養せるを見たりや不や」。苾芻、佛に白して言さく、「世尊、我等昔に見たり」。佛言はく、「彼の獼猴とは卽ち此の最勝蜜苾芻是なり。前に信心もて蜜を施せる因緣に由りての故に斯報を獲たり。然り此苾芻は何ぞ但に日に能く三鉢蜜を變ずるのみならんや、四海をして總べて蜜を成ぜしめんと欲せんには難と爲すに足らざるなり。何を以ての故に、佛に蜜を施せる福增上するに由りての故なり。……廣く說けること上の如し……應に黑業及び雜染業を捨てゝ純白業を修すべし」と。

【二六】婆悉瑟吒（Vāsiṣṭhā, Vāsiṣṭha）。律部二十三、註（七の七）婆斯吒の下參照。
【二七】末度婆悉瑟吒（Madhuvāsiṣṭha）。最勝蜜、蜜作と譯す。律部二十三、註（一一七の六一）參照。
【二八】蜜應。藏文に「每日三鉢づゝ蜜を成ずるを得るは何故なりや」とあり、三鉢づゝの蜜が出現するの應報をいふ。

空中に騰踊し種種の神變を現じたまひしに、諸の異生等は此神變を見て速に善願を發し、五體を地に投ずること猶し樹の倒るゝが如くにして便ち大願を發すらく、「我れ今此聖人に供養し已れり、當に來世には國王と爲るを得て、諸の國中に於て最も上首たらしめ、我れ今者辟支佛を見たてまつりしも當來の世に於ては願はくは如來に見えて生死海を度せ（しめ）たまはんことを」。此願を發し已るに、諸の貧人等は皆河を渡り至りて咸く餅食を索めしに、上首の貧人は報じて曰はく、「我已に施し訖れり、汝等隨喜せよ」。諸貧人曰はく、「汝、餅食を施し已りて何の願をか發せる」。上首報じて言はく、「願はくは來世には諸の國中に於て國王と爲るを得て、諸の國中に於て最も上首と爲らんことを」。諸人は聞き已りて咸く皆發願すらく、「上首旣にして國主たるを得んには、我等は願はくは最上の臣佐と爲らんことを」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「爾の時の上首貧人とは今の賢王釋子是なり、諸の貧人とは今の五百の釋子是なりしなり。彼の賢子は昔辟支佛所に於て發願して施食せるに由りての故に、今諸釋種中にて而し國王と爲るを得、及び我に見えて出家學道して阿羅漢果を證せるなり。汝、諸苾芻、當に知るべし、黑業を造らんには黑業の報を得、雜業を造らんには雜業の報を得、白業を造らんには白業の報を得るなり。汝等應に黑業及び雜業染業を捨てゝ純白業を修すべし」と。

佛、[二四]那地迦村群蛇林中に在しき。此時多く諸苾芻の鉢及び世尊の鉢ありて露地に在けるに[二五]一獼猴あり、娑羅林より下り來りて而し鉢を取れり。諸苾芻等は即ち前みて打ち逐へるに、佛、諸苾芻に告げたまはく、「汝等打つこと勿れ、其の取る所に任せて損壞せんを畏れざれ」。時に彼の獼猴は鉢の傍に至りて卽ち佛鉢を取り、娑羅樹に上りて須臾の間に鉢に蜜を盛滿して來りて佛に供養せるに、蜜中に蜂ありければ如來は受けたまはざりき。時に彼の獼猴は如來の心を知りて、復蜜鉢を持し一屛處に於て其蜂を擇り已り、還來して佛に奉ぜしに、未だ淨せざりし爲の故に佛又受けたまはさり

【二四】那地迦村群蛇林。律部二十三、註（六の五〇・五一）參照。

【二五】獼猴獻蜜緣。（最勝蜜苾芻の緣なり。何故に此處にこの獻蜜の緣を出せるか明かならず）。

きて甚だ大いに歡喜し、貧人に告げて曰はく、「汝、何の願をか求むるなる、我れ當に汝に與ふべければ」。貧人答へて曰さく、「今此城中の所有貧人に、願はくは王、各に飮食を施し并に衣服を賜ひ、并に我をして上首と爲さしめたまはんことを」。王は此言を聞きて便ち大臣に告ぐらく、「我が國の城中一切の貧人に、可しく飮食を施し兼ねるに衣服を與へ、仍し此人をして其が上首と爲さしむべし」。大臣は命を奉じて波羅痆斯城に於て鼓を擊ちて宣告し、一切の貧人をして並に集會せしめ、既にして集會し已るに、飮食并に諸衣服を施與し、王命を宣示して先の貧人をして其主領と爲し、所有處分は咸く隨ひ受くべからしめぬ。時に諸の貧人は既にして衣食を得て悉く皆慶悅し、遵奉して主と爲せり。諸の貧人等は先に街衢に在りて他食を掣盜せるには食主は瞋恨して之を打罵せしに、後に王の恩を得ては轉增々奪掣るも國人は王を懼れて敢へて打罵せざりき。時に國の諸人は卽ち王所に至り具に此事を論べしに、王は便ち報じて曰はく、「汝等自ら可しく守護すべし、貧人を打つこと勿れ」。後に異時に於て城中に人あり、筐篋中に於て諸の餠食を盛りしに、其上首の貧人は見已りて便ち奪ひ之を持して奔走し、諸の貧人等は競ひ來り隨逐して相掣奪せんと欲せり。其貧人主は走りて河岸に至りしに又逼逐せられければ、卽ち餠筐を戴き河に汎びて渡り、彼岸に到り已りて一樹下に在きぬ」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『若し佛如來未だ世に出でたまはざる時は、當に辟支佛あり世に出現して蒼生を利益したまふたり。(彼佛は)因みて行いて而し過ぎたまひしに、彼の貧人は威儀庠序なるを見て便ち自ら念云すらく、「我れ先世に戒施を知らず、此の(如き)人に供養することと能はざりしに由り、此身をして貧窮孤露ならしむるを致せるなり。若し彼の德人にして我が施を受けたまはんには、我れ當に施與すべけん」。時に辟支佛は其念を觀知して利益せんが爲の故に、鉢を持して前に向ひて其餠食を乞ひたまひしに、貧人歡喜して盡く餠食を持して而ち以て奉施せり。辟支佛の常法として、口に法を說かず、身に神通を現じて以て相利益したまへば、其餠を得已るに

恨を生じ、競ひ爭うて打ち搭きて城外に驅出せり。彼城の國王に一園林あり、其人既にして驅逐せられ、園林中に投じて且らく自ら居止せり。時に彼の國王は春陽月に因みて此園林中の花菓茂盛し好鳥競ひ集りければ、王は宮人婇女と與に園に往いて遊觀せんとし、既にして園中に至りて諸婇女と與に處處に遊望し嬉戲娛樂せり。時に彼國王は疲乏して睡れるに、女人に常法ありて若し花菓を見んには便ち貪愛を生ずれば、爾の時に當りて既に王の睡れるを見て各は林中に散じて花菓を採求せり。時に彼の國王は睡より覺め起きて卽ち城中に還りしに、彼の諸宮人は王の還城せるを見て各速に隨逐せり。時に一宮人は心卽ち忙遽して、身上より其瓔珞を遺せるを覺えざりき。宮人去りし後、貧人之を見て私に自ら念云すらく、「我れ若し取らんに或は尋知するありて必ず相苦惱せん」。卽ち瓔珞を取りて樹上に懸け、心に自ら念云すらく、「本主若し來らんには意に隨せて將ち去れ」。復遙に之を觀ぜるらく、「若し非主にして取らんには與ふるに擬せじ」。彼の宮女は既にして宮中に至りて瓔珞を失へるを覺り、園内に在らんを念じて其王に白して言さく、「我れ忙遽せるに緣りて瓔珞を遺忘せるも彼の園内に在らん」。時に王は卽ち群臣に告ぐらく、「我に瓔珞ありしも遺して園内に在けり、可しく速に之を覓めて遺失せしむることなかれ」。臣は王命を奉じて[三三]多手力を將つて園中に散覓せるに、瓔珞の樹に繫在せるを見たりければ、衆共に議りて言はく、「誰か瓔珞を繫けて此の樹上に在ける」。卽ち手力をして縱横に訪覓せしめしに、乃し貧人の一叢下に在るを見て問うて言はく、「汝、何人が此瓔珞を繫けたるかを見たりや」。貧人は上の如くに具に報ぜるに、爾の時王臣は卽ち瓔珞を持して宮に還り、王に送りて具に上事を陳べしに、王は此言を聞くや卽ち使者を遣はして貧人を追ひ取へしめしに、貧人既に至りければ王は便ち告げて曰はく、「汝、先に何に因りて我が瓔珞を得つゝも、持して將ち去らずして樹上に繫けたりしや」。貧人答へて曰さく、「大王、當に知るべし、此は是れ王の貴物にして我れ先より貧窮なれば受用に堪えざるを」。王は此語を聞

【三三】多手力。多人力の意。

願はくは王、賊法に依りて　　我に盜水の罪を賜はんことを」。

時に王報じて曰はく、「縱輙ち水を取らんとも亦是れ賊ならじ」。王は復問うて言はく、「汝、誰が水を取りし」。時に里企多は廣く上事の如く具に王に報じ已りしに、王便ち報じて曰はく、「旣に是れ汝が兄にして又是れ鄔波駄耶なれば、輙ち水を飮めりと雖亦是れ賊ならじ、汝今好く去れ、罪を與ふべからじ」。時に里企多は又王に白して曰はく、「我は是れ賊人なれは願はくは重罪を與へたまはんことを。如し若與へざらんには心安寧ならじ」。是時國王は此語を聞き已りて便ち瞋怒を發し、而し卽ち報じて言はく、「汝今此に住りて更に東西すること勿れ、我れ山遊より廻り來るを待つて處分せん」。王は遊獵に去いて餘路より宮に還りければ、遂に仙人に進止を與へざりしを忘れぬ。六日を經たるも是時仙人は敢へて東西せざりければ、諸臣は王に白さく、「彼の仙は敎を奉じて六日を經たるも敢へて東西せじ、唯願はくは大王、速に處分を與へたまはんことを」。王便ち報じて言はく、「罰罪せること六日なり、汝今過なし、今、汝の去るを放さん」。臣、仙人に報ずらく、「汝今六日しぬれば已に汝を罰し了れり。今王勅を奉じて汝が東西するに任さん」。里企多は喜びて遂に卽ち歸還せり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「昔の梵授王とは今の羅怙羅是れなり。前生の時瞋心を起せるが故に、東西するを許さずして乃し六日を經たるが爲の故に、今六年、業力を以ての故に母胎中に在りしなり。諸苾芻、若し黑白業及び雜染業は咸悉く報あれば、諸苾芻、應に黑業及び雜染業を捨てゝ純白業を修すべし」。

[三]時に諸苾芻は咸く皆疑ありて復佛に白して言さく、「此の具壽賢子は曾て何の業を作してか、今上首釋種の中に於てして而し國王と爲れる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「此の具壽賢子は自ら福業を種ゑたれば……」。乃至、伽他を說いて曰はく、「……」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「昔貧人ありて人間に遊行して波羅痆斯城に至りしに、其城中に於て諸の貧人あり、此人の來れるを見て卽ち瞋

【三】賢子苾芻爲二國王一前生因緣譚。賢子とは阿那律等に共に出家せる拔提王なり。

に疑ありければ世尊に請問すらく、「[一九]此の羅怙羅は先に何の業を作してか、今此報を受けて六年胎に處せるなる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「羅怙羅は自ら惡業を作したれば……義は上に說けるが如し……」。并及に頌して曰はく、「……」。爾の時世尊は復諸苾芻に告げたまはく、『此の波羅痆斯城に遠からざるに、時に一林あり諸の花菓多く、兄弟二人ありて一を[二〇]商佉と名け二を[二一]里企多と名け、身に樹皮を著け常に菓實及び諸の藥草を食ひ、商佉は師と爲り里企多は弟子と爲りぬ。時に波羅痆斯國王及び諸人民は、此林中に二修道人の一は商佉と名け二は里企多と名くるあるを知れり。後に一時に於て商佉は平旦に缾に水を滿せるを持して山に遊びて菓を採り、其の里企多は五更に早起し兄の前に在りて行きて山に入り、缾水を持せずして花菓を採得せるに、先に到來せりければ渇乏して水を須めんとて、己が缾中に向へるも遂に水飲なく、便ち師の水を取りて用つて之を飲めり、既にして水を喫み竟りて更に師の與に缾に添へざりき。是時商佉は日高しくて後より至り、乏渇して水を須めんとて己が添缾を取りて水を覓めて飲まんとせるに、缾に水無きを見て遂に卽ち瞋罵すらく、「是れ何の强賊にして我が水を偸劫せる」。時に里企多は尋いで卽ち報じて言はく、「我は是れ其賊なり、我れ缾水を用ひぬ。唯願はくは鄔波陀耶、我を重罪に罰せんことを」。商佉報じて曰はく、「汝は是れ我が弟子なれば水を須ゐんに飮むに任さん、汝に罪を與へじ」。里企多は鄔波駄耶に白して曰さく、「我は是れ賊人なり、願はくは重罪を與へんことを。若如し與へざらんには心安寧ならじ」。商佉聞き已りて遂に大いに瞋怒し、便ち卽ち報じて言はく、「我れ今瞋りて汝に罪を與ふること能はじ、如し罪を與へんことを索めんには、汝、國王の處に向ひて而し重罪を索めよ」。時に里企多は遂に王所に向へるに、其中路に至りて王の出獵せるに逢ひければ、手を擧げて呪願すらく、「唯願はくは大王、長命無病にして常に戰に勝を得んことを」。伽他を說いて曰はく、

「大王、我は是れ賊なり　輙ち盜みて他水を喫みぬ

【一九】羅怙羅處レ胎六年前生因緣譚。

【二〇】商佉。duṅ(ドウン)、「海螺」の義、śaṅkha なり。

【二一】里企多。bri-ba(チイバ)、「畫く」義、Likhita なり。

を作し已りて遂に卽ち放ち行りしに、時に緊那羅婦は遂に柴を積みて四面に火を放ち、其夫を追念して身命を惜まず、卽ち火に投じて夫婦俱に燒きぬ。諸天は空中にて而し頌を說いて曰はく、

「此事を求めんと欲して　　翻りて乃し更に餘に遭へり
本[26]音樂天を希ひ　　夫婦皆身死にき」と』。

爾の時世尊は諸苾芻に告げて曰はく、「往昔の緊那羅とは卽ち我が身是なり、緊那羅婦とは卽ち耶輸陀羅是なりしなり。往昔時に於て我を愛せるが爲の故に已に火に投じ、今も貪愛の爲に復高樓より墜ちしなり」。佛は是念を作したまはく、「[27]若し耶輸陀羅を化せんには今正に是れ時なり、我れ宜しく彼をして生死海を出さしむべし」。是念を作し已りて耶輸陀羅が爲に四聖諦法を說きたまひしに、彼れ既にして聞き已りて智慧の金剛杵を以て二十種の我見の山峯を摧破し、悉く皆摧滅して預流果を證し、信心を發起して家より非家に趣き、策勤修習して阿羅漢果を證せり。是時苾芻尼耶輸陀羅は衆中に處して心に慚愧を懷きければ、爾の時世尊は諸苾芻に告げて曰はく、「我が一切苾芻尼衆の中、耶輸陀羅苾芻尼は具慚愧に最たり」。諸苾芻衆は咸く皆疑ありければ、復世尊に問ふらく、「[28]此の耶輸陀羅苾芻尼は何の業を作せる報にて六年羅怙羅を懷けるなる」。爾の時世尊は諸苾芻に告げて曰はく、「……上に說けるが如し……乃し頌を說して曰はく……」と。佛、諸苾芻に告げたはく、『往昔に村あり、時に老母あり唯一女ありしが、多く乳牛を養ひ日每に酪漿を作りて、母女相隨へて村を巡りて估賣せり。後に一時に於て其女は酪を負ひしも忽ち嬌心を設けて遂に母に報じて曰はく、「我れ風を見んと欲す、願はくは母、酪を持して且らく漸く前行したまはんことを」。母卽ち酪を取り擔負して去りしに、其女は乖きて諂誑心に墮せるが故に、六里を離れたるも其母を趁はざりき。此業に由りての故に耶輸陀羅は今生に報を招きて六年懷胎せるなり』と。佛、諸苾芻に告げたまはく、「……義は上に說けるが如し。……」。而ち頌を說いて曰はく、「……」。時に諸苾芻は復更

【二六】音樂天。緊那羅（Kiṃ-nara）は天の樂神なればなり。

【二七】耶輸陀羅の出家得證。

【二八】耶輸陀羅六年懷胎前生因緣譚。

いて天に遍く便ち甘雨を降らしければ、百姓豐樂して五穀滋榮せり。爾の時父王は卽ち寂靜を嫁して仙に與へて婦と爲し、及び諸美女をも亦驅馳に賜へり。乃し後時に至りて王女を棄て便ち餘女と共に遂に私通を作せるに、寂靜は見已りて心に嫉妬を生じ、卽ち仙人と共に甚だ相忿競し、脚を擧げて仙を蹴り履もて仙面を打ちければ、仙は是念を作さく、「我れ昔時に於て天に雲雷を起さんには呪に由りて息めしめたるに、忽ち婬欲に纒られて女に欺陵せられんとは」。爾の時仙人は心に欲染を厭ひ、便ち寂靜を捨てゝ精勤習定せりければ、卽ち五通を證して空に乘じて行いて本處に還歸せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「昔時の仙とは卽ち我が身是れなり、王女寂靜とは今の耶輸陀羅是れなりしなり。昔、味を食して婬情に貪著せるに由り、今者も歡喜團を以て更に我を厭著せんと欲せるなり」。佛は此語を說き已りて宮よりして出でたまひしに、[一五]耶輸陀羅は既にして佛知しめせるを見て心便ち息念して更に尋求せず、卽ち七重の高樓に昇り身命を惜まずして遂に地に投ぜるに佛は神力を以て接けて損はしめたまはざりき。諸人既にして見て傷損あらざりければ、心に驚怪を生ぜり。諸苾芻衆は見て便ち佛に問ふらく、「此の耶輸陀羅は佛を愛するの心の爲の故に、身命を惜まず、高樓より身を放ちて地に投ぜるなりや」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『耶輸陀羅は我を愛する心の爲の故に、獨に今生に身命を惜まざりしのみにはあらじ、過去にも亦復我が爲に身命を惜まざりき。諸苾芻に告げたまはく、『汝等諦に聽け、往昔波羅痆斯城に王ありて名けて梵授と曰へり。一時の間に於て遂に遊獵に出でゝ廣く衆生を殺し、行いて山谷に至りしに一緊那羅の睡臥し婦は傍邊に在りて而し之を守護せるを見ぬ。王は遂に弓を張りて緊那羅を射たるに、既にして要處に著して一箭にて便ち死にければ、緊那羅婦を捉得し取りて妻と爲さんと欲せり。時に緊那羅婦は尋いで王に白して曰さく、「唯願はくは大王、我に其夫を殯葬するを放したまはんことを、了るを待ちて卽ち王に隨ひ去れば」。王は便ち是念を作さく、「此れ豈に能く走げんや、其禮を作すを看ん」と。此念

【一五】耶輸陀羅愛レ佛於二高樓上一投レ地前生因緣譚。

て戒行を修するを敗らしめ、引いて此に來至せん」。王は此を聞き已るに卽ち女の說けるが如くに舡を縛り板を安き諸の花果を栽ゑ……並に上に說けるが如くし……遂に舡中に於て蜜に藥酒を盛り、及び諸の飮食にも並に亦藥を安きぬ。是に於て寂靜幷に餘の婇女は假に仙儀の形狀衣服を作して、樹皮衣を著け髮を拔きて後に散じて仙と共に異ることなくし、舡上より下りて徐步して仙に詣り、口に婆羅門呪法を誦して仙人の所に至れり。彼仙の弟子は遙に二十客仙の來至せるを見て卽ち仙師に報じて曰さく、「諸客仙ありて今此に來至せり」。時に獨角仙は口に「善來」と念じ、喚びて室に入らしめぬ。是時諸仙は旣にして室に入り已るに、時に獨角仙は諸仙の顏色に異あるを細看して卽ち頌を說いて曰はく、

「曾て辛苦を經ず　行步復從容たり
面上に髭を生ぜず　胸前に高下あり
是れ仙の形貌と別なるに　此事實に希奇たり」。

彼の獨角仙は疑心ありしと雖、亦客仙が僞に座處を敷き已り及び菓苽を設けぬ。寂靜仙曰さく、「汝が住止する所には是の如き等の苦澁多き菓あるも、我が今の住處には好菓實ありて猶し甘露の如ければ、我れ今請ふ、汝、我が住處に至らんことを」。時に獨角仙は卽ち共に相隨ひて船に乘じて水に泛びければ、舡の樹上より其椰子の諸菓實中に孀媚の藥酒を盛れるを取りて獨角仙に奉ぜり。彼れ旣にして飮み已るに便ち假仙に報ずらく、「共に非法を行ぜん」と。此の婬染に由りて遂に神通を失ひ、戒行已に虧けて呪力便ち息み浮雲四起せりければ、獨角は見已りて面を擧げて天を罵れり。寂靜報じて言はく、「汝が身に非を爲しつゝも尙ほ自ら覺らず、何の謂ぞや。面を擧げて由ほ故ほ天を怨まんとは」。婬染旣に纒られて默然して住せるに、寂靜は將ゐ往いて直ちに王前に至り、父王に白して曰さく、「彼の呪雨仙とは此人卽ち是なり」。王は仙の至れるを見て喜びに自ら勝へず、雲布

崇高なるは必ず墮落し
命あるは咸く死に歸せん」。
「積聚せるは皆消散し
合會せんには別離あり

乃し仙人は身歿するに至りければ、彼の獨角仙は仙法を以て爲に其父を葬り、父の喪せるを思戀して愁悲憂惱せるに便ち五通を證せり。後に異時に於て因みに往いて水を取め、水を取め得已りて迴りて中路に至りしに、遂に天雨に逢ひ泥滑りて地に倒れ水缾遂に破れければ、破缾の水を掬ひて其掌中に置き、口呪を以て天に向うて遙に散ぜるらく、「汝、雨を下せるに由りて我が缾を打ち破れり、今より已後十二年中更に雨を下すこと勿れ」と。此仙の呪力に由りて雨便ち下らざりければ、波羅痆斯城は大亢旱に遭ひ、人民飢饉にして迸散し逃亡せり。是時國王は諸占事を召して問うて言はく、「何の故にか天雨を降さざる」。占事答へて曰さく、「仙人嗔りしが故に天雨を下さゞるなり」。王、占事に問ふらく、「何の方計をか作さんに、天甘雨を下して百姓豐樂するなる」。占事報じて言さく、「若し也仙の戒行修道を敗らんには天即ち甘雨せん、若し仙を敗り戒行を犯ぜしめざらんには、十二年中、天終に雨らじ」。時に王は聞き已りて頰を托して思惟せるに、宮人妃主及び諸臣等は王の憂惱せるを見て卽ち王に白して言さく、「何の故にか憂惱したまへる」。王卽ち報じて曰はく、「仙の呪力に由りて天雨を下さず……乃至、廣く義を說けること上に辯ぜるが如し……。我今何の方計を作してか彼の仙人をして戒行を修するを敗らしむべきかを知らず、斯に由りて憂惱し是を以て樂まざるなり」。時に彼國王に一大女あり名けて〔一四〕寂靜と曰へるが、卽ち王に白して言さく、「憂惱するを須ゐざれ、我れ方計を設けて當に彼仙をして必ず戒行を敗らしむべければ」。王は女に問うて曰はく、「何の方計かある」。女は王に白して言さく、「我れ婆羅門の呪法を學び、及び餘の婇女二十人等も一處に法を學べり。願はくは王、可しく水上に於て舡を縛り板を安き土を著れ、樹を栽ゑ諸の花菓を種ゑて一に仙人所住の處に依ふべし。我等は舡に乘じて彼の仙所に至り、卽ち能く仙をし

〔一四〕寂靜女。Źi-ldan-ma（シ　ダム　マ）、「寂靜を持せる女」の義。

ひしに、諸女は聞き已りて預流果を得たり。唯、耶輸陀羅のみは染心重きが爲の故に、未だ果を獲ずして便ち是の如きの心念口言を作さく、「我に滋味ありて能く喫せん者をして心に愛著を生ぜしむれば、卽ち種種の馨香美味の諸飲食等を作り、自ら手づから執持して世尊に奉ぜん」と。是念を作し已るに、諸苾芻は皆聞きて以て世尊に報ぜしに、佛言はく、「諸苾芻、當に知るべし、我れ昔三毒未だ離れざりし時にも、諸有香味に而し愛著なかりき、何に況んや今者三毒已に離れたれば而し能く我を染せんや。耶輸陀羅にして縱食味を有せんとも、我は懼るゝ所なけん」。時に諸苾芻は皆疑ひて佛に白して言さく、「世尊、何の故にか耶輸陀羅は歡喜圓に因りて佛世尊に於て染著を生ぜ(しめ)んとせる」。佛、諸苾芻に言はく、「此の耶輸陀羅は今生に於て[一二]歡喜圓に因りて而し我をして染著せ(しめ)んとせるのみには非じ、曾て過去に於ても先に是事ありき、汝等諦に聽け。往昔世時に一聚落あり、斯を去ること遠からざるに阿蘭若林あり、多く花果及び清流美泉ありき。時に仙人あり、彼の花果を喫ひ身に樹皮を披、此の苦行を作して五神通を證し、所有禽獸は相恐懼せず、常に來りて親近せり。後に一時に於て小便に往かんと欲せしに、一女鹿ありて仙人に隨うて行けり。仙人小便して失精せるに、鹿は後に隨うて便ち卽ち之を喫し、復舌を以て生門を舐めしに、有情の業力不思議の故に因りて卽ち胎ありき。日月既にして滿ちて彼鹿は本處に來り就りて一男子を生めるに、鹿は此兒を生むや是れ人なりと知りて便ち棄て去れり。時に仙人は之を見て是念言を作さく、「此は是れ誰が子なる」。復更に思惟して是れ己が兒なるを知り、遂に收りて之を養へり。後に漸く長大して年十二に至りしに、頭に一角を生じければ、因みて與に字を立てゝ名けて[一三]獨角と爲せり。其父染患せりければ、獨角は種種に醫療せるも差ゆるを得ること能はず、其父漸く困みて將に死なんとせりければ、獨角に告げて曰はく、「我が今の此處は常に諸仙ありて仙人數來りて過往すれば、汝可しく迎接問訊して若し來らんには花果を供給すべし、我願の爲の故に」。伽他を說いて曰はく、

[一一] 耶輸陀羅以二歡喜圓一令三世尊生二染著一前生因緣譚。律部八、註(一の三五)の本文、難提比丘本生譚に相似せり。

[一二] 歡喜圓。藏文の語は前註(四)の一相愛歡喜圓に同じ。但し律部十、註(二九の八五)歡喜丸參照。

[一三] 獨角。draṅ-sroṅ rwa-can (チャン ロン ルワ チャン)、「角を持てる仙人」の義。

「此は是れ智賊なれば云何がしてか之を殺さん」。群臣に告げて曰はく、「此人勇猛にして兼ぬるに智慧あれば、可しく留めて侍衛たらしむべし」と。便ち女を嫁與して之を以て妻と爲し、仍し半國を以て之に給せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「爾の時の狗賊とは則ち我が身是なり、時に彼兒とは則ち羅怙羅是れなりしなり。昔時に於ても人衆中に於て能く我を識れるに由りての故に、今復此衆中に於ても能く我を識れるなり。諸苾芻、當に知るべし、業力不可思議たるを。汝等應に業行に隨ふべし」と。

爾の時耶輸陀羅は是念を作さく、「羅怙羅の父にして若し宮に入らん時、我れ應に諸の方便を設けて承事供養して宮を出でさらしむべし」。是念を作し已りて耶輸陀羅は喬比迦・彌離迦遮等の六萬美人と與に、各各種種の莊具を嚴飾し種種の妙香を熏らして皆悉く辦へ訖れり。爾の時世尊は晨朝時に於て衣を著け鉢を持し諸苾芻の圍繞侍衛せると與に、有情を調伏せんが爲の故に王宮內に入りたまへり。時に耶輸陀羅等の三夫人は六萬の婇女と與に、諸の音樂倡伎歌舞を作し、衣服を整理し蠱媚妖艷もて世尊の前に在りて染著せしめんと欲せり。世尊は見已りて便ち是念を作したまはく、「今者食時將に至らんとす、我れ若し先に食して此の諸女の爲に法を說かざらんに、恐らくは調伏時過ぎて諸女人をして欲心熾盛ならしめ、四諦の理に於て利益を蒙らされば、我れ今應に神通力を以て故に彼女等をして皆悉く調伏せしむべし」。是念を作し已るに即ち地に沒して東方空中よりして見れ、彼の空中に於て行住坐臥したまひて、威儀自在なりき。復火光三昧に入りて其身中より諸の青黃赤白の種種の光を放ち、或は復身上に水を出して身下に火を出し、南西北方にも亦復是の如くにし、空中より沒して諸苾芻の上首なる師子座上に於て忽然として見れたまひき。諸の艷女等は斯事を見已りて、皆佛前に於て地に倒るゝこと斧もて樹を斫れるが如くにして、佛足を頂禮して一面に在りて坐せり。爾の時世尊は諸女等の性力・意願を知しめし、四諦の理を以て廣く爲に分別したま

れるを見て高聲に啼泣して、是の如きの言を作さく、「彼の賊は我を强私し、今已に去り訖れり」。守河岸人は王女に報じて曰はく、「汝嬉戲せる時默然して歡樂し、賊今旣に去りて乃し始めて啼泣せんとは。我等今に於て何處に賊を求むべき」。守岸人等は具に以て王に告げしに、王曰はく、「汝等云何が善く防守せずして是の如からしむるを致せる」。時に彼の王女は狗賊に交られて遂に便ち胎あり、十月を具足して一子を誕生せり。時に彼の狗賊は王女が子を生めるを聞き、復念日を作さく、「我れ今必ず我兒の爲に諸の喜慶を作さん」。是念を作し已るに卽ち其形を變じて一給使と僞り、王內より出でゝ諸人に告げて曰はく、『王に敎令あり、「我が女は子を生みければ、汝諸の國人は可しく今夜に於て意を恣にして歡樂し、互に衣服財帛を盜みて情に任せて作すべし」と』。時に國の群臣及び諸人衆は、是語を聞き已るに情を放にして嬉戲せりければ、其聲喧鬧して王內に聞えぬ。王、諸人に問ふらく、「我が諸の國人は云何が喧鬧すること是の若くなる」。國人答へて曰さく、「我等は先に王敎を奉じぬれば、我をして是の如からしめたるのみ」。王は是を聞き已るに、是れ狗賊の所作なるを知り、便ち是念を作さく、「我れ若し此狗賊を捉へて得ざらんには、我れ便ち國位を捨て去らん」。卽ち一計を設けて一大堂を造り、堂旣にして了り已るに其兒の年已に六歲なりしが、諸群臣をして皷を擊ちて宣令せしめ、盡く國內の所有男子を喚びて盡く堂內に入れ、來らざるあらんには捉獲して之を殺さしめぬ。爾の時國人は盡く來りて堂に入りしに、時に彼の狗賊も亦其中に在りき。時に王は卽ち華鬘を以てして其兒に告げて曰はく、「汝、此鬘を持し、彼の衆中に於て若し汝が父を見んには、鬘を以て之に與へよ」。復傍人をして隨逐せしむらく、「其兒、鬘を與へんには汝便ち捉取すべし」。爾の時彼の兒は卽ち花鬘を持して衆中に至りしに、業力を以ての故に果して其父を見て便ち鬘を以て與へぬ。時に彼傍人は便ち狗賊を捉へて王所に將ゐ至りしに、王は群臣を集めて共に此事を議るらく、「此の如きの罪人は云何が處分すべき」。「可しく之を殺すべきのみ」。王卽ち思惟すらく、

即ち是れ狗賊なるに云何ぞ捉へざりし、今可しく捕取すべし」。爾の時彼賊は復是念を作さく、「我今要らず須らく身屍を葬れる處に於て諸の祭祀を設くべし」と。念じ已るに便ち[九]淨行婆羅門の形と作り、國城内に於て徧く乞食を行じ、即ち其食を以て屍を燒ける處に於て五處に安置し、陰に其身を祭りて作し已るに便ち去れり。時に守屍人は具に以て王に白すに、王曰はく、「彼は是れ狗賊なるに如何が捉へざりし、甚だ不善たり」。爾の時彼賊は復是念を作さく、「我れ今要めて身骨を將り弶伽河中に投ぜん」。是念を作し已るに便ち一の[一〇]事髑髏外道の形と作りて彼の骨所に就り、其餘灰を取りて以て其身に塗り、燒骨を收取して髑髏中に安置し、弶伽河中に投じて作し已るに使ち去れり。彼の守屍人は復以て王に奏せるに、王曰はく、「彼は是れ狗賊なるに云何ぞ捉へざりし、甚だ不善たり、汝等宜しく止むべし、我れ自ら捉取せん」。爾の時其王は一汎舟に乘じ前後に侍從せると（與に）弶伽河中に遊び、河岸上に於ては人の守捉するを還へぬ。王に先に女あり顏容端正にして衆人の樂見するところなりしが、同じく河中に於て遊戲して稍相遠ざからしめ、其女に報じて曰はく、「人ありて汝を捉へんに汝便ち高聲せよ」。又守岸人に勅して曰はく、「我が女にして聲を作さんに、汝等即ち須らく相近づくべく、若し男子を見んには便ち捉取すべし」。爾の時狗賊は復是念を作さく、「今王は女と與に河中に遊戲しぬれば、我れ應に要めて彼女と相共に嬉戲すべし」。是念を作し已るに即ち上流に於て而し住し、一瓦鍋を放ちて流に隨うて下せるに、岸夫は見已りて是れ賊なりと謂ひ、競ひて棒を持して打ちしに瓦鍋便ち破れければ乃ち賊に非ざるを知れり。第二、第三にも亦復是の如くして乃し十數に至れり。時に守岸人は屢瓦鍋を見たりければ、便ち捨てゝ打たざりき。爾の時狗賊は頭に一鍋を載せて流に隨うて下り、王女の所に至りて女の舟中に上り、手に利刀を執りて王女に告げて曰はく、「汝、聲を作すこと勿れ、若し聲を作さんには我れ當に汝を害すべし」。王女は怕懼して敢へて聲を作さゞりければ、因りて與に戲會し、既にして戲會し已るに便ち走げ去れり。女は賊の去

【九】 淨行婆羅門。梵天に供養するの行を修する婆羅門。

【一〇】 事髑髏外道形。thod-pa-can gyi cha-byed（トパチャン ギイ チャー ヂャ）、「頭骨を持つ姿」、便ち k p'li（具頭骨）の姿となりてとの意。

て孔を穿ち已りて其舅は卽ち先に頭を將つて孔中に入れんと欲せり。㣙甥告げて曰はく、「舅は盜法を閑はず、如何ぞ先に己が頭を以て孔中に入れんとせる、此事善からじ。應に先に脚を以て孔に入るべく、若し先に頭を以て入れんに他に割頭せられ、衆人共に識りて禍一族に及ばん、今應に先に脚を以て入るべきなり」。舅は是を聞き已りて便ち脚を以て入れしに、財主既にして覺めて便ち卽ち賊なりと唱へければ、衆人聲を聞いて卽ち共に內孔中に於て其賊脚を捉へぬ。爾の時㣙甥は復孔外に於て其舅を挽出さんとせるも力既に禁へず、禍の己に及ぶを恐れて卽ち其頭を截ち持し已りて走げぬ。時に群臣は王に此事を奏せるに、王、群臣に告ぐらく、「頭を截ち去りし者最も是れ大賊たり、汝可しく彼賊の屍を將りて四衢中に置き密に窺覘を加へよ、或は悲泣して屍を將ち去る者あらんに、此は是れ彼賊なれば便ち可しく捉取すべし」。群臣、命を奉じて卽ち死屍を將り、王が設けたる法の如くにせるに、彼の賊㣙甥は便ち思念して云はく、「我れ今應に直に舅の屍を抱くべからず、恐らくは衆人我を識らん。我れ應に佯り狂ひて諸の四衢に於て或は男女を抱き、或は樹石を抱き或は牛馬を抱き、或は猪狗を抱くべし」。是念を作し已りて便ち其事を行ぜり。時に世間の人は既にして其人の處處にて物を抱けるを見て咸く是れ狂者なりと知りければ、然く賊㣙甥は始めて其舅を抱き、盡哀悲泣して便ち卽ち去れり。群臣、王に奏して皆曰さく、「屍を守れるに、唯一狂人の屍を抱き哀泣して而し去れるのみ、更に餘人なかりき」。王卽ち告げて曰はく、「彼こそは是れ狗賊なるに如何が捉へざりし、今可しく捕取すべし」。爾の時彼賊は復是念を作さく、「我れ今如何がしてか我が舅を葬らざる、我れ必ず須らく葬るべし」。便ち一駕車人と作り柴束を滿著して駈りて屍上に至り、速に牛絡を解きて火を放ちて車を燒き便ち走り去れり。爾の時に當りて車柴の火は屍を燒きて遂に盡せり。守屍人は尋いで王に奏して曰さく、「彼の賊屍は今已に燒き盡せり」。王、彼に問うて曰はく、「誰ぞ賊屍を燒きたるは」。臣、上事を具せるに、王曰はく、「汝等當に知るべし、彼の駕車人は

【八】狗賊。小賊なり。藏文には rkun-ma gcig-pos(クンマ チク シエ)、「今一人なる盜賊」なゝ義。されば之に狗賊とあるも、最も大なる賊と解すべきなり。

織師に白して言さく、「大兄、此娚甥に教ふるに織業を爲めしめんことを」。織師答へて曰はく、「好し、子を留めよ、織を教へん」。其子聰敏なりければ久しからざるに學成り、毎に織師と與に機を並べて雙織し、所得の財利は本家に將ち歸れり。所得の物は（將ち）歸りしも常に用ひて足らざりしに、織師の所得は意を恣にして餘りありき。娚甥、舅に問ふらく、「我れ今舅と與に同じく作して業を一にせるに、何の故にか舅室恒に充備を得て、而し我が家中は毎に支濟せざる」。舅、娚甥に報ずらく、「我は二業を作し、汝は即ち一を爲せばなり」。娚甥、舅に問ふらく、「第二の業とは何」。彼れ便ち報じて曰はく、「我れ夜に竊に盜めばなり」。娚甥白して言さく、「我も亦隨ひ盜まん」。舅即ち報じて曰はく、「汝は盜むこと能はじ」。答へて曰はく、「我れ甚だ作すを能くせん」。舅、是念を作さく、「我れ且らく先に試みん」。是念を作し已りて便ち共に市に向ひ、舅は一兎を買ひて料理せしむらく、「我れ蹔らく洗浴し、即ちに來りて當に食すべし」。彼れ料理し已るに、舅未だ至らざる間に便ち一脚を食へり。舅、洗浴して廻り其娚甥に問ふらく、「料理し竟れりや不や」。答へて曰はく、「已に了れり」。舅曰はく、「料理既に竟りたらんには將來せよ、我れ看ん」。娚甥、兎を擎げて其舅に過し與へしに、舅は其兎の遂に一脚を少きたるを見て娚甥に問うて曰はく、「兎の第四脚は今何處に在りや」。娚甥報へて曰はく、「其兎は本來此三脚ありしのみ、云何が我に問うて第四を索むるなる」。舅、是念を作さく、「我れ先に是れ賊なりしに、今此の娚甥の大賊なること我に勝れり」。即ち其兎を將りて共に酒家に入り、舅は安坐し已りて即ち娚甥を喚び、共に坐して飲み已るに即ち娚甥をして酒價を計算せしめければ、娚甥報じて曰はく、「若し人飲酒したらんには可しく算せしむべけんも、我れ本飲まざれば何が算を論ぜん。舅今自ら飲みたるなれば舅當に自ら算すべし」。舅、是念を作さく、「我れ先に是れ賊なりしに、今此娚甥の大賊なること我に勝れり、若し共に本を同じくせんに亦賊と作すに堪へん」。即ち娚甥と與に夜分中に於て他の牆壁を穿ちて財物を盜むに擬せるに、既にし

まひしに、淨飯王は聞き已りて世尊を所に詣り、佛足を頂禮して是の如きの語を作さく、「世尊、若し必ず羅怙維を度したまはんには、當に一日を乞したまはるべし、我れ供養を申ぶれば」。世尊は請に隨せて供養を將ぐるを聽したまへり。時に淨飯王は羅怙羅が爲に廣く大會を設け、幷に高座を嚴りて羅怙羅に供養し、第二日に至りて羅怙羅と共に往いて佛所に詣り、世尊を禮し已りて是の如きの言を作さく、「大德、羅怙羅を將つて出家するに任しまつる」。爾の時世尊は舍利弗に告げて曰はく、「此の羅怙羅は汝今將ゐ去いて如法に出家を與へよ」。時に舍利子は佛の敎を受け已るに、便ち羅怙羅に如法に出家を與へぬ。時に諸苾芻は咸く皆疑ありて世尊に請じて曰さく、「何の因緣を以てして童子羅怙羅は、大衆中に於て躬ら藥丸を持し、五百佛所に於て而し世尊を識れりや」。佛、諸苾芻に告げて曰はく、「[六]此羅怙羅は獨今生にて而し我を識りたるのみには非じ、曾て過去無量劫中に於ても大衆中に在りて嚴るに花鬘を以てして吾に與へて相識れり。汝等諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。曾て過去に於て聚落中に一長者有り、隣人の長者の女を取りて納れて以て妻と爲し、未だ多時を經ざるに遂に卽ち娠ありて便ち一子を誕めり。復妻に告げて曰はく、「今此子有り、食せんには我財を用ひ亦能く我等が爲に還債せん。我れ今諸財物を將つて海に入りて興易すれば、汝可しく後に在りて若し此兒を看り、好く家事を知るべし」。妻、夫に答へて曰はく、「一ら所敎に依はん」。長者は海に入りしに風に遇ひて舡破れ、諸の財物と幷に沒溺して廻らざりき。妻は夫の死せるを聞いて[七]孝を持して福を修し、復自らは傭力し、幷に諸眷屬は各相拯濟し、兒を養活して漸く長大ならしめぬ。其舍の側に善織師あり、彼が工巧を以て自ら存活するを得たり。彼の長者の妻は見已りて卽ち共念を作さく、「海に入りて興易せんよりは織絡工巧をもて業と爲さんに如かじ、其の海に入れる者は多く死にて還らず、夫の織絡者は常に家に居るを得て經求して自ら濟へり」。復共念を作さく、「今我れ此子をして織業を學ばしめん」。是を思惟し已りて卽ち其子を將ゐて往いて織家に詣り、

【六】羅睺羅於二五百佛化作中一識二別世尊一前生因緣譚。

【七】孝。喪に居る義。

ぜり。母は復兒を持りて是の如きの念を作さく、「若し佛世尊は六年苦行し成覺の後更に六年を住めて十二歳を滿ぜんに、重ねて此に還りたまへば、我れ諸人をして目に虛實を驗せしめん」。爾の時世尊は後の時還りて劫比羅城に至りたまひ、一日は王家に在りて食し、一日は宮内に在りて食したまへり。時に耶輸陀羅は是の如きの念を作さく、「頗し方便あらんには能く世尊をして我が欲する所に隨はしめんに」と。時に此城中に一外道女あり、善く術法を解して能く男子をして女人を愛樂せしめぬ。耶輸陀羅は五百金錢を寄與して使を遣はし報ぜしめて曰はく、「汝術法を作さんには附し來りて我に與へよ」。彼女は卽ち便ち一相愛の藥丸を將りて宮内に寄與せり。其母は得已るに便ち藥丸を將りて羅怙羅の手中に置き、諸宮人に對ひて是の如きの語を作さく、「兒、此藥を將りて持して汝が父に與へよ」。佛は一切智を具して先より能く了達したまふなれば、耶輸陀羅が羅怙羅を生みて世の惡謗を招けるを知しめし、(念言したまはく)「此の誹毀は今日當に除くべし」と。世尊は知しめし已るに、五百世尊の佛形と一等なるを化爲したまへり。時に羅怙羅は藥を持して巡行せるに、多佛を歷たりと雖並に皆奉ぜず、既にして世尊所に至りて遂に卽ち藥を與げぬ。佛爲に納受し已りて羅怙羅に却付したまへるに、時に子は得已りて遂に卽ち之を服せり。佛は食し已れるを知しめし、便ち呪願を爲して座よりし去りたまへり。時に羅怙羅は佛に隨ひ行かんとせるに諸婇女等は宮を出づるを放さゞりければ、時に羅怙羅は啼哭悲惱すらく、「願はくは佛に隨ひ去らんことを」。世尊は去り已るに是の如き念知を作したまはく、「羅怙羅は後有を受けず、當に聖果を證すべければ、俗に居るを肯んぜざらん」と。世尊は知しめし已るに、遂に卽ち將ゐ行りたまへり。時に羅怙羅は宿緣の所感にて、五百佛に於て能く世尊を識りて捨離するを肯んぜざりければ、時に淨飯王の宮人眷屬及び諸釋種は、此希奇を見て敬重せり。耶輸(陀羅)は其の昔日に、枉げて招謗を被りしも今惡名を滅せるを知りて歡喜心を生ぜり。[五] 爾の時世尊は本處に到り已りて羅怙羅を度せんと欲した

【三】 破僧事にては、世尊の迦毘羅城に歸りたまへるは、成道後六年なりとするなり。其時羅怙羅は六歳なり。

【五】 一相愛藥丸。(b:n-du-bya-b:hi la-tl.u (ワン ドウ シャ ベ、イラ トウー、「支配にもつてくる藥丸」の義。la-:hu は la-du (ラ ドウー) の誤り、西藏にて造らるゝ麥粉を燒ける菓子、中に大根を多く入れたる藥用食なりとせり。これ「男子を女子の支配にもつてくる藥丸」の義なり。

【五】 羅怙羅の出家。

卷の第十二

耶輸陀羅・羅怙羅前生因緣譚

佛、室羅筏城に在しき。若、彼の菩薩は城を踰え外に出でたまひしに、爾の時に當りて耶輸陀羅は卽ち便ち娠あり、菩薩六年苦行したまへるに、耶輸陀羅も王宮中に於て亦苦行を修し、是因緣に由りての故に胎便ち腹に隱みぬ。是時菩薩は苦行事の利益あることなきを知しめして、卽ち便ち意に隨せて氣息長舒し、遂に美食を餐ひ粳米雜飯もて飽食して身に資し、油を以て體に塗り溫湯もて澡浴したまへり。耶輸陀羅は是事を聞き已るに宮中にて亦復身心を放縱にし、事菩薩と同じくせり。斯の快樂に由りて胎遂に增長し、其腹漸く大なりければ、釋氏聞き已りて笑ひ譏りて曰はく、「菩薩出家して極めて苦行を修したまへるに、汝は宮內に於て私に餘人に涉り、致すに腹に懷娠せしむるを致して腹便ち增大せんとは」。耶輸陀羅聞きて誓うて曰はく、「我に此過なし」。未だ久しからざる間に便ち一息を誕みしに、此の時に當りて羅怙羅は明月を執持せり。諸眷屬を集め慶喜して會を設け請じて與に字を立てんとせるに、諸眷屬等は共に相議りて曰はく、「此の所誕の子初生の時、羅怙羅は手もて明月を執りたれば、應に此兒の與に羅怙羅と名くべし」。時に諸釋種は共に相議りて曰はく、「此れ菩薩の子に非じ」。耶輸陀羅は此語を聞き已るに卽ち便ち啼哭し、羅怙羅を抱きて自ら盟誓を爲さんとて、羅怙羅を以て菩薩昔宮中に在せしとき解勞したまへる石上に置き、菩薩の洗浴したまへる池中に擲げ置て、而ち誓を發して曰はく、「此兒にして若し是れ菩薩の胤ならんには水に入るも便ち浮ばん、必ず若し是れ虛ならんには乘と（與に）當に沈沒すべけん」。是言を作し已るに其羅怙羅は石と倶に浮びて下に沈まざりき。耶輸陀羅は復之に告げて、「宜しく此岸より彼の岸に至り、還可しく復り來るべし」と曰へるに、意に隨ひて便ち至りければ、衆人之を見て咸く希有を生

【一】耶輸陀羅の實言。

【二】解勞。和ぎなぐさむる意。第五卷に菩薩力戲の石とあるに相應すれば、力の競技をなせるの義なり。

することと七日して專念相續して時に蹔くも捨つることなかりしに、天の福力を以て七日に於て其の坼かれたる屋は、大霖雨せりと雖一滴も漏らざりき』。佛、大王に告げたまはく、「異念を生ずること莫れ、[四四]我れ今王が請ぜる三月安居四事供養を受けざらんとも、猶し喜護が廠ゝ新苦せるが如くなり」。時に訖栗枳王は世尊に白して言さく、「喜護は今者大利益を獲たり、迦攝波佛は喜護の家に於て受用して難りたまふことなければ」。時に王は隨喜して便ち偈を說いて言さく、

「諸の祭祀の中、火は上たり　　闡陀の中、神は上たり
世間の所尊の(中)、王は上たり　　一切の衆流の(中)、海は上たり
諸の星宿の中、月は上たり　　諸耀の中、日は上たり
上下四維及び天等の(中)　　世尊を供養するは最も上たり」。

爾の時世尊は訖栗枳王の爲に其妙法を說き、示敎利喜し已るに便ち卽ち去りたまへり。時に訖栗枳王は便ち種種の諸の供養具を以て世尊に隨ひて送り、聚落を出で已るに雙足を頂禮し佛を遶ること三匝して却きて本宮に還り、一使者に命じて五百の乘車に各粳米を載せたるを送りて陶師に付與せしむらく、『當に喜護に報ずべし、「此の五百車所載の粳米は、當に汝が盲父母及び迦攝波如來に供養しまつるに用ふべし」と』。是時使者は既にして王の敎を奉じ、米を將りて付與して卽ち王命を宣すらく、「此の五百車所載の粳米は、當に汝が盲父母に供養し幷に時時に迦攝波佛に供養しまつるに用ふべし」。時に彼の喜護は王米の來れるを見て使者に報じて曰はく、「王は[四五]事務多ければ我れ敢へて受けじ」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「異念を生ずること勿れ、摩納婆とは卽ち我が身是れなり、我れ往昔に「迦攝波佛にして正覺の名を得たらんには、要ず須らく苦行すべかりしなり、彼は勤苦せざれば如何ぞ能く正覺を得ん」と謗れるに由り、[四六]惡謗に由りての故に我報をして六年受苦を行ぜしめたるなり。汝等苾芻應に知るべし、業報は必ず須らく自に受くべきを。……廣說せること前の如し……乃至、是の如くに汝當に修學すべし」。

【四四】本文に我今不受王請三月安居四事供養猶如喜護新苦於廠とあり。鞞婆陵迦經には大王、難提婆羅陶師故陶屋竟夏四月都不患漏……」とあり。本文と相應せざるが如きも、「供養せんとの心がすでに供養せると同じくして、難提婆羅の陶屋が四月の間佛の威神により漏らざりしが如くに功德あらん」との意なるべし。

【四五】事務多しとは、經によるに、頻鞞王家は國の大事多く、費用處廣ければとの意。

【四六】惡謗によりて六年受苦の報を得たりと會合せるも、鞞婆陵迦經にはかゝる會合なし。

に大利益を得たり、迦攝波佛の我が舍内に入りて自ら恣に食を取りたまはんとは」。此の懽喜心に由りての故に跏趺して七日入定し、定より起ち已るに是定に緣りての故に正念にして散ぜざること、十五日を滿たして恒に間斷なかりき。七日中に於て定力に緣りての故に、家內の食器には飮食恒に滿ち、父母に供給して乏少せざりき』。佛、王に告げて曰はく、『我れ異時に於て微頻持聚落に住して安居三月せるに、其の夏初に於て時に[43]苦雨せるに經り、我が所住處の屋宇は霖漏せり。喜護陶師の有造作處の廠屋は、皆新草を用ひて覆苫を爲せり。我れ爾の時に於て侍者苾芻に告げて曰はく、「汝等可し共に喜護陶師の有造作處に往き、彼廠の苫屋の新草を坼取して將りて此屋を覆ふべし」。彼の苾芻等は我が語を聞き已るに、幷に其敎に依ひて所爲事を作せり。時に喜護は緣事にて他行せりければ、其喜護の父母は屋を坼くの聲を聞き、便ち即ち問うて曰さく、「是れ何の賢首、是れ何の聖者にして來りて喜護が新覆の草屋を坼きたまふなる」。彼等は報じて曰はく、「我は是れ迦攝波應正等覺の侍者苾芻なり。佛所居の屋宇の霖漏せるが故に、來りて此の所有新草を取り、迦攝波應正等覺の爲に其屋を覆苫せんとてなり」。陶師の父母は聖者に白して曰さく、「我が兒在らされば、聖者の取りたまふに任しまつる」。諸苾芻等は遂に廠草を坼きて我が寺屋を苫へり。喜護は後に家に還り其の作廠を見たるに新草を坼却せりければ、便ち父母に問ふらく、「誰ぞ、來りて我が作廠の新草を坼きて將ち去りしは」。父母報じて曰はく、『汝出でて久しからざるに我は廠を坼けるを聞きければ、便ち問うて言さく、「是れ何の聖者、是れ何の賢首にして我が新草の廠屋を坼きたまふなる」。彼即ち答へて言はく、「我等苾芻は是れ迦攝波應正等覺の侍者苾芻なり。佛所居の屋宇霖漏せるに緣り、故に來りて此の所有新草を取り、迦攝波應正等覺の爲に其屋を覆苫せんとてなり」。便ち即ち答へて言さく、「我が兒在らされば、意に任せて取り將りたまはんことを」と』。時に喜護は父母の說を聞き已りて甚だ大いに歡喜し、便ち是念を作さく、「我れ已に大利益を得たり、迦攝波佛は我が家內に於て自恣に難りたまふことなからんとは」。心に既に知り已るに歡喜踊躍し、跏趺

【四三】苦雨。はげしき雨なり。

に供養しまつらんことを」。爾の時世尊は訖栗枳王に告げたまはく、「大王、今者能く此心を發せるは、已に辦へたると異ること無し」。時に訖栗枳王は佛に白して言さく、「世尊、我に今供養しまつるなきも、世尊、人の、已に能く我が如き誠心もて供養を辦ふるありや不や」。世尊答へて曰はく、「大王が國内に已に是の如くに我に供養する者あり」。王便ち問うて曰さく、「其の供養者の名字は是れ誰なりや」。世尊報じて曰はく、『王の境内に聚落ありて〔四一〕微頻持と名け、陶師ありて喜護と名け、彼の聚落に住して佛・法・僧に於て信心決定して三寶に歸依し、實諦理を見て聖果を證得せり。所有壞生營事の具は皆悉く棄捨し、鼠壤土を以て無蟲水及び無蟲木を用ひて以て諸の瓦器を造り、此の器具を以て門外に置き遍く諸人に告ぐるらく、「我に油麻・米豆を施して此器を將ち去れ、多少は意に隨さん」。所得の米豆等の物にて盲父母を養ひ、亦復將來しては我に供養せり』。佛、王に告げて曰はく、『我れ一時に於て城邑に遊行して微頻持聚落に至り、食時に衣を著け鉢を持して次第に行乞し、陶師喜護の家門に至り已りて徐徐に門を打ちしに、時に喜護陶師は緣事にて他行して唯盲父母のみ家内に住まりければ、門を打つ聲を聞きて門所に來り問うて言さく、「是れ何の賢首なる、是れ何の人者にして來りて門を打てるなる」。佛言はく、「我は迦攝波佛應正等覺なり、食時の爲の故に行乞して此に至りしなり」。彼れ卽ち門を開き我を請じて入らしめ、旣にして其舍に入りしに彼の盲者は曰さく、「我に熟豆ありて盆器中にあり、幷に熟菜ありて筐裏に置けるも我れ今見えざれば、唯願はくは世尊、意を恣にして取りたまはんことを」。盲者又曰さく、「彼の世尊に供養しまつる施主は、他事の爲に暫し出でぬ」。爾の時世尊は大王に告げて曰はく、「我れ當に以て〔四二〕北俱盧洲の法を作して而し自ら手づから食を取り竟るに而し出でぬ」。陶師喜護は後に便ち家に至りて其豆菜を見たるに、人の取れる處ありければ父母に問うて曰はく、「誰か此豆・菜を食せりや」。彼の盲父母は卽ち上事の如く次第して說けるに、喜護は聞き已りて甚だ大いに懽躍し、而ち是念を作さく、「我れ已

【四一】微頻持。前註(三三)の分析聚落なり。

【四二】北俱盧洲法。本文に我當以作北俱盧洲法而自手取食竟而出……とあり。鞞婆陵耆經にも我便受鬱單曰法卽於鑵釜中取羹飯而去とあり。藏文には「我れ北俱盧洲の、時を祝福 (byin-gyi brlabs＝チンギラブ＝加持) して壺の中より食を取りぬ」とあり。卽ち北俱盧洲の受食作法を作してとの意なるべし。

るに、爾の時世尊は其の最勝に如法に出家するを聽したまへり。爾の時世尊は分析聚落より波羅痆斯城に往いて人中に遊行し、漸(々)に彼城の仙人墮處施鹿林中に至りたまへり。爾の時〔四〇〕訖栗枳王は、佛、人間に遊行して施鹿林に至りたまへりと聞き、王は城より出でゝ佛所に往詣し、到り已るに迦攝如來の雙足を頂禮して退きて一面に坐せり。佛即ち訖栗枳王が爲に妙法を演說して示教利喜し……乃至、默然して住したまへり。時に訖栗枳王は座よりして起ち衣服を整へて而し佛に白して言さく、「唯然り、世尊及び苾芻衆は明日清旦に我が所請を受けたまはんことを、我れ宮內に於て供具を施設し、佛及僧に飯しまつれば」。世尊は爾の時默然して請を受けたまへるに、時に訖栗枳王は世尊默然して請を受けたまへるを見已るに、佛足を頂禮し座よりして起ちて佛を辭して還歸せり。時に王は到り已るに、其夜中に於て種種香美の飲食を營事し、晨朝時に至りて勝座を鋪設し諸の香水を辦へ、是事を作し已りて使をして佛に白さしむらく、「日時已に至れり、唯願はくは時を知しめしたまはんことを」。迦攝佛は日の初分に於て諸苾芻の衣鉢を執持して前後に圍繞せると將に、其王の供養を設くる處に往至し、到り已るに佛は衆首に居したまひ、餘の苾芻は次に隨ひて各座を敷いて坐せり。時に訖栗枳王は種種の飲食を以て自ら世尊及び苾芻衆に授け、供養し已りて佛及び苾芻は各鉢器を攝め手を澡ひ口を嗽げるに、王は金瓶の、中に盛水を滿たせるを執り、世尊の前に於て蹲跪して而し是言を作さく、「唯願はくは世尊、我れ世尊の爲に大寺の、數五百院に滿てるを造立し、是の一一の院に各大小の諸牀敷具及び香稻米を置へて佛世尊及び苾芻衆に供へまつらんことを」。爾の時世尊は訖栗枳王に告げたまはく、「汝今能く殊勝の大心を發せり、此の功德は具に之を受けたるに如しきなり」。訖栗枳王は是の如く三たび請ぜるらく、「夏三月に於ては唯願はくは世尊、我が種種の四事供養を受けたまはんことを。我れ世尊の爲に五百大寺を造立し、是の一一の寺に各大牀・小牀・几案・氈褥・枕具各五百あり、及び上妙の粳米・種種の珍奇とを置へて、世尊幷に苾芻衆

【四〇】訖栗枳王。鞞婆陵耆經には頻鞞王とせり。共に Kṛki の音寫なり。

「賢首、何が佛に見えて而し供養を修するを須ゐん。何を以ての故に、[三九]此の出家を作さんとも正覺は得ること難ければ」。喜護報じて言はく、「賢首、是言を作すこと勿れ、此の迦攝佛は出家して久しからざるに已に正覺を得、一切智を具して正法現前したまへり」。時に彼の喜護は是の如く三たび告ぐらく、「我れ當に汝と共に佛所に往かん」。時に彼の最勝も亦復三たび答ふらく、「是の如きの出家は正覺得難ければ」。喜護は卽ち便ち彼の車上に上り、彼の最勝を撮りて共に佛所に往きて瞻仰禮拜せんとせり。爾の時彼が撮り已るを見て便ち是言を作さく、「彼の迦攝佛は定んで是れ最勝無上大師にして、所有諸法は並に是れ殊勝ならん。何を以ての故に、而し彼の喜護は先來賢善にして而し卒暴卒爾凶猛なきに、彼の如來の爲に而し我を撮りたれば」。是念を作し已るに便ち喜護に告ぐるらく、「汝當に我を放つべし」。喜護答へて言はく、「我れ汝を放たじ、汝若し我と共に世尊所に往いて供養禮拜せんには我れ當に汝を放たん」。是の如く三たび告ぐるに、時に彼の最勝は報じて言はく、「喜護、此車輅に乘ぜよ、我れ當に汝と倶に佛所に往き、輅を通じうべき處まで輅に乘じて行き、輅を通ぜざる處より便ち卽ち徒步せん」。旣にして佛所に至り、佛足を頂禮して退きて一面に坐せり。爾の時喜護は坐よりして起ち合掌して佛に白さく、「而し此の最勝は三寶を信ぜざれば、唯願はくは世尊、爲に妙法を說いて彼の最勝をして佛・法・僧を信ぜしめたまはんことを」。爾の時世尊は默然して請を受けたまひ、卽ち最勝が爲に妙法を演說して示教利喜し……乃至、默然して住したまへり。爾の時最勝は喜護に告げて言はく、「汝此法を聞きつゝ何ぞ出家せざる」。喜護答へて言はく、「最勝、汝知らざるべけんや、我れ二盲父母を養ひ、時には復迦攝如來を供養しまつれるを」。最勝答へて言はく、「汝若し出家せざらんには、我れ今決定して出家せん」。爾の時喜護は坐よりして起ちて佛に白して言さく、「世尊、今最勝は佛の善く說かれたる法・毘奈耶中に於て出家するを得んと欲せり、唯願はくは世尊、共に出家を聽したまはんことを」。是語を作し已りて佛を禮して坐せ

【三九】本文に作此出家正覺難得とあり。藏文には「彼沙門出家に正覺何ぞあらん、正覺は甚だ得ること難ければ」とあり。

[三三]爾の時世尊は先に六年苦行したまひ、然る後無上覺を成じて波羅痆斯城に往詣して憍陳如の五苾芻衆を度し、次に耶舍の五人を度し、次に賢衆六十人民を度したまひ、是故に苾芻は其衆漸く多かりき。時に諸苾芻は心に疑念を生じて復佛に白して言さく、「大德世尊、往に何の業を作してか今六年苦行の異熟を受けたまひたる」。佛、苾芻に告げたまはく、「我が自ら作せる業にて還自らに報を受けたるなり」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「我れ往昔に於て人壽二萬歲たりし時、一聚落あり名けて[三四]分析と爲し、其聚落中の人民熾盛にして安隱豐樂し五穀成熟せり。其聚落中に婆羅門ありて[三五]尼拘陀と名け、諸の眷屬多く富饒自在にして中に於て主たりければ、訖栗枳王は此聚落を以て尼拘陀に施せり。彼の婆羅門に一弟子ありて名けて[三六]最勝と曰ひ、父母淸淨にして氏族高良に、乃し七祖に至るまで並に皆殊勝なりしが、諸の異論を學び、四明に洞徹し、諸有字書は通悟せざる無く、顏貌端正にして人の樂觀する所なりき。時に尼拘陀は五百弟子ありて常に讀誦を敎へぬ。其聚落中に復陶師ありて名けて[三七]喜護と曰ひ、三寶に歸依し深く四諦を信じて決定して疑なく、四諦の理を見て預流果を證せり。[三八]所有壞生營事の具は皆悉く棄捨し、鼠壤土を以て無蟲水及び無蟲木を用ひて諸の瓦器を造り、此器物を以て門外に置き遍く諸人に告ぐらく、「我に米豆を施して此の器を將ち去れ、多少は意に隨さん」。所得の米豆にて盲父母を養ひ、或は時迦攝如來に奉施せりき。時に彼の最勝は其の喜護と、少より以來共に親友たりき。後に異時に於て喜護は往いて迦攝佛の所に詣り、頭面に禮足して退きて一面に坐せるに、佛は種種微妙の法を以て示敎利喜して喜護の爲に說きたまひしに、時に彼の喜護は法を聞いて歡喜し頂禮して去れり。時に彼の最勝は白馬輅に乘じ五百の弟子の前後に圍繞せると與に城よりして出でしに、其中路に於て乃し喜護に逢ひければ、見已りて問うて言はく、「賢首、汝何より來りしや」。喜護答へて言はく、「我れ迦攝佛所に從いて供養禮拜して而し彼より來れり、今可しく汝と共に佛所に往詣して禮拜供養しまつるべし」。最勝答へて曰はく、

【三三】世尊六年苦行前生因緣譚。

【三四】分析聚落。bai-bhi-din-gnbi grod-kyer gyi grod-rdul (bhibhidinga の城の村)とあり。後文(註四〇)の微頻持聚落とあるに相當す。中阿含卷十二、鞞婆陵耆經(大正藏1, 499a)に相應すれば Vebhaling なり。

【三五】尼拘陀。鞞婆陵耆經には無恚とせり、藏文には「婆羅門の、大 [illegible] 樹の如くなる nya-gro-dha」とあり、nya-gro-dha は譯して無恚と爲すなり。

【三六】最勝。bram-zehi kyehu bra-mo (チャムゼ、イチェ、ウチャマ)、「婆羅門子無上」の義。鞞婆陵耆經には「子なり優多羅摩納と名く」とあれば、uttara なり。

【三七】喜護。dgah-skyoṅ (ガチョン)、「喜び護る」義、鞞婆陵耆經には難提波羅陶師とせり、即ち Nandipāla なり。

【三八】鞞婆陵耆經には、此處に喜護の攝心持行の相を詳悉せり。

の故に、此城中に於ては損害すること能はじ」。彼の諸藥叉は城の四門外に遊行して彼の慈力王を
に見えんことを求めぬ。後に異時に於て彼の慈力王は因みて城外に出でしに、時に藥叉等は慈力王
を見て卽ち便ち身を變じて婆羅門像と作り、手を擧げて王を歎ずらく、『福壽長遠ならんことを』。
白して言さく、「大王、我れ今飢渴せり、唯願はくは慈悲もて我に飲食を施したまはんことを」。王、
侍臣に告ぐらく、「當に種種上妙の飲食を施すべし」。時に五藥叉は卽ち王に白して言さく、「我れ渴
しては血を飲み、飢ゑては唯肉を食ひて餘食を喫はじ」。王、侍臣に告ぐらく、「衆生を損ふ勿れ、當
に可しく自ら死せる血肉を求覓し、彼に施して食せしむべし」。時に五藥叉は復王に白して言さく、
「我れ今食する所は惟熱肉血のみ、所有自ら死せし肉血を食せず」。王旣にして聞き已りて便ち是念
を作さく、「生けるを損して彼に施して食せしむ可からず、當に我身の熱肉熱血を以て彼に施し之を
食せしむべし」。是念を作し已るに卽ち醫人を命び、醫人到り已るに王は尋いで報じて言はく、「當
に我が身を刺して五處より血を出し、五藥叉をして各各に之を飲ましむべし」。醫人は王に答ふら
く、「此の五藥叉は至極に下品なれば、今我れ王を刺して血を出すに忍びじ」。時に王は善巧にして
一切の方便は皆悉く明了せりければ、遂に卽ち針を以て其五處を刺し、血をして流出せしめて彼を
して飽滿せしめ、復爲に法を說いて其をして充足せしめ、授くるに五戒を以てせり』。爾の時佛、諸
苾芻等に告げたまはく、「諸苾芻等、異念を生ずること勿れ、彼の慈力王とは卽ち我が身是れなり、
五藥叉は卽ち憍陳如等の五苾芻是れなりしなり。我れ往昔に於て彼に血肉を施し、及び爲に法を說
いて五戒を授與し、我れ今日に於ては爲に正法を說いて見諦して究竟涅槃に住せしめしなり。汝諸
苾芻、應に當に修學すべし」と。

（世尊六年苦行前生因緣譚）

じ、我れ今此に於て貪瞋癡・生老病死・憂悲苦惱を離れて皆悉く解脫し、一切智・一切種智・一切智智に皆自在を得たれば、五苾芻をして法味充足せしめ、生死海より之を拔きて出ださしめ究竟涅槃に(住せしめ)しなり。我れ往昔に於て未だ貪瞋癡・生老病死・憂悲苦惱を離れず、未だ解脫を得ざりしにも、尙ほ此輩が爲に其身血を以て其をして充足せしめ、授くるに五戒を以てせり。此れ希有と爲すなり。汝等諦に聽け。往昔、波羅痆斯城に大王ありて號して慈力と爲し、如法に世を化して人民熾盛に、五穀熟成して安隱豐樂せり。其王の本性として大慈悲ありて大威德を具し、諸の有情に於て恒常に憐愍せり。後に異時に於て多聞藥叉は阿洛迦伐底城より駈出して人の精氣を吸へり。時に五藥叉は處處に遊行して波羅痆斯城に至りしに、諸人の、祭食を設けたるを見ざりければ、心に瞋怒を生じて其國中に於て諸の疾疫多から(しめ)死者極めて衆かりき。爾の時群臣は事を以て王に白さく、「王、今國內に死者極めて衆し」。時に王便ち諸臣に勅すらく、『汝等、其城內に於て唱令して遍く告げよ、「王は汝等に勅せり、我れ有情に於て爲に利益せんと欲し、專心に勤求して日夜に斷ぜざれば、汝等諸人も諸の有情に於て大慈心を起し、常に此心を修めよ、諸災は寂靜せん」と』。時に諸人等は王勅を奉じ已りて諸の有情に於て大慈心を發せるに、彼の五藥叉は其國中に於て害を爲すこと能はざりき、諸の有情は慈心を發せるを以ての故に。時に五藥叉は其城外に於て處處に遊行せるも入るを得ること能はず、害を爲すこと能はざりければ、城外に乃し牧牛羊人・負柴薪人幷に諸店肆に估賣せる者を見、見已りて卽ち問へるらく、「汝等は我を怖れざるか」。彼の人答へて曰はく、「何の故にか汝を怖れん」。藥叉報じて言はく、「何の故にか怖れざる」。諸人答へて曰はく、「我が慈力王は每に常に思惟し我も亦思惟すればなり」。藥叉答へて曰はく、「彼の慈力王は何の事をか思惟せる」。衆人答へて曰はく、「諸の有情に於て常に慈心を修すれば是を以て思惟するなり、我等も亦爾り」。彼の藥叉等は是語を聞き已るに便ち是念を作さく、「我等今者此の諸人慈悲を修するを以て

【三三】慈力。rgyal-po byams-pa'i stobs(ギャル ポ チャム パ・イ トブ)、「慈の力の王」の義、maitrībala なり。賢愚經の慈力王血施品、菩薩本生鬘論の慈力王刺身血施五藥叉緣起經に出づ。

定よりして而し出で、遂ひて衣服を整へ諸の威儀を具せり。時に五藥叉は往いて王所に至り手を擧げて讃歎すらく、「唯願はくは大王、福壽長遠ならんことを」。白して言さく、「我れ今飢渴せり、唯願はくは慈悲もて飲食を布施したまはんことを」。王、侍臣に告ぐらく、「當に種種上妙の飲食を施すべし」。時に五藥叉は卽ち王に白して言さく、「我れ渴しては血を飲み、飢ゑては唯肉を食ひて餘食を喫はじ」。王、侍臣に告ぐらく、「衆生を損ふ勿れ、當に可しく自ら死せる血肉を求覓し彼に施して食せしむべし」。時に五藥叉は復王に白して言さく、「我れ今食する所は唯熱肉血のみ、而し彼の自ら死せる肉血を食せじ」。王は既にして聞き已りて復是念を作さく、「可しく生けるを損てゝ彼に施して食はしむべからず、當に我が身の熱血熱肉を以て彼に施して之を食は(しむ)べし」。是念を作し已るに卽ち醫人を命び、醫既にして到り已るに王は尋いで報じて言はく、「當に我が身を刺して五處に血を出し、五藥叉をして各各に之を飲ましむべし」。醫便ち王に答ふるらく、「此の五藥叉は至極の下品なれば、我れ今王を刺して血を出ださしむるに忍びじ」。王は醫術を善くして皆悉く明了なりければ、遂に自ら針を以て其五處に刺して血をして流出せしめ、彼をして飽滿せしめて復爲に法を說き、其をして充足せしめて五戒を授與せり』。佛、諸苾芻に告げたまはく、「異念を生ずること勿れ、彼の金臂王とは卽ち我が身是れなり、五藥叉とは五苾芻是れなりしなり。我れ往時に於ては彼に血肉を施し、及び爲に法を說いて五戒を授與し、我れ今時に於ては爲に正法を說いて見諦して究竟涅槃に住せしめしなり。汝諸苾芻、應に是の如く學すべし」と。

爾の時世尊は[三一]五苾芻の爲に先に法味を說いて皆充足せしめ、生死海を超えて見諦して究竟涅槃に住せしめたまへり。時に諸苾芻は疑念を生ぜるを以て、疑を斷ぜんが爲の故に白して言さく、「世尊、此五苾芻は何の因緣ありてか世尊が正法味を以て其をして充足せしめ、生死海より之を拔きて出でしめ、其をして究竟涅槃に安住せしめたまひたる」。佛、苾芻に告げたまはく、『此れ希有に非

---

rnam-thos-kyi-bu(チャル ポ ナム テュ チイ プ)、「多聞王」の義、卽ちVaiśravaṇa(毘沙門)天王なり。北方護世天王大藥叉の語もあれば今多聞天王を多聞藥叉とせること別異なし。

【二九】 阿洛迦筏底王城。rgyal-po-hi-pho-braṅ lcaṅ-lo-can(チャル ポ、イ ポ チャン チャン ロ チャン)、「王の宮殿 alakāvatī (柳葉を持つ)」とあり。赤沼氏固有名詞辭典 (P. 762)に王の三城を表示せる中、立世阿毘曇論に阿羅珂漫陀城とせるは今と最も善く相似せり。

【三〇】 五藥叉。五とは、藥叉の大將 Pañcika(半支迦)の譯、鬼子母神(Hāritī)の夫にして、毘沙天王の八大將の一とせらる。然れども昔と今とを會合する所に至りて、五藥叉とは五苾芻なりとするより見るに五人の藥叉なるべきなり。されば半支迦の一藥叉と解するは當を得ざるが如し。

【三一】 五苾芻法味具足前生因緣譚の三。

作してか法味具足するを得、大師哀愍して生死海より强拔して出ださしめ、方便して究竟涅槃に安置したまひたる。唯願はくは爲に說きたまはんことを」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『此れ希有に非じ、我れ今此に於て貪瞋癡・生老病死・憂悲苦惱を離れて皆悉く解脫、[二四]一切智・[二五]一切種智・[二六]一切智智に皆自在を得たれば、此の五苾芻は法味を以て具足し、生死海より强ひて出離せしめ、究竟涅槃に安置せるなり。我れ昔時に於て未だ貪瞋癡生老病死を離れず未だ解脫を得ざりしにも、尙ほ此輩が爲に我れ身血を以て充足し已りて五戒に住せしめぬ。此は是れ希有たり。汝等諦に聽け、往昔波羅痆斯城中に一國王ありて[二七]金剛臂と名け、正法もて世を化して國土安樂に、人民熾盛にして五穀豐熟せり。其王は淳信にして稟性賢善に、自利(利)他を樂ひて慈悲心あり、大威德を具して樂ひて正法を行じ、衆生を憐愍して諸有財物は能く捨て能く施して大捨中に於て而し自ら安住せり。彼王は極めて慈悲を修習して晝夜六時に慈悲定に入りければ、入定の爲の故に所有求者は皆施を得ざりき。王は此事を知りて群臣に告げて曰はく、「城の四門に於て各施堂を置けて用つて財物を貯へ、若し沙門・婆羅門・貧窮・孤露・遠來の求者あらんには皆悉く之を與へよ」。群臣、勅を聞きて卽ち王命を奉じ、波羅痆斯城の四門に於て各施堂を置け、財物及び諸の飲食・衣服・臥具・金・銀・摩尼・眞珠・琉璃・螺石・珊瑚・馬瑙・璧玉・珂貝・赤眞珠・右旋螺貝等の大物資糧を積貯して其中に安置せり、給施して貧窮に充足せんが爲の故に。又異時に於て[二八]多聞藥叉は[二九]阿洛迦筏底王城より駈出して人の精氣を吸へり。(時に)[三〇]五藥叉は處處に遊行して波羅痆斯城外に至りて乃し牧牛羊及び負柴草人幷に店肆の諸の估賣人を見、見已りて卽ち諸人に問へるらく、「汝等豈に我を怖れざらんや」。諸人報へて曰はく、「何の故にか汝を怖れん」。藥叉又報ずらく、「何の故にか怖れざる」。諸人報へて曰はく、「我が王は性、大慈悲にして諸の有情に於て利樂し意樂せんとて、晝夜六時に慈悲定に入りたまへば」。時に彼の藥叉は卽ち便ち身を化して婆羅門と爲り、四施堂に遊びて旣にして見知り已れり。時に金臂王は

く。

【二三】摩竭魚(makara)。海中の大魚、身長三百由旬乃至七百由旬、眼は日月の如く、身は太山の如く、口は赤谷の如しとせらる。

【二三】五苾芻法味具足前生因緣譚の二。

【二四】一切智。thams-cad-m-khen(ターム チャ チエン)、「一切智」の義、三智の一、一切法の總相卽ち物自體を知る智、聲聞緣覺の智。

【二五】一切種智。r. nam-pa thams-cad-mkhen(ナム パ ターム チャ チエン)、「一切種智」の義」、三智の一、一切法の客觀種種相を知る智、菩薩の智なり。

【二六】一切智智。ye-ses-dan-ses-byis thams-cad(エ シエ ダン シエ シャ ターム チャ)、「一切智と所智」の義、能智と所智なり、前の二智とは原語を異にせるが如く、これ智の本源性、永遠性、先驗性を示すなり。三智の一、智中の智、佛自證の大智にして平等差別の總相別相に通達し、化導斷惑の一切種の法に通達するをいふ。

【二七】金剛臂。rdo-rj bri-gyi-ub-pa(ド ジエ、イ プン パ)、「金剛の臂」なる義。

【二八】多聞藥叉。rgyal-po

「汝等怖るゝこと勿れ、宜しく我が背に上るべし、我れ今汝を載せて海を出づるを得て身命全きを得せしむれば」。是に於て衆商は一時に龜に乘り而し發して岸に趣かんとせるに、人衆既にして多く載する所極重なりしも、精進に住して心退轉せず、大疲苦を受けつゝも既にして已に度り畢り、便ち岸上に於て頭を展して臥せり。身を去ること遠からざるに諸蟻城あり、其中の一蟻は漸次に遊行し龜の香氣を聞きて前みて龜所に至りしに、乃し此龜の、頸を舒べて臥し身既にして廣大にして復動搖せざるを見て、蟻は卽ち速に行きて本城に至り、諸蟻衆の其數八萬なるを呼びて同時に彼に往けり。是時、彼龜は睡重きこと死せるが如くにして都べて覺知せざりければ、蟻は皮膚を食へるも困乏して未だ覺めざりき。漸く精肉を食するに(及んで)方に始て覺知せるに、乃し諸蟻の、身に遍くして食へるを見ぬ。便ち是念を作さく、「我れ若し動搖して身を廻轉せんには、必ず當に蟻を害すべく、乍ちに身命を棄捨すべければ終に他を損せじ」と。是念を作し已るに肢節將に散ぜんとし、要處には穴を穿てり。便ち發願して言はく、「我れ今世に身血肉を以て諸蟻等を濟ひ充足するを得せしめたるが如く、當來世に於て菩提を證せん時は、此の諸蟻等をして皆法味を以て其を充足せしめんことを」と』。佛、諸苾芻等に告げたまはく、「異念を生ずること勿れ。往昔の龜王とは卽ち我が身是れなり、彼の引導せる蟻子とは卽ち憍陳如是れなり、彼の八萬蟻の以に憍陳如が引來して我が血肉を食ひて充足せしむるを得たるものとは、卽ち八萬の諸天是れなりしなり。我れ以に過去世に血肉を以てして充足せ(しめ)、今世に佛を成じては法味を以て充足せ(しめ)しなり。苾芻當に知るべし……常所說の如くにして……黑・雜の二業は汝應に當に捨すべく、白白の業は汝應に當に修すべし」と。

爾の時世尊は[三一]五苾芻が爲に先に法味を說きて皆充足せしめ、生死海を超えて將つて勝因究竟涅槃に趣かしめたまへり。爾の時苾芻は咸く皆疑ありて世尊に請問すらく、「此の五苾芻は先に何の業を

右の表と對照して其意を了し得べきなり。

【一六】 三豕の誤。家語に秦軍已亥渡〻河とあるを讀者誤りて三豕渡〻河と讀みたるを以て、文字を讀み誤ることを三豕の誤といへり。

【一七】 四部譯匠。十誦律(弗若多羅の譯)・僧祇律(法顯三藏の譯)・四分律(佛陀耶舍の譯)・五分律(佛馱什の譯)。

【一八】 破僧伽と僧伽擾亂。藏文に此一段なし。これ五分律第二十五卷(註二四の本文)に僧不和合と僧破壞の區を閒へるに似たり。本來原本に存せるものか、或は後に添加せるものなるかは疑はし。

【一九】 十四種破壞事。前註(一七)の本文以下に相當すべきも、彼處には節段を分つに十五種を成ぜり。十五種中の第九、被捨置人及び能捨置人にして餘の四に非ざらんに云々とあるは不適當の句なる故に此を除けば十四種となるべし。されど取捨容易に定め難し。

【二〇】 憍陳如及諸天子法味具足前生因緣譚の一。

【二一】 不定聚(aniyatarāsi)。諸聖者を正性定聚、五無間業を造れるを邪性定聚と名け、之を除ける自餘の凡夫畜類は或は邪とも正ともなりて一向に定まらざれば不定性聚と名

律教東流して綿歴せること多代なり、[一七]四部譯匠は並に懸…を勵まして或に親しく葱河を渉り、或は文を龜玆に傳へたるも、破僧の句數に至りては多く並に未だ詳かならず、後人をして疑を懷かしむるを致せり。試を卒へて文を尋ねん者も則ち文を節段に疑ひ、義を逐ふ者も乃ち義を分疆に惑ひ、疏を造り釋を出せるの家も並に疑を先哲に懷けり。是に知んぬ、身を輕んじて命に殉じて錫を鶴林に振ひ、已を亡じて人を濟はんとて衣を鷲嶺に褰げ、頗く疑滯を詳談して是非を決擇するを得たり。冀はくは闕遺を補ひて永く惟惡を除き、望む）。らくは龍華の後に法忍を初心に會得して福を被ること疆なく俱時に啓悟せんことを）

[一八]鄔波離は世尊に請じて曰さく、「大德、若し是破僧は皆是れ僧伽擾亂ならんには、若し是れ擾亂なるは卽ち是れ破僧なりや」。佛言はく、「自ら破僧にして擾亂に非ざるあり、應に四句と爲すべし。云何が破僧にして擾亂に非ざる。自ら僧破するありて而し十四種破壞の事を受行せざるなり。云何が僧伽擾亂にして破僧に非ざる。自ら[一九]十四種破壞の事を受行するありて然も破僧に非ざるなり。云何が擾亂にして而し破僧たる。謂はく十四種事を受行して並に破僧たるなり。二倶に無きあり、謂はく前相を除けるなり。是れ四句となす」。「大德、若し破僧するあらんに皆別住するなりや、但別住するあらんに卽ち破僧となすなりや」。佛言はく、「應に四句を爲すべし……」と。

（五比丘得道前生因緣譚）

爾の時世尊は阿若憍陳如及び八萬の天子の爲に以に法味を施して皆充足せしめたまへり。爾の時苾芻は咸く皆疑ありて世尊に請問すらく、[二〇]「彼の憍陳如及び諸天子は先に何の業を作してか法味をして具足せしめたまひたる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『汝等諦に聽け、我れ往昔に於て[二一]不定聚に在りしには、大海中に於て而し龜身と作り、諸龜の中に於て而し復王たりき。後に異時に於て五百の商人あり、舡に乘じて海に入り寶所に到りて種種の寶を採り、旣にして寶を獲已るに而し本國に還らんとせり。其中路に於て[二二]摩竭魚に遇ひて非理に舡を損じければ、諸商人等は皆悉く悲號して同聲に大叫せり。時に彼の龜王は此叫聲を聞きて水よりして出で、商人の所に詣りて是言を作さく、

りて義淨譯破僧事の第十卷及び第十一卷の此部分までは破僧事の最後に轉置すべきものであることを了し得る。又かく轉置してこそ破僧事をして完本ならしめうる所以である。然し傳來相承を重んじて玆に如法の遂行をも差控ふる所である。

【一四】右、西藏律對照の結果、此頌は後人の添加せるものなることを推し得る。而して頌の次の非法非法非法等の所謂印するに九行を以てぜるものは、こは正しく義淨三藏自らが挿入せるものなることは「雖有二長行及以攝頌一、猶疑創學未レ能二區分一……」と註せるによりて推知し得る。而して頌の意は上の表を對照して了解し得べし。但第十一句目の自餘の五處とは、第三段に於て非法想・法想・猶豫の三が六度繰返されあるにより、初の三を除けば五處となるとの意なり。

【一五】本文に非法非法非法非法非法非法非法非法法法法非法法疑非法法疑法法法(法法法)非法非法非法法法法非法(法)疑非法疑非法非法非法非法法法法疑疑疑疑疑非法法疑非法法疑とあり。縮藏大正藏に何等の加點を施す所なし。括弧内は之を補へるもの、

せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生じ無間業を成ず。(17)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て猶豫心を生じ、正しく破する時に及んで便ち法想を生じて諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(18)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て猶豫心を生じ、正しく破する時に及んで亦猶豫を生じて諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。鄔波離、此中總じて一十八句あり、中に就て六句は正しく破する時非法想を作して誑説を爲せるに由り、心重に由りての故に遂に無間罪を生じ無間業を成ずるなり。餘の十二句は心輕に由りての故に無間業を成ぜざるなり」[一三]。頌に攝して曰はく、[一四]

初の六は建首は皆非法　中の六は初は並に法なること應に知るべし
下の六は初め三は非法心　下の三は是れ法なること應に須らく識るべし。
初の六の中の上三は非法　下の三は法想なること理須らく知るべし
中の六の中間は此と同じ　下の六の中間は盡く猶豫なり。
最初の六句の後の上三は　非法と法想と猶豫となり
自餘の五處は咸此に同じ　是故に便ち十八の殊を成ず。

[一五]非法と非法と非法と非法と非法と非法と非法と非法と、法と法と法と、非法と法と疑と非法と法と疑となり。法と法と法と（法と法と法と）、非法と非法と非法と、法と法と法と、非法と（法と）疑と、非法と法と疑となり。非法と非法と非法と、法と法と法と、疑と疑と疑と疑と疑と疑と、非法と法と疑と非法と法と疑となり。（長行と及以攝頌ありと雖、猶は疑ふらくは創學(者)には未だ區分を體せざらん。輒ち復更に準じて其題目を出し、長行をして曉め易く初心に於て梗滯なからしめんと欲せり。十八分明なり、冀くは後唱に於て疑はざれ。復寫人の謬を致して譯文に舛ふあるを恐るるが故に、復印するに九行を以てせり、庶はくは[一六]三豕の謬なからんことを。詳に決れ

【一三】 以上の鄔波離に對する世尊の應答したまへる所を表示すれば次の如し。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
非法	非法	非法	非法	非法	非法	法	法	法	法	法	法	非法	非法	非法	法	法	法
非法想	非法想	非法想	法想	法想	法想	非法想	非法想	非法想	法想	法想	法想	猶豫心	猶豫心	猶豫心	猶豫心	猶豫心	猶豫心
非法想	法想	猶豫	非法想	法想	猶豫	非法想	法想	猶豫	非法想	法想	猶豫	非法想	法想	猶豫	非法想	法想	猶豫
共	無間罪	無間罪	共	無間罪	無間罪	共	無間罪	無間罪	共	無間罪	無間罪	共	無間罪	無間罪	共	無間罪	無間罪

共とは無間罪と無間業となり

而して西藏律には前の第十卷及び今の第十一卷の「無間業を成ぜざるなり」(大正藏24, 155 a 12行)までを破僧事の最後に出して、「破僧事完結せり」として西藏譯者の名を列してゐる。此によ

敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(9)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て非法想を作し、正しく破する時に及んで便ち猶豫を生じて諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(10)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て法想を作し、正しく破する時に及んで非法想を爲して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、斯に乃し但無間罪を生じ[一二]無間業を成ず。(11)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て法想を作し、及び正しく破する時に亦法想を爲して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、斯に乃し但無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(12)又鄔波離、若し苾芻、法に於て法想を作し、及び正しく破する時に及んで便ち猶豫を起して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜし。(13)又鄔波離、若し苾芻にして非法に於て猶豫心を生じ、正しく破する時に及んで非法想を爲して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生じ無間業を成ず。(14)又鄔波離、若し苾芻にして非法に於て猶豫心を生じ、正しく破する時に及んで便ち法想を爲して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(15)又鄔波離、若し苾芻にして非法に於て猶豫心を作し、正しく破する時に及んで亦猶豫を生じて諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と爲し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(16)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て猶豫心を生じ、正しく破する時に及んで非法想を爲して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破

僧のみなる五種を除く時は二十種の破壞僧伽者を成ず。此解は未だ十全なるを得ず、後賢の指示に俟つ所である。

【九】無間罪と無間業。

【一〇】この無間を無隙とし、次の無隙を無間とすべきが如し。

【一一】猶豫（Vemntika)。法なりや、又は非法なりやと疑ふ心を生ずるなり。

【一二】本文に此生無間罪、不成無間業とあるも、明本には不の一字なし。今下の文に照合して此字を削除せり。下の(13)の非法・猶豫心・非法想及び(16)の法・猶・非法想の句よりも同じく不の字を削除せり。

難咀利耶 anantarya と云ふ。若し正譯を取めんに應に無隙と云ふべく、無隙と無間とは異なること能はざれば、舊には且に後と倶に無間の字を題して無隙とは云はざるも、事乃し分疆せんに一〇無間は卽ち獄中に生きながら墮するなり、無隙は或は餘身に方に受くるなり。斯の差別あるが故に十八の不同を致せるのみ）。世尊告げて曰はく、「鄔波離、(1)若し苾芻にして非法事に於て非法想を作し、正しく破する時に及んで非法想を僞して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生じ無間業を成ずるなり。(2)又鄔波離、若し苾芻にして非法事に於て非法想を作し、正しく破する時に及んで其に法想を僞して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(3)又鄔波離、若し苾芻にして非法事に於て非法想を作し、正しく破する時に及んで便ち二猶豫を生じつゝ諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(4)又鄔波離、若し苾芻にして非法事に於て法想を作し、正しく破する時に及んで非法想を僞しつゝ諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生じ亦無間業を成ず。(5)又鄔波離、若し苾芻にして非法事に於てして法想を作し、正しく破する時に及んで亦法想を僞し、諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(6)又鄔波離、若し苾芻にして非法事に於て法想を作し、正しく破する時に及んで便ち猶豫を起して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生ぜんも無間業を成ぜじ。(7)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て非法想を作し、正しく破する時に及んで亦非法想を僞して諸苾芻に於て敎誡して學せしめんに、定んで僧伽を破せん。鄔波離、此を齊りて名けて破和合衆と僞し、此に無間罪を生じ亦無間業を成ず。(8)又鄔波離、若し苾芻にして法に於て非法想を作し、及び正しく破する時其に法想を僞して諸苾芻に於て

磨を加して別住せしむる。かゝる人を被捨置人といふ。能捨置人は僧伽行事を擧行せしむる人、卽ち能摘發者なり。その被摘發者と能摘發者に各各伴黨あり、更に伴黨に隨從する所謂、隨順に隨順する人あり。かくして破僧伽の成就非成就をかく十五種に分ちて質疑せしなり。此文は破僧事としては極めて重要なるも甚だ難譯なり。更に後文に三六の殊ありとせる故に十八に分たるべきものと思惟するも、いかに推敵するとも十五を超ゆる能はず、後の研究に俟つ所なり。或は後註(一七)の本文には十四種破壞事とせるより見るに、或は此等十五種中の第九を削除すべきには非ざるかとも考へらる。

【八】前の十五質疑は此を分解する時は三と非三、二と非四、一と非五とに分ち得る故に、三と二と一とは能く破僧して、餘非卽ち非三・非四・非五等は破僧とならざるなりとの意なり。「三六の殊」とは十八の殊なるべけんも、或は三と二と一との三種が各六句づゝに構成さるる故に、三種類の六句構成が出來るとの意とも考へ得る。かくて破僧を成ずるは其中より餘非を除く時15種を得る。其中より但、被捨

せりとやせん。(5)當に能捨置人及び能捨置に隨へる(人)にして破僧事を爲し、此の隨順に隨へるに非ず、被捨置に非ず、(被)捨置に隨へるに非ず、及び此の隨順に隨へる人に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(6)當に能捨置人及び隨順に隨順せる(人)にして破僧事を爲し、能捨置及び被捨置に非ず、(被)捨置に隨へるに非ず、隨順に隨順せるに非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(7)當に被捨置人に隨順し、及び被捨置に隨順せる人に隨順して餘の四に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(8)當に能捨置人に隨順し及び隨順に隨順して餘の四に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(9)當に被捨置人及び能捨置人にして餘の四に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(10)又復當に被捨置人にして餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(11)當に此の被捨置人に隨ひて餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(12)當に此の(被捨置人に)隨順せるに隨へる人にして餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(13)當に能捨置人にして餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(14)當に此の能捨置人に隨ひて餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(15)當に此の(能捨置人に)隨順せるに隨へる人にして餘の五に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん」と。

世尊告げて曰はく、「鄔波離、斯等の諸人は咸能く和合の衆を破壞するなり、但、唯彼の被捨置人のみを除く、此一は僧伽を破すること能はざるが故に」。內を頌に(攝して)曰はく、

「三と二と一とは能く破す　餘の非は類知すべし
衆を破するに三六の殊あり　唯、被捨置のみを除く」。

具壽鄔波離は世尊に請じて曰さく、「大德、世尊說きたまへるが如く若し人あり和合衆を破し已らんに、此人定んで無間罪を生じ、亦無間業を成ずとせんには、大德、未だ知らず苾芻は何を齊りて破和合衆を爲さんに無間罪を生じ、無間業を成ずと名くるなるかを」。(無間罪とは、謂はく若し捺落迦中に墮在せんに受罪の時に曾て間隙なければなり。無間業とは、謂はく人道よりして更に間隔なくして泥犁に乘墮すればなり。無間の字は同じと雖、其義は條然として自ら別なり。苦に間隙なきを梵には阿毘止(avici)と云ひ、無間に墜墮するを梵には阿

破僧事、非隨捨置、及非能捨置、幷非隨能捨置、乃至亦非隨此隨順、爲破僧事耶。(5)爲當能捨置人、及隨能捨置爲破僧事、非隨此隨順、非被捨置、非隨捨置、及非隨此隨順之人、爲破僧事耶。(6)爲當能捨置人、及隨順隨順爲破僧事、非隨能捨置及被捨置、非隨捨置非隨順隨順、爲破僧事耶。(7)爲當隨順被捨置人、及隨順隨順被捨置人、爲破僧事非餘四耶。(8)爲當隨順能捨置人及隨順隨順、爲破僧事非餘四耶。(9)爲當被捨置人及能捨置人、爲破僧事非餘四耶。(10)又復爲當被捨置人爲破僧事非餘五耶。(11)爲當隨此被捨置人爲破僧事非餘五耶。(12)爲當隨此隨順之人爲破僧事非餘五耶。(13)爲當能捨置人爲破僧事非餘五耶。(14)爲當隨此能捨置人爲破僧事非餘五耶。(15)爲當隨此隨順之人爲破僧事非餘五耶とあり。中に於て(7)以下の爲當隨順被捨置人及隨順隨順被捨置人爲破僧事非餘四耶……とある中、爲破僧事と非餘四とを轉倒して譯出せり。以下皆改めたり。此文中、被捨置人とは捨置羯磨(ukkhepaniyakamma)を加せられたる人。例せば犯罪しながら其犯罪を是認せずして僧伽の呵責に服從せざる時、不見罪擧羯

れ正出離にして、苦樂を超越して能く勝處を得るなり。云何が五と爲す。具壽、若し苾芻ありて阿蘭若に住せさらんに是れ則ち清淨、是れ則ち解脫、是れ正出離にして、苦樂を超越して能く勝處を得るなり。是の如くに樹下に於て坐し、常に乞食を行じ、但三衣を畜へ、糞掃衣を著せんに、具壽、苾芻にして行ぜん時是れ則ち清淨、是れ則ち解脫、是れ正出離にして、苦樂を超越して能く勝處を得るなり。若し具壽、諸苾芻にして此五種勝上の禁法の、是れ清淨、是れ解脫、是れ出離なるを忍せんには、應に可しく彼の沙門喬答摩に遠ざかるべく、應に可しく彼を離れて其と別住すべく、應に親附すべからず、應に可しく籌を受くべし」と。[六]提婆達多は……幷に身は第五に而し受籌せんには是を受籌と名く』。

内を頌して曰はく、

「一は僧伽を破するに非ず　九に至りて方に能く破し
幷に羯磨事を作し　籌を行ぜんに非法と說くなり」。

具壽鄔波離は世尊に請じて曰さく、[七]「大德、且に(1)被捨置人の如きは此人能く破僧伽事を作し、及以(被)捨置に隨順せる人、乃至、此の隨順に隨へる人も破僧事を爲し、能捨置に非ず、(能)捨置に隨順せるに非ず、隨順に隨順せるに非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(2)當に能捨置人にして破僧事を爲し、及以能捨置人に隨順し、乃至、此の隨順に隨へる人にして破僧事を爲し、被捨置(人)に非ず、(被)捨置に隨へるに非ず、亦此の隨順に隨へる人に非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(3)又復當に被捨置人及以(被)捨置に隨順せる人にして破僧事を爲し、隨順に隨順せるに非ず、能捨置に非ず、亦此の能捨置に隨へる人に非ず、乃至、亦此の隨順に隨へるにも非ざらんに破僧事を爲せりとやせん。(4)當に被捨置人及び隨順に隨順せる(人)にして破僧事を爲し、(被)捨置に隨へるに非ず、及び能捨置に非ず、幷に能捨置に隨へるに非ず、乃至、亦此の隨順に隨へるに非ざらんに破僧事を爲

【六】本文に提婆達多幷身第五而受籌者是名受籌とあり。

【七】本文に(1)大德且如被捨置人、此人能作破僧伽事、及以隨順捨置之人、乃至隨此隨順之人、爲破僧事、非能捨置、非隨順捨置、非隨順隨順爲破僧事耶。(2)爲當能捨置人爲破僧事、及以隨順能捨置人、乃至隨此隨順之人爲破僧事、非被捨置、非隨捨置、亦非隨此隨順之人、爲破僧事耶。(3)又復爲當被捨置人、及以隨順捨置之人、爲破僧事非隨順隨順、非能捨置、亦非隨此能捨置人、乃至亦非隨此隨順爲破僧事耶。(4)爲當被捨置人及隨順隨順爲

卷の第十一

（提婆の僧伽破壞）（承前）

爾の時、阿瑜率滿鄔波離[1]は世尊に請じて曰さく、「大德、云ふ所の僧伽破壞と復僧伽和合と云へるとは、未だ知らず何を齊りて名けて破壞と爲し、未だ知らず幾を齊りて名けて和合と爲すなるかを」。世尊告げて曰はく、『若し復苾芻、其の非法に於て非法想を作し、現に別住するありて別住せるの心を作して羯磨を作さんには、此を齊りて名けて[2]破壞羯磨僧伽と爲す。若し其れ法に於て而し法想を爲し、和合衆に於て和合想を作して羯磨を爲さんには、此を齊りて名けて僧伽和合と爲す。何をか破僧と謂ふなる。若し一苾芻ならんに、是れ亦僧伽を破する能はざるなり。若しは二若しは三……乃至、八に於ても亦復和合衆を破する能はじ。如し其れ九に至り或は復斯を過ぎたるに爾僧伽あらんには、方に破衆と名け、共に羯磨を作し并に復籌[3]を行ずるなり。何をか羯磨と謂ふなる。卽ち提婆達多が諸苾芻に於て告令教誨して其學處を制せるらく、「汝等苾芻、須らく知るべし、其五種の禁法あるを。何をか謂ひて五と爲す。[4]具壽、若し苾芻ありて阿蘭若に居せさらんに是れ則ち清淨、是れ則ち解脫、是れ正出離にして、苦樂を超えて能く勝處を得るなり。是の如くに樹下に於て坐し、常に乞食を行じ、但三衣を畜へ、糞掃服を著せんに、具壽、斯を苾芻と謂ひ是れ則ち清淨、是れ則ち解脫、是れ正出離にして、苦樂を超えて能く勝處を得るなり。若し具壽、諸苾芻衆にして此五種勝上の禁法の、是れ清淨、是れ解脫、是れ出離なるを忍せんには、應に可しく彼の沙門喬答摩に遠ざかるべく、應に可しく彼を離れて共と別居すべく、應に親附すべからず、此は是れ其白なり」と。是の如くに羯磨も白に准じて應に爲すべきなり。[5]云何が籌を行ずるなる。卽ち提婆達多が諸苾芻に於て告令教誡して諸學處を制せるらく、「具壽、五勝法ありて是れ清淨、是れ則ち解脫、是

【一】阿瑜率滿鄔波離。[illegible]の音譯、尊者鄔波離なり。

【二】破壞羯磨僧伽。僧伽を破壞し羯磨せりとの意。羯磨せりとは、四人以上の苾芻が別集して行事を作すことなり。

【三】籌。律藏九、註（一二の六六。一三の五〇）、律部十四、註（二三の一二）の本文參照。

【四】破僧羯磨の作法。

【五】受籌羯磨の作法。

り。既にして其の到り已るに、時に巧師は兒母に報じて曰はく、「此の機關象は汝可しく之を藏すべし。兒若し索めん時も必ず應に與ふべからず。其の、(昇り)去るを辨して未だ還歸するを學ばざるに由りてなれば、其兒をして苦厄に遭ふを致さしむる勿れ」。其兒、後に於て數數母に從うて索むるらく、「其の孔雀は我れ乘りぬれば、木象にて暫く旋遊せんと欲す、多人をして我に歸伏せしめんと欲すれば」。母は遂に報じて曰はく、『汝が師去りし日、固く留言せるあり、「兒、象を索めん時は宜しく與へらるべからず、但、昇り去るを辨して未だ歸還を體せざれば、此に因りて苦厄を致招せしむること勿れ」と』兒、母に報じて曰はく、「去還の術は我已に並に知れり、師に慳心ありて與へしめざるならくのみ」。女人の心軟く數求請するを見ては遂に機關を以て持して其子に授けしに、子は象を得已りて遂に機を動發し、直に上りて霄を搏ちければ、衆人嘆ぜるらく、「善なるかな」と。其師見已りて而ち之を嘆じて曰はく、「此兒一たび去りて復還り來らじ」。更に機關を轉ぜるも往きて返らず、大海上に到りしに雨多くして晴るゝこと少かりければ、所有機紐は皆爛れ斷ち、之を海內に雹せりければ因りて乃ち命終せり。諸天は之を見て伽他を說いて曰はく、

「諸有悲愍もて益語を出せるに　其敎に從はずして自ら心に隨ひ
木象に師なくして强ひて乘じ去り　終に大海に於て見に身沈みぬ」と』。

世尊告げて曰はく、「汝諸苾芻、異念を生ずること勿れ、往時の機關師とは卽ち我が身是れなり、其弟子とは卽ち提婆達多是れなりしなり。往利語に背きて已に沈沒の殃に遭ひ、今益言を棄てゝ現に燒身の酷を受けしなり」と。

卽ち今時の天授なり。今も仍ほ我に於て極瞋心を起して其語を受けざりければ、斯の惡報に嬰りて捺落迦に生じて阿毘止に在るなり』。時に苾芻ありて尚ほ疑念ありければ、更に便ち疑を斷じたまふなる世尊に請白して曰さく、「大德、何が故にか提婆達多は大慈世尊が利益語を爲したまへるに、信用すること能はずして捺落迦に生じ、阿毘止中に大極苦を受くるなる」。世尊告げて曰はく、『[四八]汝諸苾芻、提婆達多は但に今日我が言を用ひずして斯の獄苦を受けたるのみには非じ、又過去世時にも亦語を受けずして曾て辛苦に遭へり。汝今應に聽くべし、汝諸苾芻、往昔時に於て一村內に妙巧師の[四九]機關に善解せるあるありて、此村に在りて住せるが、遂に相似の族望の中よりして女を納れて妻と爲し、綢繆して好を結び、懽娛して意を得たりければ、未だ久しからざるに妊身し、八九月已るに便ち一息を生ぜり。既にして其誕まれ已りて三七日を經たるに、其の懽會を作し、爲に其名を授けて號して巧容と曰へり。如法に長養して漸く成立するに至りしに、其父久しからずして遂に爾し身亡りぬ。其息は後に於て便ち餘村に向ひ、更に巧師に就きて機關の技を學べり。復餘邑に向ひて轉伉儷を求めしに、一長者父女の門に居せるあり、與に妻と爲さんことを許ひ、而し之に報じて曰はく、「汝、某日を齊りて促りて我に赴りて言へ。斯の期に爽はざらんには婚娶を爲すに任へん。如し其れ及ばざらんには我が愆には非じ」。巧容復り往いて巧師に報じて曰はく、『某村に女あり、我に婚成を許へるらく、「吉日時臨まんに相期して促り至り、如し能く節に赴かんには必ず言に爽はじ、若し也時に乖かんには我が過には非じ」と』。巧師報じて曰はく、「必ず是の如からんには、我れ當に汝と共に彼に赴きて期を促るべし、良日吉晨は理として再び得ること難ければ」。木孔雀を取へて相與に俱に昇り、遐途を遠しとせずして促りて期日に赴けり。時に彼の村邑の人物は共に未だ曾てせざる所を覩見して其奇巧を嗟せり。既にして禮娟を呈し、婦を取りて歸還せんとて、遂に三人と與に俱に孔雀に昇りしに、機關轉發して俄に太虛を陵ぎ、未だ[五〇]浹辰を盡さゞるに倏ちに故邑に歸れ

【四八】提婆達多不ㇾ受二世尊利語一墮獄前生因緣譚。

【四九】機關。機械仕掛の乘物。

【五〇】浹辰。十二日間、子より亥に至る一めぐりをいふ。

若し其れ妄語を爲さんに　下道に定んで當に行くべく
當に無舌の報を招かんこと　猶し水中の魚の若くならん
若が人、法言に乖きて　其の非法の説を作さんや。
王應に實語を爲すべし　平復して還故の如からん
若し其れ妄語を爲さんに　下道に定んで當に行くべく
當に非男女と作りて　定んで黄門の形を受けん
若が人、法言に乖きて　其の非法の説を作さんや。
王應に實語を爲すべし　平復して還故の如からん
若し其れ妄語を爲さんに　下道に定んで當に行くべく、
時に應じて天雨らず　非時に利雨は流れん
若が人、法言に乖きて　其の非法の説を作さんや。
王應に實語を爲すべし　平復して還故の如からん
若し其れ妄語を爲さんに　下道に定んで當に行くべく
當に蛇身の報をうくべく　兩舌、口中に生ぜん
若が人、法言に乖きて　其の非法の説を作さんや
王應に實語を爲すべし　平復して還故の如からん
若し其れ妄語を爲さんに　下道に定んで當に行くべく
卽ち制底王の如く　其の極惡業を造りぬれば
當に阿毘止に趣き　惡報もて泥黎に處るべけん」。

汝諸苾芻異念を生ずること勿れ。其の大臣長子とは卽ち是れ我が昔身にして、其の制底迦王とは

て曰はく、「爾、何處よりして今斯に來至せる」。其人報じて曰はく、「我れ某城に住せり」。遂に其弟を問へるに客人具に答ふらく、「彼れ非法を行じて人庶を苦刻しぬれば、衆皆負怨して賴りて生を求むるなし」。苾芻聞き已りて其人に告げて曰はく、「仁、今可しく去るべし、憂慼を生ずること勿れ、我れ容隙あらんに當に彼の城に往き、理を以て開導して正法を行ぜしむべく、人庶の苦を離れ安きを得んことを冀望せん」。其人聞き已りて遂に本處に還り、其親族に報じて具に所由を述べしに、展轉して風聞は其小弟に徹せり。弟は卽ち便ち往きて其王に白して曰さく、「我が大兄は此に來至せんと欲す」。王便ち告げて曰はく、「善い哉、若し至らんに彼れ卽ち大臣たり」。其人白して曰さく、「我れ已に久しきより來、王殿下に事へて勞誠もて宿んじ著けるに其事如何」。王便ち告げて曰はく、「我が國法として太子襲臣して事移すべからず、何の計をか知へ欲むべき」。王復告げて曰はく、『汝が情願を必にせん、彼若し來らん時應に云ふべし、「我れ大なり」と』。既にして王の敎を蒙け內喜して而し歸れり。苾芻久しからずして其本邑に還りしに、王衆は見已りて咸悉く起迎せるも、唯獨り其弟は端居して住せり。苾芻告げて曰はく、「汝は是れ我弟なるに、何の故にか端居せる」。其人報じて曰はく、「爾小にして我れ大なればなり。如し其れ信ぜざらんには應に證明を取むべし。我れ王宮に長たれば王は大少を知れり、宜しく應に共に問うて眞虛を決判すべし」。時に苾芻進みて王に白して曰さく、「我が二人は誰か長子たる」。王は乃し故心にて妄語して曰はく、「此人當に大にして爾は小たり」。纔に膏を發し已るに尋いで、聲せるの後犬は便ち座を放ちて之を地に擲き、卽ち口內よりの臭氣は外に充ちぬ。時に太子苾芻は斯事を見已りて多頌を說いて曰はく、

「若し人妄語を爲さんに　諸天便ち捨て去り
口中に臭氣出で　天堂の路を失却せん
王應に實語を爲すべし　平復して還故の如からん

帝釋、梯を投げ下しぬれば　　吾當に梵天に往くべけん」。

又復牛王更に頌を說いて曰はく、

「實に天帝釋の　　梯を投げ、梵天に往くにも非じ
繩綣急りて項を勸へぬれば　　性命此れ時に窮まれり」。

汝諸苾芻異念を生ずることと勿れ、昔時の牛王とは卽ち我が身是れなり、往日の野猴とは卽ち天授是なりしなり、往昔我が言を用ひずして已に其苦に遭ひ、今吾が說を聽かずして現に斯の如きの大殃を受けぬ』と。時に諸苾芻は復疑念あり、遂に便ち疑を斷ちたまふなる世尊に請問すらく、「何の故にか提婆達多は世尊所に於て大瞋心を起し正語に隨はずして、阿毘止に生じて大苦に身を燎かるゝなる」。世尊告げて曰はく、『[四六]但に今日我が言を用ひずして身、猛火に遭ひて一切救ふなきのみには非じ。汝、諸苾芻宜しく更に應に聽くべし。曾て往昔に於て一王都あり、王を制底迦と名けて化を此に敷けり。時に王の福力にて其國界をして富饒にして昌熾ならしめければ、安穩豐樂して多く諸の人衆は匱乏する所なかりき。又復其王に大勝福あり、每に坐せんと欲する時は諸天衆ありて其座足を捧げ、止めて空裏に在きぬ。其王に一知國大臣ありて便ち二子を生じ、大を出喜と名け、小を衆愛と名けぬ。[四七]時に大兒は每に其父の、法と非法とを以てして衆に敎ふるを見て、遂に便ち念曰すらく、「我れ長子たれば職として襲官すべければ、我が父終亡せんには大臣位を當け、吾も亦當に法と及び非法とを以てして物に敎ふべく、斯惡業に緣りて捺落迦に生ずれば、若ち我れ今出家行を修めんと豈す」。遂に父所に至りて出家を求哀せるに、父遂に之を許ひければ、世尊處に於て出家して俗を離れぬ　後に異時に於て其の父大臣は他世に掩隨せるに、時に第二子は國の大臣と爲り法と非法とを以てして俗を化せるに、國人は怨酷して其非理を說けり。時に一人ありて村邑を旋遊し、期せざるに展轉して彼大兄の出家行を修せるに見えぬ。時に苾芻は其客至れるを見て而ち之に問う

【四六】提婆達多起二瞋心一墮獄前生因緣譚。

【四七】本文に于時大兒每見其父以法非法而教於衆……吾亦當以法及非法而敎於物、緣斯惡業生捺落迦、豈若我今修出家行とあり。法と非法とを以てとは、法を非法とし、非法を法として非政を行ふをいふ。

到りぬ。長者は念曰すらく、「泥深くして牛大なれば、我れ獨にては堪ふるなし、明朝に至るを待ちて詳く來りて濟拔せん」。牛遂に告げて曰はく、「可しく繩綣を以て我が角上に繫りて前面に置かんには、曉に方に來るに任ふべけん。如し猴珞ありて來りて我に逼らん時、我は綣繩を以て角を振りて驚怖せ(しむ)れば」。其人遂に卽ち繩を以て角に繫り、其綣を長作して地に置きて去りぬ。旣にして冥宵屆るに野猴便ち至り、遙に其牛を覩て斯言を作して曰はく、「誰ぞ此處に於て藕根を偷竊せるは」。牛便ち報へて曰はく、「我れ泥に溺らされて自ら出づるに由なきなり、是れ竊心もて他の蓮藕を盜まんとには非じ」。猴、是語を聞き遂に與ぎて言ひて曰はく、「我が美膳何ぞ忽にして自ら來れる」。遂に其牛に近づきて屠害を爲さんと欲せり。牛、猴に告げて曰はく、「爾、宜しく我より遠ざかるべし、相陵んぜらるゝなく、汝が身をして[四三]羅の苦毒に遭はしむること勿れ」。猴は告ぐるを聞くと雖其言を齒ねずして遂に牛邊に就り僞に[四四]攎掣せんと欲せり。時に[四五]勃利娑婆(亦牛王と爲す)は言を用ひざるを見て伽他を說いて曰はく、

「我れ藕根を偷めるに非ず　亦蓮を盜める者にも非じ
必ず若し情に食せんと存せんには　背に上りて應に從ひ剖るべし」。

猴曰はく、「今正に是れ時なり、應に背後より次第に食すべし」。牛背に擲上り口を下げて飡はんと欲せるに、牛は角もて綣を振ひければ猴の項に羂著し、遂に便ち索を搖へるに空裏に身を懸けぬ。時に大牛は伽他を說いて曰はく、

「汝は是れ美少年の　戲者、空中に舞ひて
伎を村田に騁せるも　野田なれば施主もなきぞかし」。

是時野猴も亦伽他を以て而し牛に答へて曰はく、

「我は舞を作す者に非ず　亦美少年にも非じ

【四三】羅。絡ひ包むもの、繩綣を意味せるなり。
【四四】攎掣。摶ちつかみ、おさへひくなり。
【四五】勃利沙婆。Vṛṣabha (牛王)の音寫なるべし。

收掩して驅りて衆人に告ぐらく、「王家の豆田は並に此驢が食せるなり、宜しく須らく苦辱して方に之を棄つ可し」。時に守田人は驢の雙耳を截り、并に木臼を以て懸けて其咽に在き、痛杖もて骸を鞭ちて之を趁ひ出せり。其驢は辱められて展轉して遊行せるに、特牛は既にして見て遂に驢所に於て伽他を說いて曰はく、

「善く歌ひ大に歌を好くし　　歌に由りて果此に獲たり
見汝能く歌唱しぬれば　　雙耳を截り却けぬ。
若し口を防ぐ能はず　　善友の言を用ひざらんには
但に耳を截却せんのみならず　　舂臼もて項邊に懸けん」。

驢復伽他を(說いて)而し之に答へて曰はく、

「[四一]缺齒、應に小語すべし　　老特、多言すること勿れ
汝但夜食を行ぜよ　　久しからざるに縄纏せられん」と。

世尊告げて曰はく、「汝諸苾芻、餘念を生ずること勿れ、往時の特牛とは卽ち我が身是れなり、昔日の驢とは卽ち提婆達多是れなりしなり。往昔我が言を用ひざりければ已にして其苦に遭ひ、今日吾が說を聽かざりければ現斯の如きの大殃を受くるなり。又、諸苾芻、汝更に應に知るべし、猶ほ[四二]今日提婆達多が我が言を用ひずして其大苦を招けるが如くに、往昔の事宜しく更に聽くべし。汝諸苾芻、昔一村に於て一長者ありて此に在りて住せるに、一大牛の衆相具足せるありき。時に彼の長者は沙門及び婆羅門と無依無怙の貧窶と商客とを延請して普く供養を設け、捨施を行じ已るに遂に便ち具相の大牛を解放して隨所に遊行せしめて更に拘繫するなかりき。是時、大牛は既にして釋放を蒙り、意に隨うて遊行して水草を追覓せるに、時に陂澤に行いて深泥內に陷り自ら出づるに由なかりき。是時、長者は日將に曛暮ならんとして方に人傳を見ては、遂に之を尋覓して其の牛所に

【四一】缺齒・老特。共に誹謗の言、老特は老牛の義なり。

【四二】提婆不ㇾ用ニ佛言一墮獄前生因緣譚の二。

迫すれば、幸くは能く我が所受の殃を報ぜられんことを。并に復告知したまはんことを、「更に其窣覩波處に於てして供養を興すこと勿れ」と』。時に二尊は旣にして其語を然し、遊獄の事了りて俱に便ち返りて贍部洲中に詣れり。時に二尊は薄伽畔并に諸大衆に對ひて具に爲に彼の提婆達多及び高迦利迦并に哺剌拏の、捺落迦の中にて受くる所の苦事を說き、旣にして廣く陳べ已りしに、時に諸苾芻は咸疑念を共にせりければ、遂に便ち疑を斷ちたまふなる世尊に請問して曰さく、[四〇]「大德世尊、何の故にか提婆達多は尊の告言したまひたる所を背へて見用せずして、阿毘止に墮ち大極苦を受けて以て斯に至れるなる」。世尊告げて曰はく、『汝諸苾芻、但に今日我言を用ひずして斯の刑酷を受けたるのみには非じ、曾て往世に於ても我が言を受けずして其苦惱に遭へり、汝等應に聽くべし。我れ曾て昔に於て不定聚に在りて菩提薩埵行を行ぜし時、中に牛趣に在りて大特牛と爲り、毎に夜中に於て遂に便ち彼王家の豆地に於て意に隨せて餐食し、旣にして其旭上らんとせる(時)に城中に還り入りて自在に眠臥せり。時に一驢あり、來りて牛所に就りて斯說を作さく、「大舅、何の故にか皮膚血肉は悉く並に肥充せるなる、我れ曾て蹔らくも出でゝ遊放せるを覩ざるに」。牛之に告げて曰はく、「外甥、我れ毎に夜に於て出でゝ王豆を餐ひ、朝曦未だ啓かざるに返りて故居に跡へばなり」。驢便ち告げて曰はく、「我れ當に舅に隨うて同じく往いて食ふべきや」。牛遂に告げて曰はく、「外甥、汝が口は鳴多くして聲便ち遠く及べば斯響に因りて反りて纓拘を受くること勿れ」。驢便ち答へて曰はく、「大舅、我れ若し逐ひ去かんには終に聲を出さじ」。遂に乃ち相隨へて其の田處に至り、籬を破りて同じく入りて彼の王苗を食へり。其驢は未だ飽かざりしには寂爾として聲なかりしも、旣にして其腹充てるに卽ち便ち告げて曰はく、「阿舅、我れ且らく歌唱せん」。特牛報じて曰はく、「片時響を忍べ、我が出づるを待ち已りて後、外甥の其歌唱を作すに任さん」。斯語を作し已りて急走して園を出でしに、其驢は後に於て遂に便ち鳴喚せり。時に王家の守田の輩は卽ち便ち

【四〇】提婆不レ用二佛言一墮獄前生因緣譚の一。

なり又復汝が又鐵棒の遍く皆熱焔せるありて、數數來至して我が頭を打碎くと云へるは、斯れ則ち汝が阿羅漢嗢鉢羅色尼に於て其頭を拳打し遂に終卒せしむるを致せるに由りて、彼の惡業に由りて斯苦果を招けるなり。又復汝が復大象ありて四方より來り、我が身を踐蹋して碎くこと米粉の如くすと云へるは、斯れ則ち汝が大害意を起し、[三八]護財象を放ちて世尊を蹋ましめんと欲せしに由り、彼の惡業に由りて斯苦果を招けるなり」。二尊は命じて曰はく、『提婆達多、汝今斯の如きの極苦を受くると雖、世尊は汝を記したまへり、「斯罪を受け竟るに終に鉢刺底迦佛陀を證悟するを得、名けて具骨と爲さん」と』。時に提婆達多は斯語を聞き已りて二尊に白して曰さく、「若し是の如からんには、我れ今情勇みて能く無隙大地獄中に於て、一脅にして臥せんとも其苦を甘受せん」。是語を作し已るに忽然として現ぜざりき。時に阿瑜窣滿舍利弗呾囉・毛嗢揭羅演那は、次いで復彼の外道六師の受苦の處に詣り、遂に便ち彼の高迦離迦の、其舌上に於て一百犂ありて周遍して耕墾せるを見ぬ。時に[三九]索訶界主梵天王も亦二尊に隨うて往いて高迦離迦を觀見し、而し之に告げて曰はく、「汝、高迦離迦、汝可しく此二大尊者苾芻處に於て極敬心を起せ。然り此二師は堅く淨行を守り智慧・神通は衆中第一たれば」。時に高迦離迦は彼の二尊を見て便ち之に告げて曰はく、「此二の罪惡邪欲の人、何が此に來至せる」。事惡言を作して纔に聲を發し已るに、其舌上に於て遂に千犂ありて而し遍く耕墾せり。時に阿瑜窣滿舍利弗呾羅・毛嗢揭羅演那は是念曰を作さく、「此の有情は業重くして救ひ難く、奈何ともすべき無し」。（便ち）之を捨て去り、次いで便ち往いて晡剌拏迦攝波の處に詣れり。既にして彼に至り已るに、時に晡剌拏攝波は遂に便ち就りて二尊の雙足を禮し、而ち之に白して曰さく、「願はくは二大德、我は罪人なるを察したまはんことを。我れ昔時に其邪法を說き時俗を矯誑し其正信を遮りしに由り、斯罪業に緣りて五百犂ありて時時に舌に耕せり。又復我が諸の聽聞弟子にして我が所重の餘骨窣覩波邊に於て供養を呈するの時、便ち大苦ありて重ねて來りて遍

【三八】護財象。nor-sa' yoṅ（ノル チョン）、「寶を守る」義、Dana' alaka なり。

【三九】索訶界主梵天王。娑婆世界主梵天王なり、律部十三、註（八の二三）參照。

ひたれば、應に可しく運心して[三六]無隙獄の受苦の情類を觀じて爲に火災を滅せよ」。是語を說き已るに時に毛嗢揭羅演那は便ち[三七]如是大水定に入り、既にして心を定にし已るに上より雨を注ぎ、滴は杵の大さの如くにして阿毘止に入れるも、其水は空に於て悉く皆消散せりき。復大雨滴の若しは犁轅或は車軸の如くなるを注げるも、然も其雨水も亦皆消散せり。時に舍利弗呾囉は斯事を見已りて遂に便ち斂念して勝解行定に入り、既にして入定し已るに其水滂沛として遍く獄中に滿ちければ、受苦の聲除こりて其本念に服しぬ。時に阿瑜窣滿毛嗢揭羅演那は言を發して命びて曰はく、「若し是れ提婆達多ならんには可しく應に前進すべし」。斯命を聞き已るに、多千數の提婆達多ありて競ひ來りて奔り就れり。時に阿瑜窣滿摩訶毛嗢揭羅演那は斯の衆に報じて曰はく、「若し是れ世尊の親兄弟なりし提婆達多ならんには、宜しく應に此に住まるべし」。時に提婆達多は遂に便ち進みて阿瑜窣滿舍利弗呾囉、摩訶毛嗢揭羅演那に就り、既にして其所に至りて二尊の雙足を頂禮し已るに、二尊は問うて曰はく、「天授、汝が今受くる所の大地獄の苦に差別ありや不や」 天授答へて曰はく、「且らく阿毘止內にて共に受くる苦の如きは、此れ言ふを須ゐじ。然れども我れ躬に於て受くる所の別苦は、幸に聽察を存したまはんことを。時に鐵山の火熱せるありて遍く洪焰を起し、通じて一火と爲りて我所に來至して我身を磨碎すること、譬へば石上に油麻子を磨するが如くなり。復極利雙齒の鐵鋸の猛焰にて大熱せるあり、我が身を解割して一一の肢骸は片片零落し、又鐵棒の遍く皆熱焰せるありて數數來至して我頭を打碎き、復大象ありて四方より來り、我が身を踐蹋して碎くこと米粉の如くせり」。時に阿瑜窣滿舍利弗呾囉・毛嗢揭羅演那は同じく之に告げて曰はく、「汝提婆達多、汝が云ふ所の如くんば、時に鐵山の大熱極熱せるありて遍く洪焰を起し、通じて一火と爲りて我所に來至して我身を磨碎すること、譬へば石上に油麻子を磨するが如くなりとは、斯れ則ち汝が其の鷲峰山に於て大地石を以て如來を打ち損ひたるに由りて、彼の惡業に由りて斯苦果を招ける

【三六】無隙獄。本文に無澗獄とし、明本には無間獄とせり。澗は隙の寫誤なるべし。

【三七】如是大水定。理の如くに大水定に入るなり。理の如くにとは、胎の如くに(yoni-śaḥ)との意なり。

く其身を燎きければ、遂に便ち叫喚して高聲に告げて曰はく、「大德阿難陀、我れ現燒かる、我れ今炙かる」と。時に[28]阿瑜窣滿阿難陀は既にして其苦を見て極めて慈悲を軫し、又親族なるに於て更に愛念を加へて而し之に告げて曰はく、「提婆達多、汝今宜しく極想もて[29]怛他掲多阿羅漢三藐三佛陀に歸誠すべし、餘念を爲すこと勿れ」。其時天授は無隙の火燎に其身を炙かれ、業報現前して嚴極苦を受けられれば、深心慇重もて口に自ら唱言すらく、「今日より我身乃し徹骨に至るまで薄伽畔に於て至心に歸伏しまつる」。斯語を說き已るに、現身に[30]無間無隙捺落迦中に墜墮せり。時に世尊は諸苾芻に告げたまはく、『汝等應に知るべし、提婆達多は善根已にして續ぎければ、一大劫に於て無隙大地獄中に生じ、其罪畢り已るに後に人身を得、展轉修習して終に[31]鉢刺底迦佛陀を證悟するを得、名けて[32]具骨と爲さん。爾の時に當りて既に證を獲已りて鉢を持して家を巡り、既にして所餐を獲て本處に還歸し、鉢を一面に置きて手を洗ひ足を濯ぎ、方に餐に就かんと欲して遂に乃ち心を攝して其宿世を觀ずらく、「我れ何の事に緣りてか久しく生津に在りて迷惑輪廻して今身に覺悟せる」。遂に便ち世尊の邊に於て其の種種惡逆の事を造れるを觀見し、復往昔に世尊本菩薩を行じたまひし時、世世生生に怨隙を爲せるも、但少許の恭敬利養に由りて而し此に至りしを見、既にして斯事を了しては其獲たる所の餐は一も曾て食はず、遂に空裏に昇りて大光明を放ち、諸の神變を現じ已りて無餘依妙涅槃界に於て而し圓寂を證せん』。時に[33]阿瑜窣滿舍利弗呾囉・毛嗢揭羅演那は每に時時に於て捺落迦に往いて而し看らんが爲に行けり。時に[34]舍利弗呾囉は毛嗢揭羅演那に告げて曰はく、「仁、我と共に無隙獄に往き、其天授を觀じて慰問を爲し(う)べきや」。時に舍利弗呾囉は毛嗢揭羅演那と與に[35]阿毘止に往き、既にして其所に至りしに時に舍利弗嗢囉は毛嗢揭羅演那に命じて曰はく、「仁、今知れりや不や、此れ卽ち是れ阿毘止處にして上下四邊に通徹して一焰の猛火ならざるなく中に間隙なきを。仁は大神(通)に於て大德衆內に世尊は「以て第一たり」と記說したま

【二八】 阿瑜窣滿阿難陀。āyuṣmān Ānanda の音寫、具壽阿難又は尊者阿難の義。

【二九】 怛他掲多阿羅漢三藐三佛陀。Tathāgata, Arhan, Samyaksaṃbuddha の音寫、如來・應供・正遍智として佛十號中の三號を出だして世尊を稱せるなり。

【三〇】 無間無隙捺落迦。義淨三藏は第十一卷に於て無間と無隙とを區別せり。彼の地獄にゆいて苦を受くること間斷なきを無間といひ、此人界の現身に於て地獄の苦を受けて墮するに垂んとするを無隙とせり。便ち現身より無隙の大苦を受け續いて地獄に無間の大苦を受くるを示さんとて無間無隙とせるなり。

【三一】 鉢刺底迦佛陀。pratyeka buddha の音寫、辟支佛なり。

【三二】 具骨。rus-pa-can(レエバ　チャン)、「骨を持てるもの」との義、aṭṭhiesara なり。

【三三】 阿瑜窣滿舍利弗呾囉・毛嗢揭羅演那。尊者舍利弗・目犍連なり。

【三四】 舍利弗・目連の遊獄。

【三五】 阿毘止。avīci の音寫、無間地獄なり。

【二六】大鉢塞建拖力あり、妙寶牀より起ちて天授に就り、其合掌せるを捉へて雙膝にて地に摧へしに、天授の十指より血迸りて流出し、地に婉轉して痛みに自ら勝へざりき。時に耶輸陀羅は而し之に告げて曰はく、「汝眞に無頼にして愚憃の極なり、暫らく其手を執ふるに已に堪任せず、況んや復求念して以て交合を充さんとせんとは。轉輪王主は應に我が夫と作すべく、或は最後生の菩提薩埵ならんに、我れ其室に充へて方に始めて儀に合はんも、自外の諸人は全べて偶配にあらじ」。是時天授は恥を懷きて宮を出でしに、舍迦諸人は其憂苦せるを見て而し之に告げて曰はく、「汝今先に可しく世尊處に往きて其に【二七】懺摩を求むべし、若し恕容せられんには方に天子を稱せよ」。時に提婆達多は極嚴の毒を以て十爪中に塡めて世尊の邊に詣り、是の如きの念を作さく、「若し沙門喬答摩にして見に我を恕さんには斯ち善い哉と曰はん、必也容さゞらんには、我れ當に就いて禮し其毒爪を以て足を搯みて傷けしむべし」。既にして佛邊に至り雙足を頂禮して世尊に請じて曰さく、「幸に願はくは哀憐して我を容恕せられんことを」。時に世尊は其天授が何種の心を作して來りて我が所に向へるなりやを觀じたまひ、天授が殺害を爲さんとするの情を驗知したまひければ、遂に神力を以て雙膝の下を變じて水精石を成じて默然して住したまへり。時に提婆達多は默したまひて語るなきを見て遂に瞋心を起し、其害意を興して便ち毒爪を以て世尊を爬き搯まんとせるに、時に十指は並に皆摧破し、返りて其毒に中りて大苦惱を生ぜり。是時尊者阿難陀は而し之に告げて曰はく、「天授、可しく世尊に歸依すべし」。阿難陀に報じて曰はく、『大德、我れ今若し其れ佛に歸依せんに、佛の言曰したまへるが如くんば、若し佛陀に歸依せんに惡道に生ぜず、人身を捨棄し已りて當に勝天上に生ずべけん。然し而し世尊は我を記したまへり、「當に惡道泥黎耶中無間に生じて一劫なるべく、救療するに堪へじ」と。我れ若し天に生ぜんには彼れ虛語を成じ、若し惡趣に墮せんにも還たれ妄言たり』。正に是の如きの極瞋怒を生ぜし時、惡業既に圓にして更に待つ所なく、無間の火遍

【二六】大鉢塞建拖力。明かならず。

【二七】懺摩。容恕を乞ふなり。

が爲に故に來りて紹繼せんとす、宜しく我が與に妻室と爲るべきや」。時に彼は信を得て遂に便ち巡事して[二二]瞿彌迦に告げしに、時に瞿彌迦は耶輸達羅に報じて曰はく、『仁、應に使を遣はして天授に告げて云ふべし、「菩提薩埵は我れ昔手を執りしに彼の力は持するに堪へたり、汝若し能くするあらんに可しく來りて就るべし」と』。是時天授は情に羞恥なく己が骸力を忖らずして、進みて中宮に入り陛に進み陛に昇りて其處に就らんと欲せり。時に瞿彌迦は諸宮女を顧みて咍然として笑へるに、天授は覺えず合掌して居れり。時に瞿彌迦に[二三]大諾近那力あり、遂に左手を將りて其天授を握りしに、時に十指より血を迸らし驚ぎ流れ遂に菩提薩埵が耆遊戲したまひし池に於て、之を池内に擲てるに、既にして池に墮ち已りて大叫聲を出せり。是時舍迦競ひ來り奔り就りて遂に詳議して曰はく、「提婆達多は其力をも忖らずして、輙ち宮内に入りて欲事とて欺陵せんとせり」。轉復聲を尋ねて池内に在るを見たりければ、遂うて相告げて曰はく、「斯れ內亂人なれば可しく其命を斷つべし」。復更に議りて曰はく、『死人に於て更に其に害を加ふる勿れ。世尊は記したまへり、「此の提婆達多は惡道に生じ泥黎に墮つる者、無間に(住せんこと)一劫にして救療するに堪へじ」と。此れ卽ち死と相似たれば、更に復何が勞して身に害せんや』。時に人衆は捨てゝ言を與にせざりき。時に提婆達多は池より起ち已り、水竇中よりして逃走して出でしに、其橛杙のために所着の衣なる白氈一條を裂かれて遂に兩片を成ぜり。便ち是念を作さく、「善い哉斯服や、巧に淨儀に稱ひぬれば、我が聲聞の爲に其裙服を制せん」。又一時に於て舍迦種に告ぐらく、「汝等宜しく我を策して王と爲すべし」。諸人報へて曰はく、「[二四]菩提薩埵は現に內宮にあり、汝可しく權を乘りて其をして賓伏せしめ、既にして妻室を納れ方に王と稱すべし」。時に提婆達多は舍迦處に於て[二五]其猜貳を息め恐怖心を除き、遂に宮中に入りて高樓上に昇り、耶輸達羅の所に到り合掌して一邊にして而し之に白して曰さく、「幸に恩澤を存して曲げて哀憐せられ、汝、國大夫人と爲り我れ乃し稱して此邑に王たらんことを」。時に耶輸達羅に

【二二】瞿彌迦。釋尊三夫人の一、喬比迦(Gopikā)の同音寫なり。律部二十、註(一八の一三)參照。

【二三】大諾近那力。諾近那は梵音 nagna の音寫、裸形にして大力ある神。

【二四】此處に菩提薩埵卽ち菩薩の音を置けるは不穩なり。菩薩の下に妃の一字を入るべきなり。

【二五】猜貳。ねたみうたがふなり。

正見にして心常に靜なれば　惡緣生ぜんに處なし
應に共に知識と爲り　親近せんには聰明に
斯に由りて惡を造らず　恭敬して依行すべけん」。

是に於て提婆達多は聖說を誹毀し、決りて邪見を生じ、定んで斷善根にして、但此生ありて更に後世無しと、是知を作し已りて其徒衆に於て別に[一九]五法を立て、便ち之に告げて曰はく、「爾等應に知るべし、沙門喬答摩及び諸の徒衆は咸く乳酪を食するも、我等は今より更に應に食すべからず。何の緣由にてなりや。此れ彼の犢兒をして[二〇]鎮嬰して饑苦せしむればなり。又沙門喬答摩は魚肉を食・るを聽せるも、我等今より更に應に食すべからず。何の緣由にてなりや。此れ諸衆生に於て斷命事を爲せばなり。又沙門喬答摩は其の鹽を食するを聽せるも、我等は今より更に應に食すべからず。何の緣由にてなりや。此れ其の鹽內に於ては塵土多きが故なり。又沙門喬答摩は衣を受用する時に其の縷績を截てるも、我等は今より受用する時長縷績を留めん。何の緣由にてなりや。此れ彼の織師の功勞を作せるを壞するが故なり。又沙門喬答摩は阿蘭若處に住せるも、我等は今より村舍內に住せん。何の緣由にてなりや。此れ施主の施せる所の物を棄捐するが故に」。故に內を頌に攝して曰はく、

「乳酪を餐まざると　魚肉及以鹽と
長績と村中に在るとは　是れ天授の五法なり」。

[二一]時に薄伽畔は人間に遊歷し、漸行して次いで室羅筏悉底國に至りたまへり。時に提婆達多は遂に是念を生ずらく、「我れ沙門喬答摩に於て屢刑害を興せるも、而し竟に其命を傷損すること能はざりき。我れ今宜しく其妻室に於て陵辱を爲すべし」。遂に便ち往いて劫比羅筏窣覩城に詣り、使を遣はして彼の耶輸陀羅に報ぜしめて曰はく、「沙門喬答摩は已に王業を捨てゝ出家と作れり、我れ昇緣

【一九】提婆の五法。律部十三、註(三の九四)五法敎參照。

【二〇】鎮嬰。おさへはだすなり。

【二一】薄迦畔。佛なり、本文に薄伽畔とあるも、薄伽畔の寫誤なり、今改む。

謂ひ、提婆達多は惡道に生じ泥黎に生ぜんには、當に住すること一劫にして救療するに堪えざるなり。又、諸苾芻、提婆達多は其少分を得、其下品を得て證悟するの時便ち喜足を生じて、縱ひ勝上なるあらんにも更に進修せず。提婆達多は旣にして少分を得、其下品を得て證悟するの時便ち喜足を生じ、縱ひ勝上なるあらんも更に進修し已らざるなり。此を卽ち是れ彼の提婆達多が第三に成就せるに罪惡の法と(謂ひ)、提婆達多は惡道に生じ、泥黎に生ぜんには、當に住すること一劫にして救療するに堪えざるなり』。時に世尊は伽他を說いて曰はく、

『汝、世間の人に　　罪過欲を生ずる勿れ
斯れに由りて爾當に識るべし　　惡欲の招く所の殃を。
世並に知れり、天授の　　聰明なるも心を伏せず
少欲を存する能はずして　　空しく美形狀を持せるを。
彼れ便ち驕逸を行じ　　世尊を陵がんと欲せり
故に我れ記せり、斯人　　一劫に無隙にぜんと。
慳貪にして惡念を生じ　　邪見にして虔恭ならざらんに
定んで[一九]無隙の中に生じ　　四門牢く閉塞せん。
若し他にして過失なきに　　惡謗して過を生ぜしめんには
今世若しは後世に　　自ら愚癡人を受けん。
若し人大海に於て　　毒瓶とて水をして壞せしめんとも
溟渤寬くして際を亡ずれば　　惡を遣たんとも定んで緣なけん。
斯の如く世尊に於て　　惡人は謗讟を生ぜんとも
常に自他利を行ずれば　　罪謗豈に能く成ぜんや。

【一九】無隙の中。阿毘止(avīci)の譯、苦無隙なる故に阿鼻地獄といふ。

生ぜんには當に住すること一劫にして救療するに堪えじ」とは授記せじ。又汝苾芻、我れ彼の提婆達多に少白法あること毛端許の如きを見ざりければ、我は方に提婆達多に「汝提婆達多、惡道に生じ泥黎に生ぜんには當に住すること一劫にして救療するに堪へじ」と授記せるなり。譬へば村を去り及び城邑を去りて其路遠からざるに、糞屎坑あり深さ丈餘ばかりにして臭穢近づき難し。時に一人ありて斯の坑內に墮ち、頭及び手足並に皆淪沒せん。後に一人ありて每に長夜に於て義を慕ふ者たり、利を樂ふ者たり、樂を與ふる者たり、歡を與ふる者たり、安隱を施す者たるが、其人、彼の糞屎坑の邊に到り周匝觀望して情救濟に存すらく、「我れ若し彼の糞屎に墮せる人にして片身分ありて糞汙なきを見んには、我れ當に方便して之を引いて出さしむべし」と。既にして遍く觀察して、其人に少身驅ありて糞汙を被らず、……乃至、手にて拔いて出さしむ可き許をも見ざらんが如くなり。汝、諸苾芻、我も亦是の如し。我れ若し彼の提婆達多に少白法あるを見んには、我は提婆達多に「汝提婆達多、惡道に生じ泥黎に生ぜんには、當に住すること一劫にして救療するに堪えじ」とは授記せじ。又汝苾芻、我れ彼の提婆達多に少白法あること毛端許の如きをも見ざりければ、我れ方に提婆達多に「汝、提婆達多、惡道に生じ泥黎に生ぜんには、當に住すること一劫にして救療するに堪えじ」と授記せるなり。汝諸苾芻、應に知るべし、[17]天授は已に三法を具すれば、惡道に生じ泥黎に生ぜんには、當に住すること一劫にして救療するに堪えざるなるを。何をか三法と謂ふなる。汝、諸苾芻、提婆達多は先に具に其の罪惡樂欲を生じ、遂に便ち彼の惡欲に牽かるゝに遭ひぬ。提婆達多は既にして惡欲を生じて欲に牽かれ已れり。此を、是れ彼の提婆達多が最初に成就せる罪惡の法と謂ひ、提婆達多は惡道に生じ泥黎に生ぜんには 當に住すること一劫にして救療するに堪えざるなり。又、諸苾芻、提婆達多は惡知識に近づき、不善の伴を得、惡人と共に交れり。提婆達多は既にして惡知識に近づき、不善の伴を得、惡人と共に交り已れり。此を、是れ彼の提婆達多が第二に成就せる罪惡の法と

【一七】提婆達多の三惡法具足。

の言を述べたりと雖身死ぬるを免れざりしに、今日も種種の悲言を作せりと雖、亦還害せられしなり」と。時に提婆達多は復是念を生ずらく、「我れ世尊に於て屢尤害を爲し、三無間業は具に已に之を造れり。大拋石を以て遥に世尊を打ち、如來の身よりして惡心もて血を出せり、此は是れ第一の無間業なりき、和合僧伽は而し破壞を爲せり、此は是れ第二の無間業なりき。蓮花色尼は故に其命を斷てり、此は是れ第三の無間業なりき。然り我れ未だ能く一切智を獲ず、所餘の諸事も亦未だ見成せざれば、斯の業道に准ずるに更に生處なし、決定して當に〔一五〕捺落迦中に往くべけん」。是念を作し已るに手を以て頬を支へ、退きて一邊に在りて愁思して坐せり。時に哺剌拏は緣ありて須らく過るべくして遇其邊に到りければ、而し之に告げて曰はく、「提婆達多、爾今何への意にてか手を以て頬を支へ、退きて一邊に在りて愁思して住せる」。彼れ便ち告げて曰はく、「如何ぞ我れ今愁思なきを得んや、瞋惱に因りての故に世尊の邊に於て屢尤害を爲し、幷に已に具に三無間業を造りければ、久しく當に大捺落迦に住在して無隙の苦を受くべけん」。哺剌拏曰はく、「我れ常に謂へり、諸の釋迦種の內にて唯汝一箇のみ解る聰明なりと。豈に謂はんや、汝今亦愚惷を成ぜんとは。豈に後世の、汝をして憂を見せしむるあらんや。若し後世あらんに、汝が斯業を造れるならんには我も亦斯が爲に愁思して住せん」。彼は天授が情を開解せんが爲の故に、便ち對面に於て已が缾を撲破して告げて曰はく、「縱ひ天・世間なりとも此をして更に和會を爲さしむること能はじ。更に後世なければ誰か往いて之を受けん、作者と受者とは並に虛說を成ぜるなり。然り而し可しく劫畢羅伐窣覩城に往きて自ら天子と稱し、王と爲りて住せよ。我れ當に汝を第一聲聞と作すべけん」。時に提婆達多には便ち〔一六〕謗無聖の邪見遂に興りければ、能く一切の善根をして斷絕せしめぬ。爾の時世尊は諸苾芻に告げて曰はく、『汝等、應に知るべし、提婆達多の所有善根は斯に從よりて斷絕せるを。我れ若し彼の提婆達多に少白法あるを見んには、我は提婆達多に「汝提婆達多、惡道に生じ泥黎に

【一五】捺落迦(naraka)。律部十九、註(一四の一)參照。

【一六】謗無聖邪見。聖もなく凡もなく後世もなく此世もなしとの邪見、その邪見を興せるその事が卽ち世尊を誹謗する事になる意なり。

「大男は多く獨行せり　頗し安穩樂を得たりや
常に林野內に居せり　如何がしてか神を養ふを得るなる」。
豺之に答へて曰はく、
「汝恆に我が尾を踐み　幷に常に我が毛を拔けるに
口に大男の言を出さんとは　身を逃るゝ處を覓めんと欲してならん」。
羊復告げて曰はく、
「爾が尾は背後に屈し　我が面前に在りて來れり
如何がしてか見に餘を枉げたる　尋常ならんには仁が尾を蹋まんや」。
豺復答へて曰さく、
「四洲幷に海岳は　咸く皆是れ吾尾なり
如し其れ踐蹋せざらんに　爾何處よりか來れる」。
羊復告げて曰はく、
「我れ親識處より　皆仁が尾なりと說けるを聞きぬれば
在地に敢へて履まず　我れ空處より來れり」。
豺復答へて曰はく、
「爾羖羊は空處より墜ちしに由り　遂に林中の野鹿をして驚かしめ
我が今朝所食の物を廢せしめぬ　豈に下は過理に分明に非ざらんや」。
時に羖羊は哀告を陳べて廣く苦言を述せりと雖、然く而し罪惡業の豺は相放すを肯んぜず、遂に其首を斷ち幷に肉を餐へり』。世尊告げて曰はく、「汝諸苾芻、異念を生ずること勿れ、昔時の豺とは卽ち是れ今日の提婆達多にして昔時の羖羊とは卽ち是れ今日の青蓮花色苾芻尼なり。往時に悲苦

譯。

【二四】 本文に大德頗見提婆達多於嗢鉢羅色苾芻尼處假令悲苦告謝之時不留其首拳打頭破因斯身滅……とあり。

に由らざらんや」。是思を作し已るに嗢鉢羅色に告げて曰はく、「我れ爾が處に於て何の過失ありてか、由ひて汝は吾が乞食の宅をして皆障礙を生ぜしめたる」。遂に便ち前進して其尼を打ち搭けるに、[九]時に尼は打たれて悲苦の言を出だし之に哀告して曰はく、「願はくは淸白なるを見たまはんことを我れ何の因ありてか、斯の如きの事を作さんや、大德は既に是れ世尊の兄弟なり、復是れ舍迦の上種にして而し出家を爲したまへるに。我れ實に無心なりしなれば敢へて談說するあらんや。幸に能く恕される乞ふふくは忠誠を表はさん」。假し斯苦を聞けるも其言を齒ねず、遂に大拳を努りて勇尼の頭を打ち破れり。既にして其[一〇]末摩損せられ衆苦咸く集りければ、遂に乃し壽命に加持して進心を起し、疾く行いて彼の苾芻尼寺に詣れり。時に諸尼衆は其大苦を見て咸之に問うて曰はく、「禍なる哉、[一一]阿離野迦、何の意にてか忽ちに斯の如きの困辱に遭ひたまへる」。便ち衆に告げて曰はく、「仁等姉妹、所有壽命は皆悉く無常にして一切諸法は並に其我なく、寂靜の處是を涅槃と曰ふ。仁等咸應に善法處に於て可しく勤めて勗念すべし、放逸を爲すこと勿れ。其の提婆達多は已に[一二]第三の無間業を造れるも、吾れ今、時至りぬれば可しく涅槃に入るべし」。時に便ち尼衆の前に對ひ其の種種奇異の神變を現じて[一三]無餘依妙涅槃界に入れり。時に諸苾芻は咸く疑念を起し、疑を斷ぜんと欲しての故に世尊に請じて曰さく、「[一四]大德、頗が見に提婆達多は嗢鉢羅色苾芻尼處に於て、假し悲苦し告謝せるの時、其言を齒ねずして拳もて頭を打ち破り、斯に因りて滅に就らしめたる」。世尊告げて曰はく、「但に今日斯の如きの事を作せるのみには非じ、過去世に於ても亦爲に悲苦告謝せるの時、哀言を聽かずして遂に便ち命を斷ちて而し其肉を食へり。爾今應に聽くべし。如往昔時に一村內に於て大長者ありて此に於て居し、多く羊群ありて廣澤に牧せり。既にして其日暮に牧者は驅還せるに、群中に一老弱の牸羊あり、徒伴に及ばずして後に在りて獨進みしに、忽ちにして路側に於て一餓豺に逢ひければ豺に問うて曰はく、

るは三乘思想發達せる爲に菩薩衆（在家出家を含む）と對立せしめんの意圖に出でたるにあらず、預流果以上の證位に入れるものと然らざるものとを區別せるものと考へらる。此事は律部二十三、註（六の三）の本文によりて推し得る。故に今の列衆は室羅薄伽僧伽の內容及び關係を擧げたるなりと解すべきである。

【八】嗢鉢羅色苾芻尼。蓮華色比丘尼（utpalavarṇā）なり。

【九】本文に時尼被打出悲苦言哀告之曰、願見淸白、我有何因如斯事、大德既是世尊兄弟、復是舍迦上種而爲出家、我實無心敢有談說、幸能見恕乞表忠誠、假聞斯苦不齒其言、遂努大拳打打尼頭破……とあり。

【一〇】末摩。marman（體の節々）の音寫、きりさかるゝが如く節々の痛むなり。

【一一】阿離野迦。āryikā の音寫、大姉の義なり。

【一二】第三無間業。佛身より血を出せるは第一、和合僧を破せるは第二、今阿羅漢の尼を打ち殺せるにより第三の無間業を成ぜるなり。無間業とは第十一卷（註九）の本文に無間罪との區別を述べたり。

【一三】提婆達多不レ聽二哀言一拳二打致三死蓮華色一前生因緣

卷の第十[一]

（提婆の僧伽破壞）

爾の時世尊は既にして具に彼の[二]未生怨王が爲に廣く法要を說き、[三]無根の信をして生起するを得せしめたまひ已りぬ。或時、象に乘じ外に出で〻旋遊せしに、世尊の高樓上に在せるを望見して、遂に其象よりして覺えず身を投じて地に崩れ墜ちぬ。又、一時に於て象に乘じて出でしに、[四]薄伽梵を見るや覺えず身を投じ、世尊所に於て深く敬信を生ぜり。遂に便ち彼の執杖人に告げて曰はく、「爾等須く知るべし、今日より始めて我は徹して[五]薄伽伐多及び[六]室羅縛迦僧伽に歸依しまつれば、爾等今より若し世尊及び[七]聲聞衆・苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦を見んには、須らく進み入らしめ、時に其門戶に於て遮障を爲す勿く、門を啓きて進ましめよ。若し提婆達多及び彼の徒衆を見んには、應に須らく掩障すべく、其をして前ましむること勿れ」。後に異時に於て提婆達多は緣ありて須らく未生怨の宅に入るべかりしに、時に守門者は而し之に告げて曰はく、「仁應に可しく止まるべし、前進するに宜なし」。天授問うて曰はく、「忽ち何の緣ありてか遮して進むを聽さゞる」。門人は告げて曰はく、『大王に敎あり、「今日より始めて我れ徹して薄伽伐多及び室羅縛迦僧伽に歸依しまつれば、爾等今より若し世尊及び聲聞衆・苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦を見んには須らく進み入らしめ、時に其門戶に於て遮障を爲す勿く、門を啓きて進ましめよ。若し提婆達多及び彼の徒衆を見んに、應に須らく掩障すべく、其をして前ましむること勿れ」と』。時に提婆達多は既にして遮止せられ情に不樂を懷きて門外に住せり。時に[八]嗢鉢羅色苾芻尼は王宮中より乞食を行じ已りて鉢を持して而し出でしに、時に提婆達多は嗢鉢羅色を見て便ち是念を生ずらく、「豈に此の禿頭の女が離間事を爲したれば、未生怨及び中宮內并に大臣宅をして便ち我處に於て此の稽留を致さしめたる

【一】西藏律との對照により本卷並に第十一卷半（大正藏24, 155 b 9）までは破僧事の最後に是を出すべきである。義淨三藏が是を全卷の眞中に置けることは種々に思考せられうる。本卷並に次の半卷は破僧事として最も重要なるが爲に佛傳前期とその後期との中間に置いたのではないかとも考へうるが、やはり過ちて挿入せるものなりと考ふる方が當を得ておる。委細は破僧事緒言參照。

【二】未生怨王。阿闍世王（Ajātaśatru）の譯、律部八、註（一の一九二）、同十三、註（三の七五）參照。

【三】無根の信。律部十、註（三二の一〇〇）聲聞優婆塞無根信の下參照。

【四】薄伽梵（bhagavat）。

【五】薄伽伐多（bhagavat）。

【六】室羅縛迦僧伽。室羅縛迦（śrāvaka）は聲聞、即ち佛弟子。僧伽（saṃgha）は四人以上の佛弟子の集團なり。即ち佛及び佛の弟子僧伽に歸依する意なり。通常、聲聞僧伽とは出家の集團のみを言ふも、鄔波索迦等の在家の集團を含まざるに非ず、但し從屬關係にありと見るべきである。

【七】聲聞衆・苾芻……等。有部律に於て聲聞衆を別出せ

彼が剃刀の具を捨てゝ　　出家して五通を得たり」。

時に梵授王は此頌を聞き已るに、頌を以て答へて曰はく、

「言ふ莫れ天河護と　　出家して默然して住し
彼の苦行は作すこと難きに　　苦作して大智を得たり。
苦行は能く諸の惡法を摧き　　苦行は能く世間を超え
苦行は能く諸の垢穢を淨め　　苦行は願母なり、惡說すること莫れ」。

時に天河護仙人は心に歡喜を生じて便ち卽ち去りぬ』と。佛、諸苾芻に告げたまはく、「彼の梵授王とは今の賢首釋迦王是れなり。彼の天河護仙人とは今此の鄔波離是れなり。今者の賢首釋迦王が昔梵授王たりしには、往日、天河護を禮せるに地皆震動せり。今も賢首釋迦王が鄔波離苾芻を禮せるに地還六種に震動せり。汝等苾芻、應に當に之を知るべし」と。

【四四】本偈に莫言天河護、出家默念住、彼苦行難作、苦作得天智、苦行能摧諸惡法、苦行能超於世間、苦行能淨諸垢穢、苦行願母莫惡說とあり。衆許摩訶帝經の偈は之と相違せり。卽ち若根本出家、禮事於沙門、寂默及精進、苦行成緣覺、一切罪永滅、一切福業生、後於諸世間、廣利樂衆生とあり。

少思して方に即ち啓白するを容したまはんことを」。時に天河護は既にして伽他を誦し已りて常に王の前に在りて時に爲に宣說せるに、王は聞いて歡喜し、諸の五欲に於て厭離心を生じ、婇女現前するも都べて觀視せず、清歌美詠も耳に聞くを用ひざりき。何に況んや中に於て而し愛著を生ぜんをや。時に諸の婇女は既にして王が恩を失ひければ、心に憂惱を生じて共に相謂ひて曰はく、「我等、寵を失せるは天河護が彼の伽他を誦せるに緣りて轉我王の心に染愛を生ぜざるなれば、可しく共に計を設けて速に驅逐せしむべし」。是計を作し已るに、時に一婇女は天河護の所に往いて白して言はく、「阿舅、王若し歡喜して舅が所須を問はんに、即ち應に所誦の偈を解せんことを請ふべし」と。後に異時にて其の天河護は復王が爲に先所の伽他を誦せるに、王は聞いて歡喜し還所須を問ひければ、便ち即ち王に啓さく、「別に欲する所なきと、唯願はくは我が爲に伽他を解釋したまはんことを」。王即ち請に依ひて廣く爲に開釋せるに、天河護は聞き已りて厭離心生じ、便ち王に白して言さく、「[四三]大王に承事して爲に日已に久し、願はくは慈を流ぎ造めて我に出家せんを放したまはんことを」。王は曰はく、「我れ今汝と共に先に當に契を立つべし、若し出家して後、證悟する所あらんに却り來りて我に報ぜんには、即ち汝の去るを放さん。若し爾せさらんには汝が請に從はじ」。天河護白して言さく、「王命に違はじ」。便ち出家を放せるに、時に天河護は即ち山林に詣りて仙人處に就き、勤めて修習を加へて遂に五通を證せり。便ち是念を作さく、「我れ昔に王と共に言契を立てぬ、我れ宜しく去いて彼が宿心を滿すべし」。念じ已るに即ち王所に至り、虛空に上昇し大火光を放ちて諸の神變を現ぜしに、王は便ち頭面に禮して是の如きの語を作さく、「賢者、汝は是の如きの功能を得たりや」。仙人答へて言はく、「大王、(爾り)」。仙人は尋いで即ち禮を作して而し頌を說いて曰はく、

「此の菴羅園に於て　　梵授王の從者は

【四三】本文に便白王言、承事大王爲日已久、願流慈造放我出家とあり。造の字は納るゝ義なり。

れ、我れ今當に半國の位を賜ふべければ」。使者は敎を奉じて摩納婆の所に詣りしに、（歸りて王に）白して言さく、「大王、我れ彼人の威儀所作を觀るに半國の位に堪ふる無し」。王、其故を問へるに、答へて言さく、「大王、我れ向に親しく觀たるに、妙牀褥を棄て身を委ねて地に在りて鹿皮に寢臥せり、斯かる下人豈に王位當ふべけんや」。王曰はく、「彼は是れ智人なり、緣なきに非ざるが故に、當に去いて喚び來るべし」。使人復往いて報じて言はく、「王は喚べり」。既にして王所に至りしに、王之に告げて曰はく、「何ぞ牀褥を棄てゝ鹿皮に臥せる」。彼れ便ち次第に具に事を以て答へ、重ねて前みて啓して曰さく、「王、若し許したまはんには我は出家せんと欲せり、願はくば王、放許したまはんことを」。王曰はく、「先に共に契を立てんに、我れ當に去るを放すべし、若し出家して後證悟する所あらんに復來りて報ぜんには、我れ當に去くを聽すべけん」。彼、王に白して言さく、「敢へて王命に違はじ」。遂に便ち辭拜して靜林中に往き、[四〇]親敎師及び軌範者なくして、便ち自ら策勵して獨覺菩提を證せり。既にして證悟し已るに復是念を作さく、「我れ昔に王と共に言契を立てぬ、我れ今宜しく去いて彼が宿心を滿たすべし」。却りて王所に至り、虛空に上昇して大火光を放ち諸の神變を現ぜしに、王は便ち頭面に彼尊を跪禮せりければ、而し頌を說いて曰はく、

「見に此に少修して大果を證し　大差別殊勝位を得たり
摩納婆は今善利を得たり　出家して此に至る、更に何をか求めん」。

是時尊者は梵授王をして敬信を生ぜしめ已るに、之を捨てゝ而し去れり。時に梵授王に剃髮者ありて[四二]天河護と名け、此頌を持せしめて執じて曰はく、「汝時時に於て可しく此頌を說いて我をして憶持せしむべし」。時に天河護は善く除髮を能くせりければ、王が爲に剃る時王は便ち睡著し、剃髮將に已らんとしては彈指して王を警せるに、睡既にして覺め已るに甚だ大いに歡喜し、天河護に告げて曰はく、「汝、今何の所求かある、當に汝が請に隨ふべけん」。白して言さく、「願はくは王、臣、

【四〇】親敎師（upādhyāya）。和上なり。
【四一】軌範者（ācariya）。阿闍梨なり。
【四二】天河護。これ第卷五の偈（前註五の三五）の護河神禮の句に相應するなり。藏文には gaṅ-ga skyoṅ（ガンガチョン）とあり、「恒河を護る」義。而して衆許摩訶帝經には殑誐波羅とせる故に、天河護の梵名は Gaṅgāpāla なるを推し得べし。

「日、我を灸くを怖れず　　思欲能く我を燒き
世欲に熱苦あり　　日、人を灸くこと能はじ」。

時に梵授王は偈を說くを聞き已りて是の如きの念を作さく、「當に知るべし、此の摩納婆の善く涼話を說けるを、故に時日中なるに花を採りて熱を知らじ」。王は卽ち下乘して一樹下に坐し、而し摩納婆を命ぶらく、「可しく涼話を說くべし、我れ當に之を聽かん」。摩納婆は王語を聞き已るに是の如きの念を作さく、「定んで知んぬ、王は今熱に遇ふこと至甚なれば、要らず涼話を須むるなるを」。此念を作し已るに卽ち是時に於て種種の涼事を說けり。王は此語を聞いて卽時に身體而し大涼なるを得、心に歡悅を生じて諸臣に告げて曰はく、「若し人ありて能く灌頂王の命を救はんには、當に何が賞をか與ふべき」。其臣答へて曰さく、「當に半國を分ちて彼人に贈るべきなり」。時に王は摩納婆に告げて曰はく、「卿、可しく我と與に宮內に同宿すべし、明朝、卿に半國の賞を賜はん」。時に摩納婆は王と與に同宿せるに、王は卽ち具に種種の淨饌・上妙の衣服資身臥具を設けて其をして寢息せしめしに、更に伴侶なかりければ便ち是念を作さく、「若し半國を得て半國の王と爲らんに、後宮綵女は悉く當に我に屬して意に隨せて自在なるべく、當に快樂を受くべけん」。復是念を作さく、「半國の賞豈に足れりとして言に在らんや、何如、王を殺して而し全位を取らんには」。復是念を作さく、「凡そ尊勝位の人は皆共に貪れり、我れ今何が半國及以全位を須ゐん。何を以ての故に、國位を貪るに由りて國王を害せんと欲したればなり」。是念を作し已るに卽ち頌を說いて曰はく、

「未だ財を得ざらんには時に貪愛を起し　　求めて得ざらんには時に苦惱を生ず
設ひ財物を得んとも貪は息まじ　　故に知んぬ、財利は無利を招くを」。

此頌を念じ已るに便ち卽ち睡著し、中宵に覺めて後は心に悔恨を生じければ、床よりして起ち舊鹿皮を取りて地に敷きて臥せり。時に梵授王は晨朝時に於て使者に告げて曰はく、「摩納婆を喚び來

彼婬女は是思惟を作さく、「今此れ節日なれば城中の諸有婦人は皆衣服瓔珞を著し、各其夫と共に自家中に於て諸の歡樂を作せり。若し摩納婆にして今來りて相就らんに、亦樂しからざらんや」。此念を作し已るに、時に摩納婆は忽にして其家に至りければ、婬女は見已りて便ち昔時に花菓もて相贈りしを記し、歡喜心を發して是の如きの言を作さく、「端正、汝去いて花を採り明朝に來るべし、共に歡樂を作さん」。是時端正は此語を聞き已るに心大いに歡悦し、四の脫を得たるが如くに卽ち本處に歸り、心に此女の顏容端正なると進止の威儀とを念じ、夜の初分より乃し後夜に至るまで思念して息まず、天明くるに垂とせんと欲して便ち卽ち昏睡して都べて所覺なく、晨朝に至りて方に始めて驚悟せりければ、卽ちに好花を覓めしに、是時人民は花を採りて都べて盡き、諸處に花を求めたるも竟に所得なく、唯一處にありて夜合花[三八]を得たりき。卽ち此花を將ちて彼女の家に到りしに、其女は見已りて卽ち頌を說いて曰はく、

「乖鈍[三九]にして皮を披たる愛欲の者　好色黠慧にして半摩沙のみ
此れ時好にして花處に有るに　今少許の夜合を將ち來らんとは」。

此頌を說き已るに報じて言はく、「速に去りて更に別に好花を覓め來れ」。彼人は貪欲の爲の故に而し艱辛を忘れければ、時極熱に屬して景正中に當れるも、城よりして出で遠く阿蘭若に往き、而し好花を採りて既にして勞を辭せず行歌して自ら悅べり。時に梵授王は遊獵して還らんとして途暑熱に倦みければ「林に詣りて止息せるに彼の歌聲を聞けり。王既にして聞き已りて卽ち漸く前行し、而し頌を說いて曰はく、

「頭上は赫日に炙かれ　足下は熱沙蒸せるに
端正喜びて行歌せり　如何ぞ熱を怖れざる」。

時に摩納婆は頌を以て王に答へて曰さく、

【三八】 夜合花。藏文に「śirīṣa といはるゝ樹の花」とあり、śirīṣa（尸利灑樹）なり、合歡樹とも譯す。

【三九】 本文に乖鈍披皮愛欲者、好色黠慧半摩沙とあり。乖鈍はねぢけておろかなる義、披皮は後の文に舊の鹿皮を著るとある故に皮を披たる者との竟なり。半摩沙は半磨灑にして四十貝なり。藏文によるに「毛皮をきたる男子端正は、半摩沙もなきに他の種族の人々と等しくせんとて、この諸花樹の滿開の時に、與へる花シリーシャは是なり」とあり。されば「半摩沙となきに」と解讀すべきなり。

頂禮すべきや不や」。世尊答へて曰はく、「汝、善男子、出家の法は應に當に我慢の心を降伏すべきなり。是義を以ての故に鄔波離に先に出家を聽せるなり。是故に汝等應に當に頂禮すべし」。爾の時賢王は佛の敎を受け已るに、我慢を摧伏して鄔波離の足を禮し、旣にして禮足し已るに地は六種に震動せりき。其の如く次第にして餘の四百九十九人を禮せり。爾の時天授は鄔波離の所に至るに便ち頂禮せざりければ、爾の時世尊は天授に告げて曰はく、「汝善男子、應に當に我慢の心を降伏すべく、應に合に鄔波離の足を禮拜すべきなり」。爾の時天授は白して言さく、「世尊、我をして鄔波離の足を禮せしめんに何の損益かある、我れ應に禮すべからじ」。爾の時天授は是語を作し已るに、第一に先づ破佛の意を起せり。時に諸苾芻は賢王等が鄔波離の足を禮せるに、地は六(種)に震動せるを見て心に猶豫を懷き、世尊に白して言さく、[三三]「何の故にか賢王が鄔波離の足を禮せるに地は六(種)に震動せる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「獨に今時に賢王禮足して地六(種)に震動せるのみには非じ、先世にも禮足せるに震動せること亦然りき。汝等諦に聽け、我當に爲に說くべし。往昔之時、婆羅痆斯大城中に王あり、名けて[三四]梵授と曰ひ、法を以て世を化して國に飢饉なく、人民熾盛にして安隱豐樂せりき。時に彼の城中に一婬女あり、名けて[三五]賢壽と曰ひ、形貌端正にして餘の丈夫と共に歡愛し、男子と共に一宿時を經る每に金錢五百を得たりき。城中に一摩納婆あり、名けて[三六]端正と曰ひ、婬女の家に往きて賢壽に語げて言はく、「我れ共に宿らんと欲す」。女言はく、「汝に五百金錢ありや不や」。端正答へて曰はく、「我が家貧にして無きなり」。其女報へて曰はく、「可しく五百銀錢[三七]迦利沙波拏を取めて將ち來るべし」。端正は財物なかりしと雖彼女を愛樂せりければ、時に種種の花菓を摘み採りて以つて彼女に贈りしに、其女は頻花菓を得て心に染著を生ぜり。時に彼の城中に一節日至りて一切の婦人は皆妙服及び諸の瓔珞を著し、各夫壻と共に本家中に於て共に歡樂を受けぬ。是時婬女は其節日に於て獨として人の來りて共に戲樂を爲すものなかりき。時に

【三三】賢王禮鄔波離足地六種震動前生因緣譚。

【三四】梵授(Brahmadatta)。

【三五】賢壽。bzaṅ-mo（ザンモウ）、「賢女」の義、Bhadrā なり。衆許摩訶帝經に跋捺囉とせり。

【三六】端正。mdjes-dgaḥ（ドゼーガ）、「美しく喜ぶ」義、Sundarananda なり。衆許摩訶帝經に孫那囉摩拏嚩迦とせり。

【三七】迦利沙波拏（kārṣāpaṇa）。律部十九、註(二の四二)五磨灑の下參照。

白し、言さく、「大德、我れ今云何がしてか憂惱を生ぜざらん、今、賢王及び五百の釋子の悉く王位國城妻子を捨て、無量無邊の珍寶衣服は今皆棄捨して出家修道せるを見たるに、我は今貪著しぬれば必ず惡道に墮せん。大德、我れ若し卑族の中に生ぜざりしならんには、佛所説の毘奈耶中に於て必ず出家して勤めて精進を加へて羅漢果を證するを得たりしならんに」。時に舍利子は鄔波離に語げて言はく、「佛の正法中には卑族及び少聞等を簡ばず、但佛の教に依りて淨戒を修持して威儀に缺くるなからんに便ち出家するを得んこと、是れ佛の正法なり。汝、出家せんを欲せんには、佛の正法毘奈耶中に於て具足戒を受けて苾芻性を成ぜよ。汝應に我と與に世尊の所に往くべし、如來は必ず定んで汝をして出家せしめたまはん」。時に鄔波離は此語を聞き已りて心に歡喜し、所有珍寶上妙の衣服は悉く皆棄捨せること涕唾を棄つるが如くなりき。時に舍利子は鄔波離と倶に佛所に往き、到り已るに世尊の雙足を頂禮せり。時に舍利子は白して言さく、「世尊、此の鄔波離は佛の正法毘奈耶中に於て、出家して具足戒を受け苾芻の性を成ずるを得るに堪へたり、世尊、慈悲もて出家を得せしめたまはんことを」。爾の時世尊告げて言はく、「善來、應に梵行を修すべし」。爾の時世尊が是語を作したまひ已るに、時に鄔波離は鬚髮自ら落ちて法服身に著せること出家し已りて七日を經たる者の如く、[三一]應器執持し淸淨戒を具して威儀圓滿せることは一百臘の苾芻の如くなりき。既にして出家し已りて却きて一面に住せるに、爾の時舍利子は即ち頌を說いて曰はく、

「世尊、彼に告げて善來と言ふに　衣は[三二]迦胝に變じて鬚髮落ち
諸根寂靜にして怡然として住し　佛力を以ての故に威儀を具へぬ」。

爾の時五百の賢王釋種は佛の正法白四羯磨に依りて既にして出家し已るに、佛所に還歸して世尊の足を禮し、是の如く次第に諸苾芻を禮して鄔波離の所に至れり。是時賢王は鄔波離の足を見、既にして見識り已るに端身に瞻視して世尊に告げて曰さく、「此の鄔波離は是れ我が給侍たりしも合に

【三一】應器。鉢(pātra)なり。色と體と量との三、皆法度に相應するの義なり。應量器ともいふ。
【三二】迦胝。僧伽胝(Saṅghāṭi)の略、袈裟衣なり。

すべし」。諸苾芻言さく、「唯然り、世尊」。爾の時父王は鄔波離〔二九〕に勅せらく、「汝、尼拘陀園に往きて、彼の釋種賢王等の五百人が爲に鬚髮を剃除せよ」と。時に賢王等は如法に頭を洗ひ、次を以て而し坐せり。時に鄔波離は賢王の髮を剃らんと欲せる時、悲涙啼泣し、數數傷歎して而し剃髮を爲しければ、賢王は見已りて鄔波離に問ふらく、「汝今何に因りてか數數啼泣するなる」。時に鄔波離は胡跪悲涙して賢王に答へて言さく、「我れ昔より來、贍部洲に於て常に賢王に事へたりしに、王今出家せんには依怙する所なし、轉惡王に事へんよりは寧ろ死して生きざらんには」。賢王、鄔波離に語げて言はく、「我れ今汝實に是れ誠心なりしを知れり、須らく悲傷すべからず、我れ今汝をして惡王に事へさらしめたれば」。時に鄔波離は心に歡喜を生じ、跪よりして起ちて卽ち王頭を剃りぬ。王頭を剃り已るに、王は使者をして一白氎を鋪かしめ、賢王は起立して普く五百釋種に告ぐらく、「汝等、諦に聽け、此の鄔波離は昔より來、我に事へたるも資財あることなければ、〔三〇〕汝等釋種、宜しく各各は上衣及び莊嚴具を脫して是一物に隨うて氎上に置くべし。何を以ての故に。我れ既にして出家せんに、所有俗衣及び諸の瓔珞は應に更に用ふべからされば鄔波離に與ふべし」。爾の時賢王は是語を作し已るに、五百釋種は所有衣服及び諸の瓔珞を皆白氎に投して鄔波離に與へぬ。時に鄔波離は次第に剃髮せりければ、如法に洗浴し卽ち僧衣を著して此よりして去れり。時に鄔波離は卽ち便ち思惟すらく、「五百釋種の尊貴なること是の如きすら尙ほ國城妻子珍寶衣服を捨てゝ剃髮出家せり、況んや我が種姓の卑族にして昔より來供事せるに、此衣服に於て而し貪著を生ぜんとは」。又復右手にて頰を拓け是念言を作さく、「我れ若し是れ卑族ならざりせば亦合に出家して阿羅漢果を得べかりしに」。爾の時佛に常法ありて日夜六時に諸の有情を觀じたまひ、阿羅漢等も亦復是の如くせりき。具壽舍利子は鄔波離の心の憂惱を知り、既にして知見し已りて鄔波離の所に詣り、到り已りて鄔波離に語げて言はく、「何の故にか頰を拓ける而し憂惱を懷ける」。時に鄔波離は舍利子に

〔二九〕鄔波離（upali）。

〔三〇〕本文に汝等釋種宜可各各脫上衣及莊嚴具、隨是一物置於氎上……とあり。

に念言すらく、「我れ若し定んで賢王が出家せんを知りたらんには、我れ應に同じく共に出家せんとは說くべからざりき。今者若し出家せざらんには是れ妄語人にして王たるを得じ。當に且らく出家して然る後に王と爲らん」。時に王淨飯は是の如きの念を作さく、「諸釋種の爲に大供養を設け、諸の衢路を淨め瓦礫を除去し[23]檀水を以て地に灑ぎ、幢幡を建立し諸の繒蓋を懸け諸の名香を燒き雜妙花を散ぜん」。時に王は諸釋種及び諸眷屬百千萬億の前後に圍繞せると與に、師子座に詣りて坐し已るに、諸釋種女は諸の窻牖より皆此の出家釋種の威儀尊貴なると及び供養の具とを看んと欲し、諸方より遠く來れるは巷陌中に於てし、悉く皆盈滿して住立し瞻仰せり。王は又諸の相師を召びて釋種を占はしむらく、「誰か出家して如法に住し、誰か如法ならざらんことを欲せる」。時に諸釋種は各父母に辭別し、自ら種種の嚴具を以て其身を莊飾し、各車輅に乘じて賢王は前に引けるに、相師は見已りて白して言さく、「承事を爲すを樂へり」と。無滅及び[24]假和合にも亦復是の如くに(占へり)。天授次いで至りしに、鵄ありて飛來し髻珠を撥ひて將れり。相師見已りて白して言さく、「此の如きの徵祥は決定して世尊の身に於て害を起し、當に地獄に墮すべけん」。次いで[25]瞿迦離・[26]褰那沓婆(此に缺財と云ふ)・[27]羯吒牟羅底沙・[28]海授等の城より出でし時、驢鳴せるあるを聞けり。相師見已りて白して言さく、「此等は皆惡口に緣りて衆僧を惱亂すれば、當に地獄に墮すべけん」。次いで鄔波難陀は象に乘じて出で來れるに四面に廻顧し珠瓔尋いで斷てり。相師見已りて記して言はく、「此は多貪に由りて當に地獄に墮すべけん」。……乃至、是の如くに五百釋種悉く皆出で來り、園苑に往くが如くして各各自ら尊豪嚴麗を現じて往いて佛所に詣れり。到り已るに世尊は念言したまはく、「彼の五百釋種に我れ善來出家を總言するを得ず。何を以ての故に。其中或は羅漢を得る者あり、得ざる者あるが故に。我れ今白四羯磨にて彼をして出家せしめん」。此念を作し已りたまうて佛、諸苾芻に告げて言はく、「此の五百釋種に汝等苾芻は應に白四羯磨を作して彼をして出家せしめて具戒を授與

【二三】檀水。旃檀(candana)・沈水(agalugandha)となり。

【二四】假和合。藏文に nam-gru (ナムヂユ)とあるも明かならず。或は阿那律・難提・拔提・金毘羅等と出家せる婆娑(Bhagu)を指せるものなるべし。律部十三、註(三の五七)參照。Bhagga(巴)は「破壞せらるゝ」又は「消散せらるゝ」の義ある故に、Bhagu を假和合と譯せるに非ざるか。衆許摩訶帝經には此名を出さず。

【二五】瞿迦離(Kokalika)。

【二六】褰那沓婆(Khaṇḍadeviyā putta)。

【二七】羯吒牟羅底沙(Kaṭamorakatissaka)。

【二八】海授。三聞達多(Samuddadatta)の譯、衆許摩訶帝經には海壽として、此一人を出して上の三人を出さず。以上の四人は提婆破僧の儻伴なり。

ふらく、「此門首に至りて幾許時をか經たる」。無滅報へて曰はく、「琴絃斷ちたる時其門外に到れり」。當爾無滅は手を以て王の褥上の白氎を撫でて當に王に報じて曰はく、「此を織りたる氎師は織りし時に當りて身に熱病を患へり。王、今何が故にか[二]此氎上に向ひて而し臥したまへる」。王は卽ち之を怪みて遂に褥を掲げ看るに、便ち底下の一褥の垢膩し多く汚れたるを見ぬ。賢釋種王は見已りて極めて怪愕を生じ、彼の織者を呼び來らしめて問うて曰はく、「汝、此氎を織りし時に當りて熱病を患ひしや不や」。答へて言さく、「實に爾りき」。賢釋種王は無滅に告げて曰はく、「童子、汝何の故にか知るを得たる」。答へて言はく、「觸れし時熱を覺えたれば、是の故に我れ知れるなり」。彼れ極めて怪を生ぜり。王は又問うて言はく、「何が故にか此に至れる」。白して言さく、「大王、淨飯に敎ありて諸釋種家の各許に一人を度せんことを勅せりければ、往いて出家せんと欲す、故に來りて辭別せんとてなり」。王言はく、「此に住りて一宿せよ、當に共に籌量せん」。無滅は彼に住まりて一宿せるに、王言はく、「童子、我れ若し汝に隨ひて出家せんに、[三]天授は當に釋種の王と爲るべければ、諸の釋種の與には極めて大患たり、可しく共に天授に相勸めて同じく共に出家すべし」。卽ち天授を喚び、彼所に來至せるに、時に王は告げて言はく、「天授、我等は今者悉く出家せんと欲せり、汝が所爲何ぞや」。聞き已りて卽ち心に念言すらく、「我れ報じて出家せずと言はんに、賢釋種王も亦出家せざらん。我れ方便を設けて應に當に彼を誨すべし」。又復念言すらく、「當時世尊は尼拘陀林中に於て幻を以て神變を示現し、諸大衆をして悉く皆信伏せしめたまへり。彼時に我れ已に此計を設くべかりき」と。念じ已るに告げて言はく、「大王、王既にして出家せんには我も亦住まらじ」。(賢釋種王は)卽ち心に念言すらく、「此は誑者たれば當に大衆をして咸悉く聞知せしむべし」と。時に王は宣勅して諸人民に告ぐらく、「我及び無滅幷に天授等の釋種五百人は同じく共に出家すれば、汝等知聞して應に當に歡喜すべし」。是時天授は此語を聞き已るに心に苦惱を生じ、卽ち心

【二】本文に此石上とあるも、明本に此氎上とあるにより、今改む。

【三】天授。提婆達多(Deva-datta)なり。

たるに、其器中には香美の飲食悉く皆充滿して香氣芬馥せりければ、心に希奇を生ずらく、「未曾有を得たり」と。無滅は孝養なりければ便ち好食を取りて却りて其母に奉じ、其使者をして母に諮り白さしめて曰はく、「唯願はくは日毎に常に此無物の飲食を送らしめられんことを」。母は其食を得て心に極怪を生じ、便ち大名を視て母卽ち告げて曰はく、「子、此食を見たりや不や」。大名報へて曰はく、「我れ今已に見たり」。母、大名に報じて(曰はく)、『我れ已に先に汝に報ぜり、「無滅には大福德あり」と。汝は今應に嫉妬を生ずべからず』。大名報へて曰はく、「母よ、今無滅に於て若しは福德あり及び福德無からんとも、我は亦出家すること能はじ」。母、大名を見て種種に勸語せるも、出家を肯んぜざりければ、無滅の處に往き、是の如きの語を作して報じて曰はく、「長子、汝今知れりや不や、王に敎令ありて釋種中に於て家別に一人づつ其をして俗を捨てしめぬ。汝今意にいかん、復家に在りとやせん、復出家するとやせん」。無滅報へて曰はく、「今者家に在らんに何の過失かあり何の利益かある、今若し出家せんには何の利益かある」。母、子に報じて曰はく、「如法に家に在らんには諸の過失なく應に人天の生を感ずべく、若し非法に家に住せんには三惡道に墮せん。若し如法に出家して聖敎を依持せんには勝涅槃を得、若し出家を具足すること能はざらんとも卽ち人天の身を得ん」。無滅は聞き已るに尋いで母に白して曰さく、「出家して過を造らんとも由ほ家に在りて精勤する功德に勝れり、願はくは母、我に放さんことを、當に自ら出家すべければ」。母、卽ち報へて言はく、「汝出家するを放さん」。無滅は先に[一八]賢釋種王と素より相親近せりければ、卽ち王所に詣りて行いて門首に至れり。時に王は樓閣上に在りて琴を撫して妓を作せるに、琴絃忽ちに斷ちて歌聲遂に錯れぬ。無滅は琴を善くせりければ、其門外に在りて琴絃斷ちたれば聲錯れし所以なるを知れり。[一九]門官、王に白さく、「無滅立ちて門首に在り、大王に見えんと欲せり」。「誰か障礙を爲さん」。尋いで命びて入り來らしめしに、[二〇]既にして相見え已るに撫拍して而し坐せり。王は無滅に問

【一八】賢釋種王。釋迦族の王となるべき拔提(Bhadrika=賢子)なり。

【一九】本文に門家とあるも明本に門官とせるにより今改む。

【二〇】本文に既相見已撫柏而坐とあり、明本には撫拘而坐とせり。柏は拍に通ずる故に撫で拍ち又は撫で抱へて坐せりとの意にあらざるか。藏文には「抱擁して後坐せしめて曰はく……」とあり。

苾芻は一仮に、世尊が一仮なるには苾芻は歩渉せり。時に淨飯王は神變を見已れるも、而し苾芻多くしく何者が是れ世尊なるかを知らざりき。……[一二]時に王は鄔陀夷を呼び……乃至、鼓を撃ち槌を鳴らして王が敎令を宣せるらく、「普く[一三]劫比羅城内に投ぜる家家の一子をして佛に隨うて出家せしめよ」と。時に斛飯王に其二子あり、一は[一四]無滅と名け、二は[一五]大名と名け、其大名は常に令して家務を檢校し、無滅は常に樓閣中に坐し綵女圍繞して歡娛受樂せり。時に其母は大名に告げて曰はく、「汝今知れりや不や、王に敎令あり、釋種中に於て家別に一人、其をして俗を捨てしめよ」。大名、母に白さく、「我れ出家せじ」。母言はく、「何が故に」。大名曰さく、「母が所愛の子は樓閣中に坐して出家せしめざるに、我をして俗を棄てしめんとすれば」。母言はく、「小子、無滅は家に在らんに大福德あり、汝今彼に於て妬を生ずべからず」。大名報じて曰さく、「母は無滅に於て愛戀心を生じて偏意もて供承すればなり、其が福德にはあらじ。母、但飮食を送ること莫れ、福德なりや不やを試むれば、母答へて云はく、「好し、汝をして現見せしめん」。其母は籠を將りて空食器を盛り、其小兒に對つて帛を以て之を覆ひ而し密に封閉し、執事女に命じて無滅に送與せしめ、復女に敎へて曰はく、『若し是れ何が物なりやと問はんに、應に卽ち報じて言ふべし、「空にして一物もなし」と』。使者は籠を執りて行けるに、時に帝釋は下方を觀見し是事を視已りて便ち是念を作さく、「無滅は往昔曾て飮食を以て[一六]烏波利瑟吒辟支佛を供養せるに、如何がしてか頓に其食を絶たれたる。我れ今應に可しく其に飮食を與ふべし」。帝釋は種種の飮食を以て其籠中の器具に悉く滿たさしめぬ。時に執事女は其食籠を持し前の封印に依ひて無滅の邊に至りしに、尋いで其女に問ふらく、「此中、何物なる」。女卽ち答へて童子に報じて曰はく、「此中物なし」。旣にして語を聞き已りて便ち是念を作さく、「其母は我を憐めり、豈に肯へて空にして使者をして我が所に來らしめんや、此籠の中、決定して此れ食なるを名けて無物と爲せるのみ」。[一七]卽ち便ち開き看て、乃し住處の種種資具を見

【一二】此間、文大に省略せらる。律部二十、三二五頁の偈以下、三三一頁の五行を挿入すべきなり。衆許摩訶帝經にては大正藏(24, 971a 14—973 c 9)を此處に省略せり。

【一三】諸釋出家なり。これ第五卷の註(五の三五)偈、釋迦出家の句に相應す。

【一四】無滅。aniruddhaの譯、阿那律尊者なり。

【一五】大名(mahānāma)。

【一六】烏波利瑟吒辟支佛(upariṣṭa)藏文に [illegible] (ランサンチェクンシェパ)「一切智獨覺」の義。而して一切智と烏波利瑟吒とを對照して其梵名を探るに upariṣṭa (上に立つ)に相應す(泉敎授の指示に依る)。衆許摩訶帝經には此名を出さず。赤沼氏固有名詞辭典(p. 711 b)參照。

【一七】本文に「便作是念其母憐我豈肯空遣使者來於我所、此籠之中決定此食名爲無物、卽便開看、乃見住處種々資具、於其器中香美飮食悉皆充滿、香氣芬馥心生希奇得未曾有…」とあり。藏文には「確に此處に何物もあらずと云ひて食を運ばせしに由り、何物かを見るならんと云ひて口を開きしに、一切苑林に食の芳香溢滿せり」とあり。

に告ぐべし、世尊は劫比羅城に往いて父子相見えんと欲したへり。汝可しく衣を著け鉢を持せよ、若し見んを樂ふ者あらんには當に共に汝去くべし」と。大目揵連は佛の語を聞き已りて諸苾芻に告ぐらく、「世尊は劫比羅城に往いて父子相見えんと欲したまへり。見んを樂ふ者あらんに、可しく衣鉢を持すべし、當に共に汝去くべし」。爾の時……乃至、世尊は諸大衆と及に　盧醯多河邊に到りたまへり。時に淨飯王は悉達太子が盧醯多河邊に到りたまひたりと聞き、王は諸臣に勅すらく、「城郭を裝飾して香水もて地に灑ぎ、種種の花を散じて諸の妙香を燒き、尼拘陀園より盧醯多河に至る其間の道路は皆悉く裝飾し、又園中に於て師子座及び諸の徒衆所坐の座を敷くべし」。城中の諸人は太子還らんとしたまへりと聞き、悉く來りて集會せり。大衆の中に於ては或は先に因緣ありて來りて赴會し、亦故に來りて「太子先に父王を禮すとやせん、是れ父王先に太子を禮すとやせん」を看んとせるあり、是の如き因ありて皆來りて赴會せり。第八日の旦に至り、諸苾芻は澡手漱口し洗浴して佛所に來詣せるに、爾の時世尊は是の如きの念を作したまはく、「我れ若し歩行して劫比羅城に入らんに、諸の釋迦種は皆是れ高心なれば、若し歩行せんを見んに必ず當に恥笑して是の如きの語を作すべけん、「此の悉達太子出家の時は無量諸天圍繞して空に騰りて去りしに、多時に苦行して甘露味を得て等正覺を成じながら今歩行して入城せんとは」と。此念を作し已りて卽ち三摩地に入りたまひ、沒して卽ち東方に現じ、虛空に上昇して高さ七多羅樹に、諸苾芻は高さ六多羅樹にして空よりして行いて劫比羅に近づき、世尊は漸下して六多羅に至りたまひしに、諸苾芻は漸下して五多羅に至り、佛漸く五多羅に至りたまひては苾芻は四多羅に至り、佛四多羅に至りたまひては苾芻は三多羅に至り、世尊が三多羅なるには苾芻は二多羅に、世尊が二多羅なるには苾芻は一多羅、世尊が一多羅なるには　苾芻は六仞に、世尊が六仞なるには苾芻は五仞に、世尊が五仞なるには苾芻は四仞に、世尊が四仞なるには苾芻は三仞に、世尊が三仞なるには苾芻は二仞に、世尊が二仞なるには

【九】盧醯多河。前註（三の一六）及び本文參照。

【一〇】尼拘陀園（nyigrodha-rāma）。衆許摩訶帝釋には備也識嚕馱林とせり。

【二】六仞。mi-drag-gi rid-tsam（ミイ チュクギ シイツアム）、「六人程の高さ」の義。仞は尋なり。

には、汝可しく答へて言ふべし、「宮內に止まらず」。若し「何處に安住するなりや」と問はんには、汝可しく答へて言ふべし、「阿蘭若處に於てなり」。若し「悉達は來るなりや不や」と問はんに、汝可しく答へて言ふべし、「來らん」。若し「幾時に當に來るべきや」と問はんに、汝可しく言ふべし、「七日外にして來るべし」と』。時に鄔陀夷は旣にして斯語を聞き、世尊の雙足を頂禮して而し白して言さく、「我れ今當に往くべし」。世尊告げて曰はく、「汝今可しく去るべし」。如來の神力加持を以て、卽日に劫比羅城の王宮門外に到れり、時に鄔陀夷は王の門外に在りて門官に告げて曰はく、『「汝可しく王に通ずべし、「門外に一釋迦苾芻あり」と。王言はく、「入るべし。苾芻。」入り已るに淨飯王は鄔陀夷を見て、卽ち識りて問うて曰はく、「汝、出家するを得たりや」。答へて言さく、「大王、我れ已に出家せり」。王言はく、「更に釋迦苾芻ありや不や」。答へて言さく、「有り」。王は復問ふらく、「悉達太子の形狀は汝と相似たりや不や」。答へて言さく、「異ること無し」。王は此語を聞くや迷悶して地に擗れければ、水を以て面に灑ぎ良久しくして醒悟せるに、又鄔陀夷に問ふらく、「悉達太子は幾時に當に來るべきや」。答へて言さく、「應に來らるべし」。王は又復問ふらく、「幾時を限らんに到來するなりや」。答へて曰さく、「却後七日にして應に來らるべし」。王卽ち諸の臣佐に勅すらく、「可しく宮閣を修理すべし、悉達は來らんと欲すれば」。鄔陀夷答へて曰さく、「大王、世尊は宮閣に住したまはず」。王又問うて曰はく、「若し來らんには何處に而し住するなりや」。鄔陀夷答へて曰さく、「阿蘭若處に住したまふなり」。王は大臣に勅すらく、「可しく園苑を修めて彼の誓多林の如くに、一種にして異なからしむべし」。彼の諸の臣佐は鄔陀夷に問ふらく、「其の誓多林の寺舍院宇は幾何あるべきや」。鄔陀夷曰はく、「大院は一十六所にして、其の諸の小なる者は總べて六十四、諸院の中に皆重閣あり」。諸臣聞き已るに卽ち巧工をして七日の中に諸の院宇を造りて、誓多林の如くに等しくして異あることなからしめぬ。爾の時世尊は具壽大目揵連に告げたまはく、「汝可しく諸苾芻

佛に奉じて白して言さく、「世尊、淨飯大王は我をして書を持して世尊に奉與せしめぬ」。爾の時世尊は書を開き讀み已りて一處に擱在したまひしに、鄔陀夷は座よりして起ちて佛に白して言さく、「世尊、劫比羅城に往きたまひうべきや不や」。世尊告げて曰はく、「我れ今當に往くべし」。鄔陀夷は前世時に於て已に善友たりければ、故に此言を發せるらく、「世尊にして若し去きたまはざらんには、我れ今强ひて世尊を將へて劫比羅に往かん」。時に世尊は此語を見已りて頌を以て答へて曰はく、「……[八]頌は餘處の如し」。鄔陀夷は此頌を聞き已るに而し報ふること能はずして是の如きの語を作さく、『世尊、我れ今淨飯王所に往いて報じて言はん、「世尊は劫比羅城に來り向はんと欲したまへり」と』。世尊は報じて曰はく、「鄔陀夷、如來の使者は應に汝の如くなるべからず」。鄔陀夷答へて曰さく、「世尊の使者とは如何」。佛告げて曰はく、「出家は是れ如來の使たり」。鄔陀夷答へて曰さく、『我れ昔に淨飯王所に於て已に誠言を作せり、「我れ今彼に往いて定んで信を將ち來らん」と』。佛告げて曰はく、「汝が誠言の如く須らく違信すべからず、汝可しく出家して然る後却還すべし」。如來は往昔に過去無量の生に菩薩行を行じたまひし時、父母・教師・鄔波駄耶及び尊者處に於て敢へて違命したまはざりしが爲に、是故に鄔陀夷は佛の教を聞くに敢へて違背せざりしなり。時に鄔陀夷は佛の教を聞き已るに、「唯然り」とて信受して（曰さく）、「我れ今出家せん」。佛は「善來、苾芻」と言へるに、而し出家を成じて梵行を具足せり。佛は復告げて曰はく、『汝可しく却還すべし、舊の如くに輙ちに王宮に入るべからず、門外に於て住まりて人をして往いて通ぜしめよ、「門外に釋迦苾芻あり」。若し命びて入れしめんには可しく卽ち隨ひ入るべし。入り已るに若し「更に餘の釋迦苾芻ありや不や」と問はれんに、可しく答へて言ふべし、「有り」。若し「悉達太子の形容服飾は汝の如くなりや不や」と問はれんに、可しく答へて言ふべし、「我が如くにして異ること無し」。若し汝をして宮內に止宿せしめんには、必ず止宿するを得され。若し「悉達太子は宮內に住せざるたりや」と問はん

【八】律部二十、毗（一七の一五）の本偈參照。

はく、「我れ今云何ぞ憂惱せざるを得んや。一切義成太子が苦行を修せる時は、我れ使をして問はしめしに彼れ消息を持して還りて我に住止の處を報ぜるも、今者使を遣はしては竟に一人も我に消息を報ずる無し」。時に鄔陀夷は尋いで王に白して曰さく、「我れ請ふらくは彼に往きて太子を看問し、其消息を知りて却り來りて王に報じまつらん」。時に淨飯王は却めて鄔陀夷に報じて曰はく、「比使を遣はして往かしめたるに、既にして子所に至るに見に教を具足して便ち住して來らざりき。汝今看んことを請はんも決定して彼に住まらん」。鄔陀夷白して言さく、「我れ決定して來らん」。時に淨飯王は親しく自ら書を作りて頌して曰はく、

「受胎せるより以來　佛樹の長成せんを希ひ
我れ親しく汝を長養しては　心熱して常に憂惱せり。
汝今增長するを得て　弟子は枝葉の如く
餘人は快樂を獲たるに　我れ今唯憂苦せんとは」。

復頌を說いて曰はく、

「汝昔萌芽に於て　小より我れ長養せるに
汝今實果を得たるも　復我が恩に報いざらんとは。
汝初め誕生せし時　廣く諸の誓願を發せり
我れ無上覺を成じて　無量の衆生を度せんと。
斯事並に證し已りぬれば　大慈悲心を起して
我及び眷屬の爲に　願はくは我が城に來らんことを」。

時に淨飯王は既にして書を作り已りて鄔陀夷に付せるに、鄔陀夷は既にして受得し已りて室羅筏城に向ひ、行くこと三日を經て誓多林給孤獨園に詣り、世尊の所に到りて雙足を頂禮し、書を以て

假使彼の盛火にして　城及び村落を燒き
一切の苗を焚かんと雖　宿を經んには還りて復生ぜんも
若し具戒の者を輕んぜんに　還りて自の善業を燒き
子孫及び財物は　一時に倶に散失せん
由し多羅樹の如し　苗を截たんには復生ぜじ
若し苾芻を輕んぜんには　久しからざること多羅の如くなり
若し身命を全ふし　及び後に利益を(得んと)欲せんには
當に須らく常に遠離すべく　是故に應に輕んずべからず
刹利の諸相を具せると　毒蛇并に小火と
苾芻の戒を具足せるとは　智者は應に輕んずべからず
若し身命を全ふし　及び後に利益を(得んと)欲せんには
當に須らく常に遠離すべく　是故に應に欺るべからず」。

爾の時憍薩羅主勝軍王等は、此頌を聞き已りて心に歡喜を生じ、即ち座より起ちて佛を禮して去りぬ。

七 佛、室羅筏城逝多林給孤獨園に在して大苾芻衆と倶なりき。爾の時憍薩國勝軍大王は、使を遣はし書を持たしめて劫比羅城に向ひ淨飯王に書を與へて曰はく、「王、應に欣慶すべし、王の太子は正覺を成ずるを得て甘露の法を獲、微妙の義を以て普く群生に施し、皆充足するを得て深く歡喜を助しぬ」と。時に淨飯王は書を得て讀み已るに情に甚だ欣悅せしも、手を以て頰を拿へ默然して住して面に憂色ありき。時に王大臣の鄔陀夷と名けたるが、王の愁惱を見て、仰いで王に白して言さく、「大王、何の故にか手を以て頰を掌へ心に憂惱を生じて默然して住したまへる」。鄔陀夷に告げて曰

【七】釋尊の歸郷敎化。以下は第五卷の偈(前註五の三五)なる父子和合に相應す。

世尊は即ち頌を說いて曰はく、

「刹利の丈夫の相を具足し　父母の名稱皆淸淨なり
小を見んとも奉敬して輕慢すること勿れ　智者は是の如きにも欺るべからず」。
「大王應に當に知るべし　小者をも蔑るべからず
後若し王位を紹がんに　必ず能く相顚害して
恐らくは後に怨嫉を懐かん　是故に應に恭敬すべし
身命を全うし　及び後に利益を得んと欲せんには
當に須らく彼意に隨ひて　奉敬すべく應に輕んずべからず
或は村或は野田に　若し小毒蛇を見んとも
其を小なりと謂ふべからず　[五]智者は輕慢するを懐めよ
其蛇は食の爲の故に　處處に而し求覓し
後に若し其便を得んに　必ず人をして損害ならしめん
若し身命を全うし　及び後に利益を(得んと)欲せんには
當に須らく彼を遠離すべし　是故に應に輕んずべからず
微火は廣きも能く焚き　[六]燒過ぎて皆能く黑くせん
彼小なるも應に蔑るべからず　智者は輕を懐くこと勿れ
小火未だ多からずと雖　薪多ければ火自ら廣まり
炎盛して一切の　城邑及び村坊を損はん
若し身命を全うし　及び後に利益を(得んと)欲せんには
當に須らく速に遠離すべく　是故に應に輕んずべからず

【五】本文に智者懐輕惱とあり。明本には智懐輕惱者とせるも今改めず。藏文には「智慧を持てるものは心にかける」とせり。

【六】本文に燒過背皆黑とあり。明本には燒過皆能黑とせる故に今改めたり。

卷の第九

釋尊の教化（承前）

爾の時、憍薩羅勝軍大王は聞けり、『喬答摩沙門は憍薩羅國に遊び、室羅筏城に到りて誓多林給孤獨園に住したまへり。彼の世尊喬答摩沙門は說いて云へり、「我は阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と』。勝軍大王は此語を聞き已るに、世尊の所に往きて佛前に在りて立ち、世尊を慰問して一面に在りて坐して（曰さく）、『我れ聞けり、世尊は阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと。人ありて「喬答摩は阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と、是の如きの說を作さんに、彼の人豈に世尊を謗れるにはあらさらんや。妄に說いて能く證せりと（云はん）とも、實得なりとやせん、正しく法說なりとやせん、復法說に隨順せりとやせん。若し彼人衆にして說いて「世尊は是の如きの阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり」と是の如く言はんに、若し復擊難して破するあらんには豈に恥辱に非ざらんや」と』。世尊告げて曰はく、『若し「我れ阿耨多羅三藐三菩提を得たり」との此語は（實）證に非じ」と說くあらんとも、我は實に阿耨多羅三藐三菩提を證得せるなれば、若し論難誹謗するあらんも成ぜざるなり。何を以ての故に、大王、我れ阿耨多羅三藐三菩提を證得したればなり』。勝軍王答へて曰さく、「喬答摩の我れ實に阿耨多羅三藐三菩提を得たりと說ける所は、我れ今信ぜじ。所以は何。喬答摩、所是の耆老外道、所謂、哺刺拏・末羯利・珊逝移・脚拘陀・昵揭爛陀等の六師すらも由ほ阿耨多羅三藐三菩提を證得せずと云へり、何に況んや喬答摩沙門の小年にして近始めて出家せるもの、如何ぞ阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。何人か肯へて信ぜん」。佛、大王に告げたまはく、「四種の小ありて並に欺るべからず。何等をか四となす、一には小剎帝利、二には小毒蛇、三には小火、四には年小の出家にして、此等は輕欺すべからず。所以は何、小出家者も阿羅漢を得て大威德なるあればなり」。爾の時

【一】勝軍大王。勝光王ともいふ、波斯匿王なり。律部十九、註（三の四一）參照。

【二】これ少年經なり、又童子譬喩經に相當す。律部十九、註（三の四二）參照。

【三】本文に喬答摩所是耆老外道所謂哺刺拏……とあり。所是の二字、明本には所事とせり。王の事ふる所の六師外道との義なり。

【四】哺刺那等。律部十九、註（一三の八―一三）參照。

なくして自ら誕まれ、獄囚に繫閉せられたるは自然に解脫し、貧乏の者は種種の財寶自然に充足せり。爾の時世尊及び諸大衆は既にして城內に入りたまひしに、是の希奇種種の異事を見たまひき。爾の時世尊は室羅筏城中より、苾芻衆と與に同じく寺所に至り座を敷いて坐したまへり。時に給孤獨長者は諸の眷屬の前後に圍遶せると幷に佛所に詣り、金瓶の盛水もて世尊の手に盥ぎまつりしに其水出でざりければ、長者は憂惱して便ち是念を作さく、「我れ今應に宿世の罪障ありて水をして出でさらしむるなるべし」。爾の時世尊は彼の長者の心の所念を知しめして、便ち卽ち告げて言はく、「汝に罪障なきなり。此の寺地は汝會て往昔に已に毘訶羅を造り、佛及び僧伽に施せり。汝今水を注がんとせるは是れ昔日の舊の施處に立てるに非ざれば、瓶水、汝が爲に出でざる所以なり。汝可しく移りて舊寺を施せるの處に立つべし」。長者は敎を受けて便ち舊處に立ちしに、其水卽ちに出でぬ。世尊は便ち五種の妙音を出して廣く爲に讃歎したまひ、(將に)呪願せんと欲したまひし時、誓多太子は心に是念を作さく、「唯願はくは世尊、先に我が名を說きたまはんことを」と。世尊は知しめし已りて誓多の心に隨ひて諸苾芻に告げたまはく、「此の誓多林給孤獨園は、佛及び四方の苾芻僧伽に施せるなり」と。是時、誓多太子は世尊が先に己が名を稱へたまへるを聞いて、卽ち大に歡喜して大信心を起し、佛の爲に寺門を造立して四寶の所成を(以てせりき)。此因緣の爲に結集の聖者は蘇呾羅の中に說いて云へり、「佛、室羅筏城逝多林給孤獨園に在しき」と。

如く、婆羅門學士の學徒に圍遶せらるゝが如く、猶し大醫の病者に圍遶せらるゝが如く、猶し大將の衆勇に圍遶せらるゝが如く、大導師の行旅に圍遶せらるゝが如く、猶し商主の衆商に圍遶せらるゝが如く、大長者の諸長者に圍遶せらるゝが如く、猶し國王の諸臣に圍遶せらるゝが如く、轉輪王の千子に圍遶せらるゝが如く、猶し明月の衆星に圍遶せらるゝが如く、猶し日輪の千光に圍遶せらるゝが如く、猶し持國天王の乾闥婆に圍遶せらるゝが如く、猶し增長天王の鳩槃茶に圍遶せらるゝが如く、猶し醜目天王の龍衆に圍遶せらるゝが如く、猶し多聞大王の藥叉衆に圍遶せらるゝが如く、淨妙王[二七]の阿蘇羅に圍遶せらるゝが如く、天帝釋の三十三天に圍遶せらるゝが如く、梵天王の梵天に圍遶せらるゝが如く、猶し大海の湛然として安靜なるが如く、猶し大雲の靉靆として垂布せるが如く、猶し象王の狂醉せるを屛息せるが如くに、諸根を調伏し威儀寂靜にして、三十二相もて而し莊嚴を爲し、八十種好もて以て自ら嚴身し、圓光一尋にして朗なること千日に踰ぎ、安步徐進したまへること寶山を移すが如く、十力・四無畏・大悲三念住[二八]の無量の功德は皆悉く圓滿したまひ、諸大聲聞及び無量百千萬億の人衆は前後に圍遶しまつりて室羅筏に詣りたまひ、城外に到り已り、城門に入らんと欲して纔に一足を擧げて彼の門閫に登りたまひしに、便ち卽ち大地は六種に震動し、動・極動、搖・極搖、震・極震して、東に湧りて西に沒し、西に湧りて東に沒し、南に湧りて北に沒し、北に湧りて南に沒し、中に湧りて邊に沒し、邊に湧りて中に沒し、世界中に於て大光明を出し、鐵圍山の間、幽冥の處も而し皆大明し、天鼓は自ら鳴り、種種の妙花は霏霏として亂行し、種種の妙香は雨の如くに而し下り、及び天の妙衣服は雨の如くに而し下り、一切の隘路は自然に寬廣に、坑坎の地は自然に平坦となり、城中の象・馬及び傍生等は皆音聲を發し、所有家具資身の物は一時に自ら鳴り、盲者は能く視、聾者は能く聽き、瘂者は語るを得、跛者は能く行き、根不具の者は皆具足するを得、醉者は自ら醒め、妻に遇へる者は自ら解け、怨讎者は結を釋き、懷胎の婦は憂

【二七】淨妙王。阿修羅王の名。律部十九、註(九の二三)參照。

【二八】大悲三念住。律部十九、註(九の二四)參照。

くなり」。時に給孤長者は室羅筏城より其中間に於て、兩驛半を計りて四事供養に置へ、時・非時の食は悉く皆充足し、吉祥門を建て一首領を立てゝ事務を總知せしめ、幡蓋及以寶幢を嚴飾し、栴檀香水もて其地に灑散して衆の名花を布き、雜寶の香爐を衢路に置けり。是事を作し已りて使者に告げて曰はく『汝今可しく往いて世尊の所に詣り、雙足を頂禮して當に我が言を陳べて世尊に問ひまつるべし、「起居輕利にして病少く惱少く安樂行したまへりや不や。唯願はくは世尊及び苾芻衆は室羅筏城に向ひたまはんことを。我れ盡形の四事供養を以てして、冀はくは闕乏なからしめまつらん」と』。使は敎を受け已りて卽ち王舍城に往き、世尊の所に詣りて雙足を頂禮し、卽ち一面に住して世尊に白して言さく『彼の給孤長者は世尊の雙足を頂禮して世尊に白しまつる、「起居輕利にして病少く惱少く安樂の行したまへりや不や。唯願はくは世尊及び苾芻衆は室羅筏城に向ひたまはんことを。我が一生を盡して四事供養しまつり、冀はくは闕乏なからしめまつらん」と』。世尊告げて曰はく、「給孤長者及び汝已身、願はくは常に安樂ならんことを」。使者は世尊に白し已るに復世尊に白して曰さく、『給孤長者は是の如きの語を作しまつる、「唯願はくは世尊及び苾芻衆は室羅筏城に向ひて來りたまはんことを、我が一生を盡して四事供養しまつれば」と』。世尊は爾の時默然して受けたまへるに、使者は世尊が默然して受けたまへるを見已りて禮を作して去りぬ。爾の時世尊は自ら調伏したまへるに由りての故に調伏に圍遶せられ、自ら寂靜したまへるが故に寂靜に圍遶せられ、自ら解脫したまへるが故に解脫に圍遶せられ、自ら安隱したまへるが故に安穩に圍遶せられ、自ら善順したまへるが故に善順に圍遶せられ、自ら應供となりたまへるが故に應供に圍遶せられ、自ら離欲したまへるが故に離欲に圍遶せられ、自ら端嚴したまへるが故に端嚴に圍遶せられ、猶し牛王の牛衆に圍遶せらるゝが如く、猶し象王の小象に圍遶せらるゝが如く、獅子王の師子に圍遶せらるゝが如く、猶し鵝王の諸鵝に圍遶せらるゝが如く、猶し妙翅鳥王の諸鳥に圍遶せらるゝが

具足戒を授けて應作事を敎へる。彼等は漸次に精勤修習し、此五種生死輪轉の動搖と一切行趣の揩滅し破壞し離散するの性を見、旣にして了知し已るに諸の煩惱を斷じて阿羅漢を證し、三門六通して八解脱を具し、我が生は已に盡き、梵行は已に立し、所作已に辨じて後有を受けじと如實に知るを得、心に障礙なきこと手もて空を揮ふが如く、刀割と香塗とに愛憎起らず、金と土とを觀ずるに等しくして異あることなく、諸の名利に於て棄捨せざるなかりければ、釋梵諸天は悉く皆供養せりき。爾の時舍利弗は給孤獨長者と與に以に、手づから繩を執り地を量りて幸に置へしに、具壽舍利子は卽ち便ち微笑せり。給孤獨長者は旣にして笑を見已りて、尋いで卽ち白して言さく、「聖者舍利子、世尊及び諸弟子は因なきには笑ひたまはず、今者微笑したまへり、何の因緣かある」。舍利子答へて曰はく、「是の如し、是の如し、長者、世尊及び諸弟子は因なきには笑はず、今笑へるは當に爾るべし。長者、繩を執りて地を量れるの時、彼の淨居天の純金の宮殿は早くも已に成就せりければ、是の因緣を以て我は今微笑せしなり」。長者は聞き已りて卽ち大に歡喜し、舍利弗に告げて(曰さく)、「若し是の如からんには更に其繩を廣くし大にして寺を造立せん」とて便ち弘願を發せるに、時に舍利弗は長者の意に隨うて闊く其繩を引りぬ。是時長者は更に廣く發願して大きく其寺を造りしに、時に淨居天の四寶宮殿も還已に成就せり。舍利弗は見已りて歡喜して復長者に告ぐらく、「彼の淨居天は汝が廣きを願ぜるに由りて、前の宮殿に過ぎて四寶もて成ぜられぬ」。此語を聞き已るに倍嚴飾を加へ、更に多く寺を造りて十六所に滿ち、其の置へたる寺外に別に六十四院を造り、悉く皆重閣なりき。旣にして造了し已るに、寺所須の家具を供へて悉く足しぬ。爾の時給孤獨長者は具壽舍利子の所に往き、到り已りて禮し訖り、一面に在りて立ちて問うて言さく、「聖者、世尊出遊したまはんに、日に幾許を行きたまふなりや」。舍利子曰はく、「轉輪王の所行の法の如くなり」。又問うて曰さく、「輪王は日に幾何を行くなりや」。報へて曰はく、「輪王は日に兩踰繕那半を行

利弗の所に詣り、到り已るに而し尊者に白して言さく、『聖者、今諸の外道は是の如きの言を作せり、「汝は我が諸の利養を斷ちぬ、唯願はくは慈を垂れて我に寺中にて傭力する所あらんを許はんことを。我等は久しく此に住せるに由りて、其國を捨離すること能はざれば」と』。舍利子は斯語を聞き已りて、便ち卽ち觀察すらく、「彼の外道等に善根ありや不や」と。旣にして觀察し已りて善根あるを知れり。復彼等を觀察すらく、「誰か能く調伏するなる」。「我れ能く調伏しえん」と觀知せりければ、長者に告げて曰はく、「然るべし、終に相違はじ」。彼の外道等は卽ち寺內に於て起首して傭力せるに、時に舍利子は二執杖を化作して諸の作人を當らしめしに、其性甚だ惡くして彼人を驅逐せり。舍利子は彼等の調伏時至れるを知りて、相去ること遠からざる樹林下に於て而ち以て經行せり。彼の外道は經行せるを見已りて、便ち是念を作さく、「此來伺候せるに今正に便宜なり」。諸人は一時に而し來りて圍遶せりければ、舍利子は見已りて觀察心を起せるらく、「彼の外道等は何の意を擬作してか而し我が所に來れる」。乃し彼等は我を害せんが爲の故に一時に來れるなるを見ぬ。此時化執杖人は卽ち來りて驅迫し杖を以て鞭撻して卽ち告げて曰はく、「汝等應に往きて造作すべし」。彼は卽ち同聲に告げて曰はく、「舍利子、願はくは我等を救ひたまはんことを」。舍利弗は執杖人に語ぐらく、「汝且らく去りて彼の止息するに任せよ」。彼の外道は便ち斯念を作して共に相謂ひて曰はく、「此舍利子は大威德あり、我等は皆害心を發せるに、此は我が所に於て而し慈心を起せり」と。是言を作し已りて便ち信心を生ぜり。舍利子は彼等の意樂と隨眠と界行の自性とを觀見し、知り已りて其根器に隨うて四聖諦法を說けるに、聞法に由りての故に彼等は皆金剛の智杵を以て、二十種の薩迦耶見の山を摧破し已りて預流果を現證せり。彼等は實諦を見已りて皆舍利子に白して言さく、「[三六]大德、唯願はくは我等に善教法中の調伏に於て出家し、具足戒を受けて苾芻性を得るを聽したまはんことを。我等は舍利子の所に於て梵行を修すべけん」。時に舍利子は彼の外道を度し、

【三六】本文に唯願聽我等於善教法中調伏出家受具足戒得苾芻性……とあり。調伏とは毘奈耶(Vinaya)卽ち律なり。

鬼即ち滅し、赤眼外道の爲に法を說けるに、便ち信心を發し座よりして起ちて雙足を頂禮し、白して言さく、「願はくは我に善法律中にて出家し具足戒を受けて苾芻の性を成じ、求めて弟子と爲りて梵行を修せんを聽しまたはんことを」。是語を作し已るに、時に舍利弗は即ち剃髮して具足戒を受けしめぬ。精勤修習せること久しからざるの間に、無學果を證し三明六通し八解脫を具し、「我が生は已に盡き、梵行已に立し、所作已に辦じて後有を受けず」と如實に知るを得、心に障礙無きこと手にて空に揮ふが如く、刀割と香塗とに愛憎起らず、金と土とを觀ずるに等しくして異あること無く、諸の名利に於て棄捨せざるなかりければ、釋梵諸天は悉く皆供養せりき。是時大衆は此驚怪を見て各各嗟仰し、舍利子處に於て皆信心を發して是の如きの語を作さく、「聖者舍利子は大論議師を破して外道を調伏せり」。大衆は一心に合掌して舍利子を瞻仰せるに、(二五)是時具壽舍利子は彼の大衆の意樂と煩惱と六界の自性とを知り、了知して法を說けるに……此は是れ證四諦なり……彼の大衆は聞き已りて、無量百千の有情は大殊勝を得て聲聞心を發せるあり、辟支佛心を發せるあり、阿耨多羅三藐三菩提心を發せるあり、三歸心を發して五戒を受けたるあり、須陀洹果を證せるあり、斯陀含を得たるあり、阿那含を證せるあり、出家するを得て一切煩惱を斷じ阿羅漢果を得たるありき。是時大衆は佛法僧所に於て深く敬心を生ぜり。時に舍利子は是法を說き已りて本處に却き歸れるに、給孤長者及び諸眷屬と一切の人民とは皆大に歡喜し禮を作して去れり。時に諸の外道は心に煩惱を生じ、各相謂ひて曰はく、「我等は舍利子を破得すること能はざりしかば、我等は須らく方便を作して彼の舍利子を殺すべし。先に須らく此寺中に入りて傭力して諸の伺候を作すべく、便處を得て即ち須らく命を斷つべし」。時に諸の外道は給孤長者の(所)に詣りて曰はく、「汝は今我が諸の勝利養を奪へるも、我れ先より久住すれば此國を捨離するに忍びざるなり。唯願はくは慈悲もて、寺中に於て我に傭力するを許さんことを」。長者報じて曰はく、「我れ舍利弗に白すを待て」。便ち即ち具壽舍

【二五】本文に是時具壽舍利子知彼大衆意樂煩惱六界自性了知說法此是證四諦……とあり。此文は爾時世尊知力十等種姓隨眠意樂、爲說四聖諦理諸證智法……(大正二四・三一・中一五)とあり、或は世尊知彼仙人種姓隨眠意樂應機說法(大正二四・三七中一二)とあるに相當する文なり。されば此是證四諦の五字は諸證智法なる四聖諦法なりとの意なるべし。

ば、汝可しく共に相資助すべし」。其梵志問うて曰はく、「幾時にか當に論ぜんとするなる」。報へて曰はく、「却後七日なり」。梵志答へて言はく、「爾る可し、若し會集せん時汝當に我に報ずべし」。諸の外道等は恐怖と煩惱とにて日毎に各更に伴侶を求覓せり。期程將に滿ちて第七日に至らんとせりければ、給孤長者は廣大の勝地に於て具壽舍利弗の爲に獅子勝妙の高座を敷設し、亦外道が爲に而し一座を敷けり。諸國の外道は皆其會に集ひ、及び室羅筏城の百千萬億の一切人民も亦其處に集へり。其中或は論議を看んが爲の者あり、其中亦善根成熟せるありて倶に來りて集會せり。爾の時具壽舍利弗は給孤長者及び諸眷屬の前後に圍遶せると與に而し來りて會に赴き、遍く大衆の、誰か調伏するに堪へたりやを觀じて卽ち便ち微笑し、威儀を整肅して尋いで論座に昇りしに、一切の大衆は一心に合掌して舍利弗を瞻仰せり。時に舍利弗は卽ち諸外道に告ぐらく、「我れ宗を立てゝ汝破するとやせん、汝宗を立てゝ我れ破するとやせん」。外道答へて曰はく、「我れ先に宗を立てん」。舍利弗は是の如きの念を作さく、「若し我にして先に宗を立てんに、佛世尊を除きては人亦難破すること能はず、況んや赤眼外道をや」。便ち是念を作して外道に報じて曰はく、「汝が宗を立つるに任さん、我れ當に隨ひ破すべし」。彼赤眼は善く方術を解せりければ、卽ち大菴沒羅樹の花を開き實を結べるを化爲せるに、具壽舍利弗は大風雨を爲りて樹を摧き根を拔きて須臾にして散滅せり。時に解術者も而し見ること能はざりき。外道は又一蓮花大池を化作せるに、具壽舍利弗は象子を化爲し池を踐みて花を折り尋いで平地に復せしめぬ。外道は七頭の龍王を化爲せるに、舍利弗は大金翅鳥を化爲し、空より飛下して龍を食して去れり。外道は〔二四〕起屍鬼を化爲して前みて舍利弗を害せしめんとせるに、舍利弗は呪を以て之を呪して鬼をして却廻して外道を損害せしめんとせりければ、外道は怖れ急りて下座し、五體を地に投じて舍利弗を禮して此の如きの言を作さく、「願はくは我が命を救ひたまはんことを、願はくは我が命を救ひたまはんことを」と。時に舍利弗は呪力を攝し已るに其

【二四】起屍鬼。召鬼呪によりて屍を起さしむる時の鬼類。律部八、註（四の七六）毘陀羅呪の下參照。

ざるを見て、卽ち王所に詣り具に上事を陳べしに、給孤長者は共對して勝を獲たり。彼外道は心に忿怒を生じ面に其相を現じて便ち是語を作さく、「我れ終に汝が志に從はじ、然り喬答摩沙門の上首弟子にして我等と共に相論議し、若し能く我に勝たんには意に隨せて寺を造れ」。長者報へて曰はく、「爾る可し。然れども我れ且に舍利子に問はん。若し許可されんには卽ち來りて汝に報ぜん」。長者は卽ち尊者舍利子の所に往き、雙足を頂禮して退いて一面に坐し、而ち卽ち白して言さく、『大德、諸の外道等は皆是語を作さく、「汝寺を作らん欲するも我は汝を制せん」と云ひ、又言はく、「喬答摩沙門の上首弟子は今現に此に在れば、我と與に論議して若し能く我に勝たんには、汝に寺を造るを聽さん」と。未だ審かならず、尊者、如何が當に擬すべきかを』。舍利子は斯語を聞き已るに、便ち卽ち此輩の外道及び室羅(筏)の人民に頗し善根ありや不やを觀察し、旣にして觀察し已りて善根あるを知れり。又復觀察すらく、「誰か善根ありて調伏するに堪へたりや不や」と。自ら心に我れ能く調伏せんを觀見せり。又復觀察すらく、「幾時にか應に來りて集會すべき。根器を觀見するに、却後七日にして可しく能く集會すべし」と。觀察を作し已りて長者に告げて曰はく、「可しく汝が意に隨うべし、却後七日にして我は當に論議すべければ」。給孤長者は歡喜踊躍して舍利子の足を頂禮し、外道所に往いて而し是言を作さく、『聖者舍利弗は是の如きの語を作せり、「却後七日にして應に當に論議すべし」と』。彼の外道衆は斯語を聞き已るに共に相謂ひて曰はく、「二種の因緣あり、何が以て二と爲す、一には舍利子は必ず應に逃走すべく、二には應に伴侶を覔むべければ、此の緣を以て七日を延期せるならくのみ」。外道は復相謂ひて曰はく、「我等も亦可しく當宗の知友を覔むべし」。彼は皆頭を分ちて本宗に達せる者を散訪せるに、乃し一梵志の名けて赤眼[三]と曰ひ善く幻化を能くせるに見えぬ。旣にして見ゆるを得已りて便ち卽ち告げて曰はく、「汝と我とは同じく道行を修せり。我等は今喬答摩沙門の上首弟子を呼びて共に論議を爲さんとす。彼れ今已に伴侶を求むれ

【三】赤眼。mig-ʼmn（ミクマル）、「赤眼」の義。

各因緣を具して白せるに、斷事人は議して曰はく、「太子、汝は自ら價を定めたれば、園は長者に屬し、太子は金を取めよ」と。太子は既にして斷ぜられ已るに默然として去れり。是時給孤長者は家に還りて諸僮僕に勅し、車象牛驢を以て筐篚を擔負し、其金を運載して誓多林に至りて用つて其地に布けるに、少しく未だ遍からさるありき。時に長者は心に自ら思惟すらく、「若し大藏を取らんに金卽ち太だ多し、小藏を開かんと欲せんに復恐らくは足らさらん」。又是念を作さく、「諸藏の中、何者か多からず少からずして而し充足するを得るなる」。爾の時太子は長者の默住して思惟せるを見て、卽ち便ち念を生ずらく、『給孤長者は心に應に退を生ぜるなるべし、「一園林が爲に豈で能く此の積集せる多金を捨てんや」と』。是念を作し已るに長者に告げて曰はく、「汝が心、應に退けるなるべし、當に却收して金を取るべし、其園は我に還せ」と。長者告げて曰さく、「太子、我が心は退かじ、然り心中に計せる所は、何の藏をか開かんと欲せんに、多からず少からずして而し充足するを得べき」となりき』。太子は此語を聞き已りて便ち是念を作さく、「世尊の威德は不可思議にして、其法亦不可思議なれば、是の故に長者は能く積聚せる無量の金寶を捨つるならん」。此念を作し已るに長者に告げて曰はく、「其地の、金未だ處に遍からざらんとも、應に收めて却き還るべし、我は世尊の爲に而し寺門を作らん」。長者報へて曰さく、「意に隨さん、可しく世尊の爲に而し寺門を作るべし」。爾の時給孤長者は世尊の爲に初めて寺を造らんと欲せしに、諸の外道衆は極めて怨恨を生じて心に熱惱を懷き、共に一處に集まりて長者の所に往き、到り已りて便ち是言を作さく、『長者、汝應に喬答摩沙門の爲に寺舍を造立すべからず、何を以ての故に、我等は先に已に分界したればなり、「彼の王舍城には可しく喬答摩が居止すべく、此の室羅筏城には而し我等住せん」と。是の故に應に寺を造るべからず』。長者報へて曰はく、「汝等は祇自の國境を分つべけんも、應に我が園を共分すべからじ、我が所造の功德は皆自心に由れば」。諸の外道等は長者の意堅くして移ら

は舍利弗こそ彼の調伏に堪ふべきを知しめしたまひければ、世尊は念じ已りて具壽舍利弗に告げて曰はく、「汝應に給孤獨長者の眷屬及び室羅筏城人を觀察すべし、應に往いて敎化して毘訶羅を造立すべし」。舍利弗は默然して佛勅を受け已るに、佛足を頂禮して長者と與に同じく行りぬ。爾の時具壽舍利子は夜分盡き明、清旦に至るに、衣鉢を執持して王舍大城に入り、次第に乞食して却きて本處に還り、飯を食し訖るに衣鉢を攝め、所有臥具は一處に襞揲して餘苾芻に付して室羅筏城に往けり。[二〇]時に給孤長者は道糧を資辦して漸(々)に室羅筏城外に至り、諸の園苑林泉の形勝にして愛樂すべき處、寺舍と作すに堪へるに遊び、「室羅筏城を去ること遠からず近からず、寂靜にして雜聲あることなく、亦大風なく復大熱ならず、亦蚊蝱虵蠍等なく、此の勝地あらんに我が世尊の爲に寺舍を造立せん」とて、給孤長者は遊行して[二一]誓多太子の園林中に至れり。其園は城を去ること遠からず近からず、晝夜に寂靜にして……乃至、諸の毒虫等あることなく寺舍と作すに堪へたれば、此園を見已るに室羅筏城に入り、本住に歸らずして便ち太子誓多宮所に往きて太子に白して言さく、「可しく我に彼の園を與へらるべし、當に世尊の爲に寺舍を造立すべければ」。太子報じて曰はく、「彼は是れ園に非ず、而し是れ苑林なり」。長者復白して曰さく、「園・苑を問ふことなく、處所を我に與へよ」。是の如く三請せるに、太子報じて曰はく、「我れ實に而し此園を捨つべからじ、縱金を布きて地に遍からしめたるを得んとも、我は終に與へじ」。長者は復白して曰さく、「汝は已に價を定めぬ、汝可しく直を取るべく、其園林は我に屬せり」。太子報へて曰はく、「是れ誰なりや、價を定めたりとは」。長者白して曰さく、「汝自ら價を定めたるなり」。因りて卽ち爭競して定まらざりければ、共に斷人所に詣れり。爾の時四天王は斯事を聞き已りて便ち是念を作さく、「今、給孤長者は世尊の爲に寺舍を造立せんとすれば、我れ當に資助すべし」。此念を作し已りて遂に卽ち各化して[二二]斷事人と爲りて法司に於て坐せり。時に誓多太子と給孤長者とは共に其處に到り、給孤長者及び太子は

【二〇】 本文に時給孤長者資辦道糧漸至室羅筏城外遊諸園苑、林泉形勝可愛樂處、堪作寺舍、去室羅筏城不遠不近寂靜無有雜聲亦無大風復不大熱亦無蚊蝱虵蠍等有此勝地爲我世尊造立寺舍とあり。

【二一】 誓多太子 (jeta)。波斯匿王の太子、祇多とも逝多とも音寫す。

【二二】 斷事人(pradeṣṭā)。法を判ずる人。

鮮好の色を受くるが如く、給孤長者も亦復是の如くにして、本座を離れずして四聖諦を證せり。所謂、苦・集・滅・道なり。給孤獨長者は以にして法を見已りて法を得、法を了知して深く法に入り、諸の疑惑を斷じて他の教を受けず、自ら能く了知して他のために引かれず、師教の中に於て心に怖畏なかりき。時に給孤獨長者は座よりして起ち、偏に一肩を露はして卽ち佛の前に於て合掌恭敬し、而し佛に白して言さく、「我れ已に法に入れり、一心に佛に歸し法及び苾芻僧伽に歸しまつる。唯願はくは我に鄔波索迦戒を授けたまはんことを。今より盡命に(至るまで)永く殺生を斷ち、心淨にして歸依しまつらん」。爾の時世尊は給孤獨長者に告げて曰はく、「汝が名字は何」。長者白して曰さく、「我名は蘇達多なり、然れども我れ資して孤獨に食を給すれば、是故に諸人は給孤獨と號せり」。佛、長者に告げて曰はく、「汝は何處の人なりや」。長者答へて曰さく、「此より北方憍薩羅國の室羅筏城外に邑ありて我は彼中に住せり、唯願はくは世尊、而し我が請を受けて室羅筏城に詣り、我が供養を受けたまはんことを、乃し盡形に至るまで苾芻僧伽と及に[一九]四事供養しまつれば」。佛、長者に告げて曰はく、「室羅筏城中に寺ありや不や」。長者答へて曰さく、「彼城には寺なし」。世尊告げて曰はく、「彼に若し寺あらんには僧伽は應に來往すべけんも、彼に旣に寺なからんには若爲がしてか安置せん」。長者答へて曰さく、「唯願はくは世尊、而し我が請を受けて室羅筏城に向ひたまはんには、我れ當に寺を造りて苾芻衆をして往來し安置して止息し思惟せしめまつるべけん」。世尊は默然して請を受けたまへり。是時長者は佛の許ひたまへるを知り已りて卽ち座より起ち、佛足を頂禮して却きて本處に還れり。彼の時長者は王舍城中の事既にして了し已りければ、佛所に還り至りて佛足を頂禮し、却きて一面に坐して佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、一苾芻を遣はして我と與に伴と爲して室羅筏城に往き、住處を造立して世尊及び苾芻僧衆を安置しまつらしめたまはんことを」。佛、是念を作したまはく、「苾芻衆中誰か能く室羅筏城人及び長者の眷屬を調伏すべき」。世尊

【一九】四事供養。衣服・飲食・臥具・湯藥の四事を以て供養するなり。

者は而し天に白して曰さく、「賢首、汝は是れ何人なりや」。彼天答へて曰はく、「我は昔是れ汝が善友にして[一六]摩頭肩と名くるなり。我は舍利弗・大目犍連に於て甚だ大に信心もて尊重禮拜せりければ、命終の後四天王宮に生れしも、衆生を護らんが爲に此の善自在城門に住するなり。是れ汝が昔の友たりければ、今故に相告ぐるなり。汝可しく前行すべし、大利益あらん、退想を生ずること勿れ」。爾の時給孤長者は心に是念を作さく、「佛とは[一七]異生に超出して餘聖に同じからず、其所說の法は深く尊重すべけん。是故に諸天は佛に見えて大歡喜を生ぜるならん」と。念じ已るに天の光明に乘じて卽ち寒林に詣れり。爾の時世尊は給孤長者の來らんを知しめしたまひしが故に、卽ち寺門を出でゝ以て經行したまへり。給孤長者は前みて佛所に至り、居士の法を以て世尊を問訊しまつるらく、「寢譆安らかなりや不や」。爾の時世尊は頌を以て答へて曰はく、

「一切の煩惱を離れ　心は諸欲に染まず
無漏の解脫を得んに　常に安樂の眠を得ん。
一切の結縛を斷じ　心は熱煩惱を息め
寂靜を心に得んものは　乃し安樂に眠るべけん」。

爾の時世尊は是頌を說きたまひ已るに、給孤長者と倶に精舍に還り座を敷いて坐したまひ、給孤長者は佛足を頂禮して退いて一面に坐せり。時に世尊は給孤長者の爲に、妙法を演說して示教利喜したまへり。佛の常法の如く、所謂、先に布施功德と持戒の功德と天の果報を受くる功德とを說き、諸欲過失と煩惱事を受くるを[一八]樂はず、出家の淸淨にして觀察殊勝なるを讚歎したまひ、功德の宗法は廣く爲に演說したまへるなり。世尊は給孤長者が心に踊躍歡喜を生じ、心に障礙無くして勝法を堪受して善く能く了知せんを知しめしければ、是時世尊は爲に勝法を說きたまへり。所謂、苦・集・滅・道にして、此四諦法を廣大に演說したまひしに、猶し垢を離れし淨衣の將つて染むるに

【一六】摩頭肩。藏文に「我は汝の舊友なる摩納婆迦蜜蘊なり」とあり。蜜蘊は madhu-skandha にして此が音略して摩頭肩とせるなり。寶許摩訶帝經には摩度婆健駄摩拏嚩迦とせり。

【一七】異生。凡夫なり。

【一八】樂はずとは呵叱の意なり。律部十四、註（一五の一一〇）參照。

孤長者は門の開門せるを見て明に隨うて出で、既にして城門を出でしに光明卽ち沒せり。是時天暗せりければ心に怖懼を生じ、身毛皆竪てるらく、「我れ今此に於て恐らくは人及び非人に而し損害せられん」と。此念を作し已るに卽ち却き廻らんと欲せり。時に此の城門所居の天神は、卽ち光明を放ちて城門外より乃し寒林に至るまで其中間に於て皆大明せりき。其神は復長者に報じて曰はく、『汝可しく前行すべし、大饒益あらん、廻想を生ずること勿れ。何を以ての故に、而し頌を說いて曰はん』。

「駿馬は百疋に滿ち
牝を馭する兩車輪
載するに種種物を以てし
如かじ、一歩を發して
是の如き等を校量せんに
假使象百頭に
復妙寶帳を載せて
如かじ、一歩を發して
十六分中の一にも。
婇媛中の最勝の
臂には衆寶釧を搖がせる
如かじ、一歩を發して
十六分中の一にも」。

紫磨金は百斤に
其數皆百ありて
而し用ひて檀施を行ぜんも
佛に向ふの功德と
十六分中の一にも
皆金を以て交絡し
而し用ひて檀施を行ぜんも
佛に向ふの功德の
復百の美女ありて
頸には妙珠瓔を絡け
是の如きを檀施を行ぜんも
佛に向ふの功德の

天、復告げて曰はく、「汝可しく前行すべし、大饒益あらん、廻想を生ずること勿れ」。時に給孤長

の座を敷くべし」。時に給孤長者は此語を聞き已りて是の如き念を作さく、「此長者の家は復女を嫁せんとするなりとやせん、當に妻を娶らんとするなりとやせん、復勝上の客を屈せんとするなりとやせん、復人を請ぜんとするなりとやせん、復國王を家内に請ぜんとて食を設けんとするなりとやせん」。是念を作し已りて復長者に向の所念の事を問へるに、長者答へて曰はく、「亦女を嫁し妻を娶り、客并及に王等を屈せんとするにもあらじ。敷設せんとする所の如きは、明日佛世尊及び僧伽の苾芻衆を請じて如法に食を設けんとてなり」。時に給孤獨長者は初めて佛の名を聞くや、遍身の毛は竪ちて心に歡喜を生じ、主長者に問うて曰はく、「是れ何をか佛と名くるなる」。主即ち答へて言はく、「喬答摩沙門釋迦子ありて、釋迦種中より正信を以ての故に鬚髪を剃除して法衣を被著し、家より非家に趣きて無上正等菩提を證得したまひたれば、之を號して佛と爲すなり」。彼れ復問うて曰はく、「何をか僧伽と名くるなる」。主復答へて言はく、「善男子あり刹利種より正信を以ての故に佛に歸して出家し、鬚髪を剃除して法衣を被著し、家より非家に趣けるを名けて僧伽と爲す。亦善男子あり婆羅門種族より、薛舍種族より、戍達羅種族よりして、信心を以ての故に鬚髪を剃除して袈裟を被著し、家より非家に趣きて出家し修道するを名けて僧伽と爲すなり。我は彼の佛及び僧伽衆を請じて、明日此家中に於て食を以て供養しまつらんとはするなり」。復長者に問ふらく、「彼佛今何處に在せりや」。答へて曰はく、「今寒林棄屍所の[一四]毘訶羅に在りて住したまへり」。給孤獨長者は又復問うて曰はく、「我れ彼佛に見え得べきや不や」。長者答へて曰はく、「汝見ゆるを得べけん、然り此に於て待たんに、若し明日世尊至りたまはゞ汝必ず見えまつるを得ん」。是時、給孤長者は念を佛に繫げて便ち卽ち昏沈せるに、忽然として驚寤せり。而も天未だ曙ならざりしに、心に明想を作して行いて[一五]善自在城門に詣れり。其國の常法として夜分初更には閉ぢずして防外の使の來るに障礙なからしめ、後夜分に於て城門亦開きて用つて防内の使に障礙あることなからしめければ、給

【一四】毘訶羅。Vihāra の音寫、住院なり。

【一五】善自在城門。Iho-ggo（ホ ゴウ）、「南門」の義なり。

座よりして起ち、偏へに右肩を袒ぎて右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言さく、「唯願はくは世尊及び諸苾芻は、明晨朝に於て我が微供を受けたまはんことを」。爾の時世尊は默然して請を受けたまへり。時に影勝王は佛の請を受けたまへるを知りて、佛足を頂禮して本宮に還り至り、諸の眷屬に勅して種種微妙の飲食を辦へ、牀座を敷設し、彼の座前に於て寶瓶に水を盛りて會中に安置せしめぬ。既にして敷設し已るに便ち使者に勅すらく、『世尊所に往きて白して言せ、「時到れり」と』。爾の時世尊は晨朝時に於て衣を著け鉢を持し、苾芻衆の前後に圍繞せると與に、王舍城に入りて王宮中に至り、手足を洗ひ已りて[八]座を敷いて坐したまへり。時に王は佛の諸苾芻と與に寂然として安坐したまへるを見て、時に影勝王は自ら手づから種種の美食を斟酌し、而し爲に供養して相續して絕えざりければ皆飽足せしめぬ。飯食已にして訖るに王は自ら水を行し、佛及び苾芻は澡漱すること已に畢るに、王は寶瓶を取りて世尊の掌に灌ぎ、而し佛に白して言さく、「我れ[九]毘婆迦蘭陀園を世尊に奉施しまつらん、唯願はしは納受したまはんことを」。時に佛世尊は即ち[一〇]呪願の頌を說いて曰はく、

「布施を爲さん所の者は　必ず其の義利を獲ん
利の爲に樂みて布施せんに　後に必ず安樂を得ん」。

爾の時世尊は此頌を說きたまひ已るに、諸苾芻と與に即ち便ち往いて羯蘭鐸迦園に詣りて其中に止住したまへり。是因緣を以て結集し尊者は經中に於て說けり、「佛、此の羯蘭鐸迦園に在しき」と。……乃至、[一一]舍利弗・目犍連は出家して阿羅漢道を得たりき。[一二]爾の時王舍城中に一長者あり、佛世尊及び苾芻衆を請じて家に於て供養せんとせり。此時に於て給孤獨長者は別に緣事ありて王舍城に至り、此長者の家に便ち即ち止宿せるに、其長者は夜の初分に於て即ち諸家眷屬を起し呼ぶらく、「[一三]賢首聖者、可しく起きて薪を取り、火を然し、水を濾し、諸の飲食を造り、掃灑し地に塗りて妙勝

【八】座を敷いてとは坐具即ち尼師檀那を敷くことなり。
【九】毘婆迦蘭陀園。毘婆は Veṇuvana(竹林)の音寫なり。
【一〇】呪願の頌。律部八、註(一の八七)參照。
【一一】舍利弗目犍連の出家因緣は出家事に出せる故にこゝには乃至して略せるなり。衆許摩訶帝經には、この乃至の語を出さず。
【一二】祇園精舍建立因緣。
【一三】賢首、聖者。nañ-rje. bshin-bzañ (ナン ジエ、シン ザン)、「家主よ、賢面よ」の義、さればこゝに聖者とあるも、尊主の義なるべし。衆許經には此等の語を出さず。

中に於て住して一毒蛇と作り、其蚰常に王所に於て方便を伺求せり。後に芳春の月に於て王は宮人及び諸婇女と與に往いて園中に詣り、左右を除去して諸の眷屬と與に歡喜受樂して便ち卽ち睡眠せるに、諸女は花を愛して皆王を捨てゝ去り、唯一女あり刀を執りて而し王を衞護せり。是時彼蚰は諸女衆の皆悉く遊散せるを見て、穴より疾く出でゝ而し王を螫さんと欲せるに、王が福力の故に[5]羯蘭鐸迦鳥は其蚰を圍遶し而し衆にて聲を發せり。彼の刀を執れる女は衆鳥の聲を聞き、復毒蚰の而し來りて王に向はんとするを見て、卽ち利刀を以て彼の蚰命を斷てり。女は怖が爲の故に便ち大呼を發せるに、時に王は睡より驚き寤めて起き、便ち女に問うて言はく、「此れ何の事をか爲せる」。女王に報じて曰さく、「毒蚰來りて王を螫さんと欲し、羯蘭鐸迦鳥は群聲もて蚰を繞りければ、我れ已にして斷ち訖りしなり」と。[6]王は此事を聞くや、便ち太子群臣に勅して王舍城の所有人民をして集めて此園苑に在らしめしに、遠近に盈滿して亂發れりとの聲を聞きければ、其王は善く國境內外を治めたりしも、諸人は聞き已りて皆大に悲泣せり。王、諸人に告ぐらく、「若し刹帝利灌頂王にして、人ありて命を救はんには、合に何の願をか酬ゆべき」。群臣、王に白さく、合に彼人に半國の賞を酬ゆべし」。王言はく、「羯蘭鐸迦鳥は而し我が命を救へり、若し是の如くならんには宜しく半國の賞を與ふべし」。大臣復王に白して曰さく、「羯蘭鐸迦鳥は而し人の類に非ざれば、縱王賞を得んとも將た何の用ふる所かあらん。其ら此の園苑は羯蘭鐸迦鳥に施與し、復終身に飲食を供給すべし」。王曰はく、「卿が言ふ所の如くせん」。時に諸の群臣は其園苑をして周遍して竹を蒔ゑしめければ、此緣を以ての故に、號して[7]羯蘭鐸迦竹園と爲すなり。爾の時世尊は摩羯陀人間に遊行し、王舍城外にて一樹下に在りて便ち其處に住したまへり。時に影勝王は佛、王舍城外に到りて一樹下に在せりと聞き、諸の眷屬と與に王舍城を出でゝ佛所に來詣し、佛足を頂禮して退いて一面に坐せり。爾の時世尊は爲に妙法を說き、示教利喜し已りて默然して住したまへり。時に影勝王は

【五】羯蘭鐸迦鳥(Kāraṇḍava)。鵲の一種。

【六】本文に王聞此事便勅太子群臣集王舍城所有人民在此園苑遠近盈滿聞亂發聲、其王善治國境內外、諸人聞已皆大悲泣とあり。衆許摩訶帝經には此に相當する文なし。

【七】羯蘭鐸迦竹園。原語はVeṇuvana-Kalandakanivāpaなり、これ栗鼠飼養處竹林の義なり。善見律(大正藏24. 711c)に毘舍離の迦蘭陀村について同樣の因緣をひいて栗鼠となせり。今kāraṇḍa をkalandaとせるは、傳寫の間に遺へられたるものならんか。但し藏律にはBya ka-lan-da-ka(シヤ コランダカ)と音寫し、「カランダカ鳥」とせり。

ひ許せるに、其二弟は種種の珍異を以て、迦攝佛の窣堵波所に於て供養を作し已り、便ち發願して言さく、『此善根に由りて、願はくは我同じく迦攝波佛應正等覺所に於て、最上の記を授けたまはんことを、「摩納婆、汝、來世人壽百歲の時に於て、當に佛と作るを得て釋迦牟尼如來應正等覺と號すべく、彼の佛法中にて而し出家するを得て殊勝の果を獲んことを」と』。兄は弟等の是願を發せるを聞き已りて、雙足を頂禮して即ち善願を發せるらく、「而し我れ惡性にして正法を信ぜざりしも、此の隨喜の善根に由りて、亦彼の釋迦牟尼佛よりして我に五百の神變を與へ、而し見に調伏して我をして出家せしめ、既にして出家し已りて便ち勝果を獲せしめたまはんことを」。汝等苾芻、異念を作すこと勿れ。彼の長兄の急性にして正法を信ぜざりし者とは是れ優樓頻螺迦攝にして其二弟の者とは即ち那提迦攝・伽耶迦攝等なりしなり。是は願力に由りての故に、五百の神變を以てして而し能く之を調伏し、其の那提迦攝・伽耶迦攝は而し調伏し易かりしなり』。

〔三〕頻毘娑羅王、太子たりし時、王舍城中に一長者あり、彼に園苑ありて花菓茂盛せりければ心に常に愛戀せりき。時に頻毘娑羅太子は外に出でゝ乃し彼園苑を見、見已るに即ち便ち愛樂の想を生じて長者に告げて曰はく、「卿、可しく我に此園苑を與ふべし」。長者は心に慳惜を生じて竟に之を與へず、此の如く三返せるも皆隨從せざりければ、太子復告げて曰はく、「汝に財を與ふれば園は可しく我に屬すべし」。彼れ太子に答へて曰はく、「乍ちに園を出づべけんとも終に與ふること能はじ」。復長者に告ぐらく、「當に我言を念ずべし、若し王位を得んに必ず定んで之を取はんを」。長者答へて曰はく、「汝、王位を得んに我れ必ず當に出くべけん」。太子曰はく、「汝可しく記憶すべし、我は是れ頻毘娑羅太子なるを」。是語を作し已りて便ち事を迴せり。乃し後の時に至り、〔四〕大蓮華王は而し年衰老して奄にして就りて命終せりければ、便ち太子を以て王を紹ぎぬ。既にして王位を得て强力もて彼の園苑を奪ひければ、彼の長者は便ち熱惱を生じ而し心病を得て怨恨して死にたるに、此園

〔三〕迦蘭鐸迦竹園由來。

〔四〕大蓮華王。衆許摩訶帝經には摩賀鉢納摩とせり。

巻の第八

(釋尊の教化)(承前)

時に諸苾芻は咸く皆疑ありて、而ち佛に白して言さく、「世尊は是れ一切智を具して能く諸疑を斷じたまへり。我等不審なり、[一]優樓頻螺は何の業を作せるによりての故に五百神變を以てして而し能く調伏したまひ、那提迦攝・伽耶迦攝は任運に調伏したまひたる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、『彼の迦攝波が所集の資糧の業は、汝等善く聽け、我れ當に爲に說くべし。……乃至、頌して曰はく、「……前の如し……」と』。佛、諸苾芻に告げたまはく、『往古昔時、此の賢劫中人壽二萬歲に佛世尊あり號して迦攝如來と曰ひ、十號具足して世に出現したまひ、波羅痆斯城の仙人墮處施鹿園中に在しき。時に彼世尊は佛事已に畢りて而し涅槃に入りたまへり。時に國王有り吉利枳と名け、諸の香木を積みて用つて焚熱しまつり、復香乳を以て火に灑ぎて滅せしめ、四の寶瓶を以て其舍利を盛り、形勝の地に於て窣堵波を起して、縱廣一踰繕那、高さ半踰繕那なりき。時に波羅痆斯城に一長者あり、其家巨富にして財寶豐僥に、多く愛用するあること薜室羅末拏天の如くなりき。而し彼の長者は同類家より女を娶りて妻と爲し、共に相娛樂して後に三子を生ぜり。長者は後の時忽ち疾病に染りしに、種種方藥も差すを得ること能はず、奄にして就りて命終せり。時に彼の子等は種種の繒綵もて其轝を裝飾し、彼[二]寒林に送り火を以て焚燒して號叫悲泣せり。喪事已にして畢るに、時に長兄の言はく、「所有財物吾れ今分たんと欲す」。時に彼の二弟は而し隨從せざりしに、其兄數數言ひして之を分たんと欲しければ、二弟報じて曰はく、「若し此の如くならんには、先に福業を修して然して後分つを聽さん」。兄言はく、「何等の業をか作さんとするなる」。弟曰はく、「迦攝佛の窣堵波處に於て而し供養を爲さん」。時に兄は不信なりければ、多時に難を致して後に始めて隨

【一】優樓頻螺迦攝調伏因緣譚。

【二】寒林(śītavana)。棄死處なる故に屍林ともいふ。

今の即ち頻毘娑羅王幷に諸眷屬是れなり。爾時彼王及び其侍從の作せる所の供養は、世尊阿羅那韓の窣堵波に供へし已なるも、此善業の緣に由りての故に、無量俱胝百千劫に於て人天中に生まれて勝妙の樂を受け、王及び眷屬は願力に由りての故に、今我が所に於て清淨眼を得たるなり。諸苾芻、當に知るべし、黑業には純黑の異熟あり、白業には純白の異熟を得、黑白の雜業には雜異熟を得るを。是故に汝等苾芻、黑黑業及び彼の雜業を捨てゝ、應に當に白白の業を勤修すべきなり』と。

は、汝等善く聽け、我れ汝が爲に彼の所作の業を說かん。若し成就せん時は因緣合會して暴流の水の如く、所作の業は決定して自らに受けて能く替る者なきなり。汝等苾芻、自らの所作の業は、外界の地・水・火・風に於て成熟せざるなり、然り自身に於て當に其報を受くべく、善惡は已に熟して必ず定んで虛しからざるなり。而し頌を說いて曰はく、

「假令百劫を經へんとも　　所作の業は亡びじ
因緣會遇はん時　　果報還りて自らに受けん」。

汝等苾芻、過去に佛ありて[三三]阿羅那鞞と號し、如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫調御士・天人師・佛・薄伽梵の(十號具足して)世に出現したまへり。佛事周く已りて無餘涅槃に入りたまひては、薪盡きて火の滅せるが如くなりき。彼土の人民は火滅し已りて後、佛の舍利を收め、清淨處に於て大窣堵波を起して而し供養を作せり。時に金輪王ありて[三四]吉利枳と名け、十八倶胝軍將の圍繞せると將に空中より過ぎ、人間に向はんと欲して窣堵波處に至れり。時に信佛の天神あり、各威力を以て王の輪寶を捉へければ、空中に於て住まりて而し去るを得ざりき。時に吉利枳王は其金輪の旣に轉ずるを得ざるを見て卽ち是念を作さく、「我が福德盡きたれば、此輪寶をして復前進せざらしめたるなり」。諸天神等は其空中に於て而し王に謂ひて曰はく、「王の福盡きたるには非らじ、然り、其下に佛舍利の窣堵波あるを以て、王の輪寶をして復去るを得ざらしめたるなり」。時に吉利枳王は此語を聞き已るに、諸の軍將十八倶胝の圍繞せると與に而し下りて其佛塔に見えしに、故ほ未だ成ぜざりしに由りて、彼の諸部衆は各相勸勉して齊しく珍寶を以て而し共に莊飾し、復種種の香花・伎樂を以て、持して以つて供養し、胡跪合掌して大衆同聲に而し發願して言はく、「願はくは我れ此の種うる所の善根を以て、當來の佛に於て法を聞いて法眼淨を得んことを」と。是言を作し已りて佛塔を頂禮せり。汝等苾芻、異念を作すこと勿れ、彼の時の轉輪王吉利枳及び餘の侍從は、

【三三】阿羅那鞞佛。rta-be-kyi lte(ツイブ チイ チエ)、「輻條の臍(中心)」なる義。衆許摩訶帝經にも阿囉曩毘とせり。

【三四】吉利枳(Kṛki)。律部十、註(三三の一二七)參照。

我に諸識あり、識は我に屬し、我は識中に在りと執するや不や」。答へて曰さく、「不なり」。「是故に當に知るべし、諸の所有色の、若しは過去・未來・現在、若しは內若しは外、若しは麁若しは細、若しは勝若しは劣、若しは近若しは遠、是の如きの諸色は我に非ず、我所に(非ず)、我に諸色あるに(非ず)、我に屬するに非ず、我は色中に在らずと如實に遍く知りて應に是の如くに見るべきなり。……乃至、受・想・行・識も亦復是の如し。大王、聲聞の弟子ありて多聞を具足せんに、五取蘊は我・我所を離れたりと觀ずるなり。是の如く觀じ已るに、諸の世間には實に取る可きなく、取る可きことなきが故に怖畏を生ぜず、怖畏なきが故に內に圓寂を證し、我が生は已に盡き、梵行已に立し、所作已に辦じて後有を受けじと知るなり」。爾の時世尊は此法を說きたまひしに、時に摩揭陀主頻毘娑羅王及び八萬の天子と無量百千萬の摩揭陀國の婆羅門居士等は、皆悉く遠塵離垢して法眼淨を得たりき。亦復法を見、法を得、極めて法に通達し、[二二]堅法を究竟して一切の希望を越え、一切の疑惑を度して他緣を假らず、大師の敎に於て餘は能く引かず、諸法中に於て無所畏を得たり。爾の時大王及び居士等は、此法を得已りて心に大に歡喜し、座よりして起ちて衣服を整へ、佛足を頂禮して右膝を地に著け、合掌して佛に向うて是言を作さく、「我れ今此微妙の法に入りて大勝利を獲たり、今日より已後乃し盡形に至るまで、佛・法・僧に歸して五戒の鄔波索迦と爲り、殺さず、盜まず、邪行せず。妄語せず。飮酒せじ」と。是語を作し已るに便ち卽ち佛及び諸苾芻を請ずらく、「願はくは來りて我が王舍城に住し、我をして一生に四事を供養せしめたまはんことを」。世尊は爾の時默然して請を受けたまへり。摩揭陀王及び諸人等は、佛世尊が默して請を受けたまへるを知り已りて、佛足を頂禮して卽ち本所に還れり。[二三]時に諸苾芻は咸く皆疑ありければ而ち佛に白して言さく、「世尊は是れ一切智を具して能く諸疑を斷じたまへり。我等不審なり、大王及び諸眷屬は、何の因業を作してか、此業力に由りて淸淨眼を得たる」。佛、諸苾芻に告げたまはく、「頻毘娑羅王が所作の業と

【二二】堅法。本文に究竟堅法越一切希望、度一切疑惑不假他緣とあり。宋許・摩訶帝經には於レ法堅固斷ニ其貪愛、除ニ去疑惑ニ正信不退とあり。卽ち堅法とは預流果を獲たるを示す。

【二三】頻毘娑羅得淸淨眼前生因緣譚。

衆は、而し此蘊を捨て、彼蘊を受くるなり」等も、皆是れ我なりとは說かざりき。然り是れ因緣なり、所謂、此あるが故に彼あり、此生ずるが故に彼生ずるなり。謂はく、無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六處を緣じ、六處は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老・死・憂・悲・苦・惱を緣ずるなり。是の如くして此大五蘊聚集あるなり。所謂、此なきが故に彼なく、此滅するが故に彼滅するなり。謂はく、無明滅して卽ち行滅し、行滅して卽ち識滅し、識滅して卽ち名色滅し、名色滅して卽ち六處滅し、六處滅して卽ち觸滅し、觸滅して卽ち受滅し、受滅して卽ち愛滅し、愛滅して卽ち取滅し、取滅して卽ち有滅し、有滅して卽ち生滅し、生滅して卽ち老・死・憂・悲・苦・惱は滅するなり。是の如くして此大五蘊聚集は滅するなり。苾芻、是の如く諸行は皆苦にして涅槃は樂たり。集に因るが故に苦生じ、因滅するが故に苦滅す。此に因りて相續流轉は斷滅す、此れ卽ち苦盡なり。云何が是れ涅槃なる。苦盡くるが故に涅槃と爲す。猶し火滅して而し淸涼を得るが如し。是故に我れ此句を說いて能く諸蘊を捨て、食苦盡くるが故に而し圓寂を得るなり。爾の時佛は摩揭陀主頻毘娑羅王に告げて曰はく、「意に於て云何、色は常なりとやせん、無常なりとやせん」。答へて曰さく、「大德、色は是れ無常なり」。又問ひたまはく、「若し無常ならんには苦なりとやせん、非苦なりとやせん」。答へて曰さく、「是れ苦なり」。又問ひたまはく、「色若し無常・苦ならんには卽ち是れ變壞なり、[二〇]若し多聞の弟子にして色は是れ我なり、我に諸色あり、色は我に屬し、我は色中に在りと執するや不や」。答へて曰さく、「不なり」。又問ひたまはく、「是の如く受・想・行・識は是れ常なりとやせん、無常なりとやせん」。答へて曰さく、「是れ無常なり」。又問ひたまはく、「……乃至、識等にして是れ無常ならんには、苦なりとやせん、非苦なりとやせん」。答へて曰さく、「是れ苦なり」。又問ひたまはく、「……識等にして無常・苦ならんには、卽ち是れ變壞なり。若し多聞の弟子にして、……乃至、識は是れ我なり、

【二〇】二十種身見なり。

能く此に於て我及以我所なしと決定するなり。受・想・行・識も亦復是の如し。若し善男子にして此色性を了して愛著せず、受けず、持せず、決定して此れ我・我所なしと知らんに、我は此人を涅槃・解脱を得たりと說くなり。受・想・行・識も亦復是の如し」。世尊は此法を說きたまひ已るに摩揭陀國の婆羅門居士等は是の如き念を作さく、[18]「若し色にして我なく、受・想・行・識も亦我なからんには、然り何等の法か而し是れ其我なる、誰か是れ有情なる、誰か復是れ命者なる、生者なる、養育者なる。人數取るに及んで趣ち意生じ、摩納と能所作及び造・觸・受・行・住等たり。此等の諸法の差別にして悉く皆我なからんには、更に何の物ありてか生ぜず、滅せず、三世有に非ざるに而し能く受を作すなる。若し人、可作及び不應作に於ける善惡の業の所有果報は、誰か當に之を受け、此蘊を捨して而し彼蘊を受けしむべき」と。爾の時世尊は此の婆羅門居士等の是の如き念を作せるを知しめして、即ち諸苾芻に告げて曰はく、「智慧なき人は多聞ならざるが故に、便ち是念を作し、我・我所に執じて、我及以我所なきを知らざるなり。何を以ての故に。苾芻、集より苦生じ、滅を證して苦を斷じ、集より行を生じ、滅を證して行滅し、彼の因緣滅して彼滅し、彼の因緣の故に能く諸の有情を生じて次第流轉す。是の如き因緣と有情の生滅とは、如來は畢竟じて無我なりと了知せるなり」と。復諸苾芻に告げて曰はく、「我れ清淨天眼を得て人間に過ぎたれば、有情の流轉生滅を觀見して、勝者・劣者・妙色・惡色・趣善惡道・所有作業は如實に我れ知れり。是の如くに有情の、身口意に惡業を造り、聖者を誹謗し、邪見に執著し、邪惡業を行じ、此因緣に由りて此より捨命して地獄に墮するを見るなり。復有情の、三善業を造り、聖者を誹らず、正信心に住して正命行を行じ、此因緣に由りて此より捨命して天上に生るゝを見るなり。[19]是の如き等の事、我れ悉く知見せるも、而も曾て「有情は是れ我なり・壽命と生養となり」とも、「人數取るに及んで趣ち意生じ并に摩納と能所作及び造・觸・受・行・住等たり」とも說かざりき。「若し人、可作及以不可作に於ける善惡等の業の所有果

【一八】本文には若色無我、受想行識亦無我者、然何等法而是其我、誰是有情、誰復是命者生者養育者、人及數取趣意生與摩納能所作及造觸受行住等、此等諸法差別悉皆無我者、更有何物、不生不滅非三世有而能作受……とあり。摩納とは外道の執する勝妙の我體をいへるものなるべし。能所作は能作所作、造觸等は能造所造、能觸所觸、能受所受、能行所行、能住所住の義を略示せるものと考へらる。即ち藏文にも「……若しは能作者、若しは所作者、若しは識者、若しは一切識者、若しは試者若しは一切識者、若しは說者、若しは受者、若しは一切受者……」とあるに由りて知らる。

【一九】本文には如是等事我悉知見而不曾說有情是我壽命與生養人及數取趣意生并摩納能所作及造觸受行住等、若人於可作及以不可作、善惡等業所有果報、而捨於此蘊受於彼蘊等、皆不說是我、然是因緣所謂此有故彼有、此生故彼生、謂無明緣行、行緣識……とあり。

勝妙の法に於て反りて顚を爲し　盲冥にして生死に常に流轉せり。
無爲最勝の句を諦觀するに　調御象師は能く妙説したまへり
眞實世を益す牟尼の教　奬導して倦くなき喬答摩よ」。

爾の時世尊は斯の伽他を以て迦攝を讃じて曰はく、

「善來、迦攝波　思惡の處あるに非ず[一七]
最勝廣の法中に　汝今已に能入せり」。

爾の時世尊は迦攝に告げて曰はく、「汝起ちて諸大衆が爲に其神變を現ぜよ」。時に迦攝は佛語を聞き已りて卽ち三摩地に入り、此心定なる故に卽ち本處より忽然として現ぜず、卽ち東方に於て虚空に上昇して行住坐臥し、火光定に入りて卽ち身內より種種の光を出だし、所謂、青・黃・赤・白及以紅色となり、其相を雙現しては身下より火を出して上に淸水を流し、身下に水を出だしては上に火光を發せり。東方旣に爾り、南・西・北方にも亦復是の如くせりき。是相を現じ已りて虚空より沒し、本處に還りて地上に而し立ち、往いて佛所に至り佛足を頂禮して是の如きの言を作さく、「世尊は是れ我が教師、我は是れ世尊の聲聞弟子なり」。世尊告げて曰はく、「是の如し、是の如し。迦攝、我は是れ汝が教師、汝は是れ我が聲聞弟子なり。迦攝、汝起ちて可しく本坐に就くべし」。爾の時優樓頻螺迦攝は佛足を頂禮して還りて本坐に至れり。爾の時摩揭陀國の婆羅門居士等は、此事を見已りて是の如きの念を作さく、「沙門喬答摩は迦攝處に在りて而し修學することあるに非じ、但是れ迦攝が世尊所に於て而し所作を學せるなり」と。爾の時世尊は摩揭陀王頻毘娑羅に告げて言はく、「色に生滅あり、大王、當に須らく色法の生滅因緣を了知すべし、受・想・行・識も亦復是の如し。大王、若し能く色法の生滅の異を了知せんに、卽ち能く色の自性を了知するなり。受・想・行・識も亦復是の如し。大王、若し善男子にして色性を知り已らんに、而し愛著せず、亦領受せず、亦復持せず、而し

【一七】本文に善來迦攝波、非有思惡處、最勝廣法中汝今已能入とあり。藏文には「汝の觀察はよく觀察せり、汝は罪に於て、思惟せず、よく開かれたる諸法に於て、主（根本）を取れり」とあり。

國主頻毘娑羅王なり……是の如く三たび答へたまひ……汝今可しく坐すべし」。是の頻毘娑羅王は佛語を聞き已るに佛足を頂禮して却きて一面に坐せり。其の摩掲陀國の婆羅門居士等は、一分は佛足を頂禮して亦一面に坐し、一分は合掌して「大沙門、病少く惱少く氣力安らかなりや不や」と問訊して亦一面に坐し、一分は合掌して而し問を致さずして亦一面に坐し、一分は遠住して默然して坐せり。時に優樓頻螺迦攝は大衆中に在りければ、摩掲陀國の婆羅門居士は此の迦攝の衆中に在るを見て、便ち疑念を發せるらく、「沙門喬答摩は迦攝の處に在りて而し修習するありとやせん、當に迦攝の沙門喬答摩の邊に向うて而し學するなりとやせん、未だ聞かざるなり」。爾の時世尊は衆の所念を知しめし、妙伽他を以て迦攝に問うて曰はく、

「迦攝汝昔に何の利を見てか　俗を捨て出家して而し火に事へたる
及び此法を持して獲たる所の益は　汝今我が爲に斯義を說け」。

時に迦攝は亦伽他を以てして佛に答へて曰さく、

「一に說言するありき、益を獲るとは　端嚴の美女と諸の妙味となりと
彼の法中に此利あるを見て　斯に因りて俗を捨てゝ火に事へぬ」。

世尊は復伽他を以て重ねて迦攝に問うて曰はく、

「端嚴の美女と諸の妙味とは　若し事火に由りて而し此を得るとならば
卽ち人天にも世間樂あらん　汝何が棄捨して顧ざりし」。

迦攝は亦伽他を以てして佛に答へて曰さく、

「爲に勝靜を覩て餘句なく　無所有所にも猶ほ住まらじ
此妙法を除きて更に過ぐるなし　情に今彼を棄てゝ顧じ。
我れ先に愚癡の意ありしに由り　持火禁戒もて解脫を望み

受けたまはんことを」と』。世尊は卽時に默然して請を受けたまへるに、使者は佛默して請を受けたまへるを知り已りて、佛足を頂禮して辭して本處に還れり。爾の時世尊は千苾芻の前後に圍遶して、並に是れ舊被髮外道にして皆阿羅漢果を證し……乃至、諸の有結を盡くして心に正しく解脫せると與に、漸漸に摩揭陀人間に遊行して[一五]善住窣堵波竹林中に至りて住したまへり。摩揭陀王は佛、此に至りたまひて千苾芻の俱に圍遶して住し、皆已に阿羅漢果を證得して諸の有漏を盡くし、應に作すべきは已に作して所作已に辦じ、諸の重擔を捨てゝ已利を逮得し、諸の有結を斷じて心に正しく解脫せりと聞けり。王は是を聞き已りて善輅に嚴駕し、無量百千の眷屬圍遶せると與に佛所に往きて禮拜供養せんと欲せるに、其王が善輅の輪轂は地に入りて前進し得ざりき。王は是念を作さく、「我に何の咎ありてか此輪轂をして復遊履せざらしめたる」。忽にして空中天の曰ぐるを聞けり、[一六]「王に過犯なし、但、王の獄中の無量人衆は、先に大王と與に同じく善業を修しぬれば、今若し放捨せんには路に前むを得べけん」。王は是語を聞くや、赦を囚禁に及ぼして並に皆放ち已れり。王は路に進みて宮門を行度せんと欲せるに、頭冠傾側せりければ便ち是念を作さく、「我れ昔より來何の業を造作してか是相を致せる」。卽ち空中の天の曰ぐるを聞けり、「大王に辜なし、然れども無量の衆生は先に大王と與に同じく勝業を修めたりしに、今皆遼遠の村坊に散住せるが爲なり。王、當に召命して可しく共に佛に見えまつるべし」と。王は遂に宣令して遣はして來り集會せしめ、旣にして集會し已るに、車輅一萬二千に嚴駕し、幷に諸の兵衆馬騎の雲屯せるもの十八萬衆、復象兵一萬五千あり、幷に無量百千萬の摩揭陀人婆羅門居士等の前後圍遶せると與に王舍城を出でゝ往いて佛所に詣り、到り已るに車より下りて五勝物を除き……所謂、傘蓋・頭冠・寶劍・寶扇・寶履となり……是物を捨て已るに佛に向うて合掌して佛足を頂禮し、世尊に白して曰さく、「大德、我は是れ摩揭陀國主頻毘娑羅王なり」。是の如く三たび白すに、佛・大王に告げたまはく、「是の如し、是の如し、汝は是れ摩揭陀

【一五】 善住窣堵波竹林。mchod-rten legs-par rab-gnas l:pn-br.n-gi tshal (チョ テン レク パル ラブ ネエ タン チヤン、ギ ツアール)、「善住塔竹林」の義。巴利律(mv. I, 22, 1)には laṭṭhivanuyyāne Supatiṭṭhe cetiye(杖林園に於ける善住塔に於て)とあり。善住は善安住せる意なり。衆許摩訶帝經には杖林塔とせり。

【一六】 特赦の意義。

し、七寶具足して……所謂、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・主藏寶・主兵寶となり……千子ありて圍繞し、端正勇健にして他軍を摧伏し、四洲界を盡くし、普く能く王化して怨敵あること無く、苦惱刀杖は悉く皆屏息して安樂に而し住せん。若し出家せんには正信心を以て家を捨てゝ非家に趣き、鬚髮を剃除して袈裟を被服し、無上覺を證して阿羅漢を成じ、世間讃詠して名稱遠くに聞えん」と。彼は輪王位を捨てゝ而し出家を求め、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。今伽耶山頂の窣堵波處に見在して千苾芻と與に前後圍繞せられ、並に是は舊被髮外道にして皆阿羅漢果を證し、諸の有漏を盡くして應に作すべきは已に作して所作已に辦じ、諸の重擔を捨てゝ己利を逮得し、諸の有結を斷じて心に正しく解脫せり』と。是語を聞き已るに頻毘娑羅王の所に往いて而ち是言を作さく、『大王、當に知るべし、我等は遊行して此の人間に至りしに、先に聞けるらく、「彼の釋迦種中に一太子を生じ……乃至、無上覺を成じたまひ、伽耶山に在りて千苾芻と與に前後に圍遶せられ、諸の有結を盡くして心に正しく解脫せり」と。唯願はくは大王、親近して彼の佛世尊に供養したまはんことを。若し此の如からんには、王の國土をして安穩豐樂ならしめん』と。王は語を聞き已りて甚だ大いに歡喜し、即ち一人に命じて佛所に往かしむらく、『我が辭曰の如くに雙足を頂禮して白して言せ、「世尊、起居輕利にして病少く惱少く安樂に住したまへりや不や」と。是言を作し已りて復稽請して曰せ、「唯願はくは世尊、諸苾芻と與に來りて我が所に就り、王舍城に住して我れ一生に四事を供養しまつるを受けたまはんことを」と』。使者は王の是の如きの語を受け已るに、伽耶山に往いて世尊の所に至り、佛足を頂禮して而し是言を作さく、『摩揭陀主頻毘娑羅は故に我を遣はし來りて、世尊に稽首しまつるらく、「起居輕利にして病少く惱少く安樂に住したまへりや不や」と』。佛言はく、「王及び汝等は咸く安樂なるを得たりや」。使者白して言さく、『王は稽請しまつらしむらく、「唯願はくは世尊、諸苾芻と與に來りて我が所に至り、王舍城に居して我れ四事もて一生に供養しまつるを

て善く方術を閑へるが太子に記を授くらく、「若し家に在らんには轉輪王位を紹ぎ、能く四方を降して法を以て世を化し、七寶具足して……所謂、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・主藏寶・主兵寶なり……千子ありて圍繞し、端正勇健にして他軍を摧伏し、四洲界を盡くして普く能く王化して怨敵あること無く、苦惱・刀杖は悉く皆屛息して安樂に而し住せん。若し出家せんには正信心を以て、家を捨てゝ非家に趣き、鬚髮を剃除して袈裟を被服し、無上覺を證して阿羅漢を成じ、世間讃詠して名稱は遠く聞えん」と』。彼の遊行人は是語を聞き已るに頻毘娑羅王の所に往詣して是言を作さく、『大王、當に知るべし、我等遊行して此人間に至りて聞けるらく、「釋迦種中に一太子を生じ、雪山の側弶伽河岸なる劫比羅仙人修道の處に近きに(在せり)……乃至、世間讃詠して名稱は遠く聞えん」と……悉く上に說けるが如し。唯願はくは大王、彼の太子を殺したまはんことを。若し除滅せんには、大王は當に國祚を得て長遠ならん』と。其王報へて曰はく、『汝等諸人、是語を作すこと莫れ。何を以ての故に、彼の釋迦太子にして若し金輪王位を得たまはんには我れ當に隨從すべく、若し正覺を成じたまはんには當に爲に執侍して親近供養すべし』。爾の時摩揭陀主頻毘娑羅は樓閣上に昇りて、〔一四〕五種の願を乞へるらく、「願はくは我が國に大教導師の、如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫調御士・天人師・佛・薄伽梵を出だしまつり、我をして彼に於て敬事し瞻仰せしめ、所說の法要は開悟するを得せしめ、法を聞くを得已り、淨戒を受持して如法に而し住せんことを」と。時に世尊は伽耶山に在して遙に大王を見たまひ、此語を聞き已りて諸苾芻に告げて曰はく、『此の頻毘娑羅は樓上に見在して五種の願を發せるらく、「……悉に上に說けるが如し……」と』。復次に摩揭陀國の大衆人民は遊行に因みての故に、先に聞けるらく、『釋迦種中に一太子を生じ、雪山の側、弶伽河岸なる劫比羅仙人住處に近きに在せり。斯を去ること遠からざるに占相師ありて善く方術を閑へるが太子に記を授けるらく、「若し家に在らんには輪王位を紹ぎ、能く四方を降して法を以て世を化

〔一四〕頻毘娑羅王五願。

まひ已りて漸々に遊行して伽耶山に至り、其山頂の窣堵波處に住し、舊被髪出家外道なりし一千苾芻と與に而し共に居止したまひき。爾の時世尊は三種の神通を以て、一千苾芻を化したまひき。(一)三神通とは所謂、神足通・記說通・教授通なり。神足通とは、如來三摩地に入りたまひ心定なるを以ての故に、卽ち木座より忽然隱沒して東方に現はれ、虛空に上昇して行住坐臥し、火光定に入りて卽ち身内より種種の光を出だし……所謂、青・黃・赤・白及以紅色となり……其相を變現しては身下に火を出して上に清水を流し、身下に水を出して上に火光を發するなり。東方既に爾り、南・西・北方も亦復是の如し。既にして相を現じ已るに彼の虛空より沒し、還本處に復りて而し現ずるなり。此は是れ世尊の神足通なり。(二)記說通とは、所謂「苾芻、應に心意識を觀察すべし、是の如きは應に善尋伺すべく、應に不善尋眠すべからず、此れ亦意に念じ、此れ亦身識に證せよ」と、此を世尊の記說通と爲すなり。教授通とは、諸苾芻に告げたまはく、「所有諸法は悉く皆熾然するなり。何が一切は熾然するなる。眼は熾然し・色は熾然し・眼識は熾然し・眼觸は熾然し、眼觸に因るが爲に內に生ずる所の受の或は苦、或は樂、或は非苦非樂も亦是れ熾然するなり。何の火を以てか熾然するなる。貪火熾然し・瞋火熾然し・癡火熾然するなり。生・老・病・死・愁歎・憂悲・苦惱も亦復是の如く火然すれば、此を皆苦と爲すなり。眼既に是の如し、耳・鼻・舌・身・意も亦復是の如し」と。此は是れ世尊の教授通なり。世尊は此法を說きたまひし時、彼の千苾芻は後有を受けざるが故に、諸の有漏より心解脫するを得て皆阿羅漢果を得たりき。爾の時世尊は摩揭陀國伽耶山頂の窣堵波處に在して千苾芻と倶なりたまひしが、先に是れ舊被髮外道にして、皆阿羅漢果を證して諸有漏を盡くし、應に作すべきは已に作して所作已に辦じ、諸の重擔を捨て、己利を逮得し、諸の有結を斷じて心に正しく解脫せり。(三)摩揭陀國の大衆人民は遊行せるに因みての故に聞けるらく、『釋迦種中に一太子を生じ、雪山の側、殑伽河岸なる劫比羅仙人住處に近きに在せり。斯を去ること遠からざるに占相師あり

【一】三神通。

【二】本文に記說通者所爲苾芻應觀察心意識、如是應善尋伺、不應不善尋伺、此亦意念、此亦證身識、此爲世尊記說通とあり。所爲の二字、明本には所謂とせり、今改めたり。藏文には「苾芻等、心は此の如し、汝が意は此の如し、識は此の如し。此を觀察すべし、此を觀察すべからず、此を意作すべし、此は意作すべからず、此を斷ずべし、此を身に現證すべしと。此が世尊の記說通なり」。

【三】頻毘娑羅王の勸請。

く是れ阿羅漢なりと謂へるに、今、本所學を棄てゝ大沙門に依りて出家修道せんや。我等も亦應に大沙門に隨うて出家學道すべし」と。是の如く念じ已りて卽ち共に合掌して佛足を頂禮すらく、「唯願はくは我に大沙門の法・律中に於て、出家して具足戒を受けて苾芻の性を成ずるを聽し、我をして大沙門の法中に於て梵行を修習せしめたまはんことを」。世尊告げて曰はく、「若し出家せんと欲すとも、汝が弟子衆は汝等を知れりや不や」。那提迦攝・伽耶迦攝は答へて言さく、『彼な皆知らざるなり』。世尊告げて曰はく、汝等が名稱は遠く聞え衆に知識せられて智慧具足せり、[10]是故に應に當に汝が弟子に告ぐべし、「若く汝者に聽さん、意の所樂に隨さんを」と』。那提迦攝等は佛の語を聞き已りて、便ち卽ち往いて本所住の處に至り、諸弟子に告ぐらく、「汝等當に知るべし、我れ大沙門喬答摩の法律中に於て、出家して具足戒を受けんと欲す、汝等が意には欲する所云何」。彼衆答へて曰さく、「我等が所學は本鄔波駄耶に依りてなり、今若し去らんには、我等大衆は悉く願はくは隨從して梵行を修習せんことを」。迦攝報じて曰はく、「汝等にして若し能く我に隨學せんには、著するの鹿皮・樹皮・錫杖・祭器は、悉く能く尼連禪河中に棄擲せんに當に意に隨うて去るべし」。諸弟子等は是語を聞き已るに所有衣服・祭器等の物は悉く尼連禪河中に棄置し、是物を擲げ已りて鄔波駄耶の所に還り、便ち是言を作さく、「悉く棄てしめたる者は今皆已に捨てぬ、應に何の事をか作すべき、唯願はくは指授したまはんことを」。爾の時那提迦攝・伽耶迦攝は、共に弟子五百人を將ゐて倶に往いて佛所に詣り、而し是言を作さく、「大沙門、我は弟子に告げしに悉く已に聽許せり、唯願はくは我を度して善法律中に於て出家し、具足戒を受けて苾芻の性を成じ、大沙門處に於て梵行を修習せしめたまはんことを」。世尊告げて曰はく、「那提迦攝・伽耶迦攝、善來、應に梵行を修すべし」。是語を作し已りたまひしに、那提迦攝等及び五百の弟子は皆出家するを得、具足戒を受けて苾芻の性を成ぜり。爾の時世尊は一千の被髮外道を度して具足戒を受け、優樓頻螺の地に於て隨意住した

【一〇】本文に是故應當告汝弟子、若聽汝者隨意所樂とあり。

に依りてなり、今若し去らんには我當に隨從して梵行を修習すべし」。迦攝報じて曰はく、「汝等若し能く我に隨學せんには、著する所の鹿皮・樹皮・錫杖・祭器は、悉く能く尼連禪河中に棄擲して當に意に隨うて去るべし」。諸弟子等は是語を聞き已りて、所有衣服・祭器等の物は悉く皆尼連禪河に棄置し、是物を擲げ已りて迦攝の所に還り、便ち是言を作さく、「悉く棄てしめん者は今皆已に捨てぬ、應に何の事をか作すべき、唯願はくは指授したまはんことを」。爾の時優樓頻螺迦攝及び五百の眷屬は往いて佛所に詣り、而ち是言を作さく、「大沙門、我れ徒衆に告げしに悉く已に聽許せり、唯願はくは我を度して、善法律中に於て出家して具足戒を受け、苾芻の性を成ぜしめたまはんことを」。

　爾の時優樓頻螺迦攝に弟二人あり、一は[八]那提迦攝と名け、二は[九]伽耶迦攝と名け、各に弟子二百五十人ありて、先に尼連禪河岸なる梵行を勤修する處に於て寂靜行を修めぬ。那提迦攝は尼連河の下流に住せしに、後に一時に於て尼連禪河中に乃し鹿皮・樹皮・錫杖・祭器等の物の並に漂沒せらるゝを見、是事を見已りて皆是念を作さく、「我等が同修の梵行者に何の災難ありてか是の如き等の物にして漂沒せらるゝぞや。是れ王に害せられたりとやせん、是れ賊に侵されたりとやせん、是れ火に燒かれたりとやせん、水に漂損せられたりとやせん。然り、我等同梵行者は應に當に彼に往きて其事を尋問すべきなり」。爾の時那提迦攝・伽耶迦攝等は、往いて優樓頻螺迦攝の修道所に詣り、到り已るに其側近に於て乃し優樓頻螺迦攝の、僧伽胝を被て鬚髮を除棄し、大沙門の所に於て一面に住して坐して妙法を聽受せるを見ぬ。見已りて優樓頻螺迦攝に向うて是の如きの言を作さく、「具壽、此出家の法は舊法に勝れりや不や」。答へて言はく、「彼に勝れり」。爾の時那提迦攝伽耶迦攝は是の如きの念を作さく、「今此の大沙門は大神力あり、必ず應に更に勝妙の上法あるべし。若し爾らざらんには、優樓頻螺迦攝の耆年宿德にして百二十を過ぎ、摩揭陀國人は尊重瞻仰し、大衆は咸

【八】那提迦攝（Nadīkāśyapa）。
【九】伽耶迦攝（Gayākāśyapa）。

が所念を知りて此二石を持り、一は浣衣に用ひ、一は服を曬らさんが爲にとなり」。迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門には是の如き神力あり、然れども我も亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修道の林中に住したまひき。時に尼連禪河渚邊に往きて經行したまひしに、水忽にして泛漲して人頭を過え沒せり。世尊は彼の水に在せしに、卽ち四邊の波止まり如來は安然として經行したまひき。迦攝は遙に此事を見て念じて云はく、「其の大沙門は是の如きの相好ありしも今水に漂はされぬ」。卽ち諸弟子と共に小船に乘じて河に入りしに、世尊が中に在して經行したまふの處のみ波水及ばざるを見たりければ、問うて言さく、「大沙門、猶ほ活くるを得たりや」。世尊答へて言はく、「迦攝、我れ今安壽せり」。迦攝曰さく、「大沙門、可しく此舡に上らるべし」。世尊は神力を以て忽然として見えずして、舡上に現れたまひき。迦攝は是事を見已りて復是念を作さく、「此の大沙門は是の如き大威神力ありと雖、然も我は亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝の心欲の所念を知しめして、便ち是言を作したまはく、「迦攝、汝は是れ阿羅漢果に非ず、亦是れ阿羅漢向ならず、亦阿羅漢道をも知らざるなり」。迦攝は是語を聞き已りて便ち是念を作さく、「大沙門喬答摩は我心の所念を知しめせり」。念じ已るに合掌して佛に向うて白して言さく、「大沙門、唯願はくは我に大沙門の法・律中に於て、出家して具足戒を受けて苾芻の性を成ずるを聽し、我をして大沙門法中に於て梵行を修習せしめたまはんことを」。世尊告げて曰はく、「若し出家せんと欲すとも、汝が弟子等は汝を知れりや不や」。迦攝答へて曰さく、「彼は皆知らざるなり」。世尊告げて言はく、『汝が名稱は遠く聞え、衆は汝が善く智慧具足せるを知れり、[七]是故に應に當に汝が弟子に告ぐべし、「汝者に聽さん、意の所樂に隨さんを」と』。迦攝は佛語を聞き已りて便ち卽ち往いて本所住の處に至り、諸弟子に告ぐらく、『汝等、當に知るべし、我れ今大沙門喬答摩の法中に於て、出家して具足戒を受けんと欲す、汝等が意には欲する所云何」。彼衆白して曰さく、「我等が所學は本鄔波馱耶

【七】本文に是故應當告汝弟子、聽汝者隨意所樂とあり。

するに久しくして其泉を見ざりしに、今日何が忽ち現ずるを得たる、此は是れ誰が爲せるなる」。佛言はく、「迦攝、我れ昨日汝が飲食を受け、此に來り坐して食を喫はんと欲して爲に須らく水を用ふべかりき。時に天帝釋は我が意を觀知して、速に此に來り指を以て地を擊ちしに流泉涌出せりければ、此の泉水ある所以なり」。此泉を號して「手擊の泉」[五]と爲す。時に迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門、是の如き神力ありて思議すべきこと難し、然れども我も亦阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修學の林中に住したまひき。時に佛世尊は晡時に泉所に出遊して諸の衣服を脫ぎ、泉に入りて沐浴して而し水を出でんと欲したまへり。其岸邊に於て一大樹あり、遏堅那[六]と名け、佛を去ること甚だ遠かりしが、爾の時世尊は手を舒べて其樹を捉へんと欲したまひしに、即ち便ち低屈せりければ佛は扶に攀ぢて出でたまへり。時に迦攝は此事を見已りて而ち是念を作さく、「其大樹は先來には屈せざりしに、今誰か低曲せる」。世尊所に詣り白して言さく、「大沙門、此の大遏堅那樹は先には低屈せざりしに、今誰か屈爲せる」。佛は……上の如くに說きたまへり。此樹を號して手攀の遏堅那樹と爲す。迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門には是の如きの神力あり、然れども我も亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修習の林中に住したまひき。佛は糞掃衣を得て而し浣濯せんと欲して念言したまはく、「何の物を用ひてか洗ふべき」。時に天帝釋は佛の所念を知りて一大石を持して泉邊に置き、白して言さく、「世尊、願はくは受用せられんことを」。爾の時如來は即ち糞掃衣を浣ひ已りて復念云を作したまはく、「何の物を用ひてか曬すべき」。時に天帝釋は佛意を觀知して餘の山中に往き、一方石を取りて佛前に置きて白して言さく、「世尊、可しく此に於て曬したまふべし」。世尊は衣を以て石の上に覆ひたまへり。時に迦攝は來りて此石を見、而ち是念を作さく、「未だ曾て此二石を覩ざりしに、今何が忽にして有るなる」。往きて世尊に問へるに佛言はく、「迦攝、我れ衣服を浣曬せんと欲して何の物をか用ひんと念ぜしに、時に天帝釋は我

【五】手擊の水。lag-rgya bre-koe-pa(ラク ピイ チエ パ)、「手を以て掘りしもの」なる義、衆許摩訶帝經には搖捉住多とせり。

【六】遏堅那。çin a-dzun-na (ajuna樹)。衆許摩訶帝經には阿顛囉樹とせり。

林中に住したまひき。時に迦攝は來りて世尊に詣じて曰さく、「大沙門、願はくは此に住せられんことを、我等は如法に資設し供給しまつらん」。世尊は默然して之を受けたまひしに、迦攝は既にして世尊が請を受けたまひしを知りて、卽ち便ち自ら手づから器具を敷辦して而し飲食を造り、世尊の所に詣りて告げて曰さく、「沙門、食飲辦へ訖れり、願はくは自ら時を知しめさんことを」。世尊は迦攝に報じて曰はく、「汝當に先に去るべし、我れ汝に隨うて卽ち來らん」。爾の時世尊は迦攝の去れる後、神通力を以て贍部樹に往いて其菓の香美鮮色なるを取得し、鉢に滿たして盛り已り、迦攝の處に來りて座に就いて坐したまへり。迦攝は後に至りて世尊を見已りて問うて言さく、「大沙門、汝は早くも此に至りしや」。答へて言はく、「已に至れり」。迦攝復問うて曰さく、「大沙門、鉢中は是れ何物なりや」。佛言はく、「汝向に我を請じ、汝が去りての後我れ已に定力にて贍部樹に往いて此菓を取り來れり、其色は香美なり、汝若し食するを須ゐんには而ち可しく之を取るべし」。迦攝曰さく、「願はくは大沙門、意に隨うて自ら食したまはんことを」。是時優樓頻螺迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門は大神力ありて是の如くに威德なり、然れども我も亦是れ阿羅漢果なり」。是時世尊は贍部樹菓……乃至、菴摩羅菓・迦畢他[三]を將り、及び倶盧[四]の自然粳米を將れること、皆上に說けるに同じ。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修習の林中に住したまひき。時に迦攝は自ら手づから食を造り了りて、卽ち往きて佛を請ぜるに、世尊は衣を著け鉢を持して座に就いて坐したまへり。迦攝は佛の坐したまへるを見已りて、卽ち佛鉢を取りて諸の妙食を置へ自ら手づから佛に奉ぜり。世尊は受け已るに別處に往いて食せんとて、彼に至りて水を須めたまへり。時に天帝釋は佛が水を須めたまへるを知りて、便ち佛所に至りて指を以て地を擊ちしに涌泉流現せり。時に彼の迦攝は後時に經行して此泉水の涌流せるを見て是念を作さく、「我れ此に住すること久しくして其泉を見ざりしに、今日何が忽にして斯水あるを得たる」。世尊の所に往いて白して言さく、「大沙門、我れ此に住

【三】迦畢他(kapitthana)。梨なり。

【四】倶盧。衆許摩訶帝經には北倶盧洲(uttarakuru)とせり。便ち倶盧は其略なり。此文は南贍部洲に贍部果、東弗婆提洲に菴摩羅果、西瞿陀尼洲にて迦畢他果を取り來れるを略抄せるなり。

時優樓頻螺迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門は是の如きの神通威德ありと雖、然も我も亦是れ阿羅漢果なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修學の林中に住したまひき。摩揭陀國人は其の【一】時會ありて、七日の中皆優樓頻螺迦攝の處に往いて大供養を興せり。時既にして將に至らんとして迦攝は念を作さく、「若し摩揭陀國人にして此に來詣して、此の大沙門の是の如きの神力を覩んには、必ず應に我を捨てゝ定んで當に彼に隨ふべければ、其の大沙門にして七日の間に於て若し此に住せざらんには、斯れ善事たり」と。時に世尊は其所念を知しめして、遂に身相を屏ひて現ぜさらしめたまひき。是時國人の供養は將に畢らんとして迦攝は大利養を獲、衆既にして散じ已るに、迦攝は復是念を作さく、「我れ七日中に【二】大所須を得たり、今若し大沙門にして此處に來らんには、我れ當に供設すべけん」。時に世尊は彼の所念を知しめして卽ち爲に身を現じたまひしに、迦攝は遙に見て卽ち是の念語を作さく、「大沙門、汝は亦還り來りしや」。佛言はく、迦攝、我れ還此に至れり」。迦攝問ふらく、「大沙門、七日より已來何が故にか而し去りたる」。佛、迦攝に答へたまはく、『汝先に豈に是の如きの念を作さゞりしならんや、「若し摩揭陀國人にして我が處に來詣して此の沙門の神力威德を見んに、人は應に我を捨てゝ定んで彼に隨ふべければ、其の大沙門にして七日の間に於て此に住せざらんには、斯れ善事たり」と。時に我は汝が念を知りたれば、七日中に於て而し此に住せざりし所以なり』。迦攝は復言さく、「既にして我が意を知りて而し去りたらんには、今何ぞ還るを得たる」。佛言はく、『汝今復是念を作したればなり、「我れ已に所須の供物を獲得せり、若し大沙門にして此處に來らんに、我れ當に供設すべけん」と。復汝が念ぜるを知りたれば、却り來りし所以なり』。迦攝言さく、「大沙門、我に實に此念ありき」。便ち佛に白して言さく、「大沙門、汝が諸の飮食は意に隨うて受用せよ」。是時迦攝は復是念を作さく、「此の大沙門は是の如きの大威神力の不可思議なるありと雖、然も我も亦是れ大阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修習の

【一】時會。mchod-sbyin-zhag bdun-pa（チョ チイン シャク ドウン パ）、「七日祭祀」の義、七日耶愼若(yajña)大會なり。

【二】大所須。大利養の義。

致せるならんか」と』。是語を作し已るに世尊は告げて曰はく、「汝が意に其火を滅せんことを欲するなりや不や」。迦攝白して曰さく、「大沙門、我れ意に此火を除滅せんことを願ひ欲めり」。是時炎熾は佛の神力を以て盡く皆滅沒せるに、優樓頻螺迦攝は復是念を作さく、「甚奇なり、世尊、能く是の如くに大神力ありと雖、然も我も亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修道の林中に住したまへり。時に四天王は其夜分に於て、身も照明せること四火山の如くして佛所に來詣し、雙足を頂禮して却いて一面に坐せり。是時優樓頻螺迦攝は其夜中に於て、星曆を觀ぜるに因みて乃し佛前に四火聚ありて光明遠く及べるを見、便ち是念を作さく、「此大沙門は我と同じく火に事ふるなり、是故に彼が邊に四火聚あるなり」。爾の時優樓頻螺迦攝は明日に至り世尊の所に詣りて白して言さく、『大沙門、我が所見の如くなりや不や。昨夜星宿を觀ぜるに因みて大沙門の前に火聚あるを見たり。見已りて念を作さく、「此の大沙門は我が如くに火に事ふるなり」と』。佛言はく、「迦攝、我れ火に事へたるには非じ、昨夜四天王來りて我が處に於て聽法せるが爲に此光明ありし所以なり、餘の火聚には非じ」。爾の時優樓頻螺迦攝は復是念を作さく、「此大沙門は然く是の如くに神通威德ありと雖、然も我も亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修習の林中に住したまひき。時に梵王帝釋は其夜分に於て、身光暉赫せること二火聚の如くして佛所に來詣し、雙足を頂禮して退いて一面に坐せり。是時優樓頻螺迦攝は夜分中に於て、星宿を觀ぜるに因みて遙に佛前に二火聚ありて光門遠くに及べるを見、便ち是念を作さく、「此の大沙門は我と同じく火に事ふるなり、是故に彼が邊に此火聚あるなり」。明に至り世尊の處に往いて白して言さく、『大沙門、我が見る如くなりや不や。昨夜星宿を觀ぜるに因みて大沙門の前に二火聚を見、即ち是念を作さく、「此の大沙門は我が如くに火に事ふるなり」と』。佛言はく、「迦攝、我は火に事へたるにはあらじ、昨夜梵王帝釋の我處に來りて聽法せるが爲に、此の光明ありし所以なり、餘の火聚には非じ」。爾の

卷の第七

（釋尊の敎化）（承前）

爾の時世尊は迦攝修道所止の林中に住したまひき。迦攝は異時に火を祭祀し已りて、其火を滅せんと欲せるも而し（滅するを）得ること能はざりき。時に迦攝は便ち是念を作さく、「大沙門の、今我に近く住すれば、將た彼力にて火は滅せざるには非ざらんや」。是念を作し已るに佛所に往詣して佛に白して言さく、『大沙門、當に知しめすべし、我れ此處に於て火を祭祀し已りて、其火を滅せんと欲せるも而し（滅するを）得ること能はざりき。是故に我は是念を作せり、「大沙門の、我に近く住すれば、將た彼力にて此の如からしむるには非ざらんや」と』。是語を作し已るに、佛、迦攝に告げたまはく、「汝今此火を滅するを得んことを欲するなりや」。迦攝白して曰さく、「大沙門、我れ意に此火を除滅するを得んことを欲するなり」。其火は即時に佛の神力を以て悉く皆除滅せるに、是時迦攝は便ち是念を作さく、「大沙門は能く是の如くに大神力ありと雖、然も我も亦是れ阿羅漢なり」。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝修道所止の林中に住したまひき。後に異時に於て迦攝所居の精舍の屋宇は、四面一時に其炎俱に熾なりければ、其火を滅せんと欲せるに而し（滅するを）得ること能はざりき。是時迦攝は其眷屬及び諸大衆と與に、同心に相勵まして其火を撲滅せんとせるも亦（滅するを）得ること能はざりき。爾の時迦攝は便ち是念を作さく、「此大沙門の、我が住處に於て（住せるに緣り）、將た彼力にて此炎を縱にせるには非ざらんや」。是念を作し已るに世尊の所に詣り佛に白して言さく、『大沙門、我が居止する所の屋宇精舍は、四面に忽然として熾炎災起せり。我及び眷屬は諸大衆と與に、心を將しくして撲滅せんとせるも而し得ること能はざりき。是故に我れ是念を生ぜり、「大沙門の、我が近くに於て住すれば、將た彼力が爲に此の如からしむるを

に住したまひき。其の摩納婆は火を祭祠し已りしに、其火を滅せんと欲せるも滅するを得ること能はざりき。時に摩納婆は迦攝の所に詣りて白して言さく、「鄔波駄耶、當に知るべし、我等は火を祭祠し已りしに、其火を滅せんと欲せるも而し（滅するを）得ること能はざりき」。爾の時迦攝は復是念を作さく、「大沙門喬答摩の、我が住處に近づけるに（緣りて）、將た彼が力にて火をして滅せざらしめたるには非らざらんや」と。是念を作し已るに、世尊所に詣りて佛に白して言さく『大沙門、願はくは知しめさんことを。我が此の摩納婆等は火を祭祠し已りしに、其火を滅せんと欲せるも而し（滅するを）得ること能はざりき。是故に我は是念を作せり、「大沙門の我が近くに於て住せるに（緣り）、將た彼が力の爲に此の如からしむるを致せるならんか」と』。是言を作し已るに世尊は告げて曰はく、「汝は其火を滅するを得んことを欲せりや不や」。迦攝白して曰さく、「大沙門、甚だ滅するを得んことを欲せり」。卽時に佛の威力を以て盡く皆滅沒せり。是時迦攝は便ち是念を作さく、「希に威德ありて大德の沙門は此の如きを能くせりと雖、然も我も亦是れ大阿羅漢なり」と。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝の修道所住の林中に住したまひき。迦攝は異時に自ら火を祠らんと欲せるも、而し著くること能はざりき。迦攝は便ち是念を作さく、「大沙門の、我に於て近住せるに（緣り）、將た彼が力にて此の如きを致せるには非ざらんや」。是念を作し已るに世尊の所に詣りて佛に白して言さく、『大沙門、當に知らしめたまふべし、我は此に於て自ら火を祭祠せんと欲せるも、然も著くること能はざりき。是故に我れ是念を作せり、「大沙門の、我に於て近住せるに（緣り）、將た彼が力の爲に此の如からしむるを致せるならんか」と』。是言を作し已るに世尊は告げて曰はく、「汝今火の著くるを得んことを欲せりや不や」。迦攝白して言さく、「大沙門、我れ著くるを得んことを欲せり」。佛の神力を以て火をして忽燃して、熾盛し炎著せしめたまひき。時に優樓頻螺迦攝は復是念を作さく、「甚奇なり、世尊、希に此の如きの大威德力ありて是の如きを能くせりと雖、然も我も亦是れ阿羅漢なり」と。

【三〇】忽燃。明本には忽然とあり、今改めず。

更に三昧に入りて種々の火光を出だし、毒龍の火を滅して龍身を損せざらん」。時に彼の毒龍は種々の火を見て心に怖畏を生じ、佛所に來詣して便ち鉢中に入り、[三九]身を蟠めて而し住せり。世尊は龍の調伏せるを知しめして定よりして起ち、鉢を擎げて去りて迦攝の所に至りたまへり。迦攝は見已りて卽ち便ち問うて曰はく、「大沙門、汝存するを得たりしや」。世尊告げて曰はく、「我れ平安なるを得たり」。迦攝問うて曰はく、「汝が鉢中に於て而し何物ありや」。世尊告げて曰はく、「此は是れ毒龍なり、汝が畏れし所の者は、我れ已に調伏して此鉢中に在けり」。迦攝は見已りて而ち是念を作さく、「沙門喬答摩は大威德ありて善く是の如きを能くせりと雖も、然も我も亦是れ阿羅漢なり」と。

爾の時世尊は優樓頻螺迦攝住處の聚落林中在しき。時に迦攝波に五百の摩納婆あり、各各火壇三所に供養祭祀せりければ、其數總べて一千五百火壇ありき。彼の五百の摩納婆は晨朝時に於て火壇に祭祠せんと欲せしに、時に火を燃やさんとせるも火並に皆著かざりき。其摩納婆等は俱に斯事を怪み、遂に迦攝の所に往いて白して言さく、「我等は今火壇に供養せんと欲して火を然やせるも、並に皆著かざりき」。迦攝は此語を聞き已りて便ち是念を作さく、「大沙門の、我が住處に近づけるに緣り、其に威力ありて火を燃やさんとするも著かざるなり」。是念を作し已るに世尊の所に詣りて是の如きの語を作さく、「沙門、當に知るべし、我が五百の摩納婆は火壇に祭祠せんと欲して火を燃やせるも、並に皆著かざりき。斯事ありしに緣りて俱に來りて我に白しければ、我は是の如くに思念せり、「大沙門の我が住處に近づけるが爲に、其に威力ありて火を燃やさんとするも著かざるなり」と』。佛、迦攝に告げて曰はく、「汝今火の著くるを得んことを欲せりや不や」。迦攝は報へて曰さく、「火の著くるを得んことを欲せり」。此語を作し已るに、事ふる所の火壇は並に皆同じく起ちて咸悉く熾盛せりき。迦攝は見已りて而し是念を作さく、「沙門喬答摩には威德ありて、善く是の如きを能くせりと雖、然も我も亦是れ阿羅漢なり」と。爾の時世尊は優樓頻螺迦攝の修道所に於ける樹林中

【三九】本文に盤身而住とあり、明本には蟠身而住とせり。盤は蟠に通ず。

むるものやある」と。時に外道あり[二七]優樓頻螺迦攝と名け、年老ゆること一百二十にして五百の弟子あり、尼連禪河邊の林中に在りて住し、苦行を修習せり。時に摩揭陀國の一切諸人は、皆恭敬を生じて尊重供養し、勝福田と爲せること阿羅漢の如くなりき。「我れ今彼に往きて爲に妙法を說かんに、衆多の人をして大勝利を獲せしめん」と、是念を作し已りて尼連禪河邊に往いて迦攝所に至りたまひしに、其の優樓頻螺迦攝は遙に世尊を見て卽ち牀座を嚴餝せりければ、佛就りて坐したまひしに、而し是語を作さく、「善來、善來、大沙門、多時に沙門の此に來るを見ざりき」とて、共に相問訊して曰さく、「大德、起居輕利なりや不や」。是語を作し已りて相對ひて坐せるに、佛、[二八]迦攝に告げたまはく、「仁は是れ尊重せんも、此火舍に於て請ふらくは一邊を覓めて寄みて一宿を停めんことを」。迦攝波曰はく、「我れ尊重するには非じ、然り、此石室には大毒龍あれば相損害せんを恐るゝのみ」。佛、迦攝に告げたまはく、「我れ此舍を請はん、龍は我を損せじ」。迦攝報じて曰はく、「大沙門、若し龍にして汝を損せざらんには、意に隨うて坐せよ」。爾の時世尊は初夜分に於て手足を洗ひ已りて便ち火室に入り、常の如くに草を敷きて結跏して坐し、正念にして動じたまはざりき。時に彼の毒龍は遙に世尊を見て、心に瞋怒を生じて便ち毒煙を吐けるに、時に佛世尊は神通力を以て口より烟を出して彼の毒烟を遮りたまへり。時に彼の毒龍は佛の烟を出したまへるを見て、瞋心猛り熾りて遍身に火を出だせり。爾の時世尊は爲に彼の毒龍を調伏せんと欲したまへるが故に、火光三昧に入りて遍身に火を出したまひければ、其石室に於て猛火熾然せり。時に迦攝波は中夜分に於て、本處より出でて其星宿を觀ぜしに、遙に石室に火焔熾然なるを見て、便ち是念を作さく、「大沙門喬答摩は顏貌端政なりしに、苦しき哉、苦しき哉、我が語を用ひざりければ、今毒龍に火燒されて灰と成らんとす」。諸弟子に告ぐらく、「汝等各各水を將つて火を滅し大沙門を救ふべし」。爾の時世尊は迦攝の意を知しめして、便ち是念を作したまはく、「彼の毒龍を調伏せんが爲の故に

【二七】 優樓頻螺迦攝（uruvilvakāśyapa）。衆許摩訶帝經に三百歲とせるは誤なるべし。

【二八】 本文に佛告迦攝仁是尊重於此火舍請覓一邊寄停一宿、迦攝波曰我非尊重然此石室有大毒龍恐相損害とあり。尊重の語は惜しむ意なり。律部十四、註（一六の三）參照。

で佛・法・僧に歸し、五學處を受けて鄔波索迦と爲り、殺さず、盜まず、邪行せず、妄語せず、飲酒せじ」と。是語を作し已るに佛を禮して退りぬ。爾の時世尊は夜既にして曉け已るに、晨朝時に於て衣を著けて多軍村に入り、是思惟を作したまはく、「此村中に於て我れ先に誰が爲に法を說くべき」。復是念を作したまはく、「是れ時なり、村主に其の二女あり、一は歡喜と名け、二は歡喜力と名けぬ。我れ先に往昔苦行を捨てんと欲せし時、此の二女人は先に乳糜と及與酥・蜜とを以て我に供養し、我れ此を食せるが故に身力强健たりき」。爾の時世尊は是念を作し已りて二女の家に往きたまひしに、彼の二女人は遙に世尊を見、佛の爲に座を敷設し已りて世尊を迎へまつり、佛足を頂禮して是の如きの言を作さく、「善來、善來、世尊、唯願はくは世尊、入りて此座に就きたまはんことを」。爾の時世尊は而し其座に就きたまひしに、時に彼の女人は佛足を頂禮して却きて一面に住せり。佛は爲に法を說いて示敎利喜したまひ、……廣く說きて、……乃至、諸法の中に於て無所畏を得たりき。爾の時二女は卽ち座より起ちて衣服を整へ、佛足を頂禮して雙膝を地に著け、合掌して佛に向ひ白して言さく、「世尊、我妙法に遇ひて大勝利を獲たり、今より以後乃し盡形に至るまで佛・法・僧に歸し鄔波斯迦と爲らん」。是語を作し已りて佛に白して言さく、「世尊、今日慈悲もて我が微供を受けたまはんことを」。爾の時世尊は默然して請を受けたまへり。時に彼の女人は佛の受けたまへるを見已りて、卽ち佛前に於て[二六]其の泥壇を作りしに、世尊は手足を洗ひ已りて如法に而し坐したまへり。時に彼の二女は種々に淸淨甘美の飲食を布設して自ら手づから行食し、頻頻將ち來りて而し供養を爲せり。世尊は食し已りて手を洗ひ食器を收めたまひ已るに、其地を掃灑して燒香散花し、佛足を頂禮して却きて一面に坐せり。爾の時世尊は便ち爲に法を說きて示敎利喜し、呪願して而し去りたまへり。將に村を出でんと欲して便ち是念を作したまはく、「此摩揭陀國に於て誰か最尊の外道及び婆羅門にして我が說法を聞きて信敬心を生じ、衆多の人をして我が法に入るを得せし

【二六】本文に「即於二佛前一作二其泥壇一世尊洗手足已如法而坐」とあり。泥壇を作るとは、藏文には調度の作法を作して……」とあり。

女を尋覓して漸次に往詣して白疊林に至りしに、便ち世尊が一樹下に坐したまひて顔貌端嚴なること……若し見ん者あらんには清淨心を發し、諸根を調伏し意に寂靜を得て最勝を成就するなり……猶し金幢の光明殊妙なるが如きを見ぬ。諸人は見已りて便ち佛所に詣り、白して言さく、「大德、頗し一女人を見たまへりや不や」。世尊報じて曰はく、「彼の女人は是れ汝が何の親なる」。諸人白して言さく、「我六十賢部は聚落外に在りて日日の中に於て諸の女樂をして倡伎を作さしめしに、此の一女人は我が所期を失して我を棄てゝ去りたれば、我は今覓め來りしなり」。告げて言はく、「諸人、意に於て云何。汝が今の所要は、女身を求むるを是れ要とやせん、自身を求むるを要とやせん」。諸人報へて曰さく、「大德、女身を求めんとも益なけん、自身を尋求するは最も第一たり」。世尊告げて曰はく、「童子、汝等來り坐せよ、我れ今汝が爲に妙法を宣說せん」。時に六十賢部は佛足を頂禮して却きて一面に坐せるに、佛は妙法を說いて示教利喜したまへり。諸佛の常法として、先に此法を說きたまふなり、所謂、布施と持戒と生天の因となり。復五欲の所有過患を說き、出家の獨山林に處して思惟觀察して諸の煩惱を斷ずるを讃歎し、廣大微妙の法を演說して開示して解せしめまひ、諸の聽くあらん者は此法を說きたまふを聞いて歡喜し、清淨にして疑惑あることなきなり。佛は觀知し已りて更に復爲に出世の法……所謂、苦・集・滅・道の四聖諦の理なり……を說きたまひしに、猶し浣衣せんに先に麁垢を除き、清淨を得已りて色則ち染め易きが如くなりき。六十賢等は初め佛說を聞きて心器清淨に、便ち能く四聖諦の法を了知して預流果を證し、法を見、法を得、極めて法に通達して堅法を究竟し、一切の希望を越へ一切の疑惑を度して他緣を假らず、大師の教に於て餘は能く引くことあらず、諸法の中に於て無所畏を得たりき。六十賢部は此法を得已りて心に大に歡喜し、坐よりして起ちて衣服を整へ、佛足を頂禮して雙膝を地に著け、合掌して佛に向ひて而し是言を作さく、「世尊、我等は此微妙の法に入りて大勝利を獲たり、今より已後乃し盡形に至るま

かん、利益せんが爲の故に」。爾の時惡魔は是念言を作さく、「此の沙門喬答摩は波羅痆斯仙人墮處、施鹿林中に住して、聲聞衆の爲に是の如くに說法して云はく、「我は一切天・人の繫縛の中に於て而し解脫を得たり。汝等苾芻も亦一切天・人の繫縛の中に於て同じく解脫を得たり。汝等は應に人間に往いて廣く利益を爲すべし。汝等は應に各別行すべし、同じく往くを用ひざれ。我も亦將に優樓頻螺聚落に詣らんとす」と。我れ今應に當に彼が爲に諸の障礙を作すべし』と爾の時惡魔は是念を作し已るに、化して摩納婆と爲りて佛所に往詣し、卽ち佛前に於て而し頌を說いて曰はく、

「汝、解脫を得ず　而し解脫の想を作せるのみ
汝、繫縛の中に在り　我を解脫すること能はざれば」。

爾の時世尊は是念言を作したまはく、「今者惡魔は我が散亂せんを願へるなり」。世尊は知しめし已るに頌を說いて答へて曰はく、

「人・天の繫縛の中に　我れ已に解脫を得たり
罪者、今當に知るべし　我れ已に汝を摧伏せるを」。

爾の時惡魔は便ち是念を作さく、「此の沙門喬答摩は能く我が心を知れり」と。是念を作し已るに便ち懊惱を生じ、內に懺悔を懷きて便ち滅し去りぬ。爾の時世尊は復諸苾芻に告げて曰はく、「我れ天・人の繫縛の中に於て而し解脫を得、汝等も亦解脫を得たり。汝等は應に餘方に往いて諸の利益を作し世間を哀愍すべし、諸の天・人に安樂を得せ（しめ）んが爲の故に。汝等は雙び行くを得ざれ。我は今亦優樓頻螺聚落に往かん」。諸苾芻等は咸く佛の教を奉じ、「唯然り」と而し去りぬ。

爾の時世尊は波羅痆斯城より優樓頻螺聚落に往かんとて、旣にして彼に到りて〔二四〕白疊林に詣り、一樹下に在りて宴坐して住したまひき。時に〔二五〕六十賢部あり、聚落外に在りて日日の中に於て諸の女樂と與に共に相嬉戲せり。一女人あり、衆の所期を失し、棄てゝ出で去れり。時に六十賢部は此

【二四】白疊林。藏文に「綿衣の森」とせり、劫貝樹(karpāsaka)の林なり。

【二五】六十賢部。drug-bcu bzaṅ-poḥi sde-tshogs(チュウ デュ デエ ザン ポ、イ ナ ツォーク)、「六十部賢の衆」の義、衆許摩訶帝經には六十賢衆とせり。

に是れ時なり、善來、苾芻、汝便ち出家して諸の梵行を修めよ」。共語を作し已りたまふに、彼の長者子等は鬚髮自ら落ちて袈裟は身に著し、苾芻の相を成じて曾て出家して七日を經たる者の如く、其悟解せる所は百歳の苾芻の如くなりき。爾の時世尊は重ねて爲に法を說きたまはく、「汝等苾芻、獨一靜處にて喧雜を遠離し、常に自心を守りて勤めて苦行を修せよ。今旣に出家せり、應に梵行を求めて彼岸に度り、自ら正智を證して佛の神通を得、生死を盡して梵行を建立し、所作を辦じて後有を受くること勿れ、斯の如くに修せんには無生果を得ん」。時に四苾芻は佛の此言を聞きて、即ち便ち悟解して阿羅漢果を證せり。時に此世間に十一阿羅漢ありて、佛は第一たりき。波羅痆斯城中に五十の豪族家あり、此の五長者子は咸く皆出家して鬚髮を剃除し、法服を被て阿羅漢果を證せりと聞き、各是言を作さく、「如來の教法は甚だ深妙たり、彼の五長者子をして各豪富を捨てゝ而し出家を爲さしめんとは。我等諸人も亦宜しく佛に詣りて而し弟子と爲らん」。共議を作し已るに咸く佛所に至り、佛足を頂禮して一面に在りて立ち、佛に白して言さく、「世尊、願はくは我等をして善法律中に於て出家して、而し苾芻と爲りて常に梵行を修するを聽したまはんことを」。佛、「善來、苾芻」と言へるに、鬚髮自ら落ちて袈裟は身に著し、曾て出家して七日を經たる者の如くなりき。佛言はく、「具壽、夫れ出家者は獨り山林に處して喧雜を遠離し、常に自心を守り勤めて苦行を修して彼岸に度り、自ら正智を證して佛の【三】神力を得、生死の際を盡くして後有を受くること勿れ。斯の如くに修せんには無生果を得ん」。時に五十苾芻は佛言を聞き已るに、心に無礙を獲て阿羅漢果を證せり。時に此世間に六十一阿羅漢ありて、佛は第一たりき。爾の時佛は波羅痆斯城仙人墮處施鹿林中に住して六十苾芻に前後に圍遶せられたまひき。爾の時世尊は諸苾芻に告げたまはく、「我れ今汝と與に一切天・人の繫縛の中に於て而し解脫を得たり、汝等各可しく諸方に隨ひ詣りて諸の衆生の爲に大利益を作すべし。且に汝等各各にして住して同行するを用ひざれ、我も亦優樓頻螺聚落に往

【三】本文に靜力とあるも前文に依りて神力と改む。

の宅に到りたまひしに、耶舍の母と妻とは中門の傍に在りて佛世尊及び共耶舍を待ち、既にして佛來りたまへるを見て、自ら其手を以て牀具を嚴飾し座を敷設し已りて世尊を坐に請ぜり。爾の時世尊は卽ち共座に就きたまひしに、時に耶舍の母及び妻は世尊の足を禮して一面に在りて坐せり。爾の時世尊は卽ち爲に法を說きて示教利喜したまひ、先に布施と持戒と人天の因とを演べ、次に修習して諸の煩惱を斷つべきを演べたまひしに……乃至、預流果を證せり。爾の時共母及び妻は既にして法を見、法を證し已るに、卽ち坐より起ちて佛の雙足を禮して白して曰さく、「世尊、我れ今日に於て此妙法を得たり、此の形壽を盡して佛・法・僧に歸し、永く五戒を持して鄔婆斯迦と作らん、〔二〇〕願はくは佛世尊、今日食時に我が供養を受けたまはんことを」。世尊は默然して許ひたまひしに、時に耶舍の母は佛許ひたまへるを見已りて、卽ち家中に於て諸の淸淨上妙の飲食を辦へ、世尊の前に於て一香壇を餝り、諸の香味を奉りて以て供養せり。世尊は食し已りたまふに、洒掃し淸淨にして重ねて香花を以て周匝して供養し、一面に在りて坐せり。〔二一〕如來は爾の時重ねて爲に法を說きたまひて、卽ち便ち而し去りたまへり。時に波羅痆斯城の諸長者等は、第一長者子耶舍が鬚髮を剃除して法服を被、佛世尊に隨つて弟子と作れりと聞きて、其第二長者子の名けて〔二三〕富樓那と曰ひ、共第三長者子の名けて無垢と曰ひ、第四長者子の名けて驕梵拔提と曰ひ、第五長者子の名けて妙肩と曰へるが、耶舍の出家せるを聞きて咸是念を作さく、「今耶舍童子は貴家に生れて富有珍寶に、身儀端嚴にして恒に快樂を受けたるに、其好める所を捨てゝ佛弟子と爲れり、將つて知んぬ、如來は甚大威德にして法亦微妙なるを。我等應に當に鬚髮を剃除し、如來に侍養して勝法を學受すべし」と。是議を作し已るに卽ち共に心を同じくして、波羅痆斯城より世尊の所に至り、世尊の足を禮して一面に在りて立ち、佛に白して言さく、「世尊、願はくは妙法を與へたまはんことを、我等は出家して佛弟子と爲り、如來の敎に依りて梵行を奉侍しまつらんとす」。佛、諸の長者子に告げて曰はく、「今正

【二〇】本文に願佛世尊今日食時受我供養……とあり。こゝに今日食時とせるは不審なり。或は耶舍の父の供養と同時に母及び妻の名により供養する意なるか。藏文には「世尊、此處に於て摶食の作法を作したまはんことを」とあるのみ。

【二一】衆許摩訶帝經に「食時已至」とせるは適當なり。

【二二】衆許摩訶帝經には、此處に耶舍出家の前生因緣を出せり。

【二三】富樓那等。律部十四、註(一五の一一四―一一七)參照。衆許摩訶帝經には布嚕拏、尾摩羅、誐嚩鉢帝、蘇摩鉢とせり。

彼の長者をして衆中に入ると雖其子を見るをえざらしめたまへり。時に彼長者は既にして佛所に至り、佛足を頂禮して世尊に白して言さく、「我が耶舍を見たまへりや不や」。佛言はく、「長者、汝宜しく且らく坐すべし、此處に於て子と相見ゆるを容さん」。時に彼長者は佛語を聞き已るに、歡喜心を起して未曾有なるを得、佛の雙足を禮して一面に在りて坐せり。爾の時世尊は爲に妙法を說きて示敎利喜したまへり。諸佛の常法として、凡そ演說する所は先に布施と持戒と生天の因とを開き、復五欲の所有過患を說き、彼の出家して獨り山林に處し……を讃じたまふなり。……乃至、彼長者をして預流果を得せしめたまひ、其子耶舍は猶ほ俗時の種種珍寶莊嚴の具を著せるも阿羅漢果を得たりき。爾の時世尊は卽ち神力を攝して而し頌を說いて曰はく、

「調伏寂靜にして淨戒を持し　常に妙法を以て自ら莊嚴し
諸の含識に於て害心無し　是を沙門苾芻の行と謂ふ」。

是時中に於て世間に七阿羅漢有りて佛は第一たりき。爾の時長者は忽ち其子が佛前に在りて坐せるを見、見已りて告げて曰はく、「童子、汝來れ、汝と共に家に歸らん、汝が母は相憶して悲傷啼泣せり」。爾の時世尊は長者に告げて曰はく、「意に於て云何、頗し已に無學智見を得て四諦法を證せんに、彼の人、家に還りて吐食を餐ふありや不や」。長者答へて曰さく、「不なり。大德」。佛言はく、「長者、汝は今已に有學智見を得て四諦法を證せりや不や」。答へて曰さく、「已に得たり」。佛、長者に告げて曰はく、「此の耶舍童子は已に無學智見を得て四諦法を證せりや」。長者白して言さく、「我が子耶舍は大果利を獲て、無學智見を得て四聖諦理を證せり、所謂、苦・集・滅・道なり」。爾の時長者は佛に白して言さく、「世尊、願はくは佛世尊は明日時に至り子耶舍と與に、我が宅中に來りて我が供養を受けたまはんことを」。爾の時世尊は默して其請を受けたまへり。長者は佛許ひたまへるを知り已るに、禮足して去れり。爾の時世尊は時至りて衣を著け鉢を持し。耶舍童子と與に長者

坐せり。爾の時世尊は卽ち偈に妙法を敵演して示教利喜したまへり。諸佛の常法として先に此法を說きたまふなり、所謂、布施と持戒と生天の因となり。復五欲の所有過患を說き、出家の獨り山林に處して思惟觀察して諸煩惱を斷ずるを讚歎したまひ、廣大微妙の法を演說して開示して解せしめ、諸の聞くあらん者は此法を說きたまふを聞いて歡喜し、清淨にして疑惑あること無きなり。佛は觀知し已りて更に復偈に出世の法……所謂、苦・集・滅・道の聖諦なり……を說きたまひしに、猶し浣衣せんに先に垢穢を除きて旣にして淸淨にし已るに色卽ち染め易きが如く、耶舍も亦爾りき。初め佛說を聞きて心器淸淨に、便ち能く四聖諦法を了知して預流果を證し、法を見、法を得、極めて法に通達して堅法を究竟し、一切の悕望を越え一切の疑惑を度して他緣を假らず、大師の敎に於て餘は能く引くことあらず、諸法の中に於て無所畏を得たりき、耶舍は爾の時此法を得已るに心に大歡喜し、座よりして起ちて衣服を整へ、佛足を頂禮して右膝を地に著け、合掌して佛に向うて而ち是言を作さく、「世尊、我れ今此微妙の法に入りて大勝利を獲たり、今より已後乃し盡形に至るまで佛・法・僧に歸し、五戒の鄔波索迦となり、殺さず、盜まず、邪行せず、妄語せず、飮酒せじ」と。是語を作し已りて退いて一面に坐せり。時に彼耶舍が出城せる已後。妻は睡より覺めしに耶舍を見ず、處處に尋覓せしも所在を知ること莫りければ、父長者に告げて曰はく、「長者、當に知るべし、今、子耶舍は所在を知らざるなり」。長者は聞き已りて是の如きの念を作さく、「豈に我子は諸の票賊及以怨家のために、城外に將ゐ出だされて無利を作されしには非らざらんや」。是念を作し已るに卽ち四方に於て諸馬使に令し、自らは火炬を持し諸人等と與に處處に尋覓し、遂に城門を出でゝ漸く河側に至りしに寶履の價直百千なるあるを見て便ち是念を作さく、「我が子は定んで票賊の得去れるには非じ旣に寶履を脫ぎぬ、明かに知んぬ、河を渡れるを」。長者は卽ち便ち河を渡りて去り、漸く佛所に至れり。時に世尊は遙に長者が外より而し來れるを見たまひて、卽ち神力を以て

行・識も亦是の如く見るべきなり。汝等聲聞弟子、多聞を具足し、五取蘊を觀じ、我・我所を離れ、是の如く觀じ已りて諸の世間は實に取るべき無く、取るべき無きが故に怖畏を生ぜず、怖畏なきが故に內に圓寂を證し、我が生は已に盡き、梵行は已に立し、所作已に辦じて後有を受けずと知るなり」。爾の時世尊は此法を說きたまひし時、彼の四人等は此法を聞き已るに、心に解脫を得て阿羅漢果を證せり。是の時世間に六阿羅漢ありて、佛は第一たりき。

爾の時佛は波羅痆斯城い[一八]婆羅捺河邊に在しき。時に彼の城中に長者の子ありて名けて[一九]耶舍と曰ひ、日日中に於て女をして樂を奏せしめて五欲の樂を受け、身心疲倦するに卽ち便ち眠臥し、諸の伎女等と圍遶して而し睡れり。爾の時耶舍は中夜に忽ち覺めて諸の伎女を見たるに、九孔より種種不淨を流溢し、頭髮蓬亂して衣服は垢穢し、手足紛亂し囈言喧雜せり。此事を見已りて是思惟を作さく、「我れ今夜に於て尸林に在りしや」。と心に驚怖を生じ起ちて寶履を躡み……其履の價直百千兩金なりき……趨りて門邊に至り大聲に叫喚すらく、「諸人當に知るべし、苦來りて我に逼まれり。諸人當に知るべし、苦來りて我に逼まれり」とて悲泣雨淚せり。時に非人あり、耶舍の聲を隱して人をして覺えしめずして卽ち爲に門を開けり。爾の時耶舍は出でゝ大門に至り、亦大聲を發して悲泣哽噎し、復是言を作さく、「諸人、當に知るべし、苦來りて我に逼まれり」と。時に彼非人は耶舍の聲を隱して人をして覺えしめずして便ち爲に門を開けり。爾の時耶舍は出でゝ城門に至り、前の如くに叫喚せるに、時に彼非人は亦爲に門を開けり。爾の時耶舍は城門を出で已るに、婆羅捺河邊に至れり。爾の時世尊は河邊經行したまひしに、耶舍は水を見て前の如くに叫喚せりければ、佛は其聲を聞きて童子に告げて言はく、「此處は無畏なり、汝可しく渡り來るべし」。是に於て耶舍は寶履を脫ぎ留めて佛所に渡り詣り、佛足を頂禮して一面に在りて立ちぬ。爾の時世尊は卽ち耶舍を將ゐて其住處に至り、佛は本座に就きたまひしに、時に彼耶舍は佛足を禮し已りて如來に對ひて

【一八】婆羅捺河。藏文には「Bārāṇasī の ba-ṇa 河」とあり。衆許摩訶帝經には嚩囉迦河とせり。

【一九】耶舍(yaśa)。衆許摩訶帝經には耶舍の又の名を出して俱梨迦とせり。

を修習するなり。云何が道聖諦なる。所謂、八聖道にして應に當に修習すべきなり。世尊は此の四諦法を說きたまひし時、阿若憍陳如は諸の漏盡を證して心に解脫を得、四人は此法中に於て諸の塵垢を離れて淸淨眼を證せり。爾の時世間中に二應供あり、一は是れ世尊にして二は是れ憍陳如なりき。爾の時世尊は復四人に告げて曰はく、[七]「汝等當に知るべし、色は無我なりと。若し色にして我あらんには、應に諸の疾苦を生ずべからず、色中に於て是の如きの色を作し、是の如きの色を作さゞるを能くせん。是故に汝等、色は無我なりと知るが故に、諸の疾苦を生じ、是の如きの色を作し、是の如き色を作さゞるを能くせさるなり。受・想・行・識も亦復是の如くに應に知るべきなり」。爾の時世尊は復四人に告げて曰はく、「意に於て云何、色は是れ常なりとやせん、無常なりとやせん」。答へて曰さく、「大德、色は是れ無常なり」。告げて曰はく、「色若し無常ならんには、苦なりとやせん。非苦なりとやせん」。答へて曰さく、「大德、是れ苦なり」。告げて曰はく、「色若し無常・苦ならんには即ち是れ變壞するなり、若し多聞弟子者にして色は是れ我なり、我に諸色あり、色は我に屬し、我は色中に在りて執するや不や」。答へて曰さく、「不なり」。世尊告げて曰はく、「是の如く受・想・行・識は是れ常なりとやせん、無常なりとやせん」。答へて曰さく、「大德、無常なり」。告げて曰はく、「……乃至、識等にして無常ならんには苦なりとやせん、非苦なりとやせん」。答へて曰さく、「是れ苦なり、大德」。告げて曰はく、「識等にして無常・苦ならんには即ち是れ變壞するなり、若し多聞弟子ありて色……乃至、識は是れ我なり、我に識等あり、識等は我に屬し、我は識等の中に在りと執するや不や」。答へて曰さく、「不なり、大德」。告げて曰はく、「是故に當に知るべし、諸の所有色は、若しは過去若しは未來若しは現在、若しは內、若しは外若しは麁若しは細、若しは勝若しは劣若しは近若しは遠の是の如きの諸色は我に非ず、我所有に非ず、我に屬するに非ず、我は色に在らずと如實に遍く知るに由りて、應に是の如く見るべく、……乃至受・想・

【七】本文に汝等當知色無我、若色有我、不應生諸疾苦、能於色中、作如是色、不作如是色、是故汝等知色無我故、生諸疾苦、不能作如是色、不作如是應知とあり。

復告げて曰はく、「汝、法を證せりや」。答へて曰さく、「善逝、已に證せり」。佛言はく、「具壽憍陳如は既に遍く法を證せり、是義を以ての故に、[一一]阿若憍陳如と號せん」。爾の時[一二]地行藥叉衆は世尊の語を聞きて、同じく聲を發して言はく、「仁者、當に知るべし、此の佛世尊は波羅痆斯城仙人墮處、施鹿林中に於て、三たび十二行の法輪を轉じたまひ、諸の沙門・婆羅門・人・天・魔・梵の能く轉ずる所に非らじ。多人をして安樂ならしめんが故に、多人をして利益せしめんが故に、有情を哀愍せんが故に、是義に由りての故に天衆增益し、蘇羅は損減せん」。爾の時空行藥叉は地行の聲を聞き已りて、亦同じく聲を發せるに、……乃至、四天王天・三十三天・炎摩天・覩史天・化樂天・他化自在天・及び諸梵天は皆同時・同刹那・[一三]同臘婆・[一四]同牟呼栗多に聲を發し、阿迦尼吒天は是聲を聞き已りて、亦同じく言ひて曰はく、「仁者、當に知るべし、此の佛世尊は波羅痆斯城仙人墮處施鹿林中にて三たび十二行相法輪を轉じたまひ、諸の沙門・婆羅門・天・人・魔・梵の能く轉ずる所に非らじ。多人をして安樂を得せしめんが爲の故に、多人をして利益を得せしめんが爲の故に、有情を哀愍せんが故に、(是義に由りての故に)天衆增長し蘇羅は損減せん」。世尊は波羅痆斯城仙人墮處、施鹿林中にて、三たび十二行相法輪を轉じたまひしが故に、因りて此の法經及び此地を號して名けて[一五]轉法輪處經と爲すなり。爾の時世尊は復四人に告げて曰はく、「四聖諦あり、云何をか四と爲す、所謂、苦聖諦・集聖諦・滅聖諦・道聖諦なり。云何が苦聖諦なる。所謂、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・乃至、五取蘊苦となり。此の如く應に知りて八聖道を修習すべきなり。所謂、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定となり。[一六]云何が集聖諦と名くるなる。所謂、愛欲と更に後有を受くる愛と喜貪倶行の愛と彼彼欣樂の染愛とにして、捨離せんが爲の故に應に八正道を修習すべきなり。云何が滅聖諦なる、所謂、愛欲と更に後有を受くる(愛)と、喜愛相應の(愛)と、攀緣染著する(愛)とをして、滅壞し休息し永沒し、欲を離れ一見證せんが爲の故に八正聖道

【一一】阿若憍陳如(Ājñāta-Kauṇḍinya)。律部十四、註(一五の九六)、律部十、註(二三の一五)參照。

【一二】地行藥叉衆。sa-bla ḥi-gno-sbyin(サライノオチイン)、「地上居の藥叉」なる義、未だ飛行の通を得ずして地上を行步する羅刹類。

【一三】臘婆(lava)。一須臾の二十分の一なり、律部九、註(一七の二〇)須臾の下參照。

【一四】牟呼栗多(muhūrta)。律部九、右註參照。

【一五】轉法輪處經(Dharmacakrapravartana-Sūtra)。

【一六】本文には云何名集聖諦、所謂愛欲更受後有、愛喜貪倶行愛彼彼欣樂染愛、爲捨離故、應修習八正道、云何滅聖諦、所謂愛欲更受後有、喜愛相應攀緣染著、爲滅壞休息永沒離欲見證故、修習八聖道……とあり。縮藏大正藏の加點は右の如きも今多少改めたり。律部十四、註(一五の九二)參照。

曾て知らざりし（法）に、今應に當に知るべきなりと、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦集聖諦の法なりと、我れ未だ曾て斷ぜざりし（法）に、今當に斷ずべきなりと、如理に作意し精進力の故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅聖諦の法なりと、我れ未だ證する所ならざりし（法）に、今當に應に證すべきなりと、如理に作意し精進力の故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅道聖諦なりと、我れ未だ修習せざりし（法）に、今當に應に修すべきなりと、如理に作意し精進力の故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦聖諦なり、我れ已に遍知して復更に知ることあらじと、先に未だ曾て聞かざりし(法)に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦集聖諦なり、我れ已に永く斷ちて更に復斷ずることあらじと、先に未だ曾て聞かざりし（法）に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅聖諦なり、我れ已に證を作して更に復證することあらじと、先に未だ證する所ならざりし（法）に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅道聖諦なり我れ已に修習せりと、先に未だ習ふ所ならざりし（法）に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。汝等五人、當に知るべし、我れ先に未だ此四諦の三轉十二種を得ざりしには、未だ淨眼・智・明・覺を生ぜず、人天乃至、梵界・諸沙門・婆羅門・一切世間天人・阿蘇羅に超過する能はず、未だ解脱出離を證せず、顚倒を離れず、我れ無上正智を證せざりき。汝等當に知るべし、我は自ら此四聖諦の三轉十二種を修習し、證し已りて卽ち淨眼・智・明を生じ正覺を了達せり。爾の時我れ便ち人・天魔・梵界及び世の沙門・婆羅門、天・人・阿蘇羅より解脱し、心に顚倒せる所を出離し、我は正智無上正覺を得たり」。世尊は此法を說きたまひし時、具壽憍陳如は無垢無塵法中に於て法眼淨を得、及び八萬の天衆は法中に於て亦法眼を證せり。爾の時世尊は憍陳如に告げて曰はく、「汝、法を證し已りしや」。答へて曰さく、「世尊、我れ已に證せり」。佛は

曰さく、「具壽喬答摩、汝先に苦行せるには正覺智慧の法を得ず、亦復善安樂住を見ず、汝は得べからざりしに、何ぞ謂へる、今日戒を破し苦行を棄捨し、心定なる能はず、癡狂心亂して廣く好食を受け、所謂、酥・乳酪等にして、酥油もて身に塗り香水もて洗浴して一も苦行するなきに、如何が乃し正覺を成ずるを得たりと言へる」。世尊報へて曰はく、「汝、愚癡人、如來の前後の相貌と諸根の差別とを見ざらんや」。五人報へて曰さく、「具壽喬答摩、[七]是の如き相貌と差別とは我れ見たり」と。爾の時世尊は五人に告げて曰はく、「出家の人は二種の邪師に親近するを得ず、云何をか二と爲す、一には凡夫下劣の俗法に樂著し、及び婬欲處に耽樂するなり。二には自ら己身を苦しめ諸の過失を造り、並に聖者所行の法に非ざるなり。此の二邪法は出家の人當に須らく遠離すべし。我に[八]處中の法あり、之を習行せん者は當に清淨の眼及び大智慧を得て、等正覺寂靜涅槃を成ずるを得べし。何をか處中の法と爲す、所謂、八聖道なり。云何をか八と爲す、所謂、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり」。爾の時世尊は而ち五人が爲に、決定心を以て是の如きの教を說きたまひしに、時に五人中の二人は佛に侍して法を學び、三人は晨時に飯を乞ひて本處に還り至りて六人食に充てぬ。又中後に於て三人は佛に侍して法を學び、二人は村に入りて乞食し、本處に還り至りて五人して共に飡ひ、[九]唯佛世尊のみは非時に食したまはざりき。爾の時世尊は五人に告げて曰はく、[一〇]「此は苦聖諦の法なりと、我れ未だ曾て聞かざりし（法）に、如理に作意し精勤力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦集聖諦の法なりと、我れ未だ曾て聞かざりし（法）に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅聖諦の法なりと、我れ未だ曾て聞かざりし（法）に、如理作意し精勤力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり。此は苦滅道聖諦の法なりと、我れ未だ曾て聞かざりし（法）に、如理に作意し精進力に由りての故に、淨慧を得て眼智明覺生ぜり」。復五人に告げたまはく、「此は苦聖諦の法なりと、我れ未だ

【七】本文に如是相貌我見差別とあり。今、文を轉置せり。

【八】處中の法。

【九】世尊は最初より一日一食したまへるを示す。

【一〇】三轉十二行法輪。律部十四、註(一五の八七)以下の本文參照。

一切通達して世に超出し　而して諸法に於て所著なく
咸く皆棄捨して解脫を證し　自然に覺悟して師に從はじ。
既に人の我に類するあるなければ　自然に一切を覺れる所以なり
如來は天人の大導師なり　已に一切智力を證して具なり」。

爾の時世尊は此頌を說き已りて、迦施那國波羅痆斯城の仙人墮處施鹿林中に詣りたまへり。是時五人は彼の林中に在りて、遙に世尊を見て各相謂ひて言はく、「共に一制を立てん、此の沙門喬答摩ば性多く緩緩にして、常に邪命を爲して斷惑に數退けり。彼は今廣く美食を餐ひ、所謂、酥・蜜・酪等にして、酥油を以て身に塗り、香湯もて洗浴せり。彼の喬答摩來りて我所に至らんとも、我等は應に起迎頂禮すべからず、亦喚びて坐せしむる莫れ、彼若し坐せん時は亦遠坐するに任さん」と。制を立つること纔に竟るに、如來は漸漸に五人の所に近きたまへり。時に彼五人は如來の威德に勝へずして、尊重して座よりして起ち、一人は如來の爲に座を安じ、一人は如來の爲に水を取り、一人は如來の爲に洗足器を安置し、一人は迎接して爲に三衣を受け、「善來、喬答摩、可しく此座に坐すべし」と。世尊は是念を作したまはく、「此愚癡人は共に章制を立てつゝも而し便ち自ら犯ぜんとは」。是念を作し已りて座に就いて坐したまへり。五人は供養せるも未だ世尊が正覺を成ずるを得たまへるを知らざりければ、心に輕慢を生じて所有言說には皆如來在俗の名號を喚び、或は、喬答摩と喚び、或は具壽と喚び、或は種族を喚べり。是時世尊は毀呰せるを見已りて五人に告げて曰はく、「如來處に於て俗性なる喬答摩・具壽・種族の名字を喚ぶこと莫れ、若し是の如くに如來を毀呰せんには大利益を失し、生生の處に長夜の中に於て而し苦惱を受けん。何を以ての故に、若し復人ありて頻如來の俗性名號等を喚ばんに、彼の無智人は生生の處に大利益を失して常に苦惱を受くるなり。汝等は應に知るべし、今より以去、如來所に於て俗性を喚ぶ莫れ」。五人は報へて

時に佛世尊は復是念を作したまはく、「我れ今者より誰が爲に先に說くべき」。又念言を作したまはく、[二]哥羅哥あり、往因中に在りしには曾て我が師と爲り、及以種種に供給しぬれば、我れ當に彼が爲に先に正法を說くべし」と。爾の時空中の諸天は白して言さく、「世尊、其の哥羅哥は命終して已來、今に七日を經たり」。世尊も亦佛眼を以て、命終して今に七日を經たるを觀知したまへり。復念言を作したまはく、「彼の哥羅哥の我が法を聞かざりしは大利益を失せり、若し法を聞くを得たらんには利益無邊なりしならんに」。又復念言したまはく、「我れ今當[三]に嗢達羅摩子の爲に法を說くべし、因中に於て第二師と爲り種種に我に供給せるに由りての故に爲に說かん」。空中の諸天は亦佛に白して言さく、「此の嗢達羅摩子は昨夜命過せり」。佛も亦昨夜命終せるを觀知したまへり。復是念を作したまはく「彼れ我が法を聞かざりしは大利益を失せり、若し法を聞くを得たらんには利益無邊なりしならんに」。爾の時世尊は便ち是念を作したまはく、「我れ先に何人の爲にか法を說かんと欲すべき」。復是念を作したまはく、「應に彼の五人の爲に先に爲に法を說くべし。何を以ての故に、我れ昔苦行せる時彼等五人は信心尊重して承事供養したれば」。復是念を作したまはく、「彼等五人は今何所に在りや」。爾の時世尊は人天を超えたる眼もて觀察したまへるに、乃し五人は[四]波羅痆斯仙人隨處施鹿林中に在るを見たまへり。見已りて菩提樹下の坐よりして起ち、往いて[五]迦施那國波羅痆斯城に詣りたまひしに、乃ち路に一外道の名けて[六]親近と爲せるに逢ひたまへり。彼は世尊の形容の端嚴淸淨に、色相善好なるを見て問うて曰はく、「具壽喬答摩、諸根端正に顏容淸淨にして皮膚は細滑なり、何の教師に於てして出家するを得、誰が法教を受けたまひたる」。爾の時世尊は卽ち頌を說いて曰はく、

「我れ今、師より受業せるにはあらじ　亦比類の我に同ずるなし
世間に開覺すべき所の者は　唯我一人のみ善く能く曉らめぬ。

【二】哥羅哥。前註（四の三〇）歌羅羅仙なり。

【三】嗢達羅摩子。前註（四の三二）水獺端正仙子なり。

【四】波羅痆斯仙人隨處施鹿林。律部十九、註（九の三一）參照。

【五】迦施那國。藏文に bi-rā-ṇa-sihi ka-çihi groṅ-khyer（バーラーナシーのカーシーの城）とあり、迦尸國なり。

【六】親近。ñer-ḫro（ネルロ）、「近行」の義、衆許經には一仙人、烏波誐（upaka）とせり。

卷の第六

（釋尊の敎化）

爾の時大梵天王は佛に白して言さく、「世尊、此世間に於て諸の衆生の或は生じ或は老いたるあり、然も其根性に上・中・下ありて利鈍同じからず。形相端嚴にして性行調順し、諸の煩惑少く亦煩惑の種類も少きも、正法を聽かざるに由りての故に解する所狹劣なるあり。世尊、嗢鉢羅花・鉢特摩花・倶沒陀花・奔茶利迦花は、並に水中に於て或は生じ或は老ゆるも、其花根の性に上・中・下ありて、一は水より浮び出で、一は水と齊しく、一は水下に居せるが如くに、衆生も亦爾り、世間中に於て或は生じ或は老ゆるも然も諸の根性に上・中・下・有りて利鈍同じからず、形相端嚴にして性行調順し、諸の煩惑少く煩惑の種類も少きも、正法を聽かざるに由りての故に解する所狹劣なるあり、是人の爲の故に當に正法を說きたまふべし、時に彼の諸人は法寶を說くを聞いて並に皆悟解すれば」と。爾の時世尊は是請を聞き已りて、便ち是念を作したまはく、「我れ佛眼を以て彼の衆生の性の差別せりや不やを觀ぜん」。是念を作し已りて卽ち佛眼を以て有情の或は生じ或は老いこ然も其根性に上・中・下ありて利鈍同じからず、形相端嚴にして性行調順し、諸の煩惑少く亦煩惑の種類も少きも、正法を聽かざるに由りての故に解する所狹劣なるあるを觀見したまへり。爾の時世尊は卽ち有情に於て大悲心を起したまひ、而ち頌を說いて曰はく、

「若し法に於て深く樂聽するあらんに　　我れ卽ち當に甘露の門を開くべし
如し其誐慢して自ら人を輕んぜんには　　大梵、我は終に爲に說かじ」。

爾の時大梵天王は此頌を聞き已りて是の如きの念を作さく、「佛は今者より正法を說かんと欲したまへるなり」。心に喜躍を生じて佛足を頂禮し、佛を遶ること三匝して忽然として現ぜざりき。

【一】梵天勸請。前卷の註(三五)の總頌中、四種觸池に相應す。四種とは蓮花の四種なり。

若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
若し能く諸漏を滅せんに　彼義は一切を滅せん。
若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
普く世間を照らして　日の空裏に在るが如し。
若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
諸の魔軍を降伏して　佛は能く鈎鎖を斷ちたまふ」。

爾の時世尊は是念を作したまひ已れり、「我れ甚深の法を得たり、見難きを能く見、知り難きを能く知れり、思惟すべからず、思惟すべきこと難く、其義微妙にして唯智あらん者のみ能く此法を知らん。若し他が爲に說かんも彼は解すること能はず、我が法虛しく投けて徒らに自ら疲勞して我が愁惱を益さんのみ。我は今應に獨り寂靜處に於て、我が所見の法なる安樂境界を思惟して住すべし」。爾の時世尊は上の如くに思惟したまひ、心を止めて住し已りて法を說かんことを念じたまはざりき。時に[四七]娑婆世界主梵天王は佛の心念を知りて卽ち自ら思惟すらく、「此の世間敗壞の諸の衆生等は彼の苦境よりして解脫する能はず。今時如來應正遍知は世間に出現したまひて逢ひ難く遇ひ難きこと烏曇鉢羅花の如くなり。佛今出世したまへるも自の寂靜を樂ひて說法を念じたまはず、我れ今應に往きて佛を請ずべし」。此念を作し已るに大力士の申臂を屈するが如き頃に、梵天より沒して世尊の前に至り、佛足を頂禮して一面に在りて立ち、卽ち頌を說いて曰さく、

「快き哉今此の摩掲陀は　而し未曾(有)の淨妙法を現ぜり
諸法中に於て覺悟したまひし者　唯願はくは當に甘露の門を開きたまはんことを」。

世尊は復以て伽他を說いて曰はく、

「我が所得の法は甚だ遇ひ難く　能く[四八]有海をして悉く餘り無からしむるも
少智愚人は恒に逆ひ流れ　欲の牽纏に由りて鎖に漂沒す」。

【四七】娑婆世界王梵天王。律部十三、註(八の一二三)參照。

【四八】有海。(bhava sāgara)。三有海、卽ち欲・色・無色の三界生死の境界なり。

「知足の果は安樂に　多聞の者は法を知り
衆生を害せざるは　人間に大慈悲なり。
能く世欲の樂を除き　諸惡は皆遠離し
我慢悉く摧伏せんに　斯人最も安樂なり」。

佛は頌を說き已りたまひしに、時に彼の龍王は世尊を頂禮して本住處に還れり。爾の時世尊は復池邊より菩提樹下に還り、草敷の上に於て端身に結跏し如法に而し坐したまひて、十二緣生[四五]を觀じて循環返覆したまへり。所謂、此ありて彼生ず、無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六處を緣じ、六處は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取を有を緣じ、有は生を緣じ、生は老死・憂・悲・苦惱を緣ずるなり。此れ滅するが故に彼れ滅す、無明滅せんに則ち行滅し、行滅せんに則ち識滅し、識滅せんに則ち名色滅し、名色滅せんに則ち六處滅し、六處滅せんに則ち觸滅し。觸滅せんに則ち受滅し、受滅せんに則ち愛滅し、受滅せんに則ち取滅し、取滅せんに則ち有滅し、有滅せんに則ち生滅し、生滅せんに則ち老死・憂・悲・苦惱滅するなり。爾の時世尊は七日の間に於て三摩地に入り已るに起ちたまへり。而ち頌に說いて曰はく、

[四六]「若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
若し能く因の法を知らんに　彼義は一切を滅せん。
若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
若し能く因の苦を知らんに　彼義は一切を滅せん。
若し此法能く生ぜんに　佛は常に定に在り
若し能く受を滅し盡くさんに　彼義は一切を滅せん。
若し此法を能く生ぜんに　佛は常に定に在り
若し能く緣を滅し盡さんに　彼義は一切を滅せん。

【四五】　十二緣生。

【四六】　本文に若此法能生、佛常在於定、若能知因法、彼義滅一切……とあり。藏文は「若し此法生ぜんには、精進を持する淸淨定に在りて、若し諸法の因と共なるものを知らんに、それによりてその一切疑惑を斷ぜん」とあり。衆許摩訶帝經の偈は明了なり、「淨行觀察苦相時、知一々法有所因、若知苦相之不生、自然一切所愛斷」。

たまへり。魔王は佛冷えて風氣を患ひたまへるを見て佛所に來詣し、佛足を頂禮し佛に白して言さく、「世尊、涅槃したまふ時至れり、何ぞ世に久住するを用ひん、可しく早く涅槃に入りたまふべし」。世尊は魔王の爲に惱まさるゝを知しめして告げて言はく、「汝、罪魔王、我は未だ涅槃に入らじ。何を以ての故に、我に未だ聲聞弟子の聰明智慧にして、若し他の問ふあらんには如法に而し答へ、善く異論を破して廣く正法を建て、四部衆……苾芻・苾芻尼・鄔婆索迦・鄔婆斯迦……を具足し、上天下界及び諸の十方に廣く我が法を知ら(しめ)、諸の梵行を修めて悉く皆了知せ(しむ)るあらざればなり。若し未だ此の如くならざらんには、我は未だ涅槃に入らざるなり」。魔王は佛の此語を聞き、心に懊惱を生じ身を隱して而し去れり。釋提桓因は佛世尊が風氣を患ひたまへるを見て卽ちに贍部樹下に往き、[四三]遠に訶梨勒林あり、其林中より色香美味具足せる訶梨勒果を取り、速に佛所に詣りて佛足を頂禮し、一面に在りて立ちて佛に白して言さく、「我れ世尊の身に風氣を患ひたまへる見たるが故に、訶梨勒果を取り今以て奉施しまつらんとす。若し此果を食したまはんには風氣卽ち除かん、唯願はくは世尊、我が此藥を受けたまはんことを」。爾の時世尊は便ち受けて之を服したまひしに、所患は尋いで愈えぬ。爾の時世尊の所患既にして差えければ、菩提樹下より起ちて[四四]牟枝磷陀龍王の池邊に往き、一樹下に坐して三摩地を念じたまへり。時に此池中に七日雨下あるべかりき。牟枝磷陀龍王は七日雨下して絕えざるを知り、池よりして出で身を以て佛を繞ること七匝し、頭を引べて佛頭の上を覆へり。何を以ての故に、佛世尊の冷熱に調はず、諸の蜂蠅等の蟲の世尊を惱亂しまつらんを恐れてなりき。時に此龍王は七日中を過ぎて雨止み已れるを見て方に其身を解き、變じて天身と作り世尊の足を頂禮して佛に白して言さく、「世尊、此七日の中に於て頗く安穩なりたまひしや不や、我が身は麁弊なるも應に亂惱なかりしなるべし、願はくは歡喜したまはらんことを」。爾の時世尊は卽ち頌を說いて曰はく、

【四三】訶梨勒林。律部二十三、註(一の二七)參照。

【四四】牟枝磷陀龍王(Mucalinda-nāgarāja)。

ぜんとせり。然り、此石鉢は淸淨輕妙にして周遍細密に、形色端嚴にして人の所作には非ざるなり。時に四天王は既にして各鉢を持して世尊所に至り、佛足を頂禮して一面に在りて立ち佛に白して言さく、「世尊、我等は各石山より此石鉢を持し來りて世尊に奉ぜんとす、唯願はくは慈悲もて哀を垂れて納受したまはんことを」。爾の時世尊は是念を作したまはく、「今此四王は各石鉢を持して以て我に施せり、我れ若し一を取らんには餘天は怨望せん、乃至二・三も亦復是の如し、我れ今應に可しく總べて之を納受すべし、我が神通を以て合して一鉢を成ぜんに。將つて衆願に適はん」。是念を作し已りて便ち四鉢を受けたまひ、佛の神力を以て重疊して之を內れて遂に一鉢を成じたまへり。便ち此鉢を持して有情を益せんが爲の故に商主の供を受けたまひ、既にして供を受け已りて商主の爲に諸の呪願の頌を說いて曰はく、

「布施を爲さん所の者は　必ず其義利を獲ん
若し樂の爲の故に施さんには　後に必ず安樂を得ん。
福は能く樂果を招き　願ふ所は皆成就し
疾く圓寂の處を得て　當に涅槃の樂を證せん。
勤めて福德を修せん人は　所有諸の災橫も
及以天魔衆も　皆侵惱すること能はじ。
[四一]若し勇猛を發して　聖慧を具せる者に能く施さんには
當に苦海の邊を盡くして　必ず無爲の樂を得べけん」。

爾の時四天王及び二商主は此頌を聞き已るに、甚だ欣慶を生じ禮足して去れり。爾の時世尊は此石鉢を持し、尼連禪河の岸に於て水泥壇[四二]を以て如法に而し食し、食し已りて菩提樹下に還り、鉢を收めて洗足したまひしに、麨・酪・漿・蜜は性として冷ゆるを以ての故に、爾の時世尊は風氣を患ひ

【四一】本文に若發勇猛者、具聖慧能施、當盡苦海邊、必得無爲樂とあり。譯文少しく前後せり。
【四二】水泥壇。破僧事第六卷には作其泥壇とある故に、柔かき泥を以て壇を作れるものなるべし。壇を作ることは食時の作法なり。但し藏文には「摶食の作法を作したまへり」とあるのみ。衆許摩訶帝經には數草而坐喫所受食とあり。

るなくして飲まず食はざりしに、飢渴の想もなかりき。爾の時二商主あり、一は黃瓜[38]と名け、二は村落と名けたるが、各百兩車及び多人衆ありて共に興販を爲さんとて路、佛所に由れり。時に二商主に先に知識あり、命過して天に生ぜるが商人を顧みて是の如きの念を作さく、「今佛は菩提樹下に在して七日入定し、諸の煩惱を斷じて解脫の樂を受けたまへるも人の供養するなければ、我れ今應に此二商主をして最初の供養を爲さしめて多世中に於て諸の功德を受けしむべし、今宜しく此事を爲さんことを勸むべし、知識の爲の故に」。是念を作し已るに夜分中に於て大光明を放ちて五百車を燭らし、其半身を現じて虛空中に在り、二商に告げて曰はく、「汝今當に知るべし、釋迦牟尼世尊は寛廣[39]尼連禪河の菩提樹下に在して初めて正覺を成じ、七日中に於て煩惱を解脫して彼の安樂を受けたまへるも、飲まず食はずして人の供養するなし。汝等二人は事へて速に供養せよ、最初の供養を爲さんに大利益を獲れば」。此語を作し已りて天は遂に便ち隱れぬ。時に二商主は此語を聞き已るに共に相議りて曰はく、「我等當に知るべし、世尊の威德の甚奇なるを。今天は彼が爲に來りて、我等に告げて供養せしめんとせり」。是議を作し已るに、佛世尊に於て深心に敬仰し、諸の供物の、酪・漿・麨・蜜を持して世尊の所に往き、到り已りて禮足して一面に在りて立ち、世尊に白して曰さく、「我等二人は多く酪・漿・麨・蜜を持して來りて世尊に奉ぜんとす、願はくは哀慈もて我が微供を納れたまはらんことを」。爾の時世尊は而ち是念を作したまはく、「我れ今諸の外道に同じて手を以て食を受くべからず」。尋いで念じたまはく、「過去の諸佛は有情を益せんが爲に、如何にして受けたまひたる」と。時に淸淨天は空中にて告げて曰さく、「世尊、當に知りたまふべし、過去の如來は有情の爲の故に鉢を持して食したまへるを」。世尊も亦其事の是の如きを知しめしたまへり。時に世尊は既にして先に鉢なかりければ、卽ち自ら邀祈[40]したまはく、「我れ若し鉢を得んに、然る後食を受けん」と。時に四天王は世尊の心願を知りて、各一石鉢を持して來りて佛に奉

【三八】黃瓜・村落。trapuṣa, bhallika の譯、衆許摩訶帝經には布薩婆梨迦とせり。律部十四、註(一五の六一)參照。

【三九】寛廣尼連禪河。前註(三六)參照。

【四〇】邀祈。念言するなり。

各二頌を說きて佛を歎ぜん」と。是議を作し已りて力士の申臂を屈するが如き頃に卽ち菩提樹下に至り、世尊の前に在りて雙足を頂禮し、其一天子は頌を說いて請じて曰さく、

「起て起て、大慈悲　　怨賊今退散せり
無罪の大商主　　應に世間に遊行せよ。
說いて善く勝法に遊ばしめ　　廣く諸の實義を施さんに
無量の諸の衆生は　　法を聞いて皆受持せん」。

第二天子は復頌を說いて請じて曰さく、

「起て起て、大慈悲　　怨賊今退散せり
一切の垢は已に除こりぬ　　應に世間に遊行せよ。
身心既に清淨に　　彼の圓滿けき月の如くなり
無量の諸の衆生は　　法を聞いて皆受持せん」。

時に二天子は此頌を說き已りて佛を禮して去りぬ。爾の時世尊は三摩地より起ちて頌を說いて曰はく、

「欲界の諸の安樂よりも　　色界の諸の安樂よりも
貪欲煩惱の盡きたる　　此の安樂は最勝なり。
我れ今重擔を捨てゝ　　永く負重を離れ
擔ありて多苦を受けたるも　　擔を捨しては則ち安樂なり。
一切の欲は已に捨て　　一切行は已に成じ
一切法は已に知れる　　此人は復生ずることあらじ」。

世尊は三摩地に在りて七日中に於て既に煩惱を斷じて解脫の樂を受けたまひければ、人の供養す

べし」。時に淨飯王は羅怙羅を觀じて而し是言を作さく、「此は我が釋迦牟尼の所生の子には非じ」。時に[三五]耶輸陀羅は王の此語を聞いて深く恐懼を懐き、卽ち羅怙羅を携へて菩薩の澡洗したまひし池邊に往けり。一大石あり、先に是れ菩薩が力戯したまひし石なりしが、羅怙羅を以て此石上に置き、合掌して誓うて曰はく、「此兒にして若し是れ菩薩親生の子ならんには、池中に投ぜんとも沈沒するに至らざれ、若し菩薩親生の子に非ざらには水に入りて卽ち沒せよ」。是願を作し已りて卽ち其石幷に羅怙羅を抱きて池中に拋へるに、石は便ち水に浮び、時に羅怙羅は水中に落在しつゝも石上に坐せること、輕綿の水に在るに波に隨うて來去して曾て沈沒せざるが如くなりき。淨飯王は聞き已りて希有心を生じ、諸群臣と將に圍繞侍衛して彼の池傍に至りしに、羅怙羅の池中に在りて浮石上に坐せるを見て歡歎し喜悅せり。時に淨飯王は自ら池中に入り一羅怙羅を抱きしに、其石便ち沒しければ、宮中に還りて倍愛育を加へぬ。

初め菩薩は慈器仗を以て三萬六千拘胝の魔衆を降伏し已りて無上正智を證したまひしに、時に大地は震動し、普遍の世界は悉く皆光明し、所有大地黑暗の處にして日月の威光の除く能はざる者も、佛の此光を蒙りては皆明徹するを得、其中の衆生は忽ち相見ゆるを得て遞に相言ひて曰はく、「獨我等は此間に生ぜるには非じ、更に衆生ありて此處に生ぜるなり」と。

頌に攝して曰はく、

[三六]一四種觸池と　　父子和合せると
釋迦出家せると　　護河神に禮せるとなり」。

爾の時梵界に二天子あり、世尊が菩提樹下に坐したまへるを觀見して共に相議りて曰はく、「今、佛世尊は[三七]嗢律尼連禪河岸の菩提樹下に住したまへり、初に正覺を成じて火界三摩地に入りたまひしより、七日を經たるも今猶ほ在定したまへり。我等は當に共に如來所に詣りて香花もて供養し

【三五】耶輸陀羅の實誓。

【三六】本文には四種觸池、父子和合、釋迦出家、護河神禮とあり。此偈中に佛傳として の前期を總攝せり。便ち四種觸池は破僧事第六卷の初、嗢鉢羅花等の四種の花根に上中下の三別あるを示すもの、これ梵天勸請を暗示せり、而してその勸請により敎化したまへる各種事蹟を總括する故に五比丘敎化より乃至竹林・祇園の建立をも含むなり。次に父子和合は迦毘羅城に歸りて父子對面したまへる記、釋迦出家は釋種の出家相狀を記せるなり。護河神は鄔波離剃髮師の前生の名、その剃髮師に王が禮せる因緣譚にして、今生にも剃髮師鄔波離出家せるに、釋種の貴王も禮せりとして。こゝに前期佛傳を終れるなり。

【三七】嗢律尼連禪河。藏文には chu-kluṅ nai-ra-ñdsa-nā (チュ ルン ナイ ラ ンジャ ナー)、「nairañjanā河」とあるのみ、嗢律に相應する語なし。後の文には寬廣尼連禪河とある故に嗢律は寬廣の義なるを推し得るも其原語知り難し。衆許經には烏嚕尾羅池側とある故に、嗢律は uruvilva の音略にあらざるか。

無上智を證したまひたればなり。時に魔王罪者の弓は手より落ち幢は便ち地に倒れ宮殿は皆動ぎければ、魔王は三十六拘胝の眷屬と與に心に懊惱を生じて悔恨を懷き、便ち自ら隱沒して劫比羅城に往き衆人に告げて曰はく、「釋迦牟尼菩薩は諸の苦行を修して金剛座に登りしに、草鋪上に於て今已に捨命せり」と。時に淨飯王及び諸宮人・群臣百寮は是語を聞き已るに大苦惱して心は火に燒かれたるが如く、城中の人衆及び喬比迦等の三大夫人は菩薩の德を念じて悶絶して地に躃れ、水を以て面に灑ぎ良久しくして乃ち蘇へりては悲泣哽咽して自ら止むること能はず、左右の侍女は勸喩裁抑し、是の如くに種種に歎責せること無量なりき。時に[三〇]淨居天は魔の欺妄せるを見、復如來已に妙智を成じたまへるを知りて心に歡喜を生じ、便ち普く告げて曰はく、「諸人、當に知るべし、釋迦牟尼は今捨命せず、無上正智を見證したまへるなり」。時に淨飯王及び諸眷族并に劫比羅城の人衆は、此語を聞き已りて歡躍に勝へざりき。時に耶輸陀羅は世尊菩薩が無上智を證したまへりと聞き、憘悅を生じて曰に一息を誕み、斛飯王も亦一息を生めるに、時に月蝕なりき。淨飯王は此盛事を見て甚だ大に歡喜して慶悅充滿し、即ち城中に勅して瓦礫を除去し、旃檀香水を以て遍く地に灑ぎ、四衢道中に於て香鑪を置けて諸の名香を然やし、繒幡蓋を懸けて街路を滿たし、鮮潔の花を以て地上に周布し、四城門及び街衢中に於て[三一]檀施處を立てぬ。時に東城門の施會に於て沙門・婆羅門・外道・梵志・貧窮・孤獨・慳貪・乞求の此の如き等の類に皆悉く施與し、南・西・北門及び城中の街衢も亦復是の如くし、諸群臣を會して耶輸陀羅が所生の息の爲に而し其名を立てんとせり。內宮の侍女は前みて王に白して曰さく、「此子生まれし時[三二]羅怙は月を障へければ、此に因みて應に以て爲に[三三]羅怙羅と名くべし」。時に斛飯王は其子の爲の故に廣施せること上の如くし、亦親屬を會して子の與に名を立てんとて諸人に問うて曰はく、「此子當に何の字をか立つべき」。親屬報じて曰はく、「此子生まれし日、劫比羅城の人衆は歡喜せりければ、可しく此子に名くるに[三四]阿難陀と爲す

[三〇] 淨居天。本文に淨信天とあるもかゝる場合には淨居天現出する故に今改めたり。

[三一] 檀施處。布施處なり。

[三二] 羅怙(rāhu)。暗障の義、日月を障蔽して蝕せしむる故に阿修羅王なりとも云はる。

[三三] 羅怙羅(rāhula)。障ゆるものを持てる義なり。

[三四] 阿難陀(ānanda)。

昔より已來の種種諸事、所謂一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・百生・千生、乃至、無量百千萬生・一劫生・二劫生・成劫生・壞劫生、乃至、無數劫生も念に應じて了知し、彼人の姓は某、名は某、及び已所生の處、族姓種類及び食噉苦樂等の事ありしは皆悉く了悟し、是の如くに長命し是の如くに久住せる壽命の長短、彼に滅し此に生ぜる所有相貌・方處の種種無量の雜類をも盡知したまはざるは靡かりき。菩薩は念を作したまはく、「此魔軍を念ずるに誰か惡趣に墮ち、誰か善趣に墮つるやは如何がしてか知るを得べき」。復共念を作したまはく、「應に生滅智通を以てせんに方に是事を知りうべし」。菩薩は中夜分に於て生滅智通を修したまひ、便ち天眼清淨を得て人間に超越し、此天眼を以て諸の衆生の死者・生者・端正者・醜陋者・富貴者・下劣者・善道に往ける者・惡道に往ける者・善業を作せる者・惡業を作せる者を見て決定して明了したまへり。復一一衆生の身・口・意業に諸惡事を作し、聖者を誹謗し、或は邪見に染著し、或は邪見業を作り、斯業に由りての故に此より沒して後惡趣中に墮するを見たまひ、或は衆生の身・口・意に於て諸善業を作し、賢聖を恭敬し、正見を行じ、此業に由りての故に此より沒して後善趣中に生ずるを見て皆悉く明了したまへり。菩薩は復是念を作したまはく、「一切有情は彼の欲漏・有漏・無明漏に由りて苦海に輪轉せんも、如何がしてか免るを得べき」。[二九]復更に念云したまはく、「唯證無漏智通こそは能く此事を斷ずるなれ」。菩薩は爾の時是義の爲の故に、菩提樹下にて夜分中に於て常に相應の(慧)を以て修習成熟し、心を專らにして覺分法中に於て住したまひ、心を發して證無漏智通の爲に即ち苦諦に於て如實に了知し、集・滅・道諦にも亦復是の如くし、斯道を證し已りて欲漏・有漏・無明漏に於て心は解脫を得、既にして解脫を得て諸の漏盡智を證し、我が生は已に盡き、梵行已に立し、應に作すべきは已に作し、後有を受けじと(知り)て即ち菩提を證したまへり。彼中、覺分菩提を見たまへりと謂へるは、世尊は所作已に辨じて即ち火界三摩地に入りたまひしに、此時菩薩は慈器仗を以て三十六拘胝の魔軍を降伏して

【二九】本文に復更念云唯證無漏智通能斷此事、菩薩爾時爲是義故菩提樹下於夜分中、常以相應修習成熟、專心於覺分法中而住、發心爲證無漏智通、即於苦諦如實了知、集滅道諦亦復如是、證斯道已於欲漏有漏無明漏心得解脫、既得解脫證諸漏盡智、我生已盡梵行已立。應作已作不受後有、即證菩提、彼中謂見覺分菩提、世尊所作已辦即入火界三摩地、此時菩薩以慈器杖降伏三十六拘胝魔軍證無上智とあり。

ざりければ、淨居天等は復是念を作さく、「此の罪魔軍は久しく菩薩を惱ましつゝも尚ほ退息せざらんとは」。卽ち神力を以て諸魔軍を鐵圍山上に擲てり。菩薩は爾の時優樓頻螺聚落に住して尼連禪河の菩提樹下に坐したまひ、妙覺分法の中に於て常に修習加行を斷絶せずして住し、初夜分中に於て神境智見證通を成就したまへり。所謂、一の中變じて無量と爲し、無量の中變じて一と爲し、或は隱れ、或は現れ、墻壁及び山も罣礙するなきを得ること虛空中の如く、大地に出沒しては水に遊ぶが如くなりき、地相如なるが故に。或は虛空に趺坐するにと大地に居するが如く、或は虛空に遊騰することは鳥の飛翥するが如く、日月は大威德あるも或は復手を擧げて之を捫摩し、……乃至梵天に來往して身皆自在なりき。爾の時魔王は復是念を作さく、「諸の禪定の中にては唯聲のみ能く障礙を爲すなれば、我は應に聲を作すべし」。卽ち三萬六千拘胝の魔鬼神等と與に遂に大聲を吼えしに、菩薩は此聲の爲の故に十二踰膳那の迦覃婆樹林を爲り、此林に由りての故に彼聲を聞きたまはざりき。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ應に、天耳智證通心を修して天及び人聲は皆悉く聞くを得せしむべし」。菩薩は人耳を超過したまひければ、淨天耳を以て人・非人の聲の、若しは近き若しは遠きをも曉了したまはざるなかりき。菩薩念云したまはく、「魔王三萬六千拘胝の眷屬中、彼の誰が我に惡心を起せるなる、我れ何がしてか知るを得べき」。菩薩は復念じたまはく、「我れ如何がしてか他心智を證すべき」。卽ち夜中に於て便ち證悟するを得たまひ、有情所發の尋伺・心及び心心所・欲不欲心・瞋不瞋心・癡不癡心・廣不廣心・息心攝心・驕慢不驕慢心・寂靜不寂靜心・定心不定心・散心不散心に於けるが如きは如實に了知したまへり。既にして是を知り已りて復更に念云したまはく、「此魔軍の中昔より已來、誰か是れ父親、誰か是れ母親、誰か是れ怨害、誰か親友たりしを如何がしてか知るを得べき」。復更に念云じたまはく、「我れ今應に宿命智を修せんに方に了悟するを得べし」。夜分中に於て精勤に存念して宿命智を修したまひしに、便ち曉了するを得たまひ、

【二七】神境智見證通。境界を變現する不思議通力なり、又神足通とも身如意通ともいふ。

【二八】迦覃婆樹林。Çin ka-da-m-paḥi tshal（シン カダム パイ・ツアル）、「劫丹波樹の森」なる義、kadambavṛkṣavana なり。橙色にして香氣ある花をもてる木。

けて欲と爲し、三は名けて愛著と爲せるをして、種種に天衣もて其身を莊嚴して菩薩の所に往かしめ、菩薩の前に至るに諸の諂曲を作して惑亂を生ずるに擬せしめぬ。菩薩は見已るに此三女を化して皆老母と成したまひければ、卽ち便ち還り去りしに、魔王は此を見て更に懊惱を增し、手を以て頰を支へて是事を諦思せるらく、「我れ復云何がしてか此淨飯の子をして障礙を生ぜしむべき」。卽ち三十六拘胝の魔兵の、象頭・馬頭・駝頭・驢頭・鹿頭・牛頭・猪頭・狗頭・[二四]㹯狐類・鼠狼類・獼猴頭・野狐頭・師子頭・虎頭せる等、是の如き奇怪の種種頭兵の、或は鏘戟を執り、或は弓箭を執り、或は鉞斧を執り、或は輪刀を執り、或は羂索を執り、或は斤斲を執り、是の如き種種器仗もて來りて菩薩に向ひ、魔王は自ら弓箭を執りて菩薩を射んと欲せり。菩薩は見已りて是思念を作したまはく、「凡そ鬪諍する所は皆伴侶を求むるなり、我れ今此欲界王と諍はんに豈に伴を覓めざらんや」。復更に思念したまはく、「我れ今障礙を除くの方便を覓めん」。時に魔兵衆は卽ち諸刃を發して同じく菩薩を擊ちしに、菩薩は爾の時[二五]大慈三摩地に入りたまへり。時に魔の兵刃は皆變じて靑・黃・赤・白・雜色の蓮花を成じて菩薩の左右前後に落ちぬ、彼時魔王は復空中に騰りて諸塵土を雨らせるに、而し此塵土は變じて沈檀抹香を成じ、及び諸の花と作りて菩薩の上に墮ちぬ。魔王は復空中に於て諸の毒蜂を放ち金剛石を雨らせるに、淨居諸天は葉屋を化爲して以て菩薩を盖ひければ、毒蜂石雨は皆損するを得ざりき。魔王は見已りて復是念を作さく、「我れ能く幾時にてか圍遶して嬈亂すべき。凡そ諸の聲せんには能く三摩地を破すれば、我れ今應に菩提樹葉を變じて[二六]頗胝迦と爲さしめ、復風吹き相鼓して聲を作さしめんに、彼若し聲を聞かんには心、定なること能はざらん」と。是念を作し已りて卽ち此事を爲せるに、時に菩提樹葉は相鼓して聲を作し、菩薩は聞き已りて專ら定なること能はざりき。時に淨居天は遙に是事を見て念言すらく、「我れ今應に菩薩を助くべし」。爾の時諸天は皆菩提樹に來至し、各々樹葉を把りて葉をして動ぜしめざりき。時に彼の魔軍は猶も肯へて散ぜ

【二四】㹯狐。㹯は葷に通ず、くさき狐なり。

【二五】大慈三摩地。大慈定なり。

【二六】頗胝迦。蘇頗胝迦(Sphaṭika)の略、水精なり。

か此三種の罪不善の尋を生ぜる」。又便ち觀察して知りたまふらく、「是れ魔王の此に來りて我を惱まし我をして散亂せしめたればなり」と。爾の時菩薩は卽ち三種の善尋を生じたまへり……一には出離尋、二には不殺害尋、三には不毀損尋なり。時に天魔王は復更に告げて曰はく、「汝今何の故にか菩提樹下に坐せる」。菩薩答へて曰はく、「當に無上正智を證すべければなり」。魔王復曰はく、「如何がしてか無上正智を證するを得べき」。菩薩答へて曰はく、「[三二]罪者、汝且て一度祠會せしにも、猶ほ此緣の故に欲界天中に於て自在成就を得たり。況んや我れ無數劫中に於て無量百千[三三]拘胝那庾多の祠會を作し、有情を利益せんが爲の故に頭目・手足・血肉・妻子・男女・金銀・諸珍を捨てぬ、無上智を證せんが爲の故に。是義に由りての故に我れ何ぞ無上正智を證せざらん。我れ今決定して此の無上正智を證せん」と。菩薩は此言を作したまひ已るに、魔王は復告げて曰はく、「然り我れ一度祠會せるに欲界自在天主を得たること汝今證知せるも、汝が三無數劫中に於て無量拘胝那庾多百千の祠會を作し、有情を利益せんが爲の故に頭目・手足・血肉・妻子・男女・金銀・諸珍を捨て、無上正智を求めんが爲の故なりとは、誰か當に汝を證すべき」。爾の時世尊は[三四]輪萬網縵にして無量福生じて一切の恐怖を慰喩する手を擧げたまひ、大地を指して曰はく、「此ぞ當に我を證すべけん、如し三阿僧祇劫中に於て無量拘胝那庾多百千の祠會を爲し、有情を利益せんが爲の故に頭目・手足・血肉・妻子・金銀・諸珍を捨てしこと、實にして虛しからざらんには當に自ら我を證すべし」と。是時地神は地より涌出し合掌して聲を發して曰はく、「罪者、是の如し、是の如し。世尊の言の如きは實にして虛しからざるなり」。是語を作し已るに、時に魔王罪者は內に羞愧を懷きて默然して住し、顏容顦悴して威德を失し、心に懊惱を懷きて是念云を作さく、「我れ今是方便を作せるも淨飯子をして少損壞をもあらしむること能はざりき、今當に別に異計を設けて其の障礙を爲すべし」。念じ已るに便ち去れり。時に彼魔王には先に三女あり姿容妖豔にして皆悉く殊絕し、一は名げて貪と爲し、二は名

【三二】罪者。波旬（Pāpīyān）の譯、魔王の名を呼びたまへるなり。

【三三】拘胝那庾多、律部十九、註（九の六）參照。

【三四】本文には爾時世尊以輪萬網縵無量福生慰喩一切恐怖手指於地曰……とあり。輪萬網縵とは、萬は萬字なり、便ち萬字と網縵との輪相具足せる手、而も其手は無量の福を生じて一切衆生の恐怖慰喩し無畏を與ふる手なりとの意なり。

清淨光嚴の相は
面は端しきこと滿月の如くなり
猶し閻浮金の如く
今成佛したまはんこと疑ひ無し」。

龍王は爾の時菩薩を讃し已りて便ち龍宮に入れり、爾の時菩薩は伽陵伽龍王の讃ぜるを聞き已りて金剛地に詣り、是念云を作したまはく、「我れ應に草を須むべし」。時に帝釋は菩薩の心を知りて即ち一八香山に往きて彼の柔軟吉祥の妙草を取り、即ち自ら身を變じて傭力者と作り、吉祥草を持して菩薩の前に至れり。菩薩は見已りて即ち從ひて之を乞ひたまへるに、帝釋は前み跪きて菩薩に奉施せり。既にして草を得已りて即ち菩提樹下に詣り、草を敷きて坐せんと欲したまへるに草は自ら右旋せり。菩薩は此相を見已りて復自ら念云したまはく、「我れ今日に於て證覺せんこと疑ひ無し」。即ち金剛座に昇り結跏趺坐したまへること猶し龍王の如くにして、端嚴殊勝にして其心專ら定に、口に是言を作したまはく、「我れ今此に於て諸漏を盡くすを得ざらんには此座を起たじ」と。魔王の常法として二種の幢あり、一には喜幢と爲し、二には憂幢と爲せるが、其憂幢は忽にして動ければ、魔王は便ち是念を作さく、「今者憂幢忽ちに動れるは決らず損害の事あらん」。便ち諦かに觀察せるに、乃し菩薩の金剛座上に坐したまへるを見ぬ。復是念を作さく、「此淨飯子にして金剛座に坐せんには……乃至、未だ我境を侵さゞる已來に、我れ先に其が爲に諸の障礙を作さん」。是念を作し已るに眉を奮ひ眼を怒らし、一九舍那衣を著けて化して小使者の形と爲り、菩薩の前に詣りて倉卒忙遽して菩薩に告げて曰はく、「汝は今云何が此に安坐せる、劫比城中にては已に提婆達多のために、控摭せられて宮人婇女は皆汚辱され、諸釋種等は已に殺戮せられたるに」。是時菩薩に三種の二〇罪不善尋思の生ずるありき。……一には愛欲尋、二には殺害尋、三には毀損尋にして、耶輸陀羅・喬比迦・彌迦遮の所に於て愛欲尋を生じ、提婆達多の所に於て殺害尋を生じ、提婆達多に隨從せる諸釋種等に於て毀損尋を生じたまへり。此尋を生じ已るに便ち覺察して曰はく、「我れ今何の故に

【一八】香山。「芳香を持せる香の山」の義、香醉山(gandha-mādana)なり。大雪山の北にある山、その間に無熱池ありて四大河を出す、崑崙山と云ける。

【一九】舍那衣。ça-nahi smad-gyogs(シヤ ナイ マ ヨク)、「śāṇaの下衣」の義、便ち粗布衣(śāṇaka)なり。

【二〇】罪不善尋思。罪不善の施觀に住するなり。

足に履みたまへる所の地地は皆振動して銅器を扣くが如くなりき。[一六]遮沙鳥及び祥瑞鹿ありて來りて菩薩を遶り、主風神に其清涼を調へて塵穢を吹き去り、主雨神は微に甘澤を灑ぎて囂埃をして飛ばざらしめぬ。菩薩は既にして此相を見て是念云を作したまはく、「今此相を見るに我れ今日に於て必ず正覺を成ぜん」。尼連禪河の龍は[一七]伽陵伽と名け、先業の緣を以て此河中に住し兩目は皆盲せるも、若し佛出世したまはんには眼は卽ち明くるを得、若し佛滅したまはん後には其眼は還盲するなるが、地の震聲を聞きて佛出世したまへるかと疑ひ、宮より出で看たるに、忽ち菩薩の三十二相八十種好を具し、圓光一尋にして千日の輝の如く、大寶山の周遍嚴飾せるが如きを見ぬ。龍王は見已りて頌を說いて讚じて曰さく、

「曾て諸菩薩の　成佛して威德を具したまへるを見たり
昔見たると今見たると　二見に差別無し。
我れ初の行步を觀じ　復左右の相を觀るに
世間の供を受くるに能へたり　今成佛したまはんこと疑ひ無し。
又瞻たり、衣服を被　尼連河に入りたまひしに
河水變じて清淨たり　今成佛したまはんこと疑ひ無し。
大堅固勇猛にして　行步は牛王の如く
亦人中の王の如くなり　今成佛したまはんこと疑ひ無し。
上に遮沙鳥飛び　下に祥瑞鹿ありて
身相甚だ端正なり　今成佛したまはんこと疑ひ無し。
和風甚だ調暢にして　微雨は空より下り
鳥は讚じ樹に枝を低れぬ　今成佛したまはんこと疑ひ無し。

[一六] 遮沙鳥。bya ton-ṅa（チャ ツァ シャ）、「○○鳥」なり。梵漢字典には雜沙鳥（鳥の一種）とせらる。衆許摩訶帝經には靈鵲異獸右旋圍繞とある故に、遮沙鳥も靈禽なるを推し得べし。

[一七] 伽陵伽。klu-hi-rgyal-po dus-can（ルウイ ギャル ポ ドウ チャン）、「時を具せる龍王」の義、Kāla nāgarāja なり。衆許經には黑龍とせり。

山の南、弶伽河側なる劫比羅城にて釋迦種中に一太子を誕めるあり、顏容殊妙にして人に喜見せられ、相師は之を占すらく、「當に轉輪王たるべけん」と。我れ今此功德を以て願はくは彼が妃と爲らんことを」と』。菩薩報じて曰はく、「彼太子は世欲を樂はずして今已に出家せり」。二女報へて曰さく、「若し已に出家して世欲を貪らざらんには、此功德を以て當に彼人の所願をして成就せしめんことを」。便ち頌を說いて曰さく、

「彼の悉達太子は　　世間の最勝人なり
若し所願を求めんと欲せんには　　當に速に成就せしめんことを」。

爾の時菩薩は此二女の斯の頌願を說き已れるを見て二女に告げて曰はく、「汝が所願に依はん」。時に二女人は菩薩の此語を聞くや禮足して退りぬ。菩薩は乳粥を食したまへるに因り氣力充盛して六根滿實せりければ、尼連禪河岸より遊行觀察して淸淨處を覓めて將つて安止せんと欲し、[一五]孤石山に雜華菓ありて莊嚴圍遶せるを見たまひ、菩薩は見已りて卽ち此山に登り石上を平整して結跏趺坐したまへり。爾の時此山忽ち自ら裂碎せりければ、菩薩は起立して是疑念を作したまはく、「我が惡業尙ほ盡きざるに由りての故に、山をして碎かしめたるなりや」。空中の諸天は菩薩此事を疑念したまへるを觀知して、卽ち空中に於て菩薩に告げて曰さく、「世尊、昔に惡業なし、此は是れ菩薩成道したまふの常法なり。善根功德は身心に充滿しぬれば、一切の地力は載するに勝ゆること能はざればなり。今の此地は是れ菩薩の菩提を成じたまふの處には非じ、一切大地の力は二種の人を負載することを能はず、一には善最も多き者、二には惡最も多き者となり。菩薩は善業甚だ多ければ、此山自然に摧碎せし所以なり。今尼連禪河を過ぎて東に金剛地あり、彼處は過現未來の諸の如來等の皆其上に於て最勝智を得たまひ、已得・現得・當得したまふなり」。菩薩は聞き已りて將に其地に往かんとして足を擧げたまひしに、步步に皆蓮花を生じ、四大海水は蓮花池を成じて菩薩を來迎し、

【一五】孤石山。ri-brag-chen-po（リ チャク チェン ポ）、「大岩の山」の義。衆許經にも一石山とあり。

粥を寶鉢中に瀉げるに、天帝釋は來りて二女の前に立ち、梵天淨居天等は此を以て遙立せり。時に彼二女は旣にして帝釋の前に在りて立てるを見て、卽ち其乳鉢を捧げて帝釋に施與せんとせるに、帝釋報じて曰はく、「我に勝れる者に施せ」。二女問うて曰はく、「今誰ぞ汝に勝れたるは」。答へて曰はく、「彼の梵天王なり」。爾の時二女は復其乳を持して梵天王に施さんとせるに、梵天王報じて曰はく、「我に勝れる者に施せ」。問うて曰はく、「誰ぞ汝に勝り如くは」。答へて曰はく、「彼の淨居天なり」。時に此女人は復乳鉢を以て淨居天に奉ぜんとせるに、淨居天報じて曰はく、「我に勝る者に施せ」。又復問うて曰はく、「誰ぞ汝に勝れるは」。答へて曰はく、「彼の菩薩は今尼連禪河に見在して洗浴したまへるも、無力の爲の故に出づるを得ること能はず、彼の人は我に勝るれば汝當に施與すべし」。時に二女人は卽ち其乳粥を持して尼連禪河に往き、將つて菩薩に施さんとせり。爾の時河岸に女樹神あり、菩薩の虛羸して岸に上ること能はざるを見て卽ち樹より半身を出し、手を展べて菩薩を接けんと欲せり。菩薩問うて曰はく、「汝は是れ何の身なる」。樹神答へて曰さく、「我は是れ女人なり」。菩薩報じて曰はく、「我れ汝に觸るゝこと能はざれば、可しく我が爲に一樹枝を低るべし、我れ攀ぢ出でんと欲すれば」。時に彼の樹神は卽ち樹枝を低れしに、菩薩は攀ぢて出づるを得、便ち衣服を著け河岸の樹下に在りて坐したまへり。時に二女人は便ち粥を持して至り、曲躬恭敬して菩薩に奉施せるに、菩薩は自他の利を以ての故に便ち其粥を受けたまひ、又便ち問うて曰はく、「此寶器をも兼せて總べて能く施すなりや不や」。二女答へて曰さく、「聖者、今總べて奉施しまつらん」。菩薩は爾の時卽ち其粥を喫し、其寶鉢を洗ひて尼連河中に擲げたまへるに、龍王は便ち其鉢を接けて龍宮に入れり。釋提桓因は旣にして之を見るや、化して妙翅[一四]と爲りて龍宮に飛入し、龍王を恐嚇して鉢を奪うて去り、三十三天に於て一鉢塔を置け時を以て供養せり。菩薩は二女に問うて曰はく、「今汝が我に施せるは、何の願かあらんを欲せるなる」。二女答へて曰さく、「聖者、曩

【一四】妙翅。金翅鳥なり。

けぬ。時に此二女は先に聞けるらく、『雪山の南、[一二]傍弥伽河の側なる劫比羅仙住處に遠からざる劫比羅城の釋迦種中に一太子を生じ、端正具足して衆相圓滿し、一切衆生にして見ん者は喜悦し、相師は占して云へり、「此兒にして若し王位を紹がんに當に轉輪王たるを得べけん」と』。此女は聞き已るに十二年中に於て常に貞潔を守れり。人間の常法として、若し女人ありて能く貞潔を守ること十二年を滿たさんには、卽ち轉輪王の與に妃と爲る合きなりと。故に彼の二女は十二年內に於て十惡を犯さず、十二年を滿たし訖るに是の思念を作さく、「我れ今十二年中に於て淸淨行を作し訖りぬれば、應に[一三]十六轉の乳粥を以て苦行仙人に供養すべきなり」。所謂十六轉とは一千牛の乳もて一千牛に飲まし、復一千を以て五百に飲まし、復五百を以て五百に飲まし、復五百を以て二百五十に飲まし、復二百五十を以て二百五十に飲まし、復二百五十を以て一百二十五に飲まし、復一百二十五を以て一百二十五に飲まし、復一百二十五を以て六十四に飲まし、復六十四を以て六十四に飲まし、復六十四を以て三十二に飲まし、復三十二を以て三十二に飲まし、復三十二を以て十六に飲まし、復十六を以て十六に飲まし、復十六を以て八に飲まし、復八を以て八に飲まし、復八を以て四に飲ましむるなり。是念を作し已るに卽ち此乳を取りて頗璃器中にて煮て粥と爲せり。煮るの時に當りて、淨居諸天は菩薩此粥を食し已りて卽ち菩提道を成じたまふを觀見して(曰はく)、「我等は應に當に其威力を助くべし」と。卽ち上藥の速に力を得る者を將つて乳器中に置れ幷に之を衞護せるに、當の時粥は種種の輪相を現ぜり、時に一外道あり名けて[一四]近行と曰へるが、來りて此粥に種種の相あるを見て是念を作して云はく、「此粥を食せん者は必ず無上智慧を證せん、我れ應に乞ひ取めて之を喫すべし」。念じ已りて便ち去り、粥既にして熟し已るに、時に彼の外道は却り來りて二女に告げて曰はく、「我れ遠くより來りて甚だ大に飢乏せり、今此乳粥は可しく分ちて我に施すべし」。二女報じて「我れ汝に與へじ」と曰へるに、默然して去りぬ。時に二女人は頗梨器中より其乳

【一二】傍弥伽河。傍耆羅河に相當す、律六十四、註(一五の八)參照。

【一三】十六轉乳粥。藏文には「十六度に於て其自身轉ぜる、蜂蜜の如く甘き乳粥を供養せり」とあり。

【一四】近行。Ñer-hgro(ネルロウ)、「近くに行く」の義、衆許摩訶帝經に此名なし。

去來に抽挽し、便ち菩薩の耳に語げて言はく、「此の坌土の鬼を看よ」。又復重ねて言はく、「坌土の鬼よ」と。復土塊瓦石を以て菩薩の身上に擲てり。斯等は菩薩の身に於て是の如くに戲弄せりと雖、爾の時菩薩は恚心を起さず、麁惡語無く、菩薩は此の如くに忍び難きを能く受けたまへり。是時菩薩は勤策を發して息めず、身體を輕安にして未だ曾て休廢せざりしを以て、正念を習積して意に疑慮なく、心を定に專らにして三摩地に住したまへり。[八]爾の時菩薩は復是念を作したまはく、「諸有苦を捨てんと欲するが故に諸行を勤修するも、我が所受の苦は人の超過する無きも、此は正道に非ず正智に非ず正見に非ざれば能く無上等覺に至るには非じ」。菩薩は復是念を作したまはく、「何か正道・正智・正見と爲して無上正等菩提に至るを得るなる」。又是念を作したまはく、「我れ自ら億知す、父釋迦淨飯宮內に住して田里を撿校せる(時)、贍部樹下に而し坐して諸の不善を捨てゝ欲惡の法を離れ、尋伺の中に諸の寂靜を生じて安樂の喜を得て便ち初禪を獲たるを。此ぞ應に是れ道預流の行、是れ正智・正見・正等覺なるべきなれ。我れ今善修し成就すること能はじ、何を以ての故に、我れ羸弱せるが爲に。然り、我れ應に意に隨せて喘息を爲し、廣く諸の食飯豆酥等を喫し、油を以て體に摩し溫湯もて澡浴すべし」。是時菩薩は是念を作し已りて便ち諸根を開きて情に隨せて喘息し、諸味を飲食して禁制せず、塗拭沐浴は意を縱にして爲したまへり。時に其の五侍者は互に相謂ひて曰はく、「此の沙門喬答摩は懈怠懶惰にして而し多事を懷ひ、受用に度なく斷惑錯亂し、今既にして廣く食飲豆酥油を喫して塗拭澡浴せり、今や少許も證獲すること能はじ、必ず所得なけん」。便ち菩薩を捨てゝ漸次に而し行いて波羅痆斯仙人墮處施鹿園中に至り、同じく是願を作さく、「若し世間に阿羅漢あらんには我は隨ひて出家せん」。此五人は住を同じくし行を同じくせりければ、因りて五衆と名けぬ。菩薩は爾の時漸く飲食を加へて身力强健たりければ、卽ち[一〇]西那延村(唐に會軍村と言ふなり)に往きたまへり。彼に村主あり名けて軍將と爲し、將に二女ありて一は歡喜と名け、二は歡喜力と名

【八】本文には爾時菩薩復作是念、諸有欲捨苦故。勤修諸行、我所受苦無人超過、此非正道非正智非正見、……………とあり。

【九】尋伺。事理を尋求する上の麁細の別なり。

【一〇】西那延村(sonini)。前註(四の三三)西那耶尼聚落に同じ。

上正道を得ること能はじと。菩薩は爾の時此喩を悟り已りて自ら共念を作したまはく、「我れ今應に當に日に一麻を食すべし」と。一麻を食したまへりと雖常に飢火のために燒逼せられ、其身肢節は轉更に羸瘦したまへり。飢火息まざりしが爲に復日に一秔米を食したまへるも飢火息まざりき。復日に[三]一拘羅を食したまへるも猶ほ還羸瘦し、日に[四]一蓽豆を食したまへるも猶ほ還枯憔し、復日に[五]一甘豆を食したまへるも猶ほ尙ほ枯瘦し、日に[六]一大豆を食したまへるも猶ほ復困顇したまへり。爾の時淨飯王は此苦行を聞いて懊惱啼泣し、諸の宮人婇女と及に身の瓔珞を脫して草を敷いて坐し、復日に一麻・一米及び一豆等を食せり。爾の時耶輸陀羅は少食を以ての故に懷娠漸く損せりければ、王は是事を聞きて是の如きの念を作さく、「若し菩薩の苦行止まずして耶輸陀羅更に斯語を聞かんには、必ず大に憂惱し其娠墮落して便ち死に至らん。我れ今當に方便を設けて、菩薩の苦行を知らざらしめん」。時に淨飯王は諸の宮人に告ぐらく、「其の菩薩の苦行は耶輸陀羅をして知らしむること勿れ」。幷に往來の使者に勅すらく、「菩薩の苦行は餘人をして輙ち此事を知らしむること無れ」。淨飯王は使者より菩薩の苦行を聞けりと雖、諸の方便を以てして諸の宮人に告ぐらく、「菩薩は今者已に食せり」と。菩薩は爾の時食せる所は一麻一米なりしも、乃し自ら念言したまはく、「今此法を爲むるも正智に非ず正見に非ざれば無上の道を得ること能はじ。我れ當に別に苦行を修して諸の穢食を食すべし」。復是念を作したまはく、「何の穢食をか食すべき。應に新生の犢子の未だ草を喫はざる者の糞尿せしところを取るべし」。是念を作し已りて便ち取りて食し、此物を食せりと雖仍ほ食力をして消盡せしめ、然して後復食せり。既にして食し已るに便ち屍林の下に於て死人及び諸の枯骨に枕臥し、右脅を以て地に著け兩足を蓋ね、[七]內に光相を念じて如是に繫念し、行住坐臥に曾て暫らくも捨つること無かりき。菩薩の若し坐したまへるには、諸の村野男女あり菩薩の坐して寂然として定なるを見て、手に草莖を執り菩薩の耳穴に穿ちて左右よりして出だし、是の如くに戲笑して

【三】一拘羅。kola の音寫、棗なり。
【四】一蓽豆。rgya-sran lib-ru-gcig（ギヤ サン チユ チク）、「一粒の黍荳」なる義。
【五】一甘豆。mon-sran-gre-bu（モン サン チエ）、「荳顆」便ち一粒の mūga なり。
【六】一大豆。mon sra sdo（モン サン チエ）、「綠荳」便ち一粒の mudga なり。
【七】本文に內念光相如是繫念とあり。如是は如理・如法に同じ。

卷の第五

（菩薩の苦行成道）

爾の時三天人ありて菩薩の所に詣り、菩薩の身を見て遞に相議して曰ひ、其一天は云はく、「此の喬答摩は是れ黑沙門なり」。其二天は云はく、「此の喬答摩は黓色沙門なり」。第三天は云はく、「黑に非ず黓に非ず、是れ蒼色沙門なり」。天議に因りての故に菩薩は遂に三名を得たまへり。菩薩の所有身上の光色は皆悉く變沒せるも、菩薩は是時中に於て曾て聽聞せざりしに、心中に自ら三種の譬喩辯才を生じたまへり。言ふ所の三とは、一には濕木の潤ありて水よりして出で、火鑽も亦濕へるに、人あり遠くより來り、火を求めんとて濕へる火鑽を以て彼の濕木を鑽りて火を生ぜしめんと欲すとも、火は出づるの法なけん。若し沙門婆羅門ありて身に濕を離ると雖も、心猶ほ愛染して欲に耽り愛に耽り欲に著し欲に處り欲を悅しみ欲を伴として、是の如き等ありて常に心中に在らんに、彼の諸人等は縱其身を苦しめて諸の極苦を受け諸の酸毒を忍びて此の如きの受を受けんとも、正智に非ず正見に非ざれば無上正道を得ること能はじと。二には濕木に潤ひありて水邊に在り、人ありて遠くより來り、火を求めんとて乾ける火鑽を以て其潤木を鑽りて火を得んと欲すと雖火は然ゆるの法なけん。是の如くに沙門婆羅門にして身に欲を離ると雖、心に猶ほ愛染して諸欲中に於て欲に耽り欲を愛し欲に著し欲に處り欲を悅しみ欲を伴として、此の如きの過ありて常に身心に在らんには、縱其身を苦しめて極苦を受け諸の酸毒を忍びて此の如きの受を受けんとも、正智に非ず正見に非ざれば無上正道に至ること能はじと。三には朽爛せる木にして津潤あること無くして濕岸に在り、人あり火を求めんとて火鑽を以て之を鑽ると雖火然ゆるの法無けん。是の如くに沙門婆羅門にして身に欲を離ると雖、心に猶ほ愛染せんには、苦受を受けんとも、正智に非ず正見に非ざれば無

【一】　三種譬喩辯才。

【二】　受（Ve'nn'）。苦・樂・不苦不樂の感覺、今は極苦痛をいふ。

亦復是の如くなりき。菩薩は是に於て轉精進を加へて身を輕安にするを得、所念に隨ひて修し、種種に苦受を受けたまひつゝも、乃至、心に正定に入るを獲ること能はざりき。菩薩は爾の時少食を以ての故に眼睛却き入り、猶し人に挑り去られしが如く、井中に星を見るが如く、菩薩の眼睛も亦復是の如くなりき。菩薩は是に於て復倍精進して諸の苦受を受けたまひつゝも、乃至、正定に入るを獲ざりき。何を以ての故に、多時よりして熏習せられたるに由りての故に。菩薩は少食を以ての故に、兩脅の皮骨の枯虛して高下せること猶し三百年の草屋のごとくにして、菩薩の兩脅も亦復是の如くなりき。菩薩は爾の時轉倍諸の苦受を受けたまひつゝも、乃至、心に正定に入るを獲ること能はざりき。多時よりして熏習せられたるに由りての故に。菩薩は少食を以ての故に脊骨竊屈せること猶し箜篌の如くにして、起たんと欲しては則ち伏し、坐せんと欲しては仰倒し、腰を端して立たんと欲しては上下隨はず、菩薩の困頓せること乃し是に至り、手を以て身を摩しては諸毛隨ひ落ちぬ。菩薩は復是念を作したまはく、「今我が所行は正智に非ず正見に非ざれば無上菩提に至ること能はじ」と。

加へて脹滿定に入らん」と。此定に入り已りて其氣を擁閉したまへるに、其氣は上に覆りて頂を衝き、其頂結痛せること猶し力士の其繩索を以て勒めて羸弱人を縛繫せんに、頭頂悉く皆脹滿せんが如くなりき。菩薩は是の如き等の最極苦を受け已りたまひつゝも、乃至、正定を得ること能はざりき。何を以ての故に、多時よりして熏習せるに由りての故に。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ今應に當に倍功用を加へて脹滿定に入るべきなり」。其定に入りたまひ已るに、其氣滿脹して其腹結痛せること屠牛人の其利刀を以て牛腹を刺すが如くなりき。菩薩は是の如きの苦受を受けたまひつゝも、乃至、正定を獲ること能はざりき。何を以ての故に、多時よりして熏習に染みたまへるに由りての故に。菩薩は復是の念を作したまはく、「我れ今應に當に倍精進を加へて脹滿定に入るべきなり」。既にして入定し已りて口鼻を閉塞したまへるに、其氣脹滿して身體に周遍せりければ、其身盛熱せること猶し二力士の羸弱人を執へて猛火に內るゝがごとくなりき。菩薩は是の如くに種種に苦受を受けたまひつゝも、乃至、正定に入るを得ざりき。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ今諸の食飮を斷ぜんに如かじ」。爾の時諸天は菩薩の諸食飮を斷ちたまへるを觀見して、菩薩の所に詣り告げて曰さく、「大士、汝今人間食を嫌へり、我等願はくは甘露を以て菩薩の毛孔に入れまつらんとす、汝應に受取せらるべし」。菩薩は便ち是念を作したまはく、「一切諸人は已に我れ人間食を斷ぜるを知れり、今甘露を受けんには便ち妄語を成じて邪見の一切衆生に於けるが若くに、妄語邪見に由りての故に身亡滅して後惡趣に墮落して地獄中に生ずれば、我れ今應に當に此事を受けざるべし。然り我は今應に少しく人食を通ずべし、或は小豆・大豆及び牽牛子の煮て其汁を取りて日に常に少喫せん」。是念を作し已りて天語を受けたまはず、遂に小豆・大豆及び牽牛子の煮汁を少喫したまへり。是に於て菩薩の身體肢節は皆悉く萎瘦して肉なきこと、八十歲女人の肢節枯憔せるが如く、菩薩の羸瘦も亦復是の如くなりき。爾の時菩薩は少食に由りての故に、頭頂は疼枯し又

體に流汗せんが如くにして、菩薩は其身心を伏すること亦復是の如くなりき。此に因りて轉精進を加へて曾て暫らくも捨てたまはざりければ、身を輕安にするを得て障礙なきを獲、其心を調直して疑惑あることなかりき。〔二八〕菩薩は是の如く極苦・苦苦・不樂苦を作し、衆苦を受けたまへりと雖其心に猶ほ自ら正定に安んずる能はざりき。爾の時菩薩は復是念を作したまはく、「我れ今諸根を閉塞して放逸せしめず、喘動せざらしめて寂然として住せんに如かじ」と。是に於て先に其氣を攝して出入せしめず、氣出でざるに由りての故に氣上りて頂を衝き、菩薩は因りて遂に頂痛したまへること、猶し力士の、諸鐵嘴を以て弱人の頂を斫るが如くなりき。菩薩は爾の時轉精進を加へて退心を起さず、是に由りて身を輕安にするを得、修むる所に隨順して其心專ら定にして疑惑あること無かりき。是の如く種種に自强考責して極苦・苦苦・及び不樂苦を忍受し、其心中に於て曾て暫らくも捨てたまはざりしも而も猶ほ正定に入るを得ざりき。何を以ての故に、多生よりして熏習せられたるに由りての故に。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ今應に當に轉勤固を加へて諸根を閉塞し、氣をして内に擁せしめて禪定に入らん」。是念を作し已りて便ち其氣を閉ぢて喘息せしめたまはざりしに、其氣は復頂より下り耳根を衝きて氣は耳に滿てること、猶し積氣の嚢袋の口に聚まるが如くなりき。是の如きの種種の諸苦を受けたまへるも、乃至、正定に入るを得ること能はざりき。何を以ての故に久遠時よりして熏習せられたるに由りての故に。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ當に倍精進を加へ、内に其氣を攝して其をして脹滿せしめて禪定に入るべきなり」と。其口鼻を閉ぢて氣をして悉く斷たしめたまひしに氣既にして出でざれば却下して腹に入り、五臟皆滿ちて其腹便ち脹ること滿嚢袋の如くなりき。復功用を加へて其身を輕安にし、修むる所に隨順して其心專ら定にして疑惑あること無かりき。菩薩は是の如く、種種に苦受を受けたまへるも、其心猶ほ正定に入らざりき、多時よりして熏習に染みたまへるに由りての故に。菩薩は復是念を作したまはく、「我れ今倍

【二八】本文には菩薩如是作極苦苦不樂苦、雖受衆苦其心猶自不能安於正定とあり。次下には明本には極苦・苦苦・不樂苦とあり。樂苦等を苦苦・壞苦・行苦の三苦に對配し得ざるに非ざるも、藏文には「菩薩は忍び難き、荒々しき、不樂の受（苦痛）を心にうけたまひ、是の如くに身を修めたまへるも意は完全（正定）に到達したまはざりき」とあるにより、たゞ痛楚至極せる意に解すべきなり。

の道は智慧に非ず正見に非ざれば、阿耨多羅三藐三菩提の果を得ざるなり、是れ垢穢道なればなり」。彼の仙に白して曰はく、「汝は今好住せよ、我れ辭して而し去れば」。此は是れ菩薩の第二阿邏利耶なりき。菩薩は爾の時山林に遊行したまへり。時に淨飯王は菩薩を憶念し、使をして尋訪せしめて道路に相望み在所の山林悉く皆處を知ら(しめ)しに、既にして太子は彼の水瀨を辭し侍者あること無くして獨り山林を行りたまへりと聞き、卽ち童子三百人を差して往きて太子に侍せしめぬ。天示城王は既にして是事を聞きて、復二百の童子を差して往いて太子に侍せしめぬ。是の如くして五百の童子は菩薩を圍遶し、諸の山林に於て意に隨せて遊觀せり。爾の時菩薩は便ち是念を作したまはく、「我れ今林間に於て靜住せんと欲す、其の多人をして圍遶せしめて而し甘露を求むべからじ、然り我れ應に侍者五人を留めて餘は放還すべし」。是時菩薩は母の宗親中よりして兩人を留め、父の宗親中よりして三人を留め、而し此五人をして菩薩に承事せ(しめ)て餘は各々國に還らしめたまへり。爾の時菩薩は此五人と與に圍遶せられて伽耶城の南に往いて　烏留頻螺西那耶尼聚落に詣り、四邊に遊行して尼連禪河の邊に於て一勝地を見たまへり。樹林美茂し其水清冷に底に純沙あり、岸平かに水滿ちて易く取り汲みうべく、青草は地に遍くして岸闊く堤高く、雜花樹あり岸上に在りて滋茂して殊勝なりき。菩薩は此殊勝の地を見て是の如きの念を作したまはく、「此地は樹茂り其水清冷にして純沙あり、岸平かに水滿ちて易く取り汲みうべく、青草は地に遍くして岸闊く堤高く、雜花樹あり岸上に在りて滋茂して殊勝なり。若し人ありて禪慧を修めんと樂はん者は可しく此地に居すべし、我れ今此地に於て諸の寂定を念じ、此樹林中にて諸の煩惱を斷ぜんと欲す」。菩薩は是念を作したまひ已るに、卽ち樹下に於て端身にして坐し、舌を以て腭を拄へて兩齒相合し、善く氣息を調へ其心を攝住して心をして摧伏し壓捺し考責せしめたまひしに、該の毛孔よりして皆悉く流汗せること、猶し猛士の一弱人を搦めて拉搯し壓捺して復彼の情を惱まさんに、其人は實に卽ち遍

【一七】烏留頻螺西那耶尼聚落(uruvilvā-sen ānigāma)。藏文には「優樓頻螺迦葉波の將軍聚落」とせり。

之を得たるなり」。菩薩報じて曰はく、「仁者、此等の智慧……乃至、無想定は我も亦之を得たり」。彼仙は報へて曰はく、「喬答摩、汝既に之を得たるは我も亦之を得たり。我れ既に之を得たるは汝も亦之を得たり。今や我二人は此弟子衆に可しく共に此法の義理を教授すべし、一種得の故に」と。此の羅羅仙は卽ち是れ菩薩の[二五]第一教授阿遮利耶なりき。彼の羅羅仙は菩薩の智慧を以ての故に歡喜供養し親好して住せり。菩薩は爾の時是の如きの念を作したまはく、「今此の道法は智慧に非ず正見に非ざれば、阿耨多羅三藐三菩提道を得ざるなり、是れ垢穢道の故に」。菩薩は知り已りて羅羅に告げて曰はく、「仁者は好住せよ、我れ今辭し去らん」。菩薩は爾の時山林を遊行して[二六]水獺端正仙子(舊に鬱頭藍と云へるは此れ誤なり)を見たまひければ、卽ち往きて親近し恭敬問訊して彼仙に告げて曰はく、「汝が師は是れ誰なりや、我れ共に修學せん」。彼の仙報じて曰はく、「我に尊者無し、汝修學せんと欲せんには意に隨ひて礙なけん」と。菩薩問うて曰はく、「汝、何の道をか得たる」。彼仙報へて曰はく、「仁者喬答摩、我は……乃至、非非想定を得たり」。菩薩は此を聞いて私に是念を作したまはく、「此の水獺仙にして信心あるは我も亦之あり、精進あり念あり善あり智あるは我も亦之れあり。彼れ是の如き法……乃至、非非想定を得たるには我れ豈に得ざらんや」。默然として去りて彼の諸法を念じ、未だ得ざるは得んと欲し、未だ見ざるは見んと欲し、未だ證せざるは證せんと欲し、卽ち閑林に往き專ら此道を修めて勤めて精進を加へければ、久しからざるの間に……乃至、非想非非想定を證せり。是定を得已るに水獺仙所に還り詣り、彼の仙に白して曰はく、「今汝が此法は豈に自ら得たらんや」。答へて曰はく、「是の如し」。菩薩又曰はく、「大仙、此智慧……乃至、非想非非想定は我も亦之を得たり」。水獺報じて曰はく、「汝既に之を得たるは我も亦之を得たり、我れ既に之を得たるは汝も亦之を得たり。今我二人は可しく共に同住して弟子を教授すべし、何を以ての故に、得法同じきが故に」と。菩薩は爾の時是の如きの念を作したまはく、「此の如き

【二五】第一教授阿遮利耶。最初の教授師なる義。阿遮利耶(ācāriya)に教授と依止の二種ある中、教授阿闍梨なりとする意なり。

【二六】水獺端正仙子(udraka-rāmaputra)と本文には菩薩爾時遊行山林見水獺端正仙子舊云鬱頭藍者此誤也卽往親近恭敬問訊……とあり。舊云以下傍線せる所は義淨の註なりと見るべきなり。衆許經には烏捺囉迦囉摩子とせり。「水獺(udraka)喜樂子」なる義なり。

仆坐臥に隨ひたまへり。彼苦行の常に一足を翹げ一更に至りて休めるを見ては、菩薩も亦一足を翹げ二更に至りて方に休みたまひ、彼苦行の[二三]五熱にて身を炙り一更に至りて休めるを見ては、菩薩も亦五熱にて身を炙り二更に至りて方に休みたまひ、是の如く苦行しては皆彼に倍したまへり。仙人見已りて共に相議して曰はく、「此は是れ大持行の沙門なり」。猶し此緣の故に大沙門と名けぬ。爾の時菩薩は諸仙に問うて曰はく、「諸大仙等、是の如き苦行は何の願をか有らんと欲せるなる」。一仙報へて曰はく、「我等は帝釋天王たるを得んことを願へるなり」。更に一仙は曰はく、「我等は大梵天王たるを得んことを願へるなり」。一仙は又曰はく、「我等は欲界魔王たるを得んことを願へるなり」。菩薩は爾の時是語を聞き已りて便ち自ら是念したまはく、「此等の仙人は天上人間に輪廻して絕えず、此は是れ邪道にして淸淨道に非じ」。菩薩は既にして仙人の垢穢道を行ぜるを見て、卽ち便ち之を棄てゝ[二四]歌羅羅仙所に詣りたまへり。既にして彼に至り已るに合掌恭敬して相對して坐し、彼の仙に問うて曰はく、「汝が師は是れ誰なりや、我れ共に梵行を學ばんと欲す」。彼仙は報へて曰はく、「仁者喬答摩、我に尊者なし、汝學ばんと欲せんには意に隨ひて礙なけん」。菩薩は問うて曰はく、「大仙、何の法果をか得たる」。仙人報へて曰はく、「仁者喬答摩、我は無想定を得たり」。菩薩は此を聞き私に是念を作したまはく、「羅羅が信心は我も亦信心せり、羅羅が精進あり念あり善あり智あるは、我も亦之れあり。羅羅仙人が見得せる如許の多法乃至、無想定、是の如きの法は我れ豈に得ざらんや」。爾の時菩薩は默然として去りて彼の諸法を念じ、未だ得ざるは得んと欲し、未だ證せざるは證せんと欲し、未だ見ざるは見んと欲したまへり。菩薩は爾の時獨閑林に處して專ら此道を念じ勤めて精進を加へ、是事を作し已りて久しからざるの間に便ち此法を證見するを得たまへり。此法を得已るに還りて乃し彼の羅羅仙所に至り、羅羅に白して曰はく、「今汝が此法乃至、無想定は豈に自ら得たらんや」。彼仙報へて曰はく、「是の如し喬答摩……乃至、無想定は我れ自らにて

【二三】五熱。四方に火を燃せると、上に太陽の熱とあり、其苦熱の中に身をおくなり。

【二四】歌羅羅仙。衆許經に阿邏拏迦邏摩(ār ḍakālāma)とせり。「遠くに飛ぶ(āraḍa)工巧を知れる子」なる義なり。

大王、一國あり　雪山の傍に住在し
財食甚だ豐足せり　名けて嬌薩羅と曰ひ
甘蔗にして喬答摩と曰ひ　彼中に住せるは釋迦なり。
我は是れ刹利種にして　世間の欲を樂はず
若し人、大地　山林及び海濱を御し
諸珍寶を具有せんとも　貪心猶ほ未だ足せざること
薪を以て猛火に投ぜんがごとく　貪欲も亦是の如し
險途中に怖畏し　御者は常に憂懼せん
諸苦は欲を根と爲し　能く善法を覆ふ
我れ昔出家せる時　諸欲は皆棄捨せり
譬へば大雪山の如く　風吹かんに尙ほ能く動ぜんも
我心は解脱に依り　諸欲も牽くこと能はず
世間の欲を驅馳し　生死輪は常に轉ぜり
國主、唯我のみ能く　諸の怖畏を解脱せり
我は欲の愆過を知り　涅槃寂靜を見て
我れ今當に捨棄して　清淨の樂に往詣すべし。」

爾の時頻毘娑羅王は是語を聞き已りて菩薩に問うて曰さく、「汝出家士、此苦行を作して何の願をかあらんと欲したまふなる」。菩薩報へて曰はく、「阿耨多羅三藐三菩提を得んことを願へり」。王曰さく、「汝若し道を得んには應に當に我を念ずべし」。報じて曰はく、「汝が所願に依はん」。此語を說き已るに菩薩は卽ち耆闍崛山の傍なる仙人林下に往き、既にして彼に到り已るに彼仙衆の行

此出家人は當に　何處に住せるかを觀ぜり。
彼は次第に乞食して　門を[二]歷ること六家に至り
鉢中、食既に滿ちければ　如法に其鉢を捧げぬ。
菩薩は乞食し已りて　默然として城外に出で
彼の[三]般茶林に往きて　清淨に自ら安止したまへり。
使者は處を知り已りて　卽ち一人をして守らしめ
一は報ぜんとて速に城に還り　彼國王に報じて曰はく、
天王、彼苾芻は　今、般茶山に在りて
坐せること猛虎兒の如く　山に處すること師子の如し。
王は是言を說くを聞くや　卽ち諸の寶輅に登り
群臣共に圍遶して　速に彼の所居に詣らんとて
彼の般茶山に至りしに　王は車輅より下り
步行して前みて往詣し　便ち卽ち菩薩を覩
恭敬して相問訊し　王は卽ち相對坐して
彼の寂靜住を見て　便ち是言を作して曰はく、
汝、少年苾芻　今是れ盛壯時に
端嚴にして技藝多きに　如何が自ら乞食せる、
汝は何の族姓に生ぜる　我れ汝に國宅を與へ
幷に諸の婇女を給して　種々に具足せしめん。
菩薩は是言を聞きて　頌を以て而し答へて曰はく、

【二】歷門六家。乞食作法を示す。七家に至りて食を得ざるには其日は絕食するなり。

【三】般茶林(Pāṇḍava)。般茶婆の略なり。

力ありて一切智を具したまへば、[二〇]迦囉毘囉拘那一十葉を取りて綴りて一鉢と作し、威儀寂靜にして城に入りて乞食したまへり。時に頻毘娑羅王は樓に在りて觀望し、遙に菩薩の行步端正にして如法に僧伽胝衣を被、一鉢を捧持し、如法に瞻視し威儀庠序にして次第に乞食したまへるを見、是事を見已りて私に自ら念言すらく、「我が王舍城中の諸の出家人にして未だ此の若きの者あらじ」。而ち頌に說いて曰はく、

「我れ今出家を讃ぜん　是の如きの賢善者は
生死を思惟するが故に　彼人要ず出家せん
在家は諸苦に逼まられ　糞穢來りて煎迫す
出家は禪悅を味ひ　智者は出家を樂ふ
身心倶に出家せんに　諸惡は皆捨離し
口業も亦清淨にして、正命以て自活せん。
聖、摩竭國に遊び　漸く王舍城に至り
心を攝して禪念に在き　次第に乞食を行ぜり。
國主は高樓に在りて　此聖者を遙見し
即ち歡喜心を發して　諸の近臣に告げて曰はく
汝等當に彼を觀ずべし　勝相皆具足し
形容甚だ端嚴にして　地を視て如法に行けるを
智者は遙視せず　此れ賤種の生に非らじ
即ち使者をして觀ぜしむらく　彼れ何處に住在せるかを。
使者は王命を奉じて　即ち彼人に隨ひ行き

【二〇】迦囉毘囉拘那。çin ka-ra-bi-rahi lo-ma（シンカラビラ、イロマ）、「カラビラ（karavira）樹の葉」なる義。此樹の花は華鬘に用ひらる（巴英辭書）。拘那の字義明かならず。或は kuṇa（ゆがめる、ねぢれたる）の音寫にして、「乾枯せる」意にあらざるか。衆許經には此語なし。

せり。爾の時菩薩は此衣を得已りて便ち即ち之を著けたまへるに、衣窄く身大にして遍く體を覆はざりければ、是念言を作したまはく、「此の出家服は小にして受用に堪へじ、若し威力あらんには、願はくは、「自ら寬大となりて今我が體をして覆は(しめ)んことを」。菩薩及び天力の威の故に其衣は即ち大となれり。菩薩は爾の時復自ら念云したまはく、「我れ今既にして此衣を被たるに出家の相を具へぬ、當に應に諸の苦惱者を救濟すべけん」。即ち先に著せる細妙の衣を以て將つて帝釋に與へたまひしに、天帝は得已るに將つて三十三天に還りて恭敬供養せり。換衣したまへる所は諸婆羅門居士長者は共に此地に於て一制底を造り、名けて受出家衣塔と爲せり。爾の時菩薩は既にして剃頭し袈裟を被たまひ已るに、林野中に於て處々に遊行して[一九]婆伽婆仙人所に至り、其仙人の掌を以て頰を支へ思惟して住せるを見たまひければ、菩薩問うて曰はく、「大仙、何の故にか此く思惟を作せる」。仙人報へて曰さく、「我が住處に多羅樹あり、先の時に於て金花金菓を生ぜるに忽ち今時に於て花菓自ら落ちぬれば、我れ今時に於て此事を思念せるなり」。菩薩報じて曰はく、「此の花菓主は諸の生老病死に逼切せらるゝを懼れて出家修道しぬれば、所以をもつて花菓自ら落ちしなり。若し花菓主にして出家せざりしならんには、當に園苑たるべかりしなり」。時に此仙人は是語を聞き已るに即ち便ち目を擧げて菩薩を熟視し、菩薩の儀容端正なるを見て便ち自ら思念して菩薩に告げて曰さく、「出家人とは豈に汝是なりしならんや」。答へて曰はく、「我は是なりしなり」。爾の時仙人は即ち大に驚悅し明目直視して菩薩を觀親し、便ち屈して坐せしめまつり諸の花果を以て恭敬供養せり。菩薩は坐したまふこと須臾の間にして仙人に問うて曰はく、「今此の地より劫比羅城に至るに幾里あるべきや」。仙人報へて曰さく、「十二踰膳那あり」。菩薩念曰したまはく、「此處甚だ城國に近くして諸釋種子の其數少なからされば恐らくは相煩亂せん、我れ當に弶伽河を渡るべし」。是念を作し已るに即ち弶伽河を渡り漸次に遊行して王舍城に至りたまへり。菩薩には善巧の

【一九】婆伽婆仙人 (Bhārgava) 衆許摩訶帝經には婆哩誐嚩と音寫せり。

已來六種の勤事を具せる婆羅門家に於て其胎形を受け、若し菩薩にして無上道を得たまはん時、「汝、惡性の馬」と言はるゝに當りて便ち宿念を得、生死の畏途中を超えて究竟涅槃の岸に登るなり。時に菩薩は袈裟を須めたまへり。[一八]無比城中に於て一居士あり、財寶富盛にして倉庫盈溢し諸眷族多きこと辟室羅末拏天王の如くなりき。時に彼居士は其同類種族中より女を取りて妻と爲し、既にして得て婦と爲して共に相娛樂し、俗禮もて和合して因りて一子を生じ、是の如くして乃し十子を生ずるに至りしに、皆悉く出家して辟支佛道を證せり。爾の時其母は此十子に疎布の衣服を與へしに、時に彼の十子は共に母に白して曰さく、「我は今便ち涅槃に入りぬれば此物を須ゐじ」。爾の時十辟支佛は母に白して言さく、「淨飯王子釋迦牟尼は當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべければ、願はくは母、此衣服を將つて可しく彼に施與したまふべし、必ず當に無量の果報を獲得すべけん」。是語を作し已りて卽ち宮中に於て十八變を現じ、火化して滅して無餘涅槃に入れり。其母は年老い困疾して將に死なんとせりければ、其衣服を持して女に囑付し具に前事を說けり。時に女は後時に染患して將に卒せんとせりければ、復此衣を持して樹空中に置き、樹神に告げて曰はく、「今此衣服は我が爲に守護し、淨飯王子の出家の日を待ちて當に持して之に與ふべし」。時に天帝釋は其下界を觀て乃し此衣の樹空中に在るを見、便ち往きて之を取り身自ら被著し、老獵師の形狀を作して弓箭を執持し菩薩の與に相近づきしに、菩薩告げて曰はく、「此は是れ出家人の衣なり、我が衣は貴妙にして是れ俗人の服たり、今相換へんと欲す、可しく得べきや不や」。獵師報へて曰さく、『我れ相與へじ、何を以ての故に、我れ若し汝が好服を取りて人間に行かんに、或は見る者ありて便ち言はん、「我れ汝を殺して汝が此衣を取れり」と』。菩薩報へて曰はく、「汝獵師、當に知るべし、一切世間の所有人衆は咸我に勇猛智慧ありて能く殺す者なきを知れり、誰か此を將らんとて能く我を殺せるものありとせんや、汝、須らく懼るべからず」。時に天帝釋は即ち跪きて衣を持し菩薩に奉與

【一八】無比城。衆許摩訶帝經には阿㝹波摩城とせり、五分律には阿㝹耶林とすれば anomā 河畔なる anupiyā 邑なり。

に至るべけん」。菩薩は是を聞きたまへりと雖、已に爲に菩提の資糧を得て久しく圓滿したまへるが故に、車匿の言に於て曾て念に在きたまはざりき。爾の時菩薩は卽ち車匿の手中より其執れる所の刀を取りたまひしに、其刀は鋒利にして青光もて色を湛へたることゝ青蓮花葉の如く、既にして其刀を拔きて卽ち自ら髮を割きて虛空中に擲げたまひしに、釋提桓因は虛空中に於て卽ち便ち捧げ接けて將つて三十三天に往き、此日至る每に三十三天衆を集め旋繞して供養せり。其割髮の地に信心の長者婆羅門等は一寶塔を營み、名けて割髮地塔と曰ひ、苾芻俗人は常に應に供養せり。菩薩は當に髮を割ち已りて車匿に告げて曰はく、「汝、我を見たりや不や、形容已に毀ちて心復堅固なるを。斯の如きの人、豈ぞ更に還りて人間に在る有らんや」。車匿曰さく、「不なり」。車匿卽ち自ら思念すらく、「今此太子は是れ刹帝利種にして情多く高慢なれば、我れ苦言すと雖終に移改せじ」。是念を作し已りて菩薩の足を禮し、乾陟馬王も亦菩薩を禮して便ち其舌を吐きて菩薩の足を舐めしに、菩薩は卽ち百寶の輪手を以て其馬背を撫で是言を作したまはく、「汝、乾陟よ去れ、我れ菩提を證せんに常に汝が恩を念ぜん」。車匿に告げて曰はく、「汝必ず應に我が乾陟を將ひて宮內に入るべからず」。〔一六〕車匿は悲泣して哽咽に勝へず視る所迷悶しつゝ路を歸還する時菩薩を顧みて前みぬ。菩薩の神德力を以ての故に二更中に於て彼に至りしに、車匿の還るに及びては路、七日を經て方に本國に至れり。既にして城門に到るに車匿は念言すらく、「我れ若し馬と與に同じく入城せんには、當に衆人の爲に尤怨せらるべく、我が身命或は存せざるべけん」。是の時車匿は苑林中に入り、且らく先に馬を遣はして城內に却り入らしめぬ。是時乾陟は既にして城內に入りて卽ち便ち悲嘶せるに　時に城中の人及び宮人等は馬聲を聞きて咸く皆忙遽せるも、菩薩を見ざりければ乾陟の項を抱きて悲號懊惱せり。然り畜生に常法あり、世間の情に於て解了せざるなきなり、況んや此馬王をや。爾の時乾陟は諸人等の號慟傷感せるを見るや、其氣迷絕して便ち殞ぬるに至れり。〔一七〕然り此乾陟は昔より

【一六】本文に車匿悲泣不勝哽咽、所視迷悶、還路時顧菩薩前、以菩薩神德力故於二更中便至於彼、及車匿還路經七日方至本國とあり。衆許摩訶帝經には行七晝夜至二更初とあり。

【一七】本文に然此乾陟從昔已來、於其六種勸事婆羅門家、受其胎形、若菩薩得無上道時、當言汝惡性馬、便得宿念、超於生死畏途中、登究竟涅槃岸とあり。藏文には「那地迦の六事に勤策せる婆羅門種に其胎を受け、菩薩にして無上等正覺を現證したまはん時、彼は惡性の馬（dman-rgod）と言へるを以て輪廻曠野を過ぎて究竟彼岸を成じて安穩涅槃に入るなり」とあり。然るに衆許經には以宿因緣生六業婆羅門家、利根精薄聰明多智、太子成佛之後、卽詣佛所聞法悟道得無生忍とあり。

是時菩薩は二更中を以て十二踰膳那を行きて馬よりして下り、卽ち瓔珞を解き車匿に告げて曰はく、「汝可しく馬及び我が瓔飾を將つて此より廻り去るべし。卽ち頌を說いて曰はく、

「此馬及び瓔飾は　可しく我が親屬に付ふべし
我れ今貪愛を捨て　此より法服を被ん」。

爾の時車匿は此語を聞き已るに聲を發して號哭し、悲感懊惱して涙下せること雨の如く、而し頌を說いて曰さく、

「獅子虎は群を成し　藪林惡獸の跡に
獨住して眷屬なし　聖者如何がしてか住せん」。

菩薩は爾の時頌を以て報じて曰はく、

「生者は獨自ら生じ　死者は亦自ら死に
苦者は還自らに受け　生死に伴あることなけん。

爾の時車匿は復頌を說いて曰さく、

「汝昔より常に諸の象馬に乘り　手足柔軟にして未だ苦を經ず
[14]攢搓せる刀石は斯地に滿てり　如何がしてか此に行住するに堪へん」。

菩薩は頌を以て報へて曰はく、

「假令少小より憍りて養育せられ　賢善及び諸の孤獨と
勇猛無畏の人に恭敬せられんとも　斯の如き等の類は咸く死に歸せん。
生老病死は相紛鬪し　速に來りて一切の人に逼迫す
[15]縱餘願ありて寬を少かざらんにも　能く須臾にして盡く磨滅せしめん」。

車匿は報へて曰さく、「太子、淨飯大王若し汝を見たまはざらんに、必ず大懊惱して便ち當に死

【一四】攢搓。簇り聚まりて大地に突出せる貌。

【一五】本文に縱有餘願不少寬、能令須臾盡磨滅とあり。

波頭摩花・分陀利花・曼陀羅花・摩訶曼陀羅花・旃檀・沈水香・抹香・和香にして以て菩薩に散じ、復種々上妙の衣服を以て空中に散じ、復空中に於て皷を撃ち螺を吹き諸の倡伎を作せり。而ち頌を作して曰はく、

「諸天は空中に在りて　悉く皆大に踊躍し
菩薩の前に抃舞し　菩薩を歌讃せり。
無邊の諸天衆は　彼の魔軍を擲捨し
或は音樂を作すあり　或は前に引くものありき。
或は復諸門を開き　或は花を以て來り散じ
或は馬足を扶くるありて　瞻仰し隨從して行けり。
或は復左に旋繞し　或は復左右に居し
多聞及び梵釋は　菩薩の路を先引せり。
一切の威德天は　隨從せさるもの無く
月の星中に在るが如くして　彼の聖者林に往けり」。

是の時菩薩は劫比羅城を出で已りたまへるに、梵釋天等は皆大に歡喜して菩薩に白して曰さく「善い哉、仁者、汝は昔長夜に是の如く希求して言へり、「我れ何の時にか障礙なきを獲て閑林中に在るをうべき」と。汝昔に願ありしは今悉く圓滿せり。汝若し無上道を證得せん時は、我等を攝受したまはんことを」。菩薩曰はく、「汝が所願の如くせん」。爾の時菩薩は象王の右顧するが如くに諸天等を觀て是頌を作して曰はく、

「無上道を證し　諸佛の法を了知せさらんには
復重ねて來歸して　此の劫比城に入らさらん」。

發して太子を留めんと欲せりと雖、徒に愛念を加へて此事傾ち發れるとは」。釋迦大將は卽ち頌を說いて曰はく、

「今日より淨飯王は　子の爲に憂惱を生じ
手を擧げ蒼天に叫びて　悲恨し大號哭せん。
耶輸陀羅等　及び諸大宮人は
今悉達と別れ已りて　常に苦の爲に逼まられん」。

大名釋迦は此頌を說き已るに悲涙懊惱して速に耶輸陀羅の所に至り、手を以て耶輸陀羅を推して卽ち頌を說いて曰はく、

「悉達夫は去らんと欲せり　應に可しく留戀を生ずべし
當に後時に憂ふる勿れ　夫を憶ふ愁の爲の故に。
今去らんに極めて見え難し　最後の相見えん時なり
苦なる哉、人の聞くなきか　覺め去りて我を罪する勿らんことを」。

大名釋迦は頻りに內宮に於て遍く衆人に告げしに、了りて覺むるものなかりければ悲惱忙懼し、復速に彼の淨飯王の所に往いて淨飯王を覺まさんとて卽ち頌を說いて曰はく、

「悉達は今去らんと欲せり　王、當に速に之を制すべし
彼の後時に於て　子が爲に常に憂惱すること勿れ」。

大名釋迦は再三之を覺ませるも、王は猶ほ眠睡して曾て暫らくも覺めざりき。時に釋梵天等は無量百千の諸天眷屬と與に菩薩に來詣し、菩薩の所に至りて便ち卽ち圍遶せり。大梵天王及び色界諸天は儼然として聲無くして菩薩の右に在り、釋提桓因及び欲界天は菩薩の左に在りて、或は幡蓋を執持し幷に音樂を奏せるあり、或は空中に於て諸の香花を散じて菩薩に供養せり、所謂優鉢羅花・

【三】前註(二の六二)の藏文參照。

しを知りたらんには、敢へて之を擎げざりしならんに」。爾の時車匿は其菩薩の、四天子と與に遞に相言說したまへるを聞き、即ち便ち趨り行いて菩薩の所に至りしに、菩薩は爾の時即ち乾陟に乘りたまひ、時に四天子は各馬足を扶けぬ。爾の時車匿は一手に鞦を攀ひき、一手に刀を執りしに、菩薩は諸天の威力感の故に卽ち虛空に騰りたまひければ、宮中の善神は旣に是を見已りて悉く皆號哭し涙下せること雨の如くなりき。車匿は之を見て菩薩に白して曰さく、「此は是れ雨なりや不や」。菩薩報じて曰はく、「此は是れ雨ならず、是れ宮中の神、我が今去るを見て涙下せること此の如くなり」。車匿は爾の時菩薩の此言を聞き、哽咽歔欷して默然して語らざりき。菩薩は爾の時象の旋らすが如くに其宮中を顧望して便ち自ら思念したまはく、「是れ我が末後に諸女人と與に一處に共居せしところ、今一時に之に別れて復更に爾せじ」。復重ねて思念したまはく、「我れ若し東門よりして父王と別れざらんには、恐らくは嫌恨を生じて諸兵士の防守を加へざりしを責めたまはん」。卽ち東門に詣りしに、其父王の睡眠せること極重なるを見たまへり。菩薩は爾の時父王を遶ること三匝して跪きて父足を禮し、是言を作して曰はく、「我れ今去らんこと孝敬ならざるに非らじ、但生老病死の有情を磨滅するが爲に、是義に由りての故に我は出家して菩提道を證し斯苦を救濟せんと欲してなり」。是語を作し已りて卽ち虛空に騰りたまへり。時に釋迦大名將軍は巡行觀察して城の東門に至りしに、忽ち菩薩虛空に騰在したまへるを見て、聲を發して啼哭し菩薩に白して曰さく、「何の所作をか欲したまへる、何の所作をか欲したまへる」。菩薩報へて曰はく、「大將、當に知るべし我れ出家せんと欲するを」。大名將曰さく、「此は是れ非法なり」。菩薩報へて曰はく、「我れ已に曾て三阿僧祇劫に於て常に苦行を行じて無上菩提を求め、一切衆生より諸苦難を拔かんとせり。我れ今豈に宮中に在るを得んや、今當に一心に法の爲に而し去るべきなり」。大名釋迦は是語を聞き已りて卽ち復啼哭すらく、「哀しき哉、哀しき哉。淨飯大王及び諸釋種は苦しき哉、苦しき哉。大願を

時是語を聞き已りて便ち自ら思念したまはく、「我れ若し此車匿と言酬せんには、未だ已らざるに恐らくは傍人聞きて我が前去を廢せん。如かじ、自ら馬王乾陟を被へんには」。卽ち馬坊に趁き乾陟の所に至りたまひしに、時に彼乾陟は菩薩の來ませるを見て卽ち瞋怒を懷けること大猛火の如く、跳踉來去して未だ便ち捉を受けざりき。菩薩の手中に先に百寶の輪相あり、一切の怖畏せん衆生にして菩薩を見まつらんには、菩薩は卽ち百寶の手を以て撫慰し安穩したまふなり。菩薩は爾の時便ち輪手を以て其馬頭を撫で、卽ち頌を說いて曰はく、

「我れ今末後時に汝に乘らん　速に當に彼に至るべし、久しく留めざれ
我れ當に久しからずして菩提を證すべく　當に法雨を以て衆生を雨潤すべければ」。

復次に一切衆生に常法あり、人敎ふるあらんには卽ち能く習學するなり。乾陟馬王は此頌を聞き已りて卽ち便ち安住せりければ、菩薩は歡喜して便ち被へて牽出したまへるに、梵王帝釋は四天子をして共に乾陟を扶けしめて菩薩を擁衞せり。四天子は一には〔九〕彼岸と名け、二には〔一〇〕近岸と名け、三には〔一一〕香葉と名け、四には〔一二〕勝香葉と名け、皆威力ありて菩薩の所に詣りて左右に侍立せるに、菩薩問うて曰はく、「誰か我を將ゐて空に騰りて出づるを能くするものやある」。四天子曰さく、「我等皆能くせん」。菩薩又曰はく、「汝等には何の神力ありや」。彼岸は敎へて曰さく、「太子當に知るべし、盡大地土をも我は猶擎げ得て亦復將ゐ行かん」。近岸は復曰さく、「四大海水及び諸江河をも我れ今亦能く荷負して將ゐ行かん」。香葉は又曰さく、「一切の山石をも我れ能く擔負して將ゐ行かん」。勝香葉は又曰さく、「一切の林樹及び諸の叢草をも能く負ひて將ゐ行かん」。菩薩は聞き已りて脚を以て地を案じ、四天子をして力を盡して之を擎げしめたまひしに、時に四天子は卽ち皆力を盡し共に相動挽せんとせるに、乃し疲乏するに至るも猶ほ動かさんとして得ざりき。時に四天子は盡く皆驚愕して菩薩に白して曰さく、「知らざりき、菩薩に大威力ありしを。我等若し是る力あり

【九】彼岸。hgram（ヂャム）、「岸」の義、衆許摩訶帝經には俱羅とす。
【一〇】近岸。ñe-hgram（ネヂャム）、「近岸」の義、衆許經に烏波俱羅とす。
【一一】香葉。lo-ma（ロマ）、「葉」の義、衆許經に波囉拏とす。
【一二】勝香葉。lo-ma gyon-pa（ロマヂョンパ）、「葉を著する」義、衆許經に波囉拏伱嚩帝とす。

宮外には諸の象馬兵多く　勤めて防衞を加へて出でしめじ」。

爾の時釋提桓因は卽ち頌を說いて曰さく、

「昔誓願ありき今應に思ふべし　[四]然燈如來死に授記したまへるを
衆生は多く苦惱の中に居れば　應に速に家を捨てゝ正道を求むべし。
我れ今亦能く是の如きを作さん　及び彼の梵王諸天等も
當に汝をして障礙無きを得せむべければ　樹林中に詣りて正覺を修めよ」。

菩薩は是頌を聞き已るに其心歡喜して諸天に答へて曰はく、「善きかな」と。時に天帝釋は卽ち[五]昏蓋を以て諸の兵衆及び淨飯王・倡伎・婇女・所有一切の 劫比羅城を防衞し守護せる者を覆ひ、皆睡眠して心に覺悟すること無からしめ、[六]夜叉大將散支迦に命じて踏梯を持取し、便ち菩薩をして梯よりして下りて [七]車匿の所に至らしめまつれり。車匿の方に睡れるを見たまひて、菩薩は手を以て推して覺ますに良久しくして方に悟めぬ。菩薩は爾の時卽ち頌を說いて曰はく、

「起ち起てよ汝車匿　速に [八]乾陟を被へ來れ
過去勝者の林に　我は彼に往きて寂默せんとすれば」。

爾の時車匿は若しは睡り若しは覺め、頌を以て報じて曰さく、

「今は遊觀したまふ時にあらじ　汝は先より怨敵なく
既に怨賊の來るなきに　云何が夜に馬を索めんとはする」。

菩薩は頌を以て告げて曰はく、

「車匿、汝は昔より 來　我が言敎に違はざりき
末後の時に於て　方に我が命に違はんと欲すること勿れ」。

車匿は報じて曰さく、「今は夜半時なり、我れ恐怖を懷きぬれば馬を取ふる能はず」。菩薩は爾の

【四】 然燈如來(Dīpaṃkara)。衆許經には但念過去無量阿僧祇劫所行願とありて、此佛名を出さず。

【五】 昏蓋。睡眠煩惱なり。

【六】 夜叉大將散支迦。律部二十三、註(一〇の二九)參照。

【七】 車匿(Channa)。衆許摩訶帝經には淺那とせり。

【八】 乾陟(Kaṇṭhaka)。衆許摩訶帝經には迦蹉迦とせり。

陀羅は是辭を聞き已るに默然して住せり。菩薩は爾の時是夢を思惟したまはく、「耶輸陀羅が所見の相の如くんば、我れ今夜に於て即ち出家するに合へり」。又思念を作したまはく、「我れ應に方便して耶輸陀羅をして略我を知覺せしむべし」。是念を作し已りて耶輸陀羅に告げて曰はく、「我れ出家せんことを願へり」。耶輸陀羅曰さく、「大天、汝往かんと欲せんには可しく我を將ゐ去るべし」。菩薩は「涅槃を得たらん時即ち汝を將ゐ去らん」と思念したまひて、耶輸陀羅に報じて曰はく、「我に去處あらんに便ち汝を將ゐ去らん」と。爾の時耶輸陀羅は是語を聞き已りて歡喜して寢ねぬ。爾の時菩薩は心を發して出でんと欲したまへるに、大梵天王及び帝釋等は菩薩の念を知りて時に應じて至り合掌恭敬して頌を說いて曰さく、

「心は未だ調はざる馬の如く　亦躁げる獼猴の如し
能く五欲の樂を捨てんに　速に涅槃の明を證せん。
大慈者よ起ち起てよ　此を捨てよ、大地尊
當に一切智を得て　諸の衆生を度脫すべけん」。

菩薩は報へて曰はく、「天・帝釋、汝見ざらんや」。即ち頌を說いて曰はく、

「師子王の、鐵檻に在るに　猛將の弓刀もて其傍を守れるが如く
象馬人衆は甚だ繁閙して　此城を圍繞せり、若僞が出でん。
父王は猶し猛師子の如く　四兵鐵甲は皆全具し
城壍樓閣及び廊屋には　種種の兵仗皆充滿せり。
彼の宮門及び閤門　乃至城門を見るに亦是の如し
諸の鳴鈴を安きて普く周遍し　關拒甚だ難くして越ゆべからず。
種種の螺鼓は我を圍遶し　喧聒の鳴聲は未だ曾て息まず。

を見たまへり、一には月の蝕まれたるを見、二には東方に日出でゝ便ち即ち却没せるを見、三には多く人ありて夫人を頂禮せる見、四には其自身の或は笑ひ或哭せるを見たり。爾の時耶輸陀羅は復此夜に於て八種の夢を見たり、一には其母家の種族皆悉く破散せるを見、二には菩薩と同坐せる牀の皆自ら摧毀せるを見、三には其兩臂忽然として皆折れたるを見、四には其牙齒皆悉く墮落せるを見、五には其髮鬢悉く皆墮落せるを見、六には吉祥神の其宅外に出でたるを見、七には月の蝕まれたるを見、八には日初め東方に出でゝ便ち即ち却没せるを見たりき。菩薩は夜中に於て五種の夢を見たまへり、一には其身大地に臥して頭は須彌山に枕し、左手は東海に入りて右手は西海に入り、雙足は南海に入りたるを見、二には其心上に吉祥草を生じて高く空際に出でたるを見、三には諸白鳥の頭皆黑色なるが、菩薩を頂禮して空に騰らんと欲せる所は菩薩の膝下に過ぎざりしを見、四には四方よりの雜色諸鳥は菩薩の前に至るに皆同一色となれるを見、五には[三]雜穢山にて菩薩は上に在りて經行來去せるを見たまへり。是夢を見已るに即ち臥よりして起ちて歡喜思念したまはく、「我が今の此相は久しからざるの間に當に阿耨多羅三藐三菩提無上智を得べけん」。爾の時耶輸陀羅は即ち睡より覺めて便ち菩薩の爲に其八夢を說けり。菩薩は爾の時耶輸陀羅の情に憂惱生ぜんことを恐れ、方便して爲に此夢を解いて歡悅を得せしめたまふらく、「汝が母家の種族皆悉く破壞せりと見たるは、今皆見在せり、何爲ぞ破壞せん。汝と我と同坐せる牀の皆自ら摧毀せりと見たるは、今見好せり云何が摧毀せん。汝が兩臂忽然として皆折れたりと見たるは、今皆損ずることなし。汝が牙齒悉く皆墮落せりと見たるは、今亦見好せり。汝が髮鬢にして亦自ら墮落せりと見たるは、今見に故の如くなり。吉祥神汝が宅より出でたりと見たるは、婦人の吉神所謂夫壻なる我は今見在せり。月蝕まれたり見たるは、汝可しく之を觀るべし、今見に圓滿せるを。汝が日東方より出でゝ復遂に没せりと見たるは、今見に夜半にして日猶未だ出でざれば、何爲ぞ遂没せん」。時に耶輸

【三】雜穢山。mi gtsaṅ-baḥi-ri（ミ ツァン バ、イ リ）「不淨の山」なる義、來許標には大石山上經行顧望とあり。

巻の第四

（菩薩の出城苦行）

爾の時菩薩は宮内嬉戲の處に在して私に自ら念言したまはく、「我れ今三夫人及び六萬の綵女あり、若し共と與に俗樂を爲さゞらんには、恐らくは諸外人は我を是れ丈夫ならじと云はん。我れ今當に耶輸陀羅と共に娛樂を爲さん」と。其の耶輸陀羅は因りて卽ち娠あり、旣にして懷娠し已りて思念を生じて曰はく、「我れ明旦に於て報じて菩薩に知らしめん」。爾の時菩薩は其夜中に於て緣生の理を約めて頌に說いて曰はく、

「婦人と共に同じく居宿せる所　此は是れ末後の同宿の時たり
我れ今此より更に然せじ　永く女人と同じく眠宿するを離れん」。

此の夜に當り綵女・倡伎は悉く皆疲倦し昏悶眠睡せるに、或は頭髮を披亂し、或は口に涕唾を流し、或は復讇語し、或は半身を露はせり。菩薩は此を見たまふや深宮に在せりと雖猶し塚間に諸の死人を見るが如くにして、卽ち自ら思惟して頌を說いて曰はく、

「風吹いて池の蓮花を倒せるが如く　手脚撩亂して縱橫に臥し
頭髮蓬亂して身形露はる　所有愛心は皆捨離しぬ。
我れ今此諸女の眠れるを見るに　猶し死人の身形變ぜるが如くなり
何の故にか我れ早く覺知せざりし　此無智の有情境に在りつゝと。
欲は彼の泥箭毒火に同じく　夢及び鹹水を飮む等の如く
當に龍王の捨てんとして捨て難きが如し　諸苦・怨讐は此に因りて生ず」。

菩薩は此頌を說き已りて便ち卽ち眠睡したまへり。爾の時　大世主夫人は其夜中に於て四種の夢

【一】衆許摩訶帝經（大正三・九四五・下八）には若不息心無有窮盡、若與女人同其床座、如起履火速得大苦、是故我今而生厭離とあり。

【二】大世主夫人。mahāprajāpati（摩訶波闍波提）の譯、摩訶摩耶夫人の姉、幻化女に相當す。大世主の原語と幻の原語とは相應せず。衆許摩訶帝經には此の四種夢を淨飯王の夢とし、大世主夫人の名を出さず。

り」。卽ち頌を說いて曰はく、

「睡者は死人の如し　　此人魔王に屬せん
智者は常に覺悟す　　是故に勤めて防守せよ」。

此頌を說き已りて中營に還り至り、守營人に問うて曰はく、「何人ぞ知更せるは」。營人報じて曰はく、「是は某が知更せるなり」。（大名將曰はく）、「策勤せんには善なり、睡眠せんには惡なり」。卽ち頌を說いて曰はく、

「策勤して法に違すること莫く　　實語して妄語すること莫れ
妄語せんに黑暗に入らん　　是故に勤めて防守せよ」。

大名釋迦は此の如くに巡り已りて卽ち天曉に至りければ、淨飯王所に於て其王に白して曰さく、「七日の中一夜已に過ぎて唯六日を餘せり」。王便ち報じて曰はく、「旣にして六日を餘せり、勤加して守護せよ。六日若し過ぎなば我が太子は金輪王に登り、我等諸人は咸く皆隨從し、虛空に飛騰して四天下を觀ぜん」と。此の如く警候せること乃し六日に至りて唯一夜を餘せり。天帝釋に常法ありて、觀念せん時には下界を窺むるなり。卽ち頌を說いて曰はく、

「釋迦牟尼國王子は　　六度の行を修めて皆圓具し
俗を出でて山林に處し　　以て無上眞如道を求めんことを愛樂したまへり」。

等は盡く仗双を執るなり。劫比羅城外の百官吏人も亦復勤加し一遍に相防守せり。時に淨飯王は自ら四兵を將ゐて城の東門を守り、其の斛飯王は自ら四兵を將ゐて城の南門を守り、其の[26]白飯王も復四兵を將ゐて城の西門を守り、甘露飯王も亦四兵を將ゐて城の北門を守れり。大名釋迦は諸の猛士を領して城内を巡行し、城の東門に至りて守門人に問うて曰はく、「誰ぞ、此門を守れるは」。淨飯王報じて曰はく、「是れ我が[27]知更せるなり」。大名將曰はく、「更を嚴かにせんには好なり、睡眠せんには惡なり」。卽ち頌を說いて曰はく、

「睡者は死人の如し　　此人は魔王に屬せん
　智者は常に覺悟す　　是故に勤めて防守せよ」。

大名釋迦は此頌を說き已りて卽ち南門に至り、守門者に問うて曰はく、「何人ぞ此を守れるは」。斛飯王報じて曰はく、「是れ我が知更せるなり」。大名將曰はく、「勤加せんには善なり、睡眠せんには惡なり」。卽ち頌を說いて曰はく、

「睡者は死人の如し　　此人は魔王に屬せん
　智者は常に覺悟す　　是故に勤めて防守すべし」。

大名釋迦は此頌を說き已りて復西門に至り、守門者に問うて曰はく、「是は何人が守れるなる」。白飯王報じて曰はく、「是は我が知更せるなり」。大名將曰はく、「勤加せんには善なり、睡眠せんには惡なり」。復頌を說いて曰はく、

「睡者は死人の如し　　此人は魔王に屬せん
　智者は常に覺悟す　　是故に勤めて防守せよ」。

此頌を說き已りて復北門に至り、守門者に問うて曰はく、「是は何人が守れるなる」。甘露飯王報じて曰はく、「是は我が知更せるなり」。大名將曰はく、「策勤せんには善なり、睡眠せんには不善な

【二六】本文に白淨王とせるも、三本共に白飯とせる故に今之を改む。

【二七】知更。mel-tahe（メルツェー）、「看視する」義なり。

彼の一切智を證して　諸の衆生を度脫したまはん」。

爾の時菩薩は既にして城內に至りたまひしに、一釋迦種の[23]不過時と名くるあり、其に一女ありて名けて[24]鹿王と曰へるが、樓窓中よりして遙に菩薩を見まつり讃歎して頌して曰はく、

[25]「安樂の乳母は生み　安樂の父は能く養へり
彼女は極安樂なり　當に汝が與に妻たるべけん」。

菩薩は此を聞いて其心寂にして涅槃の聲義に入りたまひければ、唯聞いて言曰したまはく、「汝は最勝人なり、當に寂靜涅槃を思惟せるなるべし」。菩薩は此涅槃の聲を聞きて愛念歡喜したまひ、妙聲を聞けるが故に卽ち頸上の珠瓔を脫して空中に擲げたまひしに、威力を以ての故に遂に鹿王女の頸上に落ちぬ。諸人は此を見て皆大に歡喜し、淨飯王に白して具さに上事を陳べぬ。王は此語を聞いて卽ち二萬の綵女をして鹿王女を迎へ、將ゐて太子の宮內に入らしめぬ。彼の時菩薩に三夫人ありき、一には鹿王と名け、二には喬比迦と名け、三には耶輸陀羅と名け、其耶輸陀羅は最も上首たりき。其三夫人に各二萬の綵女ありて前後に圍繞して宮內に在りき。時に淨飯王は曆數者の頌を聞くや卽ちに甘露等の兄弟四人を喚び、一處に集居して遍に彼曆數の頌を相議るらく、「若し七日內に出家を許さゞらんに輪王位に登らんには、我等は宜しく應に七日內に於て太子を守護し、仍し兵衆をして四城門に於て勤めて防衞を加へしむべし」と。共議を作し已るに、卽ち劫比羅城に於て七重の城壍を築きて皆鐵門を安き、一一の門上に盡く鳴鈴を挂け、若し開閉するあらんに其鈴聲は四面週廻各四十里に聞え(しめ)、菩薩所在の樓閣の上には皆伎女をして諸の音樂歌舞を作して圍遶せしめ、大臣猛將は四種兵を領し嚴に更に驚候して城外を營守し、菩薩の宮中の諸門は常に閉ぢ、縱ひ使命ありて須らく往來すべからんには、城樓上に於て別に梯道を置けて五百人をして之を擎げて來去せしめ、其內宮門の開閉の時は皆異聲を出して淨飯王をして聞えしめ、若し門聲を聞かんに諸の宮女

【二三】不過時。çakya dus-legs-kyi-bu-mo-ri-dvags-skye-ba(シヤチヤ ドウ レク チイブ モウ リ ドゥク チエ)、「釋種時善の娘、鹿生」の義、衆許經に迦羅叉嚩とせり。

【二四】鹿王。衆許經に蜜里誐惹とせり。mrgaja の譯、律部二十、註(一八の一四)參照。

【二五】藏文には「奇なる哉、此の尊母は安穩に、彼の尊父も亦安穩なり、嗚呼、彼が妻とならんに、婦人は亦苦惱を出でん」とあり。

ふて曰はく、「汝は何人に屬せるなりや」。諸人報じて曰さく、「我等は皆太子に屬せり」。菩薩告げて曰はく、「今汝等を放して自の存活するに任さん、我に繫屬するを須ゐじ、耕田牛等も亦便ち放捨し水草を逐うて其軀命を養ふに任さん」と。時に菩薩は此苦事を念じて車よりして下り、贍部樹間に於て第一無漏相似三昧に入りたまひしに、左右の侍從は菩薩を圍遶し、各は樹下に坐して菩薩に贍侍せり。時に淨飯王は自ら念ずらく、「食時將に至らんとせり、太子何爲ぞ宮內に還らざる」。卽ち自ら往いて其太子を看んと欲し、便ち車輅を命じ之を登りて行き、耕田所に至りて周く諸處を廻り、尋いで太子を贍部樹下に於て覓めしに、三昧に入りたまへるを見ぬ。時に日已に西に傾き一切の林影皆日に隨うて轉ぜるに、唯太子所坐の樹のみは猶ほ太子を蔭ひて其陰は移らざりき。時に淨飯王は此事を見已りて卽ち自ら言すらく、「今我が太子は甚だ大威德なり、日已に西に傾きて一切の林影は皆日に隨うて轉ぜるに、唯太子所坐の樹のみは猶ほ太子を蔭ひて其陰は移らさらんとは」と。歡喜踊躍して恭敬心を生じ、曲躬低頭して前みて太子を禮し、定まり起ちて共に寳車に登らんことを請へり。漸次に宮に還るに、屍林の下に至りて諸の死人の或は黃に或は淤くして臭穢狼藉せるを見たまひき。太子は見已りて重ねて憂念を加へ、寳車中に於て結跏趺坐して專心に思惟し、漸くにして劫比羅城に至りたまへり。時に曆數者は卽ち占ふらく、「太子にして七日內に至り出家せざらんには、必ず轉輪王位に登らん」と。是事を占知して卽ち其頌を以て淨飯王に奏して曰はく、

「太子、出家したまはざらんに　七日中を盡して
彼の日出づる時に於て　必ず金輪位に登らん。
七寳自在の王　太子當に此の如くなりたまふべし
海內に勞役なく　怨敵自ら平定せん。
太子若し出家したまはんに　無畏にして林間に坐し

若し此の如からんには我も亦出家せん」。即ち便ち我に命じて速に宮に還らしめ、今宮中に在りて是事を思量したまへるなり』と。時に淨飯王は既にして此語を聞き慘然として樂しまず、私に自ら念曰すらく、『太子生れし時相師は占して言へり、「太子は王位に登らざらざらんには必ず當に出家すべし」と。今の相狀を觀ずるに應に出家時至りしなるべし。即ち方便を設けて我れ今當に太子をして田農所に往いて彼人衆の行來作務するを見、心に歡喜を得て出家事を忘れしむべし』。是念を作し已るに即ち宮中に往き太子に告げて曰はく「我に良田あり人をして營植せしむれば、汝可しく檢校すべし」。太子は宮に在りて彼の老病死人を想ひて即ち憂懼を懷き、彼沙門を念じて復喜戀を生じ、此心に繫られて時として暫らくも捨つること無かりしも、父の所言を聞くに違背すべからざりければ、即ち父言に順ひ便ち御者に命じて車に登りて即ち往きたまひしに、身は田所に往かんと欲せりと雖心は恒に出家を繫念したまへり。既にして漸く前行せるに、忽ち中路に於て五百寶藏の悉く皆門を開いて、中に聲ありて、「善い哉太子、我等が珍寶は是れ汝が過去眷屬の藏なり、汝可しく盡く取り汝が意に隨うて用うべし」と言へるに遇ひたまへり。太子報じて曰はく、「此は是れ過去眷屬の愚癡の資具にして、時なくして積聚して棄捨を知ること莫りき、我れ今何ぞ用ひん、汝等速に去れ」。時に彼寶藏は復聲を出して曰はく、「汝にして若し取らざらんには我は今海に入らんのみ」。菩薩報じて曰はく、「汝が意に隨せて去れ」。時に寶藏等は便ち大海に入れり。爾の時菩薩は復漸く前行して犂田の村に至り、彼耕人の、塵土身に坌まり遍體に汗を流し、手には牛杖を執りて盡く皆血あるを見たまへり。復其牛の皮背は穿爛し飢渴に逼まられ、羸瘦困苦して喘息住まず、諸の蠅蛆の爲に膿血を唼食せられ、諸の小蟲等は其瘡食に滿ち、或は犂刃の爲に其脚を傷割せられたるを見たまひき。菩薩は耕種の所を遊歷して、皆此の如きの諸の苦惱事を見たまへり。菩薩は無量劫より來深く慈悲を種ゑたまひたれば、此苦業に遇ひて便ち憐愍を生じ、即ち耕田人等を喚びて之に問

意業悉く皆清淨に、信心を以ての故に鬚髮を剃除して如來の服を被、俗家を捨離して涅槃路に昇らんとす、故に出家と名くるなり」。菩薩は卽ち便ち御者に告げて曰はく、「汝可しく車を將ゐて彼沙門に近づくべし」。御者は命を奉じて卽ち便ち車を引きて沙門所に至れり。菩薩は爾の時沙門に問うて曰はく、「汝は是れ何人にして何の故にか鬚髮を剃除して別色の衣を著け、手に錫鉢を持して乞を以て自活するなる」。沙門報じて曰さく、「我は出家人なり」。菩薩又曰はく、「云何をか名けて出家人と爲するなる」。沙門報じて曰さく、「常に善心を以て恒に善行を修め、身口意業は悉く清淨ならしめ、俗家を捨離して涅槃の路に昇らんとす、故に出家人と名くるなり」。菩薩嘆じて曰はく、「善い哉斯事や、善い哉斯事や」。卽ち自ら念じて言はく、「若し當しく此の如からんには我も亦出家せん」。卽ち御者に命じたまはく、「可しく速に宮に還る可し、我れ宮中に至りて是事を思量せん」。御者は命を奉じて執御して宮に還りしに、既にして宮中に至り寂然として思念したまへり。時に淨飯王は御者に問うて曰はく、「今者太子出城遊觀して歡樂せりや不や」。答へて曰さく、「我れ太子を見るに愁憂して樂しまざりき」。王卽ち問うて曰はく、「何が故にか樂まざりし」。御者答へて曰さく、『太子出城したまひしに、一沙門の鬚髮を剃除して福田衣を被、手に鉢錫を持して徐に乞食を行ぜるに逢ひたまひ、太子我れに問ひたまはく、「彼は何人なりや」。我れ卽ち答へて曰さく、「出家人と名くるなり」。便ち我に問うて言はく、「云何をか名けて出家と爲すなる」。我れ卽ち答へて曰さく、「其俗家を捨てゝ涅槃の路に昇らんとす、故に出家と名くるなり」。太子聞き已るに我に命じて車を引かしめ、沙門の所に近づきて沙門に問うて曰はく、「汝は是れ何人にして、鬚髮を剃除し異色衣を被、手に瓶鉢を執りて自ら乞食を行ずるなる」。沙門報じて曰さく、「我は出家人なり」。太子問うて曰はく、「云何をか名けて出家人と爲すなる」。彼れ便ち報じて曰さく、「俗家を捨離して涅槃の路に昇らんとするなり」。太子聞き已るに卽ち便ち歎じて曰はく、「善い哉斯事や、善い哉斯事や。

悲切せるに逢へり。菩薩は見已りて御者に問うて曰はく、「此は是れ何人にして、種種の雜色を以て共車を嚴飾して之に載せて去り、男女哀號し見る者悲切せりや」。御者答へて曰さく、「此は死人と名くるなり」。太子問うて曰はく、「云何をか名けて死人と爲すなる」。御者答へて曰さく、「此人の生氣一たび盡きんに復父母兄弟妻子眷屬と與に重ねて相見ゆるを得ざるなり」。菩薩問うて曰はく、「我も亦爾りや不や」。答へて曰さく、「亦爾るなり」。菩薩聞き已りて愁憂して樂しまず、卽ち命じて宮に還りたまへり。時に淨飯王は御者に問うて曰はく、「太子出城遊觀して歡樂せりや不や」。御者答へて曰さく、「我れ太子の愁憂して樂しまざるを見たり」。王曰はく、「何の故なりや」。答へて曰さく、『今者路に死人と父母妻子の悲號して相送れるに逢へるに、太子問うて曰はく、「我も當に此の如くなるべきや不や」。我れ卽ち答へて曰さく、「皆當に此の如くなるべきなり」。故に宮中に在りて是事を思惟したまふなり』。時に淨飯王は復五欲を加へ、種種微妙の音樂・倡伎・綵女を以てして菩薩を娛樂せ(しめ)ぬ。頌して曰はく、

「此の最勝の城は甚だ嚴飾せり　天中の天子は可しく久住すべし
五欲を倍加して能く歡樂せ(しめ)ん　猶し[三]千眼歡喜園の如くなれば」。

爾の時淨居諸天は皆共に觀念すらく、「菩薩は先に大實の因力あれば、我等は當に菩薩の爲に大緣故を作すべし。何を以ての故に。若し大因あらんには大緣を待つが故に」。卽ち便ち化して一の大沙門と作り、錫を執り鉢を持して次に行いて乞食せり。菩薩の常法として出城遊觀せんには先に嚴駕を命ずるなり。既にして嚴駕し已り車に登りて前行せるに、衢路中に於て一沙門の鬚髮を淨除して福田衣を被、瓶鉢を執持して徐に乞食を行ぜるに逢へり。菩薩は見已りて御者に問うて曰はく、「此は是れ何人なりや」。御者答へて曰さく、「出家人と名くるなり」。菩薩問うて曰はく、「云何をか名けて出家と爲すなる」。報じて曰さく、「此人は善心を以て善行を修め、善處に於て住して身口

【三】千眼歡喜園。千眼(sa-hasrākṣa, sahasra-nayana)は帝釋の異名。卽ち帝釋天の歡喜園(nandanavana)なり。

「父王は既にして御者の言を聞きて　　即ち自ら相師の語を思量し
諸の五欲を以て前に倍して　　願ずらく、菩薩をして出家せざらしめんことを」。

菩薩の常法として將に出城遊觀せんと欲せんには先に御者に勅するなり、「速に當に我が爲に車乘を嚴飾すべし、我れ當に出城游觀すべければ」。御者は命を受けて即ち爲に上妙の車乘を嚴飾し、既にして嚴飾し已りて即ち菩薩に白さく、「今可しく遊觀したまふべし」。將に城を出でんと欲せるに一病人の擧身羸黄して瘦瘠疲困し、路傍の諸人の皆顧見せざるに逢へり。菩薩は見已りて御者に問うて曰はく、「此は是れ何人なりや、身形瘦弱して羸黄困篤し、一切の諸人の皆顧見せざるは」。御者報じて曰さく、「此は病人と名け、斯病に因りての故に久しからずして當に死ぬべけん」。菩薩問うて曰はく、「此の如きの病法は我れ超過するなりや不や」。御者答へて曰さく、「此の病法は亦未だ超過せざるなり」。菩薩聞き已るに愁憂して樂しまず、即ち命じたまはく、「宮に還りて是事を思惟せん」。爾の時御者は送りて宮內に至り、既にして宮に至り已るに、菩薩は是に於て端身して此の如きの病苦を思惟したまへり。時に淨飯王は御者に問うて曰はく、「太子出城遊觀しては歡樂せりや不や」。御者答へて曰さく、「太子は樂しみたまはざりき」。又問うて曰はく、「何爲ぞ樂しまざりし」。爾の時御者は具さに上事を陳べしに、王は是を聞き已るに、乃し五欲を倍加して太子を娛樂せしむるに至れり。頌して曰はく、

「上妙の色・聲・香　　最勝の諸の味・觸もて
當に五欲の樂を受くべし　　我を棄てゝ出家すること勿れ」。

菩薩の常法として將に出城遊歡せんと欲せんには、先に御者に命ずるなり、「車乘を嚴飾せよ」と。既にして嚴飾し已りて出城遊觀せるに、一死人の雜色の車を以てして以て之に載せ、復一人あり手に火爐を持して前に在りて行き、雜色の車の後には多くの諸の男女の髮を披らして哀號し、見る者

こと此の若くなる」。御者報じて曰さく、「此は老人と名くるなり、此人久しからざるに要ず當に身死るべけん」。菩薩問うて曰はく、「我も後の時に於て當に是の如くなるべきや不や」。御者報じて曰さく、「太子の身も還當に是の如くなるべきなり」。菩薩は聞き已るに愁憂して樂しまず、卽ち御者に告げたまはく、「宜しく速に宮に還るべし、我れ宮中に至りて是事を思量せん、我れ當に云何がして斯苦を免るを得べきかを」。御者は命に依ひて卽ち宮內に還り、旣にして宮に至り已るに菩薩は爾の時端坐思惟して是念言を作したまはく、「此の如きの老法は久しからざる間に卽ち我が身に至らん、我れ云何がしてか免るべき」。卽ち頌を說いて曰はく、

「忽にして此の如き衰老者の　形體枯瘦して杖に倚りて行けるに遇へり
我が身亦老の爲に縛せらる　云何がしてか斯の苦事を免るを得べき」。

爾の時淨飯王は菩薩の宮中に却廻したまへるを見て御者に問うて曰はく、「太子出城し林泉を遊觀して歡喜を生ぜりや不や」。御者對へて曰さく、「我れ太子を見るに歡喜あることなかりき」。王曰はく、「何の故にか喜はざりし」。御者答へて曰さく、『我れ太子と與に出城せるに、門外に一老人の形體羸弱し顏容枯顇して杖に倚りて前行し身體は戰掉せるを見ぬ。太子見已りて卽ち我に問うて曰はく、「彼は是れ何人にして一に當に此に至れる」。我れ卽ち答へて曰さく、「此は名けて老人となす」。又我に問うて曰はく、「我も後の時に於て當に此の如なるべきや不や」。我れ卽ち答へて曰さく、「必ず當に此の如くなるべきなり」。太子は聞き已るに我に命じて還らしめたまふらく、「是事を思惟せん」と。今者現に宮內に在りて是事を思量したふなり』。時に淨飯王は此語を聞き已りて自ら私に念言したまはく、『太子生まれし時相師は皆云へり、「出家して道を修めん」と。今若し此の如からんには應に是れ斯事たるべし、我れ當に諸の五欲の樂具を倍して以て之を娛樂せ(しめ)ん』。是念を作し已りて卽ち諸の五欲の樂具を倍して以て太子を娛しましめぬ。頌して曰はく、

に往けるに、路傍の孔中より一毒蛇出でぬ。鄔陀夷は此毒蛇を見て、菩薩を害せんことを恐れ、即ち利刀を拔いて斬りて兩段と爲せるに、蛇は毒氣を吐きて鄔陀夷に著し、身變じて黑色と爲りければ、此に因みて[一七]黑鄔陀夷と爲せり。是時諸の童子等は爭ひ騁せて勇力もて善堅樹を拔かんとせるに、提婆達多は鼓氣して前み力を盡して之を拔くに纔に動ぜるのみなりき。難陀童子は擎げて少しく地を離れ、菩薩は手を以て空中に擲げ還てたまへるに、其樹乃し兩段と爲りて各兩岸に分れぬ。爾の時菩薩は諸人に告げて曰はく、「此の善堅樹は是れ其冷藥にして能く熱病を除けば、汝等各應に細截して斬り分つべし。若し鬼氣癰腫ありて此を將つて之に塗らんに、並に除差するを得ん」。時に諸童子は並に即ち車に乘じて劫比羅城に歸りしに、城門に至りて遇へる所の占相師は是言を作して曰はく、「菩薩にして[一八]此日中に於て出家せざらんには必ず轉輪王位に登らん」と。時に釋迦女あり、[一九]喬比迦と名け[一九]鍾聲聚落に住せるが高閣上に在りて遊觀せるに、菩薩は城に入りて遙に女を見たまひ、遂に脚指を以て、以て其車を壓へたまひしに車は便ち轉ぜざりき。[二〇]其女は遙に菩薩を見て心に念ぜるに、菩薩の手中に先に鐵杵ありしが指を以て之を撚るに、遂に便ち微碎せり。喬比迦女は菩薩を觀視して脚指を以て樓を捺すに其閣は遂に穴てり。諸人見已りて是念を作して言はく、「此の釋女は必ず能く善く菩薩の心を得ん」と。時に淨飯王は此語を聞き已りて即ち喬比迦女を迎へ、幷に二萬の婇女は侍從して宮に入れり。[二一]菩薩の常法として將に園苑を遊觀せんと欲せんには即ち御者に勅すらく、「我が好乘は汝速に裝飾せよ、我れ之に乘じて園苑を遊觀せんと欲す」。御者は敎を受けて上乘を嚴飾し菩薩の前に至りて菩薩に白して曰さく、「我れ已に上乘を嚴飾せり、唯願はくは時を知しめしたまはんことを」。菩薩は車に登りて遊觀したまひしに、一老人の氣力羸弱して形體損瘦し、腰背傴曲して行歩するに杖に倚り、身體戰掉し鬚髮變色して餘人の如くならざるに逢ひたまへり。菩薩は見已りて御者に告げて曰はく、「彼は是れ何人にして、腰背傴曲し形體羸瘦して顦顇ぜる

【一七】 黑鄔陀夷(kāludāyi)。

【一八】 此日中は後の文に照合するに七日中の誤なるべし。

【一九】 喬比迦(gopikā)。律部二十、註(一八の一三)參照。衆許摩訶帝經には娛閉迦とせり。藏文に「釋迦の鈴音の娘なる地を護る女」とあり。今こゝに鍾聲聚落とせるも、恐らくは「鈴音(鍾聲)なる釋迦種の娘喬比迦」と見るべきものなるべし。衆許摩訶帝經にも釋種伽吒擬里有二一女一名二娛閉迦一とせるによりて證し得べし。

【二〇】 本文に其女遙見菩薩念於心菩薩手中先有鐵杵以指撚之遂便微碎とあり。衆許摩訶帝經には鐵杵とせず、手に弓箭を持てるに覺えず地に墮せりとし、且つ喬比迦女が亦脚指を以て樓を捺せるの記なし。

【二一】 四門遊觀。

天示城中は又復枯涸せりき。天示城王は斯事を見已りて則ち使者をして淨飯王に告げしめて曰はく、「今此の大樹は横に水中に在りて彼此倶に弊めり、王が國中には諸童子ありて皆悉く勇健なれば、願はくは王、之に勅して此樹を除かしめんことを」。時に淨飯王は其使に報じて曰はく、「我れ今何がしてか能く斯事を處分すべき」。劫比羅國に一大臣あり名けて闡陀と曰へるが前みて王に白して曰さく、「願はくは王、我をして斯事を檢校せしめたまはんことを、我に方便ありて王子等をして王言を假らずして自ら此樹を除かしむれば」。王曰はく、「爾る可し」。闡陀大臣即ち河岸なる一叢林間の灑掃清淨にして遊觀を爲すに堪へたるに於て、諸王子に林に往きて嬉戲せんことを請ぜり、諸王子等は各寶車に乘じ諸童子と與に前後に圍遶し、既にして林に至り已るに各牀座を敷き歡樂を縱誕にせり。時に一鴈ありて空を飛びて度りければ、提婆達多は即ち其弓を挽き之を射て落さしめしに、其鴈は菩薩の座前に落在せりき。菩薩は爾の時其鴈を收へ捧けたまひ、爲に其箭を拔いて藥を以て之を療せるに時に應じて平復せり。提婆達多は即ち使者をして菩薩に告げしめて曰はく、「今、彼鴈は我先に射得たるなれば可しく我に還し來るべし」。菩薩は爾の時彼の使に告げて曰はく、「我れ久しく菩提心を發しぬれば、一切有情は是れ我が先有なり、云何ぞ此鴈是れ汝が先有ならんや」。提婆達多は久遠より來恒に菩薩と諸の怨恨を結びぬれば、此語を聞き已るに即ち瞋恚を懷けり。然り菩薩は此身に一切有情との怨結已に盡きたるも、唯提婆達多一人のみ尚ほ餘習ありければ、今、此鴈に因みて最後身に提婆達多と初首の鬪諍を爲せりとなす。天示城王は既にして淨飯王に樹を除かんことを請へるも得ざりければ、即ち自ら其國内の人衆をして共に其樹を拔かしめしに、爾の時諸人は功を施し力を用ひて叫聲沸閙せり。菩薩は聞き已りて左右に問うて曰はく、「彼は是れ何の聲なりや」。闡陀大臣は具さに彼樹が水を壅きたるの意を陳べしに、菩薩は聞き已りて即ち衆人に告げたまはく、「我れ當に彼に往いて爲に此樹を除くべし」。時に彼菩薩并に童子等は即ち共に彼

しく往いて取むべし」。其女報じて曰はく、「我が家中に豈に此なからんや、何ぞ他物を用ひん」。父、女に告げて曰はく、「然り、彼太子は珍寶を施すなりと雖、或は愛樂に因りては便ち以て妃と爲さん」。女曰はく、「若し此に因りて時に便ち妃と爲さんには、縱餘女を取らんとも我れ必ず當に其大妃と爲るを得べけん」。父又告げて曰はく、「必ず當に斯の如くなるべくんば可しく便ち速に去るべし」。是に於て邪輸陀羅は卽ち種種の珍飾を以て其身を莊嚴し、諸の從女の亦復嚴好せると與に相隨へて去けるに、路傍の諸人は皆共に耶輸陀羅を愛仰して餘者を觀ざりき。耶輸陀羅は菩薩の宮に入るに、雅步從容として端身に而し進みて左右を觀じ、太子の前に於て立てり。時に彼太子は先に珍寶を以て諸女に施し盡して更に遺餘なく、獨一の金指環ありければ耶輸陀羅を見て卽ち其指を擧げたまへり。然り、耶輸陀羅は先に菩薩と久遠より來恒に因緣を爲して常に相愛樂せりければ、卽ち師子座の上に昇りて太子の指より其指環を取れり。群臣諸人は遞に相謂ひて曰はく、「此の耶輸陀羅こそは族姓尊貴にして顏容具足し、諸女の中に於て最も殊勝たれば、太子の宮中侍衛と爲すに堪へたり」と。群臣諸人は同じく斯を議し已りて淨飯王に向うて具に此等を陳べしに、時に王は卽ち二萬の婇女を遣はし耶輸陀羅を圍繞して、太子の宮內に入らしめぬ。復次に菩薩の常法として世界に出現したまはんには必ず一樹を生ず、名けて善堅[一五]と曰ひ、其の初生の時に一夜の中に便ち高さ百肘となるなり。其の初生の夜は未だ日光を見ざれば、形質柔軟にして瓜甲を以て掐きて斷ぜしむべけんも、日光を見已るに卽ち便ち堅硬となり、刀斧及以猛火を加ふると雖摧損すること能はざるなり。釋迦菩薩既に世に出でたまひ已りしに、劫比羅及以天示の二城の間に一大河有りて盧奚多[一六]と名け、其の河岸の邊に於て而し此樹を生ぜり。河水汎漲して洪波鼓激し、流沙は岸を圮して土石隨ひ散じければ、其樹善堅の根鬚は盡く露れき。後に猛風に因りて摧き倒れて橫に盧多河中に在りしに、便ち大堰の如くにして水を壅きて流さゞりければ、其の劫比羅城は漸(々)に侵沒せられ、

【一五】善堅樹。çiṅ dge-bahi smin-po (シン ゲー ベイ ニン ボ)、「善の核(心)の樹」なる義。衆許摩訶帝經には娑羅迦里努樹とせり。

【一六】盧奚多。hbab-chu ro-hi-ta(バブ チュー ロ ヒ タ)、rohita 河なり。

ありて遙に菩薩の威光殊特なるを見て競ひ相謂ひて曰はく、「今此太子にして却後十二年中に出家せざらんには、必ず當に彼の轉輪王位に登るべし」。時に[一二]白淨王は斯の相語を聞いて甚だ大に喜躍し、卽ち群臣を集めて之に告げて曰はく、『我れ聞く、相者の我が太子を相せるを、「却後十二年中に出家せざらんには、當に轉輪王位を得べし」と。汝等諸人、宜しく防衞を加ふべし、十二年を滿つるまで出家せしむること勿らんに、彼の金輪王位に登らしむるを得ん。汝等諸人、宜しく防衞を加ふべし、十二年を滿つるまで出家せしむること莫くして、彼の金輪王位に登らしむるを得なば、當に諸君と共に相圍遶して虛空に飛騰し四天下を觀ずべけん。汝等應に當に速に宮殿を立て、美女を簡び求めて共に娛樂せしむべし』。時に諸臣等は前みて王に白して曰さく、「我、太子を觀ずるに世間の聲香欲愛を樂みたまはず、云何がしてか諸の美女を以てして留連すべき」。王、臣に告げて曰はく、「我が太子にして縱彼の一切色欲を愛せざらんとも、そは應に未だ殊妙の女人を見ざるに由りてなるべし。今より已往、汝等諸君、勤加して上好の童女を選擇し、數を倍して將ゐ來りて太子に見えしめよ、其意に任へんには必ず愛樂を生ぜん」。群臣議して曰はく、「今此太子は愛染無しと雖、我等諸人は應に種種嚴身の具を造り、各童女の美しき顏容の者をして其香飾の物を執りて太子に親奉せしめ、復太子をして各諸女に嚴好の珍飾を賜はらしむべし、或は愛者あらんに便ち留住せしめて共に相嬉戲したまはん」。是議を作し已るに卽ち太子の爲に宮殿を造立して百寶莊嚴し、師子座を敷きて太子をして其座に坐せしめ、前に諸の珍寶種種の瓔珞を積みて以て大聚を成じ、總じて諸臣及び餘人衆に命じて咸普く所有童女を集めしめ、其意願に任せて時に隨うて莊飾し諸瓔珞を著けて將ゐて宮內に入れぬ。菩薩は性として捨施を愛したまへば、諸童女に於て普く瓔珞を賜へり、時に[一三]執杖釋種に一童女有りて[一四]耶輸陀羅と名け、容色端正にして世に希有とする所なりき。執杖釋種は卽ち家中に還り其女に告げて曰はく、「今者、太子は諸童女に珠寶珍奇嚴好の具を施せり、汝可

【一二】白淨王。淨飯王の誤なるべし、衆許摩訶帝經には淨飯王とせり。

【一三】執杖釋種。gakya lag-na-dbyug-pa-can gyi bu-mo（シヤチヤラクナチユクパチヤンギブモ）、「手に杖を持つものなる釋種（大臣）の娘」なる義。

【一四】耶輸陀羅（Yaśodharā）。

り。時人號して陷象の地と爲し、信心の長者婆羅門は便ち此處に於て大窣覩波を起せるに、時に諸苾芻は悉く來りて頂禮せり。便ち頌に說いて曰はく、

「天授は大象王を搏ち殺し　　難陀は三七步に拽き
菩薩は城塹外に擲出すること　　虛空に在りて瓦石を拋つが如くなりき」。

爾の時釋迦童子は遍に相謂ひて曰はく、「我等は外に出で　輪刀斷樹の樂を作さん」と。此語を作し已りて卽ち出でゝ林中に就りしに、菩薩は諸の童子が林に往いて遊戲せるを聞き、卽ち五百の童子を領し前後に圍遶せられて彼の林中に至りたまへり。諸の釋童子は競ひて輪刀を擲げて樹皆摧き倒れぬ。爾の時菩薩も亦輪刀を擲げたまひしに、樹林悉く斷てるも而し倒るゝ者無かりき，刀刄、平なりしを以ての故に。時に諸童子は樹の倒れざるを見て共に相謂ひて曰はく、「我れ聞く、菩薩は威猛自在にして諸の五技に於て達せざるものなしと、云何が輪刀もて樹を斷つに、一も倒すこと能はざるぞ、樹を斫るの小術すら尙ほ猶ほ此の如し、豈に況んや餘技をや」。爾の時天神は諸童子が此の謗議を生ぜるを見て衆疑を解かんと欲し、卽ち猛風を放ちて吹けるに諸林樹は蕭然として悉く倒れぬ。諸の釋童子は斯事を見已りて、皆大に驚愕し方に其妙に伏せり。時に諸童子は復菩薩と與に諸の弓射を鬪へるに、七重の鐵多羅樹幷に七の鐵鼓を以てし、其間に各鐵猪を安きて射垛と爲せり。諸童子は射るに一多羅樹を過ぎず、天授童子は射るに一多羅樹・一鼓・一猪を過ぎて其箭は便ち住まり、難陀童子は射るに二多羅樹・二鼓・二猪を過ぎて其箭は便ち住まれり。菩薩は爾の時其一箭を放ちたまふに、其箭は直に七樹・七鼓・七猪を穿ち、幷に地輪を過ぎて復水際に入れり。爾の時龍王は卽ち其箭を拔くに、其箭の穴より水便ち涌出して淸香軟美に、人の飮める所の者は皆希有なりと稱せり。時に信心の婆羅門居士等ありて、其の水の傍に於て塔を造りて供養せり。菩薩は爾の時此戲を作し已りて、遂に車馬に乘じて諸童子と與に城內に却き還りたまひしに、其城門の傍に諸の相者

【二】輪刀斷樹の樂。衆許摩訶帝經によるに、弓箭を以て樹を射て樹を倒す遊戲なるが如し。今輪刀を擲ぐとある故に相違せるものにあらざるか。

外に至れり。爾の時惡性なる提婆達多王子は内より出でて彼寶象の種々に莊嚴せるを見て、心に貪り愛念して即ち使に問うて曰はく、「此象は誰が許なりや」。使人報じて曰はく、「釋迦太子は天文もて相を占ふに金輪大王と作らんと。此因の爲の故に薛舍離城の諸人は此寶象を將つて太子に獻せんとするなり」。提婆達多は此語を聞き已るに甚だ大に瞋怒して即ち是言を出せるらく、「我國の太子は未だ金輪大王と作らざるに、何が故にか汝等は預じめ寶象を將ゐて來りて太子に獻ぜんとはする」。是語を作し已るに漸(々)に象に近づき、瞋恚の心もて象を打つこと一下せるに、其象は地に倒れ因りて即ち死に至り、此象を打ち已りて便ち即ち却き去れり。當時難陀王子は次いで内より出で、此死象を見て其人等に問へるらく、「此象は誰が許にして、何人が打ち死せるなる」。諸人報じて曰はく、「此象は獻げんとて來れるに提婆達多は打ち死せるなり」。即ち是言を出すらく、「提婆達多は極めて是れ不善なり」。難陀重ねて思念して曰はく、「將提婆達多は自の力を試みたるには非ざらんや」。爾の時難陀は其象尾を執へ遂に即ち拽き過ぐること三七餘歩して其大路より離し、即ち過ぎ去れり。爾の時釋迦太子は内より出で來りたまひ、此死象を見て衆人等に問ひたまはく、『此象は誰が許なりや」。諸人は上の如きの意を說けるに、菩薩重ねて問ひたまはく、「此象は誰人が打ち死せるなる」。諸人報じて曰さく、「提婆達多王子は此大象を打つこと一下し、因りて即ち死れり」。菩薩重ねて問ひたまはく、「本何處に於て此象を打ち死せるなる」。諸人答へて白さく、「此象の死處は中路に在りき」。菩薩重ねて問ひたまはく、「此象、中路より誰人が拽き來りて此處に在けりや」。諸人答へて曰さく、「難陀王子は一手に尾を執へ、其大象を拽きて此地に置けり」。菩薩重ねて言はく、「打ち死せる人は甚だ當に不善なるべきも、拽きて路より遠ざからしめたるは極めて是れ善い哉」。重ねて更に之を思ひたまはく、「將二人は私に自の力を試みたるには非ざらんや、我も亦之を試みん」。爾の時菩薩は其象鼻を執へて遙に城外に擲げたまへるに七里にして地に墮ち、其地は便ち陷れ

及び字は、必ず當に實に爾るなり」。淨飯大王及び諸の群臣は、此語を聞き已りて甚だ大いに歡喜せり。爾の時菩薩は卽ち先生の爲に異種の新書を開きて廣く爲に談說したまふに、梵天大王は此が異を見て爲に此事を證せるらく、「必ず當に實に爾るなり、此異の爲の故に此書を號して梵天書と名く」と。菩薩は自ら諸種の書を解したまひ已るに、菩薩の阿舅にして摩那利と名くるが來り、菩薩等を將ゐて乘馬の法を敎へしめぬ。又劫比羅城に一博士あり名けて同神と曰ひ弓射戰法を明解せるが、來りて菩薩及び餘の釋迦童子に敎へぬ。其の摩那利は博士に白して曰さく、「此菩薩は大慈悲心あり、一切の妙法は願はくは之を敎へしめんことを、及び諸童子も亦之を敎ふるに堪へん、唯、提婆達多のみは本自ら惡性にして慈心あることなければ、願はくは請ふ、博士、妙煞の法を敎ふる勿らんことを。何を以ての故に。此人惡性なれば博士之を敎へんに、必ず一切衆生を煞して停息することあることなければ、此が爲に敎ふる勿れ」と。博士は此語を得已るに、卽ち菩薩等に法を敎へて皆悉く總蕺せるも、其法の妙なるものは提婆達多には敎へざりき。菩薩は當の日に[九]五種の弓法を習得したまへり……一には諸の遠物を射、二には彼處に聲あらんに菩薩は見たまはざるにも、其の所念に隨うて皆卽ち射得し、三には射んと欲するところの處にして著せざること有ること無く、四には前人の身上に要穴あるを知り、其の所念に隨うて……若しは死さんとし(若しは)死さゞらんとするなり……卽ち其穴を射るに悉く皆意に隨ひ、五には遠近を問はず之を射るに極く當るとなり。菩薩は此五種等の藝を明めたまひたれば、四方に之を傳ふらく、「釋迦太子には……上の如き……藝を有したまへり」と。爾の時薜舍離城の諸人は一好象の形貌具足せるを得たるに、諸人は共に集りて遞に相議して曰はく、「[一〇]其の淨飯王に一太子あり、天文もて相を占ふに、以後の時必ず金輪聖王と爲らんと。彼が威德に由りて此寶象を現ぜるなれば、數人をして此寶象を將ゐしめ、此を釋迦太子に獻ぜんとす」。諸人は當に卽ち彼象を莊嚴し、將ゐて劫比羅城に向ひ、漸行して彼に到りて淨飯王宮の門

【七】摩那利。bzaṅ-'on (ザンレヲン)、「善執」の義なり。衆許摩訶帝經には娑捺梨とせり。

【八】同神。lhar-bcas (ハルチエ)、「神と共なる」義、Sa-hadeva 衆許摩訶帝經には娑賀儞嚩とせり。

【九】五種弓法。

【一〇】本文に其淨飯王有一太子天文占相以後之時必爲金輪聖王由彼威德現此寶象令使數人將此寶象獻此釋迦太子とあり。占相の二字を明本には瞻相とし、以後の二字を明本には已後とせり。

ざりき。王は復諸の群臣に告げて共に此器を奪はしめしに、其諸臣等は索及び鈎を以て食器を牽拽せるも亦復得ざりき。諸の群臣等は奪はんとて得ざりしが故に、便ち五百の大象及以縄索を取りて此器を牽拽せり。菩薩は爾の時諸人等が慇懃に方便して種種に器を牽けるを見て菩薩は思念したまはく、「此諸人等は我が力を試みんと欲するならん」と。菩薩は遂に指を以て其器に鈎けたまへるに、其象の牽拽力は復如かずして悉く皆復退きぬ。時に淨飯王は是事を見已りて便ち是念を作さく、「而し此菩薩にして一指もて器に鈎くるに、五百の大象は悉く皆却退せり。若し兩手を用ひんには必らずや一千に敵らん。是故に之を號して千象力と名けん」。此は是れ菩薩の第四の名號なり。

菩薩の生時には常法式あり、若し學に入らんと欲せんには五百の侍從童子を以て隨はしむるなり。菩薩、書業を學習したまへる時、博士ありて彩光甲と名け、五百種の書を明解せり。時に淨飯王は菩薩及び諸童子を將ゐて彩光處に詣り、遣して受業せしめぬ。爾の時彩光博士は一種の書を作りて彼菩薩に示して之を學ばしめしに、菩薩答へて曰はく、「此一種の書は我れ先に已に解せり」。次に第二般の書を與へて菩薩に示し之を學ばしめしに、菩薩答へて曰はく、「此の一般の書は我れ先に已に解せり」。次に第三般の書を與へて之を學ばしめしに、菩薩答へて曰はく「此一般の書は我れ先に已に解せり」。其彩光先生は乃し五百般の書を示すに至りしに、亦復是の如くに(答へたまへり)、「……我れ已に之を解せり」と。菩薩は博士に問うて曰はく、「更に餘書あらんに與へよ、我れ之を學ばん」。博士答へて曰さく、「此五百般の書は世間に行用せり、我唯此を解して餘は皆知らじ」。爾の時菩薩は即ち自ら一般の書を作りて先生に度し與へ、先生に問うて曰はく、「此は是れ何の字にして又復何の名なる」。先生答へて曰さく、「我れ此般の字・名を識らざるなり」。菩薩答へて曰へく、「若し世間の中に二種の出現ありて、一には菩薩の出で、二には金輪王の出でんに、此般の字は世に隨つて自ら出づるなり」。爾の時空中の梵天大王は即ち出で、語げて曰はく、「菩薩所說の二種の現

【五】千象力。菩薩の第四名號なり。

【六】彩光甲。srin-bu go-cha(シンプゴチャー)、「昆蟲の甲冑」なる義、文字の教師なり。衆許摩訶帝經には其名を出さず。

を」。其師告げて曰はく、「我れ出家して甘露を希求せりと雖、然も由ほ未だ證せざれば傳ふる所なきを愧づ。今釋代所生の童子は必ず當に無上妙果を獲得して能く甘露を以て衆生を滋益すべければ、汝諸弟子可しく彼に詣りて出家すべし。若し出家し已らんに豪姓・種類・摩納薄伽を恃むこと勿れ、勉勵精懃して常に梵行を修し、法を得んが爲めの故に專精に加行せよ、若し此行成ぜんには當に甘露を獲べけん」。是語を作し已るに伽他を說いて曰はく、

「此より東方に於て　汝は當に往いて求覓すべし
　諸佛には實に遇ふこと難し　見え已らんに可しく勤修すべし」。

無常法頌を說いて曰はく、

「積聚せるは皆銷散し　崇高なるは必らず墮落せん
　合會せるは皆別離し　有命なるは咸く死に歸せん」。

時に阿私陀仙は此頌を說き已るに便ち卽ち命終せり。爾の時弟子那羅陀は種種如法の供具を以て時に隨ひて殯葬し已り、便ち波羅痆斯城に詣りて彼に於て住し、五百の摩納薄伽と與に其が爲に婆羅門の薜陀呪を教示せり。其の那羅陀は是れ迦旃延姓たりければ、因みて迦旃延と號せり。若し釋迦菩薩の正覺を成じたまへるに當り、迦旃延は佛所に詣るに、彼佛は卽ち大迦旃延と喚びたまひ、而し便ち法を以て教示して彼をして生死の大苦海を度して最上寂靜の究竟涅槃に住せしめたまひければ、遂に以て之に名けて大迦旃延と爲し、後に當に此を得ては甘露と名けぬ。

爾の時菩薩は、嬭母の膝上に坐し金槃中に於て香稻飯を食すること極めて多くして息めたまはざりければ、嬭母は多きを見て遂に食器を奪はんとし、菩薩は手を以て其金槃を捻へたまふに、其嬭母は此食器を奪ふこと能はず、乃至、八嬭母も此食器を奮はんとせるに亦皆得ざりき。其嬭母等は共に往いて王に白して具に上事を說けるに、王及び諸の宮人等は共に此器を奪はんとせるも亦復得

【三】摩納薄伽(māṇavaka)。儒童と譯す、青年婆羅門なり。

【四】大迦旃延(mahākātyāyana)。

是の如きの最尊勝　云何が而し憂懼せん、
我れ今恨む、衰老し　死時將に遠からざらんとして
轉法輪に見えざるを　所以に自ら悲泣せるならのくみ。
當來世間の人にして　此菩薩に遇ひまつらんには
必ず妙法を聞くを得て　彼の寂滅の果を證せん」。

時に阿私陀仙は此頌を說き已るに、便ち惱恨を懷きて是の如きの念を作さく、「此太子の威德力に由りての故に我をして神通を退失せしめければ、飛行して空に乘じて來去すること能はじ。我れ今此より步みて城門を出でんに、衆人は我を見て必ず輕慢を生ぜん」と。是念を作し已りて父王に白して曰さく、『王、曾て發願したまへり、「願はくは阿私陀仙の、(我が)城中に出入せんことを」と。我れ今步み來りて王の宿念に酬いぬ、今亦步みて去らんとす、王よ應に我が爲に城路を修理せらるべし』。爾の時父王は卽ち大臣に令して諸人衆に勅して街衢を嚴飾し諸の幡蓋を懸けしめ、國人に告げて曰はく、「阿私陀仙は今步みて城を出でんとす、汝等諸人は意に隨うて觀望せよ」と。時に彼仙人は內に惱恨を懷きつゝ淨飯王及び王の臣佐・長者居士・婆羅門等と與に前後に圍遶せられて城門の外に出でぬ。仙は王に白して曰さく、「王、可しく宮に還らるべし、我れ今辭し去れば」。旣にして相別れ已るに阿私陀仙は漸次に前行し、華陀山に至りて卽ち彼の山に登り、其勝地を擇びて因りて以て居住せり。時に彼仙人は遠行して疲乏せりければ、旣にして坐して憩息せるに遂に仙定に入り、定に入れるに由りての故に本神通を得たりき。後に他時に於て遂に便ち染患せるに、仙の弟子衆は諸の湯藥を以て療治せるも差えざりき。衆、師に白して曰さく、「師よ、今此疾は藥療も痊ゆる無し、世間無常にして爲に諱く可からず、我諸弟子は皆寂靜を求むるも師は旣に常樂を獲得したまへり、豈遺誨を留めざる可けんや。請ふ、師よ示誨して我等をして悟入する所あらしめたまはんこと

【三】 華陀仙。藏文の語は前註(この六四)吉悉枳迷山に同じ。衆許摩訶帝經には枳慇計馱山とせり。

巻の第三

（菩薩の受業納妃）

時に阿私陀仙は既にして太子の必ず正覺を成じたまはんを知り、即ち自らの身の壽命長短を觀ずらく、「我れ今此生にて菩薩の菩提を證したまふに見えまつるを得るや不や」と。既にして諦觀し已るに、即ち菩薩は[一]十九にして出家し、六年苦行して甘露果を獲たまふなるを覩、復已が身は先時に殞歿して菩薩の人を度し法を說きたまふに逢ひまつらざるを知りて、便ち自ら悲傷し啼泣懊惱せり。

時に淨飯王は既にして此を見已りて甚だ大に驚愕し、頌を以て問うて曰はく、

「丈夫及び女人にして　見えん者は皆喜躍せるに
大仙、今何の故にか　此に對ひて獨悲泣せる。
將我が太子に　諸の不祥相のあるには非らざらんや
善い哉、大仙人　願はくは速に我が爲に說かんことを」。

時に阿私陀仙は頌を以て答へて曰さく、

「設ひ彼の虚空の中に　忽ちに金剛の雨を降らさんとも
此太子が身に於ては　一毛をも損ふこと能はじ。
猛風と炎火と　及び諸の利刀劍も
毒氣もて嚙む惡蛇も　亦皆害ふこと能はじ。
一切の恐怖人をこそ　太子爲に擁護したまふなれ
云何が慈悲の主にして　而し害者を變ふる有らん。
自在の諸梵天　皆來りて爲に侍衞せる

[一] 十九出家。藏文には二十九出家とせり。

めたまひしや未だしや」。父王答へて曰はく、「已に相せしめ訖れり」。阿私陀は復王に白して曰さく、「彼等諸人は此太子を占ふに、當に何の相ありとせる」。父王報じて曰はく、「若し國位を紹がんには金輪寶に御し、聲は十方一切國土に聞えん」と。時に阿私陀は贊頌を以て曰さく、

「大王、今當に知るべし、　相者は測るを能くせじ
未劫(まつこふ)には輪王なければ　必ず菩提道を證せんを。
一切金輪王の　相は猶炳著ならず
我れ今太子を觀ずるに　當に法王位を取るべけん」。

眼は恒に眴ぎせざること三十三天の如く、異業に由りての故に日夜常に四維上下一由旬内を見、梵音深遠なること雪山鳥の其聲淸妙なるが如くなり。菩薩は生れ已るに自然に廣大の智慧を具足し、善く一切世間を辨して正化し、父王の國法は明了したまはざるはなかりき。爾の時那羅陀仙人は來りて師に白して曰さく、「今者菩薩は刧比羅城に入りたまひしに、父王淨飯は已に三號を立てぬ。願はくは師よ、共に詣りて禮拜瞻仰せんことを」。其師謂ひて曰はく、「今汝が意に隨はん」。二仙は相隨へて禮謁を修めんと欲せるに、菩薩の(威)力を以ての故に遂に神通を失ひ、常の如くに空に乘じて去るを得ずして便ち共に歩みて刧比羅城に往きぬ。既にして城に入り已りて王門の外に至り門人に告げて曰はく、『汝可しく我が爲に往いて大王に白すべし、「阿私陀仙今門外に來れり、願はくは大王に見えんことを」と』。時に守門人卽ち王所に至りて具さに上事を陳べしに、王は是を聞き已るに卽ち香華を持して彼二仙を迎へて宮内に安置し、既にして安置し已るに善言もて問訊すらく、「今者大仙は何の緣にてか遠くより來り、何の事をか求めんと欲するなる」。二仙答へて曰さく、「我等故に來れるは菩薩に見えんことを願ひてなり」。王は仙に報じて曰はく、「我が太子は今正に安眠すれば、且らく待て、須臾にして與に相見えしめん」。爾の時二仙は復王に白して曰さく、「復未だ覺めたまはざると雖、我等が意には暫し觀瞻しまつらんと欲す」。爾の時大王は卽ち二仙を領して、菩薩所に至り便ち菩薩に見えしに、復寢睡したまへりと雖も其眼は常に開けり。時に阿私陀仙は是事を見已りて卽ち頌を說いて曰はく、

「眞飛龍馬の　　　　　　　　　暫睡せるにも還復覺めたるが如く
　善當事人の　　　　　　　　　睡蓋も覆ふこと能はざるが如くなり」。

時に彼の孄母は卽ち前み太子を捧抱して彼の二仙に授けしに、時に阿私陀は便ち雙手を以て跪きて承受し、遍體に觀察して大王に白して曰さく、「大王、已に諸婆羅門占相師等をして太子を相せし

端嚴にして他軍を降伏し、此大地中の所有人等は相犯すものなくして皆悉く勝妙の善法を行ぜしむるなり。若し當出家せんには法王位如來・應正等覺を得、名稱普く聞えて三十二相を具せん」と。王即ち問うて曰はく、「何者が是れ三十二大丈夫相なる」。一には大丈夫足の善く安住して等しく地を安ずるの相を具し、二には雙足下に於て千輻輪相を現じ、三には大丈夫纖長の指を具し、四には足跟趺圓長、五には手足細軟・六には手足網縵、七には手を垂るゝに膝を摩するの相、八には（六九）翳泥耶蹲相・九には身傴曲ならず、十には（七〇）勢峰藏密、十一には身相圓滿せること（七一）尼瞿陀樹の如くなる相・十二には常に光一尋、十三には身毛は上に靡き、十四には身の諸毛孔には一一に毛生じて紺青色の螺文右旋せるが如く、十五には身皮金色、十六には身皮細滑にして塵垢著せず、十七には其身上に於て兩手・兩足・兩肩及び項の七處圓滿し、十八には其身の上半は師子王の如く、十九には肩は善く圓滿に、二十には髆間充實し、二十一には身洪健直、二十二には四十齒を具して皆悉く齊平に、二十三には其齒に隙なく、二十四には其齒鮮白、二十五には頷は師子の如く、二十六には其舌廣薄にして、若し口より出ださんには普く面輪を覆ひて耳髮際に至り、二十七には諸味中に於て最上味を得、二十八には大梵音を得、言詞和雅にして能く衆意を悅ばしむること、譬へば（七二）羯羅頻迦の音の如くにして、其聲雷震せること猶し天鼓の如し、二十九には其目紺青、三十には睫は牛王の如く、三十一には其頂上に（七三）烏率膩沙を現じ、三十二には眉間の毫相は其色光白にして螺文右旋せるとなり。若し出家せざらんには轉輪聖王たる得て四大洲に王たらん。菩薩の常法として其菩薩の母は菩薩を產み已るに、七日にして命終し三十三天に生ずるなり。菩薩の常法として生れ已るに其身端嚴にして、諸の世間に超え衆に愛樂せられて見るものは厭くこと無く、猶し善巧工人の閻浮檀金を以て諸の形像を作り、天衣もて上を覆はんに大光明を放ちて普く遍く暉耀するが如く、其菩薩の身も亦復是の如く、彼の蓮花の衆人に愛せらるゝが如く菩薩も亦爾るなり。菩薩の常法として

【六九】翳泥耶蹲相。aiṇeyajaṅghā の音寫、鹿王の腨の如き相をいふ。
【七〇】勢峰藏密。陰藏が馬王の如くなる相をいふ。
【七一】尼瞿陀樹。尼拘律樹(nyagrodha)の如く縱廣周匝して圓滿せる相。
【七二】羯羅頻迦。kalaviṅka の音寫、衆許摩訶帝經には頻伽と略稱せり。
【七三】烏率膩沙(uṣṇīṣa)。肉髻なり。

て男女を生得せんには、先に將ゐて彼の藥叉に向うて爲に禮を作せり。時に彼大王は便ち臣佐に勅して其太子を將ゐ、增長釋迦藥叉處に往いて禮拜を作さしめき。臣は王敎を得て七寶の輦轝を以て太子を安置し、藥叉の處に往詣せり。劫比羅城の諸釋種等は性懷獷烈にして心意兇猛に、多く人我を起して堅鞕惡暴なりしに、彼菩薩を見まつりては皆悉く寂靜にして默然して住せり。時に淨飯王は思念を作して曰はく、「此の劫比羅城に住する諸釋種等は性懷獷烈にして心意兇暴に、多く人我を起して堅鞕兇暴なるに、彼は太子の入城を見るや皆牟尼の如くに默然して住せり。此緣を以ての故に可しく太子を呼びて名けて釋迦牟尼と爲すべし」と。時に釋迦牟尼菩薩は藥叉廟所に至りたまひしに、彼の釋迦增長藥叉は遙に菩薩が漸く廟所に近きたまへるを見て、即ち座より起ち五體を地に投げて菩薩を頂禮せり。衆人見已りて甚だ大に驚怪し、即ち淨飯王所に往いて白して言さく、「今、藥叉神は遙に太子を見るや、廟よりして出で、雙足を頂禮せり」。時に王は聞き已りて甚だ大いに歡喜して是の如きの言を作さく、「若し天神にして太子を禮拜せるが故に是れ天中の天なるを知りぬ」と。此緣を以ての故に號して天中天と爲せり。時に彼大王は即ち太子を將ゐて本宮に還り、宮の乳母をして時に依ひて養育せしめしに、彼の乳母等は甚だ大いに歡喜し、即ち雙手を以て父王の邊より太子を捧受し、宮閣内に在りて勤めて養育を加へぬ。彼の乳母等は日每に香湯もて洗浴し、妙好香を塗りて種種に莊嚴し、日每に將ゐて王所に向へるに、王は乃ち太子を抱持して膝上に安き、相貌を觀看して甚だ大いに歡喜せり。國に常法有り、若し王宮にして子を生まんに、即ち梵行相師を喚びて相貌を觀看せしむるなり。王乃ち相人を喚びて太子を占はしめしに、既にして相を占ひ已りて王に答へて曰さく、「今此太子は實に是れ三十二相を成就せり。若し家に在らんには金輪聖王と作るを得、四天下に王たりて善法もて理化し、七寶を具有し……一には金輪寶、二には象寶、三には馬寶、四には末尼寶、五には女寶、六には主藏臣寶、七には兵將寶なり……千子を具足し、勇健

那羅陀は時時に而し來りて恭敬供養せり。爾の時仙人は緣に隨うて教示し那羅陀に報じて曰へるに、彼は仙が記を聞いて深信して虛ならず、喜び身心に溢れ出家を求請して弟子と作れり。菩薩の初誕には天地光明なりければ、那羅陀は瑞を覩て卽ち仙に白して曰さく、「親教、頗し聖世あらんには二日雙び現ずるなりや不や、若し二日なからんには何の故にか此窟に是光明ありし」。

時に阿私陀仙は伽他を說いて曰はく、

「日光は極熱にして明淨ならず　此光は明淨にして及び清凉に
流輝して山窟を晃耀せり　我れ定んで知る是れ牟尼の光なるを。
菩薩は神通大威德あり　其母胎を出づるに此光を現じ
清淨明朗の眞金色は　世間の諸大地に遍滿せり」。

那羅陀は報へて曰さく、「親教、我れ今親教に隨從して菩薩を看まつらんと欲す」。時に仙告げて曰はく、「汝知れりや不や、彼の菩薩には大威德ありて天龍八部に圍繞せらるれば、我等は彼に往かんとも見るを得べからじ。若し彼菩薩にして劫比羅城に入り〔六六〕三號し已らんに、然る後我往かんに菩薩を見まつりうべけん」。菩薩生まれたひし時〔六七〕五百の宮人は各一男を生み……謂はく贊鐸迦は而ち上首たり……五百の宮人は各一女を生み……旃尼は而ち上首たり……五百の大臣は各一男を生み……鄔陀夷は而ち上首たり……五百の象有りて各一子を生み……報瀰陀子は而ち上首たり……五百の馬は各一子を生み……馬嚗呵馬子は而ち上首爲り……五百の寶藏は自ら開きて出現し、四方の諸國王等は悉く皆降伏し、常に種種の雜物を獻げて來りて奉事せり。爾の時大臣は是相を見已りて來りて大王に白すに、王は此事を聞いて便ち深く恩念すらく、「我が今此子は一切の諸善事業を成就せり」と。此に因みて大王は此太子を號して、名けて成就一切事と爲せり。是故に菩薩は初め此名を得たまひき。時に劫比羅城に一藥叉あり名けて〔六八〕釋迦增長と爲し、城内に若し釋迦族の類あり

【六六】三號。成就一切事、釋迦牟尼、天中天の三號をいふ。

【六七】藏文には「隨從者より hdun-ma（ドゥン マ＝願ふもの＝chun.dakn＝贊鐸迦）等の五百を生み、五百の牝牛と五百の牝馬がそれに從ひ、五百の寶も亦現生せり」とありて、旃尼・鄔陀夷・報瀰陀子・馬嚗呵馬子の記なし。

【六八】釋迦增長。Çā-kya hphel（シャチャ ペール）、衆許摩訶帝經には舍迦嚩默擬とせり。

設掃洒し、摩耶夫人及び諸の侍從婇女をして藍毘尼園に詣りて遊觀を爲さしめしに、乃し一無憂樹の花葉滋茂せるを見て夫人は太子を生まんと欲し、便ち手づから其樹枝に攀ぢぬ。時に天帝釋は菩薩の母の心に多人衆中にては卽ち其子を誕む能はじとの慙恥を懷けるを知りて、便ち方便を作して大風雨を發し、諸人衆をして各自ら分散せしめぬ。是時帝釋は化して老媼と作り夫人の前に立てるに、夫人は卽ち生みければ、時に天帝釋は仙衣を以て擎げ取りぬ。先に腹內に在せしには心に煩悶多かりければ、帝釋に告げて曰はく、「汝、地に放て」。時に天帝釋は蹔し少遠ざかり住せり。菩薩生まれたまひし時大地は振動し、天地光明して乃し日月の及ばざる所處に至るまで皆明徹せしめぬ。其中の衆生は皆相見ゆるを得て各相謂ひて言はく、「唯我が身獨り此處に在りて生ぜるに非ず、亦餘人の共に此處に在るありき」と。一切菩薩には常法式ありて、胎より出でたまひし時は諸の濃血及び餘の穢惡なく、其菩薩の母の產せんと欲するの時は坐せず、臥せず樹に攀ぢて立ち諸の苦惱の後にあることなかりき。菩薩の常法として生れ巳りて地に在るに、人に扶侍せらるることなくして七步を行き、四方を觀察して便ち是言を作したまはく、「此は是れ東方、我は是れ一切衆生の最上なり。此は是れ南方、我は衆生に供養せらるゝに堪へたり。此は是れ西方、我れ今決定して後生を受けじ。此は是れ北方、我れ今巳に生死の大海を出でたり」と。爾の時諸天は手に白蓋及與白拂の[六一]雜寶もて嚴飾せるを持して菩薩の上を覆ひ、諸の龍王等は各二種の清淨香水……所謂冷と暖と調和せるなり……を持して菩薩を洗浴しまつれり。諸の菩薩の常法として誕生したまへる處には其母前に於て大池水を現じ、其母の澡洗せんと欲せる所は皆悉く充足せりき。諸の菩薩の常法として誕生したまへる時、諸天仙衆は虛空中に在りて種種の[六二]天の妙和香・末香・塗香・旃檀・沈水を以てして菩薩に散じ、種種の諸天の音樂は虛空中に在りて自然に響を發せり。[六三]爾の時阿私陀仙は[六四]吉悉枳迷山の石窟中に在りき。彼仙は恒に一切世間の興衰の相を知れり。其仙に一外甥有りて[六五]那羅陀と名け、彼

【六一】本文に萃寶とせるも明本によりて雜寶と改む。

【六二】藏文には「天の utpala と padma と kumuda と puṇḍarīka と agaru と tagara と candana と多摩羅葉 (tamālapat'ra) とを散じ、天の mandārava 花を散ぜり」とあり。

【六三】藏文には四大國王誕生事を出せり、卽ち寒四・八〇右末四行—同左四行に相當する文を出せり。

【六四】吉悉枳迷山。ri-bo kun-hdsin (リイ ボ クン ドズイン)、「一切を執受する山」なる義、衆許摩訶帝經には緊俊吉陀大山とせり。

【六五】那羅陀。mis-byin (ミイ チン)、「人によりて與へらるる」義、nārada の音寫、衆許訶帝經には曩羅那とせり。

なきが故なり。菩薩、母胎に在る時も亦復是の如きなり。諸の菩薩の常法として、其母の、常に菩薩の其胎中に在るを見ることは、猶し青黄赤白等の綿を以て淨寶を裹めるがごとくにして、諸の慧眼の人は其寶綿を見て分別し曉了するなり。母は菩薩の其胎中に在るを見ること、亦復是の如きなりき。諸の菩薩の常法として、母胎に在す時は能く其母の身體をして和悅して疲乏あることなからしむ。諸の菩薩の母胎に在ます時、其母は自然に常に五戒を持するなり……殺さず、盜まず、邪行せず、妄語せず、飲酒せざるとなり。諸の菩薩の常法として、其母胎に在すに、其母は自然に欲愛を貪らざるなり。復次に摩耶夫人は忽ち自ら四大海の水を皆飲みて盡さしめんと思念し、淨飯王に向うて其心願を說きぬ。時に劫比羅城中に一外道有り名けて【六〇】赤眼と曰ひ、諸の幻術を善くせり。王は使者をして其赤眼を喚ばしめ如上の意を說けるに、赤眼報へて曰はく、「願はくは夫人と與に高樓上に登らんことを」。既にして樓に登り已るに即ち幻術を以て四大海水を僞り、其海水を持して夫人に與へて飲ま(しめ)、既にして水を飲み已るに、爾の時夫人は其意即ちに息みぬ。時に摩耶夫人は復更に思念すらく、「一切有情の繫閉せられたる者をして、悉く解脫せしめん」と。是思を作し已りて即ち王に向うて說けるに、王は是語を聞いて即ち獄官に勅して、所有囚閉をして皆放出せしめければ、爾の時夫人は其念即ち息みぬ。摩耶夫人は又復思念すらく、「意に財物を布施せんと欲す」と。是念を作し已りて即ち王に向うて說けるに、王は是語を聞きて即ち僞に種々の財物を布施せりければ、爾の時夫人は其念便ち息みぬ。又復思惟すらく、「苑園に往きて遊行觀望せんと欲す」と。便ち王に向うて說けるに、王は是を聞き已りて、即ち夫人と將に諸の園苑に就りて觀望せりければ、其念便ち息みぬ。又復念意を生ずらく、「父王の園苑中に於て居止せんと欲す」と。便ち王に告げて曰へるに、王は是語を聞いて即ち使者をして善悟王の處に往いて報ぜしめて云はく、「今、摩耶夫人は意に彼の父王の藍毘尼園中に就り居止せんと欲す」と。王は是語を聞いて便ち即ち人を差して數

【六〇】赤眼。「赤眼杵行」の義。

たまひ、慇懃に三唱して諸天に告げ已り、卽ち夜中に於て六牙白象の形の如くして天竺に下り、摩耶夫人の淸淨胎の內に降りたまへり。爾の時摩耶夫人は卽ち其夜に於て[五八]四種の夢を見ぬ。一には六牙白象來りて胎中に處せるを見、二には其自身の虛空に飛騰せるを見、三には高山に上れるを見、四には多人衆の頂禮圍繞せる見たりき。是夢を作し已りて淨飯王に向ひて如上の事を說けるに、時に淨飯王は卽ち相師を召して其夢事を說か(しめ)たまへり。相師答へて曰さく、「我が相法の如くんば、王の大夫人は必ず當に男を生みて三十二丈夫の相を具足して其身を莊嚴すべく、若し王位を紹がんに當に金輪に乘じて四天下を伏すべく、若し出家して道を修めんには法王位を證して名は十方に聞え衆生の父と作らん」と。

內を頌に攝して曰はく、

[五九]「我れ降生せる時は　　四天守護せると
明月の珠の　　諸物もて纏裹せるが如きと
亦寶線もてせるが如くにして　　智者は明了せると
自ら五戒を持てると　　諸の欲念なきとなり」。

諸の菩薩には常法有り、覩史天より母胎に下生したまへる爾の時に當りては、十方の大地悉く皆震動し、大光明有りて並に皆周遍し、六趣衆生隨業の境にして日月威光の到らざる所處をも普く皆明徹せり。其中の衆生は各相告げて曰はく、「今此光明は未曾有を得たり、將我等は別に生を受けたるには非ざらんや」と。復次に菩薩母胎に降りたまへる時、釋提桓因は卽ち四天王神を遣して其母を營衛せしめ、而し此四神は一は利刀を執り、一は羂索を執り、一は戟を執り、一は弓箭を執れり。何を以ての故に、諸の惡魔は其母に便を得るを恐れてなり。諸の菩薩降生の時、其母胎中の諸血穢等は皆悉く遠離して染著せざること、明月の珠の諸物のために纏裹せらるゝと雖而し染汚すること

【五七】摩耶夫人。前註(三七)の大幻化卽ち摩訶摩耶なり。
【五八】摩耶夫人の四種夢。
【五九】藏文にては、內頌にとして「轉生と天と珠寶と八邊形と疲乏と五戒を懷くと堅固となり」とあり。

頻螺迦葉若羝羅（唐に多毛と云ふ）なり。是の如き等の外道ありて邪法もて彼の諸の衆生を敎化し、邪見に貪著して濟度すべきこと難きに、如何が菩薩は今彼に往かんと欲したまへる。今我が覩史多宮の一一諸天の[五四]聽法の座は、縱廣正に十二踰膳那に等しければ、我に當ひて此に在りて法を說き、我等聞き已るに深く信受を生じて、能く我等をして長夜中に於て安樂利益ならしめたまはんことを」。彼の時諸天是語を作し已るに、菩薩は爾の時諸天に告げて曰はく、「汝等諸天、宜しく各意に隨うて諸の音樂を作すべし」。時に彼の天衆は卽ち皆同時に諸の音樂を作して其聲沸閙せり。爾の時菩薩は大螺を吹きたまひしに、諸の音響は普く皆摧息せり。菩薩は爾の時復天に問うて曰はく、「諸の音樂中何の聲か大たりし」。諸天答へて曰さく、「螺聲最も大なりき」。「諸善男子、汝等當に知るべし。大螺聲の能く一切の諸音樂の聲をして悉く皆摧息せしむるが如く、我も亦是の如く贍部洲中に下らんに、所說の法ありて能く六師外道・六隨聲聞外道・六定外道をして皆悉く摧滅せしめ、一切衆生をして甘露の法を得て皆悉く飽滿せしめ、無常螺を吹きては諸の外道の[五五]假常の計をして皆悉く摧滅せしめ、大空螺を吹きては諸の外道の執有の見をして亦皆摧滅せしめん」。爾の時菩薩は、伽他を說いて曰はく、

「師子能く諸の猛獸を伏し　金剛善く一切の堅を摧き
帝釋能く阿蘇羅を伏し　一切光中日光勝る」。

爾の時菩薩は此頌を說き已りて諸天に告げて曰はく、「汝等若し清淨にして甘露の法に飽滿せんと欲せんには可しく中天竺國[五六]六大城內に生る可し」。爾の時釋提桓因は座中に在りて是の思念を作さく、「知りぬ、釋迦菩薩は必ず[五七]摩耶夫人の胎藏の內に託したまふなるを。我れ當に神通力を以て其體を淸淨にし、垢穢なく身力强健にして以て菩薩を待たしめまつらん」。是念を作し已るに卽ち通力を以て彼の摩耶夫人の胎藏の內を淨めまつれり。菩薩は爾の時覩史多天宮に於て五種觀察し

【四四】遮彌。bzań-ldan（ザンダン）、「賢を持つ」義。
【四五】梵壽。tshańs-pahi tshe（ツァンペイツェー）、「梵の壽」なる義。
【四六】蓮實。pad-mahi sñiń-po（パドマ、イニンポ）、「蓮花の核」なる義。
【四七】赤海子。dmar-po（マルポ）、「赤」の義。
【四八】憍多伽羅摩子（udrakarāmaputra）。
【四九】阿羅邏哥羅摩（ārāḍakalāma）。
【五〇】善梵志。「善行婆羅門」の義。
【五一】最勝儒童。「普勝婆羅門」の義。
【五二】黑仙。draṅ-sroṅ maboiḥ-ja（チャンロンマチンペ）、「結びつかざる仙人」の義。
【五三】優樓頻螺迦葉若羝羅。urvelā-kaśyapa なり。若羝羅は jaṭila の音寫、編髮外道の義なり。
【五四】藏文には「聞法のための菩薩の座は十二由旬の廣きに設けられ……」とあり。
【五五】假常の計。假有のものを常住なりと執する偏見。
【五六】六大城。十誦律（卷五・五七右）に瞻波國、舍衞國、毘舍離國、王舍城、波羅㮈、迦維羅衞城とせり。

なり。復次に何の故にか所生の母を觀じたまふなる。菩薩は覩史多天宮に在りて是思惟を作したまはく、餘の菩薩の如きは何等の母に於て而し胎臟を受けたまひたる」。(便ち)彼女人の七世種族の悉く皆淸淨にして婬汚あることなく、形貌端嚴にして善く戒品を修し、菩薩の十月を具足して其胎臟に處するに堪任して而も此女人の所有生業・往來進止に曾て障礙することなきを觀じたまへり。復次に大幻化夫人は曾て過去の諸佛に於て無上願を發せるらく、「我が來世所生の子をして覺を成種するを得せしめんことを」と。是諸菩薩は諸の衆生の、「何の故にか菩薩は彼の無相女人の胎中よりして世に出でたまひたる」との是謗言を作すを恐るゝに由りてなり。是故に菩薩は無始より已來諸の善根を種ゑたまひたれば、(念に隨ひて)皆悉く成就するなり。是義に由りての故に菩薩は所生の母を觀察したまふなり。

爾の時菩薩は是五種もて遍く觀察を作したまひ已るに、卽ち殷懃に三唱して六欲天に告げて是言を作したまはく、「我れ今是の覩史多天より人間に下生し、白淨王最大夫人の胎中に於て其太子と爲り、誕生の後は常住の果を證せん。汝等諸天、我に隨ひて斯果を證せんことを願ひ欲まんには、可しく人間に於て我に同じて彼に生るべし」と。天衆中に於て三たび是語を告げたまひしに、爾の時諸天は此語を聞き已りて同聲に報じて曰さく、「善い哉、菩薩、知れり不や、彼の贍部洲は剛强難化にして諸の濁亂多く、外道六師及び隨外道六聲聞等并に諸の六定外道の類は遍く其土に滿ち、深く邪見に著して拔濟すべきこと難きを。何をか[四一]六師と謂ふなる。一には脯剌拏、二には末揭利子、三には珊逝移毘羅胝子、四には阿市多雞舍甘婆羅、五には脚拘陀迦旃延種、六には昵揭爛陀若提子なり。何をか六隨外道聲聞と謂ふなる。一には[四二]拘達多婆羅門、二には[四三]輸那陀、三には[四四]遮彌、四には[四五]梵壽、五には[四六]蓮實、六には[四七]赤海子なり。何をか六定外道と謂ふなる。一には[四八]鬱多伽囉摩子、二には[四九]囉囉哥囉摩、三には[五〇]善梵志、四には[五一]最勝儒童、五には[五二]黑仙、六には[五三]傴樓

【四一】六師。律部十九、註(三の八―一三)參照。

【四二】拘達多婆羅門。bram-ze rgyal-rgyal(ジャム ゼーチュ ギャル)「賤勝婆羅門」なる義。

【四三】輸那陀。gnas-rdzog(ネーデク)「住を打つ」義。

せるありて乞食するに得易く、十惡あることなくして多く十善を修するを(觀)見したまひて、菩薩は思惟したまふらく、「中天竺國には是の如き等の物悉く皆具足せるが故に、我れ今彼の中天竺國に生ぜん。何を以ての故に。若し邊地に生ぜんには、或は時に有情は我を誹謗せんが故に」。是の故に菩薩は福德力を以て、其の所念に隨ひて皆彼に生ずるを得るなり。佛所說の如きは虛しきことあることなければなり。何の故にか時節を觀察したまふなる。菩薩は覩史多天宮に在りて常に是念を作したまはく、「過去の菩薩は何の時節に於てか人間に下生したまひたる」。若ち彼國の衆生の上は壽八萬歲より下は壽の乃し百歲に至る(間に)、菩薩は爾の時其國に來生するを見たまへり。何を以ての故に。若し人長壽八萬已上の時は諸の衆生は愁苦あることなく、愚癡・頑鈍・憍慢にして樂に著すれば、正法の器に非ず、化を受くること難きが故に。若し人短壽百歲已下の時は諸の衆生は諸の五濁の爲に昏冒重きが故に。云何が五と爲す。一には命濁、二には煩惱濁、三には有情濁、四には見濁、五には劫濁なり。菩薩は爾の時是思惟を作したまはく、「若し我れ惡世時に世に出現せんには、多く諸の外道は心に誹謗を生じ、五濁增長して正法の器に非じ。猶し過去一切の菩薩は濁惡世時には世に出でたまはざるが如きなり」。何を以ての故に。諸佛出興せんに、所說の正法は虛しく過さざれば、是の義に由りての故に時節を觀察したまふなり。復次に何の故にか種族を觀察したまふなる。菩薩は覩史多天に在りて常に是の思惟觀察を作したまはく、「何の種族に於てか生を受くべき」。若ち人ありて先世以來、內外親族の能く誘る者なからんに卽ち彼に生まれたまへるを見たまへり。菩薩は爾の時是觀を作し已りて、乃し釋迦の清淨尊貴にして轉輪王種たるこそ出現すべきに堪へたるを見たまへり。何を以ての故に。菩薩若し下賤の家よりして世間に生まれたまはんには、有情の或は誹謗を生ずればなり。菩薩は無量劫より來、自在力を獲て、所有欲念は皆隨意なるを得たまひ、凡そ所說の法は曾て虛しく過すなければ、此因緣に由りて菩薩は所生の種族を觀察したまふ

し。然れども我が意には唯淨飯太子の爲にのみ其二妃を取らんとするなり、餘は應に取るべからじ」。諸釋迦曰さく、「此事爾るべし」。時に師子頰王は卽ち使者をして善悟王所に往かしめて之に告げて曰はく、「我れ今諸釋迦種等と共に相籌議せるに、咸く皆我に淨飯太子の爲に王が長女を取りて妃と爲さんことを許へり。王、可しく我に與ふべし」。王は語を聞き已りて甚だ大に歡喜し、卽ち五百の婇女を以て其が侍從と爲し、種種の珍服もて女身を莊嚴して劫比羅國に送れり。時に師子頰王は其女の至るを得るや、卽ち國法の如くに諸群臣を會して倡伎樂を作し、其女を納娶して太子が妃と爲せり。未だ久しからざるの間に師子頰は崩じければ、其淨飯太子を以て父位を後繼せるに、正法もて人を化して國土安樂に、五穀豐熟して諸の衰惱なく、其國の人衆は處々に充滿せり。異時中に於て大幻化夫人と與に諸樓閣に登り、後宮婇女に圍遶侍衞せられ、諸女樂を奏でて蹤逸して遊戲せり。菩薩若し覩史多天に在らんには常に五法ありて世間を觀察したまふなり。何をか[四〇]五法と謂ふなる。一には生處を觀察し、二には國土を觀察し、三には時節を觀察し、四には種族を觀察し、五には所生の父母を觀察するなり。何の故にか菩薩は生處を觀察したまふなる。（菩薩は）覩史多天宮に在りて常に是念を作したまはく、「過去の菩薩は何の處にか受生したまひたる」。便ち卽ち觀見したまふらく、「或は淨行婆羅門の家に於て生まれ、或は刹帝利貴種家に於て生まれ、或は婆羅門師と爲り、或は刹希利師と爲りたまへり。故に今の時に當りては刹利を尊と爲せば、我れ當に彼の刹利家に往いて生るべし。何を以ての故に、若し我れ彼の貧下家に於て生まれんには、或は來世衆生ありて我を誹謗するが故に」。此因緣に由りて菩薩は自在の福力を以て、其所念に隨ひて皆彼に生ずるを得るなり。此義に由るが故に菩薩受生の時は、先に當に所生の處を觀察したまふべきなり」。何の故にか菩薩は國土を觀察したまふなる。菩薩は覩史多天に在りて常に是念を作したまはく、「過去の菩薩は何の國土にか生れたまひたる」。卽ち彼國には甘蔗・粳米・大麥・小麥・黃牛・水牛家々に充滿

【四〇】菩薩五事觀察。

る』と。彼に至りて具さに陳べしに、王は此言を聞いて甚だ大に歡喜し、使をして國に還りて善悟王に報ぜしめて曰はく、「王が二女は皆相好を具しぬれば、我れ今總取して淨飯の妃と爲さん。然れども我が先王よりして而し要誓ありて二妃を取らざれば、今且らく其小女の輪王を生まん者を取らん。其大女は且らく嫁がしむる勿れ、我れ諸の群臣及び諸の眷屬を集めて此事を評議するを待て』。時に善悟王は是語を聞き已るに、卽ち國法を以て小女を莊嚴し、幷に五百婇女をして圍繞侍從せしめ、彼の國に至り已りて淨飯王の與に妃と爲せり。

爾の時師子頰國王に一輔庸の國あり、山谷内に居して[三八]般荼婆と名けたるが、忽然反叛して隣近の諸國を抄掠劫害せり。時に隣境住人の諸釋迦種は共に侵逼せられて互に相奔馳して師子頰に告ぐらく、「我等が村落は皆某賊のために日夜に侵害せらる、願はくは王兵を興し親しく往りて降伏したまはんことを」。師子頰王曰はく、「我れ今年老いて鬪戰に任へじ」。彼諸人曰はく、「請ふ、王の太子淨飯の彼に往いて捕捉せんことを」。王卽ち報じて曰はく、「汝、諸人等、若し太子に一願を求むるを許さんには我れ便ち發遣せ(しめ)ん」。衆、王に答へて曰さく、「唯然り、命に隨はん」。時に師子頰王は其の城中に於て鼓を擊ちて宣令し、四兵に嚴勅して太子に隨從し彼に往いて討罰せしめぬ。爾の時淨飯太子は父命を奉持して四兵を將領し、彼の賊所に至り共に相戰害せるに、威力を以ての故に時に彼の賊衆は太子軍のために或は殺され或は縛されて[三九]遺蘖あること無かりき。賊既にして除滅せりければ、淨飯太子は卽ち其軍を領めて本國に還歸せり。時に諸釋種は既にして太子の賊を平除するを得已るに、皆大に踊躍して而し王に白して言さく、「淨飯太子は爲に怨害を除けり、臣等諸人は喜慶に勝へず。王が先言、太子に願有りと。請ふ、王よ臣等が爲に說きたまはんことを」。時に師子頰王は諸釋に告げて曰はく、「汝釋迦種は先に言誓を立てぬ、一妻を取らじ」と。諸釋迦曰さく、「王は今、豈に牢誓を解かんと欲するならんや」。王曰はく、「然らず、更に須らく牢結すべ

【三八】般荼婆。Skya-sen（チャセン）、黃赤（pāṇḍu）の義、衆許摩訶帝經に半努嚩とし、共に Pāṇḍava 音寫なり。

【三九】遺蘖。蘖は（ひこばえ）なり。遺す所なき葉。

因みて即ち懷胎し、十月を滿ち足りて一女を誕生せるに、顏容端正にして世の希有とする所なりき。此王女甚だ端嚴なりしに由りての故に、王及び夫人・後宮眷屬一切の見る者は怪仰せざるはなかりければ、共に相議りて曰はく、「今此王女は是れ人生なりとやせん、是れ[三五]善巧天の來りて化作せる所なりとやせん」と。三七日を經て即ち國法の如くに諸の喜慶を作し、諸群臣をして遍に相籌議せしむらく、「今此女の與に何の名字をか作すべき」。諸臣白して曰さく、『此の天示城中咸相謂ひて曰はく、「此王女は先業の果報に由りて此端正を得たり」と』。復相議りて曰はく、「今此王女は人の能く生める(ところ)に非らじ、是れ善巧天の化作せる所なり」。咸王に白して曰さく、「可しく此女に名けて號して[三六]幻化と爲すべし」。即ち此女の爲に八乳母をして共に相養育せしめぬ。漸く長大するに至りし時、占相師來りて王に白して曰さく、「今、王の聖女は後に必ず兒を生み、諸相を具足し大威德ありて力輪位を得ん」と。王は此語を聞いて甚だ大に歡喜せり。後に善悟王の最大夫人は更に復懷妊し、十月滿ち足りて一女を誕生せるに、其女身の光明は城內に徹し容顏相好は世に比なき所なりき。三七日に至り喜慶を作し已りて即ち群臣を集め其名字を議るらく、「此小女は幻化に勝るを以ての故に、因みて即ち名を立てゝ[三七]大幻化と爲さん」と。復此女の爲に八乳母をして共に相養育せしめぬ。漸く長大するに至りし時、占相師來りて王に白して言さく、「今、王の聖女は後に必ず兒を生み、三十二大丈夫の相を具し、威德尊重にして轉輪王位に至らん」と。王は此語を聞いて倍歡喜を懷けり。時に善悟王は即ち使者をして書を持して師子頰王に詣り、其王に報ぜしめて曰はく、『我が大夫人は二女を誕生せるに、其の最長なるは生誕の日より顏貌端正にして世の希有とせる所、相師之を占へるに、「後當に子を生まんに力輪位を得べけん」と。其小女なるは身光倍勝し、相師之を占へるに、「後必ず子を生まんに轉輪位を得ん」と。我れ聞けり、大王に最長子あり名けて淨飯と曰へりと。二女の中、願はくは一女を以て淨飯が妃と爲さんことを。故に使をして報せしめまつ

【三五】善巧天。毘首羯磨(Viśvakarman)なり。

【三六】幻化。māyā(摩耶)の譯。

【三七】大幻化。mahāmāyā(大摩耶)の譯。

法義を具するが故に、梵行を具するが故に。當に上の如きの所有功德を得べければ、是の故に汝等苾芻、應に當に受持し讀誦して他の爲に廣く說くべし」と。爾の時劫比羅城中の諸釋種等は、此本族の次第說を聞き已りて皆大に歡喜し、卽ち座よりして起ち佛足を頂禮して各々本處に還れり。

（菩薩の降誕）

爾の時世尊は復諸苾芻等に告げたまはく、『汝等、諦かに聽け、昔時に師子頰王が劫比羅城に於て正法もて人を化せるには、其國土に於ては甚だ大豐熟し、恐怖あることなくして人衆歡樂せり。[三〇]其の善悟王が天示城に於て正法もて人を化せるには國土安穩に家給年に豐にして衰惱あることなかりき。善悟王の后は名けて[三一]勝妙と曰ひ、顏貌端正にして衆に樂見せられ、一切有情は恒に安樂を得たり。天示城中に一長者あり名けて[三二]吉祥と曰ひ、甚だ財寶多くして倉庫は盈溢し、園林田宅は其數少からず、諸の眷族多く、所有珍財は[三三]薜室羅末拏の如く等しくして異あることなかりき。時に彼の長者に一芳園あり、諸の花果流泉浴池多く、種々の諸鳥は和雅の聲を出して世に殊絕せる所、國王・王子及び諸の妃后は常に往いて遊戲せり。時に王夫人は此園林を見て卽ち貪愛を生じ其王に白して曰さく、「此園は甚だ好し、可しく我に乞へらるべし」。王便ち報じて曰はく、「今此園は是れ長者が所有なれば、我れ今安んぞ輙ち持して汝に與ふるを得んや。汝必ず須ゐんには我れ城內に於て別に自ら此園に勝れるを修造して汝と與に遊戲せん」。爾の時其王は夫人の爲の故に、王城內に於て卽ち一園を造りしに前者に倍勝せり。此園林は妙勝夫人の爲に造られたるを以ての故に、因みて此園に名けて號して[三四]妙勝と爲せり。師子頰王は恒に自ら思念して常に一願を乞へり、「若し我が種の內より一金輪王を出すを得んには甚だ我が願に適はん」と。其善悟王も亦一願を乞へり、「願はくは我れ師子頰王と與に速に眷屬と爲るを得んには甚だ我が願に適はん」と。時に善悟王の最大夫人は

【二二】天授。devadatta（提婆達多）の譯。
【二三】善悟。legs-par rab-bsal（レク パル ラブ サ）、「善く悟れる」義。
【二四】有鬘。phren-ba-can（チェン パ チャン）、「鬘を持する」義。
【二五】勝力。bzań-len（ザンレン）、「よく執る」義。
【二六】大力。dga-lphro（ゲェチェー）、「徧に傾く」義。
【二七】羅怙羅（rāhula）。
【二八】地主大王。大爾意王なり、前註（一の八）参照。
【二九】本文に汝等當知應受我昔世以來釋迦種族所在餘方如法憶念爲他廣說——とあり。藏文には「苾芻等、汝は前の諸釋迦種の血統の創起の法話を執り、受持し敷演すべし」とあり。
【三〇】善悟王。天示城の善覺王（suprabuddha）なり。衆許摩訶帝經には酥鉢囉沒陀と音寫す。
【三一】妙勝。lum-bi-ni（ルムビニィ）、「樂勝」の義。
【三二】吉祥。藏文に此名を缺く。
【三三】薜室羅末拏。律部二十三、註（二の二一）參照。
【三四】妙勝園。藍毘尼（ルンビニィ）園。

て百弓と曰ひ、百弓に子あり名けて九十弓と曰ひ、九十弓に子あり名けて最勝弓と曰ひ、最勝弓に子あり名けて嚴弓と曰ひ、嚴弓に子あり名けて[五]堅弓と曰へり。復次に諸に、其堅弓王に而し二子あり、一は[六]獅子頬と名け、二は[七]獅子吼と名け、此の贍部洲の所有一切善射の者の(中)、獅子頬王は最も上首たりき。其の獅子頬王に而し四子あり、一には[八]淨飯と名け、二には[九]白飯と名け、三には[一〇]斛飯と名け、四には[一一]甘露飯と名けぬ。獅子頬王に復四女あり、一には[一二]淸淨と名け、二には[一三]純白と名け、三には[一四]純斛と名け、四には[一五]甘露と名けぬ。淨飯王に二子あり、其の最大太子は即ち我が薄伽梵是れなり。其の第二者は即ち具壽[一六]難陀是れなり。白飯王に二子あり、一は[一七]恒星と名け、二は[一八]賢善と名けぬ。斛飯王に二子あり、一は[一九]大名と名け、二は[二〇]阿那律と名けぬ。甘露飯王に二子あり、一は[二一]慶喜と名け、二は[二二]天授と名けぬ。其の淸淨女は一子を誕生して名けて[二三]善悟と曰ひ、純白に子あり名けて[二四]有鹽と曰ひ、純斛に子ありて名けて[二五]勝力と曰ひ、甘露に子あり名けて[二六]大力と曰ひ、我が薄伽梵に子あり名けて[二七]羅怙羅と曰へり。始め[二八]地主大王より……乃し、羅睺羅に至りて其繼嗣を斷ちぬ。何を以ての故なりや。羅睺羅は無生果を證し、生死の種を斷ぜるを以ての故にして、此が爲に其繼嗣を斷てるなり』。尊者大目犍連は諸釋種の大衆の爲に其の釋迦族を說き已るに、便ち即ち坐よりして退り默然して住せり。

爾の時世尊は大目連が種族を說き已れるを知しめし、便ち臥より起ち端身に而し坐したまひて大目連に告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝は諸苾芻の爲に我が釋迦昔世以來の所有種類を說くに、如法に說き已れり」。復目連に告げて曰はく「若し復人ありて他の爲に廣く釋迦種族を說かんに、此善男子は長夜中に於て大利益を得て恒に安樂を受けん」。爾の時世尊は重ねて復諸大衆苾芻苾芻尼に告げて曰はく、「[二九]汝等、當に知るべし、應に我が昔世以來の釋迦種族の所在餘方を受け、如法に憶念して他の爲に廣く說くべし。何を以ての故に。能く汝等に於て大利益を獲、利義を具するが故に、

【五】堅弓。gshu brtan(シュタン)、「堅き弓」の義、第一巻の註(一二六)とは原語異れり。
【六】獅子頬。seṅ-gehi ḥgram(センゲー、イ チャム)、「獅子の頬」なる義。
【七】獅子吼。seṅ-gehi sgra(センゲー、イ ヂャ)、「獅子の叫び」なる義。
【八】淨飯(suddhodana)。
【九】白飯(śuklodana)。
【一〇】斛飯(drotodana)。
【一一】甘露飯(amṛtodana)。
【一二】淸淨。g'saṅ-ma(ツァンマ)。
【一三】純白。d'kar-mo(カルモ)。
【一四】純斛。bre-bo-ma(エェボマ)。斛(bre-bo)は牝牛の足跡に含まるゝ程の量、六合四勺餘なり。
【一五】甘露。tshad-med-ma(ツァーメェマ)。
【一六】難陀(nanda)。
【一七】恒星。rgyal(ギャル)、「鬼宿(tisya)」の義。
【一八】賢善(Bhadrika)。
【一九】大名(mahānāma)。
【二〇】阿那那(aniruddha)。
【二一】慶喜。ānanda(阿難陀)の譯。

く此地に於て安止すべし」。時に諸王子は仙人の敎を奉じ已りて、卽ち城壁を築きて其内に止住せり。彼仙人は水を灑ぎて界と爲しぬれば、此に因みて名を立てゝ劫比羅城と爲せり。[三]百姓漸く多くして城は先より窄小なりしが、時に天神あり此事を見已りて便ち餘處の、其地寬廣なるを指しければ、卽ち此處に就りて別に一城を立て、因みて此城を號して名けて天示と爲せり。時に諸王子は總集して籌議すらく、『我が父王は後妻を娶りしが爲の故に、我兄弟をして本國を出離せしめぬ。我等諸人は應に共に契を立つべし、「今より以後は唯一婦を娶りて更に餘を娶らじ」と』。爾の時增長王は群臣に問ふて曰はく、「我が四子は今何所にか在る」。臣報じて曰さく、「王の諸子等は過ありしに因りての故に王は國を出ださしめたるも、諸姉妹と幷に今者雪山の下、天示城中に見在して自ら廣く城邑を營めり」。增長王曰はく、「我が諸子等は豈に能く此の如くに自ら成就せりや不や」。群臣報じて曰さく、「能くせり」。時に增長王は卽ち大に踊躍し端坐擧手して諸臣に告げて曰はく、[四]「我が子は大能なり、我が子は大能なり」と。大威德に由りて大能、大能と言へるが故に釋迦の名を得たりき。後に異時に於て增長王崩じ、愛樂太子は卽ち紹立して王と爲りき。時に愛樂王も亦子息無く、後に便ち命終せり。爾の時群臣相共に詳議して天示城に往き、第一王子の名けて炬面と曰へるを册して以て王主と爲せり。子息便ち死にて炬面に子無かりければ、後に便ち命終せるに復大耳を册して以て國主と爲せり。大耳に子無かりければ、復便ち命終せるに復便ち象行を册して以て國主と爲せり。象行に子無かりければ、復寶釧を册して以て國主と爲せり。寶釧に子あり近寶釧と名け、後に王位を紹ぎぬ。近寶釧に子あり名けて天門と曰ひ、亦王位を紹ぎぬ。復次に諸仁、其の天門王は劫比羅大城に於てし、子孫相繼ぎて五萬五千代を經、正法もて國を治めぬ。其最後の王は名けて十車と曰ひ、十車に子あり名けて百車と曰ひ、百車に子あり名けて嚴車と曰ひ、嚴車に子あり名けて勝車と曰ひ、勝車に子あり名けて堅車と曰ひ、堅車に子あり名けて十弓と曰ひ、十弓に子あり名け

【三】天示城由來。

【四】釋迦稱名由來。

巻の第二

(釋迦族の淵源)(承前)

爾の時四王子は諸人衆と與に漸漸に前行して、雪山の下弶伽河側なる劫比羅仙人所住に近き處に至れり。時に四王子は諸人衆と與に各々茅草を剪りて以て屋舍を爲り此に依りて住せり。爾の時衆人は共相に採捕して以て自ら養活せるに、時に四王子は日日三時に劫比羅仙所に往いて親近供養せり。四王子等は年既に長大せるも、而も妻妾なかりければ形體羸痩せり。仙人問うて曰はく、「汝等は何の因にてか漸々に顦顇を加へたる」。王子答へて曰はく、「我等少年なるに妻妾あること無ければ日夜に憂愁せり、豈に顦顇せざらんや」。時に仙報じて曰はく、「汝等が妹もて互に相配適せよ」。王子白して曰さく、「我等知らず、得べきや不やを」。仙人報じて曰はく、「既に母を同じくせざれば此事を通許せん」。爾の時王子は各自ら思惟すらく、「我等兄弟は既に本國を離れぬれば、此の處に人の婚對を爲すべきなし、仙人の此教は甚だ我が願に適へり」即ち大に歡喜して互相に嫁娶して以て夫婦を成ぜり。未だ久しからざるの間に各男女を生みければ、時に四王子は心に喜慶を生じて其妻子と將に頻りに仙所に至りしに、茲に因りて便ち喧閙を生ぜり。仙は是を見已りて心定なるを得ざりければ、王子に告げて曰はく、「汝は當に此好住に安んずべし、我は斯處を離れん」。王子白して曰さく、「何の故にか卽ち去りたまふたる」 仙人報じて曰はく、「汝等は喧閙して我が禪定を亂せること、猶し跣脚もて棘刺の上を踏むが如くなればなり」。王子白して曰さく、「願はくは仙、此に住したまはんことを。可しく我等が與に別に好處を覓むべし、我當に彼に住すべければ」。仙曰はく、「爾る可し」。時に彼仙人は神通力ありて其の所樂に隨ひ皆成就するを得たりければ、卽ち金瓶を持して中に水を盛滿し、餘の好處に詣りて水を灑ぎて界と爲し、王子に告げて曰はく、「汝等可し

【一】劫比羅城由來。
【二】弶伽河。律部十四、註(一五の八)傍者羅河の下參照。

みて、諸の香花を散じ諸の幡蓋を懸けて以て嚴飾を爲せり。時に四王子は因みて出でゝ遊戲せるに、遙かに其園を見て亦に貪愛を生じて園門に至れり。其の修園官は莊嚴すること以に畢りて門よりして出でしに、四子問うて曰はく、「今此の園は是れ誰が所有なる」。其官報じて曰はく、「是れ國王の園なり」。四子聞き已るに却き廻りて卽ち去らんとせり。臣復白して曰さく、「云何が廻り去りて園內に入らざる」。四子報じて曰はく、「是れ父王が園なり、我等何ぞ敢へて入るを得ん」。群臣白して曰さく、「王及び王子は倶に遊戲するを得るなれば、此れ何の過かあらん」。王子聞き已りて入りて遊戲せるに、群臣見已りて馳せて王所に詣り、而し王に白して言さく、「大王、當に知るべし、王が修せしめたまひし園は今以に嚴潔せり、願はくは王、親しく往いて以て遊戲を爲したまはんことを」。時に增長王は卽ち勅して曰はく、「誰か此に樂を爲せるありし」。諸臣白して言さく、「是の四王子は中に在りて娛樂せり」。王は是語を聞いて卽ち大に瞋怒すらく、「汝可しく彼に往いて吾が爲に殺却すべし」。群臣咸く皆跪づきて王に白して曰さく、「願はくは王、慈悲もて其命を斷た（しむ）るなからんことを。王にして若し嫌ひたまはんには、且に國を出ださしめたまへ」。王聞いて請に依へり。爾の時群臣は王命を奉じ已りて卽ち王子を喚びて王所に來至せるに、告げて國を出ださしめぬ。爾の時四子は[一五三]四輪を地に著け合掌して王に白さく、「我等四子は一願を請乞しまつる、所有眷屬にして隨去せんと欲せんには、願はくは王、慈懷もて其の隨去せんを許したまはんことを」。王、子に告げて曰はく、「汝が願ふ所に隨さん」。時に四王子は各其妹を將ゐて國を出で去らんと欲せしに、時に國の人民も亦隨ひ去らんことを願ひ、七日內に於て國中の人衆は隨ひ去りて盡きんとせり。爾の時諸臣は王に白さく、「若し此の城門を閉ざゝらんには、恐くは百姓盡きん」。王、臣に告げて曰はく、「急ぎ城門を閉ぢて盡し去らしむることなかれ」と。

阿帝經には蘇婁布囉迦（nirpe-nura）とす。

【一五〇】石女。うまずめ。

【一五一】愛樂。rgyal-srid dgah（ヂャルシ ガ）、「王位を歡喜する」義なり。

【一五二】四子擯棄。

【一五三】四輪。兩肘兩膝なり。

とを」。王曰はく、「爾る可し」。卽ち一使をして速かに女が國に往かしめて先に盟誓を立て、卽ちに國法に依りて迎へ歸りて后と爲せり。時に增長王は其夫人と與に深宮內に在りて娛樂快樂し、貪愛恣盛にして時に蹔らくも捨つること無かりければ、因みて卽ち懷胎せり。十月滿ち足りて一子を誕生せるに、容儀端正にして人の愛念する所なりき。時に增長王は八乳母を以てして共に養育せしめ……先に女を取りし時王及び諸臣は共に「此女にして男を生まんに當に立てゝ王と爲すべし」との誓言を立てたれば、之に[一五一]愛樂と名けぬ。後の時漸く長じては譬へば蓮花の水を出づるが如くにして顏色敷盛せり。時に增長王は爲に長息を冊立して以て太子と爲さんと欲して愛樂を冊せざりき。時に(國)后の父王は斯語を聞き已りて卽ち使者をして書を持たしめて增長王に告ぐらく、「何の因にてか今者先の立誓に違へる、若し先の誓に違はんには、我れ當に兵を興して往いて汝が國を罰すべければ、汝當に兵を嚴りて以て我を待つべし」。時に增長王は此書を見已るに諸群臣を集めて告示して曰はく、「皇后の父王は今書を附し來れり……具に上事を陳べ……我等如何が計を設けて彼を待つべき」。群臣議して曰はく、「彼王は大威力あれば、可しく愛樂を立てゝ太子と爲すべし」。增長王は曰はく、「我に長子有り、如何が、彼の小者を立てゝ以て夫子と爲さん」。爾の時群臣復王に白して曰さく、「彼の國王は四兵强盛なり、王若し許はざらんには必ず相侵されん。今請ふ大王、彼れ愛樂を冊して立てゝ太子と爲し、其餘の四子をして國界を出ださしめんことを」。時に增長王は群臣に告げて曰はく、「我が四子は先より愆過なきに、如何がしてか之を棄てゝ國外に出ださしめん」。群臣白して曰さく、「我は是れ王が臣にして利益を爲さんと欲してなるも、我は實に無過の人に於て輙ち便ち擯棄する能はず、罪過ある人は住せしむべからじ」。王は是を聞き已りて默然して住せり。時に諸大臣は一處に總集して共に相議りて曰はく、[一五二]「諸仁、當に知るべし共に籌議を爲さん、我等は計を設けて王をして彼の四子を憎ましめんことを」と。一國を修し田地を掃洒せるに因

【一四一】招賢。smad-tshon-ma bzhin-mo(マ ツオーン マ ザン モ)、「婬女、賢」の義。

【一四二】蜜奈羅。衆許摩訶帝經には彌里拏維とせり。藏文は pad-mahi rtsa-lag(パド マ、イ ツア ラク)、「蓮華の友」なる義なり。

【一四三】甘蔗王(Ikṣvāku)。此王正しく釋迦族の初と爲す。

【一四四】補多勒迦(Ḷotalaka)を幼小と譯せるは適當ならざるべし。藏文に gron-khyer gru-hdsin(チョン チエル チュジン)とし、「形影、港、海島、白花山」等の義あり。

【一四五】增長。hphags-skyes-po(パク チエ ポ)、「勝生」の義。

【一四六】火炬面。skar mdah gdon(カル ダ ドン)、「炬火面、流星面、箭面」の義、衆許摩訶帝經には烏羅迦目佉(ulkāmukha)と音寫せり。

【一四七】大耳。lag-rna(ラク ナ)、「手耳」の義、衆許摩訶帝經には迦羅尼(karaṇ jaka)とす。

【一四八】象行。glaṅ-po-che hdul(ラン ポ チエードウル)、「象調伏」の義、衆許摩訶帝經には賀悉帝曩野(hastikasīrṣa)とせり。

【一四九】寶釧。rkaṅ gdub-can(カン ドウイ チヤン)、「足嚴を持するもの」の義、衆許摩

名け、三は[一四八]象行と名け、四は[一四九]寶釧と名けぬ。王に四夫人ありしも並に皆身亡りければ、時に甘蔗軍將王は宮內に處して悲愁懊惱せり。諸人、宮に入りて軍將王の憂愁して樂しまざるを見て前みて王に白して言さく、「王今何が故にか愁憂すること此の若くなる」。王即ち報じて曰はく、「國の大夫人は今皆殞歿せり、我れ今何ぞ愁惱を生ぜざるを得んや」。爾の時諸臣は共に王に白して曰さく、「王若し此に由りて而し愁を懷きたまはんには、隣國の諸王に皆好女有り、王、應に我をして冊して妃后と爲さしめたまふべし」。王復告げて曰はく、「我に四子あり並に皆長大して繼嗣とすべきに堪へたれば、此義に由りての故に誰か當に女を以て我に與へて后と爲すべき」。諸臣白して言さく、「王、但臣等に宣令せよ、王の爲に四方に推覓せん」。時に一國王女あり、甚だ端正にして冊して后と爲すに堪へければ、群臣知り已りて即ち來りて王に白さく、「臣等は今知りぬ、某國の王女は顏貌端正にして王后と爲すに堪へたるを」。王曰はく、「爾る可し」。即ち國使を發して彼女の所に往かしめ、彼の國王に見えし起居を問訊せるに、王は使に問うて曰はく、「此國幽僻なるに如何なれば此に至れる」。爾の時使者は彼王に白して曰さく、「我が軍將王の國大夫人は已に終に殞歿せり、聞くならく王に女有りて國后と爲すに堪へたりと、故に我を遣して來りて此事を諸論せしめぬ」。彼の王は聞き已るに即ち便ち聽許せり。復使に告げて曰はく、『汝が王にして若し我と親たらんと欲せんには、應に先に我と盟信を立つべし、「我が女に息あらんには必ず位を紹がしめん」と』。使者聞き已りて彼王に白して曰さく、「我れ本國に還りて當に具に此意を陳ぶべけん」。爾の時使者は本國に還り至り、王に稽首し已りて具に上事を陳べしに王の曰はく、「我に長子あれば彼にして設ひ子を生まんとも豈に位を紹がしめんや」。時に諸群臣は王と共に議りて曰はく、「王、但冊して取らるべし、彼れは或は男を生まんか、或は復女を生まんか、或は是れ[一五〇]石女ならんかは、王今如何がして先に此事を憂へん。願はくは王、早く索めて共に歡樂を爲したまはんこ

(シン タ サベ)」「堅車」の義。

【一二九】善議城。groṅ-khyer kun-tu snaṅ-ba (チョン チエルクン トウ ナン べ)、「普現 (samantāvabhāsa)城」の義。明本には善護城とせり。

【一三〇】果仙王。nam-mkhaḥi bdag-po (ナム カー イ ダク ポ)、「虛空の主王」なる義。

【一三一】龍護。「龍等しく護る」義。

【一三二】吉枳。kri-kri(クリ クリ)、吉利枳とも吉利王とも訖哩吉王とも音寫す。

【一三三】善生。legs-skyes(シク チエ)。

【一三四】可生。rna-ba-can (ナ ベ チヤン)、「耳を持てるもの」の義、衆許摩訶帝經には迦攝擧主とす。

【一三五】喬答摩。藏文に Gau-ta-ma とせり。

【一三六】波羅墮闍。藏文に bha-ra-dva-dza とせり。波囉捺嚩惹とも音寫す。

【一三七】甘蔗王因緣。

【一三八】黑色。mdog-nag (ドク ナク) とし、衆許摩訶帝經には訖哩瑟拏吠波野拏と音寫せり。

【一三九】鄔波馱耶。親教師なり。

【一四〇】補多羅城。前註(五一)の富多羅に同じ、衆許摩訶帝經には補多落迦 (Potalaka) とせり。

て丶號して暖生と曰ひ、此に因りて稱して日種と爲し、復喬答摩の體胤なるに緣りての故に亦喬答摩と名け、本身より生ぜるが故に身生と名け、復甘蔗園中に於て得たるが故に亦甘蔗種と名け、此四緣に由りての故に此四號ありき。復異時に於て婆羅陏闍王は子無くして身死りければ、諸臣共に議るらく、「王は子無きを恐れぬ、誰をか繼嗣せしむべき」。而し臣ありて曰はく、「其王に兄喬答摩ありて先に已に山に入りて道を修めぬ、其が族次に據りて正に位を繼ぐ合きなり」と。是議を作し已りて便ち變金色仙人の所に往き、到り已りて頂禮合掌して大仙に白して言さく、「我が國王の兄喬答摩仙は今何處に在りや」。金仙報じて曰はく、「汝等が輩の被に先に已に殺され訖れり」。爾の時臣等は復仙に白して曰さく、「其の喬答摩は出家してより已來、未だ曾て見えざれば如何がしてか殺すを得ん」。金仙告げて曰はく、「我れ汝等をして當に自ら之を知るべからしめん。喬答摩は曾て過咎なかりしに、枉げて汝に殺されぬ」。衆人復白して曰さく、「如何がしてか之を殺せる」。時に彼金仙は卽ち上事を說けるに、諸人聞き已りて咸仙に白して曰さく、「我等は實に是の罪過をなせり」。此語を作し已るに其の二童子は卽ち金仙の左右に至りければ、諸人問うて曰はく、「此の二童子は是れ誰が種族なる」。金仙答へて曰はく、「此の二童子は是れ喬答摩の子なり」。諸人復言さく、「如何がしてか之れ有りし、名字は何等なる」。爾の時金仙卽ち上事を說けるに、諸人之を聞きて皆大に歡喜し、卽ち仙所に於て長童子を請ひ、侍衞して國に歸へり便ち冊して王と爲せり。其王は國を治むること未だ久しからざる間に、卽ち便ち身死りて子息あることなかりき。爾の時諸臣は復山中に於て其小弟を迎へ、次で王位を紹が(しめ)、衆は王號を立て丶[一四三]甘蔗王と名けぬ。復次に諸仁、時に甘蔗王は補多勒迦城([一四四]唐に幼小と云ふ)に(於てし)、子孫相承して一百一代を經たり。其の二王は皆甘蔗種と名け、其最後の王は名けて軍將王と爲せり。諸仁當に知るべし。甘蔗軍將王は亦[一四五]增長と名け、四大夫人ありて各々一男一女を生あり。其四王子は一は[一四六]火炬面と名け、二は[一四七]大耳と

を持つ」義。
【一二三】多飲食。bzaḥ-btuṅ maṅ-po（ザア トゥン マンポ）、「飲食多き」義。
【一二四】難勝。mi-thub-pa（ミイ トゥーブパ）、「能はざる」義、
【一二五】極難勝。「他によりて能はざる」義。
【一二六】安立。「住する」義。
【一二七】善立。よく住する」義。
【一二八】大力。「大なる力」なる義。
【一二九】勝大力。「運ぶことの大なる力」の義。
【一三〇】善慧。「善き慧」の義。
【一三一】勝堅固。「堅固を運ぶ」義。
【一三二】十弓。gshu bcu-pa「シュ チュ パ」。
【一三三】新弓。gshu dgu-bcu-pa（シュ グラチュ パ）、「九十弓」なり navati を nava と見て新弓とせるか、破僧事第二卷には九十弓とせり。
【一三四】妙色弓。「雜色弓」の義。
【一三五】勝弓。gshu rgyal（シュ チャル）、「勝つ弓」の義。
【一三六】堅弓。gshu sra（シュ サ）、「堅き弓」の義。
【一三七】十轉。çiṅ-rta bcu-pa（シン タ チュ パ）、「十車」の義。藏文には十車・萬車・九十車として千轉の語なし。
【一三八】牢轉。çiṅ-rta sra-ba

く、「我れ實語を發して曾て妄言せじ、若し我が心行にして實に改らざらんには、願はくは鄔波馱耶の黑顏變じて金色と作らんことを」。此語を發し已るに、而し彼仙人は變じて金色と爲りぬ。四方に傳へ告ぐらく、「黑仙變じて金色と爲れり」と。其師は斯の實願を見るや、心に忻喜を生じて歎じて希有と爲せり。時に喬答摩仙は復師に白して曰さく、「我れ今命を捨てんに當に何の道をか得べき」。師答へて曰はく、「善子、外道の眞婆羅門法の如きは、子無からんには善道を得ずと說けり汝に子ありや不や」。答へて曰はく、「我れ昔宮內に於て童子たりし時、意に道を修めんことを樂ひて便ち家宅を捨てゝ常に梵行を修しぬれば、何に從りてか子を得べき」。敎師告げて曰はく、「若し此の如からんには當に過去時の事を念ずべし」。答へて曰はく、「我れ今傷けられて極至に酸痛し、節節支分は刀割を被れるが如くなれば唯命を捨せんことを念ぜり、如何が更に而し餘想を起すあらん」。時に彼親敎師は神通力を以て大風雨を興して喬答摩の身を沐せるに、其苦痛とせるところは遂に蘇息を得たりければ、往者の婬慾事を念ぜるに、是身中よりして遂に兩渧の精血ありて身よりして地に落ち、業力を以ての故に便ち兩卵を成ぜり。餘經中に說けるが如し、四種の不思議事有り、一には諸佛境界不思議、二には龍不思議、三には世間心意不思議、四には一切有情の業異熟力不思議なり。彼業力に緣りて遂に卵を成じ、其卵は日光の暖を得たるが故に、漸漸に成熟して各一童を生ぜり、其生處を去ること遠からざるに一甘蔗園あり、其の二童子は遂に彼園內に遊べるに、福力を以ての故に顏容日に盛なりき。其喬答摩は日光に炙かれて遂に便ち命終せり。爾の時變金色仙人は明旦時に於て來りて喬答摩を看たるに其の命過せるを見ぬ。復地上に卵の破せるを見たりければ、童子の跡を尋ねて甘蔗園中に至りしに、其童子を見たりき。爾の時仙人は入定觀察すらく、「此二童子は何よりして來り、是れ誰が子なる」と。卽ち是れ彼の喬答摩の體胤なりと知り、便ち愛念を生じて二童子を將ゐて其住處に還り、日每に撫養して漸漸にして長大せりければ、卽ち爲に名を立

【一〇二】善合。dgah-bas sbyar (ガ ペイ チャル)、「歡喜を以て結合する」義なり。次の大摩に相當するもの藏文に缺く。
【一〇三】殺大摩。glen-gsal (レン サル)、「癡(濁)が明かになる」義。
【一〇四】明旦。skya-red (チャヤン)、「曙」の義。
【一〇五】坊主。phyogs-kyi bdag-po (チョーク チイ ダク ポ)、「方の主」なる義、Diśāmpati, Viśāmpati に相當す。
【一〇六】闘戰・生怖。共に藏文に缺き、rdul-can (ドゥル チャン＝塵を持つ義)、bde-byed (デ チェ＝樂を作す義) の二王名を出せり。
【一〇七】慶喜。kun-dgah (クン ガ)、「一切喜」なる義。
【一〇八】鏡門。me-loṅ gdoṅ (メ ロン ドン)、「鏡面」の義、律部二十三、註(一三の三〇)に其木生譚を出せり。
【一〇九】能生。skyed-pa (チェ パ)、「生ずる」義なり。
【一一〇】善生。kun-nas skyed-pa (クン ネエ チェ ペ)、「善く生ずる」義。
【一一一】最勝。skye-bohi khyu-mchog (チエ ボ、イ チユ チヨク)、「人の勝群、卽ち群に勝れる人なる王」の義。
【一一二】飲食。bzah-btuṅ-can (ザア トウン チヤン)、「食飲

ち卽ち瞋りて曰はく、「咄なる哉、婬女、云何ぞ我が瓔珞妙衣を持ちつゝ別に餘壻に看えたる」。婬女報へて曰はく、「聖子、女人は常に是の如きの過失あり、願はくは其過を恕さんことを」。時に蜜捺羅は卽ち忿恨を發し、便ち利刀を拔きて彼の婬女を殺しぬ。時に彼の從女は卽ち是言を唱ふらく、「賊なり、賊なり、我が大家を殺せり」。衆人聞き已りて皆其所に集まれるに、爾の時園中に喬答摩仙ありて草屋に於て坐せり。時に蜜捺羅は衆の集まれるを見已りて心に怖畏を生ぜるも、處として避く可き無かりければ、遂に血刀を將りて仙人處に往き、草屋の前に置てゝ衆に隨うて立てり。爾の時衆人は彼の死女を見て尋いで蹤跡を逐へるに、草屋の前に於て其血刀を見たりければ、卽ち仙人を捉へて便ち是言を作さく、「汝は是れ仙形なるに、云何が而し是の如きの惡業を作せる」。時に仙報じて曰はく、「我に何の咎かある」。衆人告げて曰はく、「汝は女人と非法を行じ、復彼の命を殺せるとは」。仙人報じて曰はく、「我れ實に是の如きの惡業を作さじ」。衆人信せず、便ち卽ち捉縛して王所に將ゐ至り、大王に白して言さく、「此人は彼婬女と共に非法を行じて便ち彼女を殺せるなり」。王は此言を聞くや更に審問せずして、其仙を將ゐて尖木上に坐せしめ、其の赤蠟を以て頭上に著け、彼の旃陀羅人をして身に靑衣を著け各利刀を執りて周匝圍繞せしめ、彼仙人を將ゐて鼓を擊ち宣示して城內を巡行し諸人に告げ(しめ)て曰はく、「當に知るべし、彼仙は此の如きの罪を犯せり」。南門より出づるに而し仙人を尖木上に擲げぬ。時に黑色仙は來りて此仙を覓めしに何に在りやを知らず、處處に求覓して乃し尖木上に擲在せられたるを見て、情に甚だ悲傷し懊惱啼泣して問うて曰はく、「汝、何の事に因りてか此の如きの苦に遇へるなる」、時に喬答摩は哽咽悲泣して鄔波駄耶に白して曰さく、「此は是れ先業なり、孰か能く避脫せん」。鄔波駄耶に告げて曰はく、「善子、汝今傷つけらる、諸の法行に於て身心退けりや不や」。彼れ師に報じて曰はく、「我れ今身は傷つけられたりと雖心に損害なし」と。親教告げて曰はく、「我れ何が知るを得ん」。彼れ師に報じて曰は

ベ)、「堀る」義。
【九〇】近佉努。ñe-barn rko-ba (ネ バル コウ ベ)、「近くに堀る」義。
【九一】有佉努。rho-ba yod-pa (コウ ベ ヨウ ベ)。
【九二】極佉努。kun-nas rko-b.(クン ネエ コウ ベ)、「普く堀る」義。
【九三】善見。gyu-nom snaṅ (チャ ノム ナン)、「勝現」の義。
【九四】正見。mñam-snaṅ (ニャム ナン)、「等現」の義。
【九五】軍聽。thos-pahi sde (ティー パ、イ デ)、「聽の軍」の義。藏文には次に「法の軍」なる王名を出せり。
【九六】悟了。rtogs-pa (トク パ)、「觀察」の義。
【九七】大悟。rtogs-pa chen-po (トク パ チェーン ポ)、「大觀察」の義。
【九八】悟軍。rtogs-pahi sde (トウ パ、イ デ)、「觀察軍」の義。
【九九】無憂。mya-ñan med (ニャ ガメ メイ)、「苦惱なる」義。
【一〇〇】離憂。mya-ñan bral (ニャ ガン チャル)、「苦惱を離れたる」義。
【一〇一】續果。b.tan-pahi s'e (タン パ、イ デ)、「剛毅の軍」なる義。

の仙法を持たんには意に随うて去れ。可しく[一四〇]補多羅城の近くに草舍を造作して之に依りて住すべし」。爾の時喬答摩は親教を頂禮して辭別して去り、補多羅城に詣り一閑林に於て草舍を造作して乞食して自活せり。爾の時補多羅城に一婬女有り名けて[一四一]招賢と曰ひ、形貌端正にして衆に愛著せられき。時に一不善人有り名けて[一四二]蜜捺羅と名け、婬貪心に由り諸の瓔珞及以妙衣を將つて送りて彼女に與へ、須めて迎娶に擬せり。時に彼女人は諸の瓔珞及以妙衣を著けて出でゝ彼に往かんと欲せるに、時に彼の門邊に一人ありて五百銀錢を持じ彼の女人に與へて便ち是言を作せるを見ぬ、「汝來れ、汝來れ、汝と共に遊戲せん」と。彼女思念すらく、「我れ今五百銀錢を得んとす、何ぞ偽に取らざらん、我れ若し取らざらんには即ち理に應ぜじ」。即ち錢を取り已りて彼と與に遊戲せり。爾の時婬女は從女人をして蜜捺羅所に往詣せしめて是言を作さく、「我れ未だ莊飾せざれば少時して即ち來かん」。彼の侍從女は此語を奉じ已りて蜜捺羅所に詣り具さに上事を陳べぬ。時に銀錢主は別に餘事ありて須臾にして即ち去りければ、爾の時婬女は復是念を作さく、「此人已に去れり、先處に往かんと欲せんに時亦晩からじ」。從女に告げて曰はく、『蜜捺羅所に詣りて是の如きの言を作せ、「我れ莊飾了れり、未だ審かにせず、我と何處の園林にて而し相見ゆ可きかを」と』。時に彼の從女は此語を奉じ已りて彼の蜜捺羅所に詣り具さに上事を陳べしに、時に蜜捺羅報じて曰はく、「汝、癡婦女人、或は未だ莊飾せずと言ひ、或は莊飾了れりと言はんとは」。時に彼の使女は先より大家に於て嫌恨する所ありければ、便ち彼に告げて曰はく、「我が大家は未だ莊飾せざりしには非らじ、意に汝の瓔珞及び衣を以てして其身を莊飾しつゝ別に餘壻に看えんと欲したればなり」。時に蜜捺羅は此語を聞き已るに、欲心便ち息みて害意を生じ、便ち侍女に告げて言はく、『汝、婬女に報ぜよ、「莊飾既に了らんには某園林に來れ」と』。時に彼從女は婬女所に詣り具さに上事を陳べしに時に彼婬女は此語を聞き已るに瓔現を莊飾し、往いて彼の林に詣りて蜜捺羅に見えぬ蜜捺羅は便

【七六】大帝軍、dbaṅ-phyug chen-poḥi sde (ワン チュー ク チェン ボイ デ)、「大自在(帝)の軍」の義。
【七七】俱尸那城。rtswa-can (ツアワー チャン)、「草を持つ」義、kuśināra なり。
【七八】海神。rgya-mtshoḥi sde (ギャ ムツオー、イ デ)、「海の軍」の義。
【七九】修行。dkaḥ-thub spyod (カ トゥーブ チョ)、「苦行を修する」義。
【八〇】廣面。saḥi gdoṅ (サ、イ ドン)、「地の顏」なる義。
【八一】地主。saḥi bdag-po (サ、イ ダク ポ)、「地の主」なる義。
【八二】無戰城。前註(五三)の無鬪城と同じ。
【八三】持大地。sa-ḥdsin (サ ゼイン)、「地をとる」義。
【八四】彌耻羅 (mithilā)。
【八五】大天。lha-chen-po (ハ チエーン ポ)、mahādeva (摩佉提婆)なり。
【八六】備彌。mu-kyud (ム チュ)、輻輞の義、泥彌多王(nimi)なり。
【八七】正辯王。ḥbyin-ba (チン ベ)、「沈む」の義。
【八八】堅。sra-baḥi mu-khyud (サ ベ、イ ム チュー)、「堅の輻輞」なる義。
【八九】佉努。rko-ba (コウ

羅陁闍は念じて國王たらんとせり。喬答摩は其[一三七]父王が非法を法と爲し法を非法と爲して國務を治化せるを見て便ち是念を作さく、「若し父王歿せんに我れ當に王と爲りて法を非法と爲し非法を法と爲すべけん。是の如くして國を治めんには、我は當に地獄に墮すべけん。既にして此難あり、我れ當に云何がすべき、何の方便を設けてか而し出家するを得て斯苦を免るを得べき」。是念を作し已りて父王の所に詣り、頂禮合掌して父王に白して言さく、「大王、當に知るべし、我れ出家して非家に趣かんと欲するを」。王は子に告げて曰はく、「若し義利の故ならんには多く人ありて財物を捨施し天神・事火・苦行に供養せり。國王の位を求めんに汝今已に得たり、我れ命を捨て已らんに汝當に位を紹ぐべきに、何の故にか汝今此を捨てゝ去らんとするなる」。喬答摩白して言さく、「我れ國王の非法を法と爲し法を非法と爲すを見るに、此罪業に由りて當に地獄に墮すべければ、我れ今怖畏して出家を願求せるなり。大王、慈悲もて我が此願を從したまはんことを」。爾の時彼王は其子の心に畢に出家せんと欲せるを知りて即ち便ち告げて言はく、「我れ今汝に放さん、意に隨せて去れ」。時に彼王子は此語を聞き已るに心に大に歡喜せり。斯を去ること遠からざるに一仙人あり、名けて[一三八]黑色と曰へり。時に彼王子は父王及び諸眷屬を拜跪して辭別して去り、黑色仙所に詣り如法に跽跪して雙足を頂禮し仙人に白して言さく、「我れ出家せんと欲す、願はくは仙、慈悲もて我を出家せしめたまはんことを」。時に彼仙人は即ち便ち聽許せり。時に彼王子は既にして出家し已るに、而し菓子・樹皮・樹根を求めて以つて資養に充てければ、世便ち號して喬答摩仙と爲せり。爾の時父王は便ち即ち命を捨てければ、第二王子波羅陁闍は即ち立ちて王と爲れり。爾の時喬答摩仙は恒に菓子及び諸の樹葉を食せるに因りて遂に便ち病を得たりければ、[一三九]鄔波駄耶に白して言さく、「我れ今聚落中に入りて飲食を乞はんと欲す」。黑仙報じて曰はく、「仙人に法有り、謂所、六根を守護し六境を遠離せんに、若しは山谷に在り或は聚落に入らんとも所畏あること無し。汝若し能く是の如き

【六四】無勝城。「無勝による勝城」の義。

【六五】上勝。「勝を與へたる王」の義。

【六六】妙童女城。groṅ-kyer ka-nya-kub-dan (チョン チエル カ エヤ ラブ ザアー)、knnyā-knbja (迦那鳩闍＝屈曲童女城)にして、北方印度の古代都市なり。

【六七】勝軍。rgyal-po rgyal-sde(ギヤル ポ ギヤル デエ)、軍に勝つ義。

【六八】龍天。rgyal-po; kluhi-lha (ギヤル ポ ルイ ハ)、龍の天なる王の義。

【六九】末利城。ta-lahi ı hreṅ (タ ラ、イ チエン)、「多羅の葉の城」なる義なり。

【七〇】人天王。rgyal-po mihi lha (ギヤル ポ ミ、イ ハ)、人の天なる王の義。

【七一】多摩栗柢城。groṅ-kyer ta-ma-li (チョン チエル タ マ リ)、tamaliti 城なり。

【七二】海天。rgya-mtsho lha (ギヤ ムツオーイ ハ)、「海の天王」の義。

【七三】歡喜城。ba-sohi groṅ (バ ソオイ ヂョン)、象牙の聚落なる城の義。

【七四】善惠。blo-gros bzaṅ-po (ロ ヂエ ザン ポ)。

【七五】除闇。mun-sal (ムン セル)、闇を除く義。

し、其最後の王は名けて大天と僞せり。復次に諸仁、其の大天王は復彌恥羅城中に於てし、子孫相承して八萬四千代皆大天と名け、並に仙通を得及び戒行を修して正法もて人を化し、其最後の王は名けて僞彌と僞せり。僞彌王に息あり正謝王と名け、其王に息あり堅と名け、次に佉努と名け、次に近佉劣と名け、次に有佉努と名け、次に極佉努と名け、次に善見と名け、次に正見と名け、次に軍聽とと名け、次に悟了と名け、次に大悟と名け、次に悟軍と名け、次に無憂と名け、次に離憂と名け、次に續果と名け、次に善合と名け、次に大聲と名け、次に殺大聲と名け、次に明旦と名け、次に坊主と名け、次に闘戰と名け、次に生怖と名け、次に慶喜と名け、次に鏡門と名け、次に能生と名け、次に普生と名け、次に最勝と名け、次に飲食と名け、次に多飲食と名け、次に難勝と名け、次に極難勝と名け、次に安立と名け、次に善立と名け、次に大力と名け、次に勝大力と名け、次に善慧と名け、次に勝堅固と名け、次に十弓と名け、次に百弓と名け、次に新弓と名け、次に妙色弓と名け、次に勝弓と名け、次に堅弓と名け、次に十輞と名け、次に百輞と名け、次に千輞と名け、次に妙色輞と名け、次に牢輞と名けぬ。復次に諸仁、牢輞王は善議城中に於てし、子孫相承して七萬七千代に至り、彼最後の王は果仙王と號せり。復次に諸仁、果仙王に息あり龍護と名けぬ。龍護は復波羅痆斯城に於てし、子孫相承すること一百一代、彼最後の王は吉枳と名けぬ。爾の時迦葉波如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛・薄伽梵は世に出興したまへり。時に彼の釋迦牟尼菩薩は迦葉佛の所に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發し、梵行を淨修して覩史多天に生じたまへり。復次に諸仁、吉枳王に息あり善生と名けぬ。復次に諸仁、善生王は復補多羅城に於てし、子孫相承すること一百一代、彼最後の王を耳生と名けぬ。復次に諸仁、耳生王に二息あり一は喬答摩と名け一は波羅墮闍と名けぬ。彼の喬答摩は念じて出家せんと欲し、波

(potalaka)の義。
【五二】調怨。dgra-hdul (ダ ドウル)、怨敵を調伏する義。
【五三】無闘城。「軍隊によりて害はざる國」の義。
【五四】無能勝。「不勝によりて勝つ」義。
【五五】難當。rgyal-po bzod-dkah (ギャル ポ ソウ カ)、困難を忍び當ふる王の義。
【五六】金毘羅城。kim-pi-laḥi grod-kyel (キム ピ ラ、イ チヨン チエル)、kimpila の城なる義。
【五七】梵授王(Brahmadatta)。
【五八】象造城。「象の城」なる義。
【五九】象授。rgyal-po glaṅ-pos sbyin (ギャル ポ ラン ポ チイン)、「象によりて與へられたる王」なる義。
【六〇】削石城。yul rdo-hjog (ユル ド ジヨク)、「石を削れる國」の義、Takṣasilā (德叉尸羅國なり)。
【六一】及時王。bal-ba-can (ベル プ チヤン)、「牡牛を持つ」義、及時は牛持の同音寫にあらざるか。
【六二】廣肩臂城。「胸によりて眠る城」なる義。
【六三】童勝力。次の勝力と同じ、tshan-po-che ḥdul (ツアーン ポ チエー ドウル)、「非常に多く調伏する」義なり。

爲せり。復次に勝力王は[六四]無勝城中に於てし、子孫更に生じて乃し三萬二千代を經るに至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[六五]上勝と爲せり。復次に其の上勝王は[六六]妙童女城中に於てし、子孫更に生じて乃し一萬二千代を經るに至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[六七]勝軍と爲せり。復次に諸仁よ、勝軍王は瞻婆城中に於てし、子孫更に生じて乃し一萬八千代を經るに至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[六八]龍天と爲せり。復次に仁等、其の龍天王は[六九]末利城中に於てし、子孫更に生じて乃し二萬五千代を經るに至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七〇]人天と爲せり。復次に仁等其の人天王は[七一]多摩栗坻城中に於てし、子孫更に生じて乃し一萬二千代に至り正法もて世を化し、其の最後の王は名けて[七二]海天と爲せり。復次に諸仁、海天王は[七三]歡喜城中に於てし、子孫更に生じて乃し一萬八千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七四]善惠と爲せり。復次に仁等、善惠王は王舍城中に於てし、子孫更に生じて二萬五千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七五]除闇と爲せり。復次に諸仁、除闇王は婆羅痆斯城中に却り、子孫更に生じて乃し一百代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七六]大帝軍と爲せり。復次に諸仁、大帝軍王は[七七]倶尸那城中に於てし、子孫更に生じて乃し八萬四千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七八]海神と爲せり。復次に諸仁、其の海神王は布多羅城中に於てし、子孫更に生じて乃至一千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[七九]修行と曰へり。復次に諸仁、其の修行王は復倶尸那城中に於てし、子孫更に生じて乃し八萬四千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[八〇]廣面と爲せり。復次に諸仁、其廣面王は復婆羅痆斯城に於てし、子孫相承して乃し十萬代に至り正法もて人を化し、其最後の王は名けて[八一]地主と爲せり。復次に諸仁、其の地主王は[八二]復無戰城中に於てし、子孫相承して乃し一千代に至り、其最後の王は[八三]持大地と名け如法に人を化せり。復次に諸人、其の持地王は[八四]彌耻羅城中に於てし、子孫相承して乃し八萬四千代に至り正法もて世を化

【三七】　大善見(mahāsudarśana)。
【三八】　極愛。rab-thob (ラブ トーブ)、よく得る義。
【三九】　大愛。rab-thob chen-po (ラブ トーブ チェーン ボ)、よく得ることと太なる義。
【四〇】　妙聲。rab tu sgra-bsgrags (ラブ トゥ チャ チャク)、妙號聲(praṇāda)の義。
【四一】　大妙聲。大なる妙號聲(mahāpraṇāda)の義。
【四二】　作光。hod-byed-pa(オチェ バ)、光を作する義。
【四三】　有威。rtul-phod (トル ボー)、大膽・勇氣の義、aṅgirā に相當するか。
【四四】　廣大。藏文に缺く。
【四五】　大彌樓　lhun-po ldan (フン ボ、ダン)、妙高を持てる義。
【四六】　有彌樓。lhun-po yod (フン ボ ヨー)、妙高有の義。
【四七】　廣慧。藏文に缺く。
【四八】　艷光。hod-zer (オ ゼル)、光線の義。
【四九】　有艷。hod-zer yod(オ ゼル ヨ)、光線有の義。藏文には艷光と有艷との間に光線持の義なる王ありとせり。
【五〇】　有大艷。kun-nas hod-zer(グン ネー オ ゼル)、普きヶ線の義。
【五一】　富多羅城。yul gru-hd-sin(ユル チェ ジン)、形影國

と名け、愛樂王の息は[25]善樂と名け、善樂王の息は[26]能捨と名け、能捨王の息は名けて[27]極捨と爲し、極捨王の息は名けて[28]支車と爲し、支車王の息は名けて[29]嚴車と爲し、嚴車王の息は名けて[30]小海と爲し、小海王に息あり名けて中海と爲し、中海王に息あり名けて大海と爲し、大海王に息あり名けて[31]瑞鳥と爲し、瑞鳥王の息は名けて[32]大瑞鳥と爲し、大瑞鳥王に息あり[33]香草と名け、香草王に息あり名けて[34]近香草と爲し、近香草王に息あり名けて[35]大香草と爲し、大香草に息あり名けて[36]善見と爲し、善見に息あり名けて[37]大善見と爲し、大善見に息あり名けて[38]極愛と爲し、極愛に息あり名けて[39]大愛と爲し、大愛に息あり名けて[40]妙聲と爲し、妙聲に息あり名けて[41]大妙聲と爲し、大妙聲に息あり名けて[42]作光と爲し、作光に息あり名けて[43]有威と爲し、有威に息あり名けて[44]廣大と爲し、廣大に息あり名けて[45]大彌樓と爲し、大彌樓に息あり名けて[46]有彌樓と爲し、有彌樓に息あり名けて[47]廣慧と爲し、廣慧に息あり名けて[48]艶光と爲し、艶光に息あり名けて[49]有艶と爲し、有艶に息あり名けて[50]有大艶と爲し、有大艶王より其の有大艶王の息・孫・曾孫・玄孫等は[51]富多羅城に於てし、子孫更に生じて百代に至り、其最後の王を名けて[52]調怨と爲し、能く諸の怨敵を調伏せるが爲の故に、名けて調怨王と爲せり。調怨王は[53]無鬭城中に於てし、子孫更に生じて乃し五萬四千代に至り、其城中に於て正法もて世を化せり。其最後の王は名けて[54]無能勝と爲し、波羅痆斯城に於て子孫更に生じて六萬三代に至り、其城中に於て正法もて世を化し、其最後の王は名けて[55]難當と爲せり。難當王は[56]昔金毘羅城中に於てし、子孫更に生じて乃し八萬四千代に至り、彼最後の王は名けて[57]梵授と爲せり。復次に諸人よ、梵授王は[58]象造城に於てし、子孫更に生じて乃し三億二千代に至り正法もて世を化し、其最後の王は名けて[96]象授と爲せり。象授王は[50]劊石城中に於てし、子孫更に生じて乃し五千代を經るに至り、其最後の王は名けて[61]及時王と爲せり。及時王は[62]廣肩脅城中に於てし、子孫更に生じ三萬二千代を經て正法もて世を化し、其最後の王は名けて[63]童勝力と

の義。

【二三】有端嚴。端嚴足王に同じ。

【二四】愛樂。bzaṅ-po(ザンポ)、善・賢の義。

【二五】善樂。lugs-bzaṅ(ラクザン)、善・賢の義。

【二六】能捨。藏文に相當語なし。

【二七】極捨。btaṅ-bzaṅ(ダンズツ)、捨を執る、持施の義。

【二八】支車。yan-lag śiṅ-rta(ヤンラクシンタ)。

【二九】嚴車。skal-ldan śiṅ-rta(カルダンシンタ)、幸運を持つ車の義。

【三〇】小海。rgya-mtsho-bu(ギャムッタープ)、海の子なる義。

【三一】瑞鳥。ku-ṇa-ri(カシユニイ)なるも śakuni(沙孤尼)の音寫の誤なるべし。

【三二】大瑞鳥。ku-ṇa-ri chen-po(カシユエイチエンボ)とあるも、mahāśakuni なるべし。

【三三】香草。ku-śa(クシャ)と音寫せり、吉祥草(kuśa)に相當す。

【三四】近香草(upakuśa)。

【三五】大香草(mahākuśa)。

【三六】善見。legs-mthoṅ(レクトーン)、妙目(sudarśana)の義。

の夫人は頂生を見已りて各愛念を生じて乳皆流出せりければ、咸く王に白して言さく、「我養はん、我養はん」と。此義に由りての故に[17]復持養と名けぬ。即ち立てゝ王と爲せるに、彼時の有情は咸く皆思惟し互に相諮議して好惡を分別し各一藝を習へり。時に彼有情は審思量せるが故に、[18]未努沙(此は人に名く)は前の六王の如くに壽無量歳にして世に久住せり。爾の時持養王は右髀に一瘡疱有り、柔軟なること綿疊花の如く、復增長せりと雖未だ嘗て痛惱せざりき。後漸く熟して破れしに一童子を生ぜり。形貌端正にして三十二大丈夫相を具して其身を莊嚴し、端正を以ての故に名けて[19]端嚴と爲せり。即ち立てゝ王と爲せるに大威力有りて、四大洲に王たりて大自在を得たりき。時に端嚴王は左髀に忽ちにして瘡疱有り、其瘡疱柔軟なること綿疊花の如く、復增長せり雖未だ嘗て痛惱せざりき。後漸く熟して破れしに一童子を生ぜり。形貌端嚴にして三十二大丈夫相有りて其身を莊嚴し、王の端嚴に近かりしが爲の故に名けて[20]近端嚴と爲せり。即ち立てゝ王と爲せるに亦威力有り、三大洲に王たりて風化自在なりき。其の近端嚴王は右足上に忽ち瘡疱を生じ、其瘡疱柔軟なること綿疊花の如く、日に增長せりと雖而し痛惱せざりき。後漸く熟して破れしに一童子を生ぜり。形體端正にして三十二大丈夫相ありて其身を莊嚴し、右足より生ぜるを以ての故に[21]端嚴足生と名けぬ。即ち立てゝ王と爲せるに、威德自在にして二大洲に王たりき。時に端嚴足王は左足上に忽ち瘡疱を生じ、其瘡柔軟なること綿疊花の如く、日に增長せりと雖而し痛惱せざりき。後漸く熟して破れしに一童子を生ぜり。形容端正にして三十二大丈夫相を具して其身を莊嚴せり。左足より生れ端嚴なりしを以ての故に[22]極端嚴と名けぬ。即ち立てゝ王と爲せるに、威德自在にして一大洲に王たりき。此の大同意王の息は意樂と名け、意樂王の息は善德と名け、善德王の息は最勝と名け、最勝王の息は長淨と名け、長淨王の息は持養と名け、持養王の息は端嚴と名け、端嚴王の息は近端嚴と名け、近端嚴王の息は[23]有端嚴と名け、有端嚴王の息は極端嚴と名け、極端嚴王の息は[24]愛樂

せられき」とあり。

【一一】善德。藏文に dge-ba (ゲ ワー)とし、善(kalyāṇa)の義なり。

【一二】最勝善。藏文に dge-mtshog.(ゲッオーク)とし、最勝の善の義なり。

【一三】雲咽最勝善王。藏文には「最勝善王の時、諸人の名は雲頸(sprin-mgrin, (チンチン))と稱せられき」とせり。

【一四】長淨(uposadha)。

【一五】多羅倘伽長淨王。藏文には「聖淨王の時、諸人の名は多羅倘伽(ta-labirkna,「タ ラ、イ カン」=多羅の足) と名けられきとあり。

【一六】頂生(mūrdhāta)。頂より生まれたる者の義なり。

【一七】持養(māndhāta)。我より吸ふ者の義なり。律部二十三、註(一一の三七)には樂養とせり。

【一八】未努沙。manusyā の音寫人々の義。

【一九】端嚴。mdses-pa (ドゼー パ)、微妙の義。

【二〇】近端嚴。ñe-mdses-pa (ネー ドゼー パ)、近妙の義。

【二一】端嚴足生。mdses-ldan (ドゼー ダン)、端嚴を持つ、具妙(cārumanta)の義。

【二二】極端嚴。ñe-mdses-ldan (ネー ドゼー ダン)、近妙を持つ、具近妙(upacārumanta)

情を捉へて摧毀し衆に對ひて之を辱しめん、後應に然るべからざれ」。此盜に因りての故に遞に相毀辱し、此緣に由りての故に大衆共に集り遞に相告げて曰はく、「汝等は具さに此事を見たりや、他穀を盜めるが爲に衆に對ひて遞に相毀辱せり知らず、二人は是れ誰に罪有るかを。我等は意に衆中一有情の顏色端正にして形容具足し智慧通達せるを簡びて立てゝ地主と爲し、過あるには治罰し、過無きには養育し、我等衆人の種うる所の田は各々法に依りて六分の中其一分を與へんと欲す」。爾の時衆中より上の如くに德を具足せる人を揀得し、便ち即ち立てゝ地主と爲せり。爾の時衆人は地主に告げて言はく、「衆中に若し犯者あらんには請ふ。如法に治罰し、若し犯者なきには應に當に養育すべし。我等衆人の種うる所の田より各各法に依りて六分の中其一分を與へん」。此因緣に由りて立てゝ地主と爲せり。爾の時地主は彼諸人を見て、若し過あるには如法に治罰し、若し犯なきには如法に養育せり。爾の時衆人は種うる所の田より各々法に依りて六分の中其一分を與へぬ。衆既にして同意して立てゝ地主と爲せるが故に太同意の名を得、能く劣弱を擁護せるが故に刹帝利の名を得たり。如法に國を始めて能く一切衆生をして歡喜せしめ、戒行智慧の故に號して[八]大同意王と爲し、其王立てる時衆人相呼んで有情大同意王と爲せり。息有り[九]意樂と名け即ち立てゝ王と爲せるに、爾の時有情は號して[一〇]近來意樂王と爲せり。息有り名けて[一一]善德と爲せり。復次に仁等、善德王の時一切有情は號して饜子善德王と爲せり。息あり名けて[一二]最勝善と爲し即ち立てゝ王と爲せるに、彼時の有情は號して[一三]雲咽最勝善王と爲せり。息あり名けて[一四]長淨と爲し、即ち立てゝ王と爲せるに、彼時の有情は號して[一五]多羅倶伽長淨王と爲せり。頂上に一瘡疱有りて柔軟なること猶し細綿疊花の如く、復增長せりと雖未だ嘗て痛惱せざりき。後漸く熟して破れしに一童子を出し、顏貌端正にして三十二大丈夫相を具して其身を莊嚴し其身頂上より生れたるが故に、名けて[一六]頂生と爲せり。時に長淨王に六萬夫人あり、爾の時父王は頂生と將に後宮に入りしに、時に六萬

【八】大同意王。世界最初の王にして釋迦族の初祖とせらる。律部二十三、註(二の九)參照。
【九】意樂。藏文 hod-mdzes(オーヂェー)とし妙光と譯す。
【一〇】近來意樂王。藏文には「衆所貴王(大同意王)の時、諸人の名は有情、有情と稱せられき。妙光王の時、諸人の名は近來(tshur-yog「ツールヨク」=此方に來れ)と稱せられき。善王の時、諸人の名は饜(sme-ba-can,「メーパーチャン」=饜を持つもの)と稱

て曰はく、「我は是れ端正たり、汝は是れ醜陋たり」と。此諸人は互相に輕毀し展轉して不善心を生ぜるに由りての故に、爾の時地味は並に皆滅盡せりければ諸人は悲歎せり。後に地餅を生じて色香美味悉く皆具足せるに、我等は之を食して長壽にして住せり。食すること多かりし者は身光轉暗く、食すること少かりし者は身猶ほ光悅ありき。此二種の顏狀に由りての故に遂に二種の好惡の類を成じ……乃至、遞に相輕毀し、輕毀に由りて の故に展轉して各々不善心を生ぜる故に、地餅盡く滅して我等は悲惱せり。是の如きの緣の故に復林藤生じて色香美味亦皆具足せりければ、我等は之を食して年壽長遠にして世に住せり。食すること多かりし者は身光損暗し、食すること少かりし者は身猶ほ光悅ありき。……乃至、林藤滅せるが故に復稻穀を生じ、種ゑざるに自ら生じて諸の糠穢無く、四指の大の如くにして香味具足せり。我等は之を食して身體充盛し、此稻を食せる者は年壽長遠にして世に久住せり。貪心を以て積聚せるが故に其稻小惡にして糠穢轉盛に、其稻に力無くして採收せんには生ぜざりき。或は遺餘有りしには諸人は見已りて更相に告げて曰はく、「我等は地界を分取せん」。爾の時地段疆界を封量して各各之を分つらく、「此は是れ汝が地、此は是れ我が地なり」。此義に因りての故に世間に田地あり、始めて耕種を爲して遂に疆畔を立てぬ。又一有情は自ら田を有せりと雖私に他穀を盜みければ、一有情は見て之に告げて曰はく、「汝今何の故にか他の稻穀を取れる、此一度は盜みたりとも後更に爲すこと勿れ」と。然るに其有情は盜意息まずして第二日及び第三日に於ても亦復盜み將りければ、衆人は之を見て復告げて曰はく、「汝前に三度私に盜めり」。頻に勸めたるも休めざりければ、諸有情ありて便ち行きて推捉し衆中に往詣して具さに上事を陳べしに、衆共に告げて曰はく、「汝自ら田を有せるに何ぞ以て三度他の田穀を盜める」。此語を勸め已りて便す卽ち之を放せるに、其稻を盜める者は大衆に告げて曰はく、「此有情等は少稻穀の爲めに今故に我を推して大衆に對ひて我を毀辱せんとは」。大衆復告ぐらく、「何ぞ以て少稻穀い爲に有

れるに因りての故に屋舍を造立し、彼れ如法作して非法作せざるに、此は非法を法と爲せるを。彼の諸有情は若しは日暮時に若しは日朝時に、飢に由りて稻を取り日毎に充足して餘殘あらしめざりき。一有情ありて慵懶の爲の故に、旦に起きて稻を取り遂に乃し暮時の稻を兼ね將りて來れり。其暮時に至り一同伴ありて喚ぶらく、「共に稻を取らん」。此人報じて曰はく、「汝自ら取り去れ、我旦に來いて稻を取り、已に兩時の糧を兼ね訖りぬれば、汝應に自ら去くべし、我は去るを須ゐざれば」。時に彼同伴は斯語を聞き已りて心に便ち讃じて曰はく、「此亦大に好し、我れ今取らん時亦二日の糧稻を兼ね來らんのみ」。爾の時別に一伴有り、此語を聞き已りて復言はく、「我は三日の稻を取り來らん」。復一伴有り、此語を聞き已りて復言はく、「我は七日の稻を取り來らん」。卽ち七日の稻を將ち歸れり。復一伴有り來りて其人を喚ぶらく、「共に稻を相取らん」。其人報じて曰はく、「我れ先に已に七日の稻を取り訖りぬれば更に去くを須うること無し」。彼人聞き已りて心に復歡喜して唱言すらく、「此は是れ好便なり、我れ今日去いて若しは半月或は一月の稻を取り來らん」。是の如く漸漸に前數に倍し、此貪心日に增盛せるに由りての故に遂に稻中に諸の糠穢を生ぜしめぬ。先初の時朝に刈りては暮に生じ、暮に刈りては朝に生じて其の實尙ほ好かりしに、貪愛を以ての故に一たび刈りての後は更に再び生ぜず、設ひ生ずる時も實漸く小惡なりき。是に於て諸人は競ひ來りて收採し、或は遺餘あるにも漸漸に小惡となれり。時に諸有情は復一處に集りて更相に悲歎して曰はく、「我等昔時には身體光悅して飛騰自在に、端嚴具足して歡喜もて食に充てぬ。後に地味を以て食と爲せるに猶し香好を得、地味を食すること多かりしが爲の故に、我等諸人は身卽ち堅重に、光明遂に滅して神通便ち謝し、種種に暗損の事に遇ひて諸人悲泣せるに因り日月星辰を生ずるを感ぜり……廣く上に說けるが如し。食すること多かりし者は身色轉暗く、食すること少かりし者は身猶ほ光悅ありき。此二の食の故に遂に二種の顏狀を成じ、此の二種顏狀に由りての故に遞に相輕賤し

に因りて……廣く前に說けるが如し……乃至、地餅皆沒せり。時に諸有情は共に一處に集りて愁惱し相視て是の如きの語を作さく、「苦なる哉、苦なる哉、我昔に曾て是の如きの惡事に遭へり」と。是の諸有情は地餅沒せる時亦復是の如くせるも、然も此の所詮の何の義なるかを知らざりき。仁等、當に知るべし、地餅沒し已るに、時に諸有情は福力に由りての故に林藤ありて出で、色香味具はりて雍菜花の如く新熟蜜の如くなりければ、此[七]林藤を食して長壽にして住せり。若し少食者には身に光明あり……相輕慢せるに因りて……廣く前に說けるが如し……乃至、林藤沒せるが故に時に諸有情は共に一處に集まりて、憂愁し相視て是の如きの語を作さく、「汝、我前を離れよ、汝、我前を離れよ」と。猶し人あり極めて相瞋恨して前に當ふことを許さゞるが如くなりき……廣く上に說けるが如し。……林藤沒し已るに、時に諸有情には妙香稻あり、種ゑざるに自ら生じて糠穢なく、長さ四指にして旦暮に收穫するに苗則ち隨つて生じ、暮旦時に至るに米便ち成熟し、復數取ると雖而も異狀なく、此を以て食に充てゝ長壽にして住せり。時に彼有情は段食に由りての故に滓穢身に在り爲に蠲除せんと欲して便ち二道を生ぜり。斯に由りて遂に男女根生ずるありて便ち相染著し、染著を生ぜるが故に遂に相親近して因みて非法を造れり。諸餘の有情は此事を見たる時、競うて糞掃瓦石を以てして之を棄擲して是の如きの語を作さく、「汝は是れ惡むべきの有情なり、此非法を作さんとは。咄なる哉、汝今何の故にか有情を汚辱せる」。始め一宿より乃至七宿に至りて、共に居を同じくせずして衆外に擯せり。猶し今日初めて嫁聚を爲さんに、皆香花雜物を以てして之に散擲して、「常に安樂なるを得んことを」と願言するが如くなり。仁等、當に知るべし、昔時の非法は今時は法たり、昔時の非律は今時は律たり、昔時に嫌賤せるは今は美妙たるを。彼時の人驅りて擯出せるに由りての故に、惡を樂行せる者は遂に共に聚集し、房舍を造立し共の身を覆蔽して而し非法を作せり。此を最初に家宅を營立せりと爲し、便ち家室有りき。諸仁、當に知るべし、昔婬を食

【七】林藤。纖弱なる靑苗。

疊して頭に枕し、右脅にして臥し兩足を相重ね、光明想を作して正念に想を起し　[二]如是作意したまへり。時に具壽大目揵連は而し是念を作さく、「我れ今可しく如是定中に入りて思惟觀察して、釋迦種族を知るべし」と。即ち衆の前に於て而し高座に昇り、結跏趺坐して諸釋に告げて曰はく、「仁、今諦に聽け、此の世界初成の時、爾の時大地は一海水たりき。風に由りて鼓激して和合一類せること猶し熟乳の如く、既にして其の冷え已るに凝結の生ぜるありき。其海水の上も亦復是の如くにして、上に地味ありて色香美味悉く皆具足せり。此界成ずるの時、一類の有情の福命倶に盡きて　[三]光音天より沒して此に來生して諸根具足し、身には光耀ありて空に乘じて往來し、喜・樂を以て食と爲し長壽にして住せり。時に此世界に日月・星辰・晝夜の時節有ることなく、能く男女貴賤を辨つことなく、但相喚びて、「[四]薩埵、薩埵」と言へり。是時衆の中に一有情の稟性耽嗜なるあり、忽ちにして指端を以て彼地味を嘗めぬ。嘗むるの時に隨ひて情に愛著を生じ、愛著に隨へるが故に段食を是れ資とせり。爾の時方に初めて　[五]段食を受けたりと名く。諸餘の有情は此が食する時を見て即ち相に學ひて食し、既にして味を食し已るに身漸く堅重に。光明隱沒して悉く皆幽暗なりき。此の食量調停せざるに由りての故に形色損減し、色減ずるに由りての故に互に相告げて曰はく、「我が形は光悅せるに、汝が形は損減せり」と。彼の光悅なる者は形色を恃むが故に、遂に憍慢を生じて不善根を起し、不善に緣りての故に地味遂に滅せり。地味滅し已るに是の諸有情は共に相聚集し、互に怨歎を生じて悲啼愁惱し是の如きの語を作さく、「奇なる哉美味、奇なる哉美味」と。今世の人の曾て美食を食し、後常に先時の香味を憶念して便ち「奇なる哉美味、奇なる哉美味」と是言を作すが如くに、是言を作せりと雖然も猶ほ其の義の好惡と、何に緣りての故に地味滅沒せりと說けるかを識らざりき。有情の業の故に地餅即ち現じ、色香美味悉く皆具足し、[六]金色花の如く新熟蜜の如くなりければ、此地餅を食して長壽にして住せり。若し少食者には身に光明あり……相輕傲せる

【二】如是作意。理の如くに作意するなり、律部二十、註(一八の三四)參照。

【三】光音天。律部十九、註(二の二一)參照。

【四】薩埵。有情の義。

【五】段食。律部十九、註(二の二八)參照。

【六】金色花。律部十九、註(二の三〇)少女花參照。

根本說一切有部毘奈耶破僧事

三藏法師義淨　制を奉じて譯す

卷の第一

（釋迦族の淵源）

爾の時薄伽梵、劫比羅城尼倶律陀園中に在して大苾芻衆と倶なりき。時に此城中の諸釋迦子は咸共に集會して一處に坐し共に相謂ひて曰はく、『若し人有り來りて我等に問うて言はん、「釋迦種族は誰をか最初と爲し、何れよりして生れ、何の繼嗣の尊貴冑族なるありや」と。此く問ふ者あらんに我云何が答ふべき。然り我未だ是の如き次第を知らざれば、我等宜しく共に世尊所に詣り此事を問知しまつるべし、佛の所說の如くに我當に奉持すべし。』是議を作し已りて諸釋子等は佛所に往詣して佛足を頂禮し、佛を繞ること三匝して一面に在りて坐し、合掌して佛に向うて具さに上事を陳べ、白して言さく、『世尊、若し人ありて我に「釋迦種は何れよりして生じ、誰をか最も先と爲し、誰をか尊貴と爲し何の冑族なるありや」と問はんに、云何が而し答へんや。是の如き事の爲に故に來りて請問しまつる、唯願はくは世尊、哀愍して爲に說きたまはんことを、佛の敎へたまふ所の如くに我當に奉持しまつるべし』。爾の時世尊は此語を聞き已りて默然思惟したまふらく、『若し我自ら釋迦種族の尊貴ある者なるを說かんに、恐らくは諸外道は謗りて言はん、「沙門喬答摩は釋種の族望尊高なるを自讃せり」と』。復是念を生じたまはく、「我弟子の中、誰か此釋迦族を說くを能くする者やある」。大目連は善く斯事を說くを知しめして目連に告げて曰はく、「我れ今入定すれば汝は釋種の爲に其の因緣を說け」。目連は默然して佛の敎勅を受けぬ。爾の時世尊は僧伽胝衣を取り四

【一】釋迦種族の由來。

じして世尊默然して其請を納受したまふに、王は喜び去るのである。此の記述は沙門果經に相應し、かくて漢譯破僧事第十卷の所述と一致する。即ちそれより阿闍世王は、世尊並に世尊の苾芻僧伽に保護を加へ、乞食には王城内に入るを許し、提婆及び提婆の徒には乞食及び其他の用にも入るを許さずと令せりとし、次に蓮華色尼と提婆との爭、蓮華色尼が辯明せるも聽かれずして頭を打たれし因緣、提婆が三無間業を犯せるについて愁思せること、提婆墮獄の記莂、提婆十爪に毒を藏して世尊を摑み殺さんとせる事、南無佛と稱へ號べるによりて世尊は將來に具骨獨覺を證せんと記別したまひ、其他、舍利弗・目連の提婆を獄中に訪ぬるの記、及び其他の前生因緣譚を述べ、最後に優波離の破僧伽の問、世尊の應答（大正藏24,147c—155a12）……「由ニ心輕一故不レ成ニ無間業一」に相當する文を以て終り、かくて「破僧事完結せり」として譯者の名を列ねておるのである。玆に於て、漢譯破僧事に對する上來の疑問は氷解することが出來る。即ち第十卷及び第十一卷の前半は以て此を破僧事の最後に轉置すべく、かくて破僧事の無秩序も極めて整然とし、完本と僞すことが出來るのである。かくて漢譯佛傳中に於て亦最も完備せる佛傳なりと稱揚することが出來る。而して漢譯が何故に前後次第を誤れるかの疑問に對しては種々に想察し得る所であらふ。

（附　記）

西藏律對照に由りて明瞭ならしむるを得たる事は獨り上記のみではない。讀者諸賢は註記によりて充分知り得らるゝであらう。第十三卷に於ける七種逆心、第十五卷に於ける十字秘密法の如きも漢譯破僧事には示してゐない所である。而して是れ實に前卷藥事の對照に盡瘁せられたる大谷大學研究科學生加藤清君の助力に俟つ所が多い。玆に附記して同君の御厚意を深く謝する。

昭和九年四月一日

譯者　西本龍山　識

述ニ六師外道所說ニ(以上)

三　破僧事の組織(b)

西藏大藏經對照の結果

破僧事第九卷までに於て所謂前期佛傳を終れるに、第十卷に至りて突如として未生怨王は無根の信を起し、釋尊の御すがたを遙拜しては、象上より覺えず身を投じて地に崩墜せりとの記事を出しておる。更に提婆達多は蓮華色苾芻尼を打ち殺せるにより第三無間業を造れりとて愁思するの記を出しておる。阿闍世王の無根の信を起せるは提婆の誘誑を受けて頻毘娑羅王を害せるの後であり、提婆の第三無間業を造る前に出佛身血と破和合僧の二逆罪の記がなければならぬ。然るに突如として無根の信といひ、第三無間業といへるは、是れ甚だ疑問とせる所である。次に第十一卷の半に至るまでの鄔波離が佛に僧伽破壞と僧伽不和合との別を問ひ、破僧種類及び無間罪と無間業との別を問へるに對し、世尊の應答したまへる所はこれ諸律破僧犍度の主要部分である。而して次に憍陳如及び諸天子法味具足前生因緣譚等を說くに至りては全く何等の秩序をも見るを得ざる、甚だ體裁を缺けたるものと云はねばならぬ。而して第二十卷の最後に未生怨王が世尊の前に六師外道の說を述ぶるに際しては初の四師の說のみを出して後の二師の說を出さず、かくして破僧事終れりとするものゝ如くである。されば破僧事全體は極めて無秩序なると共に不完本なるものであると推斷せざるを得ない。これ從來の學者にして破僧事を觀たるものとは同樣の感を懷けるに相違なしと信ずるのである。而して西藏律破僧事に於ては漢譯第一卷より第九卷に至るまで善く符合せるに、この第十卷並に第十一卷前半とも缺如して第九卷終りの「提婆達多、鄔波離剃髮師を禮せざる」の文に相繼ぎて憍陳如及び諸天子法味具足前生因緣譚を出しておる。茲に於て漢譯は第十卷及び第十一卷の半を此處に出せるに、藏律には何故に之を缺如せるかとの深き疑問に逢着せざるを得なかつたのである。然るに漢譯の最後と西藏律の最後とを對照し行く時、はからずも此の第十卷及び第十一卷の前半に相當するものが西藏律に存するのである。卽ち漢譯最後の六師說を列ぬる中、後の二師の說なる脚俱陀迦多衍那子と尼犍陀愼若低子の說は藏律に之を存し、且つ其文は律部十九、註(一三の一四)の本文以下に相當し、かくて六師に阿闍世王は問へるも滿足するを得ざりしを述べ、眞實沙門果なるものありや不やを問へるに世尊は例證を以て沙門果の存することを述べたまふや、阿闍世は茲に開解するを得て次で父王を殺せる罪を悔謝し、世尊は慇懃に法を說きたまふや、阿闍世は胸中安らかなるを得、世尊に明日食を請

園精舍由來—舍利弗都督—世尊入ニ逝多林給孤獨園一

第九卷　釋尊の教化（承前）

勝軍大王との問答（少年經なり）—勝軍大王報ニ淨飯大王一—世尊の歸鄕—無滅及び賢釋種王・提婆達多の出家—五百釋子の出家相狀—鄔波離剃髮師の出家—賢王禮ニ鄔波離一地六種震動前生因緣譚—提婆達多不レ禮ニ鄔波離剃髮師一。

第十卷　提婆達多の僧伽破壞

未生怨王起ニ無根信一—未生怨王は提婆達多及び其徒衆の入城を掩障せしむ—嗢鉢羅色苾芻尼、提婆に打殺さる—提婆達多不レ聽ニ哀言一拳ニ打致三死蓮華色尼一前生因緣譚—提婆達多造ニ作三無間業一愁思—世尊記ニ莂提婆達多一—提婆達多生ニ無後世邪見一—提婆の五法—提婆欲レ陵ニ辱耶輸陀羅一—提婆十爪中塡レ毒到ニ世尊所一—提婆出ニ歸誠言一墮獄一—具骨辟支佛の記莂—舍利弗目連往ニ捺落迦一訪ニ提婆一—次訪ニ高迦離迦一—次詣ニ晡刺那迦攝一—提婆不レ用ニ佛言一墮獄前生因緣譚の一—同上の二—提婆起ニ瞋心一墮獄前生因緣譚—提婆不レ受ニ世尊利語一生ニ捺落迦一前生因緣譚。

第十一卷　提婆達多の僧伽破壞（承前）五比丘得道・世尊六年苦行前生因緣譚

鄔波離、佛に僧伽破壞と僧伽不和合との別を問ふ—破僧羯磨白四法—受籌時羯磨作法—鄔波離請ニ問破僧類一無間罪・無間業の問答—僧伽擾亂と破僧との別。

憍陳如及諸天子法味具足前生因緣譚—五苾芻法味具足前生因緣譚の一—同上の二—世尊六年苦行前生因緣譚。

第十二卷　耶輸陀羅・羅睺羅前生因緣譚

耶輸陀羅の實言—羅怙羅出家—羅怙羅於ニ五百佛化作中一識ニ世尊一前生因緣譚—喬比迦・彌離迦遮等得證—耶輸陀羅染心重未レ得レ證—耶輸陀羅以ニ歡喜團一令三世尊生ニ染著一前生因緣譚—耶輸陀羅愛レ佛故於ニ七重高樓一投レ身前生因緣譚—耶輸陀羅出家得證—耶輸陀羅六年懷胎前生因緣譚—羅怙羅處胎六年前生因緣譚—賢子苾芻作ニ國王一前生因緣譚—獼猴獻蜜緣。

第十三卷　鄔波離・阿難前生因緣譚、提婆の僧伽破壞

鄔波離爲ニ王剃士一前生因緣譚—鄔波離發ニ餘願一前生因緣譚—鄔波離持律第一前生因緣譚—阿難陀の誕生及び出家—阿難陀生レ離前生因緣譚—阿難陀能ニ占相算數一前生因緣譚—波斯匿王自然感ニ得飯食一前生因緣譚—阿難陀生ニ惡瘡一王親承事前生因緣譚—阿難陀作ニ侍者一前生因緣譚—阿難陀總持强記前生因緣譚—提婆望レ得ニ神通一—十力迦攝波教ニ提婆神通道法一—提婆誘ニ惑阿闍世太子一提婆起ニ顚倒心一失ニ神通一—提婆於ニ世尊所一起ニ七種逆心一。

教團惑亂を中心問題として佛陀世尊の現實的始終を描かんとせる意圖なりしとも推し得るのである。

二　破僧事の組織(a)

破僧事内容細目

第一卷　釋迦種族の淵源

光音天―大同意王―黑色仙人と喬答摩仙―招賢婬女物語―甘蔗王因緣―甘蔗軍將王(增長王)の四子―四子驅出。

第二卷　釋迦種族の淵源・菩薩降誕

劫比羅城・天示城由來―釋迦種名由來―天門王系統―獅子頰王の四子(淨飯・白飯・斛飯・甘露飯)―好勝園由來―幻化・大幻化二女出生―淨飯太子の二妃―菩薩在二天宮一五事觀察―外道六師・隨外道六聲聞・六定外道―摩耶夫人の四種夢―菩薩の誕生―阿私陀仙―釋迦增長藥叉禮二菩薩一―菩薩の相好―阿私陀仙謁二太子一。

第三卷　菩薩の受業納妃

阿私陀仙退城―阿私陀仙命終遺囑―菩薩の幼時受業―文字の師彩光甲博士―乘馬師摩那利―弓戰師同神―輪刀斷樹の樂―弓戲―十九出家前の菩薩行狀―耶輸陀羅納妃―提婆達多との最初の鬪諍―鄔陀夷身變二黑色一―喬比迦女納妃―菩薩四門遊觀―鹿王納妃。

第四卷　菩薩の出城苦行

耶輸陀羅妃の懷胎―大世主夫人の四種夢―耶輸陀羅妃の八種夢―菩薩の五種夢―菩薩出城―車匿・乾陟の歸還―菩薩、袈裟を求むるの緣起―婆伽婆仙人との問答―菩薩、王舍城に入る―頻毘娑羅王との問答―菩薩の苦行―歌羅羅仙―水獺端正仙子―五百侍者中五人選出―菩薩の苦行相。

第五卷　菩薩の苦行・成道、梵天勸請

菩薩得二三種譬喩辯才一―一日一麻の苦行―五人侍者の誹謗―歡喜・歡喜力の乳糜供養―孤石山の摧碎―魔王の憂幢動く―菩薩生二三種非不善尋伺一―魔王三女の誘惑―神境智見證通成就―天耳智證通心成就―證無漏智通成就―成道―羅睺羅・阿難の誕生―淨飯大王の疑―耶輸陀羅の實語―二天子の讚頌―二商主の供養―四天王獻鉢―牟枝隣陀龍王覆二佛頭上一―梵天勸請。

第六卷　梵天勸請、釋尊の敎化

梵天勸請―哥羅哥・嗢達羅摩子命終―五比丘敎化―三轉十二行法輪―六阿羅漢―耶舍出家―四長者子出家―五十豪族家出家―六十賢部出家―迦攝敎化。

第七卷　釋尊の敎化(承前)

迦攝敎化―三迦攝歸佛―頻毘娑羅王の勸請―佛敎特赦の意義―頻毘娑羅王得二淸淨眼一前生因緣譚。

第八卷　釋尊の敎化(承前)

優樓頻螺迦攝調伏前生因緣譚―迦蘭鐸迦竹園由來―毘婆迦蘭鐸園獻上―舍利弗目連の歸佛(出家事に讓りて此には名を擧ぐるのみ)―祇

根本說一切有部毘奈耶破僧事解題

一　佛傳としての破僧事

破僧事一部二十卷は、正しく佛傳である。而も數多き漢譯佛傳中、其の前期後期を併せ有する點に於て最も完備せるものと云ひ得る。然し佛傳編纂の意志を以て編纂せる佛傳ではない。共は十誦律の調達事（張五・三〇右、雜誦第一）を根柢として釋尊と提婆とを對立せしめ、兩者共に其王統を一にし、同じく釋種王家に時を同じくして出で、釋尊成道せらるゝや賢王釋種等と共に出家し、次で釋尊の晩年即ち阿闍世王即位するに至れる前後に於て種々に僧伽破壞を企て、三無間業を造りて生身に墮獄し、最後に提婆の惡逆を以てして尙ほ且つ一念の誠信を以て具骨如來となるべしとして同一證果に通入すべきを示せるもの、而も其最後に於て破僧伽とは何ぞ、破僧伽に幾種ありや、無間罪を成ずるもの、無間業を成ずるものとは如何等と問ひ、佛の應答を以て破僧事を完結せしめておる。されば破僧事の前九卷に最もよく相應せる衆許摩訶帝經の如きは、其第四卷（大正藏3,943 a）に提婆の射たる鵝飛びて太子の前に墮ちたるに、太子は憐みて箭を拔き放ちて飛び去らしめたまへるに對し、提婆は「默然不悅」と記せるのみである。然るに破僧事（寒三・一二右）に於ては「今因二此雁一爲下最後之身與二提婆達多一爲中初首鬪諍上」とせり。衆許摩訶帝經第十三卷（大正藏3,975a）に賢王は鄔波離を禮し、次に提婆達多は始には禮せざりしも、「於レ是諸釋無三不レ禮者二」とあれば提婆も鄔波離を禮せりとするのである。然るに破僧事第九卷の終（寒三・四〇右）には「如二其次第一禮二餘四百九十九人一、爾時天授至二鄔波離所一便不二頂禮一……天授白言、世尊、遣三我禮二拜鄔波離足一有二何損益一、我不レ應レ禮、爾時天授作二是語一已第一先起二破佛之意一」とせり。此等の例證によりて明かに破僧事は提婆の破僧伽の由來する所遙遠なるを示さんとの意圖を懷きて當時興起せる佛傳にかゝる修飾を施せるものなるべしと推知せられ得る。されば强ち傳傳編纂の趣旨を以て破僧事を作製せるものではないが、破僧伽の由りて來れる遙遠の因緣、及びその破僧伽の相狀を編述し行く時、自ら最も勝れたる佛傳を成就することが出來たのである。且又當時編纂せられたる多くの佛傳なるものが成道前後の記を以てして理想的教團を描き以て佛身及びその化導の廣大なりしを描かんとせるに慊らずして、茲に提婆破僧の

◇　　◇

目次

律部二十四

西本龍山譯

國譯一切經

大東出版社藏版